

やはり俺の数学教師が  
一色というのは間違っ  
ている

町歩き

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

高校三年生に進級した比企谷八幡は、一学期の期末テストの後で担任の平塚先生から職員室に連れて行かれる。その要件は……

八幡と一色の八色SSと八幡とめぐり先輩の八城SSになると思います。

一色とめぐり先輩、どっちがメインヒロインとかはありません。

どっちもであり、むしろメインヒロインは八幡だったりします。

「秒速五センチメートル」など、自分が好きな作品が作中に多く出てきます。

恋愛より日常を描く方向で物語は進みます。割とどうでもいいことを真剣に真面目

に

書いているので、書いてる人もびっくりの亀展開です。

私たちの過ごす日常がそうであるように、些細なことの積み重ねがこのお話のメインなので。

後書いてたら八幡がなんか変態になりすぎました。男子の嗜み、紳士の生き様ではありませんが。

こうなってしまうのはもしかしたら天狗の仕業かも知れません。

なので、はちまんじやなくパチマンとしてお読みください。

外伝のようなもので「やはり俺の英語教師がめぐり先輩というのは間違っている」というのも書いてます。そちらもよかったですらお願いします。R-118ですが。

タグにある秒速五センチメートル。かなりネタバレ含みます。ご注意ください。文章が稚拙なのでアドバイスありましたら宜しくお願いします。

# 目次

一章 会わなくなっていた人。会わなくなっていく人。

比企谷八幡の初体験

1

ボツチの宿命

20

壁と仲良く話している場合じゃない

28

先輩との再会

40

欲しかった言葉

54

そうしておけば

69

雨が止むまで

86

駅の待合室で

99

うざすぎる親父

108

比企谷家の夜

116

頑張った副会長

128

勉強会（練習）

136

小町弁当

146

お支払い方法の変更

156

読書をしない人への読書の薦め方（失

敗例）

164

明日

176

第一章 番外編。彼女たちの日記。

彼を知らない私

189

あの場所じゃない場所

202

二章 近づきたい彼女。近づく二人。

自分の居場所

212

桜花抄	228
コスモナウト	240
秒速五センチメートル	249
今こうしていることも	260
ソウルネームを持つ少女	267
ひいろと友美	275
理由	284
勉強会（本番）	295
小町マニユアル	309
今日を忘れないように	317
夜更しの理由	329
三人の子供	337
月明かりの下	346

大人になって気付いたこと	355
人に道を聞かれるような人	362
今さら 今なら 今しか	378
俺スイツチ	392
月蛍抄 前語り	401
月蛍抄	412
月蛍抄 後語り	420
二人で大人に	428
近すぎて絶望的な距離	437
第二章 番外編。彼女たちの夜	
小町ちゃんとの電話	448
自分のことは難しい	458
そこに愛があっても	466

初めての友達

475

静かな眠り

482

はるさんとの電話

489

書けない日記

496

両親の馴れ初め

506

間違っではないないけど、ちよつと違う

変わらないその姿のままに

第三章 言葉は行き違い、気持ちはずれ

516

違う

比企谷小町の憂鬱と決意

526

今年の俺は一味違う

531

私の不安

543

甘い麦茶

554

マルをあげたい気分

564

挨拶は抜きだ!

574

それが曇ることがないように

581

世界はロマンを求めている

593

皆まで言うな、先刻承知だ!

601

ウルトラマンのように帰ってきてくれ

610

ほんとうに電話で良かった

620

夏の夜空を見上げて

629

手当て

642

届かなかつたとしても

649

次は俺を褒める番だぞ

657

世界が……変わった！	665	雨上がりの午後	751
相互不可侵条約	672	涕落抄	763
彼女と後輩	681	理解と諦観	780
これまでの時系列	691	冬の日に	788
第四章 愛情深まる。それが傷の深さになる		未来志向	796
と知らずに		天使の降臨	810
十年後は大人	697	湧きあがれ！ 俺のコスモ！！	822
雲を語りて、空を眺めり。彼を思		お互い様	828
いて、		教育の敗北を感じる	834
夜は更けりる	719	戸部論	842
コン〇ームを買いに行ったためぐりが、		失敗が多いのは	849
コ〇ドームを買いに来た八幡を見つ		廻り巡って	857
ける	727	小町の知らない世界	866
お話			
今も、その後も、ずっと	738		

ある日

\_\_\_\_\_

876

誕生会

\_\_\_\_\_

885

その結果が、今

\_\_\_\_\_

902

もう死ぬしかない

\_\_\_\_\_

911

人としてまっとうに扱われる

\_\_\_\_\_

920

前回の付け足し分です。

\_\_\_\_\_

932



一章 会わなくなっていた人。会わなくなっていく人。

## 比企谷八幡の初体験

総武高に入学して早三年、学年も上がり数ヶ月が経った七月の下旬。

季節も梅雨時に入り、蒸し暑い中で実施された期末試験も終わった一週間後の水曜日。

朝から曇天の空の下、自転車を漕いで学校に到着した俺は、昇降口そばの職員室前に群がる人だかりを見つける。何事だろうと近寄ってみると、どうやら期末テストの成績上位者が記された、五教科の順位表が張り出されているようだ。

興味をもった俺は自分の名前が記されることはない四教科は素通りし、得意教科の国語の順位表を見ようと、ごたごたと人が入り乱れる中、間を縫うようにして歩く。ぬるぬる進んで目的の順位表の前に来ると、どうせいつものように雪ノ下と葉山の二人のせいで自分は三位だろうなーと諦め気分で順位表を見やる。

すると、国語学年一位の横に自分の名前が記されているのを発見し驚きのあまり仰け反ってしまった。

見間違いじゃなかろうかと何度も見直してみるが、間違いなく俺が一位のようだ。

マジかよ……と思いつつ、呆けた顔で順位表を見てみると、周囲から「比企谷なんて人、三年にいたっけ？」という囁き声が聞こえた。

「ここにいますよー」といつてやろうかと思ったが、もちろんそんな事は言えない。

とそこへ、朝のホームルームの時間を知らせるチャイムの音が響き、順位表に群がっていた

生徒たちは慌ててその場を離れ始める。

俺はそんな彼らに紛れ教室へと向かいながら、胸の奥底から溢れる喜びに腰に手を当て

フハハハハ！ と高笑いしたくなるのを何とか我慢していた。

今日はマックスコーヒーをワイングラスに注いで乾杯しよう！

そんなウキウキした弾む気持ちで迎えた放課後。

帰りのホームルームが終わり部室へ向かおうとした俺を、担任の平塚先生が呼び止める。

そして今から職員室に来よう告げてきた。

先生の表情はえらく気難くその禍々しい姿を見た俺はなにやら不吉な予感を感じたので

「いやこのあとちょっとアレなんで」と断る時の常套句を発動する。

俺の言葉に先生は頷いたものの、まあそれは後にしろとばかりに俺の腕をガシツと掴む。そして力任せにぐいぐい引つ張つてくる。

このままでは傷物にされ、それを理由にお婿に貰われてしまう！ そう思った俺は大人しくついて行くことにした。

そんな俺を三年も同じクラスになった由比ヶ浜が心配そうな瞳で見つめていた。

見てないで助けろよ……と思ったが、この学校で平塚先生に勝てる人間は

おそらく存在しないだろう。人類にいるかすら怪しい。

なので仕方なく由比ヶ浜に視線で先に部室へ行くよう促し

俺は平塚先生とともに職員室へと向かった。

× × ×

そんなこんなで到着した職員室。

平塚先生の後について入ると、先生は俺を職員室奥の来客用スペースに連れて行く。すると、通された来客スペースには数学教師の伊藤澄子先生が座っているのが見え

やっぱり不吉な予感が当たったと、自分の先見の明を呪ってしまふ。

別段、伊藤先生が厳しい先生という訳ではない。ただ俺が個人的に苦手なだけなのだ。

入学してから今までずっと数学の実力テストで最下位をキープしている俺は追試と補習の常連になっている。

伊藤先生はそんな俺を心配し少しでも数学を好きになつてもらえるようにと補習内容に工夫を凝らしてくれる心優しい先生である。

だが俺は伊藤先生の優しさに全く答えておらず、それでも変わぬ優しさで接してくれる。

先生の人の良さそうな笑顔をみると、さすがに申し訳ない気持ちになつてしまふ。

そんな居心地悪い気持ちで伊藤先生と挨拶を交わした俺に、平塚先生は座るよう促すので

渋々ながら腰を降ろすが、二人は黙つたまま口を閉ざしている。

その二人の姿に何かと怒られる心当たりが多い俺は、下手に何か余計な事を口にしてうっかりしつかり藪へびにならないように沈黙を守ることにした。

お口にチャックして言わ猿スタイルをする俺を見て平塚先生はため息をこぼすと自分の手元にあつたプリントを俺のほうへ差し出す。

先生に差し出されたプリントを受け取って見ると、それはまだ返されていないかった俺の数学テストの解答用紙のようだ。

不思議に思い二人に訝しげな視線を向けると、二人とも気まずげな表情で俺から視線を逸らしてしまう。

二人の反応に戸惑いつつ、もう一度、自分の解答用紙をよく見てみるとテスト用紙の解答欄には正解を示す○が一つも無く、よくよく探してみると一応あるにはあったのだが、それは0点の○だけだと気づく。

答案用紙に綺麗に描かれた○に驚いて顔をあげると、そんな俺を可哀想なものでも見るような目で見ていた二人にまたもや視線を逸らされる。

さすがに何かの見間違いじゃなからうかと思ひ、もう一度、今度はじっくりと、解答用紙を確認したのだが、どこをどう見ても結果は同じ。

まさかの0点である。

俺の十二年間という学校生活。

その中で確かに俺にとって数学は大の苦手な教科であったけれどそれでも流石に0点は初めての経験だ。

初体験という言葉は夢が広がる素敵な言葉なはずなのに、全く心が浮き立たない。

あまりのショックでプリント片手に固まっている俺に、伊藤先生から追撃が掛かる。

「点数がね……その、付けようがなかったから、0は綺麗に書いてみたの！」

先生の頑張って気を利かせてみました！ 的な笑顔とその見当違いな優しさに

俺は少し涙目になってしまふ。

そうして他の教師や生徒たちの話し声で賑わう職員室のざわめきの中。

当事者の俺はもちろん前に座る教師二人も口を閉ざして押し黙ってしまふ。

そんな気まづげな三人がいる場所に、俺が一年の時、担任だった山田先生が

一人の女子生徒を連れて入ってきた。

突然現れた二人に驚き慌ててプリントを懷に隠すと、入って来た女子に見られかつた

か

気になり横目でこそつと窺って見る。

すると、その生徒は俺も良く知る女子だったので思わず声をかけてしまふ。

「一色、どうしたんだお前？」

俺の言葉に、沈んだ表情でじつと床を見つめていた一色は顔をあげると「先輩……」と

呟く。

しかしその後は口をモゴモゴさせるだけで何も言わず俯いてしまふ。

どうしたんだこいつ……、と一色を訝しげに見ていると、山田先生は平塚先生たちに

一色を預け、来客スペースから出て行ってしまった。

置いていかれた一色に平塚先生が座るよう促すと、一色は頷き俺の隣に腰を降ろす。そして横目でちらつとこちらを伺うが、目が合うとこそつと視線を逸らしてしまう。重々しい態度を崩さない教師二人となにやら落ち込んだ様子の一色。

そんな三人に囲まれ逃げ出した気持ちで一杯になりながらも沈黙を守ること暫し。するとさすがにその澱んだ空気に耐えられなくなったのか伊藤先生が平塚先生に「先生そろそろ……」と声をかける。

平塚先生は頷くと、今度は一色に国語の解答用紙をそつと差し出す。

差し出された解答用紙を受け取った一色は、用紙にさつと視線を泳がせると表情をさらに沈ませ小さくため息をつく。

俺は一色の横顔をチラチラ伺いながら、もしやこいつもテストで0点を取ったか？と

仲間が増える喜びに浮き足立ってしまう。

そこへ、平塚先生が困ったような声で口を開く。

「一色。今回も少し、目標の点数に届かなかったな」

「はい……」

返ってきた解答用紙を潤んだ瞳で見つめていた一色は、小さな声で返事を返す。

そしてテーブルの上に用紙を置いたので、横目でその点数を確認してみる事にした。

すると用紙には、女の子らしい丸い字で書かれた彼女の名前と75点と記された点数が見て取れた。

期待を込めて見つめた先の点数がまあまあの点数だった事に、俺はなんだか裏切られた気分になりがっかりしてしまう。

常識的に考えて俺と同じゼロ桁は難しくとも一桁は取るべきだ。

それでも落ち込んだ様子の一色を慰めるつもりで声をかけてみる。

「まあなんだ。平均は超えてそうだし、そんな落ち込まなくてもいいんじゃないか？」俺の優しさに溢れた言葉に涙で潤んだ瞳をこちらに向け、こんな状況でも忘れずあざとい仕草をする、ある意味立派な一色。

だが呆れ顔をした教師二人の、お前、人の事を慰めている場合じゃないだろう……と言わんばかりの視線に、居た堪れない気持ちになってしまう。

なので一色に「じゃあ頑張れよ」と声をかけ、立ち上がり立ち去ろうと企てたがそこへ伊藤先生の優しい声が耳の届く。

「一色さん。数学は学年五位だったんだから、やっぱり理系に進路を戻した方が」

先生の言葉に、一色は勉強が出来ない子。と勝手に決めつけていた俺は驚き、隣に座る一色を目を丸くして見つけてしまう。マジかよ……、一色が学年五位？

『明日、世界が終わる』。そんなことを告げられた気分の俺を放置したまま



教師二人は一色に語りかける。

「一色。君は確か一年の進路調査では理系希望だったはず。

それがどうして二年になって急に文系に変えたんだ？ 何か理由があるのか？」

「確かに以前よりはずつと国語の成績はあがってはいるけど……」

「本人の希望を叶えるのが教師の仕事だがうちは進学校で通っているからな。

やはりより向いてる方へ進路を選んで欲しいと思うんだよ」

三人のやり取りに耳を傾けながら、一色つて理系タイプなんだと思いつつ、確かにあざとい仕事や

計算された立ち振る舞いは理系といえれば理系なのかと妙に納得してしまう。

まあ計算しすぎなところがあるなあ、と苦笑しつつ

そういえば今までこいつの成績とか聞いた事も無かった事を思い出す。

「一色。お前数学得意だったんだな。うちの学校で学年五位つていつたらかなりのものだろう。」

お前が将来何になりたいか知らんけど、向いてる方に行った方が良いと思うぞ」

数学テストで最下位をずつとキープしている俺が、訳知り顔で口を挟んでみる。

すると、俺の言葉にこちらを向いた一色は頬を両の手で挟むという可愛らしい仕事で「玉の輿です」と全然可愛くないことを口にする。

俺も養われたい願望ならお前には負けんぞ！ と対抗心を燃やしていると、この学校の女性教師の中でまだ結婚していない平塚先生と伊藤先生の二人がうんうんと頷いているのが見えた。

俺も専業主夫を目指す身だ。三人の気持ちはわからんでもない。

いつだったか世の女性の理想の旦那像が気になりネットで検索してみたら、ATMの画像が出てきて爆笑した事を思い出す。

さわるとほのかに温かい。そうコメントを記したユーモアのセンス溢れる作者にオリンピックのロゴマーク作成をお願いしたいレベル。

まあ安定を求めるのは子供を産み育てる女性の心理なのかも知れない。

だが男が同じような理由で健康な子供が欲しいから若い女の子の方が良いというところりコンとか罵倒されるんだよなあ。

そんな事を考えながら、一色が文転した理由に興味が湧いたので尋ねてみることにした。

「一色、どうして文系に進路を変更しようと思ったんだ？」

俺の問いかけに、一色は難しいそうな顔で口籠ってしまい

それを見た平塚先生が口を開く。

「そうだぞ一色。国語を教える立場としては、国語に興味を持って貰えて嬉しいが

やっぱり向き不向きはあるからな。せっかく向いてる理系を捨てるというのは」  
国語教師として気持ち嬉しい半面、進学校の教師の立場で困っている感じだ。

伊藤先生もうんうんと頷きながら一色の答えを待っている。

三人から答えをせっつかれた一色は言いづらそうに口をモゴモゴさせていたが

教師二人の「言うまで帰さん」といわんばかりの視線に諦めたように吐息をつく。

「その、良いなと思っっている人が文系志望なので……」

一色はごによごによした声でいうと、顔を真っ赤にして俯いてしまう。

一色の言葉に、こいつまだ葉山のこと諦めてないんだと、呆れるやら感心するやらしている

教師二人は「あー、うん！ その気持ち分かるなー！」とか「分かるー！ 分かるー！」などと

年甲斐もなくはしゃいでいた。

そんなはしゃぐ教師と顔を真っ赤にしている一色の姿を見ながら、そーいや俺は何でここに

居るんだろうと考える。

まさかと思うが一色に俺の初体験の記録を見せて公開処刑するつもりなのかと怯えるが

それなら一色が来てから俺に解答用紙を渡すはずだ。

ほんと何で俺ここにいるんだ？ と、教師二人へじとつとした視線を向けると

それ気がついた二人は誤魔化すよう咳払いをする。

「あのう、平塚先生。用件はなんでしようか？」

俺の問いかけに平塚先生はうむと頷くと、生真面目な表情で尋ね返してきた。

「比企谷。去年の生徒会選挙で一色が出した公約を、君は覚えているか？」

先生の言葉に頷く。

最初に雪ノ下が出した案である、進学研究室の創設と部活動部費給付基準の緩和の二つ。

そこにもう一つ、一色が出した案である、生徒同士による自分の得意分野で交互に教師役を

努めるグループ学習室の創設の、細かな調整を俺が一色と話し合っただけの決めたのだから、

その内容は今でも良く覚えている。

イメージとしては図書館の八人掛けのテーブルに集まった見知らぬ者同士で、

その場限りの友人のようになり教え教わる感じだと思ってもらえれば良いだろう。

普通に友人に恵まれている人間には分からないだろうが、俺のようなプロぼっちゃ

一色のような「女の敵」を絵に書いたような生き方をしている人間には誰かと一緒に勉強をする機会そのものが、あまりというか殆ど無いのだ。

まあ一色はその恵まれた容姿もあって、それに釣られてくる色ボケした男子たちを横から釣り上げようとする、ネットゲームで言うところの「横殴り」を狙う  
ある意味一色とお似合いの女友達は多いようだが。

そしてグループ学習室では、そういう人の輪から外れ気味なボツチな者たちでも割と気軽に声を掛け合えるらしく、互いに教え教えられる良い関係を築けていると参加した生徒間でもなかなか好評なのだそうだ。

俺も何度か参加したが、テーブルに座り少し経つと教わりたい生徒が立ち上がり他の生徒たちに「この問題わかりますか？」と尋ねるのをみたことがある。

するとテーブルの皆が自分の勉強の手を止めて、その生徒に懇切丁寧に教えておりもしテーブルにいない場合でも、他のテーブルの者が教えたり教わったりしていてこういう勉強方法も悪くないなと思ったものだ。

人に教える事で自分の中にあつた知識が、きちんと自分のものになっていくそんな不思議な感覚があるのだと思う。

俺は友達がいなくて行つた事はないが、前にテレビで見た合コンみたいに賑やかな和気あいあいな雰囲気があつたように感じる。

俺もその空気に当てられて他の生徒を何度か教えた事があったのだが、教えた女の子に

屈託のない笑顔でお礼をいわれ、その笑顔に思わず恋に落ちそうになったくらいだ。

まあ俺が聞いたら誰も教えてくれなかった訳だが……

また増えたトラウマついでに、トラ繋がりでトラブルについてもいくつか話せば

間違った知識を教えてしまったり、そのことを指摘して口論になるケースもあるらしい。

それにはそれで図書委員のように設置された委員会メンバーが仲裁したりするが、そもそも穏やかな雰囲気のためトラブル自体が起きにくいとの事。

デメリットもあるがメリットの方が大きいため今のところは大成功をと言ってよくすでに常連になつてるメンバーも多いという。

多分だが成功の秘訣は勉強する意味を少なからず理解している進学校という事と普段の姿を見ていないため偏見がなく、その場限りの「一期一会」の気持ちで

みんなが利用しているのが大きいのだと思う。

その事だろうと思ひ平塚先生に告げると、先生はうむつと頷く。

「ただ少し、問題があつてな……」

先生はというと、顔を顰めてため息を吐く。

とそこで自分の袖が軽く引かれている事に気が付き、引いている一色へと視線を移す。

すると視線の先で一色は困ったような表情を浮かべていた。

「えっ—とですね。学習室で勉強していると男の子たちにすっごく声掛けられて

ナンパ？ されるんですよね、私。だから全然集中出来ないし行きづらくって……」

一色は不満もあらわに言うのと、ふっとため息を吐く。

そんな彼女を見て俺は呆れてしまう。

や、だつてそりゃ、お前があざとい仕草で引つかなかった男子たちを

キヤツチ&リリースしてたりしてたからだろう……。

簡単に引つかかるほうもあれだが不満だったり困ってるの、むしろ相手の方なんじゃ

？

と思いつつ一色をじつと半眼で見つめる。

瞳を潤ませて可愛らしい小動物のような仕草で俺を見つめ返す一色。

そんな彼女を見ながら、まあこいつ見た目は可愛いしなーと思いつつ

中身もまあ可愛いちゃ可愛いかと考える。

そうやって考えていくと、こいつ、もの凄く可愛いんじゃないか?! と思つたが

俺の地雷センサーが激しく発動し危険を知らせるサイレンが脳内に鳴り響いたので

なんとか正気を取り戻す。そして思ったことを口にする。

「まあ頑張つて考えて場を整えた本人が行けないのはあれだけど

その分は他所でやればいいじゃねーか？ サイゼとかオススメだぞ、マジで」と、俺のとびつきりの場所を教えたのだが、一色は納得してくれなかった。

「自分で考えて整えた場所だからそこに行きたいし、ちゃんと想っていたように

みんなが利用してくれているか、気になるんじゃないですか……」

一色はというと拗ねたようにそっぽを向く。

ならば川の中州でバーベキューをしながら勉強する事を勧めるかと思つたが、その  
仕草は

あざといが言ってる事や想っている事は、もう立派な生徒会長だなど感心してしま  
う。

だが残念無念どうしても、想つた通りにいかないのが人間社会である。

例えばそれが善意で始めた事だとしても、その気持ちを相手に汲み取ってもらえるかは  
別の話。

なのでここは心を鬼にして「でも行けないんでそ？」といつてみる。

俺の言葉に、一色は俯いて表情を沈んだものに変えてしまう。

落ち込んでしまった一色を見て、どうしよう……と戸惑っていると



一色はがぼつと顔をあげ力強く拳を握り締め訴えてきた。

「でも手はあるんです。考えたんです！」

さすがメンタルの強さは日本代表クラス。

その不屈な精神もとい諦めの悪さは彼女の才能といつてもいいかも知れない。

俺は気になったのでさらに聞いてみる。

すると一色は人差し指をふりふりしながら話し始める。

「えっ—とですね、おしおき部屋あるじゃないですかー？」

おしおき部屋。

それはもちろん奉仕部の部室の事である。いや違う！ あそこは社畜の育成所、

もしくはピンク髪のクツキーモンスターがお菓子を食べる部屋だった。

話がズレたので話を戻すと、おしおき部屋とはグループ学習室内に設置された小部屋

の事である。

そして学習室でトラブルを起こした生徒が入る牢獄でもある。

おしおきの内容は、机と椅子だけ置いてある畳一畳ほどの広さの個室で外との接触は

せず、

三十分入って気を鎮めてから出てくるか、もしくは一週間の学習室使用禁止と定めら

れている。

そして、おしおきの途中バックレたりトラブルメーカーだと判断されれば学習室の無期限使用禁止措置が発動されることもある。

だが学習室が設置されてからトラブルらしいトラブルもなく、戸部が五月蠅いとクレームが入り、奴が三回、牢獄入りしただけと記憶している。

部屋といつても保健室のベットのようカーテンがひかれているだけなのだが。

俺がそれを思い出していると、一色は身振り手振りを混じえつつ話を続ける。

「なので私が、おしおき部屋に入ろうと思うんですよー！」

これまた良く意味がわからない事を、きやるんとした笑顔で言ってきた。

何いつてんだ、こいつは……。そんな呆れた表情を浮かべていると、それを見た一色

理解力たりないな、この人。みたいなムカつく顔をしてさらに話を続ける。

「いいですか先輩？ 私は皆の居るところにいるとナンパされちゃうんです。

なので皆に見えないように「おしおきへや」に隠れながら勉強しようと考えたんです。そしてですね。たまにカーテンを開けて皆の様子を見れば良いかなって思うんです。

どう思います？ そう思いませんか？」

一色は言うど、自信満々な不敵な笑みを見せる。

そんな一色を見て俺は、このモテてる事を全く隠さない正々堂々した侍のようなスタイル、

いうならばサムライスピリッツを体現した潔良すぎる生き様に啞然としてしまう。

なのに謙虚さをまるで感じさせないその性格に女の敵らしさが垣間見えて、

近いうちに刺されそうだと心配になってくる。

ただその発想自体は、時代劇で天井裏に潜んで殿様の命令を待つ忍者のような

「何時でも見守っていますー」というプロ意識を感じられるモノがある気がした。

現代風にいえばセコムっぽいとでも言えば良いのだろうか？

でもセコムのCMに出てた長島茂雄さんの家に泥棒入ったんだよな……と考えなが

ら、

そんな風に自分が整えた「場」をきちんと見守りたいと思うのは立派なことだと思う。

「いいんじゃないか？ 話を聞く分には悪くない手だと思おうし」

「なら先輩、私の勉強に付き合ってもらえますよね？」

一色はいうと、とびつきり底意地悪い笑みを浮かべた。

## ボツチの宿命

「なら先輩。私の勉強に付き合ってもらえますよね？」

「どうですか？ いいですよね？ 付き合いますよね？ 付き合わないとか意味わからないですよね？」

とばかりにぐいぐい俺に迫ってくる一色は取り敢えず横に置いて、平塚先生に向き直る。

そして先ほどの会話で気になっていた事を尋ねてみることにした。

「平塚先生。これって奉仕部への依頼なんですか？」

普段の平塚先生なら何か依頼がある時は必ず自分も依頼者も部室に足を運ばせて事のあらましを奉仕部の面々、俺や雪ノ下や由比ヶ浜に伝えるからだ。

今回のようにあの二人を抜きにして話を進めるのは珍しい。

そう思つて尋ねた俺の言葉に、平塚先生はゆつくりと首を振る。

「比企谷。これは奉仕部への依頼というよりも比企谷個人への提案なんだが、もし良ければ一色に、グループ学習室のように国語を教えて見ないか？」

そう伝えてきた平塚先生の顔を俺は驚いて見返してしまう。

すると伊藤先生が、俺を安心させるよう柔らかく微笑む。

「グループ学習室の評判がとても良いから、いま学校の授業として取り入れてるグループ学習との違いを学校側でもきちんと検証してみようって話なの。」

それに比企谷くん、今回の国語のテストで学年一位だったんでしょ？」

伊藤先生は俺の疑問に答える形でその理由を話してくれ、

それと合わせて俺の輝かしい栄光の記録を口にしてくれた。

一色にも自慢しようと思っていた俺は、そのことを耳にした一色も

俺を頭脳明晰で立派な先輩として少しくらい尊敬するだろうと考える。

その事を確認するために隣に座る一色を横目で伺うと、一色は自分の解答题用紙を

難しい顔で見直しており、全く耳に入っていないかったご様子。

「それで比企谷くんが一色さんの苦手な国語を教えて、比企谷くんの少し苦手な数学を

一色さんが比企谷くんに教えるってどうかな？もちろん私たちもサポートするし」

伊藤先生の言葉に、0点を取った俺に対して少し苦手と表現してくれるその菩薩のよ

うな

心に感動していると、平塚先生がプリントを取り出し俺に見るよう促してくる。

出されたプリント受け取って見てみると、それぞれタイトルが付いており

「独学七割・グループ学習三割について」「グループ学習の具体的な内容」

「グループ学習のメリット・デメリット」「グループ学習の個別サンプル表」と記されていた。

プリントを一枚一枚めくっていくと、書かれている内容は概ね納得出来るもの。最後に目を通したサンプル表には、サンプルを取る方法と期間、

他に結果を見るための試験日が記されている。

そして最後に、今回の件に参加する事を希望する二人一組で登録したメンバーの名前が記されていた。

名前横の学年欄を見ると、全て同級生同士での参加のようだ。

まあそうだろう。同じレベルで高め合えなければ一緒にやる意味がない。

独りの方がマシである。

思いつつ見ていくと、サンプル表の一番下の部分に、互いの得意分野が文系と理系で正反対の場合と書かれた欄があり、その欄だけ名前の記入が無いのが見てとれた。

成程このサンプルが取りたいのかと思ひ、平塚先生に尋ねてみる。

「うむ。なかなか同級生同士で噛み合う参加者がいなくてな。

居ても一緒に参加した友達とじゃないと嫌だと言われるし、少し困っていたのだよ」

「それで比企谷くんと一色さんなら面識もあつて仲も良いらしいし、

丁度、お互いの得意分野も正反対だから、どうかなって思つて」

俺の問いに答えながら、平塚先生と伊藤先生は本当に困った表情をしており、ここまでの話の流れから断りづらい雰囲気になっている。

そして余り物同士で組ませるのはボッチの宿命とも言える。

ただそれらを抜きにしても困っている二人を見て、普段から二人にはお世話になり面倒を掛けている自覚がある俺はお礼も兼ねて手助けしたい気持ちは勿論あるのだ。しかし一つ気になる点がある。

俺と一色が仲が良い？ 俺こいつに今まで一度も苗字も名前も呼ばれてないんだけど？

思いつつ、一色の方へ視線を向けると、一色は姿勢そのまま顔だけを明後日の方角に向けていた。

そんなことありませーんってことですか？ それ

「一色。お前はいいのかよ？」

むっとしつつ、その後頭部に尋ねると、一色はこちらに向き直るが

暑いのか顔を真っ赤にしていた。

そして俺と視線を合わせないよう目をきよどきよど泳がせながら

「……先輩は、その、どうなんですか？」と質問に質問で返してきた。

その言葉に、俺の脳裏には奉仕部に入る前、二年生に上がった頃の記憶が蘇る。

平塚先生の熊のような危険性を知らなかった当時の俺は愚かにも、先生の質問に今の一色と同じように返し、人の質問に答えてから人に質問を返せと叱られたのだ。そしてスクライドよろしく。先生に腹パンされ床に転がり悶絶したのである。その時の記憶で俺の背筋に冷たい汗が流れる。お腹もなんか痛くなってきた。人は経験から学ぶ生き物だと云われる。

なのでここは一つ、俺も伝統を受け継ぐとかいつて先生の真似してみようと考えたがさすがに女子生徒に腹パンをすれば俺が学校からBANされてしまう。それに一色のことだ。

まず絶対確実に奉仕部の部室に駆け込んで雪ノ下と由比ヶ浜の二人に、傷物のされたと

あることないこと混じりに訴えて、俺を社会的に抹殺するだろう。

なので人目に付き易い物理ではなく、精神、そう心にパンチしようと思いい口を開く。「プリントに記載された期間と時間帯なら俺も暇だし別にかまわん。」

「まあ俺の素晴らしい頭脳に、一色、お前がついてこれるならな！」  
格好良くキリツとした表情で答えた俺を見て、一色はへつと小馬鹿にしたような顔をする。

そしてとてつもなく嫌な事を、俺の質問にまたもや答えを返さず尋ねてきた。



「先輩って、数学苦手なんですか？」

もちろん会話の切り返しならプロレベルの俺である（脳内）

この時も一色の質問を華麗にばーんと打ち返す。

「苦手じゃねーよ！ ただ、なに、ちよつと得意じゃないだけで……」

「先輩。それを苦手っていうんですよ……」

俺の返しに一色は哀れみの表情を浮かべため息を吐く。このガキ……

そして視界の隅で、平塚先生と伊藤先生が顔を見合わせて口元を手で隠しつつ

「ちよつとだつて」「ちよつとじゃないよなあ」などと囁きを交わしながら

可笑しそうに笑っている姿が目に入り、少し気分が落ちてくる。

手助けやめようかしら……。そう思っていると

「比企谷くん。一色さんにはもう了承を得ているから大丈夫よ。

その一色さんの強い希望で、こうして比企谷くんに声をかけさせてもらったの。

頼りがいのある先輩として、すごく信頼されてるのね」

伊藤先生が人柄に合った優しい口調でそう伝えてくれた。まあ後半のセリフは

「頼りがいのある先輩として、すごく信頼されてるのね」ではなく

「使い勝手のよい男子として、すごく利用されてるのね」なんだけど。

とはいえ、今まで散々お世話になった先生方に恩返しもせずにいるのも気が引ける。

それでお礼がてら参加する事を伝えると、四人で細かな打ち合わせをすることにした。

そして期間中は俺が一色の国語教師になり、一色が俺の数学教師になる事が決まり、ほっとした様子の先生たちに帰りの挨拶をすると、俺と一色は職員室を後にする。

× × ×

は  
そうして、これから生徒会室へ向かうという一色と部室に顔を出そうと思っていた俺

それぞれの苦手なところを話しながら廊下を並んで歩く。

が  
国語のあれとこれが苦手です、と語る一色の声に耳を傾けていると、話を終えた一色

「先輩は、数学のどの部分が苦手なんですか？」と尋ねてきた。

その問いに、何処もかしこも何もかもとはさすがに言えず困ってしまう。

なんと答えようかと頭を捻っている、隣を歩いていた一色の姿が見えなくなる。

不思議に思い廊下を振り返ると、床に落ちたプリントを拾おうとしている一色の姿が目映る。

まさか……と思ひ慌てて懐に手を入れると自分が解答题紙を落とした事に気付く。それで何とか一色を止めようとするが時既に遅し。

一色はプリントの中身を確認すると、にやつと嫌な笑い方をし

「これは……教えがいますね！」と声を弾ませたのだった。

## 壁と仲良く話している場合じゃない

初体験の記録。字面だけなら童貞の妄想力を極限にまで昇華させる何かがある単語だが、

其の、0点と記されたテスト用紙のこと。

それを一色に見られてしまった俺は、今日家へと帰ったら部屋に籠って膝を抱え「壁」と二時間くらい仲良く話せそうだと、窓の外の景色を見やりながら思う。

そしてこれまでの最長記録である、中学時代、折本かおりに振られた事を翌日にはクラスメイトの全員が知っていた時の壁トークタイム一時間四十二分の壁を今日こそ越えられるかも知れない。

そんな期待に胸を膨らませる事で何とかこの辛すぎる現実から目を背けていた。

自意識に手と足とクセ毛が生えた俺である。

そうでもないかとあまりの恥ずかしさで正気を保っていられなかつたのだ。

だが一色は俺にプリントを手渡すと、その件にそれ以上触れず

最近挑戦しているという美味しいお菓子の作り方を話します。

「ちゃんとレシピ通りに作るんですけど、舌触りが思ってたより滑らかじゃないんです

よね。

だから今度は自分なりに工夫しようかなって思うんです！」

朗らかに笑い明るく話す一色の言葉に、俺はふむふむと相槌を打ちながら

もしや一色は「お菓子」と「可笑し」をもじって俺を揶揄しているのでは……？ と

疑心暗鬼に駆られていたが、そういう訳ではないらしい。

お菓子が出来たら味見をして欲しいといわれ領くと、にぱつと笑った彼女と別れ

俺は特別棟にある奉仕部の部室へと向かうことにした。

奉仕部自体は三年になり受験もあるからと自由参加になっている。

だが俺も雪ノ下も希望の大学は余裕で合格圏内であり、部活は部員で唯一合格が危な

い

由比ヶ浜の雪ノ下先生によるお勉強教室になっている。

なので一色と別れた時点でそのまま家へ帰っても良かったのだが、一応は事の顛末を

雪ノ下と由比ヶ浜に話しておこうと思いいこへと足を運んだのだ。

部室の扉を開けて中を見ると、ここ最近よく見るように雪ノ下と由比ヶ浜の二人は

仲良くくびつたりと椅子を並べて一生懸命に勉強をしているのが見えた。

そんな仲睦まじい二人の姿に、キットカットのCMのようにパキッと折れかけていた

自分の心がほっこりとして癒されたように感じる。

後は機会を伺つて、国語学年一位から惨めに転がり落ちた雪ノ下を満面の笑みで慰めながら

由比ヶ浜には俺が雪ノ下と葉山を打倒した事実を告げ、ヒツキー凄いやー！ と尊敬させねば。

そんな悪巧み混じりの気持ちで二人に挨拶をし、いつもの定位置に腰を降ろす。すると由比ヶ浜が勉強の手を止めて平塚先生の用事は何だったのか尋ねてきた。

由比ヶ浜の質問に答え、自分の都合の悪い部分は出来る限り伏せて事の顛末を語ると話を聞いた二人は驚いたように顔を見合わせる。

そして口々に何やら言ってきた。

「比企谷くん。あなたに人にモノを教えるなんて高度な事が出来るのかしら？」

それ以前に人との会話だつて怪しいのに……」

「それつて二人きりで、狭い個室に籠つて勉強するつて事だよね？」

「小町にも勉強を教えた事は何度もあつたし、一色も基本は出来てるつばいから

そんなに大変でもなさそうさ。それに会話だつていましてるよね？ これ違うのか

よ」

「あと個室つていつでもカーテンで仕切られてるだけだぞ？ それいつたらさつきまで

の

お前らだって、二人きりで個室で勉強してらつて事になるじゃねーか」

二人の言葉に狼狽えつつもなんとか言葉をかえす。

おかしい、おかしいぞ。これでは雪ノ下を慰め貶すことが不可能だ。

ガ浜さんに尊敬も羨ましがっても貰えない。

予想外の展開に動揺している俺に、二人からさらなる追撃がかかる。

「比企谷くん。小町さんは可哀想な事にあなたと家族だから、まだ会話が出来るだけであって

一色さんは多少アレなところがあるけど一般人なのよ？ 不可能とまでは言わないけれど

さすがに……ちよつと難しいんじゃないかしら？」

雪ノ下は、そんな事もわからないの？ と呆れたような表情を浮かべると、

ふつと疲れたようなため息を吐く。

その隣で由比ヶ浜は腕をぶんぶん振り回しつつ「だってここ広いじゃん！」と

大声で叫んでくる。想像の斜め下をいく二人の反応。

どうやら先ほどほっこりとした気分になったのは、俺の勘違いだったらしい。

このままでは自分の心が休まるどころかトリプルブレイクしそうだと判断した俺はさらにあれこれ言ってくる二人を何とか宥めすかし、出来るだけ早くこの場所から

離脱しようと逃走の準備に移る。

置いたばかりの鞆をガシツと掴み「今日はちよつと用があるから、この辺で」とぼそつと呟くと椅子を引いて立ちあがる。

そして扉へ向かう俺の背中に、あれこれ言ってくる二人から逃げるように部室を後にしたのだった。

×  
×  
×

何とか二人の口撃から逃れた俺は、昇降口で靴を履き替え、駐輪場で自転車に跨るとギコギコ漕いで二十分、安息の地である自宅に到着する。

ほつと安堵の吐息をつく、靴を脱いで階段を上がり、リビングに入る。すると先に帰宅していた小町がテーブルの上に勉強道具を目一杯に広げうんうん唸りながら数学を勉強しているのが見えた。



積み重ねられたテキスト類に嫌な記憶が刺激され、見なかったフリをしていると

小町が問題集を片手に、にじり寄ってきた。

「お兄ちゃん、この問題の解き方わかる？」

今日はもう数学の話はしたくないんだけどなあ……と思いつつも、可愛い小町のためならばと

小町が指差す問題を見てみるが、問題の解き方以前に問題文が分からないことに気づく。

あれ……、こんなん習ったっけ？ と問題文を縦に横に見てみるが、わからないことがわかった！

それくらいしか分かったことがなく、どうしていいか困ってしまう。

そんな俺を不思議そうに見つめる小町。

こりやいかんと思ひ、「お兄ちゃんはね、小町ちゃんはやれば出来る子だつて信じてるから

もうちよつと一人で頑張つてみなさい」と告げ、その肩をぽんと叩く。

そして何気ない素振りでもりビングを出ると、自分の部屋へと向かう。

部屋の鍵を閉めベットに腰を下ろすと、ため息がこぼれる。

今日はずっと色んな場所から逃げてばかりである。

そして平塚先生たちの提案に安々と乗ってしまった馬鹿な自分を全力で後悔してしまふ。

このまま一色と一緒に勉強したら、「こんなのも出来ないんですかー？」と小馬鹿にされるならまだしも、「こんなのが出来ないの……？」と軽蔑されるかも知れない。

そう思うと「壁」と仲良く話している場合じゃないと思い、押入れの奥からもう使わなくなった教科書を入れたダンボールを引っ張り出す。

そして中学一年から高校二年まで使っていた数学の教科書を全部取りだすと机の上にずらっと並べてみる。

何故なら高校に入学してから今まで、数学の授業時間はラノベタイムと勝手に決め教科書の内側にラノベを忍ばせ読書に励んでいた事。

そして小町に尋ねられた問題が全く理解できず解けなかった事から、自分が実際どのくらい

数学が出来ないのか、自分ですら判断出来なかったからだ

それで二時間ばかり、教科書と問題集とにらめっこしてわかったのだが、中二の一学期までに

習ったことは一応理解しているのに、その先からは殆ど理解していない事に気が付く。

どうしてそこで自分の知識が止まっているのか気になり、勉強する手を止めると当時の事をじっくりと思い出してみる。

目を閉じて記憶の柵を開いていくと、もしかして……と思う、一つの記憶が蘇る。

× × ×

それは今と同じ蒸し暑くじめじめとした梅雨の頃。

当時からぼつちだった俺にも優しく接してくれた折本に好意を抱き、その気持ち伝えようと

告白したが敢え無く撃沈。

自分の想いが届かず彼女に振られた事は確かにショックだったが

それでも想いを伝える、そんな勇気もてた自分に俺は満足していた。

だが告白した次の日にはクラス中にその事が知れ渡っており、周囲から聞こえる自分

を

馬鹿にする声や折本を慰める声を耳にした俺は、絶対に、このクラスや学校の連中とは

同じ高校には行きたくないと心に誓ったのだ。

しかし、いくら行きたくないと決めたとしても、まさかそんな理由を両親に訴え

引越すことなど出来る訳がない。

なので当時の俺は可能な限り成績を上げ、通っていた中学からは進学する者が殆どいない

千葉でも有数の進学校である総武高校に合格し入れるよう努力する事を決めたのだ。

だが、当時の俺の成績では総武高に合格するのはかなり難しく、受験までに残された時間では

合格ラインに立つことすら覚束ない。

悩んだ末、小学生の頃から苦手で頑張ってもなかなか成績が上がらない数学を完全に捨て

伸び代のよい他の教科に集中し総合点をあげることにした。

そのかいもあって、俺は何とか総武高に入学することができたのだった。

そうして総武高生になった俺は、どうせやっても無駄だとばかりに数学を完全に捨て

自分の得意分野の文系にのみ集中するようになった。

それがダメだったとは思わないが今日のことを思い出すと、もう少しやっておけば良かったような気もしてくる。

そして、逃げる事に頑張った自分と逃げずに頑張ろうとする一色を比べ、このままでは彼女の足でまといになることに気づく。

なので俺は、せめて一色の邪魔にならない程度には出来るようになっておこうと思い、夜遅くまで数学の勉強に勤しむことにした。

×  
×  
×

そうして迎えた翌日。

俺は夜の遅くまで数学の勉強を頑張るといふ暴挙のツケを払うことになってしまった。寝不足はもとより慣れない数字との格闘に、心身ともへとへとになってしまったの

だ。

それでも眠い目を擦りつつ自転車を漕いで学校へと向かい、到着すると今度はあふれる眠気で船を漕ぎながらではあったが、午前中の授業を何とかこなす。

昼を迎えると、俺はいつもの場所のベンチに座り、いつものように戸塚が練習する姿を眺めながら

昼飯をモグモグ頬張る。

すると俺の目に映る戸塚の可憐で可愛らしい天使の御姿に、格闘ゲームなら真つ赤だった

俺の体力ゲージもみるみるうちに回復し、体調不良も明後日の方向へ吹き飛ばす。

言ってみれば不死鳥のように元気になった俺は多分元気になりすぎたのだろう。

標準装備の謙虚なサイズの小型ロケットを操作も制御も不可能な大型ロケットに誤って

バージョンアップさせるという重大なミスを犯す。

多分だが疲れているほど元気になるというマイ・ロケットの暴走である。

場所も弁えず荒ぶるマイ・ロケットに慌てていると、練習を終え俺の傍へとやって来た

戸塚の姿にさらに慌ててしまう。

戸塚の無垢な視線から俺は大型ロケットをバレないように頑張つて隠すこと暫し、  
なんとか鎮まり謙虚サイズに変形したマイ・ロケットと戸塚と三人、教室へと戻る。  
そうして午後の授業を終え放課後を迎えると、家に帰つてまた数学の勉強をしようか  
と思つたが、

今日はいつもいつでも頭の具合が悪い親父が体調まで悪くなり、会社を休んで家で寝  
ていた事を  
思い出す。

今までの経験上、親父は夕方くらいには元氣一杯になっている。

そして放課後、一緒に遊ぶような友達が居らず帰宅が早い俺を見ると

ここぞとばかりにネチネチと絡んできた嫌な記憶が蘇る。

なので落ち着いて勉強できる場所を求め、俺は図書館へと向かうことにした。

## 先輩との再会

自宅には今親父がいる。それは俺にとって「入るな危険！」の看板と同じ意味を持ち、下手すると「混ぜるな危険！」と同じ事になる。

なので安全に勉強出来る場所を思案した俺は図書館が良いと判断し、駐輪所から自転車を

引つ張り出すと、取り出した自転車に跨って図書館へと向かうことにした。

梅雨時の暑くて湿っぽい空気の中を、えっちらおっちらと自転車のペダルを漕いでいると

身体中から汗が噴き出すのを感じる。額から流れ落ちた汗を手で拭きながら

お昼どきテニスの練習で同じように汗を拭っていた戸塚の事を考える。

今日のお昼は本当に危なかった……。俺のバージョンアップしたマイ・ロケットをもしても万が一、戸塚に見られ「僕を見てそうだったの……？」と尋ねられたら

俺は否定することが出来なかったかも知れない。

そしてそんな俺を見て、戸塚が「八幡の変態――！」と罵倒してくるならそれは俺にとつて



ご褒美であり、これまた万が一にも、戸塚に照れた表情で嬉しそうにされようものなら

俺の理性という名のダムは決壊し、戸塚に荒ぶるマイ・ロケットを発射していたことだろう。

危ない危ないギリギリセーフ……。

そんな完全にアウトな事を考えていると目的地の図書館に到着する。

俺は駐輪所に自転車止めると、戸塚との甘い妄想に身を浸しつつ

広い駐車場を横切って図書館の建物へと歩き始める。

館内に入ると程よく冷えたクーラの風が、自転車を漕いで来たため汗だらけだった

俺の身体を優しく撫でて心地よく冷やしてくれる。

クーラの風はさらに俺の汗だらけの身体だけではなく、戸塚との完全アウトな妄想で

また大型ロケットに変形仕掛けていたマイ・ロケットも鎮めてくれた。

お陰で図書館の入口の隅に座り込み靴紐を結ぶフリをする必要が無くなり、

そのことに安堵しつつ、中学や高校の問題集が置いてある棚へと足を運ぶ。

棚の名札をチェックしながら歩き目的の棚を見つけると、求めている問題集を探して

見ることしばし。

「なんで高校生が中学の問題集が入った棚を見てるの？」みたいな、同じように棚を見て

いた

女子中学生たちのつき刺さるような視線に怯えながら、何とか目的の問題集を探し出す。

それを手に取ると空いてる席を探し館内を彷徨く俺を、ほんわかした声が呼び止める。

「あれ？ 比企谷くんじゃない！」

その声に振り向いた俺の目に映ったのは、お下げ髪に前髪をピンで留めつるりとしたおでこが可愛らしい美少女の姿。

「…………めぐり先輩じゃないですか。お久しぶりです」

そう俺の視線の先に立っていた美少女は、総武高の元生徒会長であるめぐり先輩だった。

先輩が今年の春に卒業し会わなくなってから、大体四ヶ月くらい経つだろう。

久しぶりにみた先輩は少し髪が伸びており、無地の白いノースリーブに

薄青色のプリーツスカートを合わせ、スカートの色に合わせたのか

同じ色の品の良い形をした髪留めを前髪にさしている。

見慣れていた制服姿はなくお淑やかな私服姿のめぐり先輩は妙に大人びて見えて

つついっ見惚れてしまう。いや、綺麗な人だと思っていたけど、これは……

そんな俺のぼつとし呆けた表情を見て、先輩はにぱつと微笑むと首を傾げ悪戯っぽい声でいう。

「どう、大人っぽく見える?」

「えつとその、すごく綺麗になりましたね」

思わず思ったままを何も考える事もしないままに口にすが

俺の答えは先輩のお気に召さなかったようだ。

「なんかその言い方だと、前は綺麗じゃなかったみたいじゃない!」

めぐり先輩はぶくつと頬を膨らませ拗ねたようにいうと、じとつと睨んでくる。

そんな仕草も先輩がすると、堪らなく愛らしく感じる。

どうやらめぐり先輩のめぐりん効果は更に強化されているらしい。

その主な効用のヒーリングとリラクゼーションによって、もし俺が今、

仮に死んでたとしても、多分余裕で蘇生されることだろう。

むしろ生きていたら天国に召されるくらいの心地よさである。

そんな、なんとというか気持ちがあんわかしてくる空気に包まれながら

「い、いや、そういう意味じゃ……」とへどもどしながら答えると、

めぐり先輩は「冗談だよー!」と笑ってぱたぱたと手を振る。

そして両手を後ろに組み、「褒めてくれてありがとう。えへへ」と

破壊力抜群の笑顔を投げてきた。

その仕草にくらつとしてしていると、先輩が俺の持っている問題集をチラチラ見ながら「比企谷くんは、お勉強？」と尋ねてくる。

勉強は勉強なのだが、高三にもなつてまさか中三の数学を勉強をするとも言えない。

「その、ちよつと調べ物をしに来ました」

誤魔化すと、先輩は「どれどれく私が教えられそうなものかな？」と言いつつ体を伸ばし

俺が手する問題集を覗き込んでくる。

慌てて問題集を自分の背中に隠すと、そんな怪しさ満点の俺の姿を見て

先輩はむむつとした表情を浮かべる。

「なんか怪しいな……」

先輩は呟くと、身体を右に左にびよこびよこ動かし覗き込もうとしてくる。

俺はその滅茶苦茶可愛いらしいアタックを左に右に躲しながら

ここは更に話題を変え誤魔化そうと、先輩の隙について口を開く。

「先輩は、今日は何用で図書館に？」

俺の問いかけに、先輩は残念そうに口をすぼめた。

「今日はね、午後の講義が休講したから、暇になって本読みにきたの。」

でもね、なかなか読みたいなって思うものが見つからないんだよね」

「どういう本を探してるんですか？」

尋ねると、先輩はにぱつと笑って応えてくれる。

「んー恋愛ものが読みたいかな、気分的に！」

そして首を傾げながら、俺を少々侮っている言葉を口にした。

「比企谷くんって、本を結構読む方なの？」

ぼっちを舐めてもらっては困るのだ。

ぼっちは自分の周囲にいる人間と会話しない分の補給として自分との対話

そう脳内トークをする事は周知の事実だと思う。

無論、脳内トークだけだと思われるのも心外。

例えば、千葉テレビのお天気コーナーを見てお天気お姉さんが

「台風が近づいていますので、外出の際にはご注意ください」と告げれば、

「はい、気を付けます！」と元氣よく答えるのは序の口。

他にも漫画や小説を読めば感情移入しまくって、俺はその世界ならば伝説の勇者だったり  
たり

犯罪組織のドンだったりするのだ。

まあそんなことは言えませぬね。なので無難に答えておく。

「や、まあ、それなりに読んでる方だと思えますけど……」

いうと、先輩はほーと感心混じりの声を出す。

そして、ぽんつと手を叩くと、一步こちらに踏み込んできた。

「じゃあさ、今から比企谷くんのお薦め読むから、付き合ってもらってよい？」

下から眺める、見上げるような視線を向けてくるので、俺は思わず頷いてしまう。

これ回避無理。これ断れる人いたら人間じゃないと思う。

「じゃあ、二人で一緒に探しに行こー」

俺の答えに、めぐり先輩はばあーと花咲くような笑顔でいうと、右手をえいっと挙げ文化祭や体育祭で見せたお馴染みのテンション高いコールをしてくる。

なので俺も苦笑しつつ、右手をあげ先輩のコールに応える。

そんなことをしていると当時の事を思い出し、なにやら懐かしい気持ちになっ  
てしま  
う。

そうして見た目は俺の知ってるめぐり先輩よりずっと大人びているのに、中身は俺の知っている

めぐり先輩のままなその姿に、自然と笑みがこぼれた。

×  
×  
×

四ヶ月ぶりに再会しためぐり先輩は、持ち前のお姉さん属性とほんわか効果を更にパワーアップさせており、そろそろ人間国宝に指定されても可笑しくないレベル。それにくらつとしながらも久しぶりに会えた嬉しさで、つい口元が綻んでしまう。そんな緩んだ顔を誤魔化すよう咳払いをし表情を整えると、小説や漫画の棚はどこだったかと周囲を見渡す。

「比企谷くん、こっつちだよ」

めぐり先輩はというと、俺の手首をその小さな手で掴む。

俺は慌てて自分の手を引っ込めようとしたのだが、めぐり先輩はそのまま歩き出してしまふ。

その手を無理に振りほどくのも気が引け、大人しくついていく事にした。

だが、年上のほんわかお姉さんに手を引かれるという並の男子ならご飯三杯は余裕でいける

夢のようなシチュエーションに、俺は動揺を隠しきれずにいた。

そして声の上擦るのをなんとか抑え、先輩に尋ねてみる。

「恋愛ものつて色んなのがありますけど、どういのが良いんですかね？」

俺の問いに、めぐり先輩は前を向いていた顔をこちらへ向けると

人差し指をびこびこしながら口を開く。

「んー、ちよつと悲しくなるような話が良いかなー。悲恋っていうのかな？」

ふむ。悲恋か……。その言葉に、俺は自分の過去の恋愛話でもしようかと口を開きかけるが

少し考え、話を聞いたためぐり先輩が悲しくなる前に話をしている俺のほうが悲しくなりそうなので辞める事した。

そして先輩の希望に合ったものをあれこれ思案していると、ほわつとした声が耳に届く。

「そうだな。例えばだけど、親の転勤とかで仲良く付き合っていた二人のうち

片方の子が転校しちゃって遠距離恋愛とか！」

「他にはね、私と比企谷くんみたいに先輩後輩の間柄で、それまでは同じ学校で会おうと



思えばいつでも会えていたのに、もう今までのように会えなくなちゃって悲しい、  
みたいなのも良いかも！」

ぴこぴこしてた指をピンと立て、にこやかな笑顔で先輩はいってくる。

その言葉に、俺はなんか自分とめぐり先輩が付き合っていて、

「前みたいに会えなくって寂しいの……」と言われた気分になっちゃってしまう。

そんな気持ちで頬に熱を感じていると、先輩は少し声の色を暗く落とす。

「でも、片方が死んじゃうみたいなお話は、あんまり好きじゃないんだけどね」

先輩はほしよと呟くと、しよぼんとした表情を浮かべる。

その言葉に俺も少なからず同意するところがあつたので思ったことを口にする。

「まあ片方死んじゃったら、もしかして最後にはまた会えて、みたいな展開も

期待できないですしね」

「そうそう。今は色々な理由で駄目でも、もう少し先にいけば上手くいくかも！」

そう思わせてくれるような、そういうお話が好きなんだよね」

先輩は落とした声を明るい声に戻すと、そういつてにはぱつと微笑む。

先輩の言葉に相槌を打ちつつ記憶をぎつと探ると、それに近い物語があつた事を思い

出す。

まあ半分なんだけど。

「先輩のそれに途中までなら合ってるのが、一つあるんですけど」

中途半端な俺の言葉に、先輩は不思議そうな表情で首を傾げる。

「えっと……、途中までなの？」

頷きながら、まあ変な勧め方だしなと思いつつ口を開く。

「秒速五センチメートルって八年くらい前に映画であつたの、先輩知ってますか？」

先輩は知らないといった感じで首を振るので、俺は話しを続ける。

「えっと、三部構成の話なんですけど、第一章の桜花抄っていうのが

多分、先輩の要望に合ってるかなって思うんです」

「桜花抄っていうと、桜の花の小さなお話って意味だよね？」

頷くと、先輩はどんなお話なの？ と興味深げに尋ねてきてくれた。

自分の好きなものを誰かに話すことに嬉しさを感じつつ、さらに話しを続ける。

「えっと、転校ばかりしていた小学四年生の男の子と女の子が同じ学校に転入するんです。」

そこで二人は出会つてとても仲良しになるんですけど中学校に進学するときに

また離れ離れになってしまうという話ですね」

いうと、先輩は身を乗り出しさらに興味深々な様子で、わくわくした子供のような表

情を

浮かべてくれる。

先輩のその顔を見やり、俺の声も弾んでしまう。やばい嬉しい。

そして、あまりネタバレにならないよう気を付けながらさわりだけ話すと

先輩は楽しげにうんうんと頷きながら口を開く。

「ところで何が、秒速五センチメートルなの？」

その言葉に、映画を見た後で猛烈に湧いてくるモヤモヤ感に耐え切れず漫画や小説も読んで知ったその理由を話せる事に、更に声が弾んでしまうのを感じる。

なので深呼吸をし気持ちいを落ち着かせてから、ゆつくりと声を出す。

「ヒロインの女の子が物語の冒頭で男の子に伝えた言葉なんです。

えっと、桜の花びらが舞い落ちる速度の事なんですけど」

「桜が……」

呟いて先輩は窓の外を見るが、季節は夏。

窓の外に見えるのは、桜ではなく紫陽花の花だった。

でも、先輩のその仕草がとても嬉しい。

その真意を知った当時の俺は、どうしても誰かに伝えたいと思い、隣の席に座るクラスメイトにその事を話したら、そいつは携帯いじりながらこっちも見ずに

「へー」としか言わなかったもんな……。

嫌な記憶を思い出し、ため息がこぼれそうになる。

そしてそんな風に俺の話を小うるさい雑音のように扱わずいてくれる先輩へ感謝の気持ちが湧いてくる。

「女の子は照れ隠しで遠回しに伝えたんですけど、本当の意味は……」

そこまでいうと一旦言葉を切る。本当に良いセリフだと思つたのだ。

なので先輩に少しでもその雰囲気伝えたいと思ひ、映画の中で主人公の貴樹くんにそれを告げた明里ちゃんの気持ちになつて、素敵だと感じたその言葉を口にする。

「今二人で見上げているこの桜の花が舞い落ちる速さのように、

あなたと時間を掛けて、少しずつゆっくりと確実に結びつきたいです」

「そんな愛の告白だったみたいで、ちよつと切ない感じのお話なんですけど」

すると俺の言葉に、目を睜つて驚いたような表情をしためぐり先輩は、

かーつと頬を染め耳まで赤くしながら俯いてしまう。

「なんか、なんかね。私が比企谷くんに告白された気分になちやつたよ……」

先輩はごによごによした声で言うのと、空いている左の手を団扇かわりに

赤く染まつた頬を冷ますよう顔の前でパタパタし始める。

どうやら俺の乙女パワーがフルバーストしてしまつたようだ。

だが俺は先輩チヨロインと思うどころか先輩のその言葉と仕草に

先輩と同じよう耳まで赤くなってしまふ。

それを見られないよう俯くと、視線の先で先輩の小さな手に掴まれている自分の手が見え、

さらに顔が赤くなるのが分かる。

顔はそのまま目線だけ上げ先輩を見ると、先輩も同じように自分の手で掴んでいる俺の手を見ていた。

そして俺もそれを見ている事に気が付いた先輩がはつとした様子で視線を上げると俺たちは見つめ合う形になり、気恥ずかしさで互いにそつと目を逸らす。

多分時間にして三十秒もそうしていなかったと思う。

だが俺にはえらく時間が過ぎたように感じられ酩酊したような、そんなふわふわした気持ちになってしまふ。

と、そこへ俺の名前を呼ぶ先輩の声が聞こえた。

「比企谷くん。そのお話、私も読んでみたいかも……」

先輩は頬を薄く染めたまま俺の耳元にそつと口を寄せるとくすぐったい声でそう囁いてくれた。

## 欲しかった言葉

めぐり先輩がくすぐったく囁いた言葉に、俺は手遅れを絵に書いたような足元が覚束ないふらふら状態になってしまう。

なんとか気を取り直すと、先輩と二人で小説や漫画の置いてある棚を見て回ることにした。

そうして今、探し出した棚を二人で眺めているのだが、先輩はここにくる時もここに来てからも、俺の手を離そうとせず掴んだままなのだ。

その小さな手から伝わる温かな感触と先ほどの楽しいやり取りの相乗効果で、俺は今、下手に

空を見上げたら死兆星が見えても可笑しくなくらい、ほんわかした気分になってしまふ。

そうやって二人で棚を見ていくと、先輩が小声で「懐かしいー……」と呟くので調べていた棚から先輩がその手に持っている単行本へと視線を向ける。

先輩の手に収まっているのは、同じ小学館から生まれた「ガガガ文庫」と同じ、青と白の

イカしたカラーリングを持つ猫型ロボットでお馴染みのドラえもんの単行本のようだ。

先輩の慈しむような表情を見て「好きなんですか？ ドラえもん」と尋ねてみる。

俺の問いかけに先輩は明るく弾んだ声で答えてくれた。

「うんうん。小さい頃に読んで大好きだったの！」

うちにもドラちゃんが出来てくれないかなーって思ってたんだよ！」

先輩はというと、単行本のページをパラパラと捲りながら小声でドラえもんのうた

(山野さと子Ver)を可愛い声で口ずさむ。

その先輩の横顔を見ながら俺はふと、自分が先輩に向かってドラえもんのうた

(山野さと子Ver)を歌ったらどうなるかを考える。

俺は決して体格の良い方ではないが、それでも小柄で華奢な先輩よりは

充分に大柄な方だと思う。そんな自分が先輩に

「こんなこといいな できたらいいな あんな夢 こんな夢 いっぱいあるけど♪」

などと歌いながら腐った目で近づいたら、それは単なる犯罪宣言となり

先輩を恐怖のどん底に叩き落としてしまうかも知れない。

思いつつ、もしそうした場合の事も考える。ぼっちはあらゆる可能性を考慮するのだ。

思考を加速させバーストリンク寸前まで自分の妄想力を掻き立てる。

すると、先輩の悲鳴で集まった館内の人たちに自分がボコボコにされとつ捕まり、パトカーに乗せられていくシーンが思い浮かび、その妄想に俺が悶絶していると「ドラちゃんつてさ、色んな未来の道具持つてて、それを使つてみんなでトラブルを解決していくじゃない？　そういうのいいなーつて思つてたんだよね」

先輩はキラキラした瞳で告げてくる。その清らかな穢れのない瞳にくらつとしながら  
らも

「先輩なら、どんな道具が欲しいですか？」と尋ねてみる。

俺の言葉に、先輩はうんむーと気難しげな表情を浮かべる。

いや、そんな真剣に考えられても……。あげれないよ？　俺ドラえもんじゃないし  
などと思つていたら、先輩は真面目な面持ちで図書館の天井を見つめながら

「んー、まずタケコプター？　あとは……」と、あれこれお悩みのご様子。

その言葉を聞いた瞬間、俺は先輩が万が一にも危険な目に合わないよう、この事はき  
ちんと

伝えなくてはと思い、表情を引き締め口調も真剣なものにする。

「いいですか、めぐり先輩。タケコプターとか正気の沙汰とは思えない道具ですよ。

あんなので空に浮いたら自分自身の身体の重さが首吊りと同じ頸椎に掛かつて



何処かに飛んで行く前に、あの世へ飛んでいってしまいます」

俺の真剣な表情と口調、そして話している内容に、先輩はびっくりしたような表情で浮かべているが、まだまだ話は序の口なのでさらに話を続ける。

「他にもあります。それ以前にですよ？」

タケコプターが一体全体どういう仕組みで頭に設置されているのか気になりませんか？

ドラえもんならある意味スキンヘッドだから良いですけど、他のメンバーはあれで抜け毛とかが酷くなったらどうするのだろうと思うんです」

「そういう視点でドラえもん一味を見ると、奴らは本当は未来からの使者などでは無くアデランスの回し者なのかも知れない……。俺はそう考えるんですよ」

小さい頃の小町に良くやったように、幼い子供に危ないことを伝える気持ちで

囁んで含めるよう言ったのだが、先輩は顔を両手で覆ってしやがみこんでしまい肩をプルプルと震わせ始める。

その姿に俺が余りにも厳しい真実を語ってしまったから先輩がショックを受けているのかと

心配していると

「ひ…、ひき…、比企谷くん、さすがそれはないよー！」

そんな弾けた笑顔を見せられたら俺の心が弾けてしまいます！　と言いたくなるくらい

素敵な笑顔を見せてくれた。

その先輩の微笑みに、自分の心が暖かく満たされていくのを感じたからか  
普段の俺なら絶対しないような事をしてしまう。

先輩が立ち上がりやすいように思わず手を差し出してしまい  
はっと気付いてその手をポケットにしまおうとする。

だがしまうより早く、先輩は俺の手を両手でぎゅつと掴み立ち上がると、ふわつとした声でいう。

「もっと早く比企谷くんと、こんな風にお話したかったなー！」

俺が誰かに、ずつといつて欲しかった言葉を、生まれて初めて伝えてくれたので  
目が涙で滲みそうになる。

それをなんとか誤魔化しながら、上擦った声で応える。

「文化祭も体育祭もトラブルばかりで、忙しいばかりでしたもんね」

「でもそれで比企谷くんと知りあえたんだもん。私は嬉しいよ？」

ほんと勘弁して欲しい。そんなこと言われたら、嬉しくって泣いちやうぞ、俺。

ああ、もう手遅れですね。ほんとまいったわ。

自分で自分を茶化しても、誤魔化せないほど目が滲む。

そんな滲んだ瞳を見られないよう、柵に目をやる

すると柵の上の方に、一卷だけが秒速の単行本を見つけてきた。

それを手に取ってめぐり先輩に手渡すと笑顔でお礼をいわれ

その笑顔に俺の心はひどく掻き乱されてしまう。

そんな感情に全く慣れていない俺は先輩にさよならの挨拶を掠れた声ですると

先輩の言葉を待たずにその場を離れた。

そうして俺は空いている席を見つけると、椅子を引いて腰を降ろす。

ため息に似た吐息をつき鞆から筆記用具を取り出しながら、先輩に失礼な態度を

とってしまった事に悔やみむ気持ちで胸が痛くなるのを感じてしまう。

でもあの場にあのままいたら、もっと後で悔やむような事をしてしまいそうだった、

そう思っていると

「もく、比企谷くーん？　なんで先にいちやうの！」

ぷくつと頬を膨らませて拗ねた口調の、それでもほんわかした空気は忘れない。

めぐり先輩が俺のすぐ後ろに立っていた。

× × ×

めぐり先輩が普段オートで発動している彼女の周囲三十メートルへの範囲攻撃である

「ほんわかめぐりんフィールド」ではなく、ぶくつと頬を膨らませて拗ねた口調での指向性を高め単体攻撃力を極限まで上昇させた「めぐりん砲」の直撃をうけた俺。

その「めぐりん砲」の破壊力にタジタジになりながらも俺的にはすでにさよならした気分であったのにすぐさま再び現れた先輩に驚いてしまう。

それで、へどもどしながら「ど、どうしたんですか？ 先輩」と尋ねてみる。

俺の言葉に、先輩はさらにくくつ頬を膨らます。

「どうしたもこうしたも、ボソボソなんか言つて、

急に走って何処かいちゃったのは比企谷くんじゃんー！」

先輩は言うど、隣の空いている席に腰を降ろし、唇を尖らせると俺をジト目で見つめてくる。

でもほんわか、不思議！

どうやら俺のさよならの言葉は上手く伝わっていなかったようだ。

これはあれだな。録音した自分の声を聞くと思っていたよりもずつと声が低く聞き取りづらくてびっくりしたのと同じなのかもしれない。

思いつつ、慌てた俺は「すいません、こう、なんかちよと」とよくわからん謝罪する。それでも気持ちは伝わったようだ。

先輩はいつものほんわかした笑顔を浮かべてくれ「もうダメだよ。メッ！」というどぴつと指を伸ばし俺のおでこを軽くつつんとつついてきた。

俺は脳波をかなり怪しくさせつつも、先輩が謝罪を受け入れてくれたことにほっと安堵の吐息をついてしまう。

そんなふらふらしている俺を見て先輩はふふふんつと得意げな笑みを見せると秒速の単行本を手に取り表紙をこちらへ向ける。

「じゃあ読みますね！」

先輩の声に俺も「はいどうぞ！」と元気に返事を返してしまい、それになつこりと微笑んだ先輩の笑顔はとても眩しく、思わず顔を逸らしてしまう。

そうして先輩は「では……」の一声の後、漫画版「秒速五センチメートル」を小さな鼻歌混じりで読み始める。

隣に座る俺は先輩がページを捲る音に耳を傾けながら、問題集の問題を次から次へと解き始めるのだった。

しかし、俺は自分が勧めたモノを先輩が読んでどんな反応をするのかどうしても気になつてしまい

初めて彼氏に手料理を食べてもらう乙女のような気持ちでソワソワしてしまう。

それで先輩の様子を横目でちらちら伺っていると、先輩は目次をすつと確認しゆつくりページを捲っていく。

貴樹と明里の図書館での初めての会話から、少しずつ距離を詰めていく二人の描写が  
続き

やがて映画の冒頭のシーンを描いたページをひらく。

そのページを見た先輩は視線は本の誌面に向けたまま、俺の袖口を軽く引つ張り気を引くと

周囲に迷惑にならないように気を使っているのか、内緒話をするよう呟く。

「明里ちゃん。貴樹くんに告白して恥ずかしくなつて、走つて逃げちゃつたのかな？」

「俺も多分、そうだろうなと思つて読んでましたよ。可愛らしいですよね」

俺も先輩の声に合わせて小声で返す。

「だよね！　だよね！」

俺の返しにめぐり先輩は弾んだ声での可愛いお返事をしてくれる。

出だしは好調のようだ。安心した俺は自分のやるべき事に集中しだす。

だがその後も先輩は、ページを捲り語が進むたびに「ああ……雪が」とか「うう……電車が」とか

「くう……手紙が」など、俺の袖を摘んでグイグイと引つ張り呟く

なので俺はそのたびに「積もりそうですね」とか「止まっちゃいましたね」とか「飛んでちゃいましたね」など律儀に返事を返していた。

そうして映画だと、オリジナルサウンド「雪の駅」の旋律が静かに流れるシーンを描いた

ページを目にした先輩は、ぼわつとした笑顔を浮かべる。

うむ、そのシーンいいよね！　胸がきゅんきゅんしちゃいます。などと思っていると先輩は先ほどまでの遠慮がちな力とは違って急にもの凄い力で袖を引つ張るので俺は椅子の上から転げ落ちそうになる。

慌てて姿勢を立て直し、俺を椅子から転落死させようと企てたためぐり先輩を見ると先輩は「明里ちゃん待っててくれたよ！　比企谷くん」と瞳をウルウルさせながら

感極まれりな表情でいつてくる。

「良かったですよ、待っててくれて」

そんな大変お気に召した様子の先輩の姿を見て、俺は嬉しくなってしまう。

俺は今までただの一度も、家族以外の他の誰ともこんな風に

目にした物語を一緒に共感したりする事が出来なかつたのだ。

なので先輩に答える声は、自分でも驚くくらい優しかった。

そうして先輩はさらに物語を読み進め、次の日の朝、駅のホームでのお別れシーンも

読み終わると満足気な吐息を漏らす。

先輩はしばらく電車が走り去るシーンを感慨深げに眺めていたが、物語にまだ続きが

ある事に気づいたようだ。

それは漫画版にしかない、another side。

一巻の最後にそつと三ページ挿入されている高校生になった明里の話。

離れ離れになった二人はその後暫く手紙のやり取りをしていたが、いつしかそのや

り取りも

途絶えてしまっていた頃、明里はとある男子に告白される。

「返事、待ってくれないかな」と答える明里は貴樹に手紙を書くこうとする。

だが、書ききれない。



「貴樹くん。ここには貴樹くんがいません」

そう記された文章を先輩は切なそうな瞳で見つめる。

「貴樹くん、好きな人はいますか？ 私知らない場所で何を思っていますか？」

私たちはもう思い出なんでしょうか」

それを読み終え、読了した先輩は小さくため息をつく。

分かります。モヤモヤしますよね。

そして先輩は横目でチラチラ伺っていた俺の視線に気が付くと、

少し疲れた感じの微笑みを浮かべる。

「比企谷くん、少し休憩しない？」

俺も疲れていたので渡りに船とばかりに頷くと、二人で椅子を引いて立ち上がり図書館の休憩所へと向かった。

×  
×  
×

休憩所に入った俺たちは設置されている自動販売機で飲み物を購入しようとして先に並んでいた親子連れの後ろに並ぶ。

買い終えた親子にお待たせしましたと会釈され、お返しに頭を下げた俺は自動販売機に硬貨を入れ、マックスコーヒーを購入する。

缶を取り出しながら、俺の勧めた物語を思つてた以上に楽しげに読んでくれた先輩へ何かしらのお礼をしたいなと思ひ付く。

それで、後ろでお財布を持つて自分の番を待つていた先輩に声をかける。

「おごりますよ、めぐり先輩」

「いやいや悪いよ。自分の分は自分で払うよ！」

俺の言葉にめぐり先輩は慌てたように遠慮するので、頭をがしがし掻きながら「いや……、なんか俺のためにも、おごらせてください」と口にする。

俺の言葉に、先輩は不思議そうに口をぽかーんと開けていた。

まあ何いつてるかわからないだろうな……：そう思つていと

「ありがとう比企谷くん。じゃあ紅茶貰おうかな」と、

先輩は戸惑つたような表情で遠慮がちに言つてくれた。

その言葉に笑顔を返し、自動販売機に硬貨を入れ、俺が指差し先輩が頷いた紅茶のポ

タンを押す。

そして販売機の取り出し口に落ちてきた紅茶の缶を拾ってその手に手渡すと先輩は嬉しそうに微笑んでくれた。

百円ちよつとでこの笑顔を見れるなら、安いものである。

そんなこんなで休憩所のソファに二人で腰を降ろすと、飲み物で喉を潤しながら先輩が語ってくれる桜花抄の感想に耳を傾ける。

自分の感想を話し終えた先輩に、俺が読んだときどう感じたのかと問われ先輩が読んだのはまだ物語の半分だと断りを入れてから感想を口にする。

「多分ですけど、大恋愛のトラウマをいかに乗り越えるかが主題なのかなと思いました。今を生きるってことが大事。これがテーマかなと」

初めて「秒速」を読んだときの記憶を思い起こしながら先輩に伝える。

そして先輩に自分の感想を伝えながらも、自分自身が過去の恋愛とも呼べない只の一方通行の片想いのトラウマを今でも全然乗り越えていない事に気付く。

去年の冬、葉山や折本たち四人で千葉に出掛けたとき、始まってもしなかったものをきちんと終わらせることが出来たと思っていたのに、今でもやっぱりそれに縛られている。

それで少し自嘲的な気分になっていると先輩の声が耳に届いた。

「まだお話の続きがあるんだよね？」

「さっきので大体ですけど物語の半分くらいです。」

それでこの後は、種子島に転校した貴樹の高校時代の話になりますよ」

そう俺が口にしたとき、やけに明るい声が耳に聞こえた。

「あれー、セーんぱいつ 奇遇じゃないですかー！」

聞き覚えのあるその声の方へ視線を向けると、きやるんとした可愛らしい笑顔を浮かべた

一色の姿が見えた。

## そうしておけば

図書館の休憩所で、俺とめぐり先輩に声をかけてきた一色はにこやかな笑顔を浮かべ手を振ってくる。

その姿を見て一色も図書館に来てたのかと思ひ、視線を顔にやると俺を見る目が異様に冷たいことに気づき、思わず身構えてしまう。

そんな俺の気持ちを知ってか知らずか、一色は俺と先輩の傍に流れるような足捌きであつという間に近づくと、俺たちの間に割り込むよう背の低いソファアに座る俺の真ん前に立ちふさがる。

その事で俺の視界は短めのスカートからスラリと伸びる一色の白く柔らかかそうな裏太ももに

覆い尽くされてしまった。

目の前に突如現れたきつと夢の国でお馴染みのネズミの国でも用意することが不可能と

思われる素晴らしい光景に、思わず見入ってしまう。

そんな三分で千円は取れそうな映像に見とれながらも、そこは冷静さで人後に落ちな

い俺である。

この時も冷静にアニメならそろそろ大量に湧き上がる湯気が仕事して隠すか、どこからともなく

黒い○が現れてその白く柔らかそうな裏太ももを隠しても可笑しくない状態だと考  
える。

ただ放送時間によつてはもう少しいけそうだと思いつつも、さすがに目のやり場に困  
り

ソファアーの上、座ったまま一色を避けるよう横に滑りながら移動することにした。

しかしそんな俺を嘲笑うよう、一色はめぐり先輩とにこやかに挨拶を交わしながらも  
俺の動きに合わせ身体をこまめにスライドさせ、右に左に逃げようとする俺の行く手  
を

左に右に遮るのだ。

そして焦る俺の目の前で、一色の動きに合わせてスカートがひらとはためくと

視線は思いもよらず誘導され、おかげで動きが鈍ってしまふ。

すると一色は、それまでの横の動きにさらに前後の動きを取り入れるというテクニカ  
ルな

要素を加え、鞆でお尻を隠しつつも少しずつ後ろに下がってきて、俺が身動きするこ

と

すら完全にふさいでしまう。

このままではこのお話もR—18指定していないため、放送倫理・番組向上機構（BPO）に

通報され、放送時間が変更になった「妹ちよ。」のようになってしまう……

そう考え戸惑う俺の目の前で一色はこちらにくるつとターンする。

「先輩は数学のお勉強ですかー？」

頭上から降ってくる一色のふわつとした声。

そしてここからが本番！　といわんばかりに目の前に広がる一色の白い太もも。

今度は一分で五千円は余裕で取れる素晴らしい映像である。

しかし、あまりにピンクな光景に目のやり場に更に困った俺は、視線を上、

一色の顔に向けてみることにした。

すると視界に映ったその顔は明るい笑顔なのに目だけは異常に迫力があり

「お前、数学で0点取ってること忘れて、女の子と遊んでるとかいい身分だな！」

と訴えられたような気持ちになってしまう。

視線をどの方向へ向けても迫力ある映像が俺を捉えて離さず、いうならば

「いろはTHE MOVIE」状態である。

そんなドラクエでいえばメダパニ状態の俺に

「比企谷くん、さつきまで一生懸命勉強してたよ！今はね、二人で休憩してるの」

と、先輩の優しいフオローが入り、そのおかげで「メダパニも解除されほつとする」

すると一色は、その目の迫力を抑えめぐり先輩の方へ向き直ると

なんの話をしていったのか先輩に尋ねだす。

「比企谷くんね、すごく良いお話を教えてもらって読んでみたの。」

それで、それを読んだ感想を比企谷くんに聞いてもらってたんだよ！」

それに応えた先輩の声に、一色はなるほどなるほどと頷くと、俺の方へ姿勢をかえた

のだが

こちらを向いたその表情は暗く、なにやらもの言いたげな目をしていた。

「せんばい。どんなお話なんですか？」

その目に浮かんだ色に驚きながら、求められた説明に俺も悩む。

何故なら漫画版を読まず、映画の「秒速五センチメートル」だけをトータルで見ると、

「初恋の女の子を忘れられず、ずーとウジウジしている男の半生」という身も蓋もない

感想しか思い浮かばないからだ。

そのどろろが良いか聞かれても言葉に詰まってしまふ。

なので視点を変え自分が他に他人にお勧めできそうな物の良いところから、秒速の新



たな

切り口を探し出し勧めるポイントを探すために、「秒速」と同じく円盤を買った作品である

「魔法少女まどか☆マギカ」を思い浮かべてみる。

こちらは大変よく出来てる作品なのだ。

だが、よくよく見直してみるとその内容には首を傾げるところも多い。

魔法少女まどか☆マギカ。

それは魔法少女取り扱いマニュアルを敏腕営業マン「キュウベえ」から、重大事項やデメリットなどリスクについての詳細を全く聞かずに、その場の勢いで契約を結んだ中学生の女の子たちのお話。

に だが少女たちは思っていたような仕様ではない、商品名「魔法少女スタート・キット」

不満を覚え、宇宙規模の販売ネットワークを誇る魔法少女総合サービス会社

「There is no emotion」にクーリングオフを訴える。

しかしそれは、あえなく却下されてしまう。

少女たちはその怒りから、手に入れた魔法少女の力と手に持った様々な武器を駆使しキュウベえを蜂の巣にしたりボコボコにして鬱憤を晴らしつつ「There is

の企業努力を水の泡にさせ、倒産に追い込もうとする。

そういうお話なのである。

きちんと説明しようとするほど、その魅力から遠ざかっていく事に気が付きウンウン唸って悩んでいると

「遠距離恋愛中の男の子が、電車に乗って彼女に会いにくお話だよ」

と、またしてもめぐり先輩の優しいフオローが入り、一色はふむふむと頷く。

「でもね私が読んだのはまだ半分なんだ。それでその後どうなるのか

いま比企谷くんに聞いてたんだよ、一色さん」

楽しそうに語るめぐり先輩を見て、「先輩。私も読んでみたいですよ」と

一色は言うのと、俺の袖をきゅつと指先で掴みだす。

そして妙に切羽詰ったような目でじっと見つめてくる。

「わかった。明日学校に漫画の上下巻もってくから……」

「じゃあ明日のお昼に、先輩がご飯食べてるベンチに顔を出しますね」

どうしたの、この子……と思いつつ答えると、一色はそういつてにはっと笑う。

それで俺はなんとはなしにほつとする。

取り繕うよう咳払いをして、俺たちのやり取りを微笑んで眺めていためぐり先輩に声

をかける。

「アニメなんですけどDVDとBlu-rayがあるんで、よかつたら貸しましょうか？」

あれだけ楽しんでくれた先輩なら、きっと映画の方も気に入ってもらえると思ったからだ。

「なら今度の日曜日、私の家にみんなで集まって一緒に見ない？」

先輩は両手をぽんつと叩き、良いこと思いついたー！　な笑みを浮かべ

俺と一色へ交互に視線を向けてくる。

先輩からの素敵すぎる提案。

年上のほんわかお姉さんの家にお邪魔する気恥ずかしさはあるのだが、

それでもそのお誘いに胸が躍るのを感じてしまう。

いや、なんか恥ずかしい気も……。でも、先輩の部屋とか見てみたいかも……。

そんな胸がキュンキュンしている俺の隣で、一色は俺がめぐり先輩の家に行く事の危

険性を

身振り手振りを交えながら先輩に切実に訴えていた。こいつは……

その物凄い勢いに困惑しているめぐり先輩を助けるためと、俺の安全性の証明のため一色に声をかける。

「じゃあどうすんだよ？」

口元をひくひく引きつらせ、声に刺を含ませて問いかけると

一色はうむーと腕を組んで考えだす。

待つことしばし。

一色は難しい顔をしていたが、なにやら思いついたように俺の肩をぽんと叩いた。

×  
×  
×

「先輩の家に、みんなで集合しましょう！」

俺の肩に手を置きそう提案した一色が浮かべている表情は「謎は全て解けた！」と格好良くポーズをとって告げる金田一少年のように良い笑顔である。

もしくは、「真実はいつもひとつー」とちびっこ仲間たちに告げてニヤリとする名探偵コナンくんのような良い笑顔でもある。

そんな一色を見て「何も解けてねーよ！」と反対しかけたが、もし反対する理由を聞かれたら、なんと答えれば良いのか困ってしまふ事に気づく。

まさか女の子が家に来るのは恥ずかしいとか自意識過剰丸出しだしな……と悩みその提案について、うーんと唸って考えてみる。

しかし悩み苦しむ俺の脳裏にはコナンくんってよくよく考えてみれば黒服の奴らに変なお薬打たれる前は、確か高校生だったことが思い浮かぶ。

なので実は俺と同じ高校生が自分の半分くらいしか生きてない小学生キッズたちに、己の知性を自慢げにひけらかせてるんだよなという、しょーもない考えに囚われてしまふ。

囚われついでにもう少し思案を進めると、事件の真相に気付き犯人が誰だかわかったコナンくんは周囲にいる大人たちに麻酔針をぶち込み強制的に眠らせると、腹話術の人形のように扱ひ事件の真相を自分の代わりに語りさせていたことに思い至る。

真相を解いたお手柄を他人に譲る謙虚な性格ともいえなくもないが、どんな理由があつたとしても、薬物中毒にされる大人たちからしたらたまたまもんじゃないと思

さらに言えば、コナンくんは警視庁の配布する「薬物防止キャンペーンポスター」にマスコットキャラクターとして採用され活躍しているのだ。

しかしちよつと待つて欲しい。

周囲にいる大人たちを自分の都合で薬物中毒にしている彼をマスコットキャラクターとして

扱うのは、いくらなんでも社会常識や一般良識に欠ける判断だと思わないか？

コナンくんみたいにするな、なるな、とても伝えたいのだろうか。

考えれば考えるほどあらぬ方向に飛んでいってしまう自分の思考に、これはいかんと頭を振り気を取り直すと、一色の提案に集中することにした。

すると、めぐり先輩の提案そのままにアウェイ感満載の先輩の家に俺が行くよりはホームそのままの俺の家に二人が来てくれた方がまだ動揺し挙動不審にならずに済むかも知れない。そう考えると一色の提案は意外に名案に思えてくる。

思ったが、それだとめぐり先輩の提案を断る形になるのでそれも失礼かと思いき先輩に俺の家でも良いのか確認してみることにした。

「めぐり先輩。ウチでもいいですか？」

「う、うん。いいよー」

俺が言葉に、先輩は一色のマシンガントークで撃ち抜かれ穴だらけにされ

フラフラしながらであったが、にっこり微笑み了承してくれた。

そうして話し合った結果、今度の日曜に近所の駅で待ち合わせをしてそこから三人で俺の家の向かうというところで話が決まった。

話が決まると、一色は満面の笑みで俺の肩をポンポンと軽く叩きながら「比企谷くん。やっとわかってくれて僕は本当に嬉しいよ」みたいな感じで

俺をまるで物分りが悪い部下のように優しい瞳で見つめてくる。

そんな一色を、お前は俺の上司かよ……と思いつつとした目で見ていると一色とめぐり先輩は楽しげに話し出す。

「先輩のご両親にも会えるから、今から楽しみですよ！」

「あ、そうだね。私も比企谷くんのご両親、見てみたいかも！」

二人の言葉に俺は思わず動揺してしまう。

そうか、誰かが家に来るなんて滅多にないので気がつかなかったが、自分の家族を知り合いに見られるのはなんだかすごく恥ずかしい気もする。

母親や小町ならまだしも、親父がなあ……と思っている

「妹さんには、奉仕部の部室で何度かお会いしたことはあるんですよ！」

「比企谷くんって妹さんいるんだ？」

「います。先輩と違って愛想も良くってすごく可愛い子ですよ！」

などと、なぜか一色が胸を張って自慢げにめぐり先輩にいう。

一色、なぜお前が誇らしげなんだ……思いつつも、可愛い小町が褒められ嬉しい気持ちも湧いてくる。

でも、俺と違つてとか言う必要ないよね？　と思つていると

「あーでも、比企谷くん。頼りになるし、お兄ちゃんっぽいよね！」

めぐり先輩は微笑みながら、うんうんと頷いてくれた。

年上のお姉さんに頼りになると言われ、俺がほんわかしていると

「まあ小町さんの方が先輩より、ずつーと、しつかりしてるんですけどねー」

などと、小町を褒めながら俺を貶してくる一色。なんなのこの子……

恨みをこめてじつとした視線を一色に送るが、一色は俺のことはお構いなしに

めぐり先輩と生徒会のことについてあれこれ話し出す。

ごく自然に会話から弾き出された俺は、ドラクエでいうところのはぐれメタルな気分  
で

最近あつた生徒会の出来事で楽しげに話す二人をぼんやり眺めていた。

そこに閉館一時間前を告げる館内放送が流れたので、電車通学の一色のことを考慮し  
帰りが遅くならないよう、俺たちはそれぞれが使っていた席に戻って帰りの支度を  
済ませると建物の外へとでる。



外に出ると日も落ちてもう大分薄暗く、風で運ばれてきた雨雲が広がる空の下。

図書館の駐車を三人で連れ立って歩きながら、日曜日の約束の確認をすると、俺は連絡先を互いに知らない先輩と携帯のアドレスを交換することにした。

そうしてアドレスの交換を終えると、先輩は嬉しそうに携帯を眺めながらぼしょつと眩く。

「お父さんとか生徒会のメンバーみたいな関係じゃない男の子と

アドレスの交換したの初めてだよ」

その言葉に、なにやら照れくささを感じ口籠っている

先輩は上目遣いで俺を見上げてくる。

そして悪戯っぽい表情を浮かべると、携帯の画面を俺の目の前にひよいと突き出し  
明るく弾んだ声でいう。

「比企谷くんのアドレス、げつとー!」

にんまりと笑いながら、可愛すぎる仕草でなんかもの凄い爆弾を投げてきた。

先輩のそれに、俺はハリウッドのSF映画並みに脳内で大爆発を起こし

はいとかですわねとかこちらこそとへどもどしながら返事を返す。

そんな俺たちをしらつとした目で見ていた一色が、げんなりした感じで声を出す。

「せーんぱい。もう暗いから早く帰りますよー」

それに頷きを返し、家がすぐ近所だという先輩とさよならの挨拶を交わすと駅までの道を一色と二人で歩き出す。

図書館から駅まで向かう道は住宅街で人気もなく、夜に近づくとつれ風が出てきたのか

外を歩いていても湿気や熱気をあまり感じない。

狭い歩道を一色に譲って、自転車を押しながら車道の隅を歩いていると

一色がとても平坦な声を出す。

「先輩。今日はすごい楽しそうでしたよね」

その感情の色が抜け落ちたような声に俺はぎよつとしてしまう。

ちろつと視線を向けると一色は前を向いたままなので、なんでもないフリをして答える。

「そーか？」

「ええ、先輩のあんなに楽しそうな笑顔。初めて見ました。」

先輩って普段、口元だけで笑うじゃないですか」

「そ、そうか？」

上ずった声で返しながら、自分の笑顔を鏡とかで確認したことがなかった俺は

そのことについて考えてしまう。

「ええ、ニヤツとかニヤリみたいな、いやらしい感じで」

一色は横目でちろつとこちらを見て、口元に笑みを浮かべながら言ってくる。

「お、おう」と返すが、俺は自分がそんな目で見られていたことに少しショックを受けていた。

俺、そんないやらしい笑い方してるのか、ニヒルだと思ってたんだが……と、思っている。

一色は視線を前に戻し、ぽしよつと呟く。

「なの今日は、目元まで綻ばせて顔いっぱい笑ってましたよ」

「てかお前、いつから見えたんだよ……」

気になって尋ねてみる。一色は道路に視線を落とし、乾いた声をだす。

「先輩が図書館に入ってきた時からですよ。生徒会いま暇で自由参加なんです。

なのでちよつと調べ物をしに、学校終わってすぐに図書館に来てたんですけど」

普段使わない棚の場所を確認するのに案内を見てたんです」

「それなら図書館に入ってくる先輩を見かけたんで声をかけようかなって思ったら、

先輩、入口でモジモジしてるから不思議に思っただけで見てたんです」

その言葉に俺の背中に冷たい汗が流れる。

あ、あぶねえ……。

戸塚のときはベンチに座っていたから、座っているのに立っているマイ・ロケットを上誤魔化すことが出来たけど、立っているのに立っている状態だと、人目を避けるのは

至難の業だもんな……

「それなら私をかける前に城廻先輩が先に声をかけたんで、タイミング逃しちゃって……」

一色は言うど、薄く溜息をつく。

「それで仲良さそうに二人で話しているから、もしかして待ち合わせでもしてたのになって

思っ見てたら、手を繋いで歩き出したから余計に声かけづらくなちゃって……

それで二人の様子を遠くから、ずっと観察してたんです」

そんなところから見られていた事に恥ずかしくなってしまう。

ならどうしてあんな中途半端なところで話しかけてきたのか気になって、上ずった声を押し出す。

「なんだよ、俺もめぐり先輩も一色とは知り合いなんだから、声かければいいだろう」

「そうですね。そうしておけば良かったなって、今は思ってます」

街灯の明かりで大きく伸びた自分の影を見つめながら一色は呟く。

その声にはなにやら悔やむようなそんな色が見え、それで俺は一色を見やってしま  
う。

一色はそれに気付くと、薄い微笑みを浮かべる。

「“そうしておけば” は “そうしておけば” ですよ、先輩」  
暗くなった町並みをその瞳に映しながら、一色は沈んだ口調で呟いた。

## 雨が止むまで

降るかどうか迷っているような雨雲が広がる空の下。

一色の言葉に返す言葉が見つからず、一色もその後は何も言わずにいたので互いに無言のまま駅への道を空の雨雲から逃げるよう足早に歩く。

だが途中で追いつかれ、俺たち二人に追いついた雨雲はそれまでの逡巡をなくしアスファルトの地面に雨滴を落とすと、ポツリポツリと黒い染みを作り始める。

そして最初は弱かった雨も徐々に強くなり、黒い染みは瞬く間に地面のすべてを覆い尽くす。

強く降り出した雨を避けるため、近くのマンションの非常階段に走り込んで雨宿りをし

そこで俺と一色は二人、雨空を見上げる。

「たぶん通り雨だと思うんで、しばらく雨宿りしていきましょう」

一色の言葉に頷くと、また雨空を見上げ薄く溜息をこぼす。

そして今朝の天気予報でお天気お姉さんが告げていた「お出かけの際は傘を忘れずに」という

言い付けを守らず、傘も持たずに外へ出ていたことを後悔してしまう。

隣で同じように雨空を見上げている一色も言い付けを守らなかつたようだ。

仕方なく鞆を傘がわりにしてコンビニへ傘を買いにいかうとした俺に

彼女が掛けてきたのが今の言葉である。

そうして暫く、空から落ちてくる雨を眺め、地面を打つ水の音に耳を澄ましていると

一色が話かけてきた。

「先輩。一つ質問していいですか？」

「なんだ？」

「女の人で、なんで城廻先輩だけは名前で呼ぶんですか？」

一色は雨を見つめたまま、言われるまで俺自身が考えたこともなかつた質問をしてきた。

質問の意図が読めず訝しげな視線を送るが、一色は雨を見つめたままなので

その横顔に答えを返す。

「いや、小町とか、ちゃんと小町って呼んでるぞ？」

いうと、一色は呆れたようにため息をこぼす。

「それは家族だからじゃないですか」

「確かに……」

なるほどごもつとも。じゃあ他には、と考え思いついたので口にしてみる。

「あー、でも。川崎の弟とか妹は名前で呼ぶぞ？」

「それだって、他のおうちのことですけど、家族だからですよね？」

「確かに……」

一色のさらに呆れたような声に居た堪れない気持ちになつてくる。

なんとか反論しようとうんうん唸つて考えていると一色の声が耳に届く。

「先輩つて雪ノ下先輩や結衣先輩の事、苗字で呼んでますよね？」

なのに城廻先輩のことは名前で呼ぶの、なんでかなーつて思つてたんですよ」

いわれて、そういうえば本当になんでだろうと考える。

今の今まで全く気にしていなかったのととりあえず思いつくまま答える。

「初めからそう呼んでたからだと思ふが」

応えながら、他の誰かが先輩を名前で呼んでいたから俺も真似したのだろうか？ と

思い

考えてみる。

だが思い出せる限り、生徒会役員のメンバーは会長と呼んでいたこと。

平塚先生も雪ノ下も由比ヶ浜も学校の誰も彼も皆、先輩を苗字で呼んでいたことに気

づく。



「そういう俺と陽乃さんだけだな、そう思っていると。」

「じゃあ先輩って私のこと、なんて呼んでますか？」

「これまた最初の質問と同じくらい意図が読めない質問をしてきた。」

「そもそも俺は他人を名前で呼ぶことなど殆どないのだ。女の子なら特に。」

「一色だから一色、だろ？」

「言うとな、一色は溜息をつけて雨から視線を外し、俯く。」

「そうですね……」

その声を聞くと、自分がなにやら酷い間違いをしている気分になる。

「じゃあ試しに一回だけでいいんで、私も名前で呼んでもらえますか？」

一色は俯いたまま先ほどよりも小さく言ってくる。

「言われた通りになることに、気恥ずかしさで躊躇っていると、一色は困ったように微笑む。」

「試しにですよ。私は苗字も名前も同じ三文字です。」

「しかも頭文字は一緒だから二文字変えるだけじゃないですか？」

「小さい「つ」がはいるでしょ……」

「まあそうですけど……。小さいから無しの方で」

「無しの方向って……。まあ確かに言う通りなところはあがあるのだが」

でもなー、なんかなーと思っていると

「恥ずかしいんですか？　せんばいつ」

それまでの沈んだ声ではなく、普段通りの一色らしく俺をからかうような小馬鹿にするようにいつてきたので何とはなしに安心する。

でも馬鹿にされてほっとするって、それってどうなんだろう……

「少し練習したら、一回くらいなら呼んでやるぞ」

「練習って……、まさか枕相手にとかですか？」

一色は笑いを堪えながら聞いてくる。

それで俺は、ほかの人って枕相手に告白とか名前を呼ぶ練習しないの？　と

焦ってしまう。みんなするよね？

そんな俺を見て、一色は楽しげに茶化してくる。

「本人が目の前にいるんだから、本人で練習すればいいじゃないですか？」

「それじゃ本番で、練習とはいわんだろう……」

「大丈夫です。ちゃんと採点してあげますから！」

一色は薄い胸を張り偉そうにいつてくる。なんとという上から目線……

「城廻先輩は名前で呼ぶのに、私は呼んでくれないんですか？」

それで内心ぐると唸っていると、一色は甘えるような声を出し、

俺の顔を上目遣いで見上げてくる。

そのことで場の雰囲気はその声音と同じよう甘やかになった錯覚に陥り、危うく勘違いしそうになってしまう。なので話を逸らすことにした。

「一色。アメリカだと台風……。まあ、向こうだとハリケーンだな。

その名称に女性の名前が付けられるのを知ってるか？」

俺の言葉に、一色はきよんとした表情すると、顎に指を添え考える仕草をする。

「カトリーナとかキャサリンでしたっけ？」

応えると、合ってます？ と視線を向けてくるので、うむつと頷く。

「台風という人の力ではどうしようもないモノに付けられる女性の名前。

それを呼ぶのは男にとって、とてつもなく難易度が高いものなんだ」

生真面目にそう伝えたのだが、一色はしらっとした目で俺を見ていた。

「せんぱうい。アメリカは何にでもすぐに人名を付けるお国柄なんです。

街の名前や通りの名前、山や湖の名前とかもそうです。

なのでエベレストさんもホッチキスさんも人名なんですよ？ ご存じですか？」

「え、マジで!? ホッチキスって商品名じゃなく作った人の名前なの？」

「です。ホッチキスさんという親子が作って、その名前が付いたんですよ」

そうだったんだー！ と思わず感心している俺の目の前で、一色は不敵な笑顔を浮か

腰に手をやり、なにやら勝ち誇った表情をしている。

そんな一色の姿に、いや別にお前がホツキスを作ったわけじゃないだろう……と呆れた視線を向けると、彼女もそこに気がついたのか顔を赤くする。

「ま、まあ、それはどうでも良いんですけど……。先輩なんか話し逸らそうとしてません？」

なんかものにも逸らす気満々だったので。

心の中で返事を返していると、一色が声音はぐつと鋭くして半眼で俺を睨んでくる。

「つーか、お前だって、俺のこと名前どころか苗字ですら呼んだことないか？」

いうと、一色は頬をほのかに染めごによごによごとした声で尋ね返してきた。

「私がないで先輩としか呼んでないか……。わかりますか？」

問い返され、どう答えたら良いか迷ってしまふ。

一色から視線を外し、その言葉への答えを探して空から落ちる雨を眺める。

雨脚はさらに強くなり街が霞んで見える。雨は当分止みそうになかった。

×  
×  
×

雨に霞む街並みを眺めながら、一色への返しをあれこれ思案していると  
小さくしゃみの声が聞こえた。

視線を向けると、バツが悪そうな顔をして恥ずかしそうに鼻を押さえている  
一色の姿が目映る。

一色は空いてる手で身体をさすっており、寒いのか小さく震えていた。

「一色、やっぱり傘、買いにいって来るぞ」

俺はまだしも一色に風邪でも引かれてもと思いき、鼻を吸る一色にいうと  
鞆を傘がわりにしようとして手を上げる。

その俺の手に、一色は手を添えるにぱつと微笑む。

「先輩。こっちは風が直に当たるんで、そっちにいけば平気ですよ」

言つて、とてと俺の左側から右側に場所を変えてくる。そしてほつと息をつく。

「こっちだと先輩が壁になってくれるから、風が当たらずに暖かいです」

それはなにより。そう思い領いた俺を冷えた風が撫で上げる。そのあまりの冷たさに思わず縮こまってしまふ。

仕方なく両手で自分を抱きしめ、さすりまくってなんとか身体を温めようとするがマシになるとそこを狙いすまして風が吹いてくる。

「一色。なんか凄く寒いから、やっぱり傘、買いにいつてくる」

「大丈夫ですよ、先輩。私はそんなに寒くなくなりましたし！」

「いや、俺は寒いんだけど……」

「せんばーい、男の子なんだからそのくらい我慢してくださいよ」

それに子供は風の子っていうじゃないですか？」

「いやいや、その理屈はおかしいでしょ？ 男の子だつて寒いときは寒いぞ？」

それに年でいったら一色の方が俺より子供だろ」

不満を凝り固めていうと、一色はやれやれとばかりに溜息をつく。

そして左手をあげ、俺の冷えた腕にそつと手を添えてきた。

「確かに先輩の身体、ちよつと冷たいですね」

急に触れられ慌てた俺は、ずずつと横にずれる。そんな俺を見て一色はくすつと笑う。

「仕方ないですね……。変な勘違いしないでくださいよ」

一色は言うど、目を瞑ってすーはーと深呼吸する。

そして、ちらつとこちらを見やつると、おずおずした様子で俺の方へ身体を寄せてきた。

それで互いの二の腕が触れ合い、その感触に心臓が跳ねる。

ほのかに香るアナスイの香りが雨の匂いと混じって鼻腔を心地良くくすぐり

これは不味いと横にずれ一色から距離をとる。

そんな俺を見て一色も空いた隙間を埋めるよう、ちよこちよこことずれてくるのでとうとう壁際まで追い詰められてしまった。

「なんか狭いんだけど……」

「先輩が逃げるからじゃないですか？」

いわれて、確かにそうなんだけども思いつつ、横目で隣を窺うと

視線の先で一色が耳まで赤くしているのが見えた。

そんな彼女の姿に、なんだこいつも恥ずかしいのかと思ひ安んじたが恥ずかしげな一色を見ているとこつちまで恥ずかしくなる。

確かに暖かくなつたけど暖かくなりすぎだ、どうすんだこれ……

そんな内心が表情にでたのか、一色は俺の顔を見ると眉根を寄せ口をへの字に曲げ不満を露わしてくる。

「城廻先輩とはにやにやしなからずつーと、手を繋いでいたじゃないですか」

一色は唇を尖らせて拗ねたようにいうと、ぷいっとそっぽを向いてしまう。

いわれて、まあ傍からみたらそう見えるかと思いきや誤解を解こうと口を開く。

「いや別に、にやにやはしてなかったと思うがな。」

それに繋いでいたというより、掴まれていたんだけなんだが」

「年上お姉さんに手を掴まれちゃう、モテる俺自慢ですか？」

「自慢じゃないですし……。それにこういうのは、なんかほらあれじゃない？」

「なにがほらであれなんですか？」

一色は不機嫌そうに言うのと、ぷくつと頬を膨らませて横目で睨んでくる。

「他にもあります。なんかここ最近、先輩の私の扱いが雑すぎじゃないですかね？」

「いや、前からだろ？」

言うのと、一色はかくりと肩を落とす。

そして俺を薄く睨みながら、恨めしそうな声を出す。

「前からですけど……。そこは反省して欲しいんですけど？」

「お前そう言うけどな、お前の俺の扱い、最近どころか最初から雑だよな？」

「それは全然良いんです！」

「いや、全然良くないと思うぞ？」



いうと、一色は指先を唇に当て、何か考えるように口を開く。

「ではですね。先輩は私にどういう扱いをして欲しいですか？」

一色は言うど、両の手を後ろに組み首を傾げ、楽しげに覗き込んでくる。

「んーまあ、もう少し尊敬というか謙虚な態度をだな……」

その視線から逃げるよう顔を逸らし応えるが、途中で声が詰まる。

ふむ、謙虚な一色か……。

想像してみるが俺の溢れる妄想力を駆使しても上手くイメージが浮かばない。

まあ有り得なさ過ぎるので、仕方ないのかもしれない。

それに万が一、一色が俺に謙虚な態度で近づいてきたら、

何か裏があるに違いないと疑うこと間違いなしだ。

でもまあこいつはこれでもいいのかも知れんな。なんかもう慣れたし。

「一色はなんつーか、今のままで良いかも知れんな」

「つまり、それは今まで通り、可愛らしい後輩の私に我侷をいって欲しいってことですよ  
ね？」

ああ、自覚はあるんだと思いつつ、得意げに胸を張るその姿を見ると、思わず微笑んでしまう。

でも俺、可愛いとか一言も言っていないよね？ まあ可愛いけどさ。

「まあなんだ、お手柔らかに頼む」

「はいっ わかりました！」

そんなやり取りを交わしていると、強くなった風が雨雲を連れて行ったよう  
で雨はいつの間にか止んでいた。

## 駅の待合室で

雨が上がり駅まで向かう帰り道。

強く吹き荒れていた風も静まり、暑くもなく寒くもない過ごしやすい夜の道。

「一色。後ろ向きに歩いてると、転んで怪我しちゃうぞ」

俺の少し前を、こちらを向いてびよこびよこ歩く一色に注意する。

そのふらふら歩く姿を見てると俺のお兄ちゃんスキルがオートで発動し手を差し伸べたくなるくらい危ういのだ。

そんな風に歩く彼女の姿は、小学生の頃の小町を思い出させる。

あれは確か俺が小学三年生で小町が一年生だった頃、栃木のじいちゃんの家遊びに行ったときのことだ。

家の傍の田んぼ道で小町が後ろ歩きでびよこびよこ歩き、注意したすぐ後で盛大に転んでしまった。

俺が慌てて駆け寄ると、小町は手足をバタバタさせギャン泣きしながら「お兄ちゃんが、ちゃんと見ててくれないから転んだ」と

無茶苦茶な理由で責めてくるので、えらく困ったことを思い出す。

そしておもいつきり尻餅をついた小町がお尻が痛くて歩けないとごねるので仕方なくおんぶして家まで帰ったなど、当時の記憶が蘇り苦笑してしまう。

あの小町がもう高校生なのかと不思議な気持ちでいると、一色の茶化すような声が聞こえた。

「ふふっ、先輩ってなんか、お兄ちゃんみたいですね」

なんかもなにもお兄ちゃんなんです。と思っっていると

一色はにぱっと笑い意外な事を口にする。

「私も弟はいるんですけど上はいないから、お兄ちゃんって欲しかったんですよ」  
あまりにも意外だったので、一色をまじまじと見てしまう。

「えっ、お前ってお姉さんなの？ ホントに？ 嘘だよね？」

そんな不信感全開のセリフが、一色のお気に召さなかったようだ。

ぷくつと頬を膨らませ、じろつと睨んでくる。

一色がお姉ちゃん？ それって小町が俺の姉くらい違和感半端ないんだけど……

そんな事を思っていると、一色はふふんつと得意げに笑う。

「ほら私、すごいしつかりものじゃないですか！」

「お前のはしつかりものじゃなく、ちゃっかりものつていうんだよ」

「先輩ってほんとわたしのことなんだと思っっているんですかね……」

一色は言うど、薄目でじーっと見つめてくるのでこそつと視線を逸らす。

すると、俺をむつとした顔で睨んでいた一色が路上駐車の車にぶつかりそうになったので

慌てて注意する。

はっ、と、よつと言いなながら、一色はふらふら危なっかしく車を避けると朗らかに笑った。

「せんぱいっ。私が転ばないようにちゃんと見ていてくださいね！」

あの時の小町と同じようなことを同じような表情で言ってくる。

なので俺も小町にそうしたように、なるべく優しい声で応える。

「もう少しで大きい通りにでるから、そしたらちゃんと前を向いて歩くんだぞ」

俺の言葉に、一色は元気よく返事をかえずと小さく敬礼する。

うーん、あざとい……。これは小町にはないところだな。

一色の受け答えは大変よろしいのだが、それなら最初のお小言も聞いて欲しいもんだ  
と思いつつ、

彼女に合わせゆつくりとした歩調で歩く。

そうして一色が話す彼女の弟のことに耳を傾けながら、駅へと向かうのだった。

×  
×  
×

駅に到着するとちやうど電車が出たばかりのようだ。

次の電車が来るまで大分時間があるので、駅の待合室のベンチに座り二人で待つことにした。

ここへ来る途中、雨に濡れ身体が冷えていた俺は自動販売機で温かい焙じ茶をかうとベンチに座る一色になにが良いのか尋ねてみる。

俺の言葉に、一色はベンチから立ち上がりとしてと駆け寄ってくると、鞆から財布を取り出すのでそれを片手で止め販売機に硬貨を入れる。

そして奢るから好きなの選べという、ぽかーんとした顔で俺を見入る一色。

彼女も寒いだろうと気を使ったのに、ほんとなんなのこの子……

「なんだよ……」

「あ、いえ……、ありがとうございます」

一色は口元を綻ばせ、細い声でたどたどしくお礼の言葉を口にする。

そして俺が手にしてる焙じ茶を見て同じのが良いと言うので、ボタンを押し

取り出し口に落ちてきたそれを神妙な顔で待っている一色に手渡す。

ボトルを大事そうに両手で受け取った一色にまたお礼を言われ、それに答えるように頷くと

ベンチに戻って並んで座り、キャップを外し口をつける。

温かく香ばしいお茶は冷えた身体と渴いた喉に心地いい。

隣に座る一色も満足気な吐息を漏らし「おいしいです」と呟く。

そして俺の顔を見て嬉しそうに微笑む。

喜んでもらえてなにより。思いながら駅の構内を行き交う人たちをぼーっと眺めていると

一色がマックスコーヒーじゃないのは珍しいですねと尋ねてきた。

「秒速でな、両想いの中学生が駅のベンチで焙じ茶を飲むシーンがあるんだ。

それをちよつと思ひ出してな」

俺の言葉に、小さく相槌をうっていた一色が袖を引いてくるので目をやると

目が合った一色は照れくさそうに呟く。

「……両思いですか？」

いうと頬を染めて俯いてしまうので、そんな彼女に「映画の中の話しだぞ？」というのも

無粋なような気がして口籠ってしまふ。

なんとなく気恥ずかしくなり視線を泳がせると時計が見え、それが夜の九時を指していた。

年頃の女の子が外にいるのは遅い時間だなと思い、一色に声をかける。

「大分遅くなったけど親に叱られないか？」

「図書館を出るとき、メールで遅くなるって伝えてあるから大丈夫ですよ。」

家も駅から近いですし。駅についたら電話してお父さんに迎えに来てもらいます」

「なら安心だな」

応えると、一色は自分の靴先を見つめながら口を開く。

「それに今日はですね。先輩と普段より色々なお話ができて楽しかったですし」などと、なかなか可愛げのあることを言ってくる。

らしくない一色のセリフに、明日は観測史上最大の大雨かもしれないな。

そんなことを思いつつ、声を出す。

「まあお前が大抵ろくでもない案件ばかり持って来るからなあ」



一色からの依頼の数々を思い出し、あの時は大変だった……。と  
しみじみとした気持ちで答えてしまう。

すると一色は、ぷくつと頬を膨らませ拗ねたような声をいう。

「仕方ないじゃないですか。そうでもしないと、あの部屋、行きづらいですし」  
「そうか？」

「そうですよ……」

一色は言うのと、つーんと顔を背けてしまう。

年も下だしそういうもんなのかと思いい口を開く。

「雪ノ下も由比ヶ浜も一色のことは可愛い後輩だと思っっているぞ。」

だから何もなくても遊びにくければいいんじゃないか？

むしろ何もトラブルを持ってこねー方が歓迎されると思うけどな」

トラブルを持ってくるなど釘を刺しつつ、部室で一色と接している雪ノ下達を見て  
当たらずとも遠からずだと感じていることいつてみる。

それに一色は嬉しそうに顔を綻ばせると、俺の袖を引き困ったように笑う。

「先輩も、ですか？」

やはり一色は風邪を引いたようだ。

これは大変と思い、お薬がわりになるべく優しく声をかける

「おう、だからいつでも顔を出せば良いと思うぞ。

雪ノ下もなんだかんだで嬉しく思つて、一色の分の紅茶を淹れてくれるだろうし。

由比ヶ浜も……、由比ヶ浜は、美味しそうに一色の分までお菓子を食べてくれるぞ」

言うのと、一色は口元を抑えて声を出さずに可笑しそうに笑う。

そして目の隅に溜まった涙を拭いながら口を開く。

「結衣先輩に失礼ですよ、先輩」

一色はというと、はにかんだ笑顔を見せる。八幡ポーションは効果抜群のようだ。

そこへ電車がくるアナウンスが流れ、ベンチから立ち上がった一色は俺とさよならの挨拶を交わすと改札を抜ける。

その背中を見送っていると、不意にくるりと振り返った一色が手招きしてきた。

なにかしら？　と思つて改札に近づいた俺の袖を一色は掴むと、顔を俯かせ低く呟く。

「私がないで先輩としか呼んでないかの答え、まだもらつてないんですけど」

そーいやまだ応えてなかったかと思ひ、声に感情を込めないように答える。

「最初からそう呼んでたから、呼び慣れてるつてことだろ」

勘違いも思い違いも思い込みももうしない。変に意識してギクシヤクするくらいなら

なんとなくそう呼んでる程度に思っていた方が痛い思いをしなくてすむ。

そう思っていると、一色は顔をあげて澄んだ瞳で見つめてくる。

それに自分の心の内を見透かされそうな気分になり、逃げるよう顔を背けてしまう。

そんな俺の耳元に、一色は顔を近づけると悪戯っぽく囁く。

「先輩、逃げるの上手ですね。でも、次は逃がしませんよ?」

一色はというと、小悪魔めいた笑顔で微笑んだ。

## うざすぎる親父

一色を馱で見送った俺は雨上がりの道を自転車を漕いで家路へとつく。

二十分後、家に到着した俺がリビングに入ると、親父が嬉しそうに俺を見やった。

もちろん俺は親父のことは見なかったことにして、母親と小町にだけ只今とつげる。

「あ、お兄ちゃん、おかえりー」

「あら、おかえりなさい八幡。遅かったわね」

「どちら様ー?」

俺にお帰りと返す母親と小町の声に混じって、俺を他所様他人様扱いする声が聞こえた。

苛立つて向けた視線の先に、邪悪な笑みを浮かべた奴がいる。

「小町ちゃん。そのアレなおじさんに、ぶぶ漬け出してあげて」

キッチンで御飯の用意をしてくれている小町に、親父への京都風「もうかえれ」の作法を頼む。

法を頼む。

お兄ちゃんの御飯出したらねー! と愛想のよい返事を返したきた小町に頷くと

温め直してる御飯を椅子に座って大人しく待つことにした。

そして暇つぶしがてらテレビのバラエティ番組を眺めていると、俺の視界を黒い影が遮る。

その正体は、俺や小町と同じクセ毛をその頭頂部に装着した中年のおじさん、親父である。

俺は右に左に頭を動かして視界の確保に努めるが、敵もさるもの引つ掻くもの親父も俺の動きに合わせて左に右に頭を動かし視界を遮ってくる。

邪魔くさい……そう思っていると親父が絡んできた。

「おい八幡。最近どうよ？　どんな調子よ？　おい八幡　おい、おーい、八幡！　「……普通だよ」

「普通ってなんだよ！　訳わかんねーよ！　もつとこうなに、あるだろうよ具体的ななことが。」

「ないのか？　ないのかー！　ないの？　ねーねー八幡　ねーたらー！」

「だから普通に学校いって授業を受けて、たまに図書館に……」

「と・しよ・か・ん！　きたね、きたねこれは。なに？　一人で？　一人ぼっちで？」

「そーだよ、悪いかよ」

「んー、悪くないよ！　うん全然悪くない！　まったくこれっぽちも悪くない。」

でも一人かー！　一人なのか。一人なのか。そつかそつかー！　一人？！」

うぜえ……

材木座と戸部を足し二で割って十を掛けたくらいのうざさを感じる。

ただ下手に反論するともっとうざくなるのはこれまでの経験で痛いほどわかっている。

なので無視を決め込む。

そこへ小町がぱたぱたとスリッパを鳴らしながら晩御飯を運んできてくれた。

小町にお礼を言うと、急いで食べてこの場を離脱しようとする。

茶碗を片手に箸をせわしなく動かしていると親父がまた絡んできた。

「なあ八幡。お前ひよつとして、早く飯を食べて自分の部屋に行こうとしてない？」

「うんうん、ごめんごめんそうだよね。久しぶりの息子との会話を楽しんでいる父親を前に」

さすがにそれはないよね？」

「そーんな親不孝なこと考えてないよね？ 知ってる知ってるわかっている！」

「おい八幡！ ご飯はちゃんと噛んで食べないと、ダ・メ・だ・ぞ？」

ほんとにうぜえ……

助けを求めて母親と小町に視線を送るが、二人とも俺に絡みまくる親父を見慣れているせいか

まーた始まったくらいにの反応しか示さずテレビを見て笑ってる。

いや、助けようよ………と思いつつ、日曜日の件を伝えておくかと思いい口を開く。

「今度の日曜なんだけど、昼過ぎくらいに俺の客が来るから」

母親と小町にだけ伝えるつもりで口にしたのだが、なぜか親父が嬉しそうに会話に入ってきた。

「おいおい八幡。残念だけどな、Amazonの商品を運んでくるヤマトのお兄ちゃん  
は

お前の友達じゃないんだぞ？ 勘違いするなよ？」

「Amazonじゃねーよ」

「なんだ。じゃあ楽天か？」

「楽天でもないし……。そもそも宅配便じゃねーよ。ちよつと女の子が二人来るんだ  
よ」

俺の言葉に、お茶をすすつと噉っていた小町が口を開く。

「お兄ちゃん、雪乃さんと結衣さんが来るの？」

「いや、あの二人じゃなくて」

「えっ！ あの二人以外にも、お義姉さん候補が!？」

「えっ、なに八幡。あなた彼女ができたの？」

「女の子が来る」という単語に母親も小町も興味が湧いたのか、椅子に座って俺に続きを促す。

親父は親父で興味を通り越し怒りが湧いたようで、身体を小刻みに震わせると恨みを込めた声でさらに俺に絡んでくる。

「おい、八幡。お前、お前さ……、一体全体どういうつもりだ？」

女の子がふたりお前に会いに休みの日にわざわざ家に来るだと……」

「そう言われても、それに……」

反論しようとした俺を、親父は片手を上げて黙らせる。

「で、その二人はどんな女の子なんだ？ 可愛いのか？ それとも、お綺麗さんか？」

「どっちかと付き合ってるのか？ ん？ おい、八幡、おいったら！」

「それかあれか、お前まさかどっちとも付き合ってるとかじゃねーだろうな？」

「そういう関係じゃねーよ」

「まあそうだろうなー！ うんうん、知ってた知ってたわかってた！」

そんなことがもし現実には起きたら、天が許しても俺が絶対に許さん!!」

拳を握りしめエキサイトしている親父のことは取り敢えず放っておいて

放課後の出来事を母親と小町に伝える。

そしてその流れで、日曜日に我が家で秒速を観ることになったと伝えたのだが



親父がやはり絡んできた。

「家に出張サービスだと……。いくらだ？　いくら払った？　リボ払いか？」

「ちげーよ、そういうんじゃないよ」

「違う？　どの辺が違うんだ。金も出さず女の子が二人も家に来るとか、

アニメや漫画じゃあるまいしありえんだろう！」

「えつと、めぐり先輩が、みんなで秒速見ようって誘ってくれてたんだ。

それではじめは先輩の家にお邪魔するはずだったんだが、一色がウチがいいって」

「なるほどなるほど。じゃあ、うちに来ると決めたのは、その一色ちゃん？　という

女の子なんだな？　ふむふむ。まあ……。それはわかった」

「なら、どうして秒速をみる話になったんだ？」

仕方なく事の経緯を説明すると、それを聞いた親父が腕を組んでうーんと唸る。

「八幡お前さ、今まで女の子と付き合ったことあったか？　ないだろ？　ないよな？

そんなお前が、そんなお前がだよ？　いきなり女の子二人と遊ぶとか、いくらなんで

も

難易度高すぎやしないか？」

「遊ぶっていうか、映画を一緒に見るだけだぞ？」

「それを遊ぶっていうんだよ！　そんなこともわからないのか!!」

テーブルをドン！ と叩いて熱弁をふるう親父。

かまくらがびっくりしてこちらを見つめている。ごめんよ、かまくら。

そして親父は立ち上がると、食卓の周りをぐるぐる回りながらさらに続ける。

「父親だから、だけで言ってるんじゃないんだ。

同じ男としてお前が悪い女に引つかからないか、俺は心配なんだよ」

「いいか？ これをただの大人のつまらない説教と片付けなしてくれ。

世の中には笑顔で絵やら壺やら買わせようとする、怖い女の子がいるんだ。

ちゃんと考えないとダメなんだよ、八幡」

「八幡、お前はまだ若い……。人間として、いや男としてまだまだ未熟なお前に

一緒に遊びたいとか家に行きたいとか迫ってくる女の子がいるとしたら要注意だ」

「なぜならそれは、お前がいくらくらい出せる男なのかを見極めるものでしかないから

だ!!」

そう叫んだ親父は立ち止まると、急に黙り込む。

うんざりした顔でそれを見ていると、親父は何か思いついたように顔をあげ

俺の顔をまじまじと見ながら口を開く。

「八幡。お前もう、デートとかはしたのか？」

「一色とは一回だけ、出かけたことはあるけど」

「えっ！ お兄ちゃん。いろは先輩とデートしたの!？」

「やるじゃない八幡、見直したわ！」

「いや、デートっていうか……。」

卓球やって、ラーメン食べて、お茶して帰ってきただけだぞ？」

「「それをデートっていうんだよ!!」」

三人から勢いよく突っ込まれ、俺は驚いて椅子から転げ落ちてしまう。

なんとか起き上がり椅子に座りなおすが、三人の尋問はまだまだ終わりそうになかった。

## 比企谷家の夜

夏休みまで後数日を残した七月の下旬。

ここ最近、雨が多く来ることが出来なかったベストプレイスで昼飯を食べる。空を見上げると太陽は燦々と輝き、その眩しさに目を細めてしまう。

寝不足気味な俺の目にこの明るさは少しキツイ。

「せんばい、眠そうですね」

「おう。昨日の夜、ちよつと色々あつてな」

隣に座る一色に応える。

約束通り秒速の単行本を借りに来た一色は、来たついでに天気も良いからと持参した弁当を広げ、俺の隣で勝手に昼飯を食出す。

そして眠そうな目をした俺を見やってふつと鼻で笑い、人の体調をこれっぽっちも心配してないことがわかる言葉を投げてきた。

「はあ、まあどうでもいいんですけど」

どうでもいいってひどいね君。この眠さの半分は一色のせいでもあるんだけど？

そんな恨みを込めた視線を送っていると、一色はにやつと嫌な笑みを浮かべた。

「せんばい、なんかお疲れですか？　普段より目がアレですし。」

あつ、もしかして、私の名前を呼ぶ練習を夕べは寝ないで頑張ちやいましたか？」

「アレってなんだよ……。そもそもそんなことしてる場合じゃなかったし」

いうと、一色は「そんなこととは、なんですか！」とベンチから立ち上がり

大変ご立腹な様子で頬をぷくつと膨らませる。

そしてむつとした表情のままベンチに座り直すと、横目でじろつと睨んでくるが

今日の俺にはそのあざとさに突っ込む気力さえないのである。

「でも先輩、ほんとなにがあつたんですか？」

その問いに、俺は昨夜のことを思い出す。

×  
×  
×

そもその話し俺としては、自分の客が日曜にウチに来ると母親と小町の二人に伝えたかっただけなのだ。

なのに勝手に会話に割り込んできた親父のせいで、話はあらぬ方向へと流れていく。そうして親子の会話という名の尋問タイムが始まった。

難しそうな顔をした親父が俺を見やる。

その瞳に憎悪の炎を宿しながら、親父が重々しく口を開く。

「なあ八幡、父さんちよつと聞きたいんだがな。」

さつき小町が口にした雪乃さんと結衣さんというのは、お前とどういう関係だ？」

それに俺が答えるより早く、「お兄ちゃんと部活が同じな人だよ」と小町が答え

雪ノ下と由比ヶ浜がどういう女の子なのか簡単な説明をする。

話を聞いた親父は笑顔で「小町ちゃんの説明はわかりやすい！」と小町を誉めそやすと

表情一転させ険悪な顔で俺を睨んでくる。

対応が露骨に違いすぎる……まあでも俺もかと思っていると、親父が苦々しい声でいう。

「八幡、その雪乃ちゃんと結衣ちゃんという女の子は、お前とはただの部活仲間なのか

？」

「……そーだよ」

答えると、親父はずびしつと俺に指を突き立てる。

「おい八幡！ いまなんか『間』がなかったか？ あったよな！ あったぞいま」

「あれか？ 告白して振られたとかか？ ごめんなさいとか、勘弁してくださいとかやめてくださいとか、警察呼びますよとか言われたのか？」

「……告白なんかしてねーよ。てか人を指差すなよ」

俺のそんな苦情に親父はまったく意に介さず、それどころかさらに目を細め腕を組むと

難しい顔をする。

「ふむ、していないのか。おい、まさかとは思うがお前、告白とかされたんじゃないだろうな？」

「……別にそんな、告白とかされてねーよ……」

答えた俺に、またもや親父はずびしつと指を突き立てる。

「おい八幡！ またなんか『間』がなかったか？ あったよな！ あったぞいま」

「しつけーよ、いい加減にしろよ親父。あと指差すな」

「なんだよ！ 親に向かってその言い草！ 不良か？ 不良になったのか？」

仕方ねーだろ、父さんすげー気になるんだから!!」

親父の言葉に、思わずため息が漏れる。

父親と会話をしている。ただそれだけのことで、このとてつもない疲労感。

親父の相手にいい加減うんざりしていると、俺の疲れた様子を見かねたのか

小町が助け舟を出してくれた。

「お父さん。お兄ちゃんも困ってるからそのくらいにしてあげなよ」

小町、優しい子。これはもうここから先は小町ルートでいいんじゃないか？

タイトル詐欺とかいわれようが、間違ってるって書いてある。そう言い張れば問題なし。

まあ初めから小町に決めてたんだけど！　と思っていると、小町がなにやら口にする。

「絡むのは別にいいけど、小町的にはね？　お兄ちゃんがいろは先輩と

なんでお出かけしたのか聞きたいから、ちよつと静かにしててね」

小町は自分の欲望に優しいだけだった。

エロゲ定番の妹ルートがあえなく封鎖され、落ち込んだ俺の隣で親父もうむむつと唸る。

小町に叱られたのがショックだったのだろう。

そこに喜びを見いだせないのが親父の限界だと思う。



「そうだ、そうだったな小町。年甲斐もなくちよつと動揺してしまつたお父さんを許して欲しい」

親父はというと、小町に頭を下げる。小町よりもまず俺に謝って欲しいんですけど……。そんな叶わぬ夢を見ている俺に、親父が口調を少し改めて話しかけてきた。

「じゃ、じゃあさ、八幡。そのなんだ。一緒に出かけたという

いろはちゃんという女の子は、お前からデートに誘つたのか？」

「いや、誘つたというか依頼だつたんだよ、一色からの」

「依頼？ 依頼ってなんだ？」

親父は訝しげな顔で尋ねてくる。母親の方もきよとんとした表情で俺を見ていた。

そーいや部の活動内容までは小町も話してないから、依頼つっても事情を知らない両親には何のことかわからんか。

ただ一から説明するのも面倒なので言い方を変えていう事にした。

「いや、依頼っていうか、お願いとか頼みごと？ みたいな感じだつたんだよ。

一色に好きな奴がいて、そいつとデートするときの参考にしたいって。

それで俺が連れ出されただけなんだ。ただ単にダシに使われたってだけだよ」

「お兄ちゃん。いろは先輩の好きな人って葉山先輩だよね？」

小町が聞いてきたので、それにうむつと頷く。

そして小町が両親に葉山のことを説明し、それを終わるとついでのように尋ねてきた。

「お兄ちゃんさ、いろは先輩とはどんな感じのデートをしたの?」

特に隠すようなことでもないのですその時のことをかいつまんで話す。

すると話を聞き終わった小町は手元のお茶を一息で飲み干し、ぷはつと満足気に声をあげる。

「小町本当に嬉しいよ……。あのだめだめだったごみいちゃんがここまで更生してくれて」

なんか俺が滅茶苦茶だめだったようにしみじみいうと、生温かい目でこつちを見やってくる。

そしてこれまで俺と多少なりとも関わった女子の事を両親に話します。

それを止めようと立ち上がった俺の頭に親父がアイアンクローをガシツと決めてぎりぎりと締め上げてくるので、身動きひとつとれなくなってしまう。

ちよ、ちよつとおー! 頭蓋骨がメキメキいつてるんですけど!

小町の話しを聞き終えた母親は嬉しそうに微笑み、優しい声でいう。

「八幡、あんたなかなかやるじゃない。ちよつと見直したわ」

まあ普段の俺を見てたら彼女とか出来なさそうって思うわな。彼女じゃないけど

……。

ただそんな風に喜んでもらえると、ちよつと親孝行した気分になつてしまう。

だが嬉しそうな母親と違い、親父は俺の耳元で呪いの言葉をぶつぶつ呟き始める。

「八幡。父さんも学生の頃さ、ずーと制服デートしたかつたんだよ。

美人の同級生や可愛い後輩、綺麗な先輩とかとき……

なんでお前だけそれが出来て父さんは出来なかつたの？ ねえなんで？

おかしくない？ おかしいよな？ おかしいんだよ!!

まあいいよ、俺がモテないから悪いつて言いたいんだろ？ わかるよわかつてるよ!

そうそうそれとき、結衣ちゃんだつけ？ なんか胸の大きい髪がピンクでお団子の。

その子とき浴衣デートしたんだよね？ いったんだよね？ 二人きりで花火大会。

まあいいよ、俺はいけなかつたけどお前はいった。うんうんそれでいいよ。

いいねモテて、ほんといいねモテモテで。やったじゃん八幡、さすが俺の息子!

あつ、ごーめーんー! モテないお前とは違うぞつて目したよね、今？

してない？ したよね？ したんだよ!

でもさ、それだけじゃないよね？ 雪乃ちゃんだつけ？ なんかすごい美人なんだろう

?

それでさ、その子とも遊びにいったんだよね？ デートしたんだよね？

えっ買い物しただけ？ ほーほー買い物だけねー！ そうなんだ。ふーんー、へー。おい！ ふぎけんなよお前！ 世間ではそれをデートって言うんだよ！

そんなつもりじゃない？ あーモテモテの八幡くんにはそれは当たり前なんだ？ すごいねすごいア充だね！ 最初の頃はひねくれぼつちとか売りにしてたのに。あれかファッションぼつちってやつか！ それとも隠れリア充ってやつか？

違う？ 違うかー！ 違うんだ？ 違わねーよ！ お前はラノベの主人公かよ!!」

そんな恨みが籠もった言葉を吐き出しながら、俺の頭をぎりぎり締め上げてくるのでその手を振りほどこうとバシバシ叩いていると、母親が呆れたようにいう。

「お父さん。いい加減にしなさい」

比企谷家では、母の声は神の声に等しい。

それで親父も大人しく手を放してくれたのだが、ママン、もう少し早く止めてよね、マジで。

ようやく親父の魔の手から解放された俺がふらつく頭を抱えぐったりしていると携帯にメールが届いた。

ズボンから携帯を取り出し見てみると、どうやら一色が写メを送ってきたようだ。なんだろうと見てみると、可愛らしいパジャマ姿でクマのぬいぐるみを抱えた

一色の姿が写っていた。

これを見ながら練習してくださいね！ とメツセージも添えられており、思わず頬が緩む。

「八幡……。この写メで一体、なんの練習をするんだ？」

そんな俺の耳に、親父の憎悪に満ちた声が響く。

勝手に人の携帯を覗き込んでた親父がまたもや俺に襲いかかろうとするのを見て母親がバン！ つとテーブルを叩く。

それで親父は大人しくなったのだが、卑怯な奴のこと、告げ口するのも忘れない。

「でも八幡の携帯に、女の子がパジャマ姿の写メを送ってきたから……」

その言葉に好奇心を刺激された母親と小町に携帯を取り上げられてしまい、

写メを見た二人の提案でこちらも写メを送り返すことが決まってしまふ。

そして嫌がる俺を三人で無理やり押さえつけ写メを撮ると、

めぐり先輩と一色の二人へ送ったのだった。

×  
×  
×

「なるほど。それで先客万来！ 熱烈歓迎のメッセージと一緒に、ご家族の集合写真が送られてきたわけですね。初め見たときはびつくりしましたけど、話を聞いて納得しました。」

「良いじゃないですか、仲良しで」

俺の話を聞いた一色はぶるぶると肩を震わせながら可笑しそうに笑っている。

まあ逆の立場なら俺も笑うだろうし仕方がない。

それに、めぐり先輩も一色もメールを送って直ぐに、日曜日お邪魔させて頂きますと礼儀正しくメールを返してくれた。それを見たうちの両親もなんか喜んでいたしな。

そんなことを思い出していると、本当は今日が良かったんですけどと

一色は前置きしてから口を開く。

「先輩、良かったら明日の午前中か午後後に、勉強会の練習しませんか？」

「えっ、明日って土曜日で休日なだけ……」

比企谷家では完全週休二日制を採用しているから、ちよつと難しいかな」

いうと、一色は困ったような表情を浮かべ申し訳なさそうな声を出す。

「そうなんですけど……。あの、先輩の数学の学力がちよつと計り知れないんで

期間外に一度だけでも確認しておきたいなって思うんですね」

計り知れない。そう言われると何かとつても強そうで格好良いが

多分というか絶対に褒められていない。

まあ一色もあの点数だと一体どうやって俺を教えれば良いのか悩むだろう。

気を使ってくれ提案してくれてる訳で、そういう理由なら仕方がない。

数学テストで0点を取った俺のせいと……と申し訳ない気持ちになつてしまう。

「つーか、悪いな。なんか余計な手間掛けさせちまつて」

「いえいえー。一緒に頑張りましょう！」

一色の声に頷くと、丁度そこへお昼休みの終わりを告げるチャイムの音が響いた。

## 頑張った副会長

日付が変わり、土曜日の昼下がりに。

夕べ送られてきた一色からのメールによると、彼女は午前中、生徒会の仕事があるらしい。

それに合わせて学校に着いた俺は、一色を迎えに生徒会室へと向かう。

到着した生徒会室の扉をノックすると、部屋の中から「はいーどうぞー!」と明るく元気な一色の声が聞こえた。

それ従い扉を開けると、椅子に座って優雅にお茶を飲む一色と、テーブルに倒れこむよう

突っ伏してぐっすり寝ている副会長が見えた。

生徒会室で何やってんだよ、寝ないで働け。などと思いつつ、気持ちよさそうに軒をかいている副会長を起こさないよう、一色に小声で声をかける。

「一色、行くぞ」

「せんばい、ちよつと待ってくださいね。食器片しちやいますから」

それに頷きを返し、片付けを終え準備のできた一色と二人で学習室へと向かう。



二人で連れ立って歩いていると、一色が袖を引いてきた。

「先輩、秒速って映画を先に観てから、漫画を読んだほうが良いんですよ？」

「んー、俺は最初に映画を観たんだが、なんていうか説明不足なんだよな。」

それで後から漫画と小説を読んだからそう思うけど」

「そんなに説明不足なんですか？」

「もちろん大事な事はきちんと表現してくれてるんだが……。」

良い不親切っていうのかな、あれは。なんていうか置いてけぼり感が強いんだ」

「良い不親切……」

一色は不思議そうに首を傾げる。

それを見て、もう少し上手く説明できないかと頭を捻って考える。

「わざと曖昧に表してるところが多いんだ。暗喩っていうのかな？」

それで観た人は不足なところを自分の経験で埋めようとするから、その事を思い出し

て

切なくなったり辛くなったりで心が揺さぶられるっていうのかな……」

「よくわかりませんが、わかりました！ 日曜に映画を観てから読んでみますね」

一色はいうと、にぱつと微笑む。

その笑顔に嬉しい半面、不安もよぎってしまう。

「一色にもめぐり先輩にも、楽しんでもらえると良いんだけどな」  
いうと、一色は励ますように俺の肩を軽く叩く。

「大丈夫ですよ、先輩。話を聞いてるだけで私は充分に楽しいですし」  
「そう言ってもらえるとありがたいですよ。ずっとボツチだったからな。」

小町以外、自分の好きなものを薦めることって、今までしたくても出来なかつたし。  
だからまあ、二人にガツカリされないか心配なんだけどな」

「その気持ちわかります……。」

自分の好きな人や好きなモノを否定されるのって、自分が否定されるより凄く辛いで  
すもんね」

ふむ。なかなか良い事いうじゃねーか、こいつ。

まあお前も雪ノ下も何かにつけて俺のことを否定してくるけどな！　と思つたが  
その言葉に嬉しい気持ちも湧いてくる。

なので「ありがとな」と口にする、一色は照れたように頬を薄く染め、  
ふいつとそっぽを向いてしまう。

そんな一色の姿に苦笑しつつ、また暫く歩いていると、一色は、んつと咳払いをする。  
「その、思つたんですけど。」

雪ノ下先輩や結衣先輩とは好きなモノの話とかしないんですか？　しなそうですけ

ど」

「いや、そんな事はないぞ？ 小町の話とか超してるし」

誇らしげに答えると、一色は呆れたようにため息をつく。

「さすがシスコン……。えつと、そっちじゃなくてですね。」

映画とか漫画とか小説とかそーいったモノですね」

「結衣先輩はともかく雪ノ下先輩も良く本を読んでるじゃないですか？

なら話が合うんじゃないかなと思うんですよ」

「確かにそうだな。」

まあ大体、由比ヶ浜が話を振ってきて俺と雪ノ下がそれに答えることが多いからな

あ。

後、俺も雪ノ下も自分から話しかけるタイプじゃないってのも、あるかも知れんな」

「それなら自分の好きなモノのお話を、お二人にしてみるのも良いかも知れませんか？

雪ノ下先輩も結衣先輩も喜ぶと思いますし」

「そーか？」

「そーですよ！」

一色はうんうんと頷き、熱心に勧めてくる。

そんなやり取りを交わしていると去年の冬を思い出す。

「一色はクリスマススイベントのときも思ったけど、案外、気配り屋なんだな」  
記憶を探りながら感心した声でいうと、一色はあの時と同じように、さも心外とばかりに

ぷくつと膨れっ面をつくる。

「また案外って言いましたね？ わたし気配り屋さんですよ？」

まあ今回ののは、お二人へのお詫びの意味もあるんですけどね……」

お詫び？ どういう意味だろう。

不思議に思い尋ねようとするが、それより先に一色が続きを口にする。

「まあ、そういう訳なんで、今度試してみてくださいいね」

「おう」

俺の返しに、一色はにぱつと笑う。

そんなやり取りを交わしていると、学習室に到着した。

×  
×  
×

学習室に入ると、室内には既に十人近くの生徒が勉強に励んでいた。

ちようど質問をした生徒がいたようで他の生徒たちが丁寧に教える姿が見え

その和気あいあいとした雰囲気は一色は嬉しそうに目を細める。

そんな彼らに元気良く挨拶する一色とそれに紛れて小声で挨拶した俺は

カウンター横の準備室の扉を開く。

そして今、目的地である「おしおき部屋」の前に立っているのだが、前に来たときはカーテンで仕切られていただけの部屋は、その様相を大いに変化させていた。

間取りはそれまでと変わらず一畳程の広さだが、今やきちんと壁が作られており

頑丈そうな扉や作り付けのテーブルとライトスタンドまでついている。

扉は鍵が掛からないタイプのようで、ぱつと見、ネットカフェの個室みたいな感じだ。

なんか凄い立派になってる……

ほかーんと口を開け「おしおき部屋改二」を見ていた俺の傍らで

一色は手柄顔で微笑んでいた。

「日曜大工っていうんですかね？ 副会長がこういうの得意なんです。

それで平塚先生から許可をもらって、生徒会の予算でリフォームしました」

「えっ、これ副会長が作ったの？」

「です。凄いですよ？ 思ったより役に立つ……間違えました

役職を超えた才能溢れる先輩です」

もう言い直さなくていいけどね。しかし本当凄いなこれは。

思いながら見ていると、余った木材や大工道具が準備室のテーブルに置かれていることに気づく。

「もしかして今日作ったのか？ これ」

「です。えつとですね。材料の買出しと部品の作成とかは、昨日の放課後に

副会長がしてくれて、組み立ても、今朝早く来てもらって副会長がしてくれました」

「今朝は私も早起きして、副会長が作業しているのを見てたから大変でしたけどね。

本当に頑張りましたよ！」

言うのと、むふーと得意げに胸を張ってくる。

それ頑張ったの副会長だけで、一色、お前じゃないだろう……。

だから疲れきって、あんな気持ちよさげに寝ていたのか。

同じ一色いろは被害者の会メンバーとして、ここは嫌味の一つでもと思い、口を開く。

「一色。副会長がこれを作ってる間、お前は何してたんだ？」

「私ですか？ もちろん現場監督です！ 指示出していうんでしたっけ？」

私、そーいうのすごい得意なんですよ！」

薄い胸を張り得意気にいつてくる。

そのあまりに自信満々な姿に、なんか俺のほうの間違ってる気がしてくる。

それで用意していた嫌味も、どこかへ飛んでいつてしまふ。

副会長への同情で心を痛めていると、加害者の一色はけるつとした顔で

なかなか酷いことを口にする。

「先輩。そんなことより時間がもつたいないんで、さっさと中に入りましょう！」

一色はいうと、俺をぐいぐい部屋へと押し込もうとする。

転がるように押し込まれ文句を言おうと振り返ると、一色が南京錠を使って

内側から鍵を掛けているのが見えた。

えっ、なんで外側から鍵が掛からないのに内側から鍵が掛けられるの!?

ここ牢獄だよね？ 普通は逆じゃない!?

戸惑う俺の耳に、カチャツと鍵がしまる音が響いた。

## 勉強会（練習）

「先輩、そろそろ時間でですけど調子はどうですか？ 大丈夫なら採点しますけど」

「一色、ちよつと待ってくれ。ミスがないか、見直すから」

いうと、隣で問題集を解いていた一色が、ちろつとこちらを見てくる。

そして楽しげな笑みを含んだ声で茶化すようにいう。

「一問でも外れたら、アレですもんね」

「ああ、たしかにアレだ。このレベルの問題でミスったらさすがに恥ずかしいしな」  
「ふふつ、頑張ってくださいね」

その声に被さるよう試験終了を知らせる携帯のアラーム音が鳴る。

それで俺はテスト用紙を一色に手渡す。

受け取ったテストの採点を始める一色を見やりながら、思ったことを口にする。

「なんかその、悪いな。俺の方こそ一色に、国語を教えなきゃならんのに」

「いえいえ。普段から先輩にはお世話になってましたし、気にしないでください。」

それと採点が終わったら、ちよつとお腹も減ったし、お昼ご飯にしましょう」

採点を続けながら一色はいうと、少し難しい顔をする。



それが気になって、一色の手元を不安な気持ちで見つめてしまう。

すると俺の視線に気が付いた一色は手を止め顔をあげると、励ますようにいう。

「さっきは私もおふざけで言いましたけど、ミスがあっても問題ないですよ？」

次から気をつければ良いだけですから」

その言葉に薄い吐息で答えると、テーブルの隅に積まれているこれまでに解いた

五枚のテスト用紙を眺める。

その全てには百点の文字が花丸と“よくできました”の文字とともに記されている  
が

俺は無邪気に喜ぶことが出来ずにいた。

× × ×

今から二時間前。

一色はおしおき部屋の鍵を閉めると、戸惑っている俺を椅子に座らせる。

そして自分も座ると、勉強を始める前に二人で少しお話をしましょうと提案してきた。

意味がよく分からず取り敢えず頷くと、一色は生真面目な顔で口を開く。

「先輩は、いつくらいから数学が……、算数でも良いですけど、苦手でしたか？」  
頭をがしがし掻きながら、ざっと記憶をさらってみる。

「んー、小学校の高学年に上がった頃かな……」

俺の言葉に、一色は顎に手を添えて何やら考える仕草をする。

「一昨日の話なんですけど、先輩、図書館で中学の問題集を使って

勉強してたじゃないですか？ やってみてどうでしたか？」

「そんなところも見てたのか……」

「言ったじゃないですか。最初から見ましたよって」

「そうだったな。えっと、中三の二学期に習うくらいのなら出来ると思う……」

いうと、一色はうんうんと頷きながら俺の言葉をノートの端に書き込んでいく。

なんか病院の問診みたいな雰囲気だなと思いつつ、その意図を聞いてみることにした。

「なあ、一色。この質問ってなんか意味があるのか？」

尋ねると、一色は顔をあげ、にっこり微笑む。

「ありますよ。人にモノを教えるのにその相手が何がわからないのかわからないと、教えようがないじゃありませんか」

確かにごもつとも。納得し話の続きを促すと、それに応えて一色は話を続ける。

「それで、苦手というのはわからないからだと思っんです。

なのでいつ苦手と感じたか質問して、次に本人はどのくらい出来ていると思っっているか聞いて、

最後に本当に本人が出来ると考えているところまで出来るのか確認しようと思っんです」

「勉強って結局は習ったことの積み重ねじゃないですか。

小学校で習ったことの応用を中学校で習って、さらにその応用を高校で習うみたいな」

その言葉に頷きながら、いつもは自分や雪ノ下たちに頼ってくる後輩の意外な一面を見ている気がして、神妙な顔になってしまふ。

俺の素晴らしい国語力を見せつけ尊敬させようと企んでいたのに、このままでは俺が尊敬して一色さんとか敬称で呼んでしまいそうだ。

そんな俺の内面を知ってか知らずか、一色は人差し指をぴつと立てる。

そして立てた指をふりふりしながら話を続ける。

「例えばの話ですけど、かけ算や割り算がわからないまま

塩分濃度や時間と距離の問題に進むことはできないですよね？」

「数学が苦手な人はどこかのタイミングで、その後の問題を解くのに重要な部分を

わからないことがあるまま進んでしまう。そんな感じだと思うんです」

なんだかちゃんとしている一色に俺は戸惑いを覚えてしまう。

こういうのを狐に化かされるというのだろうか……と思いつつ、感心した声が出てしまう。

「お前なんか、ちゃんと先生って感じだな……」

俺の言葉に、一色はあわあわしながら顔の前で両手をぱたぱたとさせる。

そして「弟によく勉強を教えているので、こういうの慣れてるんです」というと

照れくさそうに頬を染める。

俺も小町に勉強を教えたことは多いが、殆ど「暗記だ」としか言っていないかったことを思い出す。

俺のお兄ちゃんスキルは一色のお姉ちゃんスキルに負けているんだろうか……

そんな思いに耽っていると、一色がごほんとか咳払いする。

ちゃんと聞けっつてことですね？ すいません。

姿勢を正すと、それを見た一色はうむっと頷く。くう……、悔しい！

「それでですね。簡単なテストをちよつと作ってきたんですけど、やってみませんか？」

一色はいうと、じつとこちらを見つめてくる。

俺が頷くと、一色は少し気まずそうな表情でもじもじします。

「あの……。馬鹿にしているとかじゃないので、気を悪くしないでくださいね」

一色が言つて鞆から取り出したのは、小学一年生の足し算や引き算から、六年生で習う

分数の足し算・引き算などの問題が記されたテスト用紙だった。

そこまでアホだと思われていたことにショックを受けつつも、手渡された用紙に目を通してみる。

それには学校で行うテストと同じように、簡単な計算問題で始まり、次に複雑にした計算問題

最後には図形の面積を求める問題などが記されていた。

足し算や引き算問題は、一桁ではなく四桁やそれ以上の問題だったので

俺のプライドもかろうじて保たれた気がした。

まあいい。俺の頭脳をスパークさせて用意された全てのテストで満点を取れば

一色も俺を尊敬するだろう。しないか？ しないな。

それに逆に考えれば、余裕で満点が取れる（と思う）テストをさくつとこなし、次に進めば良いのだ。

そう思つて一色に不敵な笑みを見せると、一色はそれまでの申し訳なさそうな表情を一転、

にやつと嫌な笑いを浮かべた。

「先輩、一問五点計算の二十問です。でもですね？　一問でも間違えたら……」

言つてる意味、分かりますよね？」

一色が楽しげに口にした、「一撃必殺」を絵に書いたような言葉に

俺は電流を浴びたような衝撃を覚える。

そうだ……俺は今、小学生ではなく高校、しかも三年なのだ。

小学生の問題を出来て当然。もし出来なかつたら、穴を掘つてでも入りたいレベルの恥ずかしさ。

ミスが一つも出来ないと思うと背中に冷たい汗が流れる。

いや、さすがに小学生の問題なら大丈夫だろう。大丈夫かな？　大丈夫だよな？

やべえ……なんかすごく緊張してきたぞ。手に汗握るつてこういう事を言うんだな。などと考えていると、一色から「始めますよ？」と声をかけられ、

俺は硬くなった表情でそれに頷く。

そうして一色の「よーい、始めです！」の気の抜けた掛け声とともに、俺は数学から飛び降りて

というより落下して、算数のテストに取り掛かるのだった。

×  
×  
×

極度の緊張でぐったりと、椅子の座る俺の袖を一色が引いてくる。

視線を向けると、一色は音を立てないように小さく拍手をしていた。

「先輩、お疲れ様です。全問正解で満点でしたよ♪」

一色に自分のことのように嬉しそうにいう。それでなんだか照れくさくなってしまう。

減らず口の一つでも叩こうかと口を開きかけた俺の目に、落ちた表情の一色が映り慌てて口を閉ざす。

「私が中学の頃の話なんですけど、クラスの子に数学を教えて欲しいって頼まれたんですよね」

「それで教えてて気づいたんですけど、その子、小学校で習った基本が全く出来てなかったんです」

「なので教えて欲しいっていわれた数学も、頑張つて教えたんですけど、全然理解してもらえなくて……」

「なら一旦小学校の問題に戻つてやつてみようっていったら、

馬鹿にしてるのかつて怒鳴られて、凄く怒らせちゃつて……」

訥々と語る一色の声に、俺は黙つて耳を澄ませる。

そして話し終えた一色は俺を上目遣いで窺うと、囁くような声を出す。

「それで先輩も、その子のように怒つたら嫌だなって思つたんですけど……」

それでもそのなんと言うか、せつかく今までの恩返しが出るのに

中途半端なことはいしたくないなって思いました……」

「でも先輩がテストをしている時に、誰かが入つてきたら嫌かなって思つたんです。

だからその、鍵を……」



その言葉に、俺は口をぽかーんと開けてしまった。

何か言わなくてはと思うのだが言葉が見つからず、仕方なくありふれた言葉を返してしまおう。

「その、悪いな。そのうち礼はするから」

「……別にそういうのはいらないです」

俺としては珍しく本気でいったのだが、一色はふいつと顔を背けてしまった。

## 小町弁当

拗ねたように顔を背ける一色の横顔を見ながら、頭をがしがし搔く。

照れくささを感じつつもきちんと礼を伝えようと思ひ感謝の言葉を口にする

一色は嬉しそうに、にこつと笑顔になつてくれた。

それでほつとした俺は鞆から小町お手製の弁当を取り出すと、先ほどの一色の言葉に思うことがあつたのでいつてみることにした。

「そのなんだ。恩返しとか、そういうのは気にしなくていいぞ。

単にそういう部活だからそうしてるといふか、そうしただけなんだから」

いうと、一色は表情を強ばらせ、また顔を背けてしまう。

「じゃあ先輩。先輩が奉仕部じゃなかつたら、私のこと助けてくれなかつたんですか？」

「いや、そういう訳じゃ……」

「もういいです。お昼ご飯、食べに行きましょう」

一色は硬い声でいうと、自分も鞆からお弁当を取り出し、部屋の鍵を外す。

そして学習室を抜けて廊下に出ると、歩調を早め俺の少し先を歩く。

前を歩く一色の華奢な背中を見ながら、もつと上手い言葉があつたのにと後悔してし

まう。

これじゃ由比ヶ浜の時と同じじゃないか。

悪意や敵意にはそれなりに対処出来るのに、優しさや気遣いには上手く対処出来ない

ままの自分に

嫌気が差してくる。

「なんだその、すまん。気にするなって言いたかっただけなんだ」

その背中に声を掛けると、一色は歩調を緩めて俺の隣に並ぶ。

そして俺の耳元に顔を寄せると囁くような小さな声でいう。

「いえ、私の方こそ生意気なこと言ってますいません」

生意気とかそういう事じゃなくと、また要らんことを言いそうになる。

それで、少し考えてから口を開く。

「ありがとな。手間かけるけど、これからも宜しく頼む」

「……いえ、こちらこそよろしく願います」

一色はいうと、ペこりと頭を下げる。

俺も慌てて頭を下げると、それを見た一色がぐすくす笑う。

よし今度は正解のようだ。ふう……、女子との会話は本当に疲れる。

マニユアル化して欲しいもんだよな、ホントに。

×  
×  
×

土曜日の昼下がりに。

平日に比べ部活や自習をしに来た生徒しかいないため、普段の賑やかしさはなくなるとても静かだ。

窓の外に目をやれば、遠く海の上に入道雲が広がっているのが見えた。それを見やつて、ここから景色を見ることも今年で最後なのだと思つた。なにより感慨深くなつてしまう。

そんな思いに耽つていたからか、一色の声を聞き逃してしまい慌てて声を出す。

「すまん。ちよつとぼーつとしてた」

いうと、一色は困ったようなはにかみ笑いを浮かべた。

「その、本当は迷惑じゃなかったですか？」

なんの事かと思ひ、視線で先を促す。

「えと、勉強会のことです」

「職員室でもいったが、この時間なら俺も暇だし問題ないぞ？」

「でも先輩、受験生ですし。それに先輩行くの私立文系じゃないですか？」

なのに受験科目でもない勉強をさせることになっちゃったわけで……」

あの一色が、なんだかしおらしい事をいつてくる。

らしくないその姿に良くないものを感じ、周囲を見渡す。

特に不吉な事が起こらないことを確認してから、彼女の言葉を考える。

一色の心配はもつともだが、俺は無理せずとも合格できそうな大学を選んだから

変に油断しなければ平気だと思ふ。なのでそのまま伝える事にした。

「自宅から通える距離の大学で、楽にはいれそうなどころだし問題ないぞ？」

まあ一人暮らししてもつと上を目指すなら話は別だが」

いうと、一色はほつとしたような表情を浮かべる。

もつとも千葉なら都内の大学も一時間そこいらでいけるので家から出る必要もない。

チバラギと汚名を被ることあるが、茨城とは違うのだよ千葉は！

あつても、ガルパンは大好きです。劇場版ガルパン楽しみだなーと考えていると

一色は人差し指を顎にあて、くりつと小首を傾げた。

「家から出る気は無いんですか？」

「家から出たら小町と離れちゃうだろう。俺には絶対無理」

「ただシスコンなんですか……」

あーでも、小町さん先輩と違つて凄く可愛いですし、彼氏とかすぐ出来そうですけど  
「逆説的に俺は凄く可愛くないって言いたいのか？」

まあ小町が男を連れてきたら、俺と親父がこの手を血と罪で染めて適切に処理するか  
ら大丈夫」

「処理つて……。雪ノ下先輩みたいで何か怖いからやめてくださいよ」

あつ、やつば雪のんのイメージつて一色もそうなんだ。

最近、少し丸くなったけどたまに切れ味鋭いところ見えるよね、あの子。  
油断したらバツサリみたいな感じで。

「てかお前だつて、弟が彼女連れてきたら嫌じゃない？」

「ウチの弟、もう彼女いますよ？」

「えつマジで!? 確か小学六年生だったよな、お前の弟つて」

「ですです。えつーとですね。先週の日曜に家に連れて来たんですよ、彼女。」

それで部屋に飲み物とお菓子を持っていていったんですけど、ノックしても返事がないから

ドアを開けたら、キスしててビックリしました。進んできますよね、最近の子って」

おいおいマジかよ……。政府も二次元規制する前に小学生の恋愛禁止にしろよ。

なんだったら中学生も禁止。もう俺は中学生じゃないしね！ 高校生も考えよう。

まあ禁止されなくても俺はセルフ禁止状態な訳だが……。

そう思つてぐぬぬと唸っている、顔に出ていたのだろう。

それを見た一色が、にやつと嫌な笑い方をした。

「先輩。もしかして、キスとかしたことない系ですか？

でもでも男子って付き合った女の子の人数競つたりするじゃないですか。

そう考えるとですよ、ずっとお一人様だったりすると、寂しくないですかねー？」

なかなか良い煽りを見せる一色。

しかし雪ノ下との会話で鍛えられた俺には、そんな煽りは毛ほどにも通じない。

今それを証明してやろう。

「たしかに男にとつては勲章だよなあ、恋愛の数つて。それだけうまくいかなかったつて

話なんだけどな。てか、そーいうお前は、キスしたことあるのかよ？」

いうと、一色はうぐつと言葉を詰まらせ顔を背ける。

そして「そーいうのは好きな人とじゃないと……」とごによごによと呟く。

そんな彼女を見て、俺は意外に思ってしまった。

一色はモテるだろうから、その手の経験はあるものとなんとなく思っていたからだ。

もちろん当人には言えないが。

「つまり一色は、小学生の弟に負けたってことだなー！」

まるで自分の事のように勝ち誇った表情で俺がいうと、一色はぶくつと頬を膨らませずびしつと人差し指を突きつけてくる。

「先輩だつてきつと、小町さんに先越されちゃいますよー！」

「お前さ、そんなこと言うなよ。悲しくなるだろうが」

いうと、一色は呆れたようにくすつと笑う。

そんなやり取りをしていると、ベストプレイスに到着した。

×  
×  
×



小町は総武高に入学してから、自分の分と一緒に俺の分の弁当も作ってくれようになり

そのお陰で俺のお昼事情は大幅に改善された。

それで今日の弁当も、「休み前だから材料がないよ？」という小町にあるもんで充分と  
いって

作ってもらったのだ。

すまないね小町ちゃん、感謝！ と手を叩きつつ、俺は夢の小町弁当、訳して「こま  
べん」の蓋を

ワクワク気分で開ける。

のだが胸をときめかせ蓋を開けた「こまべん」の中身は、北海道の観光名所でお馴染み  
の

時計台を見た観光客のような気分に俺をさせる。

うわ、またトマト入ってるよ。なんか弁当箱の半分が赤いんだけど。

確かにあるもんで充分といったが、これは……

箱の中身をむーんと唸って見てみると、一色がベンチを横滑りして、ずずつとそばに寄ってきた。

そして弁当箱の中身を興味深げに眺めだす。

「先輩、トマト好きなんですか？」

「いや、嫌いなんだけど……」

「なんか、トマト弁当みたいになってますね」

「赤すぎだよな、これ。」

まあ材料がないって小町がいったのに無理いつて作って貰ったからなあ。

うわ……、トマトの汁でご飯まで赤くなってるんだけど」

俺の悲痛に満ちた声を聞いて、一色はくすくすと笑っていたが

いつまでも食べようとしないうちに見て窘めてくる。

「小町さんの愛情に満ちたお弁当じゃないですか、ちゃんと食べないとダメですよ？」

まあ先輩、もしあれならオカズ交換します？」

その言葉に弱々しく頷くと、一色はトマトを半分引き受けてくれ、代わりに彼女お手製の

卵焼きやら唐揚げを弁当箱に入れてくれる。ありがてえ……

「悪いな、一色。お前の弁当まで赤く染めちまって……」

「全然いいですよ。私、トマト好きですし。」

でも小町さんも夏休みくらい、ゆっくり寝かせてあげたほうが良いかもですね。

先輩、もしそうなら夏休み中のお昼ご飯、どうしますか？」

「そういや週三回とはいえ、夏休み中も学習室で勉強するから学校来るんだったな。」

小町も高校入って初の夏休みだしわざわざ俺の弁当作らせるのも悪いしなあ……

「んー来る途中にコンビニあるから、そこで買ってくるかなあ」

「それなら夏休み中は、私が先輩のお弁当を作りましょうか？」

「なんか一色が、テンプレラノベでよくみる提案をしてきた。」

「だがそこは一色。とてもじゃないが油断出来ない。」

「えっ、いいのか？ 後で時価とかいって、とんでもない金額吹っ掛けたりしない？」

そんな俺の疑惑に満ちた声に、一色はむっとした顔をするが、すぐ顔を綻ばせると

悪戯っぽくいつてくる。

「じゃあせんぱいっ、出世払いということだ！」

「やっぱ金取るのかよ……と思いつつ、卵焼きを頬張るとダシが効いてとても美味かった。」

## お支払い方法の変更

どこぞの大佐のようなカラーリングが赤すぎる弁当を平らげると、俺と一色は二人、満足気な吐息をつく。夏の日差しは心地よく、つい微睡みそうになってしまう。

これはいかんと立ち上がると、二人で学習室へと戻る。

そして午後からは、中学で習う範囲を出題したテストをこなしたのだが、その結果はあまり芳しいものではなかった。

「先輩はどうやら関数と方程式が苦手みたいですね。」

一年で習った基本は大丈夫みたいですけど、二年で習う範囲がうる覚えみたいな感じ  
です」

一色は生真面目な表情で、俺の丸よりバツが多い解答用紙を眺めながら呟く。

そしてこちらへ身体を寄せ用紙を裏返すと、その裏に俺が間違った問題をさらさらと  
書き込む。

「では先輩、出来なかった問題を私と一緒に解いてみましょう」

一色は微笑みながらいうと、連立方程式の解き方や一次関数四変域の式の出し方を  
ゆっくりとした口調で丁寧に説明してくれる。

その声に耳を傾けながら、俺の返事の返し方も普段の雑な「おう」とか「ふむ」から「はい」とか「わかりました」と丁寧なものに変化する。俺は礼儀正しいのだ。

俺の変化したそれに、一色はくすくすと笑いながら説明を続けてくれる。

一色の教え方はとても分かりやすく、問題に詰まる俺を見るとちよこちよヒントを出して

正解へと導いてくれる。

そうして似たような、でも少し違うひねった問題を解いた問題の隣に書くと

今度は一人で解くよう促してくる。

そうやって根気よく何度も繰り返し問題を解いていくと、腑に落ちるといえるのだろうか？

なんとなく覚えていたそれらの公式の意味が、きちんと理解出来たように感じた。

最初の会話を医者との問診みたいだと思ったが、多分似たようなものなのだろう。

病院について問診も検査もせず、取り敢えず何が悪いかわからないから

全部切ってみましょうか！ などと医者に言われたら怖くて仕方がない。

そう考えれば一色のやり方はとても理にかなっていると思う。

俺の数学でわからないところをきちんと把握し適切な処置を施してくれる。

俺は一色のやり方に感心しつつ、彼女にがっかりされないよう黙々と問題を解いてい

く。

日も大分落ちて外が暗くなった頃。

隣で現国の問題集を解いていた一色が疲れたような吐息をつくとき、ペンを机に置く。

「先輩。今日は練習ですし、このくらいにしましうか」

その声に顔を上げると、一色の方へ向き直る。

「この問題もう少しで解けそうだから、解いてからでもいいか？」

いうと、一色はにぱつと笑ってどうぞどうぞという風に両手を出してくる。

それに頷きを返し解きかけの問題に取り掛かり、なんとか解き終え答え合わせをして

いると

一色が弾んだ声で話しかけてきた。

「先輩、凄くやる気あるんで教えがいがあります！」

「やつ、なに？ お前が一生懸命教えてくれてるしな。頑張らねーと」

俺の言葉に、一色は身体ごとふいっとそっぽ向く。

視線を向けたその頬と髪から覗く耳は、ほんのり朱に染まっていた。

「……先輩もその、私にちゃんと国語を教えてくださいな？」

一色は呟くと、取り繕うように前髪をさっさつといじり始める。

そんな彼女に微笑ましさを感じながら、俺は「おう、任せろ」と答えた。

×  
×  
×

後片付けを済ませると、二人とも身支度を整えて廊下へと出る。  
先に帰った生徒から預かっていた鍵で、一色が扉に鍵をかけた。

これにて本日の勉強会は終了。

学習室から離れ、人気がない廊下を二人で歩き出す。

窓の外、暮れていく空を眺めていると、一色が控えめな声で口を開く。

「その、どうでしたか先輩？ 一緒に勉強してみた感想は」

「一色の教え方すごくわかり易くてほんと助かるわ」

「そう言ってもらえると、私も嬉しいです」

一色はほくほくした顔でいうと、満足そうな吐息を漏らす。

それを見て誰かと一緒に何かをすることに慣れていない俺は考えてしまう。

「俺も国語をきちんと教えられれば良いんだけどな。上手くやれるといいんだが……」

「先輩も私のために一生懸命、教えてくれないと駄目ですからね？」

一色はいうと立ち止まり、それに合わせて俺の足も止まる。

するとじりつとこちらにずれてくるので距離の近さに驚いて距離をあけると、

さらにずれてきて俺の耳元に唇を寄せ、こそつと秘密めかすように囁く。

「上手じゃなくても大丈夫ですよ。その気持ちだけで充分です」

「お、おう、頑張るわ」

上半身を仰け反らせて言うのと、一色は楽しげに表情を綻ばせる。

そしてくすつと笑った。

× × ×



一色に通用門で待つてて欲しいといわれ、生徒会室に用があるという彼女と別れると俺は昇降口から出て駐輪場へと向かう。

自転車の鍵を外し通用門へと向かうと、その途中、ジャージ姿の戸部と出会う。

俺は顔を逸らし戸部に気づかないフリをすると、足早にこの場を離れようとしたのだが

俺に気づいた戸部は手をぶんぶん振りながら近づいてきた。

「あんれー？ ヒキタニくん！ マジこんなところで会うとか奇遇じゃね？」

俺今、後輩がサボってねーか、部活の様子を見に来ただけで、ヒキタニくんはどしたん？」

こんなとこつて学校なんだから奇遇でもなんでもねーだろう。

しかも聞いてもないのに自分が何してたか報告してくるし。

なんか友達みたいだから辞めてほしい。まあ戸部だし仕方ないか。

「んっ、いや、何？ 勉強にな。家だところサボちゃうし」

話を振られた以上、返すのは礼儀だろう。そう思つて答えると、

それを聞いた戸部は襟足をぐいぐい引つ張り、さらにおでこをぱちん叩く。

「分かるわー！ 俺もそーなんだわ！ 家だとなに？ 集中出来ないっていうかさー

！」

こんなにも落ち着き無きそんな戸部が何かに集中することが出来るのか？

そんなもつと根本的な部分を俺が疑っていると戸部は前のめりになってくる。

「じゃあさヒキタニくん、今度二人で一緒に勉強しようぜ！

あつ、なんなら隼人くんも一緒に、三人でもいいけど？」

「えっ……、いや、嫌だよ？」

最悪すぎる組み合わせを提示され、俺は顔と両手を勢いよく振って全力で拒絶したが

戸部は聞いちゃいない。

「んじゃ、隼人くんにも伝えておくわー！ 決まったらメールするー！」

戸部はというと、近づいてきた時と同じように手をぶんぶん振りながら

グラウンドの方へ走り去っていった。

取り残された俺は嫌なイベントフラグが立った事に憂鬱な気分になりながら

とぼとぼと通用門へ向かう。

すると一色は既に門に来ており、俺に気づくと大きく手を挙げる。

そしてとてつと走り寄ってくると、むっとした表情で口を尖らせる。

「もう、先輩。先に帰えちゃったかと思いましたよ！」

「ちよつとそこで、戸部に捕まってな」

「あー、戸部先輩ですか。なら仕方ないですね」

一色はうわーとうんざりした顔でいうと、へつとバカにしたように鼻で笑う。相変わらずこいつの戸部の扱いはひでえな。まあ俺も人の事いえないが。

「ところで先輩」

「なんだ？」

「その、お弁当のことなんですけど……。やっぱり前払いで良いですか？」

「ああ、うん。いくらだ？」

いって財布を出す。

それを見た一色は首を横に振り、困ったような顔でいう。

「その、駅まで送り迎えして欲しいです」

「そんなんで良いのか？　ちゃんと払うぞ、材料費とか」

「いえ、そんなのが良いのです」

一色はいうと顔をあげる。そしてはにかむように微笑んだ。

## 読書をしない人への読書の薦め方（失敗例）

既に夕刻と呼ぶにはやや遅く、川沿いの並木道は暗くなってきた。

東京湾に沈む夕日を背にして、駅へと向かう道を一色と二人で並んで歩く。

「そんな難しいこととした訳じゃないんです。弟に教えるときと同じようにしたただけなんですよ。」

だからやり方と聞かれても何て答えれば良いのか……」

てこてこ歩きながら俺がした勉強の教え方を教えて欲しいという質問に、

一色は小難しげな顔で首を捻る。

そんな悩ましげな彼女の姿に、俺の悩みもさらに深まる。

人と協力すること。

俺はあまりそういう経験がないから、誰かにきちんと勉強を教える方法がわからないのだ。

それで仕方なく、ざっと記憶をさらってみる。

すると、一色本人が口にした国語が苦手な理由を思い出す。

読書を殆どしない彼女は文章自体にあまり慣れていないとのこと。

なので、もしかして英語も苦手か？ と尋ねると、一色は困ったような表情を浮かべる。

まあ同じ文字を扱う学問だから仕方ないのかも知れない。

そう思っていると、一色は拗ねた口調で英語不必要論をぶちかましてくる。

「だって、日本語あるのに英語っていりますか？」

その日本語もお前は不自由なんだろうが……、と思っただが、言いたいことはわからなくてもない。

ならばどちらかの学力を上げれば、ある程度はもう片方の学力も上がるかも知れない。

国語と英語の学力を上げる。俺が考える一番手っ取り早く効率の良い方法。

それはそれぞれの言語で書かれた文章を読んだり、もしくは書いたりすることだと思う。

習うより慣れろというやつだ。

最初に読んで次に書いてみる。まあ一杯読んでも書けるとは限らないのだが。俺がそうだし

なのでまず本を読む事を薦めようとしたが、興味が無いものを読むほど苦痛な事はないと思う。

それで取っ掛りになるか分からないが、一色が普段どんなものを読んでいるか尋ねてみることにした。

「一色はその、普段どういったものを読んだ？」

「んー、まったく読まないですねえ。長い文章読んできるとすぐ眠くなるんです。なので勉強するのに教科書を読むくらいですね」

「そ、そうか、まったく読まないか」

予想してた以上に本を読まない一色に、さすがに俺も言葉が詰まる。読書が当たり前の俺には読まない人の心理がよくわからないからだ。

どうしよう……と悩んでいる俺の姿を見て一色は慌てたように

「ファクション誌とかは読むんですけど」と呟く。

ファクション誌はどちらかという読むというか見る絵本だよなあと思いつつ

一色が興味のありそうなジャンルについて考える。

「あ、あと、好きな芸能人が書いたエッセイとかは読んだりしますよ！」

考え込んでいる俺を見て、一色は付け足すように言ってきた。

芸能人のエッセイか。

あーというのは確か、専門のライターが当人から話を聞いて綺麗に纏めると聞いた事がある。

ただ芸能人とかあんま興味ないんだよな、俺。

自分が全く興味がないジャンルだと薦めようがなくさらに困る。

俺と一色が二人とも好きなものか……。

悩む俺の脳裏にひとつだけ、それに近いものが思い浮かぶ。

「お金」である。

ジャンルとって良いのか謎だがそこからさらに思考を進めると

ある程度ではあるが方針らしきものが見えてきた。

「一色。お前、お金は好きか？」

俺の言葉に、一色の口が「おっ」と小さく開き、瞳をきらつと輝かせる。

「大好きですよ！ すごく好きですよ！ 愛しているととっても過言ではありません。

なんですすかくれるんですか、いつでもどこでもいくらでもウエルカムですよ！」

食いつきすぎでしょう、この子……。じりじりにじり寄ってくるし。その鼻息も心なしか荒い。

「……あげねーよ。むしろ俺が貰いたいまである」

呆れた声で答えると、一色はがくつと肩を落とす。

そして恨みをこめた声でぶつぶつとなんか言ってくる。

「なんでですかー、期待させておいて、先輩にはがっかりですよ」

「いや、そんな肩を落としてがっかりされても」

応えながら考える。ふむ、お金には大変興味をもっているらしい。ならば話を進めやすい。

「やっぱ好きなのはあれか、諭吉か？」

「もちろん、もちろんですよ、先輩！」

諭吉さん以外ありえないというか、最初から諭吉さんに決めてました！　まであります」

なにがあるの……と呆れながらも、予想通りでほつとする。

まあ、諭吉さんを芸能人と呼んでいいのかわからんが、諭吉さん自体は好きそうだな。

諭吉さんがプリントされた紙が好きだけで、本人には興味はないかも知れんが。

だが全然知らん人よりは、彼女の興味を引けるかもと考える。

「一色。なんで諭吉さんが一万円札の肖像なのかわかるか？」

さっぱりわからん。そんなぼけつとした顔で一色は俺を見る。

なんか可愛いな、こいつ。と思いながら話を続ける。

「中学から高校の六年間も勉強するのに、俺たちが英語を苦手ですませてしまうのは

最初から習う必要がないからなんだ。なんでかっていうと日本語が万能すぎるんだ

よな。



日本語は凄く応用が効く言語で、英語も含めたほとんどの言語を日本語で訳せるんだ」

「だから本屋に行けば日本語で書かれてある本ばかりだろ？ 世界文学や学術系の殆ど総て。

それでうちの親父に聞いた話なんだが、じゃあ他のアジアの本屋に行けば、日本みただい

その国独自の言語で書かれてある本ばかりかというところ、そうじゃないらしい」

俺の話をつむつむと聞いていた一色は、他のアジアという単語を耳にすると前のめりになる。

「先輩のお父さんで、仕事で海外とか行くんですか？」

「商社勤めだからな。若い頃はあっちこっちに行つてたらしいぞ」

「商社って、確か給料良いんですよね？」

「え？ ああ、どうなんだろうな。うちは共働きだけど」

なんか伝えたいこととまったく違う方向に、一色の興味が向いてしまっている。

それでも話を聞く気はあるようだ。一色は俺の袖を引くと、並木道沿いのベンチに座るよう促す。

二人でベンチに腰を降ろすと、話しの続きを口にする。

「半数が英語の本らしい。なんでかっていうと、英語を母国語に翻訳できないから。翻訳するにも母国語にはない概念。概念の意味はわかるか？」

物事に対してこんなもんだらうと感じ取る、おおまかな意識と言えばいいのかな」「概念……」と一色は呟き、はてなと首を傾げる。

仕方がない。ここは彼女にも分かり易いように例え話でもしよう。

「例えばだな、ある会社で一色が営業の仕事をしてるとする」

「いえ、しませんよ私。だって玉の輿に乗って専業主婦になりますし」

心外ですと言わんばかりの顔で、しないしないと両手をぶんぶん振りまくる一色。

例え話だつていつてんだろと思いつつ、同じく働く気のない俺はそんな彼女に親近感が芽生える。

「い、いや。しませんじゃなく、してると仮定してくれ……」

「はあ……」

なにやら不満げな一色の表情。まあ気持ちはわかる。働いたら負けだしね。

だがここで諦めたら、一体なんの話をしていたのかわからなくなるので、頑張って話を続ける。

「でな、例えば不況だと物が売れなくなるから、一色も現在の不況の中で

営業に朝から晩まで駆け回ってもどうせ売れないだろうと思う」

「こういう感じで、何々だからきつとこうだろうというイメージを、

概念と呼んできると思ってもらえればいいと思うぞ」

「……なるほど」

今度は一色も納得してくれたようだ。ちよつと感心したような目で俺を見てくる。

よしよし多少なりとも俺の評価が上がってくれたようだ。調子にのつた俺は更に続ける。

「それで翻訳するにも母国語にはない概念が英語には無数にあるんだ。例えば光合成は英語で *photosynthesis* だが、多くのアジア諸国にはそれに当たる言葉が母国語にないんだ

じゃあ理科の授業はどうすんのって話なんだが、英語で勉強するしかないらしい。だから何を学ぶにしても英語が必要になるんだ」

「昔の日本にも、そういう英語知らずして学問成らずって時期があったんだ。

当時はまあオランダ語だったけど。今の俺たちの文明の基礎を築き上げた

ヨーロッパの人たちの文明思想や学問を日本語で著した本がないから、ヨーロッパから講師を招いて、その講師の言葉で学問に励んだらしい」

俺の話に一色は、ほーと感心混じりの声を出した。

「NOVAとかみたいなき感じですか？ 駅前留学とかそういった感じの」

ちよつと違うがまあ認識としては間違つてないだろう。

そう思つて頷くと、一色も頷いて先を促してくる。

ここからが本番。上手く伝わるといいんだが……

「でもそうやつて学んだ当時の人たちはそれで決して満足しなかつたんだな。

自分たちに続く明日の子供たちには自分たちが学んだ事を母国語で学んで欲しい。

そこから日本語にはないヨーロッパの言葉を、沢山の造語を作つたりして

日本語化するという途方もない作業をやつてのけたんだ」

「東大あるだろう。そこに昔は翻訳科というのがあつてな、毎日のようにヨーロッパの言葉の

日本語化という仕事をしてたんだ。それをしていたのが福沢諭吉さんとかだつたりするわけだ。

経済や自由という言葉は諭吉さんが日本語にしたんだぞ」

まるで自分がやつたかのように自慢げに語ると、わかつたか？ と確認するよう一色を見る。

それに応えて一色はにやつといやらしい笑みを浮かべると、親指と人差し指をくつつけて

お金をあらわす丸を作る。なんだよその手……

「いくらくらい貰ってたんですかね？ やっぱり一千万くらいですかね？」

「い、いや……。金のことじゃなくてだな……」

どうしてもお金の話にもつていこうとする一色。

お札の肖像画に選ばれるほどの業績を残した諭吉さん。

その彼が書いたエッセイともいうべき学問のススメを、一色に読ませようと企んでた俺は、

困つてしまう。こんなはずでは……

それでも咳払いをして気を取り直すと、なんとか話を続ける。

「ま、まあ、だから今の完成された日本語がある訳だ。その仕事の素晴らしさは

一色がさつき口にした「日本語あるのに英語いります？」って言葉につながるわけだ」

「俺たちが英語を苦手ですます理由、それはもうそもそも英語が必要でなくなった

言語環境の中で生活してるからなんだよな」

そんな素敵な仕事をした諭吉さんの本を読んでみないか？

そう言いかけた俺の言葉を一色は手をあげて遮る。

そしてベンチから勢いよく立ち上がると、えっへんと胸を張る。

「わかりました先輩。つまり先輩が言いたいのは、諭吉さんたちの想いに応え

もう英語は勉強しなくても良い！ って事ですよね？」

「うむ。えっ？　そうじゃねーから！　違うから」

なんかダメすぎる方向で納得してしまった一色に、俺は慌てて説明しようとするがそんな俺を尻目に「早く帰りましょー」と一色はいうと、ささっと歩き出してしまふ。仕方なく俺もその後を追ってベンチから立ち上がると、二人並んで歩きながら、駅へと向かったのだった。

×  
×  
×

到着した駅の改札口。改札を抜けた一色と俺はさよならの挨拶を交わす。

「先輩。明日、お家にお邪魔させていただきます。

それと勉強会の方、よろしくお願いします！」

一色の言葉に、俺はうむつと頷いて応える。

一色はペこりと一礼すると歩き出し、人ごみに紛れてだんだん見えなくなっていく。その後ろ姿を見送っていると、後ろからとんとんと肩を叩かれる。

「あれ？ 比企谷くん。また会えたね！」

その聞き覚えのある声に、振り返った俺の視線の先にはほわつとした笑顔を浮かべためぐり先輩が立っていた。

## 明日

駅の改札で偶然出会ったためぐり先輩は、にこぱーつと人懐っこい笑顔を浮かべると俺の傍にてつと小走りで寄ってきた。

「こんばんは、比企谷くん！」

「こんばんはです」

挨拶を交わすと、先輩は不思議そうに首を傾げる。

「あれ？ 比企谷くん。今日って学校だったの？」

「ちよつと一色と、学校で勉強してまして。それで今、一色をここまで送ったとこだったんです」

「そうだったんだ。じゃあ一色さんとは、入れ違いになっちゃったんだね」

「そうですね。ほんと今、一色と別れたんで」

俺の言葉に、めぐり先輩は周囲をぐるつと見回すが、改札は多くの人で賑わっており一色の姿はそれに紛れてもう見えなくなっていた。

それで先輩は俺の方へ視線を戻すと、感心したような声でいう。

「でも偉いよ！ 勉強教えてあげてるんでしょ？」



まあそう思うわな。俺、一色よか年上な訳だし。

だが実際は俺が一色に教えられていたので返事に困る。

だからといって変にカッコつけて嘘をつくのはいけないことだと思う。

それは一生懸命俺に数学を教えてくれた一色への裏切りのように感じる。

なので俺は深く深く思い悩んだ末、口を開く。

「まあ、年上ですし」

すまん一色、来週からちゃんと教えるから弱い俺を許してくれ。

そう心の中で一色に土下座をしていると、先輩が手に買い物袋を持っているのが目に入る。

「めぐり先輩は買い物物の帰りなんですか？」

尋ねると、めぐり先輩は「あっ」と声をあげ、ぱしっと手を叩く。

「うんうん。あのね、本を買いにいったの！でも近所じゃ見つからなくてね

それで千葉まで行ってたんだよ」

先輩はというと、俺の目の前に「見て！見て！」とばかりに買い物袋を突き出してくる。

同じ読書好きとして先輩の気持ちは本当に良くわかる。

俺も漫画やラノベを紹介するサイトで良さそうな本を見つけると、

直ぐにでも読みたくなってしまふからだ。

それで本屋に向かつてても新刊でないと言いついてない場合が多く、残念無念また今度な気持ちで帰宅することがあるからだ。

まあ普段の俺であれば、探してる本が見つからないという人に出会ったら Amazon でポチればいいの？ と通称「あまぼち」を薦めるところだろう。

だがめぐり先輩の、なんかすごいお宝を探しにいつて手に入れた！

そんな感じで楽しげな笑顔を見ると、減らず口の一つも出てきやしない。

なので良かったですねと口にしてから、どんな本を買ったのか尋ねてみる。

すると先輩は俺に早く袋の中身を見せたいのかえらく焦った様子で

買い物袋の取り出し口を両の手でがしつと掴む。

そして力一杯開けようとしたのだが勢いが強すぎたのか、袋までビリビリに破つてしま

い。どさどさつと駅の床に中身を撒き散らしてしまふ。

「はわわっ」といつて慌てまくるその姿に苦笑しつつ、この人にはポテトチップスの袋を開けさせない方が良さそうだと思いつながら、床に落ちた本を拾う。

そして目に映つたその本のタイトルの驚いてしまふ。

「……秒速を、わざわざ買いに行つてたんですか？」

「うん！　だつて続きが気になちやつて早く読みたかつたし！」

「ここにこしながらそんな事をいわれたら、こつちまで笑顔になつてしまう。

「そんなに気に入つてもらえて嬉しいです」

「こちらこそだよー！　面白いお話教えてくれてありがとうね」

めぐり先輩はいいながら、一生懸命、ビリビリに破けた袋に単行本を押し込もうとする。

「それどうやつても入らないでしょ……と呆れつつ、代わりになるものはと周囲を見回すと

売店が見えたので、そこで紙袋を買い先輩にそつと差し出す。

「これ、使ってください」

「あ、ありがとう」

めぐり先輩は驚いたように目を丸くしたが、につこり微笑むと受け取ってくれた。

それを使つて本をしまつと、俺を興味深げに見つめてくる。

「えつと、なんですか？」

「ねえ、比企谷くん。ここじゃ落ち着かないし、良かつたら場所を変えて話さない？」

先輩のお誘いに嬉しい気持ちはあるのだが、そういう事に慣れていない俺は戸惑つてしまう。

どこまで先輩に近づいていいのかよく分からないからだ。

慣れていないが故の距離感と警戒心とでも言えればいいのだろうか。

一歩引いたところに立っている過去の自分が「またお前の勘違いじゃねーのか？」といってるようなそんな気がするのだ。

それで固まっていると、先輩が困ったようにおさげ髪をいじった。

「その……、嫌かな？」

ああ、勘違いさせてしまったか。嫌なのは過去を振り切れない俺自身なのに。

「どこかその辺のお店にでも入りましようか？」

努めて明るくいうとそんな俺を見やって、めぐり先輩は嬉しそうに頷いてくれた

×  
×  
×

駅そばのカフェに二人で入ると、俺たちはそこで本の話に花を咲かせる。

読んでるジャンルに多少の違いはあるものの似通った部分も多く、二人とも読んだ本の

話題になると大いに盛り上がり、それで店員さんに注意されてしまったくらいだ。

あつという間に時間が過ぎていき、ふと窓の外を見やると、日は落ちて真つ暗になつていた。

そろそろ帰らないと不味いかな? と思っていると、

先輩の携帯が鳴り先輩は俺に断りを入れて電話に出る。

「もう駅だから、少ししたら帰るね」

先輩はというと、電話を切る。

そして電話を切った先輩は、申し訳なさそうに俺を見る。

「ごめんね、比企谷くん。電話、お母さんで、早く帰つてきなさいって」

「や、そうですね。もう遅いですし。すいません俺の方こそ気づかなくて」

楽しくてつい、気づくのが遅れてしまった。

申し訳なく思いながらレジで精算を済ませると、外へと出る。

すると俺の後について店を出た先輩は、ぷくつと頬を膨らませるとつまらなそうにいう。

「もつと比企谷くんと、本のお話したかったな〜」

その言葉に、舞い上がりそうになってしまう。

それで頬に熱を感じながら暗い夜道を一人で帰すのも危ないと思いきる恐る恐るいつてみる。

「だいぶ暗いですし、良かったらその、送りますけど」

「えへへっ、ありがとう。じゃあ、歩きながらお話しよっか」

めぐり先輩は嬉しそうにいうと、にこっと微笑んでくれた。

×  
×  
×

静かな街に二人分の足音を刻む。隣を歩くめぐり先輩を急かさないう気をつけていると

袖が引かれ、引いている先輩へ顔を向ける。

「ごめんね、比企谷くん。私のせいだよ、店員さんに叱られちゃったの」

先輩はいうと、申し訳なさそうにもじもじしだす。

それを見やって、俺は微笑みながら気にしてないと伝える。

それどころか俺の話に楽しげに応えてくれた先輩に、お礼を言いたいくらいだ。

まあちよつとりアクションが大きすぎて、店員さんに注意されてしまったが。

そうしてまた、二人でそれまでに読んだ本の話をする。

話題は尽きず楽しい時を過ごしていると、不思議な気持ちになる。

まさか俺が女の子と、こうなふうに話すなんてなあ……。

そんな事を考えながら歩いていると、先輩が弾んだ口調で今宵の「めぐり計画」を語りだす。

「まずね、お家についたら手を洗って晩ご飯を食べるでしょ?」と

いきなりプロジェクト発表を始めた先輩に、ちよつとびつくりしつつ頷くと

「それでね。お風呂に入ってさっぱりしたら、お布団にぐるぐる巻きに包まるの」

先輩に、ここまでではOK?みたいな視線を向けられ、俺もOK!みたいな視線を返す。なんだこれ。

「そしたらね、ゆつくりと、秒速を読もうとおもうんだ」

先輩の言葉に相槌を打ちながら、そんな楽しそうな先輩に水を差すようで迷ったが、映画を観てからの方がいいかもですと遠慮がちにいつてみる。

するとめぐり先輩は驚いたように目を丸くする。

「えっ……読まないほうが良いの? もう一卷、読んじやったけど……」

「えっとですね、三部構成の中で一部の桜花抄と二部のコスモナウトは

映画の補完的要素が強いので読んでも大丈夫だと思っんです」

「でも、タイトルにもなっている第三部については、映画だと、

え、もう終わり? ってくらい、すごく短いお話なんですよね」

「それで映画の三年後くらいに出版された漫画版では、そこを大幅に加筆してあるんです。」

なのでそれを見ちゃうとせっかくの良い不親切が無駄になるかなって」

「良い不親切?」

俺の言葉に、先輩は首を傾げてほけつとした表情を浮かべる。

ちよつと抽象的すぎたか。そう思って考え考え言葉を組み立てる。



「物語の全てに解説を入れると、視聴者は疑問もなくすつきりとして終わりますよね」  
「でもそれだとそれだけに、なるじやないですか？」

先輩にゆつくりと語りながら、以前Amazonのレビューで見た、ぶん投げエンドという

言葉を思い出す。

友達がいらない俺は話し合える相手がいないので、自分の見たものを他の人はどう思うのか

気になったときは、よくレビューを見るようにしている。

まあ確かに、そう思う人も多いだろうな。思いつつ、話しの続きを口にする。

「それであえて解説を入れずに空白を入れる事で、その空白を視聴者自身の経験で埋めさせる。」

そういう手法を取ってるのかなと思います」

「なので過去のこと忘れられない人間にとつては辛くてきつい話で二度と見たくないと思わせたり、

逆に過去をきちんと思い出にできれば、当時の感情が蘇ってきて懐かしく感じさせてくれたり」

「そういう経験がそもそも無い人間だと空白を埋めるものがないので

ただの説明不足な作品にしか見えずに訊わからんみたいな」

「ここまで積んでおいたから、あとは観た人それぞれが好きに積み上げるといいよ。

そんな感じが、俺をすごく惹きつけたんだと思います」

俺の言葉にふむふむと頷く先輩を見ながら、あえて口にしなかった本当の理由を懐う。

それは、どんなに素晴らしいものでも時間や距離に負けて駄目になってしまふという当たり前といえども当たり前のことを描いている事。

そしてそんな当たり前の事に、何とか立ち向う主人公の姿が物哀しいと感じ、だけどやっぱり駄目だったという、どうにもしようがないお話だという事。

どんなものでもいつかは終わってしまうという儚さに惹かれ、だからこそ見ていない先輩に対して口にしないほうが良いと思ったのだ。

出来れば真つ白な状態で見て欲しい。そう思えるくらい素敵なお話だと思うから。「……わかった、明日の夜まで我慢するよ」

めぐり先輩が、お預けを食らった子犬のような辛抱堪らんぽい声でいう。

そんな先輩にちよつと可笑しくなってしまう、頬が緩んでしまう。

「や、そんな無理に我慢しなくてよ」

「ん、する」

「そうですねか？」

「うん、する」

先輩は、小さな声で言い切る。

そうして互いに黙ったまま街灯に照らされた夜の道、また少し足を進めると先輩は俺の袖を引いてきて、小さく呟く。

「……やっぱりその、ちよつとだけ読んじや駄目かな？」

先輩はちらつとこちらを見て、目が合うとそつと逸らしてしまう。

そして少し寂しそうな表情を目鼻立ちの整った美しい顔に浮かべる。

それは先輩を妙に幼く感じさせ、それを見た俺は何か覚醒してしまいそうになる。

「さつき我慢するって言ったじゃないですか？」

「そーだけどさ〜」

ぷくつと頬を膨らませて拗ねた声を出す先輩を見て、俺の何かは覚醒した。

「我慢です」

いうと、先輩は道路に視線を落とし、こくりと、小さく頷いた。

やべえ……なんかゾクゾクしてきたぞ。

年上のお姉さんに我慢を強いる喜び。最高ですな、これ！

考えてみてもみなくても、俺の周りって俺に我慢させるやつばかりなんだよな。

雪ノ下とか平塚先生とかね。あ、もちろん一色も。

そんな事を考えていると図書館を通り過ぎ、少し行つた先にある先輩の家に着る。

門先で送つてくれてありがとうといわれ、それに微笑みで返すと

先輩に「おやすみなさい」と告げる。

なにか物足りなさを感じたので、「明日が楽しみですね」と付け足すように口にする。俺の言葉に、めぐり先輩はふわつと微笑み、明るい声で明るいことをいつてくれた。

「明るい日。そう書いて明日だもんね」

その声に、俺も頬を緩めてはいと返事をした。

## 第一章 番外編。彼女たちの日記。

### 彼を知らない私

7月23日（木） 晴れ。夕方に通り雨

今日は午後の講義が休講したので、大学の敷地をゆっくりとお散歩した。もうすぐ見納めになるし夏休みにも入る。

講師都合で急に休講になり、好きな講義だったので少しがっかりしたが丁度良かったのかも知れない。

入学してから四ヶ月。大学という環境に慣れるのに必死だったように思う。慌ただしく日々を過ごせばかりで、こんな風に落ち着いて散策しようなんて思う暇さえ無かったのだから。良い気分転換になったと思う。

その帰り道、ふと気が向いて立ち寄った図書館で、久しぶりに比企谷くんと出会う。相変わらず目付きが悪い子だな。

でも、初めて彼と会った文化祭の時よりも、彼の表情はとて柔らかいものになっていた。

最初は、声を掛けることを躊躇したと思う。

新しい生徒会の子たちや彼が所属する奉仕部の子たちには、たまに遊びにくるね、と  
いつてはいたが、あそこはもう私のための場所ではないのだ。

卒業した学校に近づくのは場違いで、立場を弁えない行動のように思えてしまう。

そこにいたときには、自分がそんな風に思うとは考えもしなかったけど。

そして多分、彼が一人でいたことが、声を掛けてみようと思えた理由として

大きいように思う。

もし彼が誰かとしてその誰かと、今の総武高の様子を楽しげに話してもしたら

私は疎外感と居た堪れなさで、上手に笑うことが出来なかったかも知れない。

もともと私は、笑顔をつくるのが苦手なのだから。

そうやって声を掛けてみたものの、私と彼の間にはそれほど接点がある訳でもない。

すぐに話題が尽きてさよならと告げて、お別れするものだと思っていた。

彼の問いかけに答え、何の気なしに口にした言葉。

私が読みたいと思った本の話を、彼は真剣に聞いてくれた。

そして私に、一冊の本を覚えてくれた。なんか変な勧め方ではあったけど。

まずタイトルが気に入ったように思う。とても短い距離、秒速五センチメートル。

でもそれは、何かと何かの間にはどうしても距離があるという事。

そして少しずつ確実に、離れていくことを示してもいる言葉だと思う。

これまでにひらいた距離。これからひらいていく距離。どこか自分と、重なる言葉だと思ったのかも知れない。

私の問いかけに応え、比企谷くんは一生懸命に本の内容を話してくれた。その声や話しぶりはとても楽しげで、彼の意外な一面を垣間見たような、そんな気持ちに私をさせる。

考えてみれば比企谷くんと二人でゆっくり話したことなど、一度もなかったように思う。

生徒会室の引渡しの時、私物を運ぶのを手伝ってもらい、その時少し話しただけな気がする。

それだって本当にちよこつとだ。だったら良かったと思っていた自分の願望を。

そういえば、比企谷くんが口にした桜の話とても素敵だったな。

そうだ書いておこう。忘れないように。

えーと……。なんだったっけ。

今、二人で見てる？ 見上げている？ この桜の花が落ちる速さのように

あなたと時間を掛けて、ゆっくりと確実に結びつきたいです。

だったかな……。まあいいや、明日、買いに行こう。

最近、荷物の整理ばかりで外に出掛ける事もなかなか出来なかったし。

とても良いお話だったから、教えてくれた彼に感謝しなきや。

一色さんにも久しぶりに会えた。やっぱり二人は付き合っているのかな？

生徒会の引き継ぎ業務のとき、いつも彼の話を彼女はしたように思うし。

話を聞いてたとき、いいなーとおもってたと思う。

生徒会の仕事ややらなきやいけない事に一杯一杯で、恋をする暇もなかったし。

自分の名譽の為に言えば、何度が告白めいた事を言われなかった訳じやないけど  
それどころじやなかったと思う。

いや、嘘じやないよ。

二回か三回くらい校舎裏に呼び出されて、遊びに行かないか？　って誘われたし。

んっ、四回か五回くらいあったかも知れない。

五回かな？　十回はあったかも知れない。うん、十回はあった。そうしておこう。

日曜日も楽しみ。比企谷くんの家にお邪魔して三人で映画を観ることが決まったから。  
ら。

男の子の家に遊びに行くなんて初めてだけど、一色さんもいるからちよつと安心でき  
る。

一人だったらパニックになちやうかも知れないし。

手ぶらは失礼だしお土産なが良いんだろう。



さつき、一色さんからメールが来た。彼女はショートケーキを作るらしい。すごいなケーキとか焼けるなんて、私には無理っぽい。

そうだ。明日、本を買いに行くついでに、何か良さそうなものを探しにしよう。

ここは紅茶が良いかも知れない。一色さんの手土産とも合うし。

一色さんとメールのやり取りも久しぶりな気がする。

卒業してすぐの頃は、週に二、三回は来ていたように思う。

徐々に、ちよつとずつ、少なくなっていく、このところ全くなかったな。

自分たちだけで生徒会運営ができるようになったんだ、そう思えば嬉しい気持ちになるけど、

ちよつと、少し、寂しくもあった。

そういえば二人と別れた後、すぐに雨が降ってきたけど大丈夫だったかな？

なんか邪魔しちや悪い気がして、電話もメールもしなかったけど。

まあなにはともあれ明日は本を買いに行こう。

最近、ほとんど日記に書く事がなかったけど、今日はなんだか随分と長くなつてしまった。

そろそろ寝よう。おやすみなさい。

7月24（金）曇りのち晴れ。

今日は朝から曇り空。雨が降りそう。

雨は嫌いじゃないけど、それは部屋の中から眺めたりその音に耳を澄ませる時に限る。

外へ出ないといけない時は、髪は膨らむし服は濡れるしでちよつと嫌かも。

午前中、終業式に出席し、午後からは事務所で手続きを済ませる。

はるさんに相談したらあれこれと手伝ってくれたので、楽に終わらせる事ができた。向こうでの手続きも付き添ってくれるとの事。

場所が場所だけにさすがにそれは……と遠慮する私に、はるさんは笑顔で旅行がてらだから気にしないでいいよ、と言ってくれた。

ますますはるさんに頭が上がらない。

考えてみれば、生徒会長に立候補するきっかけもはるさんがくれたように思う。

立候補した時も会長に就任した後も、いつもいつでもはるさんは私を助けてくれた。一人っ子の私には本当に実の姉のような人。

今度、ランチでもご馳走しないと。でもご馳走されちゃうんだよなあ。

それで本を買いなさい！　と言って出させてもらえないし。

私が自分の趣味の読書について話せる人。たぶん、はるさんくらいだと思う。

そして本の内容よりも私がそれを読んで、どう感じどう思ったか

そんな事を尋ねてくるのも、はるさん一人。

私は何を讀んでも何も感じないし何も思わないから、だから聞かせて。そう口にしたのはるさんの顔は今でも忘れられない。

はる先輩優しいし、そんな風に見えないです。

答えた私に、はるさんは困ったような笑顔を見せる。

それでそれ以上、私は何も言う事が出来なくなつた。

その頃の事を思い出しながら、比企谷くんに教えてもらった本を探したけど結局見つからなかつた。

仕方がない、もう遅いし明日にしよう。続きが気になるけど。

その代わり、良さそうなお茶の葉を見つけられたから良かった。

前に飲んだとき美味しかったし、これなら喜んでもらえるかな？

家に帰って、また荷物の整理をする。

まだ少し早いような気もするけど余裕をもってやらないと。

ただでさえ私は手際が悪いのだし。

そろそろ半分位は終わったかな？ 疲れた。

今日はもう寝よう。おやすみなさい。

7月25日(土) 晴れ。

今日は朝から本を探しに家を出た。うん、良い天気。

足取りも弾んでいたと思う、この時は。

結局、十軒以上本屋さんを回ってやっと本を手に入れた。

まさか夕方まで掛かるとは思っても見なかったな、足が棒になりそう。

そういえば比企谷くん、結構前の映画だつて言つてた気がする。

七年だつたか八年だつたか。

「携帯やらなんやらで人と繋がっているのが当たり前の今と、そういうものがなく人と繋がりが続けるのが難しい時代の、丁度中間に作られた作品だと思うんです」  
彼がいった言葉を思い出す。

その帰り道、駅で偶然比企谷くんに出会った。

すぐく頑張つて手に入れたから、それを見せて褒めて欲しかったように思う。

そのせいで慌ててしまい、袋をビリビリに破いてしまった。

慌てる私を見て、彼は売店まで走ると紙袋を買つてそれを手渡してくれた。

それが意外だった。

悪い子で無いのは知っていたけどこんな風に気遣いが出来るタイプとは

正直思つていなかったから。

それで彼に興味が湧いたのだと思う。

似たような事を高校一年のとき、はるさんが私に同じ事をしてくれたから。なのでお茶に誘ってみた。足が痛かったから座りたかったのもある。

そこからはびつくりだった。

お茶で喉を潤しながら、お互いに読んだ本の話で花を咲かせたのだが

私の読んでいる本は彼も殆ど読んでいた。

面白いと思つたところ。悲しいと感じたところ。感心した文章。驚くくらい似ていた。

彼は口数が多いほうではないけど感想を口にするとき、その表現がとてもユニークで私はお腹を抱えて笑つてしまった。店員さんに叱られたくらい。

でも比企谷くんも悪いと思う。

笑わせないでうつつっていつてるのに、さらにおかしな事いうし。

うん、比企谷くんが悪い。でも楽しかった。

捻てるというより捻つてる話し方だと感じた。

そして私が尋ねたことも真剣に考えて答えてくれた。

私は話を纏めるのが苦手でも友達にもよく話が長いつて叱られる。

そんな私の話を彼は嫌な顔一つせずつちんと聞いてくれた。

そうする事に慣れていないのかな？　ぎこちなさを感じたけど優しい笑顔も見せて

くれた。

こんな子だったっけ？ 彼と話しながら私は思う。

文化祭の時。

彼は人一倍頑張ってくれていたけど、やる気のない他のメンバーにやる気を出してもらおうと

四苦八苦していた私や生徒会の子達には、あまり印象が良くなかった。

刺のある発言が多かったからだ。

気持ちはわからなくもない。

相模さんの提案で、もともとやる気のなかった文実の子達があからさまにサポートだしその分雪ノ下さんや比企谷くんに負担を掛けていたから、面白くなって当然だと思う。

ただ文化祭顧問の平塚先生と私たちも手をこまねいていたわけじゃない。

何度も相談しこの先状況の改善が見られなければ相模さんには役職を降りてもらい今回に限り生徒会長の私が実行委員長を兼任する。そこまで話は進んでいた。

生徒会はあくまで文実をサポートする立場なため、余程のことがない限り

実行委員会で決めた事に口を挟む事が出来なかったからだ。

まああの状態で私が実行委員長になっても、何が出来たかわからないというのが

ホントのところだけだ。

そして一番悪いのは私なのはわかっている。

私にははるさんのように人を従わせるカリスマ性も実務能力がないから。

気を使って仲良くしてもらって作業してもらおう事ばかり考えていた。

そんな中、彼が口にする言葉は正論ではあつたと思う。

でも実際やる気のない人を動かすのに正論を言つても意味がない。

言葉が通じる事と話が通じることは全く別の話。

きちんと言合つて作業をしてもらえばいいのに。そう思う人もいるかも知れない。

話し合わなければ分からないのは確かだけど、だからといって話せば分かるわけじゃない。

話そうが話すまいが分かつてあえてやつてる人もいる。

殴つたり脅したりは出来ない。仕事のように金銭のやり取りもない。

それでも何とか働いてもらうため気を使っているのに。

彼に対して正論だけで世の中は回つてない。人の気も知らないで好きな事言つて。

そう思つてた。

それでも、比企谷くんが頑張つてくれたのは事実だ。

その事で彼に感謝を伝えた際、彼の表情を見てほんの少し違和感を覚えた。

ただその時はそれを確かめる暇もなく文化祭の後片付けに追われ、彼との関係は一旦途切れてしまう。

それからひと月後、体育祭の時。さらにやる気のないメンバーを纏める、というか締め上げるのに、彼が出した案には驚かされた。

その時、彼の案に耳を傾けながら疑問を感じたのを今でも覚えている。

何でこんなに頭が回る子がわざわざ文化祭の時、あんな事を口にしたのか。意地の悪い方向にはいえこれほど頭が回るのだ。

そう言ったらどう思われどう言われるかなど容易に想像つきそうなのに。

それに生徒会の私たちとは違い彼は責任を追及される立場ではなかった。

気に入らないことがあっても口を閉ざしていれば、文化祭の後、

影口を言われなくて済んだはずなのに。

何か理由があつたのかな？ あつたのなら何だろう？

そして私はこの男の子のことを、全く理解しても理解しようとしてもしてなかったのかな？

駅からの帰り道、私はそんな事を考えながら、彼に家まで送ってもらった。

家でまた荷物の整理をする。でも頭の中はその事で一杯一杯になつてしまう。

明日は比企谷くんのお家にお邪魔するし、今日はもう寝ておこう。



おやすみなさい。

## あの場所じゃない場所

7月22日（水） 曇り

やった、上手くいった。たぶん先輩は断らないと思つてたけど。

でも、こんなに上手くいくとは正直思つてもみなかつたし。ちよろいなあの人。

と言いたいところだけど、ここからが大変なんだよなあ、あの人は。

妙に警戒心が強くせに脇が甘い。なのでつけ込み易い。

じゃあ、すぐ靡くか？ と思うと、するつと躲される。

近くにいけばいくほど、傍に寄れば寄るほど、距離を感じてしまう。

壁がある、というのは違う気がする。

もつと細いもの。そうだ、一線を引く、といえば良いのかな？ あれは。

面倒くさい人だなと思う。こんな可愛い子に迫られて落ないとか、正気とは思えない。  
い。

まあそういう人に惹かれている私も十分面倒くさいんだけど。

惹かれているというか気になるんだと思う。でもなんで気になるんだろう。

ダメなところ多いし。顔はまあ整つてるけど、目がやばい。あと態度も、口も、性格も。

ついでに姿勢も。殆ど全部ダメだな。ほんと、なにが良いんだろ、あの人。まあ良いところもある。

ぶつきらぼうだけ優しい。欲しいときに、欲しい言葉をくれる。

頼りがいもあるし、頭の回転も速いと思う。

顔だって、あの目をどうにかすれば充分及第点だと思う。

口も性格も悪いから、こつちも悪いとこそそのまま出しても気にしないで済んでる。

あのままでも良いかも知れない、気楽だし。姿勢はまあ、直したほうが良いように思うけど。

我ながら酷いな。まあ誰に見せるわけでもないし好きに書いていいよね。

そういえば気になったのっていつだろう？

ああ、そうだ。そう、あの時だ。

奉仕部の部室で学習室を作りたいっていったとき、先輩以外の二人は、

それ、いる？ みたいな表情を浮かべていた。

先輩だけがいつものぼそつとした声で

「最初から、途中から、一人。でも最後まで一人は、きつと寂しいもんな」

といって、賛成してくれた。

それかクリスマスイベントの時かも知れない。

正確に言えばイベントの前、飾り付けを作っていた時。

他の子達がお喋りしてる中、一人で頑張ってる子がいた。

ちよつと大人びた感じの、雪ノ下先輩によく似た子だったと思う。

それで先輩がその子を手伝おうとしたら、「八幡、いい。いい。いらぬい」って言われてた。

「先輩。振られちゃいましたね」

なんて口にしながらからかいにいこうとしたら、耳に届いた先輩の一言。

あの子も驚いてたけど、私はもつと驚いた。

言葉だけではとさせられるなんて、思ってもみなかつたから。

気になったら、ちよつかいをかける。それで先輩を連れ出して、千葉でデートをして

みた。

その事でわたしたちの関係に変化はなかったけど、それでもそんな関係に

わたしはどこか満足してたように思う。

色々変わったのは今年の春、進級してから。

どこかそだけで完結したような、そんな雰囲気のある三人。

その三人が集うあの場所に二年になって初めて訪れた時、

なにか終わった。そんなふうに見えた。

三人の仲が悪くなったとかじゃなく上手く言えないけれど、

仄かに見えてた何かが綺麗に消え失せたように感じた。

私の誕生日を三人がお祝いしてくれたあの日。

先輩に尋ねたら、先輩は照れくさそうに「友達になれたんだ」って言った。

男女の友情はありえない。

それが私の自論だけど、あの二人が友達という枠に収まってくれたのは

思っていた以上に、私をほっとさせた。

ほっとしたら欲がでた。今ならいけるんじゃないかって。

色々考えて二人で居れる場所を作ろうと思った。

あの部室のように。あの場所は三人の場所だから。

私と先輩、二人だけの場所。そういう場所を。

7月23日（木）晴れ。夕方から少し雨

ほんととまいる、まさかの伏兵。城廻先輩がなんで急にでてくるの？

しかも手とかつないでるし。

でもすぐく笑顔だった。あんな顔するんだ。私には見せないのに。

だから邪魔しない訳にはいかなかった。

それは私の

違うけど、そう思ったから。

でも先輩の家にいける。嬉しい。城廻先輩もなのが、ちよつとあれだけど。まあ今回は仕方ない。切っ掛けを作ってくれたんだし感謝しよう。

でも苦手なんだよなあ、あの人。良い人なんだけど、良い人すぎて苦手。引き継ぎのときもそうだった。

適当にやろうとすると悲しそうな顔をするから、なんか悪いことしてる気持ちになる。

まあ悪いんだけど。それでつい頑張ってしまう。あれはズルいと思う。帰り道は楽しかった。楽しいというより嬉しかった。

お兄ちゃんなんだけど、お兄ちゃんぽかった。変な言い方だけど。

雨宿りもできて良かった。ちよつと寒かったけど。なんか逃げるし。

ほうじ茶美味しかったな。温かくて、暖かくなれた。また逃げられたけど。

家に帰ってからほうじ茶を探したけど、見つからなかったので緑茶を飲んでる。

飲みながら、先輩にもらうテスト問題を作成中。

数学が苦手。聞いてたけど、あの点数にはびっくりした。

怒らないかな、先輩。あの時みたいに怒鳴られたら嫌だな。

最近、あれこれ悩んでばかりだ。でも、誰かのために悩むのは結構楽しい。

そうだ、勉強会の練習をしよう。

先輩のため、そんな感じでいえば、あの人断れないし。

テスト出来た。もし先輩にやらなくても弟にやらせればいいや。

彼女が出来てなんか浮ついてるし。キスマまでしてたな。先越された、惨め。

ここは姉として弟に試練の一つや二つ与えてあげるのが、優しさだと思おうね。

7月24（金）曇りのち晴れ。

「掛かった！ 計画通り……」

前に弟から借りて読んだ漫画の主人公のように、私は超悪人顔をしてたと思う。

「勉強会の練習をしましょう！」

私のしたそんなあなたの為なのよっばい提案に、「すまん、一色」と申し訳なさそうに俯く

先輩の横顔は、なんというかすぐく私に満足感を与えてくれた。

自分の欲……願望を満たしつつ、相手に恩を売る。

絵に書いたような一石二鳥。あちらも立ててこちらも立てる。

そうこれこそ、win-winな関係！

まあそんな事を考えていたら、いつのまにかこつちを見ていた先輩に

じとつとした目でその顔を見られたのは失敗だったかも。

おつと危ない……と、表情を急いで「きれいないろはちゃん」に戻したけどバレたかな、どうだろ？ まあいいや。

一応は先輩のための提案ではあるんだし。でも私がそうしたいからそうしているだけだ。

私のしたい事が先輩のためになる。これはもう報酬が支払われてもおかしくないべル。

まあそれはそれとして、昨日の写メの理由には笑わせてもらった。

お父さんカッコいいんだな。お母さんも美人だし。

先輩も小町さんも顔の造りは整っているし納得なんだけど。会うの楽しみ。

7月25日(土) 晴れ。

勉強会の帰り道、先輩に言われて日記を書き始めることにした。

めんどくさくって顔をした私に国語の勉強になるからと、一生懸命説得しようとする先輩を見て、まあ書いてもいいかなと思つたから書いてみる。

「あんまり長い文章は読めません。そういう身体なんですっ！」

自分の体をきゅつと抱きしめてそんな事を口にした私に、

先輩は呆れたような表情でため息をついていた。



そして、一行でも二行でもいい、長さは問題じゃなく、その時なにを考えていたか後からわかれば十分だ、と言っていた。

そんなもんかと思いつつ、今日の事でも書いてみようとペンを取る。

せっかくだから始まりから書いてみよう。それで水曜まで戻って書いてみた。

その日にあつたこと思っていたことを、思い出し思い出し書いてみる。

そしたら思っていた以上に色々書いてしまった。

なるほどこれはいいかも。意外と私、考えてる。ちよつとびっくり。

それに私のような美少女の日記なら高く売れるかも。「いろはちゃん日記」とか名づけて。

「秘密の」と付けたら四桁、いや五桁は余裕。

先輩に、読む用、保存用、布教用で三冊は買わせよう。贈答用にもう一冊追加で。

まあそれはともかく今日は本当に楽しかった。

先輩、怒るところか頑張ってテストしてくれたし。

でも教えてる時、急に敬語を使いだしたのはちよつと笑ってしまった。

やっぱりあの人、根は真面目なんだろうな。

こっちは狭い密室で二人きりな状況に結構緊張していたのに、  
ずつと問題解くのに集中してるほかったし。

でも少しは意識して欲しかったように思う。残念。

先輩、人目をすごく気にするから期間が夏休みの今回の件に誘えたのは良かったと思う。

受験の邪魔にもならなそうだし、ほっとした。正直ちよつと心配だったんだよね。これで先輩が受験に失敗したら目も当てられないし。

それに休みとかじゃないと絶対に邪魔が入る。

あの二人には悪いけど先輩と過ごしてる時間は二人の方が長いんだから、ちよつとくらいずるしてもいいよね。

でも罪悪感で、先輩に自分の事を二人にもつと話したほうが良いって言ったのは失敗だったかも知れないなあ。

城廻先輩も本の話で先輩と盛り上がってたし、私も少しは読もうかな。そういえば、お弁当の約束と送り迎えの約束、どっちも出来て良かった。

考えてみなくても私が得意なのって料理とお菓子造りくらいしかないんだよね。誰かの為に何かしたいなって思う日が来るなんて考えもしなかったな。

今まで、何をしてもらえるかで好きな人を決めてたようなもんだし。帰り道の先輩の話も楽しかったな。

自分のために一生懸命話してくれるのは、ほんとうに嬉しかった。次も楽しみ。

思ってることをつらつら書いてたら、すごく一杯、書いてしまった。  
明日は朝からケーキつくるし、もう寝ないと。

上手く寝付けるかわからないけど、お布団に入っておこう。  
おやすみ。

二章 近づきたい彼女。 近づくと二人。

## 自分の居場所

ページの下半分はメモ帳。

そんなライトノベルなら既に一冊分くらいのイベントをこなして迎えた日曜日。

窓の外を見やれば、カラッとした良い天気。

暑そうだなー、と窓の外をぼけつと眺めていると、パジャマ姿の俺を見た母親と小町が

早く着替えろと急かしてくる。

もう、男の子は準備が大変なんだから、と心の中でぶつくさ文句を言いながら着替える

今度は待ち合わせの時間より大分早く家から叩き出され、仕方なく駅へと向かう。

太陽にじりじり照らされ暑い暑いとぼやきながら、十五分ほど歩くと駅に到着する。

待ち合わせ場所の改札口へ向かうと待ち合わせ時間の二十分前なのに

一色は既に来ており周囲をきよろきよろしているのが見えた。

人ごみに紛れ近づいていくと、そんな俺を見つけた一色はぶくーつと頬を膨らませ

「あつ、もう、おつそーい！」と不満げな声を出しつつ、ぱたぱたと駆け寄ってくる。

そしてほんの少し軽く走っただけであざとく肩でハアハアと息し、俺の袖を掴もうと  
してくるので、それをするつと躲す。

「一色、今日は早いじゃないか？」

言外に、以前二人で出掛けたときは遅刻してきたのに、

今日は時間通りちゃんと来たわね？ あなた。

そう嫌味を込めていったのだが、一色には上手く通じなかつたようだ。

一色はやれやれといわんばかりに大仰なため息をつく。

「何を言ってるんですか、先輩。今日は城廻先輩がいるんですよ？」

後輩の私が目上の先輩をお待たせしたら申し訳ないじゃないですか？」

俺をまるで礼儀作法を弁えないアホな奴。そんな口調で窘めてきた。

彼女の言っていることは確かにまあ立派なことだと思う。

だがその理論でいくと、以前寒空の下で待たされた俺は彼女に目上扱いされていな

い、

ということになってしまう。

ハハハ！ こやつめ……。そんな気持ちでドス黒く染まりかけた俺のソウルジェム

は

魔女化寸前で、まどか神、違った、めぐり神の降臨で浄化される。

なんかえらく遠くから「遅れてごめんなさ〜い」と叫びつつ、とてつ走ってきた先輩は

俺たちの傍まで来ると、前かがみになり肩でハアハア息をする。

大丈夫かな？　と思いつつに近づくと先輩が俺の袖を掴もうとしてくるので

掴みやすいよう袖口をそつと差し出してみる。

それをちまつと掴んだ先輩は身体を起こし俺にありがとうというのと、にぱつと微笑む。

その笑顔につられ俺も思わず微笑んでしまう。

うん、いい笑顔。広げよう笑顔の輪！　などと考え、次はあなたよとばかりに

一色へと視線を向ける。

すると一色はぶすーつと頬を膨らませ俺を薄目で睨んでいた。なんだよ……その目。

その視線の鋭さにちよつとたじろいでいると、先輩は弾んだ声で俺たち二人に  
こんにちはの挨拶をしてきた。

それに答えて俺と一色が挨拶を返すと、先輩はむふーつと満足気に胸を張り

「じゃあ、いっ……」の掛け声とともに歩き出す。

あれこの人、俺の家の場所知ってるの？　と不思議に思い付いてこうとすると、少し

先、

ちよつと進んだところで立ち止まった先輩は、ぱたぱたと駆け戻ってきた。

「えーつと、比企谷くんのお家って、こっち？」

いうと、先輩は身体を前に倒し、俺を下から覗き込んでくる。

はらりと先輩の髪が流れる。奥目がちな瞳は悪戯っぽく輝いており、その笑顔は堪らなく眩しい。

やつぱ知らんまま歩きだしたのか……。呆れながらもその笑顔を近距離で直視して  
まった俺は

頬が赤らむのを感じる。

「めぐり先輩、方向は合ってますよ。」

それとここから歩いて十五分くらいなんですけど、いいですか？」

「うんうん。お天気も良いし、お散歩気分ですごく」

「そうですねー、ダイエツトにもなりますし！」

二人はいうと、俺の後をてこてこついでくる。ダイエツトか、女の子は大変ね。

まあ、一色は華奢すぎるので、もう少しお肉を付けたほうがいいだろう。

じゃないと名前には？をつけた人に「並はず」とか書かれちゃうぞ？ と思いつつ、歩道を歩く。

すると道行く野郎どもが、めぐり先輩と一色の二人にチラチラと視線を向けていることに気付く。

二人とも可愛いしな。そんな事を考えていると、一色が茶化すようにいう。

「ごうんな美人なお姉さんと可愛い女の子を連れて歩いて、先輩も鼻が高いですか？」  
さすが一色。めぐり先輩のことを褒めつつ、自分を褒めることも忘れない。

これで一色が可愛くなかったら鼻で笑うところだが、可愛いからタチが悪い。  
二人をちらつと見やると、俺の答えを待つてる様子。

なにか言わないとあれかなーと思っていると、一色が俺の顔を下から覗き込んできた。

「先輩。女の子はたまでもきちんと褒めてあげないと、ダメですよ？」

一色は言うのと、悪戯っぽい笑顔を見せる。まあ確かにと思いい、口を開く。

「二人とも別嬪さんだしな。まあそのなに？　緊張で、鼻が高くなるどころじゃねーけど」

ごによごによした声でいうと、二人は顔を見合わせによよと微笑んでいた。

二人の反応にふいーつとため息をついてしまう。

慣れないことはするもんじゃありませんね。夏の暑さと関係ない汗を背中にかいてしまった。



リア充とか普段からこれをこなしていると思うと頭が下がる。

そんな事を考えながらしばらく歩いていると、後ろで先輩と話していた一色が  
てつてと走って寄ってきた。

「せつかく三人でいるんだから先輩も会話に入ってくださいよー」

「話つて……、そんな話題に事欠かない奴なら、ぼっちになつてねーよ」

「えっ？ 比企谷くんつて結構話すほうじゃない？ 昨日そう思ったけど」

先輩がきよとんとした顔でいうと、一色は驚いたような表情で俺を見ってくる。

その視線に何やら説明を求められてる気がして、仕方なく口を開く。

「いや、昨日一色と別れたすぐ後に、めぐり先輩と会ったんだよ」

「うんうん。たまたま会つてね。それでお話してたら暗くなちゃつて家まで送つても  
らつたの」

二人で答えると、それを聞いた一色は下を向いて俯いてしまう。

そして「そうですか……」と小声で返してきた。

その一色の様子に、俺とめぐり先輩が戸惑った視線を交わしていると

そんな俺たちを見た一色は慌てたように口を開く。

「ま、まあ、それはそれで……。じゃ、じゃあなんでも良いので先輩、なんか喋つてくだ  
さいー！」

普通に話すだけでも難易度高いのに、こんな空気で言われてもなあと思いつつ「そういや、最近小町がな」と小町話を口にする。

そんな俺を一色が、呆れたように窘めてくる。

「先輩。年頃の女の子相手に自分の妹の話をしだすのは、ポイント低いとおもうんですけどー？」

「そ、そうか……」

「なんだよ禁止ワードあるなら先に言えよ。あれか重箱の隅をつついていく姑スタイルか？」

それに、それにだよ？ この世界で小町と戸塚の話以外する価値があるか？ と思えば戸塚トークをしてやろうと口を開きかけたとき、俺の家に到着した。

×  
×  
×

「ここが俺んちなんですけど……」

誰かを家に招待することなど今まで一度もなかった俺が少し緊張しつついうと、

二人はほーと感心混じりの声を出しながら我が家を眺める。

そんな大した家でも、と謙遜しつつ玄関に近づくと、扉の向こうから

「お父さん早く早くー！ お母さんも」と小町の声が聞こえてきた。

嫌な予感を感じながら扉を開けると、右から親父、小町、母親の順にマイ・ファミリー

が

にこやかに微笑んで待機していた。

先輩も一色もその光景に驚いたようなぎよつとした表情を浮かべたが、すぐに表情を整えると

礼儀正しく挨拶してくれる。ほんとすいません……

家の上がっつてもらいリビングに入ると、椅子を引いて二人に勧める。

すると、お礼を言いながら席に着いた二人は、「これ、つまらないものなんですけど」といつ

鞆からなにやら取り出してきた。

どうやら二人は手土産をわざわざ持ってきてくれたらしい。

先輩はイギリスの高級紅茶で有名な「FORTNUM & MASON」の缶入り茶葉を、一色はお手製の

ショートケーキを両親に手渡してくれ、渡された両親は恐縮しつつとても嬉しそうだった。

「ご丁寧にすいません」とお礼を伝え「早速頂きましたようかね」というと、お茶の用意を始める。

そして用意を終えると、皆でテーブルを囲んで談笑することとなった。

二人の手土産に舌鼓を打ちつつ、会話が弾む。しばらく、そんな楽しい時間が続く。

頃合を見計らい椅子から立ちあがると、めぐり先輩と一色を部屋へと誘う。

「あのお兄ちゃんが自分の部屋に女の子を誘うなんて、きゃー！」

と茶化してくる小町にぺちこんとチョップを食らわし、追加のお茶とお菓子を頼むと三人で俺の部屋へと向かう。

親父は「俺はもつと話がしたいのに！」みたいな苦悶の表情で歯ぎしりしていたが。

そうして部屋の前まで来たのだが、俺はノブを握る自分の手がじんわりと汗ばむのを感じていた。

前の日の夜に綺麗に掃除をしておいたので、部屋はピカピカである。

見られてアレなものもきちんと本棚の後ろや押入れの奥に収納済みなので、その手の心配がある訳ではない。

それでも今の今までただの一度も、家族以外の「誰か」が入ったことのないこの部屋に

人を入れるのは、俺の胸を締めつけさせるものがある。

皆が当たり前前に友人として誰かの家に遊びに行き、誰かが家に遊びに来るをしている間

俺はずっと一人でこの部屋にいたのだ。

そうやって一人でいる俺を見て多少は心配していただろう家族を安心させることが出来た事に

ほっとしながら、二人を部屋へと招き入れる。

部屋に入ると二人は物珍しそうにきよろきよろしだす。

や、ちよつと、一色。本棚の後ろを覗かないで……と思っていると

「なんか図書館みたいに本が一杯だねえ……」

「なんか本屋さんみたいですねえ……」

などと口々に似たような感想を漏らす二人に苦笑してしまう。

立たせておくのも失礼なので座布団を並べ、どうぞと一声かけて二人に勧める。勧められた座布団をめぐり先輩と一色は見つめ顔を見合わせる。

二人の間に一人分の隙間を空けて俺に座るように促してきた。

女の子二人に挟まれて座るのを恥ずかしがる俺の両腕を、二人はそれぞれ掴み無理やり座らせるので、諦めて大人しく座ることにした。

そして顔を赤くしている俺の方へ、一色はずっと座布団を滑らせ寄ってくる。茶化すようにいつてくる。

「先輩、ダメですよ？ お客様をちゃんおもてなししないとー！」

「俺が真ん中に座ってもおもてなしにならないでしょう……」

それにな、一色。表無しなんだから裏しか無いってことになるんだぞ？」

「相変わらず捻てますね……」

「こくんな可愛い子が二人もお部屋に来てるのに、嬉しくないんですか？」

「いや、嬉しいけどさ。」

なに、ほら、自分で自分を可愛いって言う子はあれじゃないかなーと思うんだけど？」

「だって先輩、言ってくれないし」

一色はつーんと顔を背けて、どこか拗ねたように言う。

そんなやり取りを交わす俺たちを、にこにこ微笑んで見ていた先輩が口を開く。

「でもさ、一色さん。友達の家に来てこんなに歓迎されたの、私、初めてかも」

「あー、それ、私も思いました。なんか全力で歓迎されてる感じでよね」

「うんうん」

まあ俺の客が来るなんて初めてだしな。両親も小町も嬉しかったんだろう。

とそこへ扉がノックされ、小町がお茶とお菓子をお盆に乗せて運んで来てくれた。

小町にお礼をいいつつ「一緒に見るか？」と聞いてみる。

気の利く小町が居てくれれば、色々助かると思ったからだ。

すると小町はにぱつと微笑み、俺の耳元に口を寄せると小さく呟く。

「お兄ちゃんのお客さんなんだから、お兄ちゃんがきちんともてなさないダメだよ？」

そして、めぐり先輩と一色に会釈し部屋から出ていってしまった。

小町ちゃん。お兄ちゃんもう一杯一杯なだけ……と心の中でよよよと泣き崩れ

ていると、

めぐり先輩と一色が感心した声で小町のことを褒めてくれていた。

「本当に良くできた妹さんですよね」

「うんうん。すごくしつかりしてるよね」

「すごく仲良さそうで、いい家族だなんて見てて思うもん」

「うちの弟も、小町さんくらいしつかりしてくれればなあ」

「一色さん、弟さんいるの？」

「いますよ。今、小学六年生なんですけど、この前なんか——」

二人の会話に耳を傾けながら、めぐり先輩がいつてくれたように俺は家族に恵まれているな、と思っていた。

×  
×  
×

あれはそう、小学五年の家庭訪問の時。

当時からぼっちだった俺を担当は心配してくれたのだが、少しクセが強い先生だっ



た。

「八幡くんはですね、人付き合いに問題がありませんで、誰とも仲良く出来ないんですよ。なので人の輪に入る努力をするよう、ご家族でもよく考えてもらって」と、フザけた上から目線で、母親に告げたのだ。

その言葉に、俺は自分が学校で仲間はずれだという事実を親に知られたことに情けない気持ちで一杯になっていた。

すると隣で聞いていた母親はポロポロと涙をこぼし泣き出してしまい、慌てた担任は「今日はその、ここまでにしましょう」というと、早々と帰ってしまった。

居た堪れない気持ちで、担任が手を付けなかったお菓子を眺めていると、

母親の切れ切れとした声が聞こえた。

「八幡ごめんね。お母さん……なんにも……言えなくて……」

いって、泣いてくれる母親の背中を、俺は出来るだけ優しくさすることしか出来ずにいた。

その夜の事。

普段より大分早く帰ってきた親父が、一緒に風呂場に入るぞと珍しく俺を誘ってきた。

そして嫌がる俺を風呂場に連れていくと、たまには背中を流してやるといって

ゴシゴシと力加減を考えずに洗ってくる。

「いてーよ、親父」と痛がっていると、親父は普段とは違い至極真面目な声を出す。「八幡。父さんはな、今のままのお前でも受け入れてくれる人が必ずいると思う。」

だから今は辛いかもしれないが、いつかどこかでそういう人と出会えたら変に恥ずかしくなったりせずちゃんと向き合おうんだぞ」

いうと、俺の頭にお湯をかけ、そのまま風呂から出ていつてしまった。

普段なにかと絡んでくる親父からそんな言葉が掛けられると思っていなかった俺はえらく戸惑ったのを今でも良く覚えている。

まあその言葉が俺をプロぼっちにしてしまった気がしないでもないが。

それでも、ここには俺の居場所があると思わせてくれた両親には感謝している。

そして小町も。そう小町は、俺に気を使っていたのだろう。

友達が多い小町が俺の記憶にある限り一度も家に友達を連れてこなかった事を思い出す。

小町は楽しげに友人たちとはしゃぐことで、そうする事が出来ない俺が壁一枚挟んだ向こう側で傷つかないか心配してくれたのだと思う。

口に出して言われた訳ではない。だが十六年も一緒にいるのだ。それくらい俺でもわかる。

×  
×  
×

そんな思いに、俺は随分深く浸っていたのだらう。

二人が俺を心配そうに見つめてることに気づき、慌てて表情を取り繕う。

そして「そろそろ観ましようか」と二人に告げ、俺は再生ボタンを押した。

## 桜花抄

真つ暗な画面に浮かぶ「秒速5センチメートル」の文字。

そして美しく桜の花びらが舞い散る中、小学生の男女の姿が映し出される。

「比企谷くん。なんか、すごく綺麗だね……」

「先輩。最近のアニメって、こんなに映像が綺麗なんです……」

二人の感嘆の声に相槌を打ちつつ、この美しさの本当の意味を知っている俺はほんの少し哀しい気持ちになる。

その美しさは主人公の貴樹が、この時の明里との会話を、いかに素敵な思い出として大切に憶えているかという証なのだから。

桜並木を歩く幼い二人。明里は貴樹に声をかける。

「ねえ、秒速5センチなんだって」

「桜の花の落ちるスピード。秒速5センチメートル」

「ふーん……。明里そういうことよく知っているよね」

「ねえ、なんだか、まるで雪みたいじゃない？」

舞い落ちる桜の花びらをそう表現した明里は貴樹を置いて走り出す。追いかける貴

樹。

明里が踏切を超えようとちようど電車が来るようだ。

遮断機が降り二人は線路を挟んであちらとこちらにわかれてしまう。

電車が来る少し前。線路の向こう側にいる貴樹に、明里はささやかな願いを口にする。

「貴樹くん……。来年も、一緒に桜見れるといいね」

そうして、第一話『桜花抄』が始まる。

×  
×  
×

「遠野貴樹さまへ！　たいへんご無沙汰しております。こちらの夏も暑いけれど

東京にくらべればずっと過ごしやすいです」

その言葉に、明里の願いが叶わなかったことがわかってしまう。

二人の親は転勤が多く幼い頃から転校を繰り返していた二人はなにかしら通じ合うところがあったのだろう。

互いに惹かれあっていたのだが、それが言葉に出来ない、明確なものにならない、微妙な間柄。

そして小学校を卒業と同時に明里は東京から栃木へと引越してしまふ。

中学に入り半年。貴樹のもとに一通の手紙が届く。

先の一文から始まり、近況や引越し先の様子、そして多分不安な気持ちがあったのだろう。

「ねえ、貴樹くん……私のこと覚えていますか？」

そう締められた結びの言葉が明里の心境を物語る。

携帯電話や電子メールが当たり前の今とは違い、料金がかさむ固定電話か手紙が主流だった当時。

まだ幼い二人には文通という手段しか互を結びつけるすべがなかった。

そうして二人は近況を報告し合うという形で手紙のやり取りを始める。

「前略、貴樹くんへ。お返事ありがとう、うれしかったです。」

もうすっかり秋ですね。こちらは紅葉が綺麗です」

貴樹の中学生生活を描きながら、明里からの手紙の文面が語られる形で物語は進む。

貴樹がサッカー部で汗を流し生徒会の先輩から頼りにされる後輩として

なかなか順風な中学生生活を送っている様子が伺える。

そして映し出された生徒会室の文字に、めぐり先輩と一色が小さく声を上げたので

俺は微笑んでしまう。

先輩はもちろん一色にとっても、生徒会室というのは自分の居場所という認識があるのだろう。

俺の都合で一色に押し付けてしまった感がある生徒会長という役職を、彼女が自分の

モノとして

受け入れてくれていた様子に、ほっと安堵してしまう。

あどけなさの残る明里の可愛らしい声で語られる文面から、

彼女も中学では運動部に入り長かった髪を切ったようだ。

「この前、髪を切りました。耳が出るくらい短くしちゃったから、

もし会っても私ってわからないかもしれないかもですね」

その言葉に少しずつ変わってしまう自分を、それでも自分だとわかってもらえるか

そんな不安な気持ちが見え隠れしていた。

月日は流れ、文通という形で繋がっていた二人に、また不運が訪れる。

「拝啓。寒い日が続きますがお元氣ですか？　こちらはもう何度か雪が降りました」

「今度は貴樹クンの転校が決まったということ、驚きました。お互いに昔から転校には慣れてるわけですが、それにしても鹿児島だなんて、今度はちよつと遠いよね」

「いざという時に、電車に乗って会いにいけるような距離ではなくってしまうのは、やっぱり、少し、ちよつとさびしいです」

いま俺は高校生だから電車賃や飛行機代を稼ぐのがだるいな、と思う距離だが

中学一年生の二人にとってはどうしようもない絶望的な距離だろう。

そして自宅の近所にある大きな桜の木のことを書き記す明里。

彼女にとつても桜の花びらが舞い落ちる中、貴樹と交わした会話は忘れることが出来ない思い出のようだ。

そうして貴樹が鹿児島に引っ越してしまう前の週。

遠くに離れてしまう前に一度だけでも会いたいと、二人は待ち合わせの約束をし貴樹は明里の住む栃木の岩船へと、電車を乗り継ぎ向かうのだった。



×  
×  
×

三月の上旬。朝から天気は愚図ついでおり、放課後、貴樹が電車に乗る頃には雪が降り始める。

動き出した電車に揺られ、窓の外、小雪が舞い散る町並みを見つめる貴樹。

そこへ、とても美しい音色で奏でられる「思い出は遠くの日々」が流れ

小学生時代の二人の日常が描き出される。

二人とも身体が小さく病気がちだったため、外で遊ぶよりは図書館が好きでともに読書が趣味だったこともあり仲良く話しをするようになる。

お互いが読んだ本について語り合い、学校の行き帰りはもちろん休みの日も会っていたのだろう。

互いが好きな場所へと二人で足を運んだりしていた。

その事でクラスメイトにからかわれた事もあり、黒板に相合傘を書かれ冷やかされた

時、

内向的な性格の明里は黒板の前で言い返す事も出来ずにただ固まって俯いてしまう。そこへ貴樹が教室に戻ってくる。黒板の相合傘と瞳を滲ませている明里をみた貴樹は、

黒板の相合傘を消すと明里の手を取り教室から走り去る。

とそこで、一色が俺の袖を引いてくる。

一色は内緒話をするように、俺の耳元に唇を寄せると囁きかけてきた。

「葉山先輩と雪ノ下先輩も小学生の頃、こんな感じだったんですかね？」

まあ葉山先輩は雪ノ下先輩の手を取って、教室から走り去るとかしなそうですけど」

「確かに葉山だと貴樹みたいには出来なさそうだよなあ。」

まあそれ以前にあの雪ノ下が、黙ってやられればなしとかいまいち想像もつかんが」

「私もまあ、そう思いますけど。ちよつとひどいですよ？先輩」

一色は言うのと、口元を抑えて声を出さずに可笑しそうに笑う。

そんな一色を見ながら、葉山も貴樹のようにしていればあの二人の関係も

また違っていただろうか？と益体もないことを考えてしまう。

明里との思い出をポツポツと思い出しながら電車は進み、大宮駅に到着した貴樹は

電車を乗り換えようとするが、雪の為、電車は少し遅れていた。

その時まで電車が遅れることをこれっぽちも考えていなかった貴樹は不安になる。不安な気持ちちは、自分に転校のことを告げる電話をかけてきた明里の事を思い起こさせる。

明里は貴樹に泣きながら転校の事を打ち明けるが、それを聞いた貴樹は拗ねてしまいそれで二人の関係がギクシャクしてしまう。

不安を抱えているのは転校する明里の方なのに、彼女を慰める事すら出来なかったと自らを恥じる貴樹。

そんな貴樹を見ると、痛ましい気持ちになってしまう。

俺にとって近しい人といえる雪ノ下や由比ヶ浜の二人はもちろん、これまで関係を持った人たちと

別れるのは、多分、きつと、つらい事なのだと思うからだ。

奉仕部の二人とは、雪ノ下の依頼を受けたあの冬の日。

三人の“今”の関係性を維持していく事が、奉仕部としての最後の依頼となり

三人が皆 “一人で考えるのはもう終わり” そう約束を交わしたのだ。

なのであの二人に関しては、少し安心できる。

だが他の人は？ 今すぐ隣にいるめぐり先輩や一色とは？ 関係を持った人たちと

は？

こんな事を考える俺は、多分、弱くなったのだろう。

“孤独”という強さを無くしてしまえば、俺はこんなにも脆い。

そんな思いに浸りつつモニターへ目を向けると、降雪のため電車は遅れに遅れ約束の時間はとつくに過ぎていた。

途中、明里に渡そうと思っていた手紙は風で飛ばされ、雪で列車が停まる中で貴樹は明里に思いを馳せる。

「貴樹くんお元氣ですか。部活で朝が早いので、この手紙は電車で書いています」

——手紙から想像する明里はなぜか、いつもひとりだった

転校先で上手くいっていないから自分に手紙を送ったのだろうと貴樹は察する。

そしてたぶん自分も同じように本当の意味では一人だったと気づく。

明里がいなくなったあとちゃんとやっているつもりだったが、一人なのが本当の姿だと。

「明里。どうかもう家に、帰っていてくれれば、いいのに……」

呟く貴樹の声にめぐり先輩のため息が重なる。目を向けると先輩の瞳は涙で滲んでいた。

そうして結局、電車は定刻の夜七時から四時間も遅れて岩船駅に到着した。

貴樹は雪の積もったホームに降り、改札を抜ける。

帰っていて欲しいと願いつつ帰っていたらやっぱり寂しく感じていたであろう明里は

待合室のベンチに座りちやんと貴樹を待っていてくれた。

再会を、涙を零し喜ぶ二人。

雪が静かに降り積もる夜。

待合室のベンチに座りストープにあたりながら、二人は焙じ茶を飲み

明里の作ってきてくれたお弁当を食べる。

秒速で、俺が一番に好きなシーンだ。

自分も誰かとこんな風に過ごせたら、そんな気持ちにさせてくれる暖かく仲睦まじい

二人。

お腹を空かせ孤独と不安で焦燥していた貴樹は、嬉しさで目を潤ませながらお握りを

頬張る。

「どうかかな?」

首を傾げて尋ねる明里。

「今まで食べたものの中で、一番おいしい」

答えた貴樹の言葉に「大げさだなー」と言いつつも、嬉しそうな明里。

素直に良かった。そう思える素敵な光景。

だが、楽しい時間を過ごせば過ごすほどに、二人の時間は終わっていく。  
「引越し、もうすぐだよね？」

「うん、来週」

「鹿児島かあ」

「遠いんだ」

引越し、転校、それよって好きな人と離れ離れになる。

その人のことがどれだけ好きで、どれほど一緒にいたいと願っても  
子供にはどうすることもできない。

電車がなくなり帰れなくなった貴樹。二人とも今日の事は親に内緒にしていたらしい。

貴樹は部活の打ち上げ、明里は内緒だけどちゃんと帰ってくるから信じてと置き手紙をおいて。

駅を出た二人。雪道を楽しげに話しながら歩く。

手紙にあつた桜の木の下にくると、明里はあの日の言葉を口にする。

「ねえ、なんだかまるで雪みたいじゃない？」

そして二人は唇を重ねるが、二人とも気がついてしまう。

もう自分たちは一緒にはいられないのだという事を。

好きという気持ちをどれだけ持ち続けていても、相手のことをどれだけ想い続けてもお互いの距離を埋めるには足りない。

いつか好きな人から好きだった人に変わってしまう。

そう心のどこかで予感しながら、でもいつかまたこうして二人で桜を見れることを夢見て

その夜は傍にあつた納屋で過ごす。

翌朝、駅のホームで貴樹を送る明里。電車が到着し、最後の時間を惜しむ二人。

「貴樹くん……貴樹くんはこの先も大丈夫だと思ふ。ぜつたい」

明里が掛けた言葉が、その意図とは反対に貴樹を縛り付けてしまうこととなる。

去っていく電車を見つめながら、手紙を取り出す明里。

二人は互いに手紙を渡せなかったのだ。

走る電車の中。貴樹は窓の外、流れていく景色を見つめる。

君が、遠ざかっていく。

きつといつか僕は、埋めようのない距離と時間に負けて

君の声も、顔も、忘れてしまうんだろう

そうして……

雪に覆われた大地を走る電車が映し出され、『桜花抄』が終わる。

## コスモナウト

『桜花抄』が終わり、第二話『コスモナウト』へと物語は進む。

明里との再会を果たした雪の一夜。月日は流れ五年後。

舞台は鹿児島島の種子島へと移り、貴樹は俺と同じ高三になっていた。

高校から始めた弓道。朝一番で独り矢を放つ事が日課になっている。

そんな貴樹に想いを寄せる少女がいた。名前は、澄田花苗。

文学少女らしいおとなしめの雰囲気をもつ明里とは反対に、サーフィンを趣味とする明るく元気で活発な女の子。彼女の視点で物語は進む。

中二の始業式。転校してきた貴樹に一目惚れして以来、今までずっと想いを寄せる花苗だが、

奥手なためその想いを伝えることが出来ずにいた。

そんな彼女のささやかな楽しみ。それは貴樹の部活が終わる時間に合わせ

偶然を装い單車置き場で貴樹に出会う事。

そして花苗は、貴樹からの「じゃあ、一緒に帰ろうか」の言葉を楽しみにしている。

男女の区別なく接し、皆に平等で穏やかで優しい。でも本心はよくわからない。



そんな評価を周囲の人たちから受ける貴樹は花苗の望む言葉をいつてくれる。

それが嬉しい半面、その事が花苗の想いを告げる障害にもなっていた。

自分にだからそう言うてくれるのか誰にでもそう言うのか、花苗には判断できなかったのだ。

それでも貴樹からの誘いの言葉に

「もし私に犬みたいな尻尾があつたら、きつと嬉しさを隠しきれず

ぶんぶんと振つてしまったと思う」

「ああ……私は犬じゃなくてよかつたなあ、なんて、ほつとしながら思つて、

そういう事に我ながら馬鹿だなーと呆れて、それでも遠野君との帰り道は幸せだった」

と思えるくらい幸せの日々を過ごしていた。

しかし時間は止まっても待つてもくれない。

季節も秋口になると花苗の周囲も進学や就職にと慌ただしくなる。

進路が決まらず、自分の想いを伝えられない事に花苗は焦っていた。

見えない明日。周囲との温度差。貴樹への想い。

花苗の回想が始まる。

貴樹と同じ高校に行きたくて夜遅くまで頑張つて勉強したり、何とか同じ高校に入り

ほんの少し話せたことや傍に近づけた事に一喜一憂する姿が映し出される。その度、俺の隣で一色がため息に似た吐息をつく。

こうやってみると、一色と花苗の境遇はどこか似ているんだよな、と思う。想い人の葉山と離れたくないからと苦手な文系を頑張つて勉強していたり、そばに居られる理由を作るためにサッカー部のマネージャーをやったりとか。そういうや、サッカー部のマネージャーはどうなったんだろう？

冬は寒いじゃないですかー！ といつて顔を出してなかつたはずだが、夏は暑いからで顔を出していないんだらうか？

気になったので尋ねてみる。

「なあ、一色」

「静かに」

俺がいうと、ノータイムでめぐり先輩の声が飛んできた。

我が家でまさかの私語厳禁……。どんだけ集中してるんですか、先輩。

すいませんと声を出すのも憚れるほどモニターを注視している先輩の姿は、

ディスプレイランドでの雪ノ下を彷彿させるものがある。

すると、ちよいちよいと袖が引かれたので振り向くと、一色が可笑しそうに笑いなが

ら

人差し指を唇に当て、しーっとしてくる。

一色に頷きを返し、俺も映画に集中しようとして視線をモニターに戻す。

放課後の帰り道。貴樹と花苗は風力発電の風車がゆっくりと回転する草原で、

すぐそこまでに迫っているこれからについて言葉を交わす。

「ねえ、遠野くんは受験だよね」

「うん。東京の大学を受ける」

「東京……。そっか、そうだと思った」

「どうして？」

「遠くに行きたそうだもん。なんとなく」

「そうか……。澄田は？」

「私？ ……私、明日のこともよくわからないんだよね」

「誰だつてそうだよ」

「えっ、うそ！ 遠野くんも？」

「もちろん」

貴樹の言葉に花苗は驚く。

「貴樹を大人っぽい男性として見ていた花苗には、その言葉は意外だったからだ。

「迷いなんて全然ないみたいに見える」

「まさか……迷ってばかりだよ」

「俺はできることをなんとかやっているだけ。……余裕ないんだ」

貴樹の言葉の真意は花苗にはわからない。

ただ自分と同じように貴樹も迷っている事に、自分だけが周囲から取り残されているような、

そんな不安な気持ちでいた花苗は嬉しくなる。

俺も初めて観たとき、その迷いは単に新しい場所へと移る不安のようなものだろうと思っていた。

その後、漫画や小説を読んで知ったその本当の意味に、明里が最後に送った言葉がその意図するところとは反対に彼を苦しめてしまった事に哀しくなってしまう。

明里と別れたあの日、貴樹は二つの事を誓った。

いつかずっと先でどこかで明里に会えた時、彼女に対しても自分に対しても

恥ずかしくないような人間になりたいという事。

そして、明里への想いをずっと持ち続ける事。

花苗や周囲の人たちが見ていた貴樹。

学業優秀で男女の区別なく接し、皆に平等で優しい。

そんな貴樹は彼の持つて生まれた何かではなく努力の結果なのだ。

その事で彼が如何に明里への誓いを大切にしているのかが伺えた。  
しかし二つ目の誓い。

明里への想いは、失ってはいいが薄れてしまっている事に

貴樹は罪悪感めいたものを抱えていたのだと思う。

この頃にはすでに、明里との文通も途絶えていた。

現実の距離が心の距離になってしまいうように、逢っていない事、

即ち「経験を共有できていない」ということが

互いに書くべき言葉を失わせてしまったのだと思う。

明里への想いは薄れている現実。

それなのに、「大丈夫」な大人になっていかなければならないという切迫感だけが貴樹に残る。

そのせいか貴樹くんはちよつとめんどくさいやつになっていた。

出す宛のないメールを書いたり消し書いては消す毎日。

めんどくさいことで定評のある俺ですら、それはどうよ？　と思う行為を繰り返す。

そんな彼の姿に思い出迷子と目的迷子の素質を見出してしまふ。

とそこで、一色が俺の袖をちよいちよいと引いてきた。

「なんか、先輩みたいにめんどくさい人になっちゃいましたね、貴樹くん」

「確かに貴樹、ちよつと詩人が入つてるよな。俺には無いめんどくささだ。それとな、一色。ここから更に貴樹はめんどくさくなつていくんだぞ」

面倒くさそうな表情でいうと、一色は俺とは比較にならないくらい面倒くさそうな顔をする。

気持ちわかるが、ひでーなこいつ。と思つていると、一色は唇に指先を当て何か考えるように口を開く。

「お話自体は共感できる部分が多いんですけど……」。

やっぱり、めんどくさい人と付き合うのはめんどくさそうですね。例えばですけど、先輩とかと」

言うど、へつとなんだか馬鹿にし腐つたような笑みを口元に浮かべて俺を見る。

その笑顔にカチンつときた俺が、「いや、頼んでないんだけど？」と言いつ返そうとする

とめぐり先輩の「ごっほん！」という咳払いの音が聞こえ、俺と一色は二人揃つて首を竦める。

ちらつと先輩に視線を向けると、俺を薄目で睨んでいる先輩と目が合った。

なんで俺だけ……一色のことも怒りましようよ！　と思いつつ、

怖いのでモニターに目を戻す。

そんな俺とは裏腹に、花苗のときめきはピークに達していた。

ある日の帰り道。前を歩く貴樹の服をちまっと掴むと、告白しようとする。

どうやら貴樹も花苗の気持ちに気付いている様子。

まあこれだけわかりやすい態度に気がつかないのはラノベの主人公くらいなものだろう。

花苗は何とか言葉を紡ごうとするが、貴樹の目を見て気がついてしまう。

この人は自分のもつと向こう遠くを見ており、自分を見てもいないということ。

貴樹は思いが届かない苦しさを知っているゆえ、自分を好いてくれる花苗に中途半端に

優しくしてしまう。それが一番残酷なことだと気付く余裕もなく。

結局、花苗は告白することが出来ず、そのまま家へ帰る。

夜、飼い犬のカブを部屋に入れ、囁くように話しかける。

「もうダメなんだよね」

「そっか、もう朝会ったりとか、一緒に帰ったりとか、ダメなんだ」

「それでばったり廊下で会ったりしたら、変な顔したりしないでちゃんと普通にしなきゃね」

「遠野くんはきつと、何もなかったようにしてくれるから」

「遠野くんは優しいから……私も」

堪えていた涙が止めどなく溢れ、花苗は幼子のように身を縮める。

「ああ……ねえカブ、終わっちゃったんだ」

「終わっちゃった……終わっちゃった……終わっちゃったよ……」

ぐすつと小さな嗚咽が聞こえそちらに目をやると、一色が涙ぐんでいた。

ああ……葉山に振られたときの事を思い出させてしまったか。

こいつだつて良いところがたくさんある可愛い女の子なんだけどな。

そんな、少し痛ましい気持ちで彼女を見る俺の耳に、花苗の独白が小さく届く。

それでも、それでも私は、明日も明後日もその先も、遠野くんのが

やっぱりどうしようもなく好きなんだと思う。

遠野くんのことだけを想いながら、泣きながら、わたしは眠った……

そうして……

美しい月の光に照らされた砂浜が映し出され、『コスモナウト』が終わった。



## 秒速五センチメートル

想いを伝えることすら出来なかった花苗の姿に思うところがあつたのだろう。

顔を両手で隠し泣き出してしまった一色が落ち着くまで、映画を止め休憩することにした。

わずかに開いた窓から夏風が涼やかに吹き抜ける。

部屋はしんと静まり返っており、時折零れ落ちる一色の小さな嗚咽の声が聞こえるだけ。

「……すいません。ちょっと自分と重なってしまうところがあつたので……」

泣きはらした目で気恥ずかしげにいう一色の頭を、めぐり先輩が優しく撫でる。

見ているだけでほっこりと心温まる光景。

そんな二人の姿を見ながら、目的のためならあらゆる手段を惜しまない俺は

いいな、俺も泣こうかしら……と邪な思いに身を焦がしていた。

綺麗なほんわかお姉さんに頭を撫でられる。

そんな素敵な経験を積みれば俺のレベルは急上昇し五年は余裕で戦えると思うのだ。

一色への羨ましさとこれから自分がしようと考える行動の気恥ずかしさに悩んでい

ると

泣き止んだ一色に優しく最後のひと撫でをした先輩は、俺の方にくると姿勢を変えてきた。

まさか俺にも!?! と思い胸をときめかせていると、先輩は柔い笑みを浮かべながらも年下の俺を優しく窘める大人びた口調で叱ってくる。

「それはそうと比企谷くん！ 映画を観てるときは静かにしないと駄目だよ？」  
映画館で大暴れるラブライバーにも聞かせたいお言葉。

そして「てりやく！」の声とともに、めぐりんチョップを繰り出してきた。  
ゆっくりと迫り来るめぐりんチョップ。

避けるのは至極簡単だが、めぐり先輩とタイアップするチャンスはそうそう訪れるものではない。

俺は自ら当たりに行くべくおデコをずいっと差し出すと、ぱつちこい状態で迎え撃つ。

そうして望み通り、ぺちこんつとめぐりんチョップの直撃を受けた瞬間  
「ぐはっ」と喜びの声をあげてしまう。

もう一発プリーズ……。そんな感想を抱かせるほんわかする一撃。

しかも当たった箇所を優しく撫でてくれるアフターケアまでついてきた。

これはもう余裕で諭吉のやり取りが発生するレベルのプレイ。

諭吉が二人、いや三人は必要なハイレベルなサービス。

そんなめぐりんチョップの微睡むような余韻に浸りつつ

俺は去年の秋、体育祭の事を思い出してしまう。

体育祭の件で奉仕部へと相談に訪れたためぐり先輩はその柔らかな手で

雪ノ下の手を握り由比ヶ浜の頭を撫でていたのだ。

なのに俺には何もなかったあの時から少し遅すぎた感があるが、それでも今この時、

先輩からチョップをもらえたことに、胸が張り裂けそうな喜びを感じる。

念願叶うとはまさにこの事。

今日の事を忘れないために、ここは一つ日記でもつけようか。

そんな思いに耽っていた俺は、自分の横顔に冷たいものを感じそちらへと目を向ける。

すると、さつきまで目をはらして泣いていたはずの一色が、怪訝な表情でじーつと俺

を

見ていることに気が付く。

一色が極限まで細められた薄目で睨めつけてくるので、居た堪れない気持ちになり

顔を背けてしまう。やめろ……そんな目で俺を見るな……

気まぐさを誤魔化すように軽く咳払いをし、二人の了承を得て、止まっていた物語の続きを見ようとボタンを押す。

そうして最終話、『秒速5センチメートル』が始まった。

× × ×

それまでの恋する男女の視点で描かれていた『桜花抄』と『コスモナウト』とは一転、夜のシーンが多いというのもあるが、どうにも陰鬱な雰囲気で物語は進む。

明確な描写がないので不明だが、多分高校卒業から十年ほど経った二十代後半の貴樹の話。

高校時代からその片鱗は見えていたが、貴樹くんは更にめんどくさい男になっていった。

頑張る目的を見失っているのに、それでもがむしやらに前に進まなければならないと

いう

強迫観念だけが更に強くなっており、めんどくさいレベルがカンスト寸前の模様。大学を卒業した貴樹は就職しシステムエンジニアとして働いていた。

仕事の方はエンジニアとしての能力が優れていたこともあり評価される。

だが評価されたゆえに、入社以前から続いていた敗戦処理の

達成感の得られないプロジェクトの担当にされてしまう。

プロジェクトリーダーと対立し全作業を一人でやる形になり、仕事に追われる毎日。

そしてそれに対処できてしまう能力の高さ。

なのに、それらに価値を見出すことが出来ないジレンマが貴樹を苦しめる。

やはり働くべきではない。そんな感想を抱かせる彼の姿に

俺は自分の判断の正しさを証明されたような気分になる。

現実を上手く乗り越える器用な面と、その意義を上手く納得できない不器用な面。

多分、貴樹だけでなく誰にだってあると思う。

形は違えど、本当にこれで良いのか？ と思うことは。

貴樹は疲れ果て表情も険しい。生活もやや荒れている。

中学や高校のときの強い想いが、形を変えて貴樹を不幸にしていた。

そうして限界に達した貴樹はプロジェクト達成の目処が付くと、会社を辞め

再就職では自分の幼い時からの夢だった宇宙開発関連の仕事につく。

周囲からの期待に応えやらなければいけない事ではなく、貴樹自身がやりたかった事を、

彼はようやく選べるようになる。

貴樹が疲れ果て限界に至るまで、生き急ぐことを止められなかったことは不幸ではあつたけれど

結果的には大丈夫になれた。過去に明里が言っていた通りに。

結局は最後まで貴樹は明里との再会を果たせずに終わってしまった。

だが、互いに互を直接には幸せにできなかったけれど、遠くから互の幸せを願う、

そんな暖かな関係に明里は少しだけ早く貴樹はようやくなれたように物語は紡がれる。

そうして、貴樹がこれからへと踏み出す事が出来た所で物語は終わる。

×  
×  
×

見終わると、三人が三人とも疲れたような吐息をもらす。

何度見てもこの物語は俺にそうさせる。初見の二人なら尚更だろう。

最後には結ばれて欲しかったという二人の意見に耳を傾けていると、

一色がどうしてハッピーエンドにしなかったのかと疑問を口にした。

めぐり先輩もそう思うらしく、二人の疑問に応える形で俺は口を開く。

「秒速を作った理由の一つに、新海監督があんまりモテなかったことがあるそうです。

それで自分が初恋の人と結婚していれば、こういう作品は作らなかつたと思うって  
いってました」

「でも世の中、初恋の人と結ばれる人の方が圧倒的に少ないわけじゃないですか？

なら、初恋の人と結ばれる『ロマンチッククラブ』じゃない作品を作るってことは

他の人にとっては何らかの救いになるんじゃないかって思ったらしいです」

「例えばですけど、ジブリって『ロマンチッククラブ』を強く肯定する作品が多いと思う  
んです。

そのことで「こう生きなければならぬんじゃないか」って思う人がいるんだしたら、

それは結構きついことだなと」

「気持ちを通じ合うっていうのは大切なことなんですけど、でも通じ合ってそこで人生が

終わるわけではなく、そのあともすれ違いはどうしたって出てくると」

「それをどうやって乗り越えていくか。通じ合ったと思ったけどダメになってしまい、それでも

生きていかなければならないって事の方が人生では大事だと思う。そう言ってますね」

俺の言葉に、めぐり先輩と一色はふむふむと頷く。

すると一色ははいつと手をあげて、自分が感じたことを口にする。

「えっと、私が思ったことなんですけど……。タイトルの「秒速5センチメートル」は

物語の中では桜の花びらの舞い落ちる速度を表していたじゃないですか？」

「でも同時に、人の気持ちの離れていく時間の早さを表しているんだろうなって思いました」

その言葉に、ほーと感心した声を漏らしてしまう。

一色は真剣な表情で更に言葉を続ける。

「やっぱり好きな人とは離れちゃいけないなと思います」



「……どんな手を使っても」

どんな手を使っても……なんか怖いんだけど、この子。

そう思ってたよと引いていると、一色は顔をあげ俺をじっと見つめてくる。

「先輩。ちよつとご相談が……」

小さい声でそう言うと、座布団を滑らせずつとこちらに迫ってきた。

そして俺の前にぴたつと止まると、瞳をウルウルさせて前かがみで上目遣いをしながら

俺を見てくる。これまでの経験から嫌な予感をひしひし感じていると案の定。

「先輩。その時は付き合ってもらっても良いですか？」

と猫撫で声で尋ねてきた。

その時つてどの時だよ……

なんか犯罪に巻き込まれるどころか共犯者にされそうで少し怖いが

手伝える範囲で手を貸すのはやぶさかではない。

「法に触れない範囲なら、まあ手は貸すぞ」

念のため、法に触れることはしないぞ？ と伝えたのだが、上手く伝わらなかったよ

うだ。

俺の言葉に、一色は表情を明るいものにする

「……法に触れない範囲。」

それってグレイゾーンまでは手を貸してくれるってことですね。分かりました！  
と、一色特有の変な解釈をしてくる。

ちげーよ……と思いつつ、なんとか説明しようと考えていると、  
めぐり先輩が一色に優しく声をかける。

「一色さん、危ないことは全部比企谷くんにお任せするんだよ！」

その言葉に、にぱつと微笑み元気良く返事を返す一色。

ちよつと待つてくださいよ。それって俺には全然優しくないんですけど……  
何とか反論しようと口を開きかけるが、楽しい二人の表情を見ると  
まあいいか、と思え微笑んでしまう。

窓の外へ視線を向ける。もう夕方のようだ。

茜色の空に浮かぶ飛行機雲がゆっくり薄れていくのを眺めながら、  
こうして三人で「物語」を観ることが出来た事を嬉しく思う。

これが三人で笑い合える、最後の時とは気がつかぬままに。

## 今こうしていることも

秒速を見終わった俺たちは、両親と小町に見送られ家を出る。

そして先に、電車で来ている一色を送るため駅へと向かう。

駅まで向かう道すがら、前を歩く二人の秒速を見た感想に耳を傾けていると、

一色がこちらに振り向き声を掛けてきた。

「そういえば先輩。貴樹くんも明里ちゃんも、それぞれ手紙を渡せずじまいでしたけど、なんて書いてあつたんですか？」

「そういや映画だとその描写はなかったよな。小説にはあるんだが」

一色の疑問に答える形で、小説に書かれていたそれぞれの手紙の文章をゆつくり口にする。

それを聞いた二人は沈んだ表情で、ふっと短くため息をつく。

「お別れにいった貴樹くんの方が、結局、ちゃんとお別れできなかつたんだね……」

「もし貴樹くんが明里ちゃんの手紙を受け取っていたら、

もつとこう、違う未来もあつたかも知れませんか」

二人の言葉に、本当にそうだと思う。言葉だけでなく手紙をきちんと渡せていればと。

あえて渡さなかつた明里の気持ちも充分理解することは出来るのだが……

「手紙を渡『せな』かつたど、渡『さな』かつた。

貴樹はどこか心を置いてきたようで、明里は自分の意志でしまった。

それでそれぞれの思いの置き方が違ったんだらうと俺は感じたけどな」

理不尽に明里から引き離され一人に戻された貴樹は、理不尽に負けない強さを欲し同じように貴樹から引き離された明里は、自分一人でも生きていける強さを求めた。

強さを求めるのは同じなのだがその方向性が、その後の二人の生き方をわけてしまつたのは

仕方ないのかも知れない。

「それとあれだ。付き合い続ければ、お互い嫌な面が見えてきて『徐々にがっかり』する事も

できたんだらうけど、一番良い時に別れたのが後に引いたんだと思うぞ」

いうと、一色がむーつと唸る。

「がっかりつて……。ちよつと言ひ方酷くないですかね？」

一色はご不満そうに口を尖らせ、俺をじとつと睨んできた。

ふむ、お気に召しませんか。まあ恋する乙女には納得しかねるのか知れんな。

「そうか？ 誰かに期待する。それはどつちにとつてもきついことだと思ふぞ。

期待する方は答えてくれない相手に必要以上に失望するし、期待された方は何とか答えようと頑張れば頑張るほど相手の要求が上がって、結局答えられずに失望される。

なんでもそうだけどほどほがいいんだよ。お互いにな」

だから一色。俺を共犯者にしようとするなよ？ と心の中で付け足す。

いやマジで勘弁してくださいね？

一色の期待に答えれば答えるほど、俺の社会的地位が危うくなりそうで怖いし。

いつてみたものの、一色は納得しかねてる様子。

まあ理解と納得は別もんだしな、と思っていると、そこへめぐり先輩がこほんと

ちよつとわざとらしい咳払いをする。

「一色さん。ほらえつと、生徒会をやっているとわかるかなと思うんだけど……」

先生の中にはさ「去年はこうだったあーだった、なのに今年は……」みたいな事、

言う人もいるじゃない？ あれって言われる方は結構きついんだよね。

比企谷くんが言ってるのは、多分そういうことだと思っよ」

そして「だよね？」といった感じの視線でこちらを見てくるので、それに頷く。

「それは確かにありますね……。なんか城廻先輩とすつごく比べられるんです、私。

城廻先輩のときはこうだったあーだったって」

一色は拗ねたようにいうと、ぷくつと頬を膨らませる。

そんな一色に、めぐり先輩は困ったような顔で「ごめんねえ」と謝りつつその頭を優しく撫でて慰める。

二人の姿を見てほっこりした気分になりながら、俺は考えてしまう。

一色。めぐり先輩の言うことはちゃんと聞くんだな……

俺の言うことは聞く耳すら持っていない感じなのに。

まあ俺のイニシャルはHが二つでH2だから、水素みたいに軽い扱いでも仕方ないかも知れん。

でもだからって、こどもも露骨に態度を変えるのはどーかなーと思うわけですよ、俺は。などと思っていると、一色は頬を薄く染め先輩に拗ねた事を謝り、お礼の言葉を口にする。

もちろん俺には何も無い。おい、一色。ほら、俺！俺には！……俺には？

だが、俺の事など知ったこちやない感じで、二人は微笑み合っている。

くうー、なんという疎外感。ゆるゆるするなら他でやれよ！ それかテレビで放送しよう。

毎週見るぞ。録画だつてしちゃう。

そんな思いに馳せていると、一色がぽつりと眩きをもらす。

「その、映画だと明里ちゃん。貴樹くんを思い出に出来たように描写されていますけど違うんじゃないかなって思います。えっとですね、上手く言えないんですけど……」彼女の途中で思うところがあるらしく、言葉を探すようにぽつぽつと話し始める。

「なんて言うか、あの頃には二度と戻れないと理解していても、それは苦しく切ない気持ちとして心に残ってる事って誰にでもあると思います。」

まあそれを乗り越えるのが、乗り越えられるのが大人なんでしょうけど」

「あたしは……きつと乗り越えられないです。それでも学校に行くし生活しています。」

だからその、気持ちと行動は必ずしも同じってわけじゃないと思うんです」  
一色はやはり感受性が高いと思う。

問題があるとすれば、俺の気持ちだけを何故か全く受信してくれないとこくらいだろうか。

なら問題ないともいえる。

「まあ、上手くさよならして思い出にする。それが一番なんだけだな。」

でも忘れるっていうのも、そんなに悪いことじゃないと思うぞ。

嫌なことや悲しいこと、それに時間が積み重なって見えなくしてくれるし」  
過去に嫌なことが多すぎる俺にはこの忘却システムは都合が良いものである。

無駄に良すぎる記憶力のせいで事あるごとにトラウマが湧いて出てくるからだ。



湧いて出るのが温泉や石油、金とかダイヤモンドならウエルカムなのだが。

「でもさ、比企谷くん。それと同じくらい嬉しかったことや楽しかったことも埋めて見えなくさせちゃうよね？」

「それは……まあ、そうですね」

三人とも黙ってしまい、それから皆、無言で歩く。

しばらくして一色が歩調を緩め俺の隣を来ると、並んで歩き出す。

「……先輩もいつか、私のこと忘れちゃいますか？」

「むしろ俺のほうが、お前に忘れられそうぞ」

クラススの連中にも覚えられているか自信がない俺だ。

殆どの人間に忘れられる以前に覚えられているか微妙なところだろう。ていうか、一色？ お前、俺の苗字でも名前でもいいけど覚えてる？

「大丈夫ですよ。きつと忘れません」。

それにその、ずっと一緒にいれば忘れようがないじゃないですか？

いうと、一色は少し照れくさかったのか、はにかみ笑いを浮かべた。

まあ確かにな。だが、ずっと一緒に居ることなど互いにそう思わない限りあり得ない。

そんな気持ち言葉になって、ぼろっと口から零れてしまう。

「まあ、ずっと一緒に居れるならな」

「うわあ……嫌なこと言いますね……」

ものつそい勢いで一色がドン引きしていた。

あまりの引きつぷりに、でも本当のことだろうと口に出すのが憚れる。

俺の返しがお気に召さなかったようで、一色はぶくつと頬を膨らます。

その頬は朱に染まっており、傾いてきた夕日は街全体を赤々と照らしていた。

「まあ、一緒に居たいとお互いと思えば、自然と一緒に居れるだろう」

「……そうですね」

俺の言葉に一色は頷きながら答えると、足を速めてめぐり先輩の隣に並ぶ。

そして最近の生徒会の様子を先輩にあれこれと話し出す。

それを見て、俺も二人から遅れないように足を進める。

やがて、今こうして話していることも思い出に変わる。

そして記憶の底に沈んでいくのだろうと思いつながら。

## ソウルネームを持つ少女

既に日は傾き、薄墨を流した藍の空に白い月が浮かぶ頃。

到着した駅の改札口。俺とめぐり先輩は、一色ときよならの挨拶を交わす。

「一色。気をつけて帰れよ。それと、明日からよろしくな」

「一色さん。生徒会も色々大変だと思うけど頑張つてね！」

なにかあったらメールしてくれれば、わかる範囲で答えるからね」

生徒会で大変なのは一色ではなく副会長なのだが……

一色は自分に都合が悪いことを、めぐり先輩に話していないようだ。

知らぬが仏。そんな言葉が似合う光景に俺の胸は少し痛む。

先輩の言葉に、一色はにぱつと笑顔になると自信ありげに胸を張る。

「城廻先輩。生徒会は私に任せてください！」

でも何かあったときは、メールの方送らせていただきます！」

任せとけと言いつつも、困った時には助けてねと保険を掛けることを忘れない。

しつかりものというよりやはりちやつかりものといいたくなる科白だが

言われた先輩は口元を綻ばせる。

あざといを絵に書いたような後輩の言葉でも、やはり嬉しいのだろう。めぐり先輩は、すすいっと一歩前に出て、きゅっと一色の手を取った。

そして激励の言葉とともに、つないだ一色の手をぶんぶん前後に振り始める。

一色は気恥ずかしそうに身を振りつつも、それに笑顔で答える。

唐突に始まったゆるゆり二期な光景に俺がもんもんと疎外感を募らせていると

そこへ電車の到着を知らせる構内放送が流れた。

それを耳にした一色は丁寧に先輩の手を解くと、別れの言葉を口にする。

「では、城廻先輩。今度またメールをさせて頂きますね。」

それと先輩。今日はお邪魔しました。また明日です」

「おう、明日な」

「うん。またね、一色さん」

俺たちの返しに、一色はにぱっと微笑む。そしてぺこりと一礼すると歩き出し人ごみに紛れてだんだん見えなくなっていく。

その後ろ姿を見送っていると、先輩の小さなため息が聞こえた。

視線を横に先輩の顔を見ると、先輩は少し寂しそうな表情を浮かべていた。

どうしたんだろうと先輩の横顔を見つめていると、俺の視線に気がついた先輩は気恥ずかしげに顔を赤らめ、ほしよっと眩く。

「やつ、なんかさ、二人は明日も学校で会えるけど、私は会えないんだと思うと  
なんかその、ちよつと寂しくなちゃって」

いうと、こそつと視線を逸らし恥ずかしさを誤魔化すように頬を掻く。

先輩の言葉に、俺は何もいえず固まってしまふ。

学年は違えど同じ学校に通う一色とは違い先輩とまた会うことは、図書館で出会えた  
ような

偶然でも起こらない限り、この先はもう無いのだ。

それに気づくと胸が苦しくなってくる。

それで黙ってしまった俺を見て、先輩は慌てたようにぱたぱたと手を動かす。

「や、まあ仕方ないんだけどね。私、卒業しちゃったし……」

で、でもさ、また何かあればこう、連絡取り合えば、その、えつと……」

「そうですね。また何かあれば……」

「うん……」

胸の奥から滲む寂寥感でこぼれそうになるため息を飲み込んでいると、

先輩は困ったような笑顔で「そろそろ帰ろうか……」と小さくいう。

それに頷くと二人で駅を出る。そして先輩の家へと向かった。

×  
×  
×

「ところでさ、比企谷くんと一色さんって、その、付き合ってるの?」

なんの前触れもなく突然投げられた言葉に、俺は驚いて先輩の顔をまじまじと見てしまふ。

そんな俺を見て先輩は戸惑ったような顔で、慌てたようにおさげ髪をいじりだす。

「えっと、違ったのかな?　なんかそんな感じに見えたから……」

先輩は口早に言うのと、こそつと窺うような視線を送ってくる。

その探るような視線に耐えかね、俺は顔を逸らしてしまう。

場所は駅からの帰り道。二人で他愛もない会話をしながら歩いていると、

先輩が「あつ」と小さく声をあげ口にしたのが今の言葉である。

誤解は解けない。もう解は出てるんだからそこで問題は終わってる。

そんな事を口にした俺も、今は昔。さすがにこの誤解は解かなければ。

「えつとですね。先輩、なんか誤解していると思うんですよ。」

俺と一色はそういう関係じゃないですよ」

「でも前にね。一色さんが比企谷くんと千葉に遊びにいったんですって

楽しそうにお話をしてたから、なんかそうなのかなって思ったんだけど……」

一色、また余計な事を……

「やつ、遊びにはいったんですけど……」

そこで言葉が詰まる。ただ遊びにいっただけ。それだけのことでしかない。

だが「じゃあ何で二人で行ったのか」の説明から始めると長くなる上、

下手すれば行った理由も口にしなければならぬ。

そうすると、先輩に一色の好きな相手をバラしてしまう事になりかねず、

そうしていいのか判断が付かないのだ。

あれこれ考え口籠ってしまつた俺を見て、先輩は可笑しそうに笑う。

「ん、でもお似合いだと思うよ？ 比企谷くんと一色さんって！」

からかうようにいうと、俺の顔を下から覗き込んできた。

お互いの顔が近いのに、先輩はそんなことが気にならない様子で変わらず

ほんわかした笑顔を向けてくる。

おかげで、俺のほうが顔を逸らしてしまう。

「い、いや、ほんとに、そんな関係じゃないですし……」

と、外した視線の先で、見覚えのある顔が驚いたような表情を浮かべて立っていた。

長く艶やかな黒髪に、どこか冷めた雰囲気を持つ少女。鶴見留美。

去年の冬。クリスマス合同イベントから七ヶ月ぶりに会った彼女は、背も伸びて以前より

少し大人びていた。その留美が目を丸くして俺を見ている。

ちよつと声だけかけておくか。一応、顔見知りではある訳だし。

それに先輩もいる状況なら誰かに見られても事案扱いされることもあるまい。

身の安全を確かめると先輩の手前親近感を出すよう、俺が彼女に授けたソウルネームを口にする。

「ルミルミ、久しぶりじゃないか」

「ルミルミって呼ぶの、やめてって言ったよね？」

留美は冷めた声でそう言うと、むすつとした顔で俺を睨んできた。

ルミルミと呼ばれるのそんな嫌なのか。なんかアイドルっぽくって良くない？

CDに握手券付けてうはうはできるかも知れないぞ！ と思いつつ、怖いので言い直



す。

「お、おう、留美。久しぶりだな」

「久しぶり、八幡」

留美はちよつとだけ表情を柔らかくしていうと、先輩にちらつと視線を向ける。

目が合った先輩はやや腰を落とし、留美と目線を合わせるとにはつと微笑む。

「こんばんは。えつと留美ちゃんの良いのかな？ 私は城廻めぐりです。よろしくね！」

「こ、こんばんは。鶴見、留美です」

後ずさりながら困ったように笑って返事をかえす留美を見た先輩は、更に顔を綻ばし留美の頭を優しく撫でる。

突然の行動に留美は戸惑った表情を浮かべるが、先輩は気にせず撫で続ける。

「ねーねー比企谷くん。留美ちゃんは、比企谷くんのお友達？」

「違います」

俺が答えるより早く、留美が即座に切って返す。

いや、確かに違うけど、そんな断言しなくてもいいじゃない？ お兄さんちよつと

シヨツクだよ。

めぐり先輩も可笑しそうにくすくす笑っているしよ。

それで心の中でよよよと泣き崩れのの字を書いていると、留美の後ろの暗がりにも二つの小さな影が見えた。

「留美。後ろの二人、お前の友達か？」

いうと、先輩のなでなで攻撃にあわあわしていた留美が街灯の明かりの外、暗がりには二人を手招きする。

恐る恐るといった感じで街灯の明かりの下に姿を現したのは

留美より頭ひとつ小さい男の子と女の子。

留美をさらに幼くした感じの美少女と、どこか見覚えのある亜麻色の髪を持つなかなか目鼻立ちの整った少年だった。

留美に促され、二人は元気に自己紹介をしだす。

「こんばんは。鶴見友美です！」

「こんばんは。一色ひいろです！」

これが俺に、人生初の顔面パンチを食らわす一色の弟との初めての邂逅とはこの時は知るすべもなかった。

## ひいろと友美

話を聞くと、留美は二つ下の妹と家に遊びに来ていたその彼氏を連れて、俺たちとは逆に駅へと向かう途中だったらしい。

男の子が口にしたその名前にもしやと思い、姉がいるか尋ねてみる。するとその子は、予想した通り一色の弟だった。

俺と先輩は、まさかこんな所で一色の弟に会う事になるとは思ってもみなかったので顔を見合わせ驚いてしまう。

ほほう、これが一色の弟か……。

髪が短髪なことと年相応の幼さはあるが、確かに一色と面差しが似ている。まあ言ってみれば目鼻立ちが整ったイケメンということだ。

しかも小学生で彼女持ち。さらに一色が言っていた通りならば、ガキの分際でキスマまでしてる女たらしである。つまり俺の敵だ。

とそこへ、めぐり先輩が「こんな遅くに子供だけだと、危ないよ？」と留美たちを優しく注意する。

そしてお小言とともに指を繰り出し、留美のオデコをつんつと突く。

でこつんされ戸惑った様子の留美。

きつと今、彼女の脳波は怪しくなっているだろう、俺もそうだったし。

思いつつ、留美に事情を尋ねてみる。

おデコを照れくさそうにさすりつつ留美がへどもどししながら言うには

留美の両親二人とも今日は法事で留守との事。

そして、ほんとはもつと早くひいろを送ろうとしたのだが、友美がごねて

こんな時間になってしまったらしい。

このまま知らんふりもあれなので、とりあえず一色にメールで連絡をとってみる。

少し待つと、一色が駅まで戻りますと返事を返してきた。

ひいろにその事を伝えると、ひいろは一人で平気ですと友美をちらちら伺いつつ言う。

そんなひいろの姿に俺は思わず微笑んでしまう。

はーん、こいつ、彼女の前でカッコつけたいなだな。

思春期というには早いかも知れないが、まあ気持ちはわからんでもない。

でも危ないよと、ひいろを優しく窘める先輩にその事を耳打ちすると

先輩も「あくなるほど」と言い、にまつと笑って納得してくれる。

でもやっぱり危ないよね、と心配げな先輩とひいろの間に立って

俺は折衷案を口にしてみる。

「なあ、ひいろ。今から俺とめぐり先輩も一緒に、お前たち三人を駅まで送るからそこらから一人で電車に乗って千葉までいけるか？」

言うのと、ひいろは緊張した面持ちで頷く。

その表情を見て、今日一色があんなに早く駅に来ていたのはもしかして

ひいろと一緒に来たからだろうか？ と考える。

「ならお前の姉ちゃんももう少しで千葉に着くみたいだから、姉ちゃんに千葉で待っててもらって、

そこから一緒に家に帰れ。携帯はもってるか？」

俺の言葉にひいろは頷きながら携帯を見せてくるので、俺は頷き返し

その旨を一色にメールで知らせる。

「めぐり先輩。ひいろを駅まで送ったら、留美と友美を二人の家まで送ろうと思うんですけど

いいですか？」

「うんうん、いいよ。留美ちゃんたちもそれでいい？」

先輩の言葉に、申し訳なさそうに頷く留美とにぱつと笑って元気に返事をかえす友美。

ふむ。見た目こそ似ているが、だいぶ性格は違うらしい。

ひいろのほうも姉の特徴である凶々しさが全く見えず、謙虚なナイスボーイという感じで

なかなか好感がもてる男の子だ。彼女もちというのが癪に障るが。

などと思っていると、一色からメールが来た。

内容を確認すると、やはり一緒に駅まで来ていたようだ。

そしてひいろは、もうとつくに家に帰っていると思っていたらしい。

弟が長居して申し訳ないと留美に伝えて欲しいとあり、弟には千葉で待っていると  
いつてもらえると助かります、と書かれていた。

伝えとくとメールを送り留美にその事をいうと、留美は慌てた様子でこちらこそと  
謝ってくる。

それに頷きを返し、ひいろのほうへ視線を落とす。

すると、ひいろは友美と手をつないで楽しそうにごによごによと話をしていた。  
やっぱりこいつ、俺の敵だな。

「ひいろ。お前の姉ちゃん千葉のモノレール乗り場で待ってるって言うてるから

千葉に着いたら連絡入れるよ」

「わかった、はちまん」

「ひいくん。気をつけてね」

「大丈夫だよ。ともちゃん、ありがとね」

「なんなら俺だけでも電車に乗って、千葉まで送っていくぞ?」

「はちまん。ひいくんはしっかりさんだからへいきだよ。ね、ひいくん」

友美の言葉に、ひいろは照れたような笑みを浮かべる。

俺はそんなひいろをうっかりさんになってほかーんとぶん殴りたくなっていたが、めぐり先輩と留美、そして後日一色に怒られそうなので我慢することにした。

とそこで、めぐり先輩がひいろと友美に向かって両手を差し出す。

「それじゃあ、ひいろくん、友美ちゃん。」

おくるまが危ないから、お姉ちゃんと手をつないで歩こうか!」

先輩の言葉に、二人はにこぼーとした笑顔で元気一杯の返事をかえす。

「はくい、めぐりおねえちゃん」

「ありがとございませす。めぐりお姉さん」

そして二人は先輩の手をそれぞれ取ると、先輩を真ん中に三人並んでこっこ歩き出す。

その後ろ三步ほどの距離をあけて、俺と留美も並んで歩きながら駅へと向かう。

小学生二人の歩調に合わせゆつくりと歩いていると、前を歩く三人の声が耳に届く。

「もく、ひいくん。めぐりおねえちゃんの手、そんなギユツとしたら、やなの！」  
「や、ともちゃん。僕、そんなギユツとしてないよ……」

「えく、ひいろくんひどいなく わたしの手、ぎゅつとするの嫌なの？」

二人の会話に割って入り、なかなかの煽りスキルを発動するめぐり先輩。

「い、いえ、そういう訳じゃないんですけど……」

「もく、ひいくんのうわきものく！」

友美は拗ねたようにいうと、ぶくつと頬を膨らませる。

友美の態度にあたふたして困っているひいろ。

そんな二人のイチャラブぷりにぐぬぬっーと心の中で唸っていると、

留美が小さくため息をこぼす。

「留美。あの二人、今日一日ずつとあんな感じだったのか？」

「ともちゃ……友美が、通っている塾でひいろくんに一目ぼれして告白したみたいなの。」

それで先々週くらいから付き合いだしたんだって」

「お父さんもお母さんも留守だったから、私が面倒みてただけで

見ててわかるでしょ？ 朝からずつとあんな調子で……」

留美は言うど、げっそりとした顔で疲れたようなため息をつく。

留美の言葉に相槌を打ちつつ、先々週か……と考える。



丁度定期試験の真つ最中で、朝早くから夜遅くまで勉強をしていた時期だ。

俺がうんうん唸って勉強していた時に、あいつらはきやつきやうふふと

いちやいちやしてたのか。

ふむ……。確かもう少し歩いたところに川があつたよな。

アツアツな二人を少し冷ましてあげないと熱中症になつてしまふかも知れん。

ここは一つ……と思つてみると、留美が俺の名前を呼ぶ。

「八幡はぎ、その……、今日はデートだったの？」

ほしよつと眩くと、前を歩くめぐり先輩の背中に視線を向ける。

「や、違うぞ留美。ひいろの姉ちゃんもいたし。うちに来て、三人で映画を観ただけだ」

「デートじゃんそれ。しかも二股？ 八幡サイテー」

留美は軽蔑したように冷めた声でいうと、ふいつと顔を逸らす。

その言葉に、留美の後頭部、というか頭頂部に見える可愛らしいつむじを眺めながら

俺はゾクゾクしていた。いいねこのプレイ。

打たれまくってあらゆる事に耐性を持つ俺だが、そんな俺にも弱点はある。

俺の体と心が美少女の罵詈雑言には滅法弱い仕様ということ。

だがそれはご褒美という体質なので大丈夫といえれば大丈夫でもある。

そんな事をつらつら考えていると駅に到着した。

×  
×  
×

再び訪れた駅の改札口。今度は一色の弟、ひいろを見送る。まあ主に友美が。現代版ロミオとジュリエットみたいに別れを惜しむ二人。

めぐり先輩は瞳をウルウルさせて見守っているが、

俺と留美はしらつとした目でそんな二人を見ていた。

「ひいくん、また塾であえるよね」

「大丈夫だよ、ともちゃん。また火曜日だね」

「うん……。でも、メールしてね」

「わかってるよ。ともちゃん」

などとかれこれ五分以上、同じようなやり取りを交わしている。

いい加減うんざりしていると電車の到着を知らせる構内放送が流れた。

手をつないで別れを惜しむ二人をなんとか引き離し、さっさとホームにいくよう

ひいろを促していると、悪役になった気分になる。

何度も振り返り手を振るひいろに、友美と先輩は律儀に手を振り返す。

そんな二人の後ろで、俺と留美はげっそりとした表情を浮かべていた。

ひいろがホームへあがる階段をのぼりその姿が見えなくなると、

名残惜しむ友美の手を引いて駅から出る。

そうして俺たち四人は、今度は留美と友美の家へと向かうのだった。

## 理由

が ひいろを見送って駅から出ると、駅前には帰宅する人や買い物客、部活帰りの学生など

多くいて騒がしい。そんな中、俺たち四人は人ごみを抜けて広場に出る。

めぐり先輩は友美と手をつなぎ、俺は留美と肩を並べて歩道をゆつくりと歩く。歩きながら先輩にひいろのことを楽しげに話す友美。

その三歩後ろで、俺は留美に忌々しげに罵られていた。

「ひいくんてね。とつてもやさしいの！」

「八幡てさ、とつてもやさしいよね」

「ひいくんはね。友美にいろんなこと、お話してくれるの！」

「八幡はさ、女の子にいろんなこと、してそうだよね」

「ひいくんにね。今度、動物園に連れてつてもらえるんだ！」

「八幡。今度はいつ、女の子を家に連れ込むの？」

おかしいぞ。似たような言い回しなのに内容が余りにも違いすぎる。

友美の言葉に笑顔を浮かべ楽しそうに相槌を打つめぐり先輩。

その三步後ろで留美の言葉に冷や汗を浮かべ戸惑いながら言い訳する俺。  
どうなってんのこれ!

言いたいことを言うだけ言った姉妹二人。

友美はふんふんつと上機嫌に鼻歌を歌い出し、留美はふんつとご機嫌斜めな様子で顔を背ける。

なんとか留美に機嫌を直してもらおうと、恐る恐る話しかける。

「留美も中学生になったんだよな? 中学はその、どんな感じだ?」

すると留美は足をびたつと止め俺をちろつと見る。俺も留美に合わせて足を止める。

「……少しだけど、話せる子ができた」

「よかったじゃねーか。友達、できたのか?」

「友達……なのかな。よくわかんないや。ほんとにちよつと、話すくらいだし」

「会話なんかちよつとでいいんだよ。むしろ少ないほうがいくらいだ」

「そうなの?」

「うむ。多くていいのは、そうだな……」。

ラーメンのチャーシューの枚数と、毎月もらうこずかいの金額くらいだ」

いうと、留美はしばしきよんとしていたが、少ししてふつと呆れ笑いを漏らした。

「……なにそれ、……ばっかみたい」

小さな笑顔でそういうと歩き出したので、俺も留美の歩調に合わせて歩を進める。いつぞやか似たようなやり取りを留美としたなと思っっていると

留美が何か考えるよう髪を弄る。

「友達とさ知り合いつて、どうやって区別するんだろうね？」

留美の言葉に俺は口籠つてしまう。

ほんと、どこで、なにで、その二つは区別されるのだろう。

そう思っていると、前を歩くめぐり先輩がくるとこちらに振り向く。

そして留美の言葉に何も答えを返せない俺の代わりに、優しい声で答えてくれた。

「留美ちゃん。私が前にね読んだ本に書いてあったんだけど。

えつとね、理由がないと会わないのが知り合いで、理由がなくても会えるのが友達なんだつて」

「だから留美ちゃんとその子が、今は理由がないと話ができなかったとしてもね、これから

理由がなくても話ができるようになっていければ、その時には友達つて呼べるんじゃないかな」

先輩の言葉に、俺と留美がほーと感心混じりの声を出すと、先輩は恥ずかしくなったのか

照れたような笑みを浮かべ頬を掻く。

そこへ友美が自分の相手をしてとばかりに先輩の袖を引いたので、先輩は俺たちに柔らかに

微笑むと友美の話に耳を傾ける。

そんな二人の仲良さげな後ろ姿を眺めつつ、留美と二人、とぼとぼ歩いていると今度は留美の方から話しかけてきた。

「その子とはね、同じ高校を目指しているのがわかって、それで話すようになったんだけど」

「もう高校のこと考えてるのか。留美はまだ一年生だろ？ ちよつと早くないか」

「でも進学校だから、早いうちに対策しないと入れなさそうだし……」

「どこ目指してんだ？」

「……総武高校」

「うちの学校か。まあここいらじゃ一番偏差値高いからな。で、入れそうなのか？」

俺の問いかけに、留美は困ったような表情を浮かべ俯いてしまう。

そして、ぼしょつと小さな声で呟く。

「他の教科は大丈夫なんだけど、数学が、ちよつと苦手だ」

数学か……。ほんとと文科省のお偉いさん、数学廃止に動いてくれないかしら。

泣いてる子もいるんですよ！ と匿名で手紙でも送るべきか？ と考えていると留美は内緒話するように、さらに小さく呟く。

「八幡はさ、数学、得意？」

ふむ。得意か苦手かで聞かれれば苦手と答えざる得ないが、得意か？ と聞かれれば一色（姉）の力で、これから俺は急成長を遂げるのでそれを考慮して答えねばならない。

「まあ、得意だぞ」

キリツとした表情でそう答えた俺に留美は尊敬したようなきらきらした瞳を向けてくる。

ちよ、まって、そんな目で俺を見ないで。良心の呵責で俺、死にそう。

そんな苦悩に満ちた俺の内心を知らない留美は、恥ずかしげにもじもじしながらとんでもないお願いをしてきた。

「なら八幡。その、時間がある時でいいんだけど。私に数学を教えてくださいませんか？」

「お、おう。で、でもなあ……、俺もそう、そうだ、受験？ だしさ、ね？」

なんとか言葉巧みにこの場を切り抜けようと、得意の言い訳スキルを発動する。

だが悲しげな顔になった留美を見ると、俺のお兄ちゃんスキルがオートで発動してしまふ。



「ま、まあ、あれだ。俺に任せとけ」

とんと自分の胸を叩き、表面だけ自信ありげにいうと

留美はばあつと花咲くように笑顔になる。

そして礼儀正しく「お願いします」というと、ぺこりと頭を下げる。

や、やべえ……、まじやべえ……。

ちよつと本気で一色から数学を教わらないと、これ、まじでやばくね？

そんな動揺に満ちた心の内が顔に出ないよう表情を取り繕いつつ

互いに連絡先を知らない留美と携帯の番号とアドレスを交換する。

そうこうしているうちに留美の家に到着し、姉妹二人とさよならの挨拶を交わすことに。

「送ってくれて有難うございます、城廻さん。あと、八幡も有難う」

「おくつてくれてありがとうー、めぐりお姉ちゃん。おまけで、はちまんもありがと」

笑みを浮かべ二人の頭をいい子いい子とばかりに撫でてお別れする先輩の後ろで

俺もうむつと頷く。

ちよつと俺の扱いが悪い気もするが、俺も大人な男だ。

こましやくれで小生意気な二人にも優しく声をかける。

「友美。ひいろとこれから仲良くするんだぞ。ただな、小学生らしい付き合いで、だ

ぞ」

だからお前ら、キスとかしてんじやねーぞ。の意味を含ませながら言うのと、友美は「わかった。はちまん！」と元気に返事をかえしてくる。うむ、素直でよろしい。

そして視線を横へ留美に移すと、照れくささで頭をがしがし搔く。

「留美、そのなんだ。勉強のこと以外でも困ったことがあつたら連絡しろよ。」

助けになれるかわからんが、話を聞くくらいなら俺でもできるからな」

いうと、留美は道路に視線を落とすし、こくりと、小さく頷いた。

「困ったことだけじゃなく嬉しいことがあつたら、その、連絡する」

留美は呟くとふいっと顔を逸らすので、その整った横顔に「おう、いつでもしてこい」

と

微笑み混じりで返事をかえす。

そうして、気恥ずかしげに小さく手を振る留美と元気一杯に両手をぶんぶん振る友美

に

見送られながら、俺たちは先輩の家へと向かうのだった。

×  
×  
×

めぐり先輩の家は、鶴見姉妹の家から歩いて五分ほどの距離にある。

子供二人の歩調に合わせゆつくりと歩いてきたそれまでと違い、普段通りに足を運べば

もうすぐそこに、先輩の家が見えてくる。

今日、考えてみれば、さよならの言葉を口にしてばかりな気がする。

一色。ひいろ。留美に友美。そして最後に、めぐり先輩。

最後に何か気の利いた言葉でもと思い、口を開きかけるが、先輩の顔を見ると頭に浮かぶ言葉が上手く掴めずにどんどんすり抜けてしまう。

結局、何も言えず押し黙ってしまった。

そんな俺を、先輩は困ったような顔で見えていたが、なにか思いついたように

「あつ」と小さく呟く。

そして「比企谷くん。ちょっと待っててもらっていいかな？」と尋ねてきた。

頷くと、先輩はとてて走り出し家の扉を開けると中に入ってしまった。

「なんだろう？」とそわそわしながら待つこと五分。俺が少し焦れだした頃。

扉が開き、先輩は肩でふうふう息をしながら俺の前へと戻ってきた。

「比企谷くん、遅くなつてごめんね。これ、よかつたら」

いうと、一冊の本を差し出してくる。

本を受け取るが、どうしていいのかわからず戸惑つた顔で先輩を見つめてしまう。

すると先輩は、困つたようにおさげ髪を弄り始める。

「さっき話した友達と知り合いのお話が載つてる本なんだけどね、良い話だから

比企谷くんもどうかなくて、その、思つて……」

いうと、ふうつと吐息を漏らし、俺をじつと見つめてくる。

借りたものを返す。そんな先輩と会える「理由」ができたことに嬉しく思いながら

お礼の言葉を口にする、先輩は嬉しそうに微笑んでくれた。

「おやすみなさい」と告げ、先輩と同じ街灯の下から歩き出し、次の街灯の下に着いた俺の背中に

先輩の柔らかな声がかかる。

その声に振り返ると先輩は街灯の灯りにぼんやりと照らされ、驚く程儂げに見えた。

「比企谷くん。さっきの言葉にはね、続きがあるの。」

えっと、理由を作って会いたくなる、なんだけど……」

「私たち、そんなふうになれるといいね」

先輩はいうと「おやすみなさい」と口早に付け足し、家の中へ走り去ってしまった。

意味が分からず戸惑いながらも、先輩とまた会えることを楽しみにしながら

俺は家へと帰るのだった。

×  
×  
×

家に着いた俺はベットに横になり、先輩が貸してくれた小説に目を通す。

百頁ほどの短編集なので、あつという間に最後の話まで読み進める。

これまでの話になかったから、この話に先輩が口にした言葉があるのだろう。

とそこへ、メールが届く。見てみると留美からのようだ。

なにかしら？ と見てみると、タイトルに『嬉しいことあったよ』と書いてあり、どれどれと中身を見ると『ありがとう。八幡』とだけ書いてある。首を捻りつつ、『よかったな』と返事を返す。

そうして本の続きを読み始め、読み終える。

その夜、俺は殆ど眠れぬまま朝を迎えるのだった。

## 勉強会（本番）

結局、その夜俺はめぐり先輩に借りた本を読み終えたと、メールを送ることが出来なかった。

俺が勧めたモノを思っていた以上に楽しんでくれた先輩。

それが嬉しかったから、その先輩が勧めてくれた本を楽しめたと早く知らせたかったのだが。

その代わりといっってはなんだが、妹も八幡にお礼をいってるよ、とメールをしてきた留美と

それからしばらくメールのやり取りをする事にした。

よもやまの話をしながら、留美も姉ならもしやと思ひ尋ねてみる。

『留美。お前、妹に勉強教えたりするか？』

『するよ』

ふむ、簡潔な答え。俺とどこか通じるものがある。

なるほど。これは愛想がないと、由比ヶ浜に言われても仕方ないかも知れないな。

業務連絡みたいだし。思いながら、ポチポチとメールを書いて送る。

『どんな風に教えてるか教えてもらえるか？ 出来れば国語の教え方がいいんだが』

『国語？ なんで？』

『ひいろの姉ちゃんに夏休みの間、国語を教えるんだ。』

でも人にモノを教えたことがないから、どう教えたらいいのかわからなくてな』

『ふーん。あのさ、なんでひいろくんのお姉さんに八幡が勉強を教えるの？』

それと、お姉さんとはひいろくんを駅に迎えに行つたとき会つただけで、

あの人さクリスマススの時、八幡と一緒にいた人だよ？ どういう関係？』

俺が留美にした質問の答えは返ってこない。なのに留美から俺に三つ質問がきた。

まあ教えを乞う立場なのだ。仕方がない答えようじゃないか。

『学校でな、生徒同士で教えて教わるグループ学習をやつてるんだ。それでペアを組んでてな。』

それとクリスマススのとき一緒に居たけど、ただの先輩後輩だぞ』

『そうなんだ。ところでさ、総武高つて夏休みいつから？ 夏休み、空いてる日ある？』

それと今日はどんな映画みたの？ あと、城廻さんは八幡のなんなの？』

ところでさ、から始まった話の流れと全く関係ない気がする質問の数々。

しかも俺がした質問に答える気がないのか忘れているのかわからんが、未だに返事をもらえない。



まあいい。返事がもらえるまで頑張るぞ、と思い頑張ってみる。

すると、俺の誕生日や血液型で始まって身長と体重。趣味や特技。苦手なこと。食べ物

の好き嫌いから休日の過ごし方。好みの女性のタイプ。彼女もしくは結婚する女性との

年齢差はいくつまで許容範囲か。結婚式は和風と洋風どちらが好みか。入婿についてど

う思っているか。大学はどこに行くのか、その大学で何を学ぶのか。将来就きたい職業

とその理由。持ち家派か賃貸派か。子供は好きか。結婚したら子供は何人欲しいか。貯蓄にたいしての考え方など事細かく質問され、俺はその都度きちんと答える。

なんか婚活みたいだな、と思いつつも、そのうち俺の質問に答えてもらえるだろうと期待して

メールのやり取りを交わすこと一時間。

しかし結局、俺の質問の回答は無しのまま、留美から『もう寝るね。おやすみ』のメールが来た後はこちらがメールを送っても返事がかえってこなかった。

どうやら留美は寝てしまったようだ。寝る子は育つ。そんな成長期真っ盛りの彼女

の

睡眠を邪魔するのもあれなので、書きかけだったメールを削除してベットに横になる。

静かになった携帯を片手に俺は少し悲しい気持ちになってしまう。

一色を筆頭に年下女子の俺の扱いの軽さはもはや法的に危ないレベル。

どんよりした気分をなんとか切り替え、明日からの勉強会について考える。とりあえず、最初は一色の質問にその都度答える形で勉強を教えていこう。

それで様子を見て勧められる勉強方法を提示すればいいだろう。

そう方針を固めると、俺は布団に潜り込み瞼を閉じた。

×  
×  
×

日が変わって月曜日、その放課後。

俺は学習室の壁に寄りかかり、一色が来るのを待つ。

一色は生徒会の仕事があるらしく少し遅れるとの事。

蝉の鳴く声に耳を傾けながら窓の外を眺めていると、一色が廊下の向こうから

ぱたぱた足音を響かせ走ってきた。

「すいません、先輩。遅くなりました」

「いや、かまわん。今来たところだ」

いうと、一色は驚いたように目を丸くする。そしてにやにやしながら茶化してきた。

「おや、先輩。女の子との待ち合わせの仕方がわかつてきたみたいですね？」

一色はいうと下から覗き込んでくるので、上体を逸らしながら答える。

「生徒会で仕事があったんだろ、もういいのか？」

「はい。文化祭の資料確認と、軽い打ち合わせくらいですから」

「もう文化祭の打ち合わせやってんのか？」

「ですです。夏休み明け二週間後には文化祭ですからね。先にある程度ですけど

方針とかそういうの決めておかないと困りますし」

なるほど、そういうもんか。頷きながら考えてしまう。

去年、めぐり先輩も生徒会のメンバーとそうしていたのだろう。

上手いくくように、楽しくなるようにと。

「どうかしましたか？ 先輩」

俯いて黙ってしまつた俺を見て、一色が訝しげに言う。

「……いや、なんでもない」

誤魔化すよう薄く微笑みノブに手を掛けると、背中越しに一色の声が聞こえた。

「そういえば城廻先輩が、去年の文化祭のとき、先輩方に手伝ってもらえて

すごく助かったんだって言つてましたよ」

「そうか」

「はい。なので先輩、今年もよろしくお願いしますね？」

「まず、自分たちでどうにかしなさいよ。生徒会、結構上手くやつてるんだろ？」

「それはまあ、そうですね」

不満げな声を背中に受けながら、ほっとため息をつく。そして扉を開けると中に入る。

室内にいた生徒に挨拶をすると、個室へ移動し席に着く。

勉強道具を並べながら、考えていたことを口にする。

「一色。悪いんだが、どう国語を教えればいいのか思い浮かばなかつたんだ」

「それで少しの間、わからない事があつたらなんでも質問してくれ。」

それに答えながら、一色に向けてそのような勉強方法を考えていく。それでいいか？」

「はい。それで問題ないですよ。急な話でしたし、仕方ないです。

それにわからない時に質問出来る人が隣にいるだけで十分ですし」

一色はというと、にこつと微笑む。

蝉の声も扉を二枚挟んでいるせいか、ここでは聞こえない。部屋はとても静かだ。

「それでは先輩、勉強会を始めますか」

一色の声に、俺はうむつと頷く。

そうして、勉強会（本番）が始まった。

× × ×

ここへ来て、一時間くらい経った頃、二人で黙々とそれぞれの問題集を解いていると一色が話しかけてきた。

「あのですね。先輩って数学以外は成績良いんですよね？」

「まあな。理科は数学よりマシ程度だが、他は大体八十点は取れてるぞ」  
「自慢げにいうと、一色はほーと感心したような声を出す。」

「なんかコツとかあるんですかね？」

私も自分なりに頑張ってるんですけど、なかなか成績あがらないですよね」

一色は気難しげな顔でいうと、短くため息をつく。

「んー、効率の良い学習法か」

「です。なんかないですかね？」

「まあ、進学校だしなあ。普通の方法なんて、周りもみんなやってるだろうし」

「そうなんですよね……」

一色は不満げに口を尖らせる。

一色を見ながら、俺は考えてしまう。

「そういうことって、進学校なんだよな……。その事実をつい忘れがちになる。」

理由の一つに、この学校に由比ヶ浜がいる。というのが大きいと思う。

本当になんであいつ、うちの学校に入れたんだろう。謎すぎる。巨乳枠とかあるの？

思っていると、その枠には入れない、入れる未来が想像出来ない一色が首を傾げる。

「簡単に効率が良くてすぐさまテストの点数があがる勉強法ってないですかね？」

近所のスーパーにいつも貼ってあった、明るく健康で活発な人大歓迎とか書いてある

アルバイトの募集チラシみたいなこと言い出しましたね。要求多すぎでしょう……。もうちよつと謙虚じゃないと。

そんな素敵な方法があるのならまず俺がやってるよと思いつつも、いつてことは概ね間違つてはいない。

早く確実に楽にを目指して物事というのは進めるべきだ。

まあ一番いいのはやらなくていいことを増やすことなだけだな。

「そういや、一色。昨日メールで伝えていたモノ、持ってきてるか？」

「はい、一応は持つてきたんですけど……。先輩、笑わないでくださいね？」

「笑わないし笑えねーよ。あれだ、参考までに目を通しておきたい。それだけだ」

いうと、一色は渋々した様子で鞆から今までの定期試験のテスト用紙を取り出す。

受け取ると、用紙の解答欄をさつと流して見ていく。完全に理系だな、一色は。

思いながら目を通すと、いくつか気になる点に気づく。

「一色はあれだな。まず暗記教科を重点的にやる。そのほうがいいかも知れん」

「暗記ですか。苦手なんですよね……」

頷きを返しつつ、一番成績が芳しくない国語の解答用紙をじつと見てみる。

これまでの点数を見ると、今回の試験で一色が本当に頑張ったのがよくわかる。

五十点くらいが平均だった国語が七十五点まであがっているのだ。十分凄い。

ただ得意な俺から見ると、何でここをこれを間違うのか？　と思う点がちらほら見える。

やはり文章に慣れていないのが原因なのだろう。

「他はまあ、国語だな。一応、国語をやるメリットを話すぞ」

「メリットですか？　いいですね！　先輩、ばんばんお願いしますす！」

一色は前のめりになりながら、目をきらきら輝かせる。

ばんばんついていわれてもなあと思いつつ、話を続ける。

「えつとな、国語の勉強は大きく分ければ三つの分野がある。漢字と文法と読解の三つだ。

数学や社会も文章題が多いだろ？　読解力、思考力がつければ、どんな教科書もより深

く

理解できるようになる。そう考えれば、国語は総合科目といってもいいだろう。

実力をつければ全科目が伸びる可能性が出てくる」

「それでな、国語は本文中に書かれていることをどう答えるか？　という教科だと考えればいい。

でだ。国語が苦手な人は、目で文章を追ってるが意味までは読みとれてない状態で読んでいる。



つまり、何となく読んでいるんだ」

「これが国語という一教科ならまあいいんだが、他の教科も問題文は日本語、そう国語で書かれているからな。何となくで読んでると、何となくで答えるハメになつてしまふ」

俺の言葉に、ふむふむと頷く一色。

実際、何を問われているか？ がより明確に理解出来れば勘違いからのミスも減るだろう。

そう考え、さらに話を続ける。

「他にも英語や数学のような積み上げ科目は、前の単元や学年でつまずいていると

次が分からない科目なんだ。数学で俺がそうだったようにな」

「例えば英語は、過去形を理解しないと以降の過去分詞を理解できないだろう？

それは数学も同じで、一次方程式ができる人しか二次方程式はできない」

「数学は一色の得意分野だから良いとして、英語はな。文法とかその手のものは

まず母国語の国語を理解してから始めたほうが良いかも知れないな」

いうと、一色はぶくつと頬を膨らませ不満げな声を出す。

「古文とかが苦手なんですよね。なんか読みづらくないですか？」

こんな状況でもあざとさを忘れない一色に違う意味で感心しながら、少し考えてしま

う。

読みづらいか。まあ現代文も読み慣れてない一色には確かにきついかも知れないな。ならば……と思いつつも、今回の一色の目標はテストの点数を上げる事。

これは勉強ではなく、どちらかというところ……

「まあ受験は知識をつける学ぶというより、〝対策〟だからな。」

合格ラインをいかにクリアするかというものが主目的になる」

「なんでもそうだが何かのために事をなすには、その結果が出る事をしなくちゃいけない。」

つまり目的と状況と手段と結果に主題を置く事が大切だ」

「一色の場合は、目的は苦手な科目の成績向上。状況は文系の成績が芳しくない。」

手段は色々あるがまずは暗記で覚えられる限り覚える。結果は志望大学に入る」

神妙な顔で、こくこくと頷く一色。

そんな一色を見ながら、〝読む〟のは苦手でも〝聴く〟ことは苦手ではなさそうだと思う。

それで少しだけ、一色への教え方が見えた気がした。

もうちよつと様子を見ようか？ と思案しながらさらに話を続ける。

「一色。以前やった進路相談会で陽乃さんが来ていたのは覚えてるよな？」

「はい、先輩。覚えてますよ」

その声に頷き、相談会の帰り道で陽乃さんから聞いた話を思い出す。

「相談会が終わった後な、陽乃さんと偶然帰りが一緒になったんだ。

それで天才とはどういうものか？ って話になったんだが、その時の話をするぞ」

「……先輩。私、天才じゃないですよ」

「俺も天才じゃないし。大丈夫だ」

「それって大丈夫って言うんですかね……」

「まあ、聞け。陽乃さんがいう天才の条件の一つは人並み外れた記憶力らしいんだが、理由を聞いて納得した。本当は集中力の高さが一番大事」

「でも集中力の高さを比べる術はないだろ？ 記憶力は集中の度合いが左右するから

記憶力が良ければ集中力が高いということになる」

「それで昔、南方熊楠という学者さんがいたんだが、この人は本屋で立読みして覚えて帰り、

それを書き写したらしい。まあこの人の真似をしろって訳じゃないぞ？

ただそうやって、覚えて再現するを繰り返し返していけば記憶力の訓練になるって話だ」

「実際のところ、教科書を丸暗記してしまえば殆どの教科で七十点は取れると思う。」

「それだけ記憶力というのは重要な能力なんだよな」

だが、こういうやり方をやれ、と行って実際にやったとしても  
なかなか結果が出せないだろう。

そして結果が見えなければ、やる気が湧かないもの、俺がそうだし。  
そこでまず結果が出やすい方法を伝授しようと考えてる。

「でな。一色は、エビングハウスって知ってるか？」

俺の言葉に、一色は腕を組んでうーんつと唸りだす。

## 小町マニュアル

俺の投げた問いかけに腕を組んでうんうん唸っている一色。

その姿を見て俺はほんの少し嬉しい気持ちになつてしまふ。

何故ならここ最近、俺の質問にまともに答えてくれた女の子は、めぐり先輩唯一人だったからだ。

さすがめぐねえ。あ、でも、めぐねえだとゾンビになちやうか。危ない危ない。やっぱ、めぐ?りんだな!

それにしても、あの一色が俺の問いに真面目に答えようとしてるとは。たつたそれだけの事で目頭が熱くなつてしまふ。

日頃の扱いが悪いせいか普通の扱いでも喜びを感じる。

普通つて大事なことだなー! と思いつつ、もしかしたらそれを俺に教えるために、一色は俺の普段の扱いを悪くしているのかも知れない。……違うな。

そんな思いに耽つていると、一色は何に勝つたか分からんがえつへんと勝ち誇つた表情で自信ありげに答えた。

「わかりましたっー! 先輩、あれですよね? 屋根の部分を帽子みたいの外して

ハイって言う、お家のマスコットキャラ！」

これで決まり！　みたくない笑顔のところ申し訳ないが、それはハズレである。てか、今までの会話の流れで何で住宅メーカーの名前が出てくるの？　この子。

「……一色。それはヘーベルハウスだ。俺が言ってるのはヘルマン・エビングハウス。ドイツの心理学者なんだけどな。この人は記憶に関する研究で有名な人だ」

俺の言葉に一色は首を傾げる。

どこから訂正したらいいか考えたが、なんか面倒なので話を進めることにした。

「忘却曲線っていう研究発表があるんだが。一色は、一生懸命勉強したのに

忘れてしまうのはどうしてなの？　って思った事はないか？」

「ありますあります。なんで忘れちゃうんですかね？　あと先輩、言い方がキモイです」

「うるせーよ、まあ聞け。エビングハウスの実験ではな、人間の脳は興味がない事柄に

関して、20分後には42%、1時間後には56%、1日後には74%、1週間後には

は

77%、1ヶ月後には79%を忘れるらしい。つまり、忘れることは当たり前前のこと。

そして復習は忘れそうなタイミングでやるべき、という話だな」

「えっと、先輩。今の話だと忘れそうなタイミングって、二十分後や一時間後とかですよ

ね？

あとは一日後や一週間後とか、一ヶ月後」

一色が神妙な表情を浮かべながら口にした言葉に、うむつと頷く。

「多くの人は、覚えた直後の復習をしていないだろ？ 今やったから大丈夫と思つて」

「ですねー。私も一杯覚えなくちゃつて、次から次へと進んじやつてましたし。

だから覚えられなかつたんですかね」

「記憶の定着度は反復すればするほど高くなる。何のためにいつまで記憶するのか。

どれくらいの完成度で記憶するのか。それに合わせて反復を繰り返すのが一番だな」

「なるほど……」

生真面目な顔でこくりと頷く一色に、俺はちよつとした満足感を覚える。いいぞ、これ。 teacher 八幡が誕生しちゃうかも知れない。調子にのつた俺はさらに話を続ける事にした。

「他にも、興味があるものと関連付けすれば忘れ難くなることもある。一色が興味がある事と結びつれば暗記は楽になると思うぞ」

俺の言葉に、「興味のあること……」と呟いて難しい表情を浮かべる一色。

そういやクリスマススイベントの時もケンケン体験記見た時も、

やりたい事とか特にないって言つてたしな、こいつ。まあ俺も別に無いけど。

強いて言うなら専業主夫だが、それはやりたい事じゃなく成るべきものだし。生き様といつても良いかも知れん。

そこで、口にするのは正直かなり気恥ずかしいのだが、俺が知っている一色の興味の あることを言ってみることにした。

「例えば……。そうだな、好きな人との事。

一色の場合、葉山との会話ややり取りなんかは忘れられないとかあるだろ？

そういうった感じでインパクトがある出来事と関連付けるといふのかな」

言うのと、一色は心なしか頬を染めて、俺からふいつと目を逸らした。

そして何故か急にもじもじしますので、なんだこいつ……と訝しげな視線で

その姿を見ていると、一色は耳まで赤く染めてしどもどした声を出す。

「えつと、ですね。その……。キ、キスとかしながら勉強すると良いんですかね」

なに言ってるの、この子……。

それじゃインパクトでかすぎて覚えた端から忘れちゃうじゃねーか。

それに、ちよつとはしたくないわよ、いろはす。と思いつつも

インパクトがでかいという意味では合っている。

確かにそれだと忘れなそうだな、と考え口を開く。

「う、うむ。まあ、そういうのもありちゃありだな。



でも、あれだ。なんつーかキスだとさすがに刺激が強すぎるからな。初めは、なに、その、手を握るとか？ そんくらいの方がいいんじゃないか？」

言いつつ、でもそれだと葉山ならまだしも俺がここにいる意味なくねーか？ と考え  
てしまう。

葉山を呼んだ方が良いのか？ でも、あいつに頼むのもなあ……

それに何て言って頼むんだ、これ？ 握手券配るの？ と思案していると

一色がおずおずといった様子で、そつと右手のひらを差し出してきた。

「……………」

どうぞって言われても……。どうも、って言って握り返せば良いの？

そもそも俺の手を握っても意味ないし。

それに、こういうマニュアルにない展開ちよつと困る。

前回、一色のご機嫌を斜めにしてしまった時にはマニュアル通りに事を進めて  
なんとか上手くいったが……

ちなみにマニュアルとは。

俺が奉仕部の二人と友達なった事を小町に伝えた際、何やら思うところがあつたらし

い

小町から授けられた年頃の女性との接し方のハウツー本の事である。

通称「小町マニユアル」。訳して「小ル」<sup>コマ</sup>

ついでに言えば、年頃の女性専用なので残念ながら平塚先生は圏外だったりする。小町が春休みを利用して書き上げた三百頁に及ぶ長編大作で、書き上がったそれをお兄ちゃん。女の子で困った時にはコレを読んでね。」とドヤ顔で手渡されたのだ。なるほどなーと思える事が多く暇を見て何度も目を通していているのだが、内容がちよつとリアルすぎるんだよなあ。

なんだよ。バレンタインのお返しはもらつたものの五倍返しが当たり前つて。

お兄ちゃんの稼ぎ（小遣い）だと三倍返しが限度額なんだよ……

しかしながら今回のような事については書いていなかったように思う。

きつとまだ、小町は異性と手を繋いだりしたことがないのだろう。

良かった良かったと思いつつも、現状の打開には全く役に立たない。

むむ、どうしよう……と考えながら黙つてもアレなので口を開く。

「い、いや。俺と繋いでもあれでしょ?」

言うのと、一色はむすつとした表情を顔に浮かべ、俺をじつと睨んでくる。

「あれつて、どれですか?」

どれですかつて、言われてもなあ。そう問われたら、こう答えるしかない。

「ほら、そこは葉山じゃないと、ね?」

俺の言葉に、一色はつまらなそうに頬を膨らませると、不満そうな声を出す。

「だって、葉山先輩じゃないじゃないですか。この際先輩でもいいです」

なんだよ。その、これで我慢しとくかー！ みたいな言い方。ムカつくな、こいつ。

でも考えてみれば、バレンタインの時もこんな感じで

ついで感とおぎなり感満載だったなと思いつ。

あれから半年ほど経つが、こいつとの関係は良くも悪くも全く変わってねーなあと思  
い

そしてそういやこいつとも、あと五ヶ月くらいで会わなくなるんだよなと気づく。

三学期は受験の追い込みで、学校に来ることも無くなる。

そう考えれば、少しくらいは一色のお願いに応えても良いような気もする。

今も一色はじつとこちらを見ながら手を差し出し、はようしろと言わんばかりに

「んっ、んっ」って言ってるし。

これはちよつと何かしらのリアクションを返さない訳にはいかなそうだな。

それでもまあ、差し出すのは一色と同じ右手だが。

覚悟を決めると手のひらをズボンで軽くこすって手汗を拭き取る。いや出てないけ

ど、一応ね。

そして右手でそつと一色の手の甲に触れ、そのまま下にゆっくりと降ろす。

一色は手が触れた瞬間、驚いたような表情を浮かべたが、何も言わずに俺の手に動きに

合わせてその小さな手をぺとっと自分の太ももに置いたので、俺はすつと手を引つ込める。

どっちも手のひらはね。ちよつと、あれだしね。ていうか、一色。顔真つ赤かなんですけど。

まあ俺も赤くなってるのだが。ヤバイかな。通報されたらどうしよう……

一色に、ちらちらと視線を向けながらそんな事を考えていると、俯いていた一色が顔をあげたので目が合ってしまう。

慌ててこそつと視線を外すと、視界の端で一色がふつと薄く吐息を吐く。

「先輩。これからも、こんな感じでお願ひしますね！」

一色は言うのと、にぱつと笑顔になる。

そして上半身をやや前倒し気味にすると、

横を向いてる俺を下から見上げる様に見つめてくるので、思わず仰け反ってしまう。

そんな俺を見て、一色は可笑しそうにくすくすと笑った。

## 今日を忘れないように

俺は思わず仰け反ってしまった気恥ずかしさを誤魔化そうと

「ごほんとちよつとわざとらしい咳払いをし口を開く。

「えーつとな。どうやれば覚えやすいか？ というやり方を話すぞ」

言うのと、一色は表情を引き締めこくりと頷くので、頷きを返し説明を始める。

「人間は五感で外部の情報を刺激として感じ取っているのはわかるよな？

まず見る、視覚だな。でだ、なるべく見るだけじゃなく口に出して聴覚も刺激する。

さらに話すということは脳を非常に使うから、暗記力をさらに高める事が出来る」

俺の言葉に、一色はおずおずと手をあげる。

目線で促すと、一色は居住まいを正し少し困ったような表情を浮かべ

申し訳なさそうな声を出す。

「でもですね、私、単語帳つて電車の中で見てるんですけど、車内でぶつぶつ呟いてたらなんか不審者っぽく見られませんかね？」

確かに……。俺も電車でぶつぶついつてる人を見たらきつとビビるだろう。

なら暗記をするのに良い時間帯を教えようか、と口を開きかけた俺の顔を

一色が急に覗き込んできたので、慌ててまた仰け反ってしまった

そんな俺を見て、一色はにやつと嫌な笑みを浮かべると茶化すような声でいう。

「私がそばに寄ったときの、いまの先輩みたいに」

「お、おう」

ほーん、この小娘……。なかなか無礼なことをいう。

まあ一色の言うこともあながち間違いいではない。だって一色って距離感近いんだもの。

すすいと距離を詰めてくるそれは、一步スタイルといっても良いかも知れん。

それかあれだな。人の家に窓から入ってくるタイプ。

そしてどうやら、俺は一色の中で不審者扱いのようだ。

まあいい。小学生の頃、俺はヒキガエルと呼ばれ両棲類扱いだったのだ。

不審者とはいえ人間カテゴリーに入れてもらえてるだけ有難いと思おう。

でもちよつと酷くないですかね？ この子……

そんな気持ちを含めてじつと粘っこい視線を向ける。

だが、一色は俺の視線をモノともせずけろりとした顔で続きを促してくるのでメンタルつえーなこいつ、と思いつつ話を続けることにした。

「それと書く。これは触覚だな」

「書き取りですよね？ 漢字とかの」

一色の言葉に俺はうむつと頷きながら、ふと思い出したことを口にする。

「そうだ、絵を書くのもいいらしいぞ」

俺の口にした言葉に、一色はきよとんとした表情で首を傾げると「えっ？」と呟く。

なに、ダジャレ？ と思っていると、一色が疑いを含んだ半眼でじとつーと見つめてくるので

慌てて続きを口にする。

「い、いや、これは雪ノ下に聞いたんだ」

「雪ノ下先輩が……。なら、本当なんでしようね」

一色は腕を組んで納得した様子で、うんうんつと頷く。おいおい、えらい違いだな。

ヒキペディアはダメなの？ まあユキペディアのほうが信頼度は上か。

「あいつは小さい頃から絵を書くのが好きだったらしいんだ。それで、知り合いの画家に

あれこれ学んだらしくてな。デッサンを学ぶと写真のような記憶力がつくんだと」

言うのと、一色は目を丸くして「ほへえ〜」つと感嘆の声をあげる。

俺も由比ヶ浜も雪ノ下にこの話を聞いたとき、まず知り合いに画家がいるってことにえらく驚いたものだ。だって画家だよ？ 絵師じゃないよ。

まあ俺は高尚な画家さんの絵より、「曙さんとクソ提督」のシノさんの絵のほうが大好きだけだな！ 新刊もとっても良かったですー！ と思いつつ話を続ける。

「それでな。前に奉仕部のメンバーで勉強会をしたとき、俺が出した問題に雪ノ下が、待つて……教科書の右上の方に書いてあった。とか言い出してすげえビビったんだ」「すごいですね……雪ノ下先輩」

「こえーよな。下手に恨まれるようなことしたら、ズーと忘れてもらえなそうだし。

俺はそれを知ってから、雪ノ下に対しての言動はちよつと注意してる。怖いしな」「ひどいですよ、先輩。なんで怖いを二回もいうんですか！

雪ノ下先輩が可哀想ですよ？」

笑みを含んだ声で俺を窘めてくる一色。

さつきお前に不審者扱ひされた俺は可哀想じゃないのかよ……

「大事なことから二回いったままで。ていうか一色。お前は大丈夫か？  
なんかしでかしてない？ 雪ノ下に」

俺の言葉に、一色の顔からさあーつと血の気が引いた。

そして青ざめた顔で、ゴクリつと喉を鳴らす。

「た、たぶん、大丈夫だと思えます」

一色は緊張した面持ちで言ったものの、どうやら不安を感じたらしい。



押し黙って少しの間、真剣な表情であれこれ記憶を探っていたようだが、思い当たる節は無かったのかほっと安堵めいた吐息を吐いた。

まあ、雪ノ下は一色には甘いから、大概のことは許してくれるだろう。俺には厳しけど……。だからそんな心配することはないと思うけどな。

つか、まずお前は、目の前にいる俺に失礼の無いようにしなさいよ。

「一応言っておくが、一色が雪ノ下と同じことをして同じように覚える事が出来るかは正直わからん。ただ、やり方の一つとして頭に入れておくのは良いかもな」

「私が雪ノ下先輩の真似をしても、同じように覚えられないと思いますけど……」

「まあ雪ノ下は規格外だしな。でもな、頭の良い奴の真似をするつてのは、

結果に違いがあっても効率が良いと思うぞ」

「そういうもんですかねえ」

「一色、学ぶっていう字は元々は『真似る』からきてるんだ。

飛行機や船も、最初は鳥や魚の身体の作りを真似して作ったんだぞ。

とりあえず、出来そうなものから手をつけてみるといいかもしれん。

上手くいくかどうかはわからんが」

言うのと、一色はぶくつと頬を膨らませて不満げに口を尖らせる。

「上手くいくかわからないって、それってどうなんですかね〜」

「しゃーねえだろ。実際やってみないとわからん事だし。人間向き不向きがあるしな。それにな、成功は運が絡むから成功の秘訣、みたいなものは参考にならない。」

参考にできる例というのは失敗例だ。なので余裕があるうちにあれこれ試してみても、自分に合ったやり方を見つけないのはいと思うぞ」

俺の言葉に、一色は納得したように、こくりと、頷いてお礼の言葉を口にする。

ふむ。こいつはきちんとお礼をいえる奴なんだよな。礼儀はまあ正しいんだろう。残念ながらほとんどのいつも、その礼儀が俺の方を向いてないだけで。

それ全然ダメだよな……、と思いつつも、ちよつと気分を良くした俺はもう少し色々教えてやろうと説明を続けることにした。俺の話にじつと耳を澄ます一色。

善きかな善きかなと思いつつ話続けていると、俺はある事に気が付く。

なんか近くない？ これ。二人が並んで座るだけで、近すぎて少し息苦しい。

一色がもう少し気を利かせて椅子をずらしてくれれば多少は楽になるのだが、

こいつは膝が触れるほど近いというのに、気にする素振りすら見せない。

説明を続けながら、なぜ前回の勉強会でこの距離の近さが気にならなかったのか少し考えてみる。

思うに、ミスする事が許されないテストをしていたという事。

そして教わる側は教えてくれている相手より自分が解いている問題に集中している。

それで、それほど気にならなかつたのかも知れない。どうだろう。だが、これが教える側に立ってみると随分と勝手が違う。

なぜなら相手が自分の説明をちゃんと理解しているか、その表情や仕草を見て確認しながら話を進めるので、より全体に意識を向ける事になるからだ。

すると、視線は一色のちよつぴり着崩した制服の首筋から胸元に向かつてしまい慌てて視線を上げると、俺に真剣な眼差しを向けるその瞳と目が合ってしまった。

人と目を合わせる。そういうのに慣れていない俺は、さらに慌てて視線を下に向ける  
と

今度は短めのスカートからすらつと伸びる太ももに目がいつてしまう。

ちよつとというか凄く目のやり場に困るな……。いや困らないけど困る。

……やべえ、変な汗かいてきた。

焦りつつ視線をきよどきよど泳がせている俺は、誰がどう見ても不審者だろう。

俺は自ら、一色の俺への評価の裏付けをってしまったようだ。

小さく息をつく。あまり気にしないようにしよう。

窮屈な思いをしているのは俺だけではなく一色もなのだから。思いつつ、俺は少しへどもどしながら暗記のコツを話続けるのだった。

×  
×  
×

「そういえば先輩。どうしてはるさん先輩と天才の話になったんですか？」

暗記の話を終えて二時間後。また二人してそれぞれの問題集を解いていると、お茶を片手に一息ついていた一色が興味ありげに尋ねてきた。

「そーいや何でそんな話になったんだっけ。頭を搔きつつ、ざっと記憶をさらってみる。」

「確か、陽乃さんに俺の進路を聞かれたんだ。それで志望大学の話になって、

そこがそれなりに偏差値が高いところだったから、頭良いんだねって言われて」

「でもよ。褒められて嬉しくないわけじゃないけど、俺よりずっと頭が良い陽乃さんにそんな事いわれてもって思うだろ？ 妹は妹で、一年の頃からずっと成績トップだしな」

言うのと、一色はほーと感心混じりの声を出した。そして思い出したように口を開く。

「そういえば先輩。城廻先輩に聞いたんですけど、はるさん先輩も高校生だった頃、

三年間ずっと成績トップだったらしいですよ。姉妹揃って凄いですよね」  
「やっぱすげえな、あの姉妹。ニュータイプとかそういうのなの？」

雪ノ下の母親の名前は知らんが、もしかして雪ノ下ララアとかかかも知れん。

それが父親が雪ノ下アムロとか。なんかカツコイイぞ。

「……見える、見えるぞー」とか言い出しそう。あつ、それは赤い人か。

「それで俺なんかより、なんでも高いレベルでそつなくこなせる雪ノ下さん姉妹や

葉山の方がすごいですよって言ったら、そこから天才の話になったんだよ」

言いつつ、思い出す。そうだ。あの時陽乃さんが口にした天才の条件は二つ。

自分が出るようになるための集中力。そしてもう一つに、

他人にやる気を起こさせ頑張らせる事が出来る、人的魅力をあげていた。

そして後者のほうが前者よりずっと希少で価値があり、それを持っているめぐり先輩を、

俺はもちろん葉山や妹の雪ノ下よりもずっと高く評価していると言っていたのだ。

確かに、めぐり先輩は生徒会役員たちにえらく心酔され慕われてたと思う。

だが悪い意味ではなく、先輩は出来る人って感じはあまりしねーな、と思っていると、

陽乃さんは「めぐりには、他人を正當に評価する“才能がある」と口にした。

穏やかで柔らかな印象のめぐり先輩。

そんな彼女の人柄を、才能という言葉で表現する事に違和感を感じた。

俺のこわばった顔を見た陽乃さんは薄く微笑むと、咳払いを一つして話を続けた。

「周囲の評価や自分の感情に左右されず、他人の行動を“結果だけ”ではなく

経過も含めて判断できる。殆どの人間には不可能なことだよ。だから才能」

言われて、はっと気づく。俺には思い当たることが多々あったのだ。

体育祭の時。文化祭に引き続き、体育祭でもトラブルの元になっていた相模南。現場班から疎まれていたそんな相模を誰も積極的に引き留めようとしないうちでめぐり先輩だけが相模の変化を誠実に評価し、先を託そうとした。

そして文化祭。スローガン決めるときや相模を屋上から連れ戻すとき。

俺は俺のやり方を通した。そうしたら周囲からどう思われるか分かっていたのに。

そんな俺をめぐり先輩は、やり方は認められない。けど感謝はしてくれた。

実際のところあのやり方を認めるのは、どこかズレてる、あるいは欠けている、

集団から外れている奴らだけだと俺自身が思っている。

そう思えば。あの時俺の意図を理解した雪ノ下姉妹はもとより、皆の中心と呼べる葉

山も

ある意味集団から外れているのだろう。それか平塚先生のように、人生経験が豊富な

大人

(褒め言葉) が気がついて、気遣ってくれることがあるかも知れないが。

そんな中で、集団から外れてもいない。ズレても欠けたりもしていない。人生経験も

俺より一つ上なだけのめぐり先輩が、きちんと誠実に評価してくれた。

そしてめぐり先輩のように面と向かって批判してくれる存在は大事だと思う。

結果に対する感謝とやり方に対する批判両方あってさすが生徒会長と感じたものだ。

「どうかしましたか？ 先輩」

話の途中で俯いて黙ってしまつた俺を見て、一色が戸惑つたように声をかけてきた。我に返り、なんとか声を押し出す。

「すまん。いや、なに、ちよつと思ひ出せなくてな」

言うのと、一色が楽しげな表情で茶化してくる。

「ふふつ、記憶のお話をしていた先輩が思ひ出せないのは困りますね。

日記とか付けてないんですか？ 私には書いてみるつていつたのに」

「一応は書いてるぞ。メモ書きみたいなちよつとしたもんだけどな。

「そういや一色は、日記を書き始めたのか？」

尋ねると、一色はえつへんと胸を張つてにこやかに答える。

「書いてますよー。言いつけはちゃんと守ってます！ 偉いですよね。褒めてもいいですよ？」

まあ、もともと私もメモ書き程度のはちよこつと書いてたんですね。

でも、先輩に言われてちゃんと書こうと思つて始めたら、意外に一杯書いちゃいました」

「そうか、偉いぞ」

幼い頃。俺の言いつけを守つた小町に言つた様に、優しい口調でそう伝えると

一色はかーつと耳まで赤くして恥ずかしげに俯く。いや、そんな照れんでも……  
褒めろというから褒めたのに。まあ言われなくても褒めたけど。

それにそんな真つ赤になられたら、言つた俺まで赤くなちやうからやめてよ、マジで。  
と思つていると、一色は顔を上げて、はにかみ笑いを浮かべた。

「その、えつとです。今日を忘れないようにしたいなつて思いました……」

一色がほしよつと呟いたその言葉に、なんとなく胸が打たれたような気持ちになる。

自分の言葉に気恥ずかしさを覚えたのか、一色は照れたようにこそつと顔を逸らした  
ので

俺はその横顔に微笑み混じりで「だな」と答えた。



## 夜更しの理由

『過去を変えたいと思う気持ちが後悔。未来を変えようとする気持ちが反省』

ふと、その一文に目を留めた。勉強会を終え、家に帰った俺がベットに腰をおろしめぐり先輩へ送るメールの文面に思い悩んでいた最中のことだ。

書いては消し消しては書いてを繰り返す俺の目に、先輩が貸してくれた本が映る。

そつと手を伸ばしパラパラとページを捲っていると、その一文が記されていた。

今の俺の気持ちは、一体どっちだろう？

本を閉じて、そのままベットに倒れ込む。静かな室内にスプリングが軋む音が微かに響く。

仰向けに寝ていると照明が眩しくて、窓のほうへと顔を向けた。外は既に暗い。

ため息に似た吐息が漏れる。伝えたい事。伝えなければならぬ事はわかつている。

それなのに何故文章が纏まらないのか。たぶん俺は、メールでなんか伝えたくないのだ。

先輩の顔を見て、口にしななければならないと思うから。

目を閉じてそんな思案に耽っていると携帯が鳴った。テーブルに置きっぱなしの携

帯を取り

画面を見るとメールが一通。差出人は一色のようだ。

メールを確認すると『いま家に着きました！』と書いてある。

こういう場合、なんて返せばいいんだろう。

メールに慣れていないのもあるが返事に困る。

『よくやった！』とか『無事か？』と書くべきかしら？ と考えたが

それはアニメだと死亡フラグだなと思い、『お疲れ』と書いて送る。

これなら大丈夫。そんな一仕事終えた気分でベットに戻る。

ごろりと横になり窓の外を眺めながら、一色を駅まで送った帰り道。

彼女が口にした言葉を思い出す。

× × ×

勉強会を終えた俺たちは校舎を出る。

すっきり日は暮れており、部活をしていた連中も切り上げてしまっているようで

中庭のあたりはとても静かだった。

その中庭を歩きつつ、隣を歩く一色に声をかける。

「一色。もう大分遅いから、駅まで送るぞ」

「あ、はい。ありがとうございます。その、お言葉に甘えさせて頂きます」

言うのと、一色はぺこりと頭を下げる。そして顔をあげるとにぱつと笑う。

その笑顔に頷きを返し、からから回る自転車を押しながら二人で駅まで向かう。街灯がぼつぼつと頼りなく照らす暗い夜道を歩いていると

一色が口を手をやり、ふあくつと大きな欠伸をする。

「眠そうだな」

言うのと、一色は欠伸を見られて恥ずかしかったのか、照れたようにこそそつと顔を逸らす。

「や、えつとですね。最近、遅くまで勉強頑張ってるんで、ちよつと寝不足なんですよね」  
「勉強も大事だが、体も大事だからな。ちゃんと寝ないと駄目だぞ」

「そうなんですけどね。元々文系得意じゃないのもあつて、

あれやらなきやこれもやらなきやと思うと、なかなか寝付けなくつて」

似たような事を今年の冬、受験を控えた小町が言つてたな、と思ひ出す。

あの時小町に掛けたような、なにか気の利いた言葉でも、と思索していると

一色が疲れたような吐息を吐く。

「それと、なんですけど。間に合わなかつたらどうしようとか考えちゃうんですよね」

「間に合わないって、まだ二年の夏だろう？ 充分、受験には間があると思うが」

俺の言葉に、一色は半歩前に出ると、少し前に屈んで俺の顔を覗き込む。

「先輩。そつちじゃないですよ？」

そつちじゃないなら、どつちだよ？ と視線で問いかけるが、

一色は答える気が無いか全然違うことを口にする。

「でもですね。今日は満足してるんで、きちんと寝れそうです」

まあ寝れるならいいけどね。と思いつつも、変な言い回しだなと感じた。

そんな俺の訝しげな表情を見て、一色は可笑しそうに微笑むと口を開く。

「えつとですね。うちのおばあちゃんが教えてくれたんですけど……」

先輩は、夜更かしする理由ってご存知ですか？」

ふむ。夜更しの理由か。

あれでしょ？ 見てなかった前シーズンのアニメの録画を見てみたら

意外に面白くて、次の日学校があるのに全話見ちゃうとか、違う？

などと思っていたが、俺は今をときめく高校生なのだ。少年の心を忘れないのは

素敵なことだが、年頃の男子が徹夜で「SHIROBAKO」を見ていたとは言いづ

らい。

絵麻ちゃんのエンゼル体操が可愛くつてな、つい。と考えていると、

一色は俺が答えを探せなかったと思ったらしい。話の続きを口にする。

「あのですね。夜更かしする理由は人それぞれ色々あると思いますけど

その一つに、今日に満足していないからだつて言ってみました」

一色の言葉に、俺は驚きを隠せなかった。まさに昨日の夜の自分がそうだったからだ。  
だ。

そしてその横顔に視線を向けると、一色は街灯の明かりで大きく伸びた自分の影を見ながら

ゆつくりと言葉が続ける。

「充実した日は、ぐっすり眠れるじゃないですか。

夜更かししちゃう時つてきつと、満たされていない分を取り返そうとしているんだと思います」

「そうですね……例えばですけど。好きな人に気持ちを伝えられなかった時とか

ありがとうやごめんなさいを、きちんと相手に言えなかった時とか」

すとんと胸に落ちてくる、一色の口にした言葉。

そして、夕日に赤く照らされたその姿は、なんだかとても大人びて見えた。

「……そうかも、知れんな」

答えた俺の声に、一色は顔をあげると、こちらにこそそつと視線を向ける。

「私、今日は今日に満足出来てるんです。だからゆっくりと寝れそうです」  
一色はぼしょっと眩くように言うと、照れたように微笑んだ。

× × ×

その時見た一色の笑顔を思い出しながら、俺も今日に満足したいと思ったのだろう。それまでは、うじうじぐだぐだしながら書いていたメールを一気に書き上げる。だが、感想やらなんやらで五百文字を超える長文を書いてしまう。いくらなんでもさすがにちよつと長すぎたので要点だけ纏めることにする。

『お借りした本拝読させて頂きました。とても面白かったです。』

読んだことのない作家さんでしたが、他の作品も読んでみたいと思えました』  
言いたいことを纏めてみたら、たったこれだけになってしまった。

五百文字とは一体なんだったのか……

まあいい、とりあえず送ろう。これはいつてみれば牽制のジャブのようなもの。

ここから上手く話題を広げて、先輩に渾身のストレートを叩き込む。

いや、叩き込んじゃ駄目だな。先輩と直接会う約束を取り付けなきゃ。

でも俺、今までまともに女子を誘えたことないんだよなあ……と過去の痛々しい記憶

が蘇る。

そうして爆弾処理の隊員が赤と青のコードを悩みながら切断するような気持ちで、送信のボタンをポチッと押す。ふう、これでよし……。

携帯をテーブルに戻し、どっこいっしょといつて立ち上がる。

緊張したらトイレに行きたくなってしまった。ちよつくら行つて来ようかね。

と思っていると、携帯が鳴った。

ちらつと画面を見ると、どうやら電話のようだ。

携帯を手にとると、なんと先輩からの電話。ど、どうしよう……

なんであの人、メールに電話で返事を返そうとするのかね。

正月に年賀状を出したら、早過ぎる暑中見舞いが来た気分。

だがここで知らんぷりをするのは余りにも失礼。

ある意味こつちから話しかけたようなものだし。

そして以前、親父に聞いた話を思い出す。

親父が大学生の頃。当時の親父が好きだった女の子に携帯の番号を教えて欲しいと頼んだら、「いいよー！」とにこやかに微笑んで教えてくれたらしい。

しかしいつ掛けても、「プー、プー」と通話中。不思議に思つて友人に相談したところ、それは着信拒否された状態だということ。

「電話してね♪ で着信拒否って酷いよな……」

そう言った親父の悲しげな顔を、俺は今でも忘れられない……  
先輩に親父と同じ気持ちの味あわせる訳にはいかん！ と思い  
俺は少しだけ緊張しながら電話に出るのだった。



## 三人の子供

『こんばんは。比企谷くん』

『こ、こんばんはです。めぐり先輩』

声に緊張が出ないよう気を付けていたつもりだが、やはり少し上擦ってしまった。すると俺の声が若干強ばっているのを感じたのか、先輩は慌てたように口早に言葉を続ける。

『ご、ごめんねー。その、急に電話しちゃって。』

あのね、秒速の下巻のほうも読み終わったから比企谷くんとお話したいなって思ってた。

ほんとにメールを送ろうとしたんだけど……。今日って確か勉強会の日だったよね？』

よく知ってるな、先輩。そういやこの前、一色が先輩に勉強会のこと話してたか。

『そうですね。明日、終業式なんで先輩も知ってると思いますが、今日は午前中だけ

授業だったんですよ。それで昼過ぎから夕方近くまで、一色と勉強してたんですけど』

『やっぱりそつかく。えっと、それでね。比企谷くんと一色さんが勉強を頑張っているのに』

邪魔するみたいで悪いかなって思ってたとき、我慢してたのね。その、メールを送るの』  
『や、そんな気にしなくても』

『んっ、そういうけどさ、やっぱり気にするよ』

『えっと、なんか気を使わせちゃったみたいで、すいません』

『えっ、やー、うん、なんかこっちこそごめんね。』

まあそれでね、話したいこと一杯あるのになーって思ってた携帯みてたらそこに比企谷くんのメールが来たから、わあ〜って思ってた、つい……』

先輩が言ってくれた言葉に、思わず口元が綻んでしまう。

そして緩んだ口からでた声は、自分の声とは思えないくらい明るくて弾んでいた。  
『めぐり先輩。なんかその、色々と気にしないでください。』

メールを送つたらすぐに電話が掛かってきたんで、少し驚いただけですから』  
『あうっ』

あうって。やっぱり可愛いなこの人。

『ほんとに構いませんよ、めぐり先輩。氣遣ってくれてありがとうございます。』

えっと、俺も先輩と本の話したかったですし、こうやって話せて嬉しいです』

言うど、受話器越しに先輩がほっとしたような吐息を漏らすのが聞こえた。

安心してくれたのか、先輩はいつものほんわかした口調で柔らかな声を出す。

『んー、でも私、本の話だと長くなっちゃうんだよね』

さつきまでね、あとで比企谷くんに送ろうってメールを書いてたんだけど

良さを伝えたくってあれこれ書いてたら、なんかすごく長文になっちゃってさ』

俺も俺も、俺ですよ！ めぐり先輩。先輩ももしや五百文字くらいですか？

でも長文だと『長い。三行で』って言われるんですよ。

そのわりに、ありがたいの一言で済む事を『お礼は、三行で』とも言出し悩みますよね。

などと思いつつ、そういうや先週喫茶店で話したときも、身振り手振りを交えながら一生懸命話してたもんな、この人。と思いつく。

なんか小さい子が学校であつた事を母親に話してるみたいで可愛かった。

『いいですよ、先輩。聞きますよ。聞きたいですし』

言うど、先輩は弾んだ声で『いいの？』と尋ねてきた。

図書館で俺の話をちゃんと聞いてくれた先輩が、俺に聞いて欲しいといっている。

なんと答えるか？ そんなのはもちろん決まっている。

俺は出来るだけ優しい声で『聞かせて欲しいです』と返事を返す。

『えへへ、ありがとう』と嬉しそうに呟く先輩の声に、心の中で『こちらこそ』と返していると、先輩はさらに弾んだ声でなかなか風流な提案をしてきた。

『じゃあさ、比企谷くん。良かったらなんだけど、外でお月様でも見ながら話さない？』

先輩の言葉に、ちよつと驚いて時計を見る。時刻はもう夜の十時近くになっていた。

『えっ、今からですか？ まあ、月を見るなら夜じゃないとあれですけど……』

『……いやかな？』

俺の言葉を拒絶と受け取ったのか、先輩はしゅんとした悲しげな声でいう。

『いや、じゃなくて、えつとですね。俺の方は全然いいんですけど』

先輩女の子じゃないですか。こんな時間に外に出るのは……』

『私、結構夜中に外に出てるよ？』

えっ、マジで？ めぐりん不良なの!?! 繁華街で地べたに座ったりしてるの？

あれ汚いよね! と思つて慄いていると、俺が想像したのとは少し違つていた。

『比企谷くん、覚えてるかな？ うちのすぐそばに御宮があるの』

『そーいやありましたね。』

確か公園脇のちよつとした高台になるとこ。急な階段が続いていたような』

『そーそー! あそこね、お祭りで使うお神輿がしまつてあるんだけど、建物の軒下が

縁側みたいになつてゐるんだ。それでね、月が綺麗な夜なんかは、夜中に家を抜け出し

て

そこに座ってぼーっとお月見してるの。それで良かったら一緒にどうかなって思  
て』

『お月見ですか』

『ほら、今夜は月が綺麗だしさ』

携帯を片手にベットから立ち上がり窓辺へと向かう。

窓の外。見上げた夜空には雲一つなく、ぽっかりと浮かぶ月は

先輩のいうようにとても綺麗な満月だった。

月明かりに照らされて、夜空を見上げる先輩の姿を想像してみる。

うん、すごく良さそう。見てみたいというか、見なくては、と思う。

『じゃあ、先輩。俺で良かったら一緒に一緒にさせていただいて良いですか？』

『うんっ、待ってるね！』

俺の言葉に、めぐり先輩は嬉しそうに明るい声で、そう言ってくれた。

× × ×

星空の下、暗い夜道を自転車で走り抜ける。

信号が赤になる。横断歩道の手前で自転車を止めると、信号が変わるのを待つ。

待ちながら、ふと考える。まさか自分が、こんな夜遅くに女の子と待ち合わせをして会いに行こうとしてるとは。そう思うと不思議な気分になる。

昔。そうずっと昔には、そんな事をよく想像というか妄想していたものだが。

いつだって期待して、いつも勘違いして、いつからか希望をもつことをやめていた。だから今回も、希望をもつてもいないし期待ももちろんしていない。

それでも俺はこうやって先輩の元へと向かっている。

するべきこと、しなくてはならない事のために。

そして俺は、めぐり先輩と初めて出会った文化祭のことを思い出す。

今になって思えば、あの実行委員会には三人の子供がいたとおもう。

そのせいで文実は上手く機能せず、本来なら特に問題がなかったはずの運営に支障をきたしたのだろうと思わずにはいられない。

三人のうち特に誰かが悪かった訳でも無く、それ以外の誰もが悪かった訳でも無く、たぶん組み合わせが悪かったのだろう。

そして、その三人とは。

まず一人目は、相模南。

自尊心が強くすぐ勘違いして思い上がり、それでいて打たれ弱い。

周囲と自分を比べて蔑んだり劣等感に苛なさまれる、未熟で安易な子供。だが体育祭まで通してみれば違った解釈もできる。

文化祭では、陽乃さんの賞賛を無邪気に喜び、それもあつて雪ノ下の才能に嫉妬してしまい、それと比べた自分のふがいなさを涙していた。

しかし体育祭では、めぐり先輩の誠実な評価に奮起し逃げてても良いところを逃げずに戦った。反省し成長することが出来る、素直な子供。

次いで二人目は、雪ノ下雪乃。

優秀な姉を見て育ちその姿に憧れて、姉と同じものを求め、姉にないものに手を伸ばし、姉のようになろうと藻掻く。

文化祭のときにはその姉への強い対抗心から、本来の自分のやり方すら忘れて体調まで崩してしまう、とても器用であまりに不器用な子供。

だが奉仕部の活動を通して色々な経験を積んだこと。

そしてなにより、由比ヶ浜の優しさに感化されたことよって姉の影を追いかけることをやめた彼女は、これまでとは違った歩みを見せるだろう。

その才能に見合った心の成長を遂げた実直な子供。

そして最後に、比企谷八幡。

人の輪に入ることを諦め、人と関わることを拒絶し、人の気持ちを忖度せず、

人の立場を斟酌しない。人と向き合うことに恐れを抱く、臆病で我儘な子供。そうして今でも。

あの時と同じような状況になれば、また同じような行動を取ってしまうであろう。変わらない変わらない愚直な子供。

ただ一つだけ変わったところがあるとするとするならば

それは俺の行動をちゃんと批判してくれ、そして頑張ったことをきちんと感謝してくれ  
れた

先輩に対して、俺も同じようにしたいと思えるようになったこと。

すいませんでしたと謝罪を、ありがとうございましたと感謝を

きちんと先輩と向き合って、ちゃんとした自分の言葉で。

信号が青になる。ペダルを漕ぐ足に力を入れて、夜の町を先輩の元へと急ぐ。

もうしばらくすれば日も変わる。子供は寝る時間だろう。

だが、それまでの自分と違い人と向き合うことを決めることが出来た俺は、多少なりとも子供の殻を脱ぎ捨てて大人になれたのだと思う。

そして、ほんの少しだけ大人になった俺は、もう少しだけ夜更かししても

良いのかもしれない。

そんな事を思いながら、これから会いに行く彼女も今見ていると思う、



夜空に浮かぶ月を見上げた。

## 月明かりの下

月を背に暗い夜道を自転車で走る。途中コンビニを見つけたので、めぐり先輩とこれから

話をするのにあった方が良かったと思い、飲み物と軽くつまめるお菓子を買うことにした。

店内に入ると、ウォークインやお菓子が並んだ棚を物色するが、先輩の好みがわからず

何を持っていけば喜んでもらえるのかと迷ってしまう。

そこで、由比ヶ浜や一色が旅先のお土産やイベントのときなどに見せてくれた気配りを

真似て、味に偏りがでないように注意しつつ商品を買いたい物かごに入れていく。

飲み物は図書館の休憩所で先輩が飲んでいた紅茶があったのでそれにすることにしたら。

会計を済ませ店の外にでると、また自転車に跨って夜道を走ることにし、めぐり先輩との待ち合わせ場所である御宮の入口へと到着した。

隣接している公園に自転車を止めると、籠から取り出した買ひ物袋を片手に公園と駐車場の間にある御宮へと続く急な階段を眺めてみる。

暗いな……。おい、真つ暗じゃねーか。

段下は街灯があるおかげで明るい、上の方は闇に包まれている。

月明かりも、階段を両脇から覆い被さるように迫る樹木の葉によつて遮られ足を照らしてはくれない。

こんな真つ暗なところを登るのか……。

そう考えると少し不安な気持ちになるが、まさか上で待っている先輩に下まで迎えに来て欲しいとメールをするのも気が引ける。

だつて男の子だし、怖がりだと思われのはちよつと恥ずかしい。

仕方がない、そう覚悟を決め石段を登りはじめる。

× × ×

建物の高さなら五階建て分くらいはありそうな長い石段を、手すりに掴まりながら慎重によちよちと登っていく。足を運びながら俺は考えてしまう。

それにしてもこんなところにめぐり先輩はよく来てるのか……

そしてこう思う。これは先輩を叱らなくてはならないな、と。

年頃の女の子。しかもとても可愛らしい人なのだ。

普段の状況であっても、世の野獣どもが虎視眈々と先輩を狙っているかもしれない。ましてや、夜の夜中に近所とはいえこんな人気がない場所に一人で来るとは……。

先輩の身になにかあつてからでは遅いので胸は痛むがここは一つ  
ビシッと先輩を注意しなければなるまい。

叱られること怒られることになら、俺は既に世界で通用するレベルに到達している。  
逆説的に、叱ること怒ることも日本代表レベルくらいには達してると考えられる。

ならばこそ、今まで散々味わった、もとい味合わされた実体験からベストな叱り方を  
チョイスすることなどお手の物である。

ふむ。年上の女性を叱るとなると……。ここはやはり、定番のあれだな。

深い思案の末、見つけ出した答えに俺は満足の吐息を漏らしてしまう。

これだ！　と思う叱り方をチョイスすることが出来たのだ。

むしろ、それしか無いまである。

よーし、まってるよ、めぐりん！　今からお尻を撫で……違つた、ペンペンしてやる  
ぜ！

そんなワクワクする気持ちのせいかな足取りも軽くなり石段をずんどこと登っていく。  
すると段上の方は剪定でもしたのか、ここまではトンネルのように階段を包んでいた  
樹木の枝葉も取り払われ、月明かりが行先を薄く照らしていた。

ほっとして、でも慎重にまた登っていくと、小さな、とても小さな歌声が聞こえる。いつだったか、どこだったかで耳にしたような、そんな曲。

先輩が歌っているんだろうか？

むしろ違ったら誰が？ と怖いことを考えてちよつとビビる。

足を止め、記憶を探るように少し目を瞑る。暫し黙考し、そして思い出す。

「恋のダウンタウン」 イギリスの女性歌手ペトウラ・クラークの代表曲だ。

あれは確か俺と小町がまだ小さかった頃。

当時母親は専業主婦をしていて、俺たちの傍にいつも一緒に居てくれた。

そして音楽が好きな母親は料理や掃除など家事をする際、オールデイズの曲をかけ

ては

曲に合わせて楽しげにそれらをこなしていたのだ。

そんな楽しげな母親の姿を見るのが俺も小町も大好きで、大好きだったからこそ

俺たち兄妹の今後のため母親が働きに出たことに、寂しい気持ちになってしまう。

それで拗ねた小町が家出をしてしまい俺が迎えにいったとき、帰りたくないと言

小町に

普段からそう思っているが、両親その人には恥ずかしくて絶対言えないことを口にす

「大好きで大切な人の為。」

その為にしなくてはいけない事をして、そのせいでその人と一緒にいる時間が短くなってしまう。

そうやってそれでも俺たちの為に頑張ってくれている両親を、俺たちが悲しませたら駄目だぞ」

俺の言葉に、ポロポロと涙をこぼして「ごめんなさい」と謝る小町。

そんな小町を慰めながら二人で家へと帰ったことを思い出す。

なぜかその後、家出してない俺まで小町と一緒に両親に謝ることになったのだが。

まあお兄ちゃんだしな。妹に付き合って一緒に謝るくらいのこととはしてやるべきだろう。

そんな事を思い出しながら、その綺麗な歌声に耳を澄ませつつ登っていくと

御宮の境内へと到着した。

× × ×

到着した境内をぐるりと見渡す。ちよつとした高台の上なので大した広さはない。車を三十台くらい置いておける駐車場程度の広さだろう。

深い樹木に周りを囲われているが落ち葉ひとつゴミひとつなく綺麗に清掃され  
きちんと管理されている様子。

そして、その中央に位置する本堂は大きな建物ではないがしつかりとした立派な造り  
で、

月の光に照らされたそれは、なかなか尊厳な雰囲気醸し出している。

いい感じだな、ここ。繁華街から離れた住宅地のそのまた高台に位置している。

ここならば昼間であつても街の喧騒はそれほど届かないだろう。

今のような深夜ならなおさらである。神社仏閣が鎮座する場所として最適かもしれ  
ない。

そんな静謐な空気の中。と言いたいところだが、石段を登っていたときよりも傍に来  
たせいか

めぐり先輩の歌声が先ほどよりもはつきりと聞こえる。

……なんか、ノリノリで歌ってるな、あの人。

声は綺麗だし、歌い方も上手。なにより英語の発音のその流暢さに驚かされるが  
もう少し場の雰囲気合ったものを歌って欲しいとおもう。

なんで御宮で英語の歌をうたってるんだよ。そこは日本の歌をうたおうよ。

思いつつ、少し考えてしまう。

でも、夜の御宮に合う曲ってなんだろう。お経か？ 怖えーな、それは……

そんな思案に耽りながら、邪魔をするのも悪いので歌い終わるまで待つかと思ひ

先輩の歌声に静かに耳を傾けていると、ちょうどサビの部分に差しかったようだ。

先輩がさらにノリノリになったのもつとよく聞こえるようそちらへと足を踏み出す。

すると石畳から砂利が敷き詰められた場所へと入ってしまった、不躰な音を立ててしまった。

その音で先輩の歌声もピタリと止まってしまふ。しまった……と思ったが、後の祭り。

「夜間ライブ、めぐりん in 御宮」を邪魔をしたように申し訳ない気持ちになつてしまふ。

謝りに来たのにさらに謝ることを増やしてしまった……

そんな居た堪れなさで立ち竦む俺に、ほんわかした声がかかる。

「比企谷くん？」

本堂の右側。たぶん庭になっているのだろう。左側よりひらけた感じになっている。

その薄闇の中に小柄な人影が立っていた。

「そうです。すいませんお待たせしちゃって」



「や、そんなことないよ！ 思ってたよりずっと早いよ」

先輩はほわっとした声で言うのと、建物の影で他より暗くなっている場所から俺のいる場所へと、

ててつと小走りで寄ってくる。

ちようどそこへ強い風が吹く。それで空に浮かぶ雲が流れたのか

その雲が隠していた月の光が境内を明るく照らす。

月明かりの下。先輩の姿を見た俺は思わず息を呑み込む。

図書館や家へ来たときに見た先輩の私服姿は、品が良くお淑やかで可愛らしかった。

ただ今日は時間も時間だし俺がそうないように先輩もラフな格好だろうと思っていたのだが

その予想は嬉しい方向に覆される。

めぐり先輩の肌白く小柄な肢体を包むそれは、薄橙色の品の良い古典柄が入った旅館浴衣と

呼ばれるもので、さらにその上には薄手で濃緑色のこちらは柄無しの羽織を掛けていた。

髪もいつもはお下げ髪に前髪をピンで止めてつるりとした可愛いらしいオデコを出しているが

今はお下げ髪をしておらず、前髪はそのまま右側に流すような感じにしている。そして普段も化粧が薄い、というより化粧つけがあまり無い人ではあるものの、今は完全に素っぴんなのだろう。いつもよりずっと幼い感じがした。

そんな、あでやかなのにあどけないと言いたくなるような艶やかな装いでたおやかに佇んでいる先輩の姿に、俺は目が離せなくなってしまう。

吐息が漏れる。美しい女性の浴衣姿を見慣れているとは言わないが、

これまでだつてそれなりには見てきたはず。なのに、どうしてこんなにも……

そうして、胸が締め付けられるようなもどかしい気持ちで何も言えずにいる俺に先輩はその薄紅色の唇を開いて語りかけてくるのだつた。

## 大人になって気付いたこと

月が綺麗な初夏の夜。

その月の明かりにほのかに照らされながら、品の良い浴衣姿で可憐に佇むめぐり先輩を見て

俺はこんなことを考えていた。

踏んでももらえないだろうか、と。

勘違いしてもらっては困るのだが、俺は断じてマゾヒストではない。

痛いのは嫌だし辛いことは勘弁してもらいたいタイプである。

だが先輩には、この人ならば……と思わせるなにかがあるのだ。

おそらくそんなものあってどうするの？ という意見もあるだろう。

確かにかくいいう俺もつい今しがたまでそう思っていた。

しかし愛らしい浴衣姿でほにゃとした柔らかな笑顔を浮かべている先輩をみていると

踏まれてもいい、むしろ踏まれたらいいという、どうにもこうにも堪らない気持ちになつてしまう。

そしてこの気持ちの赴くままに、先輩に踏んでもらうべきだと俺は思うのだ。今まではどんなに綺麗で可愛い女性を見てもそんな風には思わなかった。

きつとこれは、俺が一步、大人に近づいた証なのだろう。

だがしかし、そんな開けてはいけない扉を開けた俺でも、

まさか先輩に向かつて踏んで欲しいと口にする訳にはいかない。

正直さや素直さというのは確かに美徳ではあるがものによりけりである。

ふむ。どうやって叱って、もとい踏んでもらうか……

これまでの人生最大の難問に俺の頭脳がキュイーンと音を立ててフル回転を始める。

そしてその優秀過ぎる頭脳は持ち主である俺の要望に答えてスパークする。

『思い……出した！』

先輩と再会してからこっち、俺がおイタをすると先輩はデコつんやらチョップやらで優しく宥めてくれた甘い記憶が蘇る。

そして今までは手を使って俺を叱っていたが、そろそろ足が出てても可笑しくないとと思われる。

だからといって怒らせ過ぎて帰られては目的を達成できず困ってしまう。

なので怒らせない程度のほどよい悪さをして先輩に叱ってもらわねばなるまい。

そうして俺は誰も見たことがない次のステージへ……

と思いつつも、いや待てよ。と考える。ただ踏まれるだけでは芸がない。

ここはやはり叱られながら、もしくは罵られながら蹴り飛ばしてもらおうというものもありといえばありかもしれない。

それにしても困ったな。あれもして欲しいこれもされたいで考えがまとまらない。

そこで具体的にどう罵られたいか思案することにした。そして熟考した結果。

「さあ、尻尾を振ってみせなさい！」と、俺を踏みながら叱りつける先輩を想像し

その夢想にうっとりしていると、自分の目の前で小さな手が右に左に振られていることに気づく。

はっとして意識を桃源郷から現実世界へ戻すと、ご主人様、違った、先輩が、ちよつと背伸びして

可愛らしく俺を見上げながら、「おうい、比企谷くん〜！」と呼んでいるではないか。めぐり姫を待たせるなど臣下としてもとい下僕としてあるまじき行為。

江戸時代なら無礼千万で切腹ものである。

俺は慌てつつ気を抜くかついうっかり跪きそうになる足をなんとか宥めて声を出す。「す、すいません。ちよつと、ぼーつとしちゃって」

ぼーつとどころか俺の頭脳はフル回転していたわけだが、回転の内容が内容なので

目を合わせづらい。答える声も少し上ずっていた。

そんな俺の言葉にも、先輩は心配そうなしゅんとした表情を浮かべてくれる。

そして両の手を胸の前でこねこねしながら申し訳なさそうに尋ねてきた。

「ううん、ごめんね比企谷くん。その、急に呼び出しちゃって。」

えっと、もしかして、眠かったりするのかな?」

『なにをおっしゃる、姫様! 姫のためなら某、例え火の中水の中。いついかなる時にも』

とはもちろん口には出せない。今は平成の世なのだ。時代にあった言い回しをしなれば。

「や、全然眠くはないんですけど……」

先輩がその、浴衣姿だったんでちよつと驚いたというかなんというか」

へどもどしつと答えると、先輩は浴衣の袖口をその白く細い指先でちまつと軽く摘み

摘んだまま両の手を広げるように持ち上げる。

そして気恥ずかしげに俺を上目遣いでちらちらと見ながら、

「変かな……?」と口をすぼめて聞いてきた。

その可憐な仕草に、むしろ俺の頭が変になりかける。これはやばい

「いや、すごく綺麗で……艶っぽいとかあでやかというか……」

危うく口から出かけた、だから踏んでください。というセリフをギリギリで飲み込む。

全然だからになっていないし、変態さんだと思われちゃう。

俺の言葉に、先輩は嬉しそうに表情を緩めると「ありがと、えへへ」といつて照れくさそうに頬を掻く。

どうやら先輩には人の心を読むエスパー能力はないようだ。

俺の内心を知っていれば、とてもじゃないがそんなセリフはでてこないだろう。

そして俺は考えてしまう。

もし、もしも二年のあの時、平塚先生が俺を奉仕部ではなく生徒会室へと連れて行く

生徒会の手伝いをするよう言ったのなら、どうなっていたのだろうか。

奉仕部や文実の活動としてではなく、生徒会メンバーとしてめぐり先輩の下で働く。

たぶん当時の俺でも、そこにある種の満足感を覚えて

案外一生懸命働いていたかも知れないな、と思う。

そして俺は先輩のために、その忠誠心すごいよお！ と引かれるレベルで

朝から晩まで頑張っていたに違いない。

社畜？ 奴隷根性？ 違うな愚民ども、これはご奉仕というのだよ！ とか言いなが

ら。

だが当時の俺では、先輩のその優しい人柄に触れても色々と勘ぐってしまい今のように話せなかつたかも知れないな、とも思う。

そう思えば、今のように先輩と普通に、とは俺がどう見ても普通じゃないから言えないが、

それなりに話せるようになったのは奉仕部で過ごした日々の影響が大きいのだろう。そして奉仕部でした選択の一つ一つで、そのときどきは間違えたこともあったが後になってみれば上手く間違えることができたのかも知れない。そんな風に思えた。終わりよければ全てよしではないが、間違えて、失敗したからこそ

気付けたこと身に付いたものもある。例えば、踏んでもらえる喜びとかね。

そうして思い出す。そういえば、俺は先輩に謝罪と感謝を伝えに来たんだったと。なぜか途中から、先輩を叱ること。そしてつい今しがたにはいかに叱られるかに意識が持っていかれていたが。思考が流されまくって困ってしまう。

多分絶対確実に、先輩の「ふんわりめぐりんフィールド しつとり成分配合」に俺の脳がジャックされてしまったのだろう。

そんな事を約十二秒で考えながら、おのれ、めぐりん！　と思いつつ一つ深呼吸をする。



そして、『落ち着け……。色香に惑わされるな』などと自分に言い聞かせていると、先輩が俺の袖をちまつと引いて話しかけてきた。

「比企谷くん。立ち話もなんだし、向こうで座って話そ」

その嬉しい誘いに、俺は頬を緩めてそうですねと返事をした。

## 人に道を聞かれるような人

今日という日が終わるまで残り僅かな夜遅く、月明かりに照らされた高台にあるお御宮にて

本殿の軒下の縁側のようになっている場所にめぐり先輩と二人並んで腰を降ろす。床下が高いため、俺でも足の裏がぎりぎり付く程度。

なので小柄な先輩は足が地面につかず、前に後ろに両足をぶらぶらさせている。

そんな仕草をする先輩を見て、なんか小さい子みたいだな、この人、と思いつつ、俺は先輩が語る「秒速五センチメートル 漫画版」の感想に耳を傾ける。

「最後のあれってさ。花苗ちゃん、貴樹くんと再会できたのかな？」

尋ねられ、ざっと記憶をさらってみた。

確か貴樹が東京で付き合ってた水野理紗と別れ、会社を辞め再就職先を探している頃。

花苗は種子島で看護師をしており、元気に暮らしていたがうまく恋愛はできずに独身のまま過ごしていた。そしてある日、サーフィン仲間の亮に告白される。

だが貴樹の事を上手く思い出に出来ないままの花苗は、

どうしても忘れられない人がいると亮に告げる。

そしてその気持ちを抱えたままでも構わないから付き合っただけいいという亮に、花苗の気持ちは揺れる。

この話を讀んだとき俺の気持ちも揺れたものだ。

当時はまだ目指していたリア充って、こんなふうに諦めが悪くないとなれないのかと。

むしろこれを読んだからこそ、俺には無理だと判断しぼっちの道へ進んだともいえる。

そして姉から「一度、会いにいつてみればいいと思うよ」とアドバイスを受けた花苗は

気持ちを整理するために、貴樹の住む東京へと向かう。

島から殆ど出たことのない花苗は東京の喧騒に驚きつつも、貴樹の勤める会社に電話を掛ける。

しかし貴樹は仕事を辞めていたため会えず、なんとか自宅の電話番号を手に入れたとき

花苗は心の整理ができたと感じる。

この世界には漫画や小説によくあるような運命や偶然の出会いなどなく、

それで今は会えなくても、そしてこの先もう会えなくても、

それでももし自分が望めば少なくとも連絡することはできる。

そう思つて踏ん切りがついた花苗は亮に電話をする。

「その気になったらどこにだつて行けるし、どんなに遠い存在も

本当に求めれば繋がれるんだつてわかつたの。だから、もう大丈夫」

言われた亮はこう思う。昔好きだつた男のことを今でも忘れられなくても

上手く思い出にはできなかったようだ。これなら俺と付き合つてくれるだろうと。

まあ告白の返事はN.Oだつたんですけどね。亮くん残念。

そうして種子島へ戻る前、休憩がてらに立ち寄つた公園でたまたま現れたのが・・・

おそらく貴樹。で、物語は終わる。思い出しつつ、少し考えてから口を開く。

「んー、どうなんでしょうねえ。それっぽい描写で描かれていましたけど。

でも、俺思うんですけど、あの二人が再会してそれでじゃあ付き合おうかつて感じに

は

ならないと思うんですよね。なんて言えばいいのかな……」

「気持ちの落としどころを探して、それでちゃんと終わらせにいったから、かな？」

「そうですね。それです。十年越しに想いが叶つて、というのも良いとは思うんですけど、

ど、

想いが届かなくても、叶わなくても、本人がこれで良かった。そう思えばそれで充分。

そういう話なのかなって思ってた読んでました」

「そっか」

先輩は言うのと、月に目をやりなにやら考え込んでいる。

そこで先輩はどうなって欲しかったか尋ねてみた。

「私はね。再会して、出来れば付き合ってたか尋ねてみた」

結婚。それは平塚先生を苦しめる呪いの言葉。

そんなものが無ければあれほどまでに先生も苦悩せずに済むのに……と想って

胸が痛むのを感じながら口を開く。

「結婚ですか」

「うん。だってさ、あのお話って誰一人として初恋の人と結ばれなかったでしょ?」

「確かにそうですね。遠くへ離れたり、自分が向いている相手への気持ち一杯で

自分に向けられている誰かの気持ちに答えられなかったりでしたしね」

「届かなくて、叶わなくて、それでその想いが無意味とか無駄になったとは思わないけど

さ

それでもやっぱり最後には、何らかの形で報われて欲しかったなって思うんだよね」

「それで、結婚ですか？」

俺の言葉にうんうんと頷いている先輩の姿を見て気になったことを聞いてみる。「めぐり先輩。あの、なんていうかですね。

女の子的には結婚って、結構ゴールっぽい感じだったりするんですかね？」

言うのと、先輩は腕を組んでうーんと唸りながら、うむむつと難しい顔をする。

俺は先輩の邪魔にならないように口を閉ざして静かに答えを待ちつつ

もし結婚が女性にとってゴールとするならば、平塚先生はゴールがないのに走り出してしまったのか……と思いがさらに痛くなっていた。

「ん、ゴールというか多分そこからがスタートなのかなって思うんだけど

でも、ひとつの区切りではあるよね。

こうなんか、これまででは一人で。ここからは二人で、みたいな」

先輩は言うのと、照れたように頬を掻く。

俺にとっては新たな二ト先としての結婚も、先輩にとっては違った意味を持つのだろう。

そんな事を思っていると、先輩は恥ずかしげにぼしよつと呟く。

「や、それにさ。好きな人との結婚って、小さい頃からの夢なんだよね」

あら可愛い。

もしかして先輩って小中学校の文集とかで将来の夢はお嫁さんとか書いちゃうタイプ？

そして照れくさそうにもじもじしている先輩を見ているとちよつとからかいたくない

茶化すような声をだしてしまふ。

「でも、好きな人との結婚が夢って、先輩、案外乙女ですね」

言うのと、先輩はぶくつと頬を膨らませジト目で睨んできた。

「案外って失礼だなー！ 私には乙女だよ？ 超乙女」

なんだよ、超乙女って。なに、髪が逆だつて金髪になるの？

そして思わず、「クリリンのことか——つ！！！！」と叫ぶ先輩を想像してしまい

口元に浮かんでしまった苦笑を隠すため顔を背ける。

だが先輩は俺が笑つてるのを目ざとく見つけると「もう、ばかにしてー！」と言いつつ

俺の背中を両の手でポカポカと叩いてきた。

一生懸命叩いてるようだが全然痛くない上、なにやらほんわかした気持ちになつてしまふ。

なにこれ可愛い。今度小町にもやつてもらおう。

や、でもですね先輩。手じゃなくて足ですわね……

言いかけたそんな言葉を飲み込んで、代わりの言葉を口にする。

「先輩って意外に、わんぱくなんですね」

すいません、すいませんと謝りつつも、負け惜しみがてらに投げた俺の言葉に

先輩はけらけらと笑い出す。そしてなかなかアグレッシブなことを口にする。

「そうだよ。こう見えて私、結構わんぱくなんだから。」

あんまり失礼なことという、比企谷くんのことぶつ飛ばしちゃうかも知れないよ！」

言つて、にこばつとした笑顔を見せる。

是非！ の言葉を慌てて飲み込む。危ねえ……誘導尋問うめーなこの人。と思いつ

つも

「意外」と口にできるほど、俺は先輩のことを知らないんだと気づく。

まあだからといって先輩にあれこれ尋ねられるようなコミユ力は、俺にはないんだけど。

そんな事を思っていると、先輩がちまつと袖を引いてくる。

「ねえねえ、そういうえげさ。貸した本読んでどうだった？」

先輩は言うど、おずおずとした様子で俺をじつと見つめてくる。

気になるのかね、娘さん。心の中でツツコミを入れつつも先輩の気持ちはよくわか



る。

俺も先輩に秒速を薦めたときには俺と同じようにとはいかずとも、それなりに楽しんでもらえればいいけど、と不安があったし。

それですごく楽しめたと伝えたくて、先輩へ送る感想メールをえらい長文で書いてしまったくらいだ。

文章だとちよつと長すぎるかな、と遠慮してしまうが、こうやって顔を見合わせてなら  
らば

自分もそうしてもらえて嬉しかったから、少しくらい長くなってもいいのかも知れない。

そんな風に思いながら、俺は先輩に自分の感じたことを出来るだけ丁寧に話し始めるのだった。

× × × ×

日も変わり少し時間が過ぎた頃。

感想を話し終えた俺とそれに耳を澄まして聞いてくれていた先輩はお茶で喉を潤す。

そして今度は、面白いとそれぞれが思った漫画の話に花を咲かせる。

「んぐるわ会報？ んぐるわってどういう字書くの？」

「ひらがなですね。会報は生徒会の会に報告の報です。」

んぐるわの意味は、俺もちよつとわからないんですけど」

先輩から出されたお題である生徒会を題材にした漫画。

それで俺が面白かったと感じた「んぐるわ会報」の名前を出すよ、

先輩は前のめりになってあれこれ質問してきた。

「どんなお話なの？」

「えーとですね。共学高校の生徒会の日常を描いてる作品なんです。

それでその生徒会長がクールを装いつつわざと他人を困らせて楽しむタイプで、

それに振り回される生徒会役員たちが大変な目に遭う話ですね」

「第一話なんですけど、目安箱が設置されてるんですよ。生徒会に要望を出す用に。

それである日投書がくるんです。夏は暑くて堪らない。体育の後ならなおさらだ。

女子はスカートで涼しくていいけど男子はズボンで暑いんですよ。

そこでここはひとつ、ハーフパンツの着用を許可して欲しいって」

「それを読んだ他の役員は『気持ちわかるけど校内では制服着用が校則で決まってるから  
我慢してもらうしかないわねえ』みたいなことをいうんですよ。

けど会長は、『なら男子も制服であるスカートを履けばいいのよ』とか言い出すんです。

『だっていちいち規定を変えるよりも、今あるもので補ったほうが早いじゃない』という理由で。

それで役員の中で一人だけ男子の松戸って奴にちよつと履いてみるってスカート履かせて

似合ってるからそのまま校内を一周してこいって命じる、そんな感じの話なんですけど」

「ひ、酷いね。えっ、でも、ちよつと待つて比企谷くん。松戸くんは嫌がらなかったの?」「すげえ嫌がったというか困ってましたけど、会長めちやくちや口が達者なんですよ。」

それで上手いこと言い含められちゃうみたい。あと、松戸は会長のことが好きなんです

好きな子の頼みはそもそも断れないみたいなき感じですね」

顔をほころばせて、俺の話にうんうんと頷いていた先輩は何か思いついたように「あつ」というと、悪戯めいた微笑みを浮かべた。

「じゃあさ、比企谷くんも私がお願いしたら、スカート履いてくれる?」

ちよつと待ちなよ、お嬢さん。俺が履いても誰も喜ばないでしょう……

「い、いや、履きませんよ。俺、そもそも生徒会役員じゃないですし」

「でも一杯、生徒会の仕事手伝ってくれたじゃない。」

今だって、一色さんのお手伝いしてくれてるんですよ？ だからさ、ね」

「あの、めぐり先輩。全然だからになってないんですけど。

ていうか、遠慮しないで、みたいな感じにもっていくのやめてくれませんか……」

俺の苦情もどこ吹く風で先輩はけらけらと笑っている。

そんな楽しい先輩の姿を見ると、スカート履いてもいいかも、と思えるから不思議。

「そういえばさ、比企谷くん。一色さん、生徒会頑張ってるみたいだね」

笑いを収めお茶をすすっていた先輩が嬉しそうに口にする。

「そうですね。最近先輩にこないで自分らだけで頑張ってるっぽいですよ。

まあいままで充分頼られてたんで、そろそろ独り立ちしてもいい頃合ですしね」

「そうだねえ。ほら、一色さんてさ、会長になった経緯が経緯じゃない。

だからね、モチベーションがもつかなってちよつと心配だったんだよね」

「確かにそうですね。嫌がらせた勝手に推薦されて、俺の口車にまんまと乗せられてほとんど押し付けられたようなものですし」

俺の言葉に、先輩はちよつと首を傾げて口車の内容について尋ねてきた。

奉仕部の二人を生徒会長にさせないため。その部分を上手く省いて説明すると先輩は顎に指を添え少し考えるような素振りをしてから口を開く。

「それで悪いと思って、お手伝いしてあげてるの？」

「まあ、そういう気持ちも少しですけどありますね。

ただ思っていたよりも、一色は会長職とかその手のものに向いてるっぽいんですけど」  
言つて、そこでふと、先輩が生徒会長になろうと思つたのはなんでだろうと思ひ  
尋ねてみることにした。

「そういや先輩。先輩つてなんで生徒会長になろうと思つたんですか？」

尋ねた俺の言葉に、先輩は驚いたような表情をすると下を向いてしまう。

そして俯いたままこちらにこそつと視線を向けると、ぽしよつと呟く。

「笑わない？」

もちろん笑つたりなんかしない。

先輩が生徒会長になろうと思つた理由を俺は知らないけれど、その理由はどうあれ  
責任を背負い込むという行為は賞賛されてしかるべきものだと思うから。

なのでなるべく真面目な声をだす。

「笑わないですよ。その、言いにくいことならあれなんですけど」

「や、そういうわけではないんだけどね。

その、いままで誰にも聞かれたことがなかったから、ちよつと驚いちやつて」

そういうもんなのかと思いつつ、「良かったら教えてください」とお願いしてみる。

すると先輩は照れくさそうに髪をいじりつつ、「じゃあ聞いてもらおうかな」というと

お茶を一口飲み、喉を潤してから口を開く。

「えとね、私、そうは見えないかもだけど、すごく人見知りして引つ込み思案なのね」  
なにいつてんだ、この人。

あんた文化祭のオーブニングセレモニーのとき、体育館に集まった全校生徒の前で  
「お前ら、文化してるかー!？」とかノリノリで叫んでたじゃん。

人前にめっちゃ出てる引つ込み思案とかいえないから。そもそも引つ込んでないし。  
むしろその二つは俺のための言葉ね。わかる？

そんな気持ちがついうっかり顔に出てしまったようだ。

俺の訝しげな表情を見て、まったく全然信じてもらえてないことに気がついた先輩は  
焦った口ぶりとともに、ぶんぶんと手を振りながら一生懸命自分がいかに人見知り  
引つ込み思案なのかを説明しだす。

もちろん、そんな事をする引つ込み思案がないのは確定的に明らか。

「えっと、じゃあ仮に、先輩が人見知りして引つ込み思案だとしましょう」  
「仮じゃないもん。ほんとだもん」

言つて、拗ねたようにぷいっと顔を背ける先輩。

その姿はとて愛らしく、胸が詰まるようなそんな気持ちになつてしまう。

こりゃあかん。下手したら惚れてしまうかも知れん。などと思いつつ口を開く。

「……その、人見知りで引つ込み思案な先輩が、なんで生徒会長みたいな人前にでる仕事をしようと思っただんですか？」

言うど、先輩は「信じてないくせに」みたいな感じのジト目で俺をちろつと見てきたので

「信じてるわよ！」みたいな目で見つめ返す。

そんな俺を見て先輩は呆れたようにくすつと笑った。

「昔ね、おばあちゃんに、道を尋ねられるような人になりなさいって言われたことがあるの」

「道ですか？」

先輩は頷くと、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「えつとね、道を聞かれるということは、服装や髪型がきちんとしていて、表情が穏やかで

姿勢が良くて、優しそうで、どこか頼れる雰囲気を持っているからって」

「それで、この人なら自分の話をちゃんと聞いてくれて、きちんと答えてくれそうだな。そう思われるような人になりなさいって言われたの」

頼れる雰囲気はちよつと先輩にはないけれど、他は概ね持ち合わせていると思う。

「でもね。どうやったらそんな人になれるかわからなかったから

それじゃあとありあえず、自分の苦手な部分を克服しようとおもってね  
それで人前にでることが多い、生徒会長に立候補したの」

なんか凄いなこの人。頭いいのか馬鹿なのかよくわからん。

強いて言うなら、レベル1でラストダンジョンに飛び込むタイプ。といつてもいいかもしれない。

やっぱり馬鹿かも。それでも、こうなりたいと思つて努力して、そうなった先輩は立派だと思う。

「先輩は、なれてると思いますよ。道を聞かれるような人に」

「そ、そうかな？　なんか生徒会運営とか全然ダメダメだったような気がするんだけど……」

「ダメなんかじゃないです。とても立派でしたよ。」

仮に、ほかの誰もがそう思わなくても俺だけはそう思つてますから」

言うのと、先輩は驚いたように目を丸くして俺をじつと見てくるので、慌てて言葉を付け足す。

「や、えつと、その……。俺なんかにそう言われても、あれでしょうけど……」  
言つて、こそつと目を逸らす。

先輩が俺の話を書きちゃんと聞いてくれるから変に勘違いしていたが



先輩と俺とじゃ、立ってる場所がまったく違うのだ。

なのになにを偉そうに、俺だけはとか……

俯いたままそんなことを考えて、ちよつとへこんでいる俺の耳に

先輩の温かな声が聞こえた。

「比企谷くん。比企谷くんは、なんかなんかじゃないよ」

先輩が言ってくれたその言葉に、俺は顔を上げることでもできぬまま、

「ありがとうございます」と答えるのが精一杯だった。

## 今さら　今なら　今しか

俺が口にした「ありがとうございます」の言葉に、先輩からも嬉しそうな綻んだ笑顔で

「こちらこそ、ありがとう」と返事を返される。

そして顔を見合わせ微笑みあった後、続く言葉を見失い、二人共黙り込んでしまう。互いに認め合い称え合う。映画やアニメ、漫画や小説なんかでよくあるシーンだ。

スポーツ漫画やバトル漫画の定番といってもいいかも知れない。

そしてそれらを見たり読んだりしているときには「うむ、いいね!」と思えるが

これが現実の、自分が当事者だとかなり勝手が違う。

なんとというかすぐく気恥ずかしくなりもじもじしてしまおうし、唐突に死にたくなってくる。

先輩も同じ気持ちなのだろうか。

俺の隣で不安なときの癖らしく、両の手を胸の前でこねこねしていた。

そんな風にしばらくの間、二人してもじもじこねこねしていると

先輩が照れくさそうに手をすりすりししながら口を開いた。

「こう今みたいなのって、なんか、あれだよな」

あれとは、つい今しがた俺が想像していたようなものだろう。と思いつつもなにかね? と視線で問いかける。

「なんかさ、水戸黄門みたいだよな」

……水戸黄門? なに言ってるの、この人……

そんな俺の訝しげな表情を見た先輩は、なんで分からないの? みたいな顔をする。「ほら、あるじゃない! 水戸黄門じゃなくても時代劇とかでさ。」

えっと、悪代官が『お主も悪よのう……』っていうと

越後屋が『お代官さまにはかないませぬ……』って答えるシーンが!

そんな感じしない? 今の私たちのやり取りって」

芸の細かい先輩は悪代官と越後屋のセリフの部分を、

ほんわかしつつも悪そうな顔と悪そうな声で言ってくれる。

無駄に芸達者だな、この人。と思いつつも、まあ確かにあの二人は

互いに認め合い称え合っているといえるかもしれん。

下のものの良いところをきちんとして認める上司の才覚と自分などまだまだですという

謙虚さ。

そしてなにより、強い絆で結ばれた仲間意識を感じることができなくもない。

そうやって考えてみればそうかもしれないと思えるが、数あるシチュエーションの中から

それをチョイスする先輩のセンスがやばい。もつとマシな例えがあるでしょうに

……

「ま、まあ、そういう見方もあるかもしれないですね」

答えると、先輩は可笑しそうにくすくすと笑う。

そのほんわかした笑顔を見ながら、それにしても、と考えてしまう。

話題が全然尽きなくて会話もとても楽しい。

それは嬉しいことなのだが、それで文化祭の事を口にする切っ掛けが見つからない。

せつかくの良い雰囲気を自分のいらん一言で台無しにしてしまうんじゃないかと思うと

どうしても躊躇してしまう。

感謝や謝罪の言葉を口にする。それはきつと正しい事だと思う。

けれど結局のところ、自分の中にある罪悪感をすつきりしたいだけなんじゃ？ と

考えずにはいられない。

そこでふと、由比ヶ浜のことを思い出す。由比ヶ浜もこんな気持ちだったんだろう

か。

相手を知れば知るほど、時間が経てば経つほど、感謝も謝罪もどんどん言いづらくなっていく。

自分が同じ立場に立ってみて初めてそのことに気づく。というか実感する。

そして当時の俺は自分が傷つくのを恐れるあまり、彼女のそんな気持ちに対して頑なな態度を取っていたのだ。そのことを、今さらながら悔いてしまふ。

だがそれに気づけた今なら、由比ヶ浜が俺に対してそうしてくれたように俺も前へ次へ進むためにきちんとしなくては。

そう思い今しかないと覚悟を決めると、息を深く吸い込んでゆっくりと吐く。どう切り出すか迷ったが思ったままを口にすることにした。

「……あの、めぐり先輩。去年の、その、文化祭のことなんですけど」

俺の言葉に、先輩が戸惑ったような表情でこちらを見てくる。

その表情を見て口籠ってしまいそうになるが、言い出した以上、途中で止める訳にはいかない。

「なにを今さらと思うかもしれませんが、あの時は本当にすいませんでした。

その、先輩の立場も考えずに、場を乱すようなことばかり言ってしまった……」

なんとか言い切つて、頭を下げる。もちろん謝罪なので下げたというのもあるが先輩の顔をまともに見られなかったという気持ちも大分ある。

暫しの沈黙。胃が痛くなるような、そんな時間が過ぎていく。

やっぱり言うべきじゃなかったか……。そう思っていると

下を向いている俺の顔を覗き込むように先輩が顔を寄せてくる。

「私の方こそごめんさい。私がもつとちゃんとしていれば

比企谷くんや雪ノ下さんに、迷惑かけずに済んだのに」

耳元で囁かれた先輩の言葉に思わず顔を上げる。そして先輩の顔をまじまじと見てしまう。

その表情はとても辛そうで痛々しい。

自分はやはり余計な事を口にしてしまったのだと思い、ひどく後悔してしまう。

「や、えっと、先輩は別に悪くないですよ。」

その、俺が許せなかったのは他のサボつてた連中だけで」

先輩はしゅんとした様子で俯いていたが、俺の言葉に顔を上げると

じつとこちらを見つめてくる。

今のじゃ全然言葉が足りてないと気づき、慌てて続きを口にする。

「単純に純粹に俺は誰かに押し付けて楽してる連中が許せなかったんです。

真面目にやってる奴があおりを受けるのは納得がいかない。

真剣に取り組んでいる奴が泥を被るのは看過できない。それだけです」

「その……、もつと上手いやり方があったとは思うんですけど……」

俺の言葉に頷く先輩の顔を見て、少しだけ言葉を付け加える。

すると、それまで黙って聞いていた先輩が首を傾げて口を開く。

「比企谷くん。私ね、体育祭のとき、比企谷くんってすごく頭が回る子なんだなって思ったの」

えっ、マジで？ そこに気づくとは、やるなめぐりん！

でも面と向かっていわれると照れるなー ガハハハ！ と思ったのも束の間。

先輩は言いづらそうに言葉を付け足す。

「ちよつと、その、意地が悪いかなって思ったりもしたんだけど……」

八幡大シヨック。ま、まあ、仕方がない。

俺のやり方は誰が見たっていい気分にはならんだろうし。でも、ちよつと泣きそう。

そんな、ベキツと折れている俺を見て先輩が慌てたように話を続ける。

「や、ご、ごめんね、褒めてるんだよ？ え、えーつと、だからね、逆に不思議に思ったの。」

そこまで頭が回るなら、先のこともある程度予想が付くと思うのね。

なのになんでわざわざ文実のみんなを敵に回すようなことを言ったのかなって。

あの状況なら私や相模さんを責任者として責めれば充分なわけじゃない？」

まあ確かに先輩の言う通りだと思う。まともな奴ならわざわざあんな事はしない。

言おうか言わまいか少し迷ったが、先輩は俺の話を引きちんと聞いてくれているのだ。

ならば俺もちゃんと自分の考えを先輩に伝えるべきだと思い、声を押し出す。

「わかりやすい敵を一人作って、みんなして叩くって行為が俺は嫌いなんです。

確かに文実をさぼる切っ掛けを作ったのは相模でしたけど、そこでさぼるかは別問題なわけで。

それでもさぼらずに頑張っていた人もいたわけじゃないですか」

「何かを悪役にして壊しても、大体より悪くしかならないと思うんです。

状況の改善は重要だし大切だと思います。だからこそ「どう壊すのか」って考えた結果

嫌われても問題ない俺があればいいかなって思っただけ、それでそうしたというか」

「ちよつとごめん、比企谷くん。なんで比企谷くんが嫌われても問題ないと思うの？」

「や、俺、友達とかいないんで、嫌われても問題ないかなって」

「それって……」

啞然とした様子で先輩は言うのと、頬に手を添えて難しい顔をする。

そして、「他にも聞いていいかな？」と言ってきたので頷くと

先輩は俺を不思議そうに見つめながら口を開く。



「えっと、比企谷くんはさ、文化祭が上手くいってもいかななくても、とくに責任をね  
追求される立場じゃないわけじゃない？　なのはどうしてそこまでできるの？」

「追求されるからやる。されないからやらない。というのは少し違うんじゃないかなっ  
て

俺が思っているだけです。関わったからにはきちんとやるべきだと思いますし」

「じゃあ、私や相模さんにね。いまひどい状況だからどうにかして欲しいって

直接かまあ間接的にでもさ、口にしなかつたのはどうしてなの？」

「先輩はともかく文化祭の時の相模は俺の話なんか聞く耳もたないじゃないですか。

あいつに俺、嫌われてますしね。体育祭のあとなら、多少は違うかもしれませんが」

「まあ、うん。そうだね。そうかも」

「先輩は先輩で受験で大変な時期に毎日ちゃんと来てくれてたじゃないですか。

それで周りの人間に細やかな気配りをしてくれていたのに、俺の不満とかそういうの  
先輩に対して口にするのって、なんだか筋違いのような気がしますし。

まあ、ならあんなこと言うなって話なんですけど……」

「そうだったんだ……」

先輩は言うのと、俯いて黙り込む。

思っていることを口にはしたものの少し言い方が悪かったかな、と不安に思っていると

先輩が伏せ目がちに俺をちらつと見る。

「あの、あのね。その、比企谷くんと相模さんて、あんまり仲良くないじゃない?」

「あんまりじゃなくて、すごく仲良くないですよ」

「あ、うん。そ、そうだね。えっと、それでね。傍から見ても相模さんから比企谷くんへの

嫌ってる感じっていうのかな。そういうの凄くよくわかるんだよね」

うむ。俺もよくわかる。嫌い合うという面だけでいえば、俺と相模は気が合うとも言える。

だが相模は「上手い嫌い方」を知らないのだろう。

俺のやることなすこと全てに過剰に反応し、わかりやすい態度を取ってしまう。

そんな風に俺がいるだけで相模にダメージを与えることが出来るのが愉快痛快すぎる。

そして相模が嫌がることをあえてやる自分のことを、俺は大好きだったりする  
「でもね、比企谷くんから相模さんへのそういうの、感じないんだけど

比企谷くんは相模さんのこと、どう思っているの?」

「もちろんちゃんと嫌いですよ。あいつのこと。凄く嫌いといっても良いです。

むしろ大っ嫌いです。ただ、まあ、そんなに悪い奴だとは思いませんけどね」

「そうなの?」

「はい。相模はなんていうか、悪いというより弱いんだなって思うんです。

弱さゆえの攻撃性と群れ習性っていうんですかね。

あいつの性格とか人間性とかはゴミクズだと思えますけど、文実を間違った方向にもって行ってしまったことに関しては、まあ、仕方ないかなって思ってます」

言つたものの、先輩にはうまく伝わらなかつたらしい。

先輩はほけつとした顔で俺を見ているので言葉を付け足す、

「や、えつとですね。俺も一杯間違いとかするんで、むしろ間違つてばかりというか。

だからそんな俺が他人の間違いをあーだこーだ言うのは可笑しんじゃないかって思うんです」

「……あの、そんな風に考えてそう思える比企谷くんが、なんでスローガン決めるときや相模さんを迎えにいったときに、あんなやり方をしたのかな?」

問われて口籠つてしまう。理由も事情もあるにはあるのだが、

言い訳がましいうえに他人のせいにしてるっぽくて口にするのが憚られる。

そう思つて迷っていると、先輩がおずおずとした様子で口を開く。

「聞いたいてあれだけど、口にしたくないなら無理にしないで……」

先輩は言うつと、気遣かわしげな視線を向けてくる。

その先輩の言葉に、この人になら隠し事はせず、事情をきちんと聞いてもらいたいと思

奉仕部に相模が訪れて依頼を受けたこと。それで雪ノ下が体調を崩しても頑張ったこと。

それを見かねた由比ヶ浜から雪ノ下を助けて欲しいとお願いされたこと。

そんなどうにもならないことをどうにかしたいと思いつながら

ずつとぼつちで誰かに相談することや頼ることが出来ない自分には

あれ以外のやり方が見つけれなかったことを告げる。

「その、雪ノ下がやっていたことを無駄にしたくなかつたって気持ちがあつたと思います。

まあ、あいつもあいつで、陽乃さんに対抗心を抱いて無茶したりとかありましたけどね。

でも、それでも俺は、同じ奉仕部の仲間として、雪ノ下がやってきたことが台無しになるのを

黙って見過ごすわけにはいかなかったというか……」

言えば言うほど、誰かに何かに責任を押し付けている。

そんな気持ちになつてしまいでしょ。どうしても言い淀んでしまう。

すると、俺の言葉を黙って聞いてくれていた先輩がゆっくりと口を開く。

「比企谷くん。覚えてるかな？」

比企谷くんの家で秒速をみた帰り道で期待の話をしたこと」

話が急に飛んだことに驚きながらも、ざっと記憶をさらってみる。

「そういやあつたな、と思い出し口を開く。

「はい。覚えてますよ」

「あのね。私、比企谷くんに、期待というか理想の押し付けっというのをしてたんだと思うの」

先輩が口にした予想外の言葉。

その意図が掴めなかった俺は、先輩の表情を窺いながら聞き返してみる。

「理想、ですか？」

「うん。えっと、文実のみんながさぼりだしてさ、それでも来てくれる人たちがその分大変になったじゃない？ それで、それが嫌なら理由をつけて来なければいいと思うのね。」

委員長がそういったじゃんとか言っけ。そうしてる人の方が多かったわけだし」

「それは、まあ、そうですね」

「なのに比企谷くん。毎回休まず参加して、なんか色々悪態はつきながらも」

雑務として全役職に携わってくれてたじゃない」

「……俺、そんなに悪態ついてましたっけ？」

「う、うん。結構……」

おふうく 俺、最低だな！ほんと申し訳ない。

「す、すいません」

「や、まあ、それはね。仕方ないよね。うん、気持ちはわかるし！」

なんか謝ってる俺より申し訳なさそうな先輩の姿を見ると、居た堪れない気持ちになっちゃう。

おウチに帰りたい……

「えっと、まあそれで、真面目な子なんだなって思ってた嬉しくってね。

信頼して期待しちゃったんだよね。その、勝手にね」

ああ、その気持ちは本当によくわかる。

俺も雪ノ下に、そして由比ヶ浜にも、似たような理想を押し付けていたから。「だからっていうのもあれなんだけど、そうあってほしくなかったよって

比企谷くんの気持ちも考えずに口にして、本当にごめんなさい」

「や、待ってください、めぐり先輩。俺、嬉しかったんです」

「えっ!？」

俺の言葉に、先輩は口をぽかーんと開けて目を丸くすると俺をまじまじと見つめてくる。

それで俺は、自分の言い方が不味かったことに気づく。

「えっと、責められて嬉しかったとかじゃないですよ？」

俺のダメだったところをきちんと批判してくれて、それでも頑張ったところを

ちゃんと認めてくれたことが嬉しかったことでですよ」

「あつ、そつか。うん、そうだよね。ちよつと、その、驚いちゃった」

先輩は言うど、気恥ずかしげに頬を掻く。

まさかこの人、俺が責められて喜ぶタイプだとも思っているのだろうか。

まったく失礼だな！ そんな訳……ないよな？ ないの？ いや、あれ？

そんな感じでちよつと自分を見失いかけていると、先輩がさらに謝ってくる。

それで暫くの間、お互いに自分の方が悪いんですと言ひ合う形になってしまふ。

途中、そんなやり取りがなんだか可笑しくなってしまう、くすくすと笑い合う。

そうして俺は、「じゃあ、お互い様で」と言ってくれた先輩の柔らかな声に頷くと

差し出してくれたその手をそつと握り締めるのだった。

## 俺スイツチ

「じゃあ、比企谷くん。仲直りの握手をしようー」

そう言つて差し出してくれたためぐり先輩の手を、俺は緩く握り締める。

触れ合う肌と肌。仄かに伝わってくる体温に心臓が跳ねる。

夏だというのに先輩の手は少しひんやりとしていた。

そのなんともいえない心地よい感触に、俺の心は現世の煩惱から解脱して

次のステージへとステップアウトする。

なんだこれ、すげえ小さくってほっそりしてる。なのにとつてもやわらけー！

これはあれだな。食べちゃいたいくらいの可愛さとかそういうのだな。

なるほどなあ、そういう表現をたまに小説で見ることがあったけど、こういう感じな

のか

いやちよつと待てよ。食べちゃいたっていうことは、噛みたいってことか？

ふむ。でもなあ、俺はどちらかというところ舐めたいタイプなんだよな。ペロリストって

いうのかな！

などと煩惱からまったく解脱していない不埒なことを考えていると、



危険を感じたのか先輩が手をすつと離す。

くう、もうちよつと、あと五分か五時間くらい握っていたかったなあ……  
そんな後ろ髪引かれる思いでいると、先輩がちよんちよんと俺をつついて話しかけてきた。

「ねーねー、比企谷くん。仲直りっていったけどさ

私たち、別に仲が悪かったわけじゃないよね？」

言われて少し考える。

まあ顔を合わせたら挨拶する程度の仲とでもいえばよいのだろうか。

気が向いて時間があれば世間話の一つや二つするかもしれない。

例えば、当たり障りのない天気や日常の諸々のことを。

そして仲が良い悪いそれ以前に、その当たりも障りもしない会話と同様、

互いの心に触れ合うことがなかった関係だったと思う。

「そうですね。仲は悪くなかったと思います。」

まあ先輩、優しいから、しでかした俺にも普通に接してくれていただけなんですけど

出来るだけきちんと言えたつもりだったのだが、先輩は表情を暗くすると

しよんぼりとした様子で俯いてしまう。

「別に私、優しくなんかないよ」

「そうですか？ 人当たりも良いし、温和な人なんだなって思いますけど」

「私のは、多分優しいんじゃないかって、甘いんだと思う。その、自分にね」

「自分に、ですか？」

先輩は頷くと、気まずそうな表情で髪をいじりながら小さな声で呟く。

「文化祭のときも体育祭のときもね、こうしなくちゃってあつたんだ。

けど、口に出したら嫌がられるかなって考えるとなかなか言えなくってね。

なんかこう、人を責めるのが苦手というか……」

まあ確かに先輩はそういうタイプだろう。ほんわかしてるし。

だがその理論いくと、そういう先輩に責められた俺は、人ではない、という事になつてしまう。

あの一色ですら俺を人間カテゴリに入れてくれたというのに……

それで少し気分が落ちてしまったが、俺よりも落ち込んだ様子の先輩を見ると

慰めねば！ と思ひ、気を取り直してなるべく優しい声を出す。

「や、でもですね。先輩のようなほわつとした人が、誰かを何かを責めている姿を

俺はちよつと見たくないですよ。そういうのは、俺が向いてるっていうか」

俺の言葉に、先輩は顔を上げると少し考える素振りをしてから口を開く。

「比企谷くん。君は人を責めるの、向いてないと思うよ？」

先輩の言葉に驚いてしまう。そんな事を言われたのは生まれて初めてだ。逆ならよく言われているが。主に雪ノ下に。まあ実際その通りだから反論できんけど。

なので先輩のいうことを意外と思うより、心外だと感じた。

ちよつと待ちなよ、めぐりん！

俺ほど人を責めることに才能がある人間はなかなかいないと思うぜ？

そう思った俺は、自分が如何に人を責めることに優れているかを先輩に説明することにした。

「先輩、ちよつと待ってください。人を責めるのは俺の108の特技の一つですよ？」

どんくらいかという、世界で戦えるレベルです。いや、むしろ世界と戦えるレベルですよ。

なんというかあれです。四天王とかゴットハンドとか東方不敗とか、他には渋谷最強みたいな

もう人類には追いつけないステージにいるというんですかね」

などと自分の凄さを一生懸命アピールしたのだが、先輩はゆつくりと首を振る。

「比企谷くんは間違ったことは言っていないと思うの。ダメなことをした人に、

それはダメだよって言うてるだけで。言い方が、その、悪いけど」

「口の悪さも俺の特技のひとつですよ。相手が目を背けていることを口にして、傷を負わせダメージを与えるっていうんですかね」

自信ありげにそんな軽口を叩いた俺を、先輩は悲しそうに見つめる。

「でも、一番傷ついているのは、君じゃない」

言われて、ぎよつとする。そして先輩の顔をまじまじと見てしまう。

そんな俺を先輩は優しい目で見つめながら言葉の続きを口にする。

「関心を集めることは人の役に立つことだと思うよ。」

考える機会を作ったり、状況を動かす切っ掛けになるしね」

「ただ比企谷くんのやり方だと、それがどんなに正しくても、むしろ正しいからこそ

言い返せない相手の鬱憤が全部比企谷くんに向かってしてしまうと思うの。」

それでね、比企谷くんが他人の悪意に鈍感だったり気にしない子ならまだしも

君、気にするでしょ？　そういうの」

問われて口籠ってしまう。

悪意に限らず他人の感情に、敏感に過敏に反応してしまう自分を知っているから。

そして先輩の顔をまともに見られず顔を背けてしまう。

その俺の横顔に、先輩は困ったような声で語りかけてくる。

「い、い、いめんね。お説教とかしたいわけじゃないんだけど。」

少なくともどうしようもないことをどうにかしようとした比企谷くんは正しくはなくとも

間違つてはいないと思う。多分割り切ることができない話だと思うんだ。

まあ何もできなかった私がいうのも可笑しな話なんだけど……」

「い、いや、先輩頑張つていたじゃないですか。それに生徒会長の先輩が

文実のことに口を出すのは、なんかあれですよ。角が立つっていうか」

言うのと、先輩は申し訳なさそうに頷いて口を開く。

「うん。生徒会はあくまで生徒会。文実が文実。それぞれ独立して別れてるって事は権限も当然違うんだよね。生徒会の下に文実があるわけじゃないから。

だから、生徒会から文実に介入すると角が立つっちゃうの。それがどんなに間違つていてもね」

「あと、今年はそれで乗り切ったとしても、それ以降の文実の運営に支障が出る可能性がでてくるかも知れないの。文実内の問題を文実自身で解決できなかったとなると、

翌年以降に文実が扱える権限の範囲が狭まると思う。

学校側が生徒の自主性を重んじる立場からそれを疑う方向に傾くかもしれないからね」

「だから相模さんが委員長である事が拙いとなつたら、それは文実から自主的に解任に

動くのが

正しいやり方。自浄作用が働いたという事でとりあえず余所に向けては問題にならないからね」

「あとね、文実の権限が大きくなったのは、はるさんの活躍があつたからなんだよね。

自分の憧れている人が残してくれたそれを、自分がダメにしたくなかつたというか

……

それで後手後手になちやつて、比企谷くんや雪ノ下さんに迷惑かけちやつただけ  
ど。

それでも、ただもう少しだけ、比企谷くんには自分を大事にして欲しいなって」

先輩は言うど、両の手で俺の手をきゅつと握り締めてきた。

そして自分の胸元に抱えるようにもっていくので

指先が先輩の慎ましい胸に、ぷにゅと当たってしまった。

俺のことを心配し熱心に真摯に語りかけてくれる先輩の言葉は大変ありがたく嬉し  
いのだが

指先に感じる柔らかな感触に、俺の方はそれどころでは無くなってしまう。

い、いや、だつてさ、これしょうがないよね？ お、おれ、男の子だし。

それでもここまで言ってくれている先輩に対して黙っているわけにもいかず、

なんとか声を押し出す。

「めぐり先輩。先輩はやっぱ優しい人だと思います。そんな風に俺のこと心配してくれて

その、これからは、もうちよつと気をつけますんで」

だから先輩も自分の行動にもうちよつと気を配ろう。そういうニュアンスを含めて言ったのだが、

先輩には上手く通じなかったようだ。

先輩は嬉しそうに頷くとさらに自分の胸に押し付けるように俺の手を抱きしめるので

これが「当ててるのよ」なのかと驚いてその顔にそつと視線を向ける。

すると先輩はにこやかに微笑んで俺を見つめていたので、慌ててこそつと視線を逸らす。

なんとというか純真無垢な笑顔と清らかな瞳で見つめられると、卑猥なことを考えていた自分が

酷く汚れているようで恥ずかしくなってしまう。

なので俺は、ダメよ八幡。変なこと考えちゃダメダメ。木に、木になるのよ！  
などと自分に言い聞かせ邪念を追い払おうとする。

だが先輩は、そんな俺の涙ぐましい努力を一撃で粉碎してしまう。

なぜなら先輩は両手で挟んだ俺の手のひらを指で揉み揉みしてくるからだ。

ちよ、先輩。そんなところを揉んだら、お、おれ、や、やばいですよ!?

そこにはスイッチがあつてですね。それを押したら、ミニ八幡が……

俺スイッチを押されないか危ぶむ俺の心を知つてか知らずか、先輩はさらに揉み揉みつと

してくるので、どうにもこうにもむず痒くなつてしまい身を振つてしまう。

そうやってくねくねしている俺を見ても先輩は気にする素振りも見せずに、

ほんわかと微笑んでいる。

さすがにこれ以上は不味いと思い、先輩の手を丁寧に解こうとした俺の目の前をぼんやりとした小さな明かりが通りすぎた。



## 月螢抄 前語り

「比企谷くん、螢だ！」

喜色に満ちた先輩の声につられて俺もそれへと視線を向ける。

ゆらゆらと頼りなく飛んでいたそれは近くの茂みに止まると、淡く明滅しだす。

「螢なんて、えらい久しぶりに見ましたよ」

「うんうん、私も。ほんと久しぶりに見たかも。」

そういうえげすぐそこにね、水が流れているから、それを目当てで来たのかな」

「川とかがあるんですか？」

「ん、川っていうより沢っていうのかな？ ちよろちよろとした感じの。」

向こう側から流れてきててね、その崖から下に落ちていくんだけど」

先輩は言うど、水の流れを示すように指を動かす。

だが薄い月明かりしかないため、その流れを視認することは出来ない。

先輩もそれに気づくと、困ったような声を出す。

「ん、暗いからよくわかんないよね。どうする、比企谷くん？ 近くまで行って見てみ

る？」

言われて、どんなもんだらうと興味がわいたので頷こうとするとどこからともなくもう一匹、蛍が現れる。

そして先に来ていた蛍のほうへと飛んでいくと、すぐ傍の草の葉に止まりこちらまで淡く明滅しだす。

薄闇の中、交互に明滅を繰り返す蛍の光を見ながら声を出す。

「……いや、邪魔するのもあれなんで、そつとしておいてあげましょう」  
「うん、そうだね。そうかも」

俺の言葉に、先輩はにっこり微笑んで答えると、すつと俺の手を離す。

そして行儀よく両の手を揃えて姿勢を正すと二匹の蛍を首を傾げて眺めだしその明かりを楽しむように目を薄く細める。

先輩のぬくもりがなくなつたことを残念に思いつつも少しほつとしていると蛍に目をやつたまま先輩が話しかけてきた。

「蛍ってなんで光るんだらうね？」

先輩の問いかけに、無駄な雑学でなら誰にも負けない自信がある俺は

昔読んだ図鑑で得た知識を披露することにした。

「蛍はあれでコミュニケーションを取っているらしいですよ。」

自分はここにいてよって相手に伝えたり、危険を知らせたり、あとは……」

「その二匹も見ているとわかると思うんですが、光り方が違うじゃないですか。

雄と雌で出す光の色や形が違うらしいんで、多分あれは求愛してるんだと思います」  
説明し終えると、先輩がほわーっと感心したような声を出す。

それから俺をまじまじと見てくる。

「……え、なんですか」

あんまり見られるので聞いてみると、先輩はにぱつと微笑んで口を開く。

「比企谷くんって、やっぱり物知りだね！

それで邪魔しちや悪いと思つて、そつとしてあげようつていったのかな？」

人が口にする「物知り」という言葉は大概「知つたかすんな、ボケ！」という意味だが

先輩のような人が口にすると素直に受け取れる。

だが素直に受け取ると人に褒められた事が少ない殆どない俺はどういう反応をしていいのか

わからず困つてしまう。そうして困ると大体挙動が不審になる。

「い、いや、も、物知りとかじゃないでしゅよ。じよ、常識つていうか、その……」

「えくじやあ、知らなかった私は常識外れつてことかな」比企谷くん？」

俺の言葉に、先輩はぶくつと頬を膨らませていうとジト目で睨んできた。

まあ口元はにんまりと微笑んでいるので冗談なのはわかるのだが。それでも慌てて言い訳すると先輩はくすくすと可笑しそうに笑う。

その稚い姿を見ると、胸の奥にある今はまだ名前のない気持ちに名前を付けたくなくなってしまう。

そうして名づけてしまえば今までそうだったように、自分が傷ついてしまうだろうと思ひ

頭を振ってその想いを紛らわせる。

「一生懸命、誰かと何かと繋がりたいと思うのはそれがなんであれ素敵なことだと思ひんです。

だからなるべくそつとしておいてあげたいなつて」

言うのと、先輩は呆けた表情でばかり瞬きをしながらこつちを見ていた。

カツコつけすぎたかしら……そう思つて不安になっていると、

先輩は身を乗り出して興味深げに尋ねてきた。

「比企谷くんにも、そういう人いるのかな？ 例えばの話、一色さんとか」

「なんでそこで一色がでてくるんですか……。本当にあいつとはそういう関係じゃないですよ」

「じゃあ、雪ノ下さんや由比ヶ浜さんは？ どっちもすごく綺麗で可愛いじゃない？」

「あの二人とも、そういう関係にはならないですよ。

なりようがないというか。その、と、友達ですし」

誰かのことを自分の友達だと口にするのは、慣れていないのもあるがどうにも気恥ずかしい。

そして先輩にこれ以上追求されないうよう、攻撃こそ最大の防御なのだよ！ とばかりに

こちらから攻めるスタイルでいくことにした。

「めぐり先輩こそ、そういう相手はいるんですか？」

まあ先輩の場合、先輩とそうなりたいっていう輩のほうが多そうですけど」

茶化すようにいうと、先輩は照れたように両手で頬を挟み俯く。

「そ、そんなにモテないよ、私」

などと、ごによごによ、眩く先輩の姿は、俺のなかにいる野獣を目覚めさせてしまう。そんなにつてことは、それなりにはモテてることですよね？

まあめぐり先輩とつても綺麗ですし、周りの男どもがほつとかないでしょうしね！

告白とかも一杯されたんじゃないですか？ どうですか？ されましたよね？」

さらに茶化すようにいうと、先輩は恥ずかしくなったのか「ううっ」と唸ると

顔を両手で覆って隠してしまう。

そして嫌々するように首を小さく振るので、俺は自分のこなした仕事の出来栄に満足の吐息を漏らしてしまう。

くう、堪りませんな！ これだよこれ 恥じらいっていうの？ こういうの大事

！

そんな最低なことをして最高の気分していると、先輩が指と指の隙間からこちらを睨んでいることに気づき慌てて目を逸らす。

どうやら俺は先輩のなかの野獣を目覚めさせてしまったらしい。

怖い、怖すぎる。死ぬ死んでしまう。

でもですね。先に言ってきたのは先輩だと思っただけですよ、俺

「比企谷くんは、やつぱり意地悪だ」

先輩は拗ねたように言う、ぷくつと頬を膨らませる。

すいませんと微笑み混じりで謝ると、先輩も仕方ないなうといつてニコニコと笑ってくれる。

ふんわりした空気が漂い、その効果範囲内にいた俺は危うく天に召されそうになつてしまう。

「めぐり先輩。ほんとすいません。その、楽しくって、つい」

「比企谷くんも楽し？」

比企谷くんも、か。じゃあ先輩も楽しいと思つてくれるんだろうか。もしそうなら、俺は嬉しい。

「はい。今日は誘つてもらえて本当に良かったです」

「なら、良かった」

先輩は言うのと、むふーつと得意げに胸を張る。

そんな先輩の姿を見ながら、ほんと来てよかった。そう思っていると先輩は何かを思い出したように「あつ」と声をあげ、ぱしつと手を叩く。

「そうだ、比企谷くん！ お腹すいてない？」

「そうですね、少し。めぐり先輩、お腹すいてるんですか？」

「うん、ちよこつと。でね、えーつと、お夜食というかお弁当？ つくつてきたんだけど、

良かったら、どうかな？」

お弁当だと……。

これが一色なら見返りになにを要求されるかわかったもんじやないから警戒心が沸き起こるが

めぐり先輩なら安心して感謝する気持ちになれる。

「えつと、その、いただきたいです」

答えると、先輩は嬉しそうに頷いて脇にあつた風呂敷包みを膝に乗せ包みを解いてい

く。

「比企谷くん。ほうじ茶もあるから良かったら飲んでね。その、あつたかいやつなんだけど」

先輩は言うど、魔法瓶から焙じ茶を器に注ぎてきぱきとお弁当を広げていく。

竹で作った二段重ねのお弁当箱には、おにぎりや唐揚げに卵焼き、ミニハンバーグなどどが

所狭しと詰められている。そしてもちろん小さいながらもプチトマトが二つ。

二つあるということは、俺も食べなければならぬんだらうか……

そう思つて嬉しい半面ちよつとげんなりしていると、先輩がふんふんと鼻歌交じりに口を開く。

「比企谷くん。私、トマト苦手だから、ふたつとも食べてね！」

ちよつと待つてくさいよ、苦手ならなぜ入れた！と思つたが、とても口には出せない。

俺は紳士なのだ。なので紳士らしい受け答えをすることにした。

「めぐり先輩、任せてください。俺、トマト大好きですから！」

むしろあれですよ。二個じゃ足りないくらいです」

どうしても引きつてしまふ顔をなんとか笑顔にしてそう言うど、先輩はにぱつと笑



う。

「そつかり、比企谷くん、トマト大好きなんだね。じゃあ次は、もつと入れてくるね！」  
しくった！ 墓穴掘った……。と思いつつも、気になる言葉が出たので尋ねてみる。

「あの、先輩。次もあるんですか？」

恐る恐る尋ねると、先輩はきよとんとした顔で尋ね返してきた。

「ないの？」

「えっ……。どうなんでしょう……」

なんと答えれば良いのかわからず曖昧な答えを返すと、

先輩はしょんぼりした様子で俯いてしまう。

そんな先輩を見て、なにか言わなければと思いつつも何も浮かばず口籠る。

「ないんだ……」

何も言わない俺を見て先輩はぼしょつと呟くと、さらに下を向いてしまった。  
その姿を見て慌てて口を開く。

「い、いや、次ももちろんありますよ。次どころかその次もあるかもですし！」

言うのと、先輩はちろつと横目でこちらを見てくる。

「その次と次は？」

「えっ、えーつと……。はい、あります」

へどもどしつと答えると、先輩は楽しげにくすぐすと笑う。

ダメだ……この人に勝てる気がしない。まあ勝ちたいわけでもないんだけど。

「じゃあ、比企谷くん。食べよ」

言つて、先輩はおにぎりを手渡してくれる。受け取ったそれを眺めつつそれにしても、と考えてしまう。

これってなんか、桜花抄あのシーンみたいだな……。そう思っていると先輩がじつと俺の横顔を見ていること気づく。

「……あの、なんででしょう」

「んっ、なんかさ、桜花抄みたいだよ。二人でこうしていると」

「そ、そうですね。まあ、駅じゃないですけど」

「冬でもないしね」

「雪も降ってないですし」

「でも、月が綺麗だよ？」

言われて夜空を見上げる。月はここに来た時と同じ、綺麗な満月。

「……そうですね。それとストーブの明かりは無いですけど、

代わりに蛍が淡く照らしてくれますし」

「でも、あの二人のようにお付き合いはしてないよね」

「やつ、先輩。あの二人も付き合っただけはなかったですよ」

「あつ、そつかく、なんか早く結婚すればいいのにくって思うくらい仲良かったから勘違いしてたよ、えへへ」

照れくさそうにはにかみ笑いを浮かべる先輩を見て、俺の頬もつい緩んでしまう。

「まあ、両想いでしたしね。あの二人」

俺の言葉に、先輩は微笑んで頷くと首を傾げてこちらを見てくる。

そしてなにか思いつめたような、そんな表情を浮かべると、ぽしよつと呟く。

「じゃあ、えつとね、比企谷くん」

名前を呼ばれたので姿勢を直し先輩の方へ向き直る。

先輩の喉がこくりと鳴り、言葉の続きが耳に届く。

「その……、私たちは？」

## 月蝕抄

耳の届いた言葉に、どう答えればいいのか迷ってしまふ。迷うというより困ってしまふ。

自分の気持ちは良くわかる。でも先輩の気持ちはわからない。

もしかしてそんなのかな？　と思うことが無いわけではないが、

いつだって俺は勘違いをして想い違いをしてきたのだ。

そんな俺に今回はそうじゃないという自信などもてるはずもない。

ただそれでも、気持ちは伝えたいと思う。

自分のこの気持ちは勘違いでも想い違いでないことは十分に理解しているから。

そのせいで、先ほど約束した「次」が無くなってしまふのだとしても。

でも、どう伝えれば良いんだろう……

今までの自分がそうしてきたように直截的な言葉を先輩に対して口にするのは

なんとなくだが違うような気がする。

困り果て先輩のほうへこそつと視線を向けてみる

先輩は俯いて両の手をこねこねしながら俺の返事を待っている様子。

その姿にさらに悩んで、答えを探しに周囲へと目を配る。

もちろん都合よく答えが見つかるはずもなく、ため息に似た吐息を薄く吐いてしま  
う。

そんな俺の目に、蝨の淡い光が映る。ああ、これなら、そう思つて先輩に声をかける。  
「めぐり先輩。あの、私たちつて聞かれてもですね、

俺にはまだ先輩のことは良くわからないので、自分のことだけでいいですか？」

尋ねると、先輩は顔を上げこちらに向き直る。

だが、その視線はおどおどきよどきよどと揺れていて、目を合わせてはもらえない。

まあ目が合つたらそれはそれで気まずいので、そつちのほうが助かるといえば助かる  
けど。

そして自分と同じように緊張している様子の先輩を見て、少しほつとしてしまふ。

「う、うん。どちらかというとな、

その、比企谷くんのことを聞きたいから、良かったら聞かせて欲しいな」

先輩がそわそわしながら口にした言葉に頷きを返し、不安そうな先輩を安心させたい  
とおもひ

出来るだけ優しい声を出すよう努める。

「えつとですね、自分の言葉で上手く言えるか自信がないんで、昔の歌集からなんですけ

ど」

呼吸を整えどうしても上擦ってしまう声をなんとか落ち着かせる。

そしてゆっくりと丁寧に気持ちを込めて、言葉をひとつひとつ口にする。

「声にあらわれ鳴く虫よりも 言わで蛍の身を焦がす……ま、まあ、そんな感じですよ」

やっぱり上擦ってしまった声でもなんとか言い切ると、ほっと安堵めいた吐息を吐く。

昔読んだ本に載っていた古歌だから、さすがの先輩にも意味はわかるまい。

意味を尋ねられたら、家に帰ったら調べてみて下さいとか言えば良い。

今この場だけ上手くやり過ぎせれば上々だろう。などと考え心の中でニヤリとしていると

俺の声にじつと耳を澄ませていた先輩が口を開く。

「比企谷くん。それって都々逸だよね？」

げっ、先輩知ってるんだ。

そういやこの人もえらく読書家だったつけ。大失敗！ ど、どうしよう……

「でもさ、比企谷くん。それって確かこうじゃなかったつけ？」

先輩はというと、言葉を探すように目を瞑り、形のいい桜色の唇をそつと動かす。

「恋に焦がれて鳴く蝉よりも 鳴かぬ蛍が身を焦がす……だったような」

よくご存知で。感心しつつも即バレした気恥ずかしさで胸が一杯になってしまふ。それでもなんとか声を押し出す。

「それは、山家鳥虫歌のほうですね。俺のは松の葉に載っているその元歌のやつですよ」

「松の葉……。それってもしかして松葉と掛けて、寸志の意味も込めてるの？」

「な、なんでこの人そこまでわかるといふか気づくんだよ。女の勘？ こえーよ」

「まあ、その、はい……」。

えっと、でも、少ないとか広がりがないって意味じゃないですよ？

なんていうか、今の俺にできる精一杯のことというか……」

しどもどしつと答えると、そんな俺を見て先輩はふわつと微笑む。

ほのかに上気した頬と綻ぶような笑みを湛えた口元が目に映り、

照れくさくなつて思わず顔を背けてしまふ。

うう、緊張で心臓がバクバクいつてるう、八幡もうオウチ帰りたいたいよお……

心の中でそんな泣き言をブツクサ言っていると、先輩がそつと手を伸ばしてきた。

そしてまたもや俺の手を両の手でぎゅつと握り締める。

おいおい、だからそこにはスイッチがあつてだね……

「んー、やつ、なんかね。思っていたよりもずーっと、素敵なお返事をいただけちゃった

から

上手くかえせないなーって。う、うくん、困ったなあ、どうしよう……」

「やつ、そんな、大したことは言っていないですよ」

むしろバレないように古い和歌を使ったまでである。バレたけど……

「そんな事ないよ！　すごく嬉しいもん！」

先輩は弾んだ声で言うと、体をふりふり足をパタパタとしだすので

そんな嬉しそうな先輩を見ているだけで、俺まで嬉しくなってしまう。

自分の気持ちを伝えて嫌がられなかったということよりも、ずっと。

「その、喜んでもらえてよかったです」

言うと、先輩は俺の耳元に顔を寄せ内緒話みたいに小さな声で囁く。

「そういう意味で受け取って、良いんだよね？」

先輩の声が耳をくすぐる。こそばゆさと甘い香りのせいで固まってしまったが

すぐ傍にあるそのほんわかした笑顔は俺の答えを待っている。

「……それ以外で、受け取って欲しくないです」

まともに視線を合わせられず、明滅を繰り返す蛍を見やる。

ただ、先輩の嬉しそうな声は耳に届いた。

「ありがとう、比企谷くん」



× × ×

「じゃ、じゃあ、比企谷くん。食べよっか」

先輩のその一声で、中断していたお夜食タイムを再開することにした。

でもね、めぐりん。八幡、胸もお腹も一杯一杯なんですよ……

改めて受け取ったお握りを片手にそんな事を思っていたが、鼻腔をくすぐる食べ物匂いは

俺の胃袋を刺激して不躰な音を出させてしまう。

うう、恥ずかしい。これじゃまるで腹ペコキヤラじゃないか……

「比企谷くん。お腹減ってたの？」

先輩がくすくすと笑いながら口にした言葉に頷きを返しつつ

わざわざ用意してもらった夜食にお礼の言葉でもと思いい口を開く。

「めぐり先輩。すごく美味しそうです」

言うのと、ぺちんつとオデコを叩かれた。

なんでだよ！ と思いつつ、叩かれた箇所を手を伸ばそうとすると

先輩は叩いたその手でそのまま撫でてくれた。

「美味しそうじゃなく、美味しいんです」

「は、はい すいません」

オデコを撫でるその手は柔らかく優しいのに、目付きと口調はちよつと、かなり怖かった。

そんな慄いている俺を見て先輩は楽しそうに笑い、その笑顔を見て俺も微笑んでしまふ。

そうして、食事をとり会話を交わし時たま二人で月を見上げていると

先輩がちまつと俺の袖をひいてきた。

「比企谷くん。私も比企谷くんに、お返しの言葉を言いたいな」

眩やかれた先輩の言葉に、胸が締め付けられるほどの嬉しさを感じながら

「俺も聞きたいです」と返事を返す。

先輩は、うんつと頷いて少し考える素振りをする、なにか思いついたのだろうかにぱつと微笑んで口を開く。

「そうだなあ……じゃあ私は、漱石さんで！」

先輩は言う、顔を上げて月を見やる。

「比企谷くん。月がとっても綺麗ですね！」

「めぐり先輩。滅茶苦茶ベタすぎなんですけど……」

しらっとした目で先輩を見て言うと、  
「またもやぺちんつとオデコを叩かれた。」

「やりなおし」

「は、はい……」

先輩の言葉に、俺も月を見やる。

そしてゆっくりと言葉を紡ぐ。

「俺も、そう思っていたところですよ」

## 月蝕抄 後語り

「比企谷くん。トマト食べないの？ 好きなんですよ？」

「めぐり先輩。俺は大好きなものは最後に食べる主義なんです」

「シヨートケーキの苺を最後に食べる感じ？」

「そうですそうです。シヨートケーキを食べるときも、苺は最後に食べてますし」

「でも日曜日だし、一色さんが作ってきてくれたシヨートケーキの苺、最初に食べてたよね？」

「そ、そうでしたっけ？」

「うん」

「……………」

× × ×

そんな会話を二人で交わす初夏の夜。

曖昧な表現で、でも胸の奥にじんわりと届く言葉で、互いの気持ちを伝えあった俺と先輩は

楽しい夜食のときを過ごしていた。

先輩は料理は苦手と言っていたが、お弁当箱に詰められた唐揚げや卵焼き

ミニハンバーグやお握りはどれもこれも大変美味しい。

俺はその事をきちんと伝えたいと思いい声を出す

「先輩。料理は苦手と言ってましたけど、そんなこと全然ないですよ。

マジで全部美味しいです」

言うのと、先輩は照れくさそうに手をパタパタしだし、こそつとこちらを見て口を開く。

「そ、そうかな」

「そうですよ。ほんと美味しいです」

「ありがと、えへへ」

恥ずかしげに頬を掻く先輩を見て、もつと恥ずかしがらせなくなった俺は

さらに褒めることにした。

「いやほんと美味しいですって。先輩、これならすぐにでもお嫁にいきますよー！」

言うのと、先輩は俺の手に自分の手をそつと添え、とても小さな声でぼしょつと呟く。

「誰の？」

誰のでしょうね。うん、はい。

恥ずかしがらせようとした俺のほうが、なぜか恥ずかしくなるという結果になつてし

まった。

だが、へどもどしてる俺を見て先輩が楽しげに笑ってくれるのを見るとまあいいか、と思えてしまう。

その後も食は進み、あれほどあつたお弁当箱の中身も空になりかけた頃、先輩が声を出す。

「比企谷くん。あとはもう、トマトしかないよ」

「そのようですね……」

なんとかここまで躲してきたが、それしかないときさすがに躲しようがない。諦めてプチトマトをひとつ箸で掴み目線の高さまでもつてくる。

じつとトマトを見つめる俺を、同じようにじつと見つめる先輩の目が怖い。

食べますよ。食べればいいんでしょ……

覚悟を決め口に放り込みそのまま飲み込もうとすると、先輩から待ったがかかる。

「比企谷くん。よく噛まないダメだよ！」

勘弁してよ、めぐりん……

口にトマトを含んでいるため頷きで返事を返すと、仕方なくトマトに歯を立てる。

独特の青臭さが嫌なんだよなあ……と思いつつ咀嚼していると

それがまったく気に気づく。

あれ、なんだこのトマト、ちよつと甘いくらいだぞ。

「おいしい?」

先輩に尋ねられ領くと、先輩はにこばーと笑顔になる。

「それね、うちで作ったトマトなんだ!」

「先輩の家って農家なんですか?」

トマトを飲み込んでから聞いてみる。

「ううん、違うよ。家庭菜園っていうのかな?」

私がおね、種から植えて毎日お水あげて育てたんだよ!」

「おー、まさに手作りですね」

「うん!」

ちよつと得意げな先輩の姿に微笑まじさを感じつつ、疑問に思った事を尋ねてみた。

「でも先輩ってトマト苦手なんですよね?　なのに作るんですか?」

「お父さんとね、お母さんがね、トマト大好きなんだ。」

でもね、お仕事忙しくて菜園の作業ができないから私が代わりにやってるの」

「偉いじゃないですか、親思いですね」

「やつ、そんな……」

照れくさそうにもじもじしている先輩を見て、さつきはしくじったが今度は上手くいったと

ほくそ笑んでいると先輩がちまつと俺の袖を引いてきた。

「その、今度……、紹介するね」

「はい、是非。……………えっ!？」

おいおいマジかよ、親に紹介とかこれつてもうめぐりんルート一直線じゃねーか！  
いや他のルートがそもそももないんだけど。

でもなあ、先輩と結婚となると先輩に苦勞を掛けたくないから

俺、頑張って滅茶苦茶働きそうなんだよな。

これが一色なら滅茶苦茶働かされるまである。

先輩と結婚とか出来れば嬉しい限りだが、生き様を捨てるというのまあ。

そうすると迷惑かけても心が痛まない相手と結婚して養って貰うしかないのか。

そう考えると……………材木座か

まさかの材木座ルート解放に俺が働いていると、

「比企谷くん。トマトもうひとつあるよ」と先輩が告げてくる。

領いて、これならいくらでも食えるなと思いつつトマトを箸でつまんだとき、

ふと名案が思い浮かぶ。

笑顔の先輩は可愛い。照れてる先輩もすごく可愛い。

そしてきつと困ってる先輩の顔もとっても可愛いだろう。



その顔を見てみたい！ そう思った俺は先輩を困らせることにした。

「先輩。こんなに美味しいトマトを食べないなんてもつたいないですよ！」

言うのと、先輩はうつと呻いて困った表情を顔に浮かべる。やっぱかわええ……

なのでもっと困らせることにした。

「そもそもですよ。食べ物で粗末にしちやダメじゃないですか。

先輩のような人がそんなことするなんて、俺、少しショックです」

正論は人を責めるためにある。そんな俺の言葉に先輩はさらに困った顔になったので

その表情を見て俺は胸が膨らむほどの満足感を覚える。

それでも一応「まあ、先輩の分は俺が食べるから大丈夫です」と言おうとすると

先輩はこちらへ身を乗り出しおずおずとした様子で声を出す。

「じゃあ、食べる……」

先輩は言うのと、薄く目を瞑り口を小さく開ける。

えっ、俺が食べさせるの、これ？

まさかの逆あーん状態。先輩を困らせようとしたら、なぜか俺が困ったことに。

少し戸惑いを覚えたが、目の前で無防備に目を瞑りその柔らかそうな唇を晒している

先輩に

別のことをしてしまいいつになつたので、その口元にゆっくりと丁寧に箸を運ぶ。

トマトを口に含む際、先輩の唇は妙に艶かしく、それを見た俺は慌てて目を逸らす。

「比企谷くん。ちゃんと食べたよ」

「え、えらいですよ……」

耳に届いた先輩の声にへどもどしつ返事を返すと、疲れた感じの吐息を吐いてしまふ。

今のはちよつとやばかつたな。理性も自制も先輩を前にしたらどっかにいつちまいそうさ。

食後のお茶で喉を潤しそんな事を考えていると

ここへ来てから随分時間が経っていることに気づく。

自分は良いが先輩は、と思い、一声かけることにした。

「先輩。もう大分遅い時間ですけど、そろそろ帰らなくても平気なんですか？」

言うのと、先輩はこてつと俺の肩に、そのつるりとした可愛いオデコをくつつけてきた。えつ、なに、なんで！ と慌ててしまふが、下手に動く先輩がつるつと滑つて床にごちんと頭をぶつけてしまふかもしれない。

そんな先輩も見てみたいと思いつつも、それもどうかと思ひ直して動けずにいると先輩は俺の肩をオデコでぐりぐりしながらぼしょつと眩く。

「まだ帰りたくない」

こんなことを言われて、それでも帰ろうなどといえる輩がこの世にいるのだろうか？  
もちろん言えない俺は狼狽えつつも声を出す。

「や、その、先輩が平気ならいいんですけど……」

俺の言葉に、先輩は顔を上げすぐ間近でほわつとした笑顔を見せてくれる。

「比企谷くん、今夜は寝かさないよ！」

なかなかワイルドなことを先輩は言うど、くすつと悪戯めいた微笑を浮かべた。

## 二人で大人に

「ひ、比企谷くーん……つらいよお」

「先輩、我慢してください。もうちよつとですから」

「でも……」

「そもそもこうなったのも、元はといえば先輩がですね……」

「そーだけどさく」

「そう思うなら我慢です。辛いでしようけど、あと半分ですから」

「比企谷くんは男の子だからいいけどさ、私は女の子なんだよ？」

「それはまあ、分かりますけどね。」

でも、仕方ないじゃないですか。俺だってこんなの、その、初めてなんですから」

「それに……、ちよつと痛いし……」

「やつ、すいません。力入れすぎましたね。でもさつき先輩が、もつと強くって」

「いったつつけ？」

「言いましたよ。もう忘れちゃったんですか？」

「記憶にないな」

「どこの政治家ですか。そういうならもうしませんよ？」

「比企谷くんは、やっぱり意地悪だ」

「ちよ、ちよつと待っててくださいよ。先輩が俺にこうさせてるんですよ？」

「む〜」

「む〜じゃありません」

「ぶ〜」

「それは可愛いから、ありかもです」

「そっかな、えへへ」

× × ×

聞く人の心の有り様でどうとでも取れそうな、そんな会話を交わしながら俺は先輩の手を引いてゆっくりと御宮の石段を下りる。

月明かりも届かない闇夜の中、階段を降りることなど初めての俺は

足元を確かめながら慎重によちよちと歩を進める。

最初は、ここから見れる日の出はすごく綺麗だからそれを見てから帰ろうね。

そう先輩がいうので、今日は終業式だけだからこのまま寝なくてもいいやと思

俺もそうするつもりでいたのだ。

だがしかし、今夜は寝かさないぞ！ などと吠えていたワイルドめぐりんは何処へやら

食事を済ませ五分も経たないうちに先輩は眠気でうとうとしだす。

「だ、大丈夫。大丈夫だから！」

そんな事を全然大丈夫じゃないフラフラした様子で言い張る先輩に帰りましょうと言うが

先輩はやだやだどごねるのでどうしようかと困ってしまふ。

すると、困っている俺を見て先輩はこそつと顔を背けつつ自分の手をこちらに差し出すと

「……じゃあ、手を繋いでくれるなら帰る」と拗ねたような声でいう。

そんな先輩を見て微笑ましきを感じつつ、仕方なさそうに、でも本当は嬉しい気持ちで

その手を取ると、笑顔になった先輩と二人、家路へと着く。

そんなこんなで石段を半分近くまで下りてくると、先輩が少し疲れたというので休憩がてらに二人で石段に腰を下ろすことにした。

狭い石段では体を精一杯縮こませても互の体がどうしても触れ合ってしまう。

触れ合うたび伝わってくるそのぬくもりに心臓の鼓動が速くなるのを感じていると先輩がそわそわした様子で口を開く。

「あの、あのね。比企谷くんはさ、

私のその、どういふところがこう、良かったのかな？」

問われて考える。

ふむ、一杯あるな。あまりにもありすぎて短時間で言い表すことなど不可能と思われる。

「先輩。ちよつと多いんで、きちんと説明するとすね

多分五時間くらい掛かりますけど、いいですか？」

「そんなに！」

「むしろ五時間で説明できるか不安になるレベルです。

まあ今日は先輩も眠そうなんで、また今度時間があるときにじっくり話しますよ。

でもそうですね……一つだけ言えば、先輩が嬉しそうだと俺も嬉しいから、ですかね」

「そ、そうなんだ。えつと、ありがとう、比企谷くん。その、嬉しいです」

「嬉しいっていつてもらえて嬉しいです」

微笑み混じりで口にした俺の言葉に、先輩は照れくさそうにもじもじとします。

そんな先輩を見ていると胸の奥がほかほかしてくる。

そして俺は今の会話で気になることができたので尋ねてみることにした。

「その、あのですね。先輩はなんというか、俺のどこが良かったんでしょかね？」

へどもどして尋ねると、先輩は俺にずっとがぶり寄ってきた。

「ふふふん、知りたい？」

「やつ、まあ、はい」

「一杯あるよ！ えーつとね、まず優しいでしょ！」

おつ、分かってるね、めぐりん！

俺のことはこれから、バファリンくんとか呼んでもいいんだぜ？

などと思つたのも束の間。先輩は小難しい表情を浮かべるとぼしよつと呟く。

「あつ、でも同じくらい、意地が悪いよね……」

「……………」

またかよ！ と思つて微妙な表情になつた俺を見て、先輩が慌てたような口早で言葉を続ける。

「や、ご、ごめんね。えー、えつと、ほら、頭も良いし！ あ、でも、使い方が……」

はつ、ち、ちがくつて、えつ、えーと、顔だつて良いし！ あ、でも、目付きが……」

「……………先輩、もういいですよ」

この人さ、まったくなんでこうも俺の心をベキベキ折ってくるのかね。



他の誰に同じこといわれても気にも止めないけど、先輩にいわれると心に響くんだよなあ。

普通、心に響くって良い事な感じで使われるはずだと思うんだよね、八幡的には。

だからね、こういう響き方はノーサンキューなんだよお。

ぼかぼかがどつかいっちまったじゃねーか！

そんな気持ちで少々不貞腐れた俺を見て、先輩は両の手をこねこねしながら申し訳なさそうに謝ってくる。

そうも素直に謝られるといつまでも拗ねてる訳にもいかず、気にしてないですよ、と答えざるえない。まあホントのことだしね。

そう思っていると、先輩はほわっとした笑みを浮かべて俺の顔を覗き込んでくる。

「あのね。私、比企谷くんのことこういうところも、その、良いと思うの」

「いや、あんまり良くないと思いますけど……」

まあ自分でそう思うなら直せよって話なんですけどね」

「そんなことないよ。私だって、その、ダメなところ多いし」

一言多いとこですか？ わかります。まあ俺は、みつつもよつつも多いけど。

くくく、俺の勝ちだな、めぐりん！ などと謎の勝利感に酔っていると

俺の知らない俺情報を先輩が口にする。

「だからその、私がね、比企谷くんの彼女でよいのかなくて」  
彼女？ 先輩が？ 俺の？

もし先輩が俺の彼女になってくれるのなら嬉しい限りではもちろんある。

ただ気持ちは互いに伝え合いはしたが、それでじゃあ付き合おうか、などという話は俺の記憶にある限りまったく無かったように思う。

なので先輩の言葉は嬉しい反面、戸惑いを覚えてしまう。

わかりやすく例えれば、家に帰って自分の部屋に入ったらバックが置いてあり開けてみたら一億円入っていた。そんな感じだろうか。

なのできちんと確認しようと思った俺は、恐る恐る先輩に声をかける。

「あの、先輩。あのですね。俺たち付き合ってるんですか？」

「えっ、違うの!？」

「魔王が蘇った」。そんなことを村長に告げられた村人のように

驚きの表情を浮かべた先輩を見て、俺の方まで驚いてしまう。

先輩はそのまま固まってしまったので、慌てて話しを続ける。

「や、あの、確かにお互い気持ちは伝えあつたんですけど、それでじゃあ付き合おうとかその手の話はなかったような……」

言うのと、オデコをぺちんつと叩かれた。

またまたまたかよ！　と思った俺は、先輩に苦情を言うことにした。

「ちよつと、めぐり先輩。」

太鼓じゃないんですからそんな気軽に俺のおデコをペシペシ叩かないでくださいよ  
お」

足ならOK、むしろ歓迎。そんな言葉を飲み込んで切なげに言うと、先輩は御宮の軒  
下で

そうしたように、こつと俺の肩におデコを当てめぐりしながら声を出す。

「叩きたいんじゃないよ、触りたいんだもん。こんなこと、好きでもない人にするわけな  
いよ。」

だから、そんな意地悪いわな……」

先輩の言葉に胸が詰まる。

いつまでもどこまでも足踏みしている俺の方へ、先輩の方から踏み込んできてくれて  
いるのだ。

なのにこのまま何もせず何もいわないのは、男が廢る。

そう思った俺はゆっくりと先輩の背中に手を回し、その細い体をそつと引き寄せ抱き  
しめる。

俺の手の中で先輩は緊張しているのか体を固くしてほんの少し震えていた。

そんな先輩に胸が苦しくなるほどの愛おしきを感じながら、ゆっくりと声を出す。「めぐりさん。ずっと大事にしますんで、俺と付き合ってもらえませんか？」

言って暫く時が経つ。

先輩が何も言わないので、まさかこの流れでも振られてしまうのか、俺。と不安になりかけた頃。

先輩はおずおずとした様子で俺の首に手を回しそつと頬を寄せてきた。

自分の頬に触れた先輩の頬はとても柔らかく、その感触に鼓動が跳ねる。

「八幡くん。一緒に……、大人になっていこうね」

耳元で囁かれた先輩の言葉に頷くと、先輩を抱く自分の手に少しだけ力を込めた。

## 近すぎて絶望的な距離

俺は今、浜辺で海を眺めている。何故かって？ 恋をすると人は詩人になるのだよ！ 詩人といえど海か山へ行き、物思いや詩想に耽るもの。

本当は最近読んだ小説に俺のようなボツチがキャンプに興味を持ち山に登る話が あったので

山の方へ行きたかった。でもしかし、遠いので近場の浜辺に足を運んだのだ。

膝を抱え寄せては返す茫漠とした水の動きを眺めていると、先輩と先ほど交わしたやり取りが思い返される。

月の綺麗な夜遅く御宮へ続く石段のその途中で先輩を抱きしめた俺は 先輩が口にした「一緒に大人になっていこう」を実行することにした。

ここはやはりあれか…… と思い、先輩の頬にそつと手を添える。

そしてその形のいい桜色の唇に自分の唇を重ねようと近づける。するとまたもやオデコをべちんつと叩かれた。

先輩が大人になっていこうって言ったんじゃないですかー！ あれは嘘なの？ と 嘆きつつ

今回は先輩が撫でてくれないので自分で撫でてしていると、先輩は浴衣の袖で口元を上品に隠し

「そういうのはまだダメだよ」と言ってくる。

残念無念また来年。

そんな気持ちでへこんでいる俺を見て、先輩は困ったような苦笑を浮かべると

そつと頬を寄せて俺の頬に合わせてくれる。

そして、「今度ね……」と耳元で優しく囁いてくれた。

今度するなら今でもいいじゃないですか……と泣きたい気持ちをグツと堪えて頷

くと

先輩と二人、ゆつくりと石段の残りを降りる。

そうして先輩を家に送り届けた後そのまま帰っても良かったのだが、どうにも気持ち

が

高ぶってしまい、それで先輩の家から五分ほど自転車を漕いでここまで来たのだ。

月明かりに照らされた浜辺をてくてくと歩き、座り心地がよさげな場所に腰を下ろす

と

詩人らしく物思いに耽る。

もうちよつと駄々をこねれば良かったかしら……

俺のへこんだ姿を見ただけで先輩は頬をすり寄せてくれたのだ。少し涙でも見せれば頬に唇を当ててくれたりしたかもしれない。

プライドを完全に捨て、おもちゃ売り場でたまに見る子供のように「やだーやだー」と叫びつつ

手足をジタバタでもさせれば、唇を重ねてくれたかもしれないのだ。

俺にもっと勇気があれば……

そんな口惜しさで悶絶しながらも、そこまでプライドを捨てた俺を見て

愛想を尽かした先輩に俺が捨てられるかもしれない。

それに気付き、あれで良かったかとも思い直す。

そうして俺は先輩に触れてもらえた箇所を今度は自分で触れそのときの感触を思い出すと

低い唸り声をあげながら砂の上でゴロゴロします。

そんなことを二時間ばかりしていると、来た時は日の出前というのもあって浜辺には人っ子一人いなかったが、日が昇るとすぐに犬の散歩をする人たちが姿を現す。

千葉の朝は早いのだ。

そのおかげで身悶えている俺を見た犬が吠えること吠えること。

飼い主のおじさんおばさんが「こ、こら！ やめなさい」と必死に犬を抑えるが

犬たちはやめるどころか、さらに吠えまくる。

居た堪れなくなった俺は仕方なく家へと帰ったのだった。

× × ×

家に着いてリビングに入ると、六時前だというのに小町はキッチンで朝ご飯の用意をしていた。

小町は高校に入学してからこっち、仕事で忙しい両親のために家事全般を一人でこなしている。

立派な子。そんな小町の朝は早いのだ。俺？ いちいち聞くなよそんなこと。

がたりと椅子を引くと、お玉でお鍋をかき回していた小町がぱつとこちらに顔を向ける。

「あ、お兄ちゃん、おかえり〜」

「おお、ただいま」

答えると、小町はお玉を流し台に置いてずずいと俺ににじり寄ってきた。

「お兄ちゃん。めぐりさんとは会えたの?」

「おう、会えたぞ。……えっ?」



なんでこの子知ってるの……。CIAとかKGBとかその手の機関のメンバーなの？

そうなると俺は国家から監視されるレベルの逸材なのか！ まいったな、ガハハハ！ などと思う暇もなく小町がネタばらししてくれた。

夕べ先輩の誘いを受け家を出た俺だが慌てていたため携帯を家に置き忘れていた。

そして待ち合わせ場所を御宮としか決めていなかったことに気づいた先輩が

御宮の境内で待っていると伝えるため何度も連絡をくれたらしい。

何度着信音が鳴っても俺が電話に出ないことに隣の部屋で勉強をしていた小町がいらいらつき

文句を言い俺の部屋に入ると、そこへちようど先輩から連絡がきたので対応したとのこと。

「それでね、お兄ちゃん。めぐりさんが『夜分遅くにお兄さんお借りしてごめんね』って言うからさ。『あげるの、よかったら貰ってください』って言ったんだよ。小町は」

「お、おう」

俺の知らないところで、俺がプレゼントされていた。

そうやって俺をいらないもの扱いするの止めてくれませんかね……

「そしたらね、めぐりさんが『そんなこというと、本当にもらっちゃうよ？』って言うから

さ

『えっ!』って小町が言ったら、めぐりさん『今日はそのつもりで呼んでるし』って! それで小町も気になちやってき、寝ないでお兄ちゃんを待っていた訳さ」  
そ、そうだったのか……。

そう考えると俺はまんまとめぐりんトラップにはまった哀れな獲物。  
文字通り飛んで火にいる夏の虫だったわけだ。

めぐりん……恐ろしい子

「で、どうだったの、お兄ちゃん?」

問われて口籠もる。

妹に自分の恋愛事情を知られるのは年頃の男子としては些か気恥ずかしいからだ。  
だがここまで事情がバレているならまあ構わないかとも思い、小町に今日の出来事を  
言いづらい部分を省いて語って聞かせることにした。

話を聞き終えた小町は感心したようにほーと声を出す。

「じゃあ、お兄ちゃんめぐりさんと正式にお付き合いすることになったんだね?」

「まあ、うん。そういうことになるな」

「そっかー! 小町は嬉しいよ。あのお兄ちゃんがねえ」

小町はしみじみ言うが、言葉とは裏腹になにやら浮かない表情を浮かべていた。

そんな小町に訝しげな視線を向けると、俺の視線に気づいた小町が困ったような顔で口を開く。

「そういえばね、お兄ちゃんに連絡つかないからって

小町の携帯にいろは先輩から電話がきたんだけど」

一色から？　なんだろう。

視線で先を促すと小町はお茶を一口呑んでから先を続ける。

「えつとね、勉強会の合宿のことらしいんだけど」

合宿？　初耳だな……

頭を捻っている俺を見て小町は「お兄ちゃんも知らないの？」と聞いてきた。

頷くと「細かいことは今日お兄ちゃんに直接話すっていつてたよ」とのこと。

合宿ねえ……、と思いつつ着替えるのに部屋へと向かう俺の背中に小町から声がかかる。

「ねえ、お兄ちゃん。ちょっと聞いていい？」

「なんだ？」

尋ねてきたのは小町なのだが、当の小町はなにやら言いづらそうにもじもじしている。

「小町。どうしたんだ？」

「んー、や、なんかね。その、お兄ちゃんはさ、いろは先輩のことどう思ってるの?」「どう思ってるって、どういう意味でだ?」

「まあなんとというか、女の子としてみて」

問われて少し考える。暫くして考えがまとまったので、ひとつひとつ口にする。

「まあ顔は可愛いよな」

「うん」

「中身も可愛いちゃ可愛いし」

「うんうん」

「でもまあ、あれだな。なんつーか小町ポジションなんだよ、一色は」

俺の言葉に、小町は自分を指差して首を捻っていた。

上手く伝わらなかったか、と思い、言葉が続ける。

「手間のかかる年下の女の子っていうのかな。」

困っているなら手を貸したり世話をするのもやぶさかではないというか」

「でも、手間かかったり世話してるの、どっちかという小町だよな?」

「ですね……」

速攻で論破された。まあ確かに小町にはいつもお世話になっているので反論できない。

「それと、小町と一緒にってことは、大好きってことだよな？」

確かに俺は小町が大好きだが当の本人からここまであけすけに言われるとどんな顔をしていいのか困ってしまう。

そんな俺を見て小町は楽しそうに笑うと、少しだけ声の色を落として呟く。

「そっかー、いろは先輩、小町と同じなのかあ……」

じゃああれだねえ……、女の子としては近すぎて絶望的な距離だね」

「近いのに絶望的なのか？」

「近いじゃなく、近すぎるからだよ」

それってどういう意味だ？ と聞き返そうとすると、そこへ親父たちがリビングに入ってきた。

俺の姿を見た母親が呆れた感じで口を開く。

「八幡。あなた、夕べはどこにいったの？」

「や、ちよつと、ほら、あれで」

「おいおい八幡。こんなに早く帰ってきたら、家の鍵を交換する時間もねーじゃねーか」  
こちらはもちろん親父の言葉。

このあと親父と口喧嘩しながら朝食を食べ、小町と二人学校へと向かい昇降口で別れ、教室で自分の席に着いたとき。

小町に言葉の意味を聞きそびれた事に気づく。

× × ×

終業式を終え迎えた放課後。

言い忘れていた合宿のことを話したいと一色からメールがきたので待ち合わせ場所として指定された俺のベストプレイスへと向かう。

てつてこ足を運んでいると、途中、葉山と戸部に出会い話しかけられる。

「おつ、ヒキタニくん！ この前約束した勉強一緒にするあれ決まったからよろしく！」

「えつ、お、おう、えつ？」

戸部のよくわからんよろしくに戸惑っていると、葉山が苦笑しつつ口を開く。

「ちよつと遠いけど良いところだから、比企谷も気にいると思うよ。」

まあ詳しいことはいろはに聞いてくれ」

葉山は言うど、俺の肩を軽く叩いてよろしくと連呼する戸部と去ってしまった。

自分の知らないところだなにやら不吉なことが進行していることに怯えつつベストプレイスに到着すると、一色はすでにベンチに座って俺を待っていた。

「あつ、せんぱーい。すいません、わざわざ来てもらっちゃって」

「や、それはいいんだけど……。ところでさ、合宿つてなに？」

「そのことなんですけど、ちよつと長くなりそうなんですよね、話」

一色は言うと、お腹を撫でて困ったような表情を浮かべる。

「そういうや今日は午前中で上がったから、ちようど昼時か。」

「一色。それじゃ飯でも食いながら話すか。奢るからなんでも好きなのいってみ」

「えっ、自分の分は自分で出しますよ？」

「いや、別にかまわん。こう、あれだ、なんつーか、お礼の気持ちも込めてっていうの？」

「なんか私、しましたっけ？　　そういう先輩。今日はなんだか楽しそうですね」

「そ、そうか？」

「はい。なんか楽しいっていうか、嬉しそうというか」

顔に出たか。まあ確かにちよつと気持ちが浮ついているところはあるな、うん。

「まあ、あれだ。一色の言葉で俺もちよつと踏み出せたことがあつてな。」

それで色々嬉しいことがあつたから、そのお礼つてやつだ」

言うのと、一色はぼけつとした表情で俺を見ていた。

そして頬を薄く染めると俯いて小さく呟く。

「え、えーと、先輩のなにかわかりませんが、お役に立てたなら嬉しいです」

「おう、すげえ助かったぞ。だから好きなの食つてくれ」

「そんなこと言うのと、回らないお寿司が食べたいとかいちゃいますよ？」

一色は顔をあげ悪戯っぽい表情でそんなことを言うと、嬉しそうに微笑んだ。

## 第二章 番外編。彼女たちの夜

### 小町ちゃんとの電話

先輩の家で秒速を観た日曜日の夜。千葉でひいろと合流した私は二人で家へと帰る。

そして家に着くとひいろの部屋に押し掛けて、仲良し姉弟トークという名の尋問を開始する。

「ひいろ、ちよつとそこに座りなさい」

「やつ、いろはお姉ちゃん。僕、友ちゃんにメールしたいんだけど……」

「話が終わったらね」

「え、ええ……」

「話してくれたら、お姉ちゃんの分のアイス食べていいから」

「それならまあ、話すけど……」

我が弟ながらこんなにも簡単に物に釣られるとは嘆かわしい。

まあ私も物に釣られやすいから人のこと言えないんだけど。

そんな事を思いつつ、ひいろから私と別れた後の先輩と城廻先輩のことを尋ねる。

そして聞き捨てならない言葉を耳にする。



「……じゃ、じゃあ、キスしてたの、あの二人」

「んー、僕は暗くてよく見てないんだけど……」

駅へ向かって歩いていたら『あつ、あの二人、チューしてる!』って友ちゃんが言ったんだ。

それで見たら、はちまんとめぐりお姉さんが顔を寄せ合ってたから、多分……」

一体いつの間にあの二人がそんな関係に……

まあ本の話は仲良さげにしているのを何度も見たけど、

それでもそこまで距離が詰まってるようには見えなかったのになあ……

「いろはお姉ちゃん?」

「あつ、ひろ、ありがとうね。もういいわよ」

「うん。……その、大丈夫?」

ひろの言葉に、私は自分が思ってた以上に動揺していたらしい。

心配げに私を見ているひろの頭をひと撫でして、なんでもないよと言って安心させる

自分の部屋に戻る。

ベットに横になり、目を閉じて考える。

これはちよつと確かめないといけないなあ。

先輩本人に聞いても多分はぐらかされそうだし、そうすると……

考えが決まりベツトから起き上がると携帯を手に取る。

えーつと、こ、こ、こ、あつた小町ちゃんの電話番号。

時間もまだ早いしメールだと返事を待つ時間が面倒だから電話で直接聞いちやえ。

そう思つて電話をかける。

『はーい、もしもし、小町です』

『あつ、小町ちゃん？ ごめんね、夜遅くに』

『いえいえ、全然平気ですよ。それで、今日はどういった御用件で？』

なんか新人サラリーマンみたいだな、この子。

思いつつ、単刀直入に聞いてみる。

『えつとね、その、小町ちゃんのお兄さんのことなんだけど……』

『もしや兄が何か失礼なことでもしてかしましたか？』

『やつ、そういう訳ではないんだけどね。』

その、お兄さんつてさ、城廻先輩と、なに、こう、付き合つてたりするのかな？』

『そうだったらいいんですけどねえ……』

いやいや良くないから。

でもやつぱり、そういう関係つて訳じゃないのかな、これは。

単に先輩が小町ちゃんに話してないって可能性もあるけど。もうちよつと探りを入れてみるか。

『でもさ、小町ちゃん。あの二人、なんか仲良さげじゃない?』

『ん、どうなんでしょうねえ。』

以前のことでなんですけど、結衣さんと結構いい感じだったんです。

それでも結局、友達止まりでしたし……』

あーやつぱり、結衣先輩、先輩のこと……

雪ノ下先輩はちよつとよくわからないけど、結衣先輩は多分そうだろうなって思うことと

結構あったしなあ。

ふむう。これはちよつと小町ちゃんを巻き込んで、

上手くいくよう手を貸してもらった方が良いかもしれないなあ。

でもその前に、小町ちゃんから見ての良い感じってどういうのだろう。聞いてみようか。

『んと、良い感じって例えばそのどんな感じ?』

『えつとですね。結衣さんの家の犬、サブレっていうんですけど預かったことがあったんですよ。』

それですね、そのお礼についてことで結衣さんに夏祭り一緒に行こうって誘って頂いたんで

兄だけ送りでしたんです。なんとというか、小町居たら邪魔じゃないですか？』  
確かに。妹同伴デートとかちよつとね。

まあ小町ちゃんなら場を盛り上げてくれそうだし居てもいいかもだけど。

それにしても、花火デートまでしてるとは。

私も一度、先輩と二人で出掛けただけ、騙して連れ出したようなもんだしなあ。

『あのう、いろは先輩？』

『やつ、ごめんごめん。聞いてるよ、続けて』

『はい。えーつと他にも雪乃さんの誕生日プレゼント買いにいったりとか

色々二人で出掛ける機会があったんですけどね。

なんかそれでもそこまではいかなかったみたいで……』

残念そうに話す小町ちゃんの声に耳を傾けながら、思ったことを尋ねてみる。

『えつとね、お兄さんはさ、彼女とか欲しいと思ってるのか、そういうのあるのかな？』

『いや、どうなんでしょうねえ。中学の頃は結構女の子にアタックしてたんですけどね。』

ガードされまくりで、その反動であんな風に』

なるほど、振られすぎてどうせ俺なんか……状態になっちゃったのかな。

そういう事なら、癒しの女神こと、この一色いろはさんが優しく手を差し伸べれば

……

『ただですね。多分兄は彼女とかそういうのよりも、話し合える相手っていうのを  
欲しがってるのかなって思うんですよ、小町的には』

『友達とかそういうのかな？』

『ん〜、それもちよつと違う気がするんですけど……。』

でもどうして兄のことなんかそんなに聞いてくるんですか？』

むむ、やっぱり聞かれるか。まあ仕方ないよね。

ここは覚悟を決めて打ち明けて、小町ちゃんに協力してもらえよう頼んでみよう。

正直自分の力だけでどうにかできるように思えないし、あの人。

それにしても、本人より先にその妹に自分の気持ちを伝えることになるなんて

情けないやら恥ずかしいやら。

息をゆっくり吸い込んでゆっくりと吐く。

気持ちを落ち着かせ上擦りそんな声を抑えながら何とか言葉を紡ぐ。

『あのね、小町ちゃん。実は、私ね——』

× × ×

『大体こんな感じですかね』

『そかあゝ、ありがとうね。色々と聞かせてもらえて助かちやったよ』

『いえいえゝ、あんな兄を欲しがってくれるいろは先輩の頼みなら

小町、なんでもしちやいますよ！』

あんな兄って……。この子もなかなか酷いな、気が合うかも。

『それでなんですけど、今の話でなにか良い方法とか見つかりましたか？』

小町ちゃんから彼女が知る限り先輩のことを尋ねた私は、話を聞いていて

いくつか気付いたことがあったのでその事をさらに踏み込んで聞いてみる。

その結果、これでいこうか？ と思いついたものがあつたけど、

まだまだ口に出せるような段階ではないので、黙っていることにした。

『んゝ、もうちよつと情報が欲しいかなあ。まあ焦らずにいくよ。』

それと先輩の誕生日なんだけど、昼に奉仕部の先輩たちと私と小町ちゃんでお祝いす

るじゃない？

で、その夜、花火大会があるから先輩を誘いたいんだよね』

『いいですね、花火大会！』

『でもね、私が誘っても先輩、絶対に来ないと思うのね』

『ですねえ……』

『ですねえ……。実際そうだけど納得されるとちよつとへこむ。

』それでね。出来ればなんだけど、私も弟とその彼女を連れて会場に行くから

小町ちゃんにはお兄さんを連れてきて欲しいんだよね。

』それで偶然会った感じにして皆で花火見れたら嬉しいんだけど』

『えーつと、二人きりじゃなくていいんですか？』

まあ二人のほうがいいけど話を聞く限りその二人つてというのが

先輩が逃げ出す原因なんじゃないかなって思うんだよね。なのでここは慎重に……

』うんうん。ほら、私も男の子と二人きりとか緊張するしさ、ね』

』そ、そうなんですか？ あれ、でも……』

』どうしたの？』

』えつと以前、兄が言ってたんですけど、その……』

口籠る小町ちゃん。これは聞かない訳にはいきませぬね。

そう思い、さらにしつこく問いただすと、小町ちゃんは諦めたような吐息を吐く。

『その、いろは先輩は色んな男と遊びにいつてる遊び人だから、お前はあーなるなよつて』

『……………』

あの人、人をまるでビッチのように……

まあ確かに、色んな男の子と遊びにはいつてたけどさ。

『やつ、なんていうのかな。せつかくね、好意をもってもらえてるのに

邪険に扱うのもどうかなって思うじゃない？ それで遊ぶくらいならつてね』

『お、優しいですねえ！』

良かった。騙されてくれた。

『わかりました！ 小町に任せてください。』

皆で一緒に花火を見れるように、上手いこと兄を連れ出しますんで』

『うん。お願いね。このお礼は、いつかきつと』

『いえいえ、お礼なんて！ 兄をもらつてくれるなら充分です。』

では小町に何か出来ることがあつたら、また連絡頂ければ』

『うん。ごめんね夜遅くに。おやすみなさい、小町ちゃん』

『はい。おやすみなさいです、いろは先輩』

電話が切れ、静かになったそれをテーブルの上に戻そうとする。



そこでふと思いついたことがあったので、電話帳を開いてその名前を探してみる。あつた。でもこの人に頼るのもなあ……。

まあいいや、ここは恥を忍んで話だけでも聞いてもらおう。

そう思い電話を掛ける。

コール音が鳴る。一回、二回、三回……、そして電話にでた彼の声が受話器越しに聞こえた。

## 自分のことは難しい

『珍しいな、いろはが電話を掛けてくるなんて』

『夜分にすいません、葉山先輩。こんばんはです』

『ああ、こんばんは。今日はどうしたんだい？』

『あつ、えーつとですね。その……………』

用があつて電話を掛けたのは私の方なのに、言葉が出てこず口籠つてしまう。

うむ。勢いで電話しちやっただけど、どう切り出せば良いのやら……

そんな黙つてしまった私を氣遣つてくれたのか、葉山先輩の方から話を振つてくれた。

『そういえばこの前、戸部と千葉に遊びに行つてきたんだけどさ』

おつ、気が利きますね、葉山先輩。

どつかの誰かさんと違つて女の子の扱いがお上手です。

などと上から目線で感心しつつ、暫くの間、私と葉山先輩はたわいもない会話をする。

十五分程そうしていると会話と会話の間のちよつとした隙間を埋めるように

葉山先輩が本当の用件を尋ねてきた。

『ところで、いろは』

『なんですか?』

なんだか分かっていてもそう返すのが、ある意味礼儀というもの。

『いつもはメールで済ますいろはが、わざわざ電話を掛けてくるほどの話ってなんだろう?』

察しが良くて助かります。おかげで話を切り出しやすくなりましたよ。

『実はですね。ちよつと恋愛相談に乗っていただきたいなって』

私の言葉に、葉山先輩は戸惑ったような声を出す。

『恋愛相談? えつと、俺に?』

『はい、葉山先輩に』

暫し沈黙。

まあ自分が振った女の子から恋愛相談をされるとか

モテモテの葉山先輩でもさすがに初めてだろうな。

『……分かった。とりあえず話だけでも聞かせてくれ』

どうして俺に? などと言わず聞いてくれるなんて、あなた、いい人ですね。

そしてそんないい人だから、悪い私に利用されるハメになるんですよ?

一生懸命悪い子になる。

そんなどうにもしようがない、でもなんだかワクワクする気持ちで私は昔好きだった人に今好きな人のことを話し始める。

× × ×

『目付きと姿勢が凄く悪い、常に近寄ってくるなオーラを出しているコミュ障か……』

『他には、妹と猫が好きで好きで堪らないみたいです』

『妹と猫が好きと……。妹はともかく猫は可愛いから仕方がないな』

『そ、そうですね』

葉山先輩、猫好きなのかな？ ちよつと意外。なんとなく犬派だと思ってたけど。

あれね、猟犬みたいなでかいやつ。

公園とかで「ハハッ いくぞー！」なんて言つて、犬とボール遊びとかしたら似合いそう。

『いろは。先に聞いておきたい事がいくつかあるんだが、いいかな?』

『なんでしよう?』

『その目付きが悪い彼。うーん、まあ仮にHくんとしておこうか』

『仮という割には、なんだか具体的ですね』

『まあ、うん。で、いろはは、そのHくんとどうなりたいんだ?』

『どうなりたい、ですか?』

『ああ、そうだな。』

例えばの話、付き合いたいとか、それともただ自分の気持ちを知って欲しいとか』

そういえば、不思議とそのことについて考えたこと無かったな。

『そうですね。別に付き合いたいとかはないと思います。』

気持ちちはまあ知って欲しい気がしますけど、別に知られなくてもいいかなとも』

『うん、それで?』

『それで……。う、うーん。どうしたいんでしょうね、私』

『そういう場合は、じゃあどうなりたくないかで考えればいいと思うよ』

ああ、なるほど。それなら簡単だ。

『彼の傍から離れたくないです。それと……。他の女の子と仲良くして欲しくくないです』

『でもあと半年で彼は離れていくし、今は今で他の女の子と仲良くしてるんだね?』

まったくもってその通りだけど、もう少し言い方ってもんがあるんじゃないですかね？

そんな、ちよつとした不機嫌さは受話器越しでも相手に伝わるらしい。

それを察した葉山先輩は困ったように苦笑する。

『酷い言い方をしている自覚はあるけどな。』

その上でいろはがどうしたいのか、良かったら聞かせてもらえないか？』

『話を聞いてもらってるのは私なのに、その、すいません』

『いや、気にしなくていいよ。』

まあ少し違うけど、なんとなく似たような経験が俺にもあるからね』

ほう、葉山先輩も今の私と似たような経験が……。ちよつと気になりますね、それ。

まあでも今は私の話。

『えっと、勉強を頑張つてその人と同じ大学に行けるようにしようと思ってるんで』

そつちは平気なんです。まあ受かるかはあれですけど』

『うん』

『ただその、すごく良い感じなんですよね。Hさんとその人』

『良い感じって、具体的にはどんな風に？』

『んと、趣味が合うというんですかね。』

二人とも本好きで、今日も読んだ本の話で盛り上がってましたし……」

『今日、会ったのかい？ えっと、三人で？』

『はい。Hさんの家にお邪魔して、三人で映画をみました』

私の言葉に、葉山先輩は『へえー』と驚いたような声を出す。

そして小さく『比企谷の家か……、行ってみたいかも知れないな』と呟く。

もうさ、Hさんとか言わないでもいいんじゃないかな？ これ。

『そのお姉さんは、いろはもよく知ってる人なのかな？』

『そうですね。色々とお世話になった人です』

『どんな人なんだい？』

『なんとというかほわっとした感じの優しい人ですね』

『ああ……。あの人か』

えっ、なに？ バレバレ？

まあ私の交友関係なんてそんなに広い訳でもないしね。

葉山先輩くらい察しが良ければすぐに気付くか。

『それでいろはは、ふたりの邪魔をしたいのかい？』

問われて、口籠る。ほんとどうしたいんだろう、私。

別に先輩と付き合いたい訳ではない。でも他の子と仲良くされたくない。

それでも城廻先輩なら、先輩と他の誰よりも上手くいくだろうな、とは思う。その他の誰かに自分が含まれているのだとしても。

そんな考えに囚われて黙ってしまった私を心配してくれたのか  
葉山先輩は申し訳なさそうな声を出す。

『すまない。邪魔をするって言い方は、ちょっと悪かったな。』

そうだな……。じゃあ、自分を選んで欲しいって感じかな?』

『選んでもらえれば嬉しいですし、付き合って欲しいなんて言われたら舞い上がると思  
います。』

でも、なんででしょうね。私よりその人の方が、Hさんには合ってるように思うん  
です』

『自分に自信がないって意味かな? そのお姉さんには敵わないとか』

『うくん、どうなんでしょうねえ。確かにその人綺麗だし可愛らしいですけど』

私だつて負けてないと思うんです。なんかこう自惚れっぽいですけど』  
『いや、いろはは実際可愛いと思うけどな』

あら、葉山先輩。もしかして私のこと口説いてます? でも残念。もう遅いですよ。  
『自惚れでもつと言えばですけど、私結構、自分に自信はあるんです。』

でもですね、それでもその人のほうが、Hさんには合ってるなつて思うんですよね』



『羨ましいよ』

『えっ？ 何がですか？』

羨ましがられる要素なんてあったかな？ ないような……

『自分の気持ちより相手のことを思えるくらい、いろははその彼のことが好きなんだな』

『そ、そうなんですかね？』

『ああ、本当に羨ましい』

『えっと、なんかその、自分のことなんですけど、よくわからないんですよ』

『自分の事なのにかい？』

『そうですね……。自分のことは難しいです。ましてや他人ひとのことなんか……』

呟いた私の言葉に葉山先輩は薄く溜息を吐くことで、その答えを返してきた。

## そこに愛があっても

日曜日の夜遅く、自分の部屋で昔好きだった人と電話で話す。

昔って部分が無ければ嬉しい限りなんだけど、まあ仕方ないね。

そうして話を進める内に互いに思うことがありそれで黙ってしまい

しばしの間、静かな時間が流れる。

喉の渇きを覚え、テーブルの上のコップに手を伸ばそうとしたとき

葉山先輩の声を受話器越しに耳へと届く。

『いろはは、その……比企谷のことが好きなのか?』

『もうHくん呼ばわりはやめたんですか? 葉山先輩』

『いろはが続けて欲しいなら、そうするけど』

『いえ、結構です。私も変に誤魔化して失礼ですよね、相談に乗ってくれているのに』

『まあ、うん。気持ちちはわかるし、構わないよ。』

それで改めて聞くけど、いろはは比企谷とどうなりたいんだ?』

問われて悩み、取り敢えず現状を言ってみる。

『うーん。そうですね……』

今のところですけど、私ってただの後輩扱いなんですよね』

『うん』

『私も自分の気持ちだが、いまいち良くわかっていませんし』

『でも離れたくないし、他の女の子と仲良くして欲しくないんだろ?』

『そうなんですよねえ……』

『ちよつと聞いてもいいかな?』

少し間があつて、葉山先輩が尋ねてきた。

『なんででしょうか?』

聞きたいことがあると言つたのは葉山先輩なのに、それからまた暫く沈黙が流れる。

なんだろうと思つていると、葉山先輩が困つたような声を出す。

『その言いくいんだが……。俺のことをそうだったときは、どうだったんだ?』

ああ、なるほど。これは確かに言いくいですね。

思いつつ問いかけに答えようと、当時のことを思い出しながら口を開く。

『傍に近づきたいとは思つていましたよ。仲良くしたいなつて。』

でもそうですね。他の子にちやほやされる葉山先輩を見ても、

特に嫌だなとかは思わなかつた気がします

むしろ、そんなモテモテの葉山先輩と付き合つたら……』

そこまで口にして、言い淀む。

さすがに自慢できて嬉しいとはいえないよね。うーん、我ながら……。

『いろはの話を聞いてて思うんだが、それともう答えがでてるんじゃないかな?』

『そうなんですかね……』

『ああ、多分。それでじゃあどうするか? って話になるんだが』

『そうですね、二人の間に割って入って……。ん、ちよつと難しいかなあ』

『そんなに仲が良いのか? えつと城廻さんと比企谷』

ああ、やつぱりバレてる。でもすごいですね、ほわつととか優しそうでわかるなんて。

私もそういう特徴を身につけたほうがいいのかな、あざとい扱いばかりだし。

『先週、図書館で二人を見たんですけど、比企谷先輩すごくデレデレしてて

なんというか、もうアレでしたね』

『そんなにか』

『そんなにです』

答えつつ、ちよつとしたアイデアが思い浮かんだので口にしてみる。

『あつ、そうだ。これなんかどうですかね? 比企谷先輩をどこかに閉じ込めるとか』

『えつと、いろは。それはまあ犯罪になるから止めた方がいいと思うぞ』

やつぱり、だめかー。まあそうだよね、と思いつつ、反論してみる。

『そこに愛があってもですか?』

『あー、うん。愛があっても、ちよつとな。』

もつと穏便な方法でどうにかしたほうがいいと思うな、俺は』

『うふふ。嫌ですね、葉山せんぱいっ。冗談半分に決まつてるじゃないですか』

『それって半分は本気ってことだよな……。』

なあ、いろは。素直に気持ちを伝えるというのじゃ、ダメなのか?』

ほーん。素直に気持ちを伝えたら、振つたあなたがそれいいですか。

『葉山先輩は私が比企谷先輩に素直に気持ちを伝えたら、上手くいくと思いますか?』

『……………』

うーん、黙らないで欲しいですねえ。まったく変なところで正直ですね、葉山先輩。

『まあ、自分でもわかかってるんですよ。そういう対象に全くとは言いませんけど』

あんまり見られていなそうだなって』

『そうなの?』

『ですねえ。それでなんですけど、葉山先輩は私を振つたじゃないですか?』

『まあ、うん。その悪いことしたとは……。』

いや、謝らないですよ。余計惨めだから。

『それってなんか理由があつたんでしょうか?』

「こう好みじゃないとか、なんていうかもっとムチムチな豊満ボディが好きとか」

『いや、いや。そういう訳じゃないんだが……』

『じゃあ、なんでですか？』

『言わないとダメかな？』

『私も、まあ勝手にですけど。恥を忍んで自分を振った葉山先輩にこうやって打ち明けている訳ですし。』

出来れば葉山先輩にも、本当の所を教えて欲しいなっと思えますね』

「またもや沈黙。まあかなりの無茶ぶりだから答えてもらえなくても仕方ないね、と思っていたら」

意外や意外、葉山先輩は真面目に答えてくれた。

『……ずつと、小さい頃から好きな人がいるんだ』

小さい頃から。というと、あの人かな？

『雪ノ下先輩ですか？』

『の姉の方だな……』

『あー、はるさん先輩のことですかあ〜』

へー、意外。でもないか。すごい美人さんだしね。

『好きというか、憧れて。それで追いつきたくて頑張ってるだけだな。』

『そうやって頑張っても、『なんでもそつなくこなすなんて、つまんない』とか言われるし。』

『じゃあ、どうしろっていうんだよって、そう思わないか?』

『そ、そうですね……』

なんだろう。葉山先輩吹っ切れたら愚痴っぽくなってる……

てか、私に言われてもなあ……。まあ聞いたの私か。でも困りましたね、これは……。そしてそれから三十分ほど。

私は葉山先輩がいかにはるさん先輩のことを好きで、今まで振り向いてもらうためにどれだけ頑張ったかという話を聞かされることとなった。

× × ×

『———という訳なんだよ。酷いと思わないか?』

自分の悩みを相談しに電話をかけたら、何故だか相手の悩みを聞く羽目に。

まあでもちよつと嬉しい。

完璧超人だと思ってた葉山先輩も、私と大して変わらないってことがわかったから。

もつと早くこんな風に話していれば良かったな、そう思えた。

『葉山先輩ははるさん先輩からみて、弟のような感じなのかなって思いますがね』  
話を聞いてて思ったことを言ってみる。すると苦悩に満ちた声が返ってきた。

『やっぱり、そうなのかな。自分でもわかってはいるんだけど、それでも俺は……』  
あらあら、うふふ。弱ってらっしゃる。

優しい子ならここで慰めるんだろけど、残念私は優しくないので。

『私も弟がいるからわかるんですけど、弟はどんなに良くても恋愛対象にはならないです  
すねえ』

『うっ』

トドメだつ、とばかりに投げた私の言葉に

葉山先輩は呻き声をあげるとそのまま黙り込んでしまう。

落ち込んだ様子の葉山先輩にほんの少しだけ胸が痛むのを感じながら

謎の勝利感に私は満たされる。こ、これは、ハマるかも知れない。

そんな邪な楽しみに耽る私の耳に、葉山先輩の恨みのこもった声が聞こえてきた。  
『いろは、そういうけどな。いろはだって比企谷から妹扱いされてると思うぞ』

『葉山先輩、それはチャンスですよ!』

『えっ? い、いや、チャンスじゃないだろう……』

『葉山先輩。ここは千葉ですよ?』



『あ、ああ……、まあ千葉だけど』

戸惑ったような葉山先輩の声。あらあら、葉山先輩ご存知ないのかな？

いいでしょう。いろは先生が教えてあげようじゃありませんか？

『いいですか、葉山先輩。』

千葉での妹というのは、恋人はもちろん幼馴染さえ打ち倒す

最強のポジションなわけですよ。それでですね』

『いろは、ちよつと待ってくれ。弟はどうなんだ？』

話の途中で葉山先輩ががぶり寄ってきた。困りますね、人の話は最後までちゃんと聞かないと。

『弟は多分、恵まれたポジションではないと思いますよ。』

最近見たとある番組では、生き別れてた弟が兄と再会してすぐに

ハンマーで叩き潰されていましたし』

『そ、そうなのか。いろははなかなかすごい番組見てるんだな』

『日曜夕方五時からやってるので、葉山先輩も良かったら是非』

『えつと、ちなみにどんな話なんだ？』

『そうですね、最新話でいえばですけど。』

言葉のキャッチボールが成立しない主人公とダメな方向に振り切れちゃったその仲

問が

『邪魔するやつは全員ぶつ殺す団になって宇宙や地球で頑張るって感じですかね』

『……………』

聞いというて無言で、とつても失礼な人ですね。まあいいでしょう、私は寛大なので。思いつつ、自分の知らない先輩のことを尋ねようと口を開く。

『葉山先輩は比企谷先輩といつくらいから、話すようになったんですか？』

『そうだな。比企谷とは二年からクラスは一緒だったんだが、ちゃんと話すようになったのは……………』

葉山先輩が話す、私の知らない先輩情報に耳を傾けていると、気になる単語が出てきたので

聞いてみることにした。

『葉山先輩。話の途中ですいません。あの“合宿”ってなんですか？』

## 初めての友達

『合宿というか、小学生の林間学校サポータースタッフとして千葉村に行ったんだ』

『千葉村……。確か、群馬でしたっけ』

『ああ。小学生の相手をしたり、空いてる時間に川遊びしたりな』

『おう、楽しそうですね』

『うん。結構楽しかったよ。』

みんなでカレー作ったり、キャンプファイヤーしたり、他には……』

葉山先輩は懐かしむよう楽しげに話していたが、そこまでいうと途端に口籠る。

会話の途中、相手に言いにくいことがあつた場合、なんですか？ などと下手にせつ

つくより

言わざるえないよう話を持っていくのがよい。例えばこんな感じで。

『葉山先輩。夜はこれからです。』

時間は充分にありますから、焦らずゆっくりそのときのことを話してくださいね』

『う、うん』

ふう、これでよし。

良い仕事した〜！ そんな気持ちでテーブルの上の紅茶に手を伸ばし一口飲む。

そして観念した葉山先輩が語る、一人の女の子とその女の子のために

先輩たちがしたことに耳を傾ける。

聴き終えて、そんな事があつたんだ、と思いつつ、口を開く。

『私も結構、無視とかされますけど、一体何が楽しくてそんな事するんでしょうね』

『まったくだな。合う合わないは仕方がないにしても』

そんな事しなくてもいいだろうって思うんだが……

というか、いろは。その、平気なのか？』

『なにがですか？』

『いや。その、無視されるとか』

『うーん。小さい頃は結構きつかったですけど、今はもう平気ですね。』

むしろ仲良くなれない自分に合わない人間を見分けるのに都合がいいです』

『そういうもんなのか？ なんていうか、歩み寄って仲良くしようとは思わないか？』

『逆になんですけど。』

そういう人と今仲良くなっても、いつそういう事をしだすかわからないじゃないですか？

される私にも問題がないわけじゃないですけど、私はそういう事をしませんしする気

もないです。

だからいつそ、関わらないようにしたほうがいいかなって思いますね』

『うん。そうか、そうかもな』

『それでその女の子の話なんですけど、比企谷先輩のやり方で正解、とはいえませんが、間違つてはいないと思いますよ。』

合わないもの同士無理にくつつけても、いつかは破綻しますしね。ならいつそ、つていうのは、アリだと思えます。

まあ当事者のその子がどう思っているかわかりませんが』

私の言葉に、葉山先輩は考えるように間をとつてから、口を開く。

『みんな仲良く、はダメなのかな？』

『それは、みんなの中に入ってる人の言葉ですね。』

そもそも入ってない人からしたら、何言つてんだ、こいつ、つて感じだと思えます』  
ちよつと言いすぎたかな。葉山先輩黙ちやった。

でも実際そうだなあ。まあこういうのは、外れたことのない人にはわからないか。と思つてみると、葉山先輩は少し寂しげな声で返事を返してきた。

『いろはは、比企谷と同じような考え方なんだな』

失礼だな、この人。私はあんなにひねくれてませんけど？

『んー、どうなんでしようねえ。』

ただ私は自分を理解してくれる人が一人だけでもいれば充分。そう思ってますけど』  
言つて、気付く。ああ、そかあ。私は多分、比企谷先輩に……

思いに耽つて黙り込んでしまった私を氣遣うように、葉山先輩が優しい声を出す。

『いろは。どうした?』

『やつ、なんていうんですかね。今気づいたんですけど。』

私はきつと比企谷先輩に、私のそういう人になつて欲しいなつて思つてるのかも知れ  
ません』

『そうなのか?』

『多分、ですけど……』

流れる沈黙。うん、ちよつと曝け出しすぎたかな。なんか凄く恥ずかしい。

電話で良かった。今顔真っ赤だしね。

思いつつ、片手で顔をパタパタと扇ぎながら口を開く。

『葉山先輩。ちよつと質問なんですけど、いいですか?』

『なんだい?』

葉山先輩を巻き込む前に、巻き込んでもいい人になつてもらわないとね。

『葉山先輩って、女の子の友達いますか?』

受話器越しに伝わってくる、ちよつと困ったような空気。

少し間があつてから、葉山先輩が口を開く。

『優美子とは、そうだと思つているけどな』

あちやー。三浦先輩、友達枠かあ。

まあ好きな人がいるんじゃないや仕方がないけどね。でも、結構それ、残酷ですよ？

『葉山先輩はそうかも知れませんが、三浦先輩はそうじゃないと思いますよ。』

わざわざ言うべきじゃないかもですけど、三浦先輩の気持ち、気付いてますよね？』

『……まあ、うん。でも、じゃあどうすればいいんだ？ 他にやり方、あるのか？』

好意をもつてもらえて嬉しいから、できるだけそれに答えたいと思うのは間違つて

か？』

『すいません、生意気いって。』

ただ、相手の気持ちに答えられないなら、それなりの対応はしたほうがいいように思います。

例えば、私にさつき言ってくれたように、想い人が居ることをそれなりに伝えてみる  
とか』

『やっぱり、そうした方がいいのかな……』

耳に届く葉山先輩の沈痛な声。

いい人ってこういう時大変ですよ。冷たくする優しさを使えないから。

『なんかほんとすいません。責めるみたいなことを言ってしまった』

『いや、自分でもどうにかしなくちゃなって思っていたから、助かったよ』

疲れたような吐息を吐きつつ葉山先輩は言うど、薄く笑う。

本当にこの人、いい人なんだろうな。

そんないい人を自分の都合に巻き込んで大変な目に合わせることに、

胸が痛んでウキウキワクワクしてきましたよ！

『それで、この流れでこういうことを言うのもあれなんですが』

『なんだい？』

『葉山先輩。これから葉山先輩に一杯ご迷惑を掛けたいと思うので、

良かったら私と友達になってもらえませんか？』

『えっと、いろは。迷惑かけること前提なのかい？』

戸惑ったような葉山先輩の声。

まあ普通の人はこう言われて、うんとは言わないだろうけど。

それでもこれは、私なりの誠実さ。

『もう勘弁してくれよっていうくらい、掛けると思います。』

もちろん私にも、一杯迷惑、掛けてもらっても良いですし。どうですかね？』



私の言葉に、葉山先輩は深く息を吐く。そして不意に、くつくつと楽しそうに笑う。

『いいよ。なろう、友達に』

おっと、まさか上手くいくとは。

良かったと思いつつ、私らしく小生意気なことを言ってみる。

『葉山先輩、そこはあれですよ。』

いろは、君と友達になれて嬉しいよ、とかじやないですかね？』

『ははっ、そんなことは言わないよ。だって俺たち、友達なんだろう？』

嬉しそうな声でそんな風に言われると、なにやら照れてしまいますね。

まあいいでしょう。もう充分、照れて顔が真っ赤かですし、今更ね。

そんな風にして、この夜、私は生まれて初めての友達ができた。

## 静かな眠り

友達ができたら最初にすること。それはもちろん悪巧み。

という訳で私と葉山先輩は、如何にお互いの想い人のハートをその手にゲットするかで

一緒に知恵を絞ることにした。

『こういうのはどうですかね？』

葉山先輩が私に襲いかかって、たまたま傍にいた比企谷先輩がそれを止めて私と比企谷先輩はそれが切っ掛けで愛し合う、というのは』

『うん。迷惑掛けてもいいとはいったけどさ、いろは。

それだと俺、社会的に死ぬよね？』

『まあ大丈夫ですよ。細かいことは言いつこ無しです！』

『全然細かくないし、大丈夫じゃないんだよなあ……』

なにやら渋る葉山先輩。困りましたね。

私のためなら死んでもいいって言ったじゃないですか。あれ？ 言っていないか。

『なら葉山先輩も、なにか案を出してくださいよ〜』

『そう言われてもなあ……』

交互に案を出すよう決めたのに、葉山先輩はこれといった案が思い浮かばない様子。仕方なく矢継ぎ早に私が出す案は、ことごとく駄目だというくせに。

まったく……と思いつつ、これまでの会話に何か使えるものがなかったか思案する。そして良さげなワードがあつたことを思い出し、口にしてみる。

『じゃあ、これなんかどうですかね？』

さつき話にでた林間学校じゃないですけど、泊りがけで勉強会とか開くの。

修学旅行とかもそうですけど、普段とは違う相手が見れて距離が縮まりそうですし。

まあ何処に泊まるのかって話になるんですけど』

『ああ、それならウチの別荘を使ってもいいし、場所なら提供できると思うよ』

別荘！ 葉山先輩ブルジョワジーですか？ お嫁に貰ってください。

すぐさま離婚して資産だけ頂きたいです。

『いいですね！ あつ、そうだ、あれですよ、葉山先輩。』

はるさん先輩も特別講師として合宿に参加してもらえれば

好きなあのと同じ屋根の下で一夜過ごせますよ

それでふたりの関係が、いい感じに進むとかあるかもです！』

『う、うーん。それはないんじゃないかなあ』

『そうですか?』

『うん。小さい頃、お互いの家に良く泊まったりしたんだけどさ』

特にそういう事はなかったから……』

『それはお互いに小さかったからですよ。今はもう大人。あんな事やらこんな事やら  
当時とは違ったなにかが起る可能性も無きにしもあらずですよ!』

『い、いや。俺は別に、そういうことを陽乃さんとしたい訳じゃ……』

うわっ、この人めんどくさっ。比企谷先輩とは違った意味でめんどくさいですね。

まあ仕方がない。ここはひとつ。

『じゃあもしですよ? このまま何もせずについて、はるさん先輩にいい人が現れたと  
しますよね』

『あ、ああ』

『それで、はるさん先輩がその人とそういう事をしたら、葉山先輩、平気ですか?』

『いろは、その手でいこう。で、いつにする? 早いほうがいいな。明日?』

食いつきすぎでしょう、この人。まあ気持ちはわかるけど。

多分恋愛感情の半分は、独占欲だしね。

そんな呆れ半分、納得半分な気持ちでいると、葉山先輩がなにやら思い出したように  
声を上げる。

『そういえば』

『どうしました?』

『今思い出したんだけど、戸部が比企谷と一緒に勉強しようって誘われたらしいんだよ』  
『そうなんですか? なんか意外というか……』

『まあ俺も、戸部の勘違いだと思っただけな。でもどうだろう、戸部も誘うっていうのは』  
戸部先輩か、あの人うるさいんだよなあ。まあいい人ではあるんだけど。

それに私と比企谷先輩、葉山先輩とはるさん先輩の四人だと

比企谷先輩、来てくれなさそうだしなあ。

参加人数を増やして頃合を見計らって、お互いの好きな人を連れ出せばいいかな。

『葉山先輩。それなら去年千葉村に行った人たちも誘ってみましょうか?』

『俺の方は構わないけど、いいの? いろは。奉仕部の二人が来て』

ああ、やっぱり葉山先輩も、色々察してはいたんですね。

『はい、構いません。なんか裏でこそそそするよりも良いかなって思いますし』

『さっき俺を生贄に比企谷と上手くやろうとしたいろはがそんな事をいうとはな……』

なんのことやら。心の中で返事を返しつつ、聞こえないフリをして話を進める。

『それで葉山先輩。別荘って、どちらにあるんですか?』

『鴨川の清澄寺の近くだね。』

親に頼んで車を出してもらおうし食べるものも用意してもらおうから、着替えと洗面道具だけ持つてきてもらえれば良いと思うよ』

『お、それは助かります。有難うございます』

『いやいや。俺も高校最後の夏の思い出になにかしたいなって思っていたから気にしないでいいよ。むしろ切っ掛けを貰えて嬉しいくらいさ』

うーん、やっぱり良い人。(都合の)

思いつつ、先ほどの会話で気になったことがあったので尋ねてみる。

『そういえば葉山先輩。さっきの話なんですけど、三浦先輩となかあつたんですか？』

どうにかしなくちやって考えていたって、その、言つてましたけど』

『ああ、それか……。うん、実は今度遊びに行こうって誘われててさ。』

今までは皆で遊んでただけど、今回は二人つきりだつて』

あー、それはアレですね。告白する気でしょうねえ……。

三浦先輩、お母さんっぽくって面倒見いいし、良い人なだけだなあ。

そう思つて吐いた吐息が、同じように吐いた葉山先輩の吐息と重なる。

それがなんだかおかしくて、二人で薄く笑い合う。

『なんかアレですよ、葉山先輩。』

誰が悪い訳でもないのに、どうしてこうも上手くいかないんでしょうね』

『ああ、本当にな……』

葉山先輩は答えると、また薄く、吐息を吐いた。

× × ×

日が変わって月曜日。その放課後。

夏休み明けの文化祭について、生徒会で軽く打ち合わせを済ませると

先輩との二人っきりの勉強会が始まる。

緊張しつつも夕方近くまで一緒に勉強し、先輩に送ってもらえた帰り道。

自分の気持ちをバレないように一生懸命に誤魔化しながら、

それでも気付いて欲しいから、言葉を選んで口にする。

「私、今日は今日に満足出来てるんです」

先輩と同じ場所と同じ時間を過ごさせたから。

「だからゆつくりと寝れそうです」

この先もずっと、そうできたら嬉しいです。

そう想いを込めて口にした言葉は、先輩にちゃんと届いたのかな？

そんな事を思いながら、布団に入り目を瞑る。

そうして私は、夢一つみない静かな眠りについたのであった。



## はるさんとの電話

7月26日(日) 快晴。つと。

ペンを握って日記帳に日付と天気を記入する。

今日のことを書く前に、夕べ、日記を書いてお布団に入ったあとのことを書いておく。

日記を書き終え布団に包まりうつらうつらしていると携帯にはるさんからのメールが届いた。

あちらでする手続きに必要な書類の件で言い忘れたことを知らせてくれたらしい。

お礼の言葉を書いて返信しようとしたとき、そういえばはるさんは比企谷くんと仲が良かったことを思い出す。

高校の頃のはるさん。

今もそうだけど当時から男女年齢問わず誰からも好かれており、皆の人気者だった。

ただ、はるさん自体は自分に好意を寄せてくる相手でもそのお眼鏡にかなわない相手には

無視とまではいかないけど無関心だったように思う。

傍からみればそうは見えないかも知れど、関心のある相手と無い相手ではその対応に天と地ほどの差があった気がする。

それに気付いたのは、私のはるさんに憧れてその一挙一動をよく見ていたからかも知れない。

その関心を持つ基準も、私たちくらいの年齢の女の子特有の見た目や周囲からの評価などではなく

もつと別の、深いなにかだったように思う。

例えば、私が生徒会長だったとき副会長をしてくれた木村くんは、ぱつと見、のんびりした感じの男の子だけど、実務能力に優れていた。

それに気付いたはるさんに、生徒会長に立候補した私の手助けをして欲しいと頼まれた彼は

わざわざ役員に立候補してくれて、不慣れな私を一生懸命支えてくれた。

そんな感じで出来る人を見抜く力が、はるさんには備わっているんだと思った。

だからこそ、他人に自慢できるようなものを何も持っていない私が

はるさんに目を掛けてもらえるのか不思議ではあつたけれど。

ただそれでも、関心を持つ相手の見た目がはるさんのお気に召さないと

「見た目は一番外側の内面なんだから、もうちよつと気を使いなさい！」

と冗談めかして言っただけ。私もいわれた口だしね。

「見た目に気を使わないのは、相手に対してはもちろん自分に対しても失礼だよ」とはるさんに言われ、それではるさんにおしやれを教わりしてみたら、女の子には一目おかれ

すぐさま男の子に遊びに誘われたのだから、その言葉には重みがあると思う。

そんなはるさんに目を掛けられる男の子。

比企谷くんは一体どういう子なのか聞いてみたいと思ひ

その旨をメールに書いてはるさんに送ってみた。

すると、すぐさまはるさんから電話が掛かってきた。ど、どうしよう……

なんであの人、メールに電話で返事を返そうとするんだろう。ちよつと怖い。

「めぐりく、こんばんは」

「こ、こんばんはです。はるさん」

「声の上擦ってるけど、もしかして寝てた？」

「い、いえ。えーつと、お布団には入っていたんですけど、起きてましたよ」

「うん、なら良かった。明日にしようか迷ったんだけどね。忘れないうちにつて」

「ほんと助かります。わたし、ぼーつとしてますから」

「まあそこがめぐりのいいところでもあるからね。」

そういうところに惹かれる男子もいるだろうし。眠り姫ならぬめぐり姫ってやつで」「やつ、そんなモテないですよ、わたし……」

「そんなつてことは、それなりにはモテてつたつてことだよな？」

「今まで何人くらいに告白されてたの？　いつてみよ　五人？　十人？」

「えつ、えーつと、じゅ、十五人くらいですかね……」

「おー、やつぱりモテるねー。さすがはめぐり姫！」

「い、いえ、そんな」

「いらぬ見栄を張ってしまった……反省。」

「で、そんなモテモテナめぐり姫は比企谷くんに興味があると。」

「でもどうしたの急に。彼のことをめぐりが口にするのつて、確か初めてだよな」

「えーつと、実はですね……」

「み　そうして私は、比企谷くんと図書館で再会したこと。そして彼が勧めてくれた本を読

「み　そこからの流れで、明日彼の家に遊びに行くこと。」

「み　そして今日、本を買いにいった帰り道。」

「み　駅で偶然彼と出会い、お茶をして色々なお話をしたことなどを口にする。」

「み　それでなんですけど、ずっと彼に対してもつていたイメージとまったく違うんで

それで比企谷くんって一体どういう子なんだろうなって思ってた……」

「気になった訳だ？」

「やつ、そんな気になったというか…… そうですね、多分、気になってます」

「そかあゝ ついにめぐりにも比企谷くんの魔の手が伸びてしまったのか」

「えっ、比企谷くんって色んな女の子に手を出すタイプなんですか？」

「んー、どちらかという手を出されるタイプ？」

あの子ビビりだし自分からどうこうしようとはしたくてもできないと思うよ」

「そ、そうなんですか」

「めぐり。あんた今ほっとしたでしょ？」

なぜバレた…… やっぱりはるさん怖い。

「そ、そんなことは……」

「まあいいけどね」

慌てて言うのと、はるさんは笑みを含んだ声でそういつてきた。ううっ、バレバレだ。

「ただねえ、めぐり。比企谷くんのごことは自分の目でよく見てみる、その方が良いと思うよ。」

あの子の良いところは、誰にとっても良いと思われるようなものではないし。

合わない人には本当に合わないと思うからね」

「そうなんですか?」

「どうなんだろうね。まあ明日、一色ちゃんも一緒とはいえ

それなりに同じ時間を過ごすんだから、近くでよく見てみるといいよ。

一応いつておくと、あの子、かなりめんどくさいよ?」

「そ、そうなんですか」

「うん。まあ進展あつたら教えてね。楽しみにしてる。じゃ、おやすみ」

「あつ、はい。おやすみなさい、はるさん」

「はいはい」

明るい声を耳に残してはるさんからの電話は切れた。

ちよつと疲れた吐息を吐いて、お布団に戻る。

布団に包まりながら、明日のことを思う。

同じ時間を過ごすか……なんかちよつとドキドキしてきたような……

ま、まあ、とりあえず明日。

比企谷くんにもいったように、明るく楽しい日になるといいな

そう思つて、私は目を瞑つた。

× × ×

そんなことをつらつら思い出していると、手がまったく動いていなかったことに気が

付く。

いけないいけない。まだ日付と天気しか書いてないや。

まあ日記だからって、なんでもかんでも書けばいいってもんでもないけどね。よし、じゃあ今日のこと書きますか！ 楽しかったし一杯書く事があるなーと思つたら、一階からお母さんの声が聞こえた。

「めぐり〜。ごはんよー」

「は〜い。いまいく〜」

ペンを置きノートを閉じる。

なにかをやる気になつたときの、ごはんよく率は異常。

まあご飯を食べてお風呂に入つてさっぱりしてから書こうかな。

そう思つて椅子から立ち上がり、部屋から出る。

廊下に出た私の鼻に階下から美味しそうな匂いが届いた。

## 書けない日記

ペンを取りノートを開く。

晚ご飯を食べてお腹も一杯になったし、お風呂にも入りさっぱりとしたしね。

さてさて、今日は色々なことがあって本当に楽しかった。

ただ色々ありすぎてなから書けばいいのか迷うなあ。

んー、じゃあここは書く前に、頭の中を少し整理することにしよう。

まずは一つ目。秒速の映画がとても良かったこと！

ハッピーエンドを好む私には結末に少し不満はあるけど、そもそも私が比企谷くん

悲恋のお話を読みたいっていったんだしね。

そして比企谷くんがいったように、私が見たかった悲恋の物語そのものだった。

予想を上回る良さといつていいくらい。

映像は綺麗だしシーンごとに流される曲も素敵だったな。

曲がほんとうに良かったから、今度自分で弾いてみよう。

そして二つ目。一色さんと色々とお話ができなこと！

彼女と知り合った経緯が経緯だし仕方がないかもだけど



あんまり好かれてないのかな？ と感じるものがあつたと思う。

あとで知ったのだけど、他校との合同クリスマスイベントがなにやら大変だった様子。

それで一応生徒会の先輩としては、相談なりなんなりして欲しかったのが本音。

でも一色さんが前生徒会メンバーじゃなく奉仕部の子達を頼ったことを知ったとき、正直ショックだった。

自分は頼りにならないんだなと仕方がないと思いつつも、やっぱり少し。

そしたら今日たまたまその話題になったとき、一色さんが顔を赤くしながら口にしたその理由で

とても嬉しい気持ちになれた。

彼女は前生徒会メンバーの全員が三年で皆受験生だったから、心配をかけたくないし受験の邪魔をしたくなかったと言ってくれた。

それで推薦が決まっていることを知ったバレンタインのときは誘ったんですけど

……

そう言ってくれたときには、思わず一色さんに抱きついてしまったくらい嬉しかった。

まあ比企谷くんは「俺には迷惑かけてもいいのかよ……」と愚痴を言ってたけど。

それに答えた一色さんの「当たり前じゃないですかー!」には笑ってしまった。

それでほんの少しだけど、以前より一色さんと仲良くなれた気がした。

そうして三つ目は、比企谷くんのことを色々と知ることができたこと!

まさか比企谷くんも秒速を見に来てる私が、実は自分のことを見に来てるのは夢にも思うまい。

なんだか探偵になった気分が楽しかった。

そして彼を見ていて気がついたのは、ぶつきらぼうだけど凄く気遣いやさんだということ。

私は年上だからそれでかな? と思ったりしたけど、自分になにかとちよつかいをかけてくる

一色さんにも優しく声をかけていたと思う。

そうやって比企谷くんを見てみると、同じように視界に入ってくる一色さんは多分、比企谷くんに好意を持ってるとんだなつということに気が付く。

そうとはわからないように上手く演じてはいるけど、比企谷くんが口にする言葉にちゃんと耳を傾けてるし、自分が口にした言葉を比企谷くんがどう受け取っているか凄く気にしているのが傍からみていると良くわかる。

でも、そんな一色さんを見て微笑ましく思う気持ちと一緒

もやもやした気持ちになってしまいう自分にも気付く。

なんだろう、これ……と思いつつ、仲良くじゃれあう二人を見てた。

そうだ。今日比企谷くんが言ったことやしたことまで彼に持っていたイメージが覆るような

そんな驚いたことがいくつあったことも書かないと。

そうだなあ、これもあつた順に書くようにしましょう。

えーつと、駅で待ち合わせをして皆が集めたとき、比企谷くんは申し訳なさそうに今日発売の新作を買いに本屋に寄り道していいか尋ねてきた。

私がいいよと答えると、比企谷くんはすいませんと口にして、ぺこりと頭を下げる。寄り道するなんて全然大したことじゃないのにひどく遠慮がちな比企谷くんをみていると

自分の要望を他人に対して口にすることに慣れていないのかな？ と感じた。

まあ、そんな比企谷くんに一色さんは「仕方ないですね。先輩、貸しですよ？」という

う。困らせていたけど。たぶん一色さんは比企谷くんを困らせるのが好きなんだなと思

う。そして三人で駅そばのマリンピアへと向かった。

店内に入り本屋さんに着くと比企谷くんはお目当てのラノベを購入。

その事でちよつと嬉しそうな彼を見ていると、同じ本好きとしては親近感が湧いてくる。

そして本好きの常として本屋さんに入ってそわそわしている私を見た比企谷くんは少し見てまわりますかと言ってくれた。

渋る一色さんを比企谷くんが宥めてくれてる間棚を見ていると、すぐ傍でベビーカーに乗せられた赤ちゃんが泣きだしてしまいお母さんがいくらあやしても泣き止まなかつた。

その隣にいた中年のおじさんは露骨に顔を顰め舌打ちまでします。

以前読んだ本で知つただけで、育児する生物において赤子の声は泣き止まず努力を喚起させるものらしい。早く乳を与えたり餌を口に運んだりして黙らせたい、つまり聴いていると何とかせねばならないと思わされるものということ。この何とかせねばという気持ちはイライラと同質で、故に母性父性の強い人程子供の声でイライラするらしい。

なのでおじさんの気持ちもわからなくもないけど、周囲にペこペここと謝っているお母さんに

そんな顔をしないでも…….と思つていた。

なにか手助けできれば良いのだけど、その手の知識に疎い私にはどうすることもできない。

それで、謝ってくるお母さんに気にしないでくださいと答えることしかできずにいると

比企谷くんが周囲の人たちの間をするする抜けて歩いていき、お母さんに声を掛ける。

「あの、上から話かけるより向かい合って話しかけたほうが、赤ちゃん安心しますよ。ベビーカーは俺が押さえておきますんで、よかつたらやってみてください」

普段の比企谷くんからは想像もつかないくらい柔らかい微笑みを浮かべ優しい声でそう口にしたその姿に驚いていると、お母さんは言われた通り、でも半信半疑な様子で

赤ちゃんと向かい合い話しかけ始める。

すると、比企谷くんの言う通り、赤ちゃんはすぐ泣き止んだのでさらに驚いてしまった。

お母さんに感謝され周囲の人たちに褒められ照れくさそうに戻ってきた比企谷くんは

なんだかとても頼りがいのある男の子、男の人かな？ そう思っただけで感心してしまう。

一色さんはそんな比企谷くんを、ぼかーんとした顔で見たあと凄く嬉しそうに微笑む。

その笑顔を見て、また胸の奥がもやもやとしてしまう。

本当になんだろう、これ…….と思っていると、一色さんが比企谷くんに声をかけていた。

「せんぱいつ。今のはかなりのポイントアップですよ!」

「なんのポイントだよ……」

「私の好感度、いろはすポイントです!」

「いらないんだけど、そういうの」

「ちよつ、いらないとはいなんですか!」

「ちなみにそれ貯まると、どんな特典があるんだ?」

「そうですね、私とデートができます! 嬉しいですか? 楽しみですか?」

「嬉しくも楽しくもないんだけど……。めんどくさいし」

「メンドくさいとはなんですか! ほんと先輩は女の子の扱いが下手くそすぎですね。

ダメです。まったくもって、ダメダメです!」

「へいへい」

ぶんすか怒っている一色さんに、比企谷くんはめんどくさそうな顔をして言う

一色さんはさらにぶんぶんと怒り出す。

そんな二人を見ながら、私もポイント制度を導入しようかしら、などと考えていると一色さんがすすつと寄ってきて「城廻先輩。今のどう思いますか？ 最低ですよね

！」と

愚痴というか恨み言をこぼしてきた。

それに苦笑で答えつつ私も比企谷くんに思ったことを伝えてみる。

「でも、比企谷くんすごいね。あんな風に泣いてる赤ちゃんあやせるなんて。

私そういうのに疎いから、尊敬しちゃうよ！」

言うのと、比企谷くんは「そ、それほどのことじゃ……」と言って照れたように微笑んでくれた。

そんな彼を見て、なんだか胸の奥がぼかぼかするような暖かい気持ちになっていると一色さんが私の耳元に口を寄せ、こしょこしょと呟いてくる。

「城廻先輩。先輩って年下好きなんですよ。クリスマスイベントのときもですね

手伝ってくれた小学生の中で一番可愛かった子になにかにつけて近づこうとしたりして。

まあフラれてましたけどね」

「おいこら、一色。めぐり先輩に変なこと吹き込んでんじやねーぞ」

もつと色々聞きたかったのだけど、比企谷くんが話の途中で割って入ってきたのでそれ以上は聞けなかった。

比企谷くん年下が好きなのか、と思うと、さつきまでぼかぼかしていた胸もなにやらやるせない気持ちで一杯になってしまふ。

ま、まあ年上とはいえ、彼とはひとつしか違わないし……。

そう自分に言い聞かせている自分に気付き、なんでそんな事をするのか自分で自分に頭を捻っていると、二人の仲良さげなじやれあう声が耳に届く。

「でも先輩。ほんとうのことじゃないですかー!」

「ま、まあ、確かに本当ではあるんだがな、なんつーか言い方が……」

「本当のこと。つまり先輩は年下の幼い子が好きで好きで堪らないということですね?」

「あのなあ、一色。公共の場でそういうことを大声で言うのは、やめてもらえませんかね……」

困ったように顔を顰めている比企谷くん。そのすぐ隣で楽しげに笑う一色さん。

そんな二人を見ると、昨日、一色さんの場所にいたのは私なのに……と思つて胸が締め付けられるように苦しくなってくる。

そして、その思いが顔にでないよう、私は一生懸命笑顔を作っていた。



× × ×

ペンを置きノートを閉じる。

今日はとても日記を書く気になれない。

ため息を吐き麦茶を飲もうと机の隅に置いておいたコップに手を伸ばす。すると、コップの中身はいつの間にか空っぽになっていた。

## 両親の馴れ初め

開け放していた窓から風が吹き込む。夏とはいえ夜半に差し掛かると気温はぐっと下がり

遠くから虫の音が聞こえてきた。

私は空っぽのコップを片手に部屋から出ると、リビングへと向かう。

上手く寝付けなそうだし夏休みに入り大学もない。

荷物の整理などやることはあるけど、たまには夜更しもいいと思う。

リビングの灯りをつけ、対面式キッチンのほうへと回る。

冷蔵庫を開き麦茶が入ったボトルからコップに移し替えようとしたが、

なんとなく温かいものが飲みたくなり、電気ケトルをセットしてお湯が沸くまで暫し

待つ。

電気ケトルを眺めながら、比企谷くんのお邪魔したときのことを顧みる。

三人で映画を見ていると、比企谷くんと一色さんは仲よさげにこしよこしよと内緒話をしていた。

映画の内容について話しているだけだし声が大きかったわけでもなかったけど、

妙に気に障ってそんな二人の邪魔をするようなことをしてしまったと思う。比企谷くんの部屋なのに、その彼に「しずかに」なんていつてしまったたり睨んでしまったから、嫌な子だって思われてないかなあ……。でも胸がざわついてどうしようもなかった。

それで、少しだけ彼に触れなくなつて、彼の頭にぺしんつとチョップをってしまった。触り心地が良くてそのまま撫でていたら、一色さんむつとした顔してたな。それを見てちよつといい気分になるなんて、最低すぎる……

考えていると、お湯が沸く音がした。

そこで思案をやめ、お茶の用意をし湯呑に焙じ茶を注ぐ。

ケトルを置き湯呑に手を伸ばすと、不意にドアが控えめに開けられた。

「めぐり、まだ起きてたの?」

見ると、眠そうに目をこすっているお母さんが立っていた。

トイレに向かう途中、電気が点いてたから見に来たらしい。

「んっ、なんか眠れなくなつてね。お母さんもお茶飲む?」

「そうね。いただこうかしら」

「うん。焙じ茶でいい?」

「めぐりが和茶って珍しいわね。いつもは紅茶とかココアばかりなのに」

「うん。たまにはね」

「そうなの？　じゃあ私も焙じ茶、いただくかしら」

「はい」

手早くお茶を淹れ両の手に湯呑を抱えて、リビングのテーブルまで運ぶ。

「どうぞ」

「ありがとう」

お母さんは湯呑を受け取ると、息を吹きかけてから口をつける。

私もお母さんの前の椅子を引いて座ると、同じように息を吹きかけてから口をつける。

それから暫くお互い無言のままお茶を啜っていると、お母さんが話しかけてきた。

「めぐり。あなた一人で向こうにいったって、やっていける？」

「うん。大丈夫だよ、お母さん。行くっていつでも二年だけだし、あつという間だよ」

「でも、年頃の娘が一人で、海外になんて……」

「同じ大学から五人行くからさ。その内二人は友達の子だし、まあなんとかなるって」

「でも……」

「お父さんはなんて言ってるの？」

「お父さんはね、めぐりが本格的に語学を身に付けたいっていうなら行かせてやれって。でもね、やっぱり心配でしょうがないみたい。」

お父さんの会社の海外支店で働いている山崎さんってあなたも知ってるわよね？」

「うん。ウチに何度か来た人だよ。すごく身体の大きい」

「そうそう。その山崎さん今ね、めぐりが行く先のエリアを担当してるらしくって

娘がそつちに留学するんで目を掛けてやって欲しいって頼んでたわよ」

「ちよつと、やめてよ、もー。子供じゃないんだから」

「何言ってるの。あなたはまだ子供よ。」

それに、お父さんとお母さんにとっては、あなたははずつと子供」

「それは、まあ、そうだけどさー」

不貞腐れた私を見てお母さんは柔らかなく微笑み

その微笑みに釣られて私も微笑んでしまう。

「ありがとうね、お母さん」

「お父さんにもお礼いっておきなさい」

「うん。明日朝いうね」

「そうね。お父さんも喜ぶわ」

「うん」

そうしてまた暫く無言でお茶を啜っていると、ふと思いついたことがあったのでお母さんに聞いてみることにした。

「お母さんはさ、どうしてお父さんと結婚したの？」

尋ねると、お母さんは驚いたような顔をして私を見てくる。

「どうしたの、めぐり。そんなこと聞くなんて」

「んっ、や、なんか、どうしてかなって」

「そういえば、お父さんとの馴れ初めって、話したことなかったわね」

「うんうん。お母さん。良かったら聞かせて！」

「そうねえ……。えっとね、私とお父さんがめぐりの通ってた総武高校の一回生だった

ことは

話したことあったわよね」

「うん。上級生が居なかったんだよね？」

お母さんは頷くと、当時のことを思い出すように目を細める。

「上級生も下級生も居なかったからかしらね。」

同級生は皆仲良しで、とても和気あいあいとした感じだったわ。

でもね、その代わりというか纏まりがなかったのよ」

「纏まりがない？」

「そう。それと前例が全くないから、何をするにも手探りでね。

お母さん言つてなかったけど、初めての文化祭の時、実行委員長だったの」  
驚いて声がでない。

そんな私を見てお母さんは微笑むと、お茶を一口飲み喉を潤してから話を続ける。

「それでね。今もそうだと思うけど、生徒会の人たちが文実のサポートしてくれたの」

「それで、お父さんと出会ったの？」

「そうなの。お父さん生徒会で庶務をやつててね。それで当時の生徒会なんだけど

お父さん以外女の人ばかりで、なんか良い様に使われてみたい」

思い出したようにくすくすと笑うお母さんを見ながら、温和だけど寡黙で照れ屋なお

父さんが

女の子たちにちよっかいかけられて困っている姿を想像してみる。

そうして想像したお父さんの姿になんとかおかしくなつてしま

お母さんと二人でひとしきり笑い合うと、気になったことを尋ねてみる。

「それでお父さんに助けてもらつて、こう、好きになちやつたとか？」

「そうねえ、一杯助けてはくれたんだけど……」

なんというかすごく文句が多い人だったの、お父さんって」

「ええっ……あのお父さんが？」

「そうなのよ。今は殆どそういうことを口にしないけど、当時はねえ……  
文句っていうか泣き言とか恨み言っていうのかしらね、あれは。」

早く帰ってテレビが観たいとか働くと死ぬ体だから仕事したくないとか  
ぶつぶつ言ってるような人でね。それでも、誰よりも働いてくれたの」

あのお父さんが……意外すぎてちよつと想像出来ないなあ〜

「ただね、めぐりが生まれた時に、お父さんこういったの。」

『子供の前で不満を口にしたり態度に出ないようこれから気をつけるよ。』

子供は親を見て育つて言うしな。不満ばかりこぼす子になって欲しくないから  
さ』って」

「まあそれを聞いたときお母さんね。『私にはいいのかよ』って思わずいちやっただけ  
ど」

「お父さんは、なんて答えたの?」

「ごめんなさいって謝ってたわ。それで『でも、聞いてもらえると嬉しい』って言うから  
今でもたまに会社の愚痴とか聞いてるわよ」

お母さんは言うのと、嬉しそうに微笑む。

愚痴や恨み言。どちらもあまり耳にしたくないことだと思ふ。

でもずっと一人で抱えているとその行き場のない感情が当人を苦しめる。



それをお母さんはわかってるから、お父さんのそれを聞いてあげるし

お父さんも他の誰にも言えないことを、お母さんになら話してるんだなと思うとそんな両親の仲睦まじさが嬉しかったり羨ましかったりしてしまう。

「それでね。文化祭のときなんだけど」

お母さんが話の続きを口にする。意識をそちらに戻し、お母さんの声に耳を澄ます。

「みんなやる気はあるんだけど前例もないし纏まりもないから意見の食い違いが多くてね

揉め事が絶えなかったの。それで途中からは、揉めるために揉めるようになっちゃって全然作業が進まなくて……」

お母さんはため息を吐くと、手に持った湯呑を見つめる。

「それを見かねたお父さんが進捗会議の時に、みんなを怒鳴り散らしたのね。

揉めてる人も揉めてなかった人もみんなまとめて」

「そしたらね。お父さん一人が悪者になって、それでみんなが纏まって

そこからはみんなで頑張つて、そのおかげで文化祭が滞りなく上手くいったの」

「でもお母さん、お父さんがなんでそうしたのか全然わからなかったのね。

みんなが揉めて人手が足りないとき、あんなに一緒に頑張つたのにどうしてって」

「それでお母さん、お父さんのこと酷くなじちゃってね。」

結局、卒業するまで、お父さんと話をする事すらないままだったの」

あまりにも自分と彼の境遇と同じなので、その後どうなったのか気になった私は前のめりになって続きを促してしまふ。

そんな私にお母さんは苦笑しつつ、話の続きを口にする。

「そうねえ……。たしか大学に入って三ヶ月くらいしてからかしら。

たまたま立ち寄った本屋さんで、お父さんと再会してね。

お母さん、お父さんにあまりいい印象がなかったから軽く世間話をしてそれで終わるつもり

だったんだけど、話す内になんとか全然違う人と話してるような気がしてきたの」

「それで気になって、もっと話したくなつて、色んな理由をくつつけて

お父さんと会うようになったのね」

「ちやうど梅雨時だったから、雨宿りとか理由をつけてね。

渋るお父さんを引っ張り回して、お父さんもなんだかんだで付き合ってくれてたからそれが嬉しくつてね。多分それでお母さん、お父さんに一目惚れしたんだと思う」

「何度も会つてたのに、一目惚れなの？ 惚れ直したとかじゃなく？」

「そうねえ。惚れ直すだと、惚れてないといけないじゃない？」

「まあ、うん。そうかも」

「お母さん、お父さんのこと、きちんと見ていなかったと思うの。」

それでちゃんと見るようになって好きになったんだから、やっぱり一目惚れだと思うな」

「そかあー」

「うん。だからね、今でもたまに思うの。」

あの時、お父さんと再会していなかったら、お母さん今頃どうしていたんだろうって。多分今よりずっと、幸せだなんて思える事が少なかったんだろうなって。

今お母さんが幸せなのは、お父さんとめぐりが居てくれるからだしね」

「お母さん……」

「それでね。」

お母さんが居る事で、二人がお母さんみたいに幸せだなんて感じてくれるといいなって思うの」

私はそつと手を伸ばし、お母さんの手を握り締める。

「お母さん。私、お父さんとお母さんの子供で幸せだよ」

言うとう、お母さんは泣きだしそうな、でも嬉しそうな表情を顔に浮かべた。

間違つてはいないけど、ちよつと違う

月曜日の昼下がり。

夏休みに入り大学もない私は、ベットでゴロゴロ転がりながら秒速のページを捲る。

一コマ一コマ目で追いながら、このお話を私に薦めてくれた彼のことを想う。

「比企谷くん。気付かなかつたけど、ずっと私のこと好きだったのかなあ……」

こんな風に考える私のことを、こいつなりに自惚れてんの？　と思う人もいるかも知れない。

でもそう思える根拠が彼とのこれまでを見直すと、いくつもあつたことに気付いたのだ。

比企谷くんと初めて会つた文化祭のとき、他の文実の子たちが彼に仕事を頼むと

彼は心底嫌そうな顔をしてぶつくさ文句を言つていた。

でも私がお願いと、ほんのちよつぴり顔をこわばらせてはいたもの

で、ぎこちない笑顔で快く引き受けてくれたと思う。

学年が違い接点も薄かつた私と彼を繋ぐのが文実での作業だつたから

彼はきつと嬉しかったのかも知れない。

もっと仕事を回してあげれば良かったかな……、なんて今更ながら考えてしまう。

他にも有志申し込みでたまたま来ていた葉山くんを混じえ三人で申請に対応したとき。

申請ラッシュが終わり一息つこうと思った私がお茶を淹れたのだけど、

比企谷くんの湯呑にはまだ少しお茶が残っていたので葉山くんにだけお茶を出した。

すると比企谷くんは葉山くんを恨めしげな目で見つめていたから

きつと拗ねていたのだと思う。

そして文化祭だけでなく体育祭やバレンタインデーのときも含めて考えれば

もしかして……と考えることが沢山あったように感じる。

私にその手の経験が全くなく気付くのが少し遅かったけど。

そうして私は目を瞑りその事に気付く切っ掛けとなった、今朝の出来事を思い出す。

× × ×

いつもと同じ時間にセツトした目覚ましの音で目を覚ます。

休日とはいえ城廻家の朝は早い。

何故なら城廻家では休日でもいつも通りの時間に起きて

家族みんなで食卓を共にするよう決まっているからだ。

朝だけではなく夜も、両親の仕事の都合さえつけば家族揃って食卓につくようにしている。

友人知人にはめんどくさそうと言われることが多いが

私自身はそんな我が家のしきたりを結構好ましいと感じている。

家族揃って食事を取りながらその日にあつた出来事を話し、それぞれの立場で意見を述べる。

そんな風に育つた私はそれだからなのか、女子特有のグループを作りそのグループのみで

行動するということが、とても苦手だった。

他のグループの子でも気の合う子はいるし、同じグループでも気が合わない子もいる。

それで他のグループの子と仲良く話すと、向こうに入れはいいじゃん、と言われたことが

度々あつたと思う。

それが嫌で、一人でもできる趣味に耽ることが多い子になった。

そして似たような子たちと仲良くなり、それなりに快適な学校生活を送っていたと思

う。

だから文化祭のとき、私と同じ感じで単独行動を好んでいそうな比企谷くんに他の子たちより声を掛けていた気がする。

そんな事をつらつら思い出しながら、とてとてと階段を下りて洗面所へと向かう。すると洗面所では、お父さんが電気カミソリで髭を剃っていた。

おはようの挨拶を交わし場所を空けようとお父さんに、

自分は休みだからゆつくりでいいよつと言つて洗濯機に寄りかかる。

ら  
につこりと微笑みそれでも早く髭剃りを終わらそうとするお父さんの背中を見なが

昨夜のお母さんとの会話を思い出し、それで思ったことを聞いてみる。

「お父さん」

「なんだい、めぐり」

「お父さんてさ、怒鳴ったこととかあるの？」

温和で寡黙なお父さん。私の記憶にある限り声を荒らげたことなど一度もなかったように思う。

そんなお父さんが怒鳴り散らしたというのだから、余程腹に据えかねたことがあったのかなと

気になったからだ。

「ん、一回だけ、そーいやあつたな」

「いつ？」

「高校生の頃だな。というかどうしたんだ、めぐり。そんな事聞くなんて」

「ん、私、お父さんに叱られたことはあつたけど、怒鳴られたことって一回もないからさ。」

お父さんも怒鳴ったりするのかなって思つて」

「そりやお父さんも人間だから、怒つて怒鳴ることもあるさ」

お父さんは苦笑混じりにいうと、暖かい微笑みを鏡越しに向けてくる。

それに微笑みを返しながら、もう少し踏み込んで聞いてみる。

「どうして怒つたの？」

「どうしてつて……。うーん。そんなときな、お父さんの好きな人が大変な目にあつたんだ」

「大変な目？」

「ああ。ちよつとその子が責任ある立場にいてな。お父さんはその手伝いをしてたんだが」

どうにも上手くいかなかったんだ。やってる事のな」



「うん」

「その子自体はすごく頑張っているのに、他のみんなは自分勝手なことばかり言っていたんだ。」

それで上手くいかなかったら、その子が責められる。

そんな理不尽さがお父さん、どうしても我慢できなくてな」

「それで怒鳴ったの？」

お父さんは頷き、話の続きを口にする。

「お父さんが怒鳴って、それでやってる事が台無しになつても、まず責められるのは

お父さんになるからな。その子が辛い目にあうくらいなら、それでも構わない。

そう思ったんだよな、当時」

その時のことを思い出したのか、お父さんは薄くため息を吐く。

鏡越しにそれを見ていた私と目が合うと、お父さんは困ったような微笑みを浮かべた。

「まあ上手い具合にその後はトントン拍子にことが運んだから、良かったけど」

「その子はそれに気付いてくれたの？」

「んー、どうだろうな」

「言わなかったの？ こういう気持ちで、そうしたんだって」

「ああ、言わなかったな」

「どうして？」

「うーん……。結局、お父さんが一番許せなかったのは、自分勝手な輩じゃなく

そういう輩から好きな子を守ることすら出来ない自分だったんだよな。

それで全てを台無しにするようなことをした訳だし、言えないよな、そんなことは」

「そうなの？」

「まあ、あれだ。男のやせ我慢ってやつだ」

「そかあ……。男の子ってそういうもんなんだね」

「ああ、そういうもんだ」

「それでその後、その子とはどうなったの？」

「まあ色々あったけど、今も当時と変わらない笑顔を見せてくれる。

そんな関係になってるな」

「それは良かったね、お父さん」

「ああ、まったく。本当に良かった」

× × ×

両親の頃と似たような状態だった私たちの文化祭。

少し違うところをいえば、文実の委員長が相模さんで私じゃない点。ただ比企谷くんと相模さんの関係を見ると

比企谷くんが相模さんに好意を抱いてるとはとても思えない。

相模さんのほうは言うに及ばずだしね。安心安心。

そうすると比企谷くんはもしかして私のことを……なんて思うのは

ちよつと少女漫画脳過ぎるかも知れないけど、そうじゃないとは断言できないと思う。

あー、でも、雪ノ下さんのためかも知れない……

はるさんの妹だけあって、あの子綺麗だしなあ……

ため息をこぼし、ベットから立ち上がる。

姿見の前にたち、自分の姿をじっくり見てみる。

うん。そんなに悪くないと思う。

ちよつと胸元に寂しさを覚えるけど、希少価値？　というか、これはこれでステータス。

などと考え満足した私はまたベットに横になる。ベットの横にあつたぬいぐるみを引き寄せ

きつく抱きしめながら、比企谷くんと両想いだったらどうするか考える。

「うん、あれだね。告白されたらOKすると思うね。いや、しないかな？ どうしよう……」

「それにもし万が一、付き合うことになったらだよ。」

まあ近い将来結婚とかするから、そうすると私、比企谷めぐりになるのかなあ〜

「でも私、一人娘だから、比企谷くんにお婿さんに来てもらった方がいいのかな？」

「そうすると、城廻八幡か……。うん、こっちのほうが呼びやすくていいかも」

「じゃあお婿さんに来てもらうとして、問題はあれだなあ。」

私が来年の春から二年間も留学しちゃうことだよなあ……」

「うくん、でもなあ。比企谷くん働きたくないっていつてるし、彼を養うとなると得意な語学をもっと勉強して、良いお仕事に就かないといけないからなあ……」

そんな事をうだうだ考えながら時計を見ると、午後の三時になっていた。

「今頃、比企谷くんと一色さん、二人で勉強してるんだよなあ……」

そう思うと胸がもやもやしてくる。

一色さん可愛いしなあ……。それにいい子だし。

やっぱり比企谷くんも、あんな子に迫られたらその気になちやったりするのか……。う、うーん。なにやら居ても立ってもいられない気持ちになってきましたね、これは。

取り敢えず何かしなくちゃとは思うのだけど何をしたら良いのかわからなくて困る。  
うんうん唸っていると、ベットの脇に置かれた「秒速」の単行本が目映る。  
そうだ。感想をメールで送ってそこからこう、うん。  
彼ともっと話がしたい、そう思った私は携帯へと手を伸ばした。

## 変わらないその姿のままに

月曜日の夕暮れ。

比企谷くんに連絡を入れ彼と会う前に、色々と準備を済ませようと思った私はベツトから起き上がる。

そして、昨日観た桜花抄のような素敵な時間を彼と過ごしたいと思い、二人で食べるお弁当を作りお風呂に入るとお気に入りの浴衣に袖を通す。

後はお化粧してつと鏡台の前に座り、少し考え思い直してそのままで行く事にした。

比企谷くん、口……じゃなかった幼い感じの子が好きみたいだしすっぴんの方が彼の好みに合いそうだしね。需要に合わせて供給しないと。

髪型をどうしようか迷い、いつものお下げ髪でいこうか考えたけど横に流しておくだけにする。

ただでさえ童顔でさらにすっぴんなのにこれでおでこをだすといくらなんでも子供っぽすぎるかなって思ったから。

それでそういう対象に見られなくなっても困るし。

最後に、用意していた長羽織を身につけ鏡の前に立つとくるりと回って自分の姿を色々な角度で確認してみる。

自分でいうのもなんだけど、なかなか良い感じ。

「いれでよっ」

満足した私はベットに腰を下ろし、携帯を手取る。

感想を伝えるメールは書き終わっているので、後は送るだけ。

もう勉強会も終わっている時間だから、勉強の邪魔にもならないはず。

そう思っただけ送信ボタンを押そうとするのだけど、どうしても躊躇ってしまう。

メールをしてもし返事が返ってこなかったら。お月見に誘ってもし断られたら。

そして自分がそうすることで、一色さんを悲しませることになるかと思うと

そうしていいのか迷ってしまう。

一応、二人の関係について、比企谷くんから昨夜の帰り道でそれとなく尋ねたので二人が付き合っていないのはわかっているけど。

それでも、他の誰かの好きな人に横から後から想いを寄せることに、なにやら罪悪感めいたものを感じてしまう。

そうやって、うじうじぐだぐだしながら時間だけが過ぎていき夜も深まった頃、比企谷くんからメールが届いた。

驚かせてしまうと知りつつも声が聞きたくて電話を掛けてしまいその声を聞くと我慢できずに彼のことを呼び出してしまふ。

彼の今日という時間が私じゃやない他の誰かに占められている。

そう思うと、そのことが耐えられないくらい嫌だったから。

そうして私は、比企谷くんに会える喜びと一色さんへの後ろめたさを抱えながら待ち合わせ場所へと足を運んだ。

×  
×  
×

月明かりの下、彼と会えた私は嬉しくて嬉しくて仕方が無かった。

ぼーっとした様子で自分の浴衣姿に見惚れてくれているようなそんな彼に

言葉にできない満足感を覚えながら、その手を引いて自分のお気に入りのお気入りのお場所へと誘う。

本殿の軒下の縁側のようになっている場所に二人並んで腰を降ろし

彼のことを教えてもらい、自分のことを知ってもらおう。



好きなこと、苦手なこと、将来のこと、過去のこと、あれこれ話し楽しい時間を過ごす。

会話の途中、慣れない茶目つ気をだし、なんとか次の約束を取り付けて嬉しい反面いつ彼が一色さんの想いに気付き、彼女に惹かれないかと不安に駆られてしまう。今そうしているようにゆっくりと、彼との距離を詰めていきたいと思いつつも、それに気付くと気持ちが急いでしまいどうしようもなかった。

そして自分が今からする事が、一色さんから彼女の好きな人を奪い取る行為だと理解しつつ、

彼の気持ちを確かめるような、そんな言葉を口にする。

私の問いかけに、比企谷くんは私の望む答えを素敵な古歌で返してくれた。

彼が自分と同じ気持ちでいてくれたことに飛び跳ねたくなるような嬉しさを感じながら

それでも突き刺さり抜けてくれない罪悪感に苛まれつつ、自分の想いを彼へと伝えた。

この時のことを後になって振り返れば私は慣れていなかったのだと思う。

全部初めてだったから。恋も、嫉妬も、欲望も。

比企谷くんと再会しそれまでとは違う変わった私は絢交ぜになった気持ちで月を見

やる。

見上げた月は遠く遠く、私たちを静かに見つめていた。  
きつとずっと昔から、変わらないその姿のままに。

### 第三章 言葉は行き違い、気持ちはすれ違い 比企谷小町の憂鬱と決意

七月末。終業式を終え帰りのショートホームルームも済ませた私こと比企谷小町は自転車をゴコゴコ漕いで家へと帰る途中、携帯にメールが届いたので足を止める。日陰に入り画面を見ると、差出人はいろは先輩。

う、うくん。困ったなあ、あんま見たくないや……。

一昨日の日曜日の夜。いろは先輩のお兄ちゃんへの気持ちは聞いて、その思いが叶うようお手伝いをしたいと言ったのは確かに小町の方。

でもまさかあのごみいちやんが、次の日には彼女を作って朝帰りしてくるなんてそのときは予想もしなかったし。

あれはなしでとか、いまさら言いづらいんだよなあ……

それにしてもなんだろう、このメールの題名。

『私、絶対想いを伝えるマシーンになる!!』

こ、こまるなあ……。何事においてもやる気があるのは大変結構な話しんだけどこれ思いが叶わなかったら、やる気が殺る気になる感じだよなあ。

ほんと、どうしよう……と思いつつ、恐る恐るメールを見ることにする。  
携帯をいじってフォルダの一番上、最新のメールを開く。

差出人： いろは先輩

題名『私、絶対想いを伝えるマシーンになる!!』

本文『小町ちゃん、こんにちはー！ 今日暑いなね』

それはそうと私ね、決めたんだ！ 今まではお兄さんにフラレたら嫌だなどか  
自分のプライドを守ることばかり考えていたけど、それじゃあダメだつてね！  
やっぱりさ、好きな人にはガンガン当たっていかないと、てね！

それでね、今お兄さんと稲毛海岸駅前のロイヤルホストでご飯食べてるんだけど  
小町ちゃんも良かったら来ない？

実はね、お兄さんとの距離をもっと縮めたいから泊りがけで勉強会を開くことに  
したんだけど、お兄さんさつきからずーっと渋ってるの、参加することに。

理由がね、小町ちゃんと半径五キロ以上離れると死ぬ身体だからとか言つて  
き。

なら、小町ちゃんも合宿に参加すれば、問題ないじゃない？

それで一緒にお兄さんを説得して欲しいんだよね。

アイス奢るからさ、待つてるね？ 日曜日の約束、まさか忘れてないよね♥』

メール画面を閉じる。

う、ううくん、これは……。

！ の多さに決意というかやる気を感じる。

それに、良かったら来ない？ って書いてあるけど、これ絶対に来いってことだよ。あとあれだね。問題ないってあるけど、問題しかないんだよね……

縮むのも二人の距離じゃなく、お兄ちゃんの寿命なような気もするし。

それと小町が説得しなくちゃいけないのはどっちかというと、いろは先輩の方なんだけど。

最後の♥印も恐怖を増幅させるのに一役かかってるし、これほんとどうしよう……

見なかったことにして、深夜に『ごめんなさい。電池切れてました〜』とか返そうかな……と置いていたら、LINEもきた。

既読が付くから見たら不味いのは承知の上なんだけど、どんな文章が書かれているか気になっちゃうんだよね。怖いものみたさというか。

好奇心という名の欲望に負けLINEを開く。

『小町ちゃん。はやく来てえー◇∞◇』

お兄さん帰り支度始めてて、このままじゃ逃げられちゃうよ〜』  
LINEを閉じる。

むしろ逃げて欲しいところだけど、これ今回逃げててもこの先もずっと続きそうだよなえ。

下手したら家にまで押し掛けてくるかも知れないし……。

夏の暑さと答えの出ない思案に疲れ、虚ろな視線で周囲を見やる。

暑さのせいで、アスファルトから陽炎が立ち上がっていた。

昼下がりの街はセミの声と行き交う車ばかり音を立てて、人通りは少ない。

ぼーっと陽炎を眺めながら、一生懸命だな、いろは先輩。と思う。

「小町にもそういう人、いつかできるのかなあ……」

思わず漏れた自分の呟きに、自分で微笑んでしまう。

そういう人に早く会いたいな、と思いつつも、今はお兄ちゃんのことをどうにかしたいと。

まあ花の女子高生が自分の恋愛より兄の恋愛事情に頭を悩ませるのもどうかと思うけど

小町だけが知っていたお兄ちゃんの良いところを他の誰かも気付いてくれたって事だしね。

それが悪い方向にいかないようにしないと。

ほんと手間が掛かる兄だけど、ここは小町が間に入り上手くフォローして

いい感じに持っていけばいいか。

考えが決まれば後は早い。手早くメールとLINEを返し、自転車に跨る。そうして夏空の下、お兄ちゃんというは先輩が待つ場所へと向かうためわたしはペダルを踏む足に力を入れた。

# 今年の俺は一味違う

七月末。終業式を終えた夏休みの前日。

俺は稲毛海岸駅前のロイヤルホストで大変な目に合っていた。

「せんばいつ。いい加減観念してくださいよ〜」

「一色。そう言うけどね……。ていうかお前ら、マジで手え離せよ……」

「じゃあ、比企谷。手を離れたら、一緒に鴨川に行つてくれるか?」

「いや、行かないし。あれだぞ葉山。鴨川はアニメの町おこしで失敗したからな。

そんな場所に色々と失敗している俺が行ったら相乗効果で大変なことにだな……」

いやホント大失敗。お礼を兼ねて一色に飯を奢ったらこんな事態になろうとは。

それにどうせ行くならさ、大洗か高山がいいかなって、八幡思うの。

ガルパンも氷菓も面白かったしね。

てかこいつら、なんでこんなに力強いのか? ビクともしないんだけど……

なぜ俺がこんな目にあっているのか? 事の起こりはこうだ。

ファミレスにて一色に、こいつが企画した合宿について話を聞いた。

もちろん俺は「いつてらっしやい」とお見送り態勢に入ったのだが、



一色は許してくれずあーだこーだ文句を言ってくる。

それを右から左に聞き流していると、一色はぶんすか怒ってどこかに電話を掛けだす。

すると電話をして五分も経たずに葉山が現れた。

いつのまに葉山は一色のサーヴァントになったんだ？ と驚きぽかーんとしていると

葉山まで俺に合宿に参加するよう熱心に促してくる。

めんどくささMAXに達した俺が席を立てて逃げようとする、俺の右手を葉山が左手を一色が握り締め、説得しようと口々に言葉を重ねだす。

「なあ、比企谷。今年も一緒に夏を過ごそう」

「おい、葉山。そういう言い方は他の皆さんに誤解されるからやメロ」

ほんとやめて。店員さんや他のお客さんがびっくりした顔でこっちを見てるから。

つか、お前アレだぞ。この状況をもし万が一海老名さんに見られたら、

俺とお前の薄い本が書かれる危険性があるんだぞ？ わかってんのか。

てか葉山の手、大きくて力強いな。頼れる感じがする。

はっ！ いかんいかん。危うくうつつりしかけた。

このまま握られていたらその内、抱かれてもいい……とか思ってしまったそうさ。

そんな危険を感じた俺が一生懸命葉山の手を振りほどこうとしていたら一色が横から不満げに頬を膨らませぶーぶー言ってくる。

「そうですよ、せんぱいっ。去年行つたんなら今年も行きましょうよ〜」  
「いいか、一色。去年いつたから、今年はいかないんだ。」

もう充分。俺の心がそう告げてるんだな、これが」

「せんぱいっ、それ幻聴ですよ。わがまま言わないで皆でいきましょうよ、鴨川」  
自宅から出たくない。俺の望みはただそれだけなのに……

そんな小さな願いすら叶わないこんな世界なんて、いつそ。

などと言い出すと黒八幡化待つたなしなので止めておくことにする。キャラじゃないし。

つーか、一色。俺の意見を全否定してるお前はどうかんだよ……

「比企谷。俺というはだけじゃない。皆も、比企谷が来ることを楽しみにしてるんだぞうっそだあく。もし嘘じゃないにしても、あれでしょ？」

実際現地では居ても居なくても同じ扱いされるやつでしょ？

それにさ、もし仮にそうだとでもそれ、ヒキタ二くんとかヒキオくんのことだよな？

俺、ヒキガヤだから別人なんだよな。

などと思いつつも、誰が来るのか気になったので聞いてみる。

「葉山。来るメンバーって誰と誰なんだ？」

「えっと、去年の林間学校サポートボランティアに参加したメンバーだよ。」

それに今回は陽乃さんも参加する形かな」

「ちよつと待て。つーことは、戸塚も来るのか？」

「ああ、もちろん。戸塚も凄く楽しみにしてたよ」

葉山は言うのと、につこりうさんくさ笑顔を浮かべる。

一色もその隣でにやつといやな笑みを浮かべていた。

ハハ、こいつら。戸塚が来れば俺も釣られてくるだろうと思つてんだらうな。

まあアレだ。去年までの俺なら確かにそうかも知れんがな、今年の俺は一味違うんだ。

それを今から証明してやる！

「おいおい、お前ら。それを先に言えよ。で、いつだ？ なんなら今から行くか？」

「比企谷……」

「せんばい……」

二人に呆れた顔をされたが、俺としては至極当然のこと。

これはあれだな。安らぐという意味では戸塚は自宅と同義といつてもいいかも知れ

ない。

そうするとあれか。「戸塚いに帰る」とか「マイ戸塚ホーム」なんて言うのもありか。

思いつつ、気になったことを口にする。

「そういや、何泊の予定なんだ？」

尋ねると、一色が前のめりになって答えてくれた。

「えーつとですね。八月二十四から二十九までの五泊六日の予定なんです。

それぞれ不得手な教科が違うんで五日間日替わりにして各教科勉強する感じですかね」

ふむう、五日も共同生活をするのか……

パーソナルエリアが他人より広いぼっちの俺には、戸塚が居てもちと厳しいような。

それに夏アニメもそろそろ終盤。

オーバーロードと監獄学園のラストを生放送で見れないのはきついよなあ……

まあアニメを見ないであろう葉山と一色にこの気持ちは分かるまい。

なので言い方を変えて思ったことを口にする。

「そうだな。不得手なものとは人それぞれ。つーことはだ。

俺は数学の日だけいくから他の日はいなくていいよね？」

「ダメですよ！ ただでさえ先輩は数学が人より苦手なんですから。

数学の日以外でも数学の勉強をしてもらいます。もちろん私も国語の日以外も国語勉強しますし。

教えてくれる先輩がいないと困るじゃないですか!」

「お、おう」

いやそこは葉山に教われよ。と思ったが、葉山は葉山で三浦や戸部の世話で大変か。

雪ノ下は由比ヶ浜の面倒で手一杯だから、そうするとやっぱり俺になるのか。

「う、うーん。でもなあ。小町とそんなに離れると、俺死ぬかもしれないし」

「……比企谷。それはないだろう」

「ああ、葉山。そういうやお前、一人っ子だったな。」

千葉の兄妹はな、半径五キロ以上離れると死ぬ身体なんだ。覚えとけ」

「せんばい、なにしれつと嘘教えてるんですか……」

「嘘じゃねーよ。まああれだ。ホントかどうかちよつと微妙なだけで。」

でもよ、下手に試せないじゃない? 死ぬかもしれないし」

「分かりました。じゃあ小町さんにも来てもらえばいいんですね」

「えっ、いや、小町はあれであれだから」

言ってる間に一色は小町へとメールを打ち始める。

そうして暫くすると、令呪という名のメールで呼び出された小町や他の参加メンバー

も

続々とこの場に集結して来たのだった。

## 私の不安

しかしこの人、やっぱりかなりダメだよね。

そんな呆れた気持ちで目の前に座る先輩の顔をじとーつとした目で眺める。

先輩はさつきまでの不調面づらは何処へやら。

戸塚先輩と小町ちゃんに挟まれ至福の笑顔を浮かべている。

あまりの豹変ぶりに「せんばい、幸せそうですね〜」って嫌味を言ったら

「おう、翼が揃ったからなっ〜」って返ってきたし。

なんだよ、翼って……

それにしてもこの人、どうやって攻略すればいいんだろう。

難易度が高いというより落としどころが謎過ぎる。

でも城廻先輩にはデレデレしてたし、あーいうほわつとした感じの人ならいいのかな

?

そんな答えがでない悩みにう〜んと頭を捻っていると、雪ノ下先輩の声が聞こえた。

「でも比企谷くんを鴨川、というか別の場所に連れて行って平気なのかしら」

「どういう意味だ、雪ノ下」

「ほら、環境への配慮っていうの。これ以上被害を広げないようにしないと、ね？」  
雪ノ下先輩は言うのと、につこり花咲くように微笑む。

「いい笑顔で俺を汚染物質扱いするのはヤメろ」

「あーでも小町も、兄と父が入ったあとのお風呂はお湯交換しますねー！」  
「うんうん。わかるよー、小町ちゃん。」

わたしもね、お父さん入った後、お湯交換するし！」

言ってる内容はかなり酷いのに、そう感じさせない二人の声。

まあ気持ちはわかる。わたしもそうしてるし。

でも男の子たち、顔が若干引きつってますねえ。

「つーかさ、あーし思うんだけど。ヒキオの言うことなんか聞かなくて良くない？」

つべこべゆうなら縛ってトランクにぶち込んでおけば良いんだし」

「優美子マジ冴えてるわー！ それありじゃね？」

「ふっ、だしよ？」

三浦先輩の犯罪ギリギリというより、犯罪そのものの意見。

それに同意する戸部先輩もどうなんでしょうね。

でもそんならいじゃないと先輩を家から連れ出せないんだよなあ。

こういうのを参考にしなくては、と思い、頭の中でメモっていると



先輩が照れくさそうに鼻をこする。

「おう、戸塚と一緒なら別に構わん」

「ちよつと八幡。そんなこと言われたら、僕、困るよ……」

戸塚先輩がもじもじしながらいうと、先輩は薄く頬を染めていた。

その後二人でちらちら視線を交わし合い、目が合うと慌てたように顔を逸らすを繰り返す。

なんだろう、この二人……

先輩、ただでさえ重度のシスコンでアレなのに、もしかしてそつちまで完備なの？  
ストライクゾーンが広いのは結構だけど、社会的には完全にアウトなんです……

そしてそんな二人の姿に、海老名先輩が嬉しそうにうんうんと頷きながら

「今なら描けるー」と呟いていた。

なにを描くの……？ と慄きながら私は考えてしまう。

う、うん……

先輩を連れ出すことしか考えてなかったから安易に皆でとかいちゃったけど  
こんなにも濃い人たちだったとは。

この人達と一週間、寝食を共にしながら先輩に振り向いてもらえるよう頑張るのか。  
ちよつとどころか、かなり難しいような気がしてきましたね、これは。

× × ×

俺の袖をちまつと摘み恥ずかしげに俯く戸塚の姿に胸がときめく。

いやいかん。俺にはもうめぐり先輩という決まった人が。

だが待てよ。めぐり先輩は女子、戸塚は男子。カテゴリーが違うからOKかもしれない。というか、戸塚って本当に男子なの？

そういや戸塚の性別をきちんと確認した事ないな。まあある方がまずい気もするが。これまで何度も確認する機会があつたがその度に見逃しているし、万が一もありうる。

そんな微かな希望に賭けた俺は一色の方へ向き直る。

そして自らに課した使命を果たすため、参加すると伝えることにした。

「よしわかった。行こうじゃないか、鴨川に」

俺の言葉に、一色はほつとしたような息を吐く。

隣に座る戸塚は嬉しそうに微笑んでくれ、その笑顔を見て俺は思う。

付いててもいいや、と。

まあ最近、別にどっちでも構わないんじゃないかなって思ってたしね！

そうして、行き先について葉山が説明をしそれが終わると解散と相成る。

やっと開放された、はよ帰ろうと鞆に手を伸ばす俺の耳に葉山の声が聞こえた。

「良かったな、いろは」

「はい。葉山先輩が助言してくれたおかげです。ありがとうございます」

小さく囁きを交わす葉山と一色。二人の姿を見ながら俺は考えてしまう。

告白して上手くいかなかったら、振った方も振られた方も気まずくなつて離れていく。

今まで自分がそうだったしそれで他のやつらもそうなのだろうと勝手に思っていた。

そしてそうならないよう、あの冬の日、由比ヶ浜の願いを受け入れる形で

俺たち三人はそれぞれの想いに蓋をしたのだ。

それは俺の、おそらく雪ノ下の由比ヶ浜の、希ったものでは無いと知りつつも。

そうして得た、微睡眠にも似た停滞と安寧の日々。

それでもずっとこれで良かったのだろうか、心のどこかでわだかまりを感じていた。

そんな俺から見て、この二人は以前より距離が縮んだような気がする。

まあ一色の諦めの悪さ、もとい一途さに葉山も心が動いたのかも知れんが。

このまま上手くいってくれるならな、と思う。

だがそうになると、三浦がなあ……

誰かを選ぶというのは誰かを選ばないことだから仕方ないとはいえやっぱり少し可哀想なような気もする。

でもこればかりはどうしようもないことだしなあ。

そんな思いに耽つていると、由比ヶ浜が確認するよう一色に声を掛ける。

「ねえ、いろはちゃん。参加メンバーはこれで全員？」

「えつとですね。こちらには居ませんが他にお目付け役兼講師として

平塚先生とはるさん先輩も来てくれるそうです」

「姉さんが来るの……」

雪ノ下が顔を顰めるが、一色は由比ヶ浜に視線を向けていたため

気付かなかったようだ。そのまま話を続ける。

「です。教えられる人が少ないので頼んでみました。

平塚先生には伝えてなかったんですけどね。いつの間にか知ってました。

それでなにか間違いがあつたら不味いから同行するって。

そんな事が起きないように邪魔してやるって言っていましたよ」

「おいおい参加理由が最低過ぎるだろう、あの人。」

そういう暇があるなら婚活パーティーとか行ったほうがいいんじゃないか？

思いつつ、今回の参加メンバーに目をやる。

えーっと。俺、一色、雪ノ下、由比ヶ浜、戸塚に小町。葉山に三浦に戸部と海老名さん。

それで平塚先生と陽乃さんの十二人か。結構な大所帯だな。

しかし一週間も自宅を離れ遠くへ行くとなると、めぐり先輩に合宿のことを伝えておいたほうがいいだろうな。帰ったらメールでも送るか。

思案しながら皆と別れると、俺は小町と二人、家路に着いた。

× × ×

日が変わって次の日。夏休み初日だというのに私はてつとて学校へ赴き、勉強に励む。

今日は午前中、先輩は予備校の夏期講習を受けていたので午後からの勉強会。

これまで同様、二人で問題集をこなしつつ、互いにわからないところを教えて教わっている。

先輩が感心したような声で私を褒めてくれた。

「一色は本当に数学が得意なんだな」

うひひ。いい気分。

「得意というより計算通りにいくのが楽しいですね。

それで頑張ってたら成績も上がったって感じですよ！」

「好きこそもの上手なれってやつか」

「です。だからですかね、計算通りいかないとちよつとムカつてします」

あなたのことですよ？ せんばい。

心の中で思っていると、先輩は視線を自分の手元の問題集に落とし声を出す。

「んー、昨日の感じだと、葉山と上手くやれるように見えたけどな」

あちやく。そういうやそういう設定で先輩にあれこれ頼みごととしてたんだった。

そろそろきちんと話しておいたほうがいいのかなあ。

でもそうすると、なんでそうしたのかも話さなきゃならないし。

まだ心の準備がなあ……

そう思ひ些か困っていると、先輩が心配そうな顔でこちらを見ていた。

それで先輩の不安を解きほぐすよう、言葉を選んで口にする。

「ま、まあ、葉山先輩とはそれなりに上手くやってますよ」

「そうか。なら良かった」

ほつとしたように先輩は言うのと視線を机に戻し問題集を解き始める。

その横顔をちらちら伺いながら、本当はもう自分の想いをきちんと伝えたほうがいいんじゃないかな、と思つてしまふ。

付き合つて欲しいとかではなく、ずっと傍に居て欲しいと。

でもそれ、同じ事だよねえ。他の女の子と仲良くして欲しくないし……

それにしても自分が誰かにこんなに執着するなんて思つてもいなかつたな。

今まで自分で言うのもアレだけど、求められる方だつたし。

そんな事を考えてぼーつとしてしていると、先輩が話しかけてきた。

「一色。ちよつといいか？」

「はい、なんですか？」

「こうやって一緒に勉強していて思うんだがな。

一色はやつぱり理系に進んだほうがいいと思うぞ。これだけ向いてるんだし」

「うくん。それだと関係が切れちゃいそうで怖いんですよね、わたし」

今だつてこんなにも危ういのに、離れたらそれで終わりになりそうで怖い。

「そのなんだ。無理して同じ大学に入らなくても

連絡をまめに取り合うとかすればいいんじゃないか？」

用事がある時しか私に連絡くれないあなたがそれをいいますか？

こつちに用事があつて連絡しても、電池切れてたーとか言つて、次の日に返事を返す

あなたが。

まったくもう、と思いつつ、自分の気持ちに目を向ける。

そして想ったことを声にする。

「多分ですけど……。」

物理的に距離がひらくことよりも、それで相手との心の距離がひらくのが怖いんです。

それと……。自分の気持ちがずっと変わらずにそのままに在り続けれるのか、

不安っていうんですかね。ちょっとわからなくなってます」

言いつつ、沈んだ気持ちのままに俯いてしまう。少し間があつて、先輩の声が耳に届く。

「同じ場所に居られなくなつたくらいで無くなる気持ちなら、そもそも本物じゃねーだろ」

「そう、なんですかね。今はまだそうなっていないからどうなるかわからないんですけど……。」

それで踏み出したくても、今の関係が壊れそうでなかなかできないんですよね」

「関係が壊れるか……」

「はい。私、それがすごく怖いんです」



言つて、先輩の方へ顔を向ける。

先輩は困つたような、それでいて憂いを含んだ眼差しで私を見ていた。

真剣に私を気遣つてくれているその様子に嬉しい気持ちになりながらも

自分が怖いと、悲しいと感じた、昔読んだお話を口にする。

「先輩。甘い麦茶のお話、ご存知ですか？」

## 甘い麦茶

知らないと答えた先輩に頷きを返すと、時計に目をやる。

最終下校時刻まであと一時間。ちよつとした小話をするのに丁度良い時間に思えた。

「先輩。今日はもう勉強会、終わりにしましょう。」

それですね。良かったら場所を変えてお話しませんか？」

「ああ、別にかまわんが」

先輩の声に微笑みで返事を返すと、二人して身支度を整え学校を出る。

そして駅へと向かう道を歩き出そうとする先輩の背中に声を掛ける。

「先輩。歩きながら話すんで、今日は少し遠回りして帰りましょう」

言つて、先輩の答えも待たずにゆっくりと歩き出す。

先輩は何も言わずについて来てくれるようだ。

からから回る自転車の音が蝉しぐれに混じつて耳に届く。

「いつ読んだのか思い出せないくらい昔に読んだお話なんですけど……。」

食べ物を通して語られる人生の断片や思い出の一片を描いた本だったんです」

そう前置きをしてから、私はゆっくりと言葉を紡ぐ。

「とある姉妹が小学生だった頃の思い出を語ったお話なんです。

どちらかと言うと控えめで常識人な姉の果穂ちゃんと、遠慮知らずで行動力がある妹の佐穂ちゃんの二人が主人公なんですけど」

「今日みたいな夏の暑い日。二人で外出途中、妹の友達の家に立ち寄るところから始まります。

特にその子の家に用事があったわけではなくてですね、あんまり暑かったから飲み物でも

もらおうということでも立ち寄ったんですよね。佐穂ちゃんの提案で」

「なかなかちやつかりした子だな。一色、お前もそうだったんじゃないか?」  
からかうような先輩の声。

失礼ですね。私のような奥ゆかしい女の子に対してそんな事を言うなんて。

「嫌ですわね、先輩。私がそんな事する訳ないじゃないですか!」

「どうだか」

笑みを含んだ先輩の返し。本当にこの人、私をなんだと思ってるんですかね。

まあ、いいや。話を続けよう。

「そういうえば先輩って甘党ですけど、麦茶に砂糖って入れますか?」

「いや、入れんな。なんというか和茶が甘いのはちよつと口に合わんし」

「じゃあ、甘い麦茶って飲んだことないです？」

少し考えるような間があつてから、先輩が声を出す。

「ないと思うが。一色は飲んだことあるのか？」

「私もないですね。それでこのお話のタイトルに驚いて読んだくらいですし。

えつと、続き話しますね」

「ああ、頼む」

先輩の声にこたえ、話し続きの口にする。

「この姉妹も家では甘くない麦茶を飲んでいたので、そこで出してもらつた麦茶が

甘いということにびっくりするんですよ。

出してくれたおウチの子も、甘くない麦茶があることに同じようにびっくりして」

「まあ小さい頃は、自分の家がなんでも基準だろうしな」

「です。それですね。この姉妹、一体どこへ行く途中だったかというと、

実は離婚して別に住んでいるお父さんの家へ向かつていたんです」

「夏に愛用しているペンギン丸というかき氷器。こう手で回して氷をかくタイプののが

壊れてしまって、佐穂ちゃんが『こういう時お父さんいたらすぐ直してくれるのに』

と言つたのが発端なんです」

「両親の離婚後、お父さんとは月一くらい外で面会してたんですけど、

お父さんの現在の家に行くのはこれが初めてなんですよ」

「果穂ちゃんは『いいのかなあ、本当に。こんなくだらなないこと頼みに行ったりして』と内心ちよつと思うんですけど、佐穂ちゃんが『お父さん、きつと驚いちやうねー。私達が

突然行つたりしたら。すげー！ お前ら2人で来たの!? とか言いそうだよねー』つて

楽しそうに話すんですよ」

「その様子を見て、果穂ちゃんもやっぱりお父さんに会えるのが嬉しいから『仕方ないな』って言いつつ笑顔になるんです」

「地図とにらめっこしたり、道行く人に尋ねたり、四苦八苦しながらも何とか目的地に無事到着するんですよ。そして二人を見たお父さんは佐穂ちゃんの予想通りの反応をして

二人共ににんまりするんですけど、ここで全く予想だにしなかつた事態に遭遇しちゃうんです」

「なにがあつたんだ？」

おつ、興味が湧いてきましたか？

なるほど、自分が読んだ物語を誰かに伝えるというのは

これはこれで楽しいかも知れませんね。

心のなかでにまっとしつつ、それが声にでないよう注意しながら話を続ける。

「えっと、お父さんは別の女性とその女性の連れ子の

佐穂ちゃんと同じくらいの女の子と同棲をしていたんですよ」

「すでに離婚して三年も経っていますし、お父さんも別に悪いことをしているわけではないんですけど、佐穂ちゃんの機嫌はみるみる悪くなちやて。

まだ再婚したわけじゃなく、ちゃんと籍を入れたら話そうと思っていたって

お父さんは言うんですけどね」

「まあ確かに、何も知らずにそういうシーンに出くわしたら気まずい雰囲気になるわな」

「ですよねえ。なまじつかこのお父さんが明るい性格の人で、姉妹二人に対してよく

『離婚したってよー。おれがお前らの父親だつてことには変わりねーんだからな』つて

言つてたんですよ。それで佐穂ちゃんはよけいに裏切られたように思ったのかも  
しれません」

「同棲中の女性が気を利かせて『私達ちよつと出てくるわ』と子どもを連れて部屋を

出ていったので、果穂ちゃんと佐穂ちゃんはお父さんと三人だけの時間を過ごしま  
す。

気まずそうなお父さんと不機嫌な妹に挟まれて、果穂ちゃん困りながらでしたけど」

「なんとなく想像つくなあ」

「私もです。やつぱりお兄さんお姉さんだからですかね。私たち」

「二色がお姉ちゃんっていうのが、今でも違和感半端ないんだけど」

「まだいいですか？　ほんと失礼な。」

「まあそれでですね。ずつとふくれつ面だった佐穂ちゃんですが、お父さんにペンギン丸を

直してもらっているうちに機嫌が直って、果穂ちゃんはようやくほつと胸を撫で下ろします」

「安心して急にのどが乾いた果穂ちゃんは、『ねえ、お父さん。何か飲み物あったら

欲しいんだけど』とお願いするんですよ」

「それでお父さんが麦茶を出してくれて、『ああ、良かった。佐穂の機嫌が直ってくれて

一時はどうなることかと……』って思いながら一口飲むんです」

「飲んで、えっ？　って思っつて、妹の方へ視線を向けると、妹も驚いた顔で自分を

見てたんですよ。それでももう一度、手に持ったコップに目を落としてから、

お父さんへ視線を移すと、お父さんはごくごく麦茶を飲んでるんです」

「その後直ぐに果穂ちゃんは、『私達もう帰らなくちゃいけないんだ』と言っつて

佐穂ちゃんを連れて急にバタバタと帰り出すんですよ。」

そんな様子を見て、お父さんは『なにか……あつたか……?』と心配そうにするんですけど

「果穂ちゃんが『ううん、なにも』と答えるので全く見当がつかない様子で」  
そこまで言つて足を止め、先輩の方へくると振り返る。

振り返つた視線の先、先輩はなにやら考えるように俯いていた。

立ち止まつた私に気付き、足を止めた先輩が顔を上げると目と目が合う。

その瞳は悲しそうで、なぜ果穂ちゃんが帰つたのか察したように見えた。

「先輩も気付いてると思うんですけど、お父さんは自分たちと住んでいた頃は

飲んでいなかつた甘い麦茶を、ごくごくと美味しそうに飲んでいたんですよ」

「ああ、やつぱりそうか。でも、それはキツいなあ……」

「……そうですよねえ。」

行きは楽しげに笑つて前を歩く妹と、それを微笑んで見守りながら付いて行く姉が描かれているんですけど、帰りは姉の後を妹が付いて行くんですよ。

二人ともずっとじつと下を見ながら歩くんですよ」

「それで佐穂ちゃんが、帰り道にポツリポツリと呟くんですよ」

「『麦茶、甘かつたねえ……』、『うちのは、甘くないよねえ……』」

『お父さん、気にしないでごくごく飲んでたねえ……』つて」



「佐穂ちゃんの声に果穂ちゃんは『うん』って答えていくんですけど

最後の言葉に返事が返せずに泣き出しちゃうんですよね」

「なんて、言ったんだ？」

「もう、本当に、お父さん。うちのお父さんじゃないんだねえ……って」

「その言葉に果穂ちゃんは心の中でこんな風に思うんです」

「シヨックをうけてる自分にびっくりしていた。

なんだ、私も妹と同じ。わかってるつもりで、わかってなかった」

口で言われるよりも、そういう普段の何気なく口になっているものの変化を通じて

父が「遠い存在になってしまった」ということを実感する妹。

そして離婚の事実を分かっているつもりでいながらも、妹の言葉にじんわり涙を流す姉。

蝉しぐれに包まれながら、二人で泣きながらトボトボと歩いて帰った遠い夏の思い出。

「……それで、どうなったんだ？」

夕日を背に先輩が辛そうな表情を浮かべ尋ねてきた。

やつぱりこの人、感受性が強いんだろうな。

それできっと傷つきやすく、だから多分、人と距離を取りたがるんだろうなあ。

思いつつ、先輩の声に応えて続きを口にする。

「もう少して家に着くつてところで、お母さんが前を歩いている姿を見つけるんですよ。ね。」

二人に気付いたお母さんが『今日も暑いねえ。ミハシヤで冷たいものでも食べにいいところか』

つて言うんですけど……。先輩。二人はなんて答えたと思いますか？」

先輩はどう答えるのかな？ 気になって問いかけると、先輩は夕日を見やる。

夕日は夏の空を赤く染め上げていた。

その光景は、なんだかもう色んなものが終わってしまったような、そんな気持ちに私をさせる。

きつと、このお話の姉妹が見たのと同じような夕映え。

「うちに帰って麦茶が飲みたい、だな。合ってるか？」

「合ってますよ。せんぱいっ」

言つて、微笑む。

私がおしこの姉妹のどちらかだったら、きつと同じように答える。

共感つていうのも大げさかもしれないけど、好きな人が同じように想ってくれるのはなんだかとっても嬉しく思う。

そうして私はその後の二人の話しを語り終えると、先輩の服の袖をちまつと摘んで自分の気持ち声をにして伝えてみる。

「このお話を読んで、私、思ったんです。

血が繋がった家族でも、どんなに仲が良くつても、大事な人とは絶対に離れちゃいけないなって。

もちろん距離が空いても続く関係ってあるとは思いますが。

でもですね。それはどちら相手も求めていないと成り立たないと思うんです。

だから、私は……」

そこまでを声に出して言うと、後は心の中で呟く。

あなたが私を見ていないから、あなたと離れたくないんです、と

## マルをあげたい気分

夏休みの初日、その夜。勉強会を終え家に帰ると、夕飯を済ませ部屋に戻る。

そして先週、親父が買ってきたゲームをすることにした。

レッド・デッド・リデンプション

二十世紀初頭、西部開拓時代の名残が色濃く残る近代アメリカを舞台にした

オープンワールドのアクションアドベンチャーゲームだ。

z指定のゲームだが、後少して俺もエイティーンなのでぎりぎりセーフだろう。

主人公は孤児で施設育ちでもある元義賊の男。現在はギャングの世界から身を引いて

牧場を営んでいたが、ある時に政府によつて妻子を人質に取られ、かつての仲間達を始末していく事となる。

いいね。孤高の男という面で、俺と相通じるところがある。

まあ俺の場合、孤高じゃなく孤立なだけだ……。

ちよつと気持ちちが落ちかけたが、なんとか気を取り直しコントローラーを握る。

そして三時間ばかり広大なアメリカ西部をうろちよろしている

めぐり先輩から電話が掛かってきた。

『こんばんは、比企谷くん。今平気かな?』

「こんばんはです、めぐり先輩。平気ですよ、ゲームしてるだけなんで」

言うのと、どんなゲームしてるのか尋ねてきたので説明することにした。

「ガン・シューティングゲームなんですけど、突然熊とか狼が襲ってきたり

目の前で人がさらわれたりで結構ハラハラします。

それですね。これはオンラインもあつて他のプレイヤーと対決してもOKなんですけど、

一緒に組んで盗賊退治もできるんですよ」

『へえ、なんか西部劇っぽいね!』

「ですです。まあ初めてINしたとき、いきなり五回くらい殺されましたけど。

なにせ相手はでっかい馬で風のようにタツタか走りまわってるのに

俺がのっているのは。パカパカ歩くロバ。

勝てるわけねえ! って感じじゃないですか?」

『それは確かに勝てなさそうだねえ』

「そうなんですよ。でもその後ロバを捨てて徒歩で崖の裏から忍び寄って、無防備な背中に

銃弾を叩き込んでやりました。そして馬ゲット！ まあそんなゲームですね  
『おもしろそうだね！』

「面白いですよ。それでですね、その対戦相手外人さんだったんですけど  
すげえカッコイイこと言い出すんですよ」

『なんて言ったの？』

「えつとですね。『キミはとともラッキーだよ』『とてもいい練習をしているよ今』

『だがお前の幸運な時間はたった今終わった』『もう一度我々は戦うべきだ』

『キミの本当の力を知るだろう』とか言い出しまして」

『カッコイイ！』

「カッコイイですよね。でも俺、上手く言い返せなくて。」

まさかゲームで英語の必要性を感じるとは思わなかったです」

『比企谷くん。英語苦手なの？』

「テストではそこそこの点数、取れてるんですけどね。」

生きた英語っていうんですかね。『お前の幸運な時間は終わった』なんていわれたと  
き

『私の幸運な時間はまだ続くようだ。君の不幸な時間が続く限りね』と言い返せるよう  
な

レベルではないですねえ。

仕方なく、なけなしの英単語から『hello』ていつてたんですけど」

『比企谷くん、『hello』じゃダメだよー!』

先輩は言うのと、ケラケラと笑い出す。受けて良かった、と思いつつ返事を返す。

「そうですね、ダメだったみたいです。次は『Goutte Morning』って言ってみます。」

そうだ、めぐり先輩。良かったら今度ウチに来たときやってみませんか?」

『また遊び行つていいの?』

「もちろんですよ。いつでもウエルカムです」

『嬉しいな、えへへ。ありがとね、比企谷くん』

「いえいえ。ところで先輩、今日はなに用で?」

『えっ、えーつとね。その……、比企谷くんをデートにお誘いしようかなって』

おおう、デートか……。なんか毎回、先輩のほうから誘ってもらってるなあ。

俺からも誘わないと思うんだが、失敗ばかりしてたからどう誘えばいいのかわからないんだよな。

「その、すいません、めぐり先輩。毎回先輩から声掛けてもらってばかりで。」

次は俺から誘つてもいいですか?」

『やつ、全然いいよ。気にしないで。ただその、比企谷くんから誘ってもらえたら嬉しいかも』

「じゃあ次は、俺から誘いますね」

『うん！ 楽しみにしてるね』

その嬉しげな声に、俺も頬を緩めてはいと返事をした。

× × ×

そんなこんなで話し合うこと十数分。

行き先は『生の熊や狼をみたいかも』という先輩の希望によつて動物園に決まったのだが

それでいつ行くか？ という話で、事態は思いもよらない展開をみせる。

それまで楽しげに話をしていた先輩が急に不機嫌になったのだ。

その切っ掛けは、たぶんこれ。

『えつとですね、めぐり先輩。金曜日は勉強会の後、一色と本を買いに行くので



「ちよつと空いてないんですよね」

『へー、そうなんだ。デートするんだ。一色さんと』

『へっ？ い、いや、デートじゃないですよ？』

『ふ——ん』

『あのう、めぐり先輩？』

『なにかしら？』

んー、ご機嫌斜めですね。言葉に刺が含まれて、というか棘だらけなような。ど、どうしよう。

どうにかせねばと考え、どこに地雷が埋まっているのかわからないまま、おそるおそる声を出す。

「他の曜日なら、空いてるんですけど……」

『私は金曜日がいいな』

「そ、そうなんですか？ じゃあ、一色に曜日を變えてもらうよう言ってみます」

『んっ。えつと、それだとその、一色さんといっ行くの？』

「そうですね……。勉強会の日、そのまま千葉にでも行こうかなって思うんで

来週の月曜あたりですかね。一色の都合を聞いてみないとなんですけど」

『ふくん。いいねー。楽しみだねー』

うっわ、すごい棒読み。地雷か？　地雷を踏んだのか？

「い、いや。別に楽しみとかでは。」

一色が教えてくれた話載ってる単行本を買いに行くだけです」

『本を買いにいくだけならさ、タイトルか作者さんの名前を聞けば一人でもいけると思  
うけどね。』

なんでわざわざ二人でいくのかなーって』

「それがですね。タイトルも作者もわからないらしいんですよ。」

それでも絵を見ればわかるっていうんで、じゃあ付き合ってもらおうかなって。

それに少女漫画なんで、棚を見て回るのも店員さんに尋ねるのも、

俺だけだとちょっと厳しいかなって思いました」

『そうなんだ』

「はい……」

『まあ、比企谷くん。一色さんと仲良しだもんね。』

一緒に勉強したり、買い物行ったり、そういうえば昔、デートもしたって聞いたし』

「い、いや、あれは、そういうのじゃないですよ？」

『……………』

返事がない。屍でしょうか。

ここで下手に言葉を重ねても、さらに状況が悪化する未来しか見えない。だからといって黙っている訳にもいかんしな。

そう思っただけで困っていると、先輩の呟き声が聞こえた。

『一色さんばかり、ず……よ……』

「あの、めぐり先輩？ すいません、よく聞こえなかったんですけど……」

『……………』

沈黙。うむう、聞き直しも不味かったのか。

難聴系キャラじゃないところを見せたかったのだが。

さらに聞き直していいのか迷っていると、先輩の拗ねたような声が耳に届く。

『一色さんばかり、ずるいつて言ったの』

これってもしかして……。そう気付くと、とても嬉しい気持ちになる。

先輩に限ってまさかとは思うけど、もしや、と考え聞いてみることにした。

「えっと、そのう……。もしかしてですけど、焼きもち、焼いてくれますか？」

『……………』

またもや沈黙。これももう答え出ちゃってますよね？ やべえ、超嬉しい。

ほんわかお姉さんの先輩でも焼きもちを焼くんだな。意外というかなんというか。

おっと、喜んでる場合じゃねーな。先輩、拗ねてるし。

まあ逆の立場で先輩が他の男と二人で会ってたら、俺は拗ねるところか泣いてしまふかもしれん。

それでなんとか機嫌を直してもらおうと頭を捻るが上手い言葉が見つからず困ってしまう。

なので余計な言い訳はせず、自分の気持ちを素直に口にすることにした。

「めぐり先輩。俺……、先輩に会いたいです」

少し間があつて、先輩が薄く吐息を漏らした。

『今から?』

時計に目をやる。時刻は夜の十時を指していた。

俺は男だから構わないが先輩は女の子、こんな時間に外へ連れ出すのも気が引ける。

「今日はもう遅いから止めておきましょう。でも出来るだけ早く会いたいです」

明日なんかどうですかね? その、無理にとは言えないんですけど」

『そこは今から会いたいつて、言つて欲しいなあ』

それまでの拗ねたような声と違う、先輩の弾んだ声が耳をくすぐる。

「でももう、今日は遅いですし」

『そうだけどさ』

「明日の楽しみにしましょう」

『うん。わかった』

「ではめぐり先輩。明日、会ってもらえますか？」

『私に、その……、会いたい？』

「会いたいです」

『し、しかたないなあ。』

ま、まあ彼女だし？ 彼氏のお願いなら聞いてあげるのも、その……うん』

ちよつと偉そうだが、そこがまた可愛いのでマルをあげたい気分。

「有難うございます。先輩の顔、早く見たいです」

言うど、先輩は小さな声で『わたしも……』と答えてくれた。

## 挨拶は抜きだ！

夏休み二日目、木曜日の昼前。

今日のはめぐり先輩が車で迎えに来てくれるというので出掛ける準備をしていると先輩からメールが届く。

『今日はワイルドでいくよー！』

ナニコレ……

送られてきたメールの文面に戸惑いながら、ワイルドな先輩を想像してみる。

先輩、スーツ姿でサングラスとか掛けてくるんだろうか。

ふむ、意外に似合うかも知れんな。ちよつと見てみたい気もする。

そういやたまにだが、夜中なのにサングラスを掛けてる奴を見るけど

あれカツコイイと思ってるのか？ アホにしか見えんが。

などと考えていると、カツコイイというワードが頭に引つかかった。

そして先輩がワイルド化する原因と思われる事が昨夜あった事に気付く。

昨日の晩、行き先と待ち合わせの時間を決めた後、よもやま話しに花を咲かせている

と

先輩が、あ、と声をあげた。

『ねーね、比企谷くん。私たちもカツコイイセリフとか言ってみようよ』

そんな先輩の提案から始まったカツコイイセリフの言い合いっこ。

互いにアニメや漫画のセリフを披露して夜の夜中に二人で大いに盛りあがったのだが

あれは深夜のテンションだから出来たこと。

まさか先輩、日が昇っても続けるつもりなのか……

そう思つて怖いっていると来客を知らせるチャイムの音が聞こえた。

玄関にてつと走つていき扉を開けると、先輩が両手を腰に当て不敵な笑みを浮かべ立っていた。

「比企谷くん!」

「は、はい?」

「挨拶は抜きだ! さっさと行くよ! こんにちはつ」

「こ、こんにちはです。めぐり先輩」

「比企谷くん、かつこよく!」

「あつ。お、おう。急ごう、風が止む前に……」

へどもしつと答えると、かつこよかったか不安になり先輩をちらつと窺つてみる。

先輩は腰に当てた手を解いて腕組みし満足げにうむつと頷いていた。

なんだこれ……、と思う反面、先輩こじらせて帰ってこれなくなつたか……と痛ましい気持ちになつてしまう。

風の噂で聞いた話なのだが、厨二病は遅くに罹患すると治らない可能性があるらしい。

そういう場合業界では、覚醒と呼ぶらしいが。

もしや先輩、下手したら材木座みたいになつてしまうのだろうか……

そんな不吉な未来が頭をよぎつたのでなんとか現実に帰ってきてもらおうと思い胸が痛むが先輩を窘めることにした。

このままほつといて爆裂魔法なんぞ唱え出したらあれだしね。

「めぐり先輩」

「なんだね、比企谷くん」

先輩は腕を組んだままこちらに背中を見せると、上半身だけくるりとこつちへ向けて答える。

なんでいちいちポーズを取るんだ、この人。このままじゃその内、眼帯とか装着しちゃう。

それとね、昔の自分を見てるみたいで辛くなるからやめて欲しいです。



「先輩はいつも通りの方がいいですよ。なんか今の先輩、ちょっと痛い子っぽいですし」  
「うぐうぐ」

俺の言葉に、先輩は悔しげな表情を浮かべわなわなと震えだす。

可愛いのでそのつるつとしたオデコをぺちんつと叩きそのまま撫でてみると先輩はかーつと耳まで朱に染めて拗ねたような声を出す。

「カッコいいかなって思ったんだけどな」

「カッコイイというより、可哀想な子でしたね。」

でも可愛いかったですよ。百点です」

微笑み混じりで答えると、先輩は表情を緩めにぱつと笑顔を見せてくれた。

× × ×

先輩が近所に住むおじいちゃんから借りたという車に乗り込む。

シートベルトを締め見送りに出てきた小町に手を振ると

車は今日の目的地である上野動物園へと走り出す。

住宅地をゆつくりと走る車の中、俺はきよろきよろと車内を見て回る。

しかしこの車……ぼろいなあ……

エアコンの効きが悪いので窓を開けようとするとなかなか開かない。

開いたら開いたで、開けすぎたので少し閉めようとしても今度は全く閉まらない。

車に詳しくない俺には車種すらわからんが、窓を手動で開け閉めするところをみるとかなりの年代物のようだ。

なのでいつから乗っているのか尋ねると、先輩が生まれる前から愛用しているのとのこと。

それでなのかカーステレオが動かない。

俺は何かのフラグがたった気がした。とてもよくないフラグが。

まあ気のせいだろうと思いつき、外の景色に目をやる。

国道を走り道が空いてきたので先輩はスピードを上げる。

季節は夏。天気は晴れ。最高の気分だ。微かに香る潮風が気持ちいい。

そうだと帰ったら、日記を書こう。今日のことを忘れないように。

そして今度は俺から先輩を、デイスティニーランドにでも誘ってみようか。

まだすべては始まったばかり、時間はたくさんある。

流れる景色を眺めながらそんな物思いの耽っていると、俺はあることに気付く。

この車、なんかふらふらしてねえか？

不安を感じ先輩の方へ視線を向ける。すると先輩は緊張した様子でハンドルを握つ

ていた。

車は鉄の塊、動く凶器。ふざけて運転するなどもつてのほか。でもですね。そんな瞬きもせず真剣そのもので運転されると、なんかすごく恐怖が沸いてくるんですけど……

「あのおう、めぐり先輩」

「ごめん、比企谷くん。静かにして」

「あつ、はい。すいません……」

邪魔しちやいかんな、と思いい口を閉じる。

信号で車が止まると、先輩が口を開く。その声は少し、震えていた。

「免許取ってから車運転するの、今日が初めてなんだよね」

おいしいおいしい。

だから昨夜、俺言ったじゃない。車じゃなく電車の方が良くないですかっ。

「私、お姉さんだからね! ちよつとはお姉さんっぽいところ、比企谷くんに見せないよ!」

先輩のやる気に満ちた言葉に思わず同意してしまった自分を殴りたくなってくる。

後悔先に立たず。もつと電車で行こうと言えば良かったと思つたが、後の祭り。

デートが上手くいくか悩んでいたのも今は昔。

これじゃあ、今日生きて家に帰れるか？　という不安で胸が一杯になってしまふ。しかもこの車、カーナビも壊れていて「二百メートル先の信号を・・・ブチッ」といいところで何故か音声が飛ぶ。

液晶タッチパネルの反応も悪く「戻る」を押しても無反応。で、もう一回「戻る」を押すと二個戻るといった感じ。

さらに最悪なのはこのカーナビ。合流がありますコールとかしつこいのだがコースを外れたとき沈黙しやがる。一番言つてほしいことを言ってくれない。

「こいつ何も言わないからまちがってるんじゃないですかね？」  
そんな会話を何回したかわからん。

それでも予定より大分遅れたが、目的地の上野動物園に到着した。

## それが曇ることがないように

ダメな方向に高性能なカーナビのおかげで道に迷うわ渋滞に巻き込まれるわと散々な目に会いながらも到着した上野動物園。

園の傍にある駐車場に車を止めると、俺とめぐり先輩は入場口へと向かう。

動物園は夏休みに入っているせいか、平日の昼間だというのに大盛況の様子。

年端もいかないちびっ子たちが、俺ライオン見るー！ だの、私パンダさん見るー！と

はしやぎながら園内に吸い込まれていくのが見える。

慣れない運転で疲れた様子だっためぐり先輩もそんな小さなアニマルたちの姿を見

て

ちよつと元気が出たようだ。

その事にほつとしてカウンターでチケットを購入すると、園内へと移動する。

正規の入口門は現在整備中の為、臨時門から園内に入ると、そこは鳥ゾーンらしく

鷲や鷹、フクロウの姿が見える。

かっこいい……。ゲージの中、止まり木で羽を休める鷹の勇壮な姿。

それを口を開けて見惚れる俺の隣で、先輩も同じように口をぽかーんと開けていた。「比企谷くん。かつこいいね！」

「ですよね！　かつこいいつすよね！」

おお！　めぐりんわかるのか、あのかつこよさが！

以前、東京わんにゃんショーで鷹を見た時、一緒に見ていた雪ノ下と小町にはいまいち理解されなかった鷹のかつこよさを、先輩はわかってくれるようだ。

それでちよつと嬉しい気持ちでいると、先輩の弾んだ声が聞こえた。

「フォルムっていうのかな？　すつとして綺麗だなって思う。」

でもちよつと、目つきが悪いよね。なんか比企……」

そこまで言って先輩は口籠る。

おい、めぐりん！　今なんて言いかけた。

じとつとした視線で先輩を見ると、先輩は気まずそうにこそつと顔を逸らす。

そして誤魔化すように「あつ、フクロウもいる〜」などと言って、

とててつとそちらの方へ足を運ぶ。

くう〜逃がしたか、と思いつつ、その背を追いかけるよう俺もフクロウのいるゲージへ向かう。

そして先輩が見上げているフクロウを同じように見上げてみる。

見上げた先、フクロウは少し首を傾げ、じつと俺たちを見つめていた。

「フクロウってね。森の賢者って呼ばれてるんだって」

なにその厨二病っぽい肩書き。と思ったが、俺たちを見下ろすその目にはなにやら賢そうなそんな知性の煌きを感じる。

「そういやフクロウって、なんでフクロウっていうんですかね？」

尋ねると、先輩は記憶を探るよう顎に手をやり、考える姿勢を取る。

「前に読んだ本にね、毛が膨れた鳥だからって書いてあったよ」

「ほー」

「それでね。異名が一杯あるの」

「異名ですか？」

なにそれかっこいい。二つ名とか真名とか通り名みたいなもんなのかしら。

「えっとね……」

先輩はぼわつとした顔でフクロウを見上げ、指を一本、二本と順繰りに立てる。

「猫鳥、ごろすけ、ほろすけ、ほーほー鳥とかだったかな。」

後、梟は母鳥を食べて成長するって考えられていたから、不孝鳥って呼ばれたり」

「……最初の方はともかく最後のは、異名っていうか悪名ですよ、それ」

「確かに」

俺も愛称に見せかけた悪名、ヒツキーなどと呼ばれる身。

似たような境遇のフクロウに、なにやら親近感が湧いてくる。

「他にはね。フクロウの名前が福籠（福がこもる）や不苦労に通じるから

幸福と安心を呼び込む縁起の良い鳥として扱われることもあるみたい」

「へえ……。めぐり先輩、やけに詳しいですね」

感心したように言うと、先輩はむふふと得意げに胸を張る。

「昔ね。親戚のおじさんちで飼ってるフクロウに子供が生まれて、良かったら譲るよって

言われた事があったんだ。そんなときにね、ちよつと調べたから」

「農家とかでは飼うところあるみたいですね。」

「害獣駆除でしたっけ？ ねずみとか取ってくれて聞いたら覚えが」

「うんうん。それで見せてもらったらすごく可愛かったから飼いたかったんだけどね。」

「その……なんというか、餌がね」

「フクロウってなに食べるんですか？」

「えっとね、ピンクマウスっていう皮をはいだ丸ごとのネズミやひよことかなんだけど

……

内臓をキッチンハサミとかで取りだして、食べやすい大きさにしないといけないの



ね」

「な、生々しいですね……」

「うん……。それでちよつと無理かなあつて……」

そんな会話を交わしつつフクロウを見てみると、俺たちを見ることに飽きたのかフクロウはその大きな目を閉じてしまう。

「フクロウさん、寝ちゃったのかな？」

「そうかもですね」

「立ったまま寝るんだね」

「そういや俺、鳥の寝てるとこつて、ちゃんと見たの初めてです」

「うんうん、わたしも。寝にくくないのかな？」

「うーん。どうなんでしょうねえ」

立ったまま寝る。直立睡眠とでも呼べばいいのだろうか？

考えてみればすぐく器用な寝方だよなあ、と感心していると

先輩が俺の腕をぼんぼんと叩く。

「比企谷くん。あれ！」

先輩の指差す方向に視線を向けると、番なのだろうか？ フクロウがもう一羽コンクリートの床にうつ伏せで横たわっていた。

「潰れた饅頭みたいですね……」

「うん……。なんかぐてつとしてるよね」

野性味の欠片もない気の抜けた様子のフクロウを見て思い思いの感想を口にすると俺たちは鳥ゾーンを抜けて、次のゾーンへと足を運んだのだった。

× × ×

ゆっくり歩を進めながら檻に入った動物たちを眺め、あれやこれや話していると先輩が俺の袖をちまつと掴みおずおずとした様子で話し掛けてきた。

「比企谷くん。今日はさ、動物園に来たけど、その……、退屈してない？」

「えっ？ 退屈じゃないですよ。むしろ楽しいです。」

「なんかえらい久しぶりに来たなーとは思いますが……」

「そうなの？」

「はい。小学校の遠足以来ですね、動物園来るの。

自分じやなかなか来ようとは思わないんで、誘ってもらえて良かったです」  
先輩に応えながら当時の事を思い出す。

遠足か……。楽しそうに笑うクラスメートを後ろから眺めるだけの時間だったな。

「比企谷くんに、良かったっていつて貰えて良かった。これからも色んなところ、いこうね？」

「はい、喜んで」

いやホント。ぼっちだと決まったとこしか行かないんだよね。

本屋にゲーセン。あとは電気屋さんくらいか。趣味が偏つてるといいうのもあるが

自分の興味があるもの以外に興味を持つキツカケが持てないというのが大きいと思う。

なのでこうやって連れ出してもらえるのは嬉しかったりする。

その事を伝えると、先輩はほっと息を吐き嬉しそうにはにかんでくれた。

その笑顔に微笑みを返しながら、次は俺から先輩をデートに誘う約束をしたことを思い出す。

うーん、めぐり先輩。どこへ連れて行ったら喜んでくれるんだろう。

出来れば今の俺のように、来て良かったなと思ってもらえる場所に連れて行きたいの

だが。

そう思い首を捻って考えるが、良い行き先が思い浮かばず困ってしまふ。

お猿さんを見ている先輩の横顔にちろつと視線を送ると、それに気付いた先輩が首を傾げてこちらを見てくる。

めぐり先輩は微笑む。その笑顔を見て、それが曇ることがないようにしなくてはと思

い 直接本人に聞いてみることにした。

「あとう、めぐり先輩」

「なーに？」

「えつとですね。次、俺から先輩をデートに誘うって約束したじゃないですか？」

「う、うん」

「それでなんですけど、どこへ行ったら先輩が喜んでくれるかちよつとわからなくて。

なんでリクエストとかあつたら言ってもらえると助かるんですけど……」

なんとも情けない話だが、誰かと一緒に遊びに行くという行為に慣れていない俺には先輩に喜んで貰えそうな場所はディスプレイニールランドくらいしか思い浮かばないのだ。

なのでサプライズに欠けるがこうやってきちんと本人の希望を聞いた方が

少なくとも間違いはないだろうと考える。

「うーん。行きたいところか」

俺の問いかけに、先輩はうんうんと唸る。

その悩ましげな横顔をちらちら伺っていると、先輩は「あつ」と声をあげ、ぱしつと手を叩く。

「あのね。すごく綺麗な場所に建ってる駅があつてね、そこに行つてみたい！」

先輩は言うどスマホを取り出し、ポチポチといじりだす。

そうして出てきた画像を、俺の前に差し出してきた。

差し出されたスマホをどれどれと覗き込む。

「おおー、なんかすごいですね。えつと……これって湖の浮島に駅があるんですか？」

「うんうん。奥大井湖上駅って言うんだけど、静岡にあつてね」

「えつ、静岡ですか？」

思っていたよりずっと遠かったので、思わず甲高い声を出してしまう。

「ちよつとその、遠いんだけど……」

多分、俺が嫌がつてるように聞こえたのだろう。

先輩は困った表情を浮かべると、しどもどして答える。

その先輩の姿を見て、慌てて口を開く。

「やつ、行くのは全然良いんですよ。景色も良きげですし俺も行ってみたいんで。ただ少し遠いんで、日帰りは厳しいかなって思いました」

「すぐそばにね、温泉があるみたいなんだ。だからそこにお泊りするとか……」

「えっ!?! 泊りがけですか?」

やべ、がぶり寄ってしまった。

「う、うん。一度調べたことがあったんだけど、そんなに高くなかったし」

驚いた表情でじりつと後ずさりながら先輩は答えると、またスマホをいじって

温泉宿のホームページにアクセスする。

ドキドキしながら覗き込んでみると、大正レトロな内装の趣ある宿屋の画像が目

り

その横にはそこそなお値段の宿泊料金が記載されていた。

この前した短期バイトの金が手つかずであるし、いけるな、これ。

「めぐり先輩。ここには是非行きましょう。」

むしろあれですね。ここ以外は行かないとかそんなレベルです」

鼻息荒くそう言うと、めぐり先輩はちよつと戸惑ったような表情を浮かべたが

それでも嬉しそうに微笑んでくれた。

そうして先輩は、カップルプランならもう少し安くたってこんな特典が付くみたいと

懇切丁寧に説明してくれる。

俺には縁が無いと思ってたカップルプランという単語に若干戸惑いを覚えつつ先輩の言葉に相槌を打つこと暫し。

ずっと気になっていたことを尋ねてみる事にした。

「あの、めぐり先輩。これって同じ部屋で寝泊りするんですよね？」

声の上擦らないよう気を付けながら口にした俺の言葉に、先輩はきよとした表情を浮かべる。

「一緒はその……。嫌なの？」

「いやいやいやいや、嫌じゃないですよ！むしろ一緒じゃないと嫌というか。

でも、でもですよ？ 年頃の男女が同じ部屋で寝泊りするのは、こう、あれかなーつて」

へどもどしつつ答えると、先輩もその意味を理解したようだ。

頬を薄く染めて恥ずかしそうにもじもじします。

「でもね、比企谷くんはそういう事しないって聞いたんだけど……」

えっ?! それどこ情報? するよ俺、多分ていうか、絶対。

「えーつと、めぐり先輩。それ誰に聞いたんですか？」

「うんと、はるさんに。比企谷くんは理性の化物だから安全だつて」

やっぱりあの人か……。勘弁してよ、マジで。

つーか、人にそんな仇名を付ける陽乃さんは厨二病の素質があると思う。

「やっ、その、ダメって言われたら我慢しますけどね」

俺が顔を上げると、先輩は真正面から俺の瞳を覗き込んでくる。

あまりに真っ直ぐな視線なので慌てて目を逸らしてしまう。

「ダメって言わなかったら？」

その言葉に驚いて目線を戻すと、頬に先輩の柔らかな手が触れた。



## 世界はロマンを求めている

めぐり先輩の問いかけに、俺は暫しの間、呆気にとられていたが  
我に返るとその顔をちろつと伺つてみる。

すると先輩は口を堅く引き結び、真剣な表情でこちらを見ていたので  
気まづくなつた俺は視線を自分の足元に落としてしまう。

俺が返す言葉を言いあぐねていると、先輩は小さく「えいつ」と言つて  
優しく触れていたその手の形を変え、頬を軽くつねつてきた。

それでようやく声がでた。

「……えつとその、どうなんでしょうね」

「どうなの？」

「そうですね……。そんなときになつてみないとなんとも……」

「じゃあ、そのときになつたと思つて、答えて」

ええ……。なんだろう、この人。意外に引き下がらない人だ。

いや、意外でもないか。めぐり先輩つて初めて会つた文化祭から今までずっと、  
独特のテンションとペースの持ち主だったし。

てことは今回もこれまで同様、きちんと答えなきやならんのか。

つーかどう答えても、微妙な雰囲気になる未来しか見えんのだが……

なので話題を逸らす意図も含めて、感じた事を口にしてみる。

「なんていうか意外ですね。めぐり先輩がそういう事、口にするって」

どうにかこうにか冷静を装ってそう言ったが、先輩に首を傾げられてしまった。

「そうかな？」

ああ、いかな。また他人に勝手なイメージを押し付けてる。

先輩だって年頃の女の子。その手の事に興味のひとつやふたつ、あってもおかしくは

無い。

むしろ無かったらおかしいと思う。

先輩にそういうのは無いと考えるのは、アイドルはトイレに行かないと思うのと同じレベル。

そんな事を思いつつ、上手い返しをうんうん唸って考えていると

先輩が興味深そうに目を細め、まじまじと俺の顔を覗き込んできた。

「この前さ、比企谷くん、私にキスしようとしたじゃない？」

「は、はい」

「それでね。比企谷くんはそういう事、私としたいのになって、その、思って」

こ、答えにくいなあ……。

まあ返事はイエスかハイのどちらかなのだが、それだと身体が目当てみたいで気が引ける。

なんと答えれば良いか迷っていると、先輩がそつと手をのぼし俺の頬を両手で挟んできた。

そして、まっすぐに俺を見据える。

「したいの?」

どうしようこの人。なんか陽乃さん並にやりにくい。

そういやめぐり先輩、陽乃さんにえらく心酔してたっけ。

先輩にはあんな風にならないで欲しいのだが……。

まあ仕方がない、俺も男だ。先輩の質問にきちんと答えようじゃないか。

とはいえ、あまり軽いノリで言えることではない。

俺は普段より誠意を込めて伝えようと、ひとつ咳払いをしてから言った。

「したいというか、見たいんです」

沈黙が降りる。めぐり先輩はぼかーんと口を開け、何度か瞬きをした。

「えっ?」

ちよつと言葉が足りなかったか。そう思い、考えをまとめながら口を開く。

「めぐり先輩。少し長くなりますけど、いいですか？」

言うのと、めぐり先輩は神妙な表情でこくりと頷く。

それに頷きを返し、自分の思っている事を声にする。

「えっと、俺の勝手なイメージなんですけど、先輩ってすごく清楚だなって思うんですよ。」

えっ、そんな事ない？ うーんでも、制服の時もそうでしたし私服もそうですけど、先輩ってむやみに肌を見せるような格好しないじゃないですか？

俺らくらいの年齢にありがちな、変な着崩し方もしませんし。

まあ今日は膝小僧、ちよこつと見えていますけど。

あつ、ちよつとお！ しゃがんで隠さないでくださいよお。

えっ、足が太いから恥ずかしい？ 全然太くなんかありませんよ！ こう、程良い感じですよ。

まあ何が云いたいかといいますと、そういうところが初心というか清楚だなって思うんです。

それでそういう先輩がですね。その手の事をしてるとき、どんな感じかなって。

なので性的な欲求というより知的好奇心というんですかね？ そこが知りたい、みたいな。

わかりますか？ えっ、わからないですか……。

うーん。そうだ！ さっき先輩が教えてくれた奥大井湖上駅でしたっけ？

そこへ先輩が行きたいと思ったのは、景色がとても綺麗だからですよ？

それと一緒に知れませんか。綺麗なものを見てみたい、的な。

えっ、綺麗じゃない？ そんな事ないですよ！

めぐり先輩、色白でほっそりしていますし、身体のラインが綺麗だなんて。

ちよ、めぐり先輩。そんな身を守るようなポーズで、後ずさりしないでくださいよ！

すいません、俺が悪かったです。先輩が嫌なら、もう見ませんから。

あつ、嫌ではないです？ じゃあ今まで通り、じっくり見ますね！

えっ、やつぱり見ちゃダメって……。

んー、それじゃあ、先輩って神様信じてます？ ふむ、いるかもって思ってますか。

俺はですね。今まであんまり信じてなかったんですよ、その手のものって。

でもですね。先輩を見ると、いるのかも知れないなって、そう思うんですよ。

こんな可愛くて綺麗な女の子がこの世にいるとか、そうじゃなかったらありえねーだろって。

ここ三次元だよ？ 二次元じゃないんだよって。

そうですね、二次元にはいますよ。今期アニメの甲鉄城のカバネリってアニメのヒロ

イン

無名ちゃんって子が可愛いです。

まあお話自体は一話がピークで段々つまらなくなってしまうんですが……

なので最近、無名ちゃんを愛でる時間になってますね。

それで要するに、めぐり先輩は次元を超えた可愛さだって云いたいわけです。

いや、大げさって……。本当にそう思ってますよ？　すごく可愛いなって。可愛すぎて

「めぐり先輩！　地球を、地球をどうするつもりですか!？」って叫びたくなるレベルです  
し」

そんなやり取りを交わしていると、太陽が中天に差し掛かり日差しも大分きつくなってきた。

「めぐり先輩。ちよつと暑いんで、日陰に入りませんか？」

「あつ、うん。そうだね」

ほんのり呆れた感じを匂わすめぐり先輩と二人、少し歩いて木陰にあるベンチに腰を下ろすと、

俺は先輩の薄く化粧されたその横顔に眺めながら声を出す。

「さつきは冗談ほく言いましたけど、めぐり先輩、綺麗ですよ」

「へっ？ ええつと……」

思わず漏れた俺の言葉に、めぐり先輩は驚いたように目を丸くする。いやでも本当にそうなのだ。

ほぼ素っぴんでこの整いぷりは、千年さんとか千葉のキセキといってもおかしくない。

昨今、化粧の技術は飛躍的に向上し、もはや美とはお絵かきスキルと化してしまっている。

そんな中で俺はこう言いたいわけだ。

「美とは生まれ持ってきた神の作りしものであり、化粧などという近代的な手法によって

生み出されるものとは全く異なる」つと。

そこで思い出すのがメタルギアソリッド4というゲーム。

そのゲームでは未来的な兵器が多数投入されている。

しかし結局最後は素手でのタイマンで決着をつけるというロマンあふれる展開だった。

世界はロマンを求めているのかもしれない。ちがう？

「本当にそう思ってますよ。それで先輩に触れたいと思ってます」

俺としては珍しく素直な気持ちをお口にしてみる。

まあ素直すぎて、セクハラ呼ばわりされてもおかしくない発言な気もするが。

それで引かれてないか不安に思いその表情を窺うと、先輩が俺の胸にそつと手を当ててきた。

離れることも出来ずに、俺はその場で固まってしまった。



皆まで言うな、先刻承知だ!

「私もね、比企谷くんに触りたい」

めぐり先輩がはにかみながら呟いた言葉。

それを耳にした俺の心は、ひとつの感情で埋め尽くされる。

そう、それは使命感。

そして使命感という言葉は、俺が小さい頃から慣れ親しんだ

ひとつのゲームを思い起こさせる。

そのゲームの名は、ドラゴンクエスト。

日本でRPGといえばこれかファイナルファンタジーと言われるくらい有名なゲームだ。

開発者の顔面劣等感が主人公をホストにヒロインをホステスにするという形で現れ

結果、異世界ラブロマンスゲーになってしまったファイナルファンタジーとは異な

り、

低年齢なキッズにも親しみやすい王道ストーリーとコミカルなモンスターを基調と

する

ある意味、古典的なゲームである。

そんな王道を地で行くドラゴンクエストだが、このゲームにも闇がある。

それは魔王を倒した勇者は魔王と同じくむしろそれ以上に人々から恐れられ忌避されてしまうということ。

世界を救う為に努力した彼らにはその救った世界で、自分たちの居場所を失うということもやるせない結末が待っていたのだ。  
そしてもうひとつ。

このゲームを初めて遊んだ俺を驚愕させたのが、その世界に住む人々の倫理観だ。世界を救うため日夜努力している勇者一行。

にも関わらず、彼らが必要としている装備や道具類を定価販売のコンビニよろしく値切る事すら許さない武器防具屋や道具屋の主人たち。

世界を救ってくれと頼んだ王様に至っては、端金を渡しお茶を濁すだけならまだしも勇戦のかいむなく倒れてしまった彼らに向かって、死んでしまうとは情けないと罵倒する始末。

そんな奴らを救う価値があるのだろうかと思いきや、勇者一行も負けず劣らず倫理観の欠片もない行動をする。

白昼堂々、他人の家に土足で上がり込み、ダンスを開け、壺を割ると

その中に収められていた金銭やアイテムを我が物とするという平成日本で穏健に生きる俺には理解しがたい所業を繰り返す。

そういった彼らの姿を見て、俺は思案の末、ひとつの結論に到達する。

明日世界が滅びようとも、貯金残高を増やすことに情熱を燃やす商人たち。

そして魔王を倒すという大義の為ならば、器物破損や不法侵入、窃盗なども辞さない勇者一行。

そんな彼らの原動力は使命感なのではと。

胸に溢れる使命感の前には法律も倫理も何ほどのものでもないというアグレッシブすぎる生き様。

俺にもいつかそんな使命感をこの胸に抱く日が来るのだろうか

幼心に思ったものだ。

そうして、初めてドラクエをプレイしてから十年という月日が流れた今日この日、俺の胸にはその時想像した以上の使命感が溢れだす。

俺はめぐり先輩の俺に触りたいという要望に応えるべく、自分の胸に添えられたその小さな手を取ると、痛くないようでも力強く握り締める。

そして空いてるほうの手で、自分の上着のボタンを一つずつ外していく。めぐり先輩は驚いたような表情で俺を見ている。

皆まで言うな、先刻承知だ！

そんな気持ちで微笑みを送り、更にボタンを外していく俺に先輩からの待ったが掛かる。

「ちよ、ちよつと待って、比企谷くん。なつ、なんで服を脱ぎ出すの!?!」

「なんでって……。触りたいって言ったの、先輩じゃないですか。」

それでその、やっぱり直がいいかなって思いました」

「そ、そういう意味じゃないよー!。ひ、比企谷くん?。もー」

めぐり先輩が頬を膨らませて窘めてくる。

違うのか……と、行き場を失くした使命感を抱えしよんぼりしていると

先輩は困ったような苦笑を浮かべる。

そして俺の手を優しく解くと、上着のボタンを丁寧な手つきで留め直してくれる。

照れくささで視線を逸らし空を見上げると、夏の空に浮かぶ太陽は

そろそろ中天に差し掛かろうとしていた。

×  
×  
×

その後、腕を組むという形でめぐり先輩の希望に応えようと、その感触にドギマギしながら園内をゆっくりと巡る。

そうしてくまなく園内を回った俺たちは、出口を抜け外へと出る。

時計を見るとそろそろ夕方に近い。

それで道が混む前に千葉まで帰ることとなり車に乗り込むと、来た道を逆に辿って家路に着く。

窓の外、流れる景色を目で追っていると、信号で車が止まった。

「比企谷くん。このまま比企谷くんの家に向かうね」

先輩の言葉に少し考えてから口を開く。

「めぐり先輩。俺が先輩を見送ってから帰りたいんで、このまま先輩の家に向かってください」

「えっ、でも遠くない?」

「途中、バスもありますし。」

それに先輩一人で運転してるの、なんかちよつと不安ですしね」

茶化すように言うのと、めぐり先輩はむっとした表情を浮かべ口を尖らせる。

「もう運転なれたもん！」

確かに大分手馴れた感じになっている。

でもやっぱり、先輩を安全な場所まで送り届けてから、自分の家に帰りたいと思う。

「まあ、それでもです」

答えるときちょうど信号が青になり、後ろの車が急かすようクラクションを鳴らす。

それでめぐり先輩は慌てたようにアクセルを踏み、車を動かす。

そうして車が走り出し暫くすると、めぐり先輩は俺の方へ顔を傾けてきた。

「心配してくれてありがとうね」

耳にこそばゆさを感じつつ、小さな声で返事を返す。

「……まあ、彼氏ですからね」

照れくささで視線を合わせられず、窓の外を見やる。

そんな俺の耳に、めぐり先輩の嬉しそうな笑い声が届いた。

× × ×

千葉に着くと、めぐり先輩の家の近くに住む先輩のお爺さんの家に車を返しに向か

う。

先輩のお爺さんは先輩と目元がソツクリで、とても温和そうな人だった。

お礼を伝えると孫を宜しくと頼まれ、へどもどしつ「はいっ」と上擦つて答えると二人からにこやかに微笑まれてしまった。

そうして、ひぐらしの鳴く道を二人でとてとて歩いてしていると、隣を歩く先輩が袖を引いてきた。

「ねえねえ、比企谷くん」

「なんですか? めぐり先輩」

「今日のデートにね、点数を付けるとしたら、何点かな?」

「えっと、100点満点でいいんですかね?」

「うんうん」

にこにこ微笑みながら俺の答えを待っているめぐり先輩を見て思い出してしまふ。

その昔、一色に強制的に連れ出された挙句、100点満点で10点という

往々にして辛く、でもちよっぴり甘い採点をされた事を。

そしてその時、俺は学んだのだ。

人を育てるには減点方式ではなく、加点方式のほうが良いと。

いいところを伸ばしていこう!

「そうですね……。三百点ですかね」

ダブルスコアを超えたトリプルスコアを提示してみたが、めぐり先輩は少し難しい顔をしていた。

「おかしいなあ。五百点はいけると思ったんだけどな」

先輩は拗ねたような声音で言うと、横目でちろつとこちらを窺ってくる。

五倍だと……。意外と欲張りさんだな、この人。と呆れていると、

めぐり先輩がにまっと微笑む。

「なのでズルするね」

先輩はいうと、周囲をきよろきよろしだす。

日も沈み、薄暗い住宅地の小径。周囲には人影もなく、ただひぐらしの鳴く声が響くばかり。

それらを確認しためぐり先輩は、スカートの裾を直したりおさげ髪をいじったりしてから

こちらに向かって一歩踏み出し、距離を詰めてきた。

そしてその細い腕で、俺をぎゅつと抱きしめる。

お、お、おっ。こ、これはやばい……。

自分の胸元に顔をうずめる先輩の甘い香りとその身体のあまりの柔らかさに



俺の鼓動は三倍速を超え、五倍速になってしまふ。

自分の心音で周囲に響いていたひぐらしの鳴き声も掻き消されうるさいのか静かなのかよくわからなくなってくる。

緊張のあまり固めるテンプルで固まった油のようにカチコチになった俺の胸元でめぐり先輩が顔をあげる。

「ズルしてみた」

先輩はいうと、にへつと楽しそうな笑みを浮かべた。

## ウルトラマンのように帰ってくれ

空に浮かぶ入道雲が茜色に染まる頃、涼しい風が吹き始める。

めぐり先輩を家まで送りとどけた俺は、火照った身体を冷ますのにちょうどいいと感じ

夕涼みがてら歩いて帰ることした。

家へと向かって足を進めながら、つい先ほど自分の胸元に柔く寄り添ってくれていためぐり先輩の暖かな温もりを思い出す。

すると顔がだらしなく緩んでしまい、すれ違いざまそんな俺を見たサラリーマンやO  
Lさんたちは

ぎよつとした様子で俺から距離を取る。

ま、まあ仕方がない。

薄暗い道で前から歩いてくる男がニヤニヤしながら自分の方へ向かってきたら誰だつて似たような行動を取るだろう。疲れてるのに怖がらせてごめんね。

心の中で謝罪しつつ表情を取り繕おうと頑張る。

しかしその後も、俺はめぐり先輩とのやり取りを思い出すたびに、

「ぐふふ」と気持ち悪い声を漏らしてしまふのだった。

× × ×

「ズルする子は嫌い？」

めぐり先輩は俺の胸をそのつるつとしたおでこすりこすりしながらいうと、  
下からずいっと見上げてくる。なんていうかもう、その仕草自体がズルい。

「やつ、嫌いじゃないです……」

なんとか答えると、俺はふうとため息をつく。

俺の答えにめぐり先輩はにひひつと意地悪そうな笑顔を見せるが、  
そんな表情も先輩がするとたまらなく眩しい。

その笑顔に引き込まれそうになって、はつと途中で冷静になる。

あ、あぶねえ……。ついうっかり、頬ずりしそうになつちまつたぜ……。つて、おおお  
おいしい！

俺が無意識で先輩に頬ずりするのを我慢出来たことにほつとしていている間に、

めぐり先輩当人が俺の胸を頬ずりしているではないか！

ちよ、ちよ、先輩……。そ、そこ。そこは、だめ……

口から変な喘ぎ声漏れそうになるのを抑えながら、めぐり先輩の暴挙をなんとかやめさせなければと思い、夏の暑さとは違う熱でぼんやりとした頭を動かし必死に考える。

が、俺のそんな涙ぐましい努力を知らないめぐり先輩は俺が頭を捻っている間にも、右手で俺の脇腹をつんつんついたり、左手で俺の背中からお尻を撫でたりするのでなにかを考えるどころではなくなってしまう。

このままでは俺のリトルロケットが、射出体勢に！

そんな危機的状況に慄く俺の耳に、めぐり先輩の眠そうな蕩けた声が届く。

「こうしてるとき、なんだかほっとして眠くなちゃうね」

え、まじで？ 俺のリトルボーイは半分起きかけてるんだけど!?

そして、ぐったりとした様子で俺に寄りかかるとめぐり先輩は足元が覚束無い。

「そんなにフラフラしていると転んじゃいますよ？」

言うのと、めぐり先輩は俺の胸に頬を当てたまま、上目遣いで見つめてくる。

「なら転ばないように、比企谷くんがちゃんと抱きしめてよ」

お、おう……。まあ一応彼氏だし、そのくらいはしてもいいのかな？

それで俺は言われた通り、めぐり先輩の身体を緩く抱きしめる。

すると、めぐり先輩は俺の胸元で満足気な吐息を漏らす。

人の体って、ほんとあつたかいんだなあ……

そんなありきたりな事を感じていると、めぐり先輩がふふつと笑った。

「比企谷くんの心臓、すごくドキドキしてる」

「……そりやしますよ。こんな状況じゃ。めぐり先輩はしてないんですか？」

「んっ、してるよ？ 手、当ててみて」

えっ？ いいの？ 胸の谷間に手を当てることになるけど？

まあ谷と呼べるほどではなさそうですが……

「背中からでもその場所に、手を当てたら聞こえるでしょ？」

ああ……背中ね。まあそりやそうか。

少し残念に思いながら、先輩の許可を得たのでその背中にそつと手を当ててみる。

あーやつぱり、先輩華奢だなあ。腕も腰も脚も細く、肌はぬけるように白い。

胸がまあ、由比ヶ浜や陽乃さんに比べたらちよつと大分、慎まし過ぎる気もするがそれもこれでこの人の人柄に合ってる気がしないでもない。

もつと傲慢になつてもいいんだぜー？ と思いつつ、不思議な気分になる。

ほんともうね、俺と同じタンパク質で出来てるとはとても信じられない。

なんかモンハンにあるようなレア素材で、このひと形成されてるんじゃないやねえの？

そんな感想を抱きつつ、先輩の心音を確かめるよう手のひらをその背に押し当てながら自分の心臓の音がうるさすぎでいまいちよくわからない。

「聞こえる？」

「う、うゝん。自分のがうるさすぎて、なんかちよつとよくわからないです」

答えると、先輩は俺の胸から顔を外し、周囲をきよろきよろとします。

そしてすぐ傍にあった石段を一段登ると、おいでとばかりに手招きで俺を招き寄せ

る。  
段の上に立った先輩は俺より頭一つ分高い位置におり、すると先輩の慎ましやかな胸

が俺の目の前にくることになる。

それで少し目のやり場に困っていると、先輩は「えいつ」と可愛らしい掛け声とともに

俺の頭を自分の懐に引き寄せるので、俺は倒れ込む形で先輩の胸元に飛び込んでしま

う。  
「どーお？、これで聞こえるっ？」

「……すいません、もっと聞こえなくなりました」

頬に感じる柔らかさにうろたえながら情けない声でそう答えると、めぐり先輩は楽しそうに「えへへ」と笑った。

× × ×

そんな事を思い出しながら歩いているとどうしても顔がニヤついてしまう。それで人気のない道を選び遠回りですぐ帰ってきたおかげで、

家に着いた頃にはもうすっかりと日も落ちていた。

ようやく着いた我が家の玄関を開けると、見覚えのない革靴が目映る。

そして二階からは楽しげなはしゃぐ声が聞こえてきた。

はて、小町が珍しく友達でも連れてきたのかな？

そんな事を思いながら、靴を脱ぎ、階段を上がる。

そして俺のような兄がいることが知られたら、小町も困るだろうと思

そのまま自分の部屋へと足を進めていると、背後で扉が開かれる。

「あつ、お兄ちゃん。おかえり〜」

「おう、ただいま」

「あつ、せんぱくい。おかえりなさいです」

「おう、ただいまつて……。なんでお前がうちにいるんだよ……」

リビングからびよこつと顔を覗かせている一色を見て俺は尋ねるが、一色はそれには  
答えず

俺の手を取ると、リビングに引きずり込もうとする。

「せんぱい、早く早く。ご飯冷めちやいますよ」

「あつ、おい。ちよつと」

「とつ、そうだ先輩。座る前に手を洗ってくださいね」

「お、おう……」

言われるがままに手を洗い、洗い終えると食卓に着く。

目の前には普段より豪勢な晩飯が、ところ狭しと並べられていた。

「これお前らが作ったのか？」

尋ねると、小町が元気に答える。

「いろは先輩がほとんど作ったんだよ！」

ほーん。一色がねえ……

照れくさそうに頬を掻いている一色を見て、俺は先ほどと同じ質問を試してみる。



「で、なんでお前、こんな時間にうちにいるんだよう？」

「私今日、小町ちゃんの家にお泊りするんです」

おいおい、こいつ。しれつととんでもないことを言い出したぞ。

「ここ、俺んちでもあるんだけど？」

「そうなんですか？」

いや、そんな不思議そうな顔でそうなんですかって言われても……

「そうだよな？　小町」

俺が言うと、一色も似たようなことを口にする。

「そうなの？　小町ちゃん」

それに答えた小町の一言。

「さあ？」

「ご丁寧に首まで傾げていやがる。

「い、いや……。さあつてなくない？　ねえ、小町ちゃん」

俺は悲しみに満ちた声で言い募るが、それを遮るように一色がぱんつと手を叩く。

「せんぱい。そんな事より、早くご飯食べちゃいましょう！」

そんな事とはなんだ、大事なことだよお！　と言いかけたが、二人ともささつと箸を

取り

食事を始めるので、俺も仕方なく自分の箸に手をのばす。

そうして二人は楽しげにお喋りしながら、俺は黙々と食事をとること暫し。

壁に掛けられた時計に目をやりながら、一色に尋ねてみる。

「なあ一色。お前何時に帰るんだ？ 二十時？」

一色は顔をこちらに向けたあと、俺と同じ方向へ視線を向ける。

「ちよと、せんぱい！ 二十時<sup>はちじ</sup>つて、もうあと三分しかないじゃないですか！」

「急いで食べば間に合うから大丈夫だ。なんだつたら残しても平気。ダイエツトにもなるしな

それでウルトラマンのように帰ってくれ」

「うわー。最低ですね、せんぱい」

「そうだよ、お兄ちゃん。女の子にそういうこといっちゃダメだよ？」

いや小町、お前そういうけどさ。俺をつい今しがた、赤の他人扱いしたじゃない？

そっちのほうがお兄ちゃんは、ひどいんじゃないかなーって思うんですけど。

「せんぱいの家、今日はご両親が留守だつて小町ちゃんから聞いたんですよ。

それでこれから、小町ちゃんも混じえて勉強会でもしようかなって思いました。

ほらいつも同じ場所じゃ、飽きるじゃないですか？」

一色の言葉に、小町もうんうんと頷く。

そうして二人は「今日は徹夜で頑張るぞ！」などとやる気をみなぎらせるので話には入れない俺はそつと窓の外へと視線をやった。

## ほんとうに電話で良かった

「そかあ。お兄さん、朝から出掛けてるのか〜」

「そうなんですよー。すいません、いろは先輩。わざわざ電話してくれたのに」

「ううん。気にしないで小町ちゃん。それよりごめんね。こんな時間に電話しちゃうて。」

小町ちゃん、おうちのことやってるんでしょ？ 忙しくない？」

「いえいえ、小町、今日は早起きましたからね！ もう家のことは終わってますよ」  
「やあー、えらいね。わたしも見習わないとなあ〜。」

「そういえば、お兄さんはおうちのことやらないの？」

「普段は結構、やってくれてますよ〜。でも兄は今年、受験生ですから。」

去年小町がそうだったとき色々と気を使ってくれたんで、今度は小町の番なのです」

ほんと。先輩の妹とは思えないくらい、できた子だなあ。

「ほんとえらいよ、小町ちゃん」

「いえいえ、そんなそんなあ〜」

「そうだ！ そういえばいろは先輩知ってます？ 最近、駅前に出来た——」

照れて話題を逸らす小町ちゃん。

それが可愛らしく、わたしは思わず微笑んでしまう。

先日、小町ちゃんに彼女のお兄さんでもある先輩への気持ちを打ち明けてから、私と小町ちゃんは毎日のように連絡を取り合うようになった。

とはいえ毎回先輩の話をする訳でもなく、今小町ちゃんが話しているような食べ物屋さんや服屋さんの話題になることのほうが多いのだけ。

「へえー。そんなに美味しいんだ〜。」

ならさ、小町ちゃんにはお世話になつてるし、今度そのお店でご馳走するね！

そうだ、なんだつたら今日でもいいけど？」

「やー、自分の分は自分で出しますよ〜。でも〜一緒できるなら、小町嬉しいです！

それにお話して、小町なんにもしてないですし」

「そんなことないよ！先輩のこと、こんな風に話せるの小町ちゃんだけだし」

「そうなんですか？」

「うん……。だつて雪ノ下先輩や結衣先輩には言えないし聞けないもん。」

それにあの二人には、ちよつと知られたくないしね、私の気持ち」

そうなのだ。

下手にあの二人に自分の気持ちが知られ、それで焼けぼつくり火が付いたじゃない

けど、

前みたいな雰囲気になられても困るし。

「でも、ほん和小町、その……」

んー、まだだ。やっぱり小町ちゃん。なんか隠してるよなあ、これ。

気持ちを打ち明けた当日はあれほど協力的だった小町ちゃんが、日が変わったらやん

わり

先輩を好きになるのをやめたほうがいいと臭わせることがある。

例えば「いろは先輩ならあんな兄より、いい人がいると思いますけどねえ〜」などな

ど。

以前なら「あんな兄ですけどいいところも少しはあるので、見捨てないであげてくだ

さい」

と言っていたのに。言い方はどっちも酷いけど、若干ニュアンスが違うように感じ

る。

それらのことを踏まえて考える。

すると、名探偵コナンくんを全巻読破した人の書いたブログを読んだ経験のある私の

勘が、

これは何かがあると告げるのだ。ここはひとつ、確かめねばなるまい……

「ねえ、小町ちゃん」

「はい?」

「もしかしたらなんだけどき。わたしになにか隠してること、ない?」

「へっ!? な、ないですよ……」

うん。あるな、これ。あるある。絶対なにかある。

しかしここで「言ってみてよ〜」などと言うのは、愚策。

それよりも、多分これかな? と思うものそのものズバリを言ってみて、

相手の出方を伺うのがプロというもの。匠の技をみせてくれよう!

「ん〜、そうだなあ。例えばお兄さんに、好きな人ができたとか?」

「うぐっ……」

えっ? もう当たり? てか先輩に好きな人が?

で、でもまあ、先輩が好きでもその相手が先輩を好きになるとは限らないわけで。

今のわたしがそうだし。と、自分で考えて、自分でへこむ。く、くう〜、ブーメラン

過ぎた。

そして、なんとか気を取り直し次の問いを考えるわたしの耳に、

小町ちゃんの困ったような声が届く。

「あのおう、いろは先輩」

「うん？」

「城廻さんのこと、どう思ってますか？」

「この前うちに来たときに、生徒会でお付き合いがあったって聞いたんですけど」  
「城廻先輩はね、わたしの前の生徒会長さんだよ。」

「そういえばちょうど、小町ちゃんとは入れ違いだね」

「そうだったんですか。なんかすごく優しそうな人だなーって」

「うんうん。生徒会のメンバーにもとつても心酔されて慕われてたよ」

「そのう……。いろは先輩はどうなんですか？」

「へっ？ わたし？」

わたしは、うくん。まだまだ心酔とか慕われるとかはないと思うなあ」

そう。呆れられるとか諦められるとかはあるけど。」

「あつ、ちがくてですね。城廻先輩のことを……」

ああ、そっちなか。」

「ん、心酔とかそういうのは無いかなー。もちろんいい人だなんて思うけどね」

「そうなんですか？」

「うん。わたしが生徒会の仕事を教えてもらったときの話なんだけど。」

帰りがさ、遅くなる時があるじゃない？ あれこれやってて。」



そういう時にね城廻先輩、学校のすぐ傍に住んでるのに、わざわざわたしのこと  
駅まで送ってくれたりしてね。

『女の子をこんな時間に一人で帰すわけにはいかない!』っていつてさ。

あなたも女の子じゃん、って思うじゃない?」

いうと、小町ちゃんはおかしそうに笑う。

「そんな風にしてもらえたからかな。お兄さんと仲良くしてても、嫌いになれないとい  
うか。」

むしろお兄さんのほうに、デレデレしやがってって思ったり」

「す、すいません」

「あつ、いやいや。でもうん。まあ仕方ないかなって。城廻先輩すごく……」

そうすごくいい人なのだ。

それで城廻先輩が比企谷先輩とキスしていたとひろから聞いた時も、

驚くよりも先に、妙に納得してしまった。

自分かもし男の子なら、あーいう女の子に惹かれるのも理解できてしまうから。

そんな事を考えて黙ってしまった私を氣遣うように、

小町ちゃんが優しい声を聞かせてくれた。

「でもですね、小町おもうんです。」

いろは先輩も充分、立派な生徒会長さんだなんて」

その言葉に、頬が緩む。

「ありがとね、小町ちゃん」

そしてほんとうに素直に、感謝の言葉が口からこぼれる。

そうしてその後、小町ちゃんは隠していたことをすごく謝りながら、わたしの知らなかった比企谷先輩と城廻先輩のことを教えてくれた。

× × ×

「あんな兄ですけど、小町は大好きなんですよ」

「うん」

「それで小町は、兄を好きになってくれてお付き合いしてくれた城廻さんも大好きなんです。」

上手くいって欲しいなって。お兄ちゃんずっとひとりぼっちだったから」

「うん」

「だから小町、いろは先輩のこと応援できなくなっちゃったんですけど……」

それでも小町は、いろは先輩のことも大好きなんですよ」

答えなきや、と思いつつも、声が詰まって出てこない。

こんな純粋に誰かに好きだといってもらえたの、いつ以来だろう。

ほんとうに電話で良かった。今のわたしの顔、とても見せられないから。

そしてわたしも純粋に、自分の気持ちを声にしてみることにした。

「ねえ小町ちゃん。良かったらなんだけど、今日うちに泊まりに来ない？」

なんかね、小町ちゃんともっと一杯話したいなって」

「いいんですか？ 小町いつでも」

「うんうん」

「あつ、でも今日うち、両親いないんですよ。二人とも出張で。」

お兄ちゃんも何時に帰ってくるかわからないし、ふたり揃って留守にするのも……」

うくん、そうだ！ なら、いろは先輩。うち来ませんか？」

えっ、マジ？ 先輩とひとつ屋根の下!？」

て、ごめん小町ちゃん。純粋な気持ちがあつというまに邪に。

もちろん私は小町ちゃんの提案に飛びついて、それから急いで出かける準備を始める

の  
だ  
っ  
た。  
。

## 夏の夜空を見上げて

夏休み二日目、木曜日の夕方。

お邪魔した先輩の家のそのキッチンで、私は小町ちゃんと二人、晩ご飯の支度をする。勉強会の日に先輩に食べてもらっているお弁当は常温でも持ちが良いものかどうかどうしてもメインになってしまう。

なので今日はちらし寿司とミニ巻き寿司、そしてお吸い物を作ることにした。料理には二人とも慣れていているせいか作業はてきぱきと進み、後は巻き寿司を残すのみ。

洗い物をしてきている小町ちゃんの隣で、私は海苔をくるくる巻いていく。

「いろは先輩。すごく手際が良いですね〜」

「料理はね〜、それなりに得意なんだ！ でも小町ちゃんだつてすごいよ。」

私は気が向いたときしかやらないけど、小町ちゃんは毎日やってるんでしょ?」

「いえいえ〜。小町は小町ができること、やっているだけです」

「それで充分だよ」

そう答え作業を進めていると、小町ちゃんは洗った台所用品を水切りしながら

困ったような声をだす。

「そのう、いろは先輩」

「なーに？ 小町ちゃん」

「呼んどいてあれなんですけど、顔合わせるの嫌じゃないですか？ えっと、兄と」

ああ、まあそう思うよね。

「んー、別に嫌じゃないよ？」

「そうなんですか？ だって兄は今日、その……」

「城廻先輩とデート中なんですよ？」

「はい……」

申し訳なさそうに俯く小町ちゃん。

別に小町ちゃんが悪いわけでもないのにな、と思いつつ

自分の考えを口にする。

「お兄さんが誰を好きでも、それでわたしのお兄さんが好きって気持ちは変わらないしね。」

そんなんで変わるようなら、それって好きじゃないでしょ？」

私の言葉に小町ちゃんは、ほーと感心したような声を出す。

「なんか恋愛の達人とか恋の百戦錬磨って感じがしますね！」

「そうかな？ ふふふん」

得意げな笑みを返し、ふと思う。

これって遠回しに、ビツチっていわれてるのかな？

横目でちらりと小町ちゃんを窺うと、ほっとした表情を浮かべていた。

その表情にそういう意味が含まれてないとわかり、私もほっとする。

そしてまた、二人して作業へと戻る。

暫くすると小町ちゃんがぼつりと呟いた。

「でもその……。辛くないです？」

いわれて考え、思ったことを口にする。

「まあ両想いに越したことはないけど、そういうのって仕方ないよね」

そう仕方がない。

私だって今まで散々、自分に好意を寄せてくれる男の子たちを振ってきた。

いざ自分がその立場になったら、それは嫌は通らないだろう。

それに……。なんというかいまいち実感が湧かないのもある。

別に小町ちゃんの話信じてないわけでも信じられないわけでもない。

ただなんとなく、先輩が誰かと恋人同士になるというのが上手く想像できないのだ。

「でもさ、小町ちゃん。」

さつき話したけど、わたしこれからお兄さんにちよっかいかけるの別にやめなくつてもいいんだよね？」

「それは……。はい、そうですね。そういうのを止める権利って誰にもないですし。まあ結婚とかしてたらあれですけど」

「それはね」

「それとちよつと言ひ方が酷いかもですけど、それで気持ちちが播らぐようなら

その程度の仲だった、そう思いますし。あとはまあ、早いほうが偉い訳でも」

「あー、うん。わかる！ あれだよね？」

『私のほうが先に好きになったのに、あとからしやしやり出てこないでよ！』って

やつだよね？ 小町ちゃんも言われた経験あるの？」

「あるんですよ。小町は告白されて断っただけなんですけどね。」

そしたらその男の子を好きだった子にいわれて……

なんでこんなこといわれなきやならないんだらうって、怒る前に呆れました」  
ほんとあれ、なんなんだろう。

先に好きになったから、それが一体なんなの？ って思っちゃう。

「でもいろは先輩。兄にはなにをしてもいいですけど、城廻さんにはダメですよ？」  
先輩にはいいんだ、と思いつつ聞いてみる。



「ダメっていうと、例えばなにがダメなの？」

「そうですね……。城廻さんの家にいたずら電話をかけたたり、ピンポンダッシュしたり、生卵を投げつけたたり、怪文書ばら撒いたり、そういうのはダメです」

それ、ダメなんだ。

じゃあ他にはーと頭を捻っていると、小町ちゃんは短いため息をついてピツと指を立てる。

「なにもしちゃダメです！」

先輩もこんな風に小町ちゃんに叱られてるのかな？

そう思うとなんだか少しおかしくなる。

「了解です！ 小町先生」

ふざけていった後、二人でくすくす笑い合う。

そして笑いをおさめた小町ちゃんが、遠慮がちな声でいう。

「いろは先輩。どんな形になっても、その……。小町と友達でいてくれますか？」

もちろん、わたしの答えは決まってる。

× × ×

その後、帰ってきた先輩を巻き込んで、急遽開催された勉強会。

「今夜は徹夜で頑張ります！」といっていた小町ちゃんは早々と脱落。

もしかして気を遣ってくれたのかも知れない。

そして残された私たちはリビングで勉強を続け、時計の針が夜の二時を回る頃、

先輩がふいーつとため息をつく。

「一色。そろそろやめねーか？」

「そうですね。もういい時間ですし」

答えると、二人で片付けをする。

片し終わると先輩は、伸びをしながらふわっと欠伸を漏らした。

「んじゃ、そろそろ寝るか」

うーん。そういう意味でいったんじやないのはわかるけど、なにやら照れますね。

それにわたしも眠いけど、もう少し二人の時間を楽しみたい。

なので駄々を捏ねることにした。

「せんぱい。甘いものがほしいです」

先輩は少し面倒そうな顔をしたが、しゃーねーなーと言いつつ、キッチンへ足を運ぶ。そして冷蔵庫をゴソゴソすると、なにかを持ってくる。

「ほれ。飲め」

うん。やっぱりこれが来たか。

黄色と黒のツートンカラーでお馴染みのマックスコーヒー。

先輩が普段、美味しそうに飲んでいるので、それを見たわたしも試しにと飲んだことがある。

初めはあまりの甘さに目を白黒させたが、回を重ねることに

これはこれで美味しいかも？ と思えるようになってきた。

なので飲めないわけではないしありがたいけど、それでは目的が果たせない。

「せんぱい。わたし、ケーキが食べたいです」

「ケーキ？ そんな洒落たもん、うちにはねーよ」

「そこでせんぱい。コンビニですよ！」

「こんな夜中に、女の子が外にでるもんじゃありません」

「だからせんぱいもいくんですよ？」

「えっ、俺もいくの?」

「当たり前じゃないですか」

さも当然。そんな風にいうと、わたしはきつきと廊下へ出る。

先輩はため息をつきつつも、ついてきてくれる。

そういうところがポイント高いですよ? せんばいっ。

×  
×  
×

そんなやり取りを思い出しながら、わたしは先輩と二人きり、夜道を歩く。寝静まった街。その誰もいない夜道を、好きな人と歩く。

わたしが幼い頃から憧れていたシチュエーションのひとつ。

他に、札幌で溢れたお風呂に入るとかあるけど、それは将来のお楽しみ。

少し先を歩く先輩のその背中を追いかけるよう、わたしもてくてこ歩く。

先輩はときたま振り返り、わたしがついてきてるのか確認してくれる。

そんな先輩に微笑みを送ると、先輩は照れくさそうに前を向いてしまう。

そういうところがまた、ポイント高いですね？ とさらに加点してあげる。

夜空を見上げてみると、空近く星々が瞬いていた。

いい夜だな、と思い、見上げたまま先輩に声をかける。

「わたし、こんな夜中に男の人と歩くの初めてです」

「すまん、俺で。葉山なら良かったんだけどな」

「いえいえ。せんぱいで充分ですよ？」

ほんとうに。心から。

「ありがとう」

先輩はいうとちらりとこちらを見て、頭をガシガシ掻きながら口を開く。

「まあなんだ。葉山とは最近どうだ？」

気にしてくれてるんだな、と思い、そんな風に気にしてくれる先輩に嘘をついていた

ことに

胸がちくりと痛む。

「それなりに上手くやっていますよ」

「そうか」

「はい」

返事を返ししながら、私は思う。

私が嘘をつかず自分の気持ち素直に打ち明けていたら、今頃どうなっていたかを。「せんぱいのことが好きみたいなんですけど、自分でもよくわからないんです。

なので一緒に確認してください」

そういつて誘えば、冬の千葉でのデートもまた違ったものだったかもしれない。

そしてその後の、私たちの関係も。

そんな事を考えながらそれからまた黙って歩く。

そしてコンビニに着くと、二人でデザートを物色する。

わたしはシュークリームを選び、先輩はエクレアを選ぶ。

会計を済ませ外に出る。

来た道をゆっくりと戻りながら、前を歩く先輩に目をやる。

そしてどうしても気になる事を、尋ねてしまう。

「せんぱい。今日はどこへお出かけだったんですか？」

先輩の背中がぴくりと跳ねる。

「あー、うん。本屋だ」

「本屋さんですか」

「ああ」

「お一人で？」

先輩の背中がまたびくりとする。

「俺はいつも一人だぞ」

ふむ。

「なにか良い本は見つかりましたか？」

「残念がらなかったな」

「それは残念ですね」

「ああ」

少し間を置いてから、また話かける。

「それで先輩」

「なんだ？」

「城廻先輩とのデートは、楽しかったですか？」

先輩はすごく驚いた顔で振り返る。

そして暫く固まっていたが、目元に手をやると、はあつと深くため息をつく。

「小町か……」

「今日のごとはそうですけど、先輩方がそういう関係なの、ひいろから聞いてましたよ」

「？」

「ひいろ？ え……、なんで？」

事情が飲み込めていない様子の先輩に説明すること暫し、

先輩はまた深くため息をつく。

「一色。それは違う。そんなときはまだ、俺とめぐり先輩は付き合ってたぞ」

「先輩。そこのとこ詳しく」

「やだよ。お前絶対、それをネタに脅してくるし」

「奉仕部のお二人に言いつけますよ？」

「OK、わかった。聞いてくれ」

そうして私は、先輩が城廻先輩に連絡を取ろうとしたその切っ掛けが、

自分が先輩に伝えた言葉だった事を知ることになる。

ちよつと待つてよ、なんでそうなるの？ そんな意味で、口にしたわけじゃないのに

……

剥がれ落ちそうになる笑顔を必死に繕い、先輩の顔を窺ってみる。

恥ずかしそうにしながらも、嬉しそうで楽しそうな、そんな笑顔を先輩は浮かべていた。

その笑顔を見て足元が崩れたような錯覚を覚え、私は倒れそうになる。



「おっと、あぶねえ……。だいじよぶか？ 一色」

「す、すいません」

先輩に支えてもらい慌てて体勢を立て直し、顔を上げる。

先輩は心配そうに私を見ていた。

それを見て今更ながら私は気づく。

その優しい眼差しも、少しかすれた低い声も、そしてこの温もりも

どれほどそれを求めても、自分のものにはならないのだと。

「だいじよぶです。すいません……」

「そうか？ 無理すんなよ？」

「だいじようぶです……。帰りましょう、先輩」

「……じゃあ帰るか」

「はい……」

歩き出す先輩の背中を立ち止まったまま見つめていると、それはどんどん遠くなっていく。

視界が滲み涙がこぼれないよう、空を見上げる。

見上げた夜空は先ほどと変わらず星々が瞬いていたが

滲んだ目ではよく見えなくなっていた。

## 手当て

足元を見ながら、とぼとぼと歩く。

前を歩く先輩は時折振り返り、心配そうな表情で私を見てくる。

その度に私は顔を上げ、無理をして笑顔を作る。

その笑顔を見て先輩は、余計と心配そうな顔をする。

なにか言いたげなその口元には、ついさつき城廻先輩のことを話していたときの

微笑みは無くなっていた。

今この場にはいない城廻先輩はこの人を笑顔にし

すぐ傍にいる私はこの人を困らせている。

そう思うと胸が苦しくなる。

気まずさに耐えられず、感情が声に出ないよう気をつけながら

先輩に話しかけてみる。

「すいません、先輩。ちよつと今日、体調がよくなかったんですね」

「だいじよぶか？」

「もう平気ですよ。寝不足とかもあるかもです」

「そうか、言つてたもんな。夜遅くまで勉強頑張つてゐるつて」

先輩は納得してくれたみたいだ。ほつとした表情を浮かべてくれた。

「それと先輩。今日はご迷惑じゃなかったですか？」

「ううと、先輩はぼかーんとした顔でこちらを見てくる。

「へっ、なにが？」

そんな何言つてんだ、こいつ、みたいな顔しないでよ……

結構頑張つて話してゐるんだから。

「えつとですね。急に泊まりに来ちやつたことです」

「ああ、それが。いや、別にかまわん。むしろ助かつたぞ」

助かつた？ なにが？

「なにか助けになつたんですか？ わたし」

「えつとな、小町が最近、悩んでるほかつたんだよ。

それとなく尋ねても教えてくれなくてな。少し困つてたんだ。

でも今日、お前といて元気になつたみたいだし、ほんと助かつたわ」

「ちよ、ちよ、ちよつと待つてえ。その悩みの種、わたしだよね？」

「どうしよう。凄く居た堪れない気持ちになちやう。

ほんともうわたし、なにやつてんだろ……」

そう思うと、「はは……」と自嘲的な笑いが口からこぼれてしまう。するとそれを聞きつけた先輩が、ぎよとした表情でこちらを見てくる。

「一色。どうしたんだお前？　急に笑い出して。中学時代、俺もそうだったんだけどなはたから見るとそれすごく不気味だから、ほんとうにやめといたほうがいいと思うぞ」

この人はまったく、人の気も知らないで……。と恨みがましく思いつつ、ふと先輩の中学時代ってどんななんだったのか気になり尋ねてみる。

「先輩って中学の時、どんな感じだったんですか？」

「あんま言いたくねーなあ……」

先輩は難しそうな顔をする。

まあ言いたくない過去のひとつやふたつ、誰にだってあるしね。

現在進行形で私がまさにそう。

「すいません。へんなこと聞いて」

謝ると、先輩はじろつと薄目で睨んできた。

「おい、一色。俺の中学時代をへんなこと扱いするんじゃないよ」

「そういう意味じゃないですよ！」

「ほんとかよ」

先輩はいうと、にっと笑う。

その笑顔に、元気のない私を元気づけようとしてくれてるんだと気づき冷えていた胸が暖かくなる。

「それにお前、俺の中学時代なんて、聞く価値ないぞ。

自分の好きなモノを誰に話すことも、誰かの好きなモノを教えてもらうこともできない  
い

そんな時間だったからな。まあ中学に限らず、俺はずっとそうだけど」

ああ。だから先輩、わたしに秒速の話をしてるとき、あんなに楽しそうだったんだ  
……

「城廻先輩とはそういうお話、たくさんしてましたもんね」

「まあその、お前のおかげだ。ありがとな、一色」

暖かくなっていた胸がすっと冷える。

先輩がわたしに、ありがとうといってくれているのに。

でもその言葉は刃物になって、私の心を千切るように切り刻む。

「いえ……」

なんとか声を絞り出し、ぎこちない笑顔を浮かべる。

それが私にできる、精一杯だった。

×  
×  
×

カチャつと小さく、玄関が開く音が聞こえた。どうやらふたりが帰ってきたみたい。時計に目をやると、夜中の三時を指している。一時間近く、どこに行つてたんだろう？

とんとんと階段を上る足音が聞こえ、小さな話し声が耳に届く。

おやすみ、というお兄ちゃんの声がして、隣の部屋の扉が閉まる音が聞こえた。

そして部屋の扉が薄く開けられる。

音を立てないよう忍び足で部屋に入ってきたいろは先輩が、ふつと短くため息をつく。

そして小町が寝ているベットの横に敷かれた、自分の布団に潜り込む。

いろは先輩、お兄ちゃんとたくさんお話しできたかな？

思いながらウトウトしていると、小さな嗚咽の音が聞こえた。

そつと視線を向けてみる。

すると、二燭光の淡い明かりの下、頭まですっぽり布団に包まっていたいろは先輩が

幼子のように身を縮め泣いているのがわかる。

なにか声を掛けなきゃと思うけど、なんて声をかければ良いかわからず困ってしま  
う。

うーんと考えるがなにも浮かばず、仕方なく記憶を探る。

そして小町が辛い時、お兄ちゃんが小町にしてくれたことを思い出しすることにし  
た。

ベットから起き上がり、いろは先輩の横に座る。

そして手を伸ばしタオルケットに包まれたその頭を優しくゆっくりと撫でる。

手が触れた時、いろは先輩は驚いたようにぴくつと身体を揺らしたがそのまま撫でて  
いると

その息遣いが落ち着いたものになっていく。

小町は何も聞かず、いろは先輩も何も言わない。

なにがあつたかはわからないけど、いろは先輩が聞いてと言つてくるまでは聞かないほうがよいよね。

そう思い、ただ黙つて撫でていると、すーすーと規則正しい寝息が聞こえてきた。



## 届かなかったとしても

目が覚める。

頭をガシガシ搔きながらベッドから起き上ると、んつと伸びをする。

そしてふつと短くため息をつく。

どうやら一色による夜這いイベントは起こらなかったようだ。

まあ起きても困るんだけどそこはね。

やはり年頃の男子としてはほんの少し、期待してしまうのも致し方ないような気がする。

ベッドに横になりウトウトしていると、遠慮がちなノックの音が耳に届く。

起き上がり扉を開けるとそこには、枕をギユツと抱きしめて俯いている一色の姿が。

「眠れないのか？」と問いかけると、一色はこくりと頷く。

そして気恥ずかしげにモジモジしながら、「一緒に……いいですか？」と呟き、そして

……

なんて妄想をしていたからか、なかなか寝付けずにいたのだ。ふふ、俺もまだまだ若い。

そんなアホなことを考えつつ寝ぼけ眼で時計を見ると、針は十時を指している。ちよつと寝すぎたかなと思ひながら、部屋を出て洗面所へ向かう。

身だしなみを整えリビングに入ると誰もおらず、夏の暖かな陽光が室内を明るく照らしていた。

小町たちはまだ寝ているようだ。

まあ今日外へ出かけるのは、涼しくなる夕方からの予定。

二人とももう少し寝かしておいてもいいだろう。

小町もそうだが一色も、普段頑張っているのだから

こんな時くらいゆっくり寝かせてあげるべきだと思う。

なので普段頑張っていない俺が、取り敢えず飯の用意だけでもしておくか。

そう思い、俺はキッチンへと足を運んだ。

×  
×  
×

「知らない天井だ……」

ぼんやりとした頭でそんなことを思っていると、自分の頭が誰かに緩く抱きしめられていることに気づく。

視線をそつと上に向けると、小町ちゃんのだけな寝顔が見える。

記憶を整理する。

ああそうか、夕べ……。思い出すとまた目尻に涙があふれそうになる。

自分の間の悪さに。先輩の笑顔に。小町ちゃんの優しさに。

こぼれそうになるため息を飲み込むと、枕元に置いておいたスマホに手を伸ばす。時刻は十時十五分。朝というよりも昼に近い。

そろそろ起きなきゃと思うが、体が妙にだるく感じる。

それに自分を優しく包んでくれる小町ちゃんの体温はとても心地よく、離れがたいものがある。

もう少しこのままでいよう。そう思い、小町ちゃんの胸元に顔を寄せる。

むにとしたその感触を頬で味わいながら、私は考えてしまう。

一体どこでなにを、私は間違ってしまったのかと。

目を瞑り先輩と初めて会った時から今までのことを、順に思い出していく。

出会った頃は、どうでもよい人

出会ってすぐは、どうしようもない人

仲良くなってからは、どうにかしたい人

好きになってからは、どうにもならない人

我慢したはずのため息がこぼれる。やっぱりあの時からだと今更ながら気づいたから。

先輩と初めて、二人で出かけたあの冬の日。

あの時わたしは葉山先輩をダシにして、先輩を連れ出した。

もうあの時点で、わたしは自分の気持ちに気がついていたので。

断られたら嫌だなという気持ちもあったと思う。

依頼という形なら先輩は断らないという、そんな思惑もあったと思う。

でもそうしたせいで、どんどん自分の気持ちを先輩に伝えることが難しくなってしまう。

他にもある。

わたしは雪ノ下先輩と結衣先輩に遠慮していた。

遠慮とかどうかどうしたってこの二人には敵わないという引け目。

そして自分によくしてくれるそんな二人の想い人に心を寄せることに。

まあそれでも我慢できず、先輩にあれこれちよつかいだしていたけど。

でもそれはいつまでも答えを出さずにいる、あの二人も悪い。

そう思つてそれは私もだよねと気づき、仄暗い笑みが口元に浮かぶ。

まあいいや、わたしはモテる。

今年に入つてすでに十人近い男子から愛の告白をされるほどの美少女なのだ。

先輩よりもカッコ良い男の子もいた。おしゃれな男の子もいた。お金持ちの男の子もいた。

「あの時はごめんなさい。今になってやつと、自分の気持ちに気づいたの……」

なんて言えば、すぐさま彼氏の一人や二人でできるだろう。

そうだよ、なにも先輩なんかにこだわる必要はないんだ。

そう思うと、少し気が楽になる。

そういうえばどんな男の子たちだったけ？

うくと頭を捻つて記憶を探るがまったく顔が思い出せない。

そして何故だか先輩の顔ばかりが浮かんでくる。それでなんか、無性に腹が立つ。

あの人。人がこんなにつらい思いをしてるのに、他の女の子といちやこらしやがつて

……

はつ。いけないいけない、黒いろはす化まつしぐらだった。心穏やかにいかない。

そこでわたしは小町ちゃんの胸を頬でむにむにすることで、心の平穏を保つ。

うむ、これは良いものだとその感触を楽しみながら、わたしのほうが二割ほど大きい  
など

女としてのプライドも満足させる。

そしてもう一度、天井を見上げてみる。

うん。どうもわたしは、自分が思ってたより器用ではないみたいだ。

もつと簡単に気持ちの切り替えができると思っていたしそうしてきたつもりだけど  
今回は全然、そんな風にできない。まあ、仕方がない。

先輩の言葉じゃないけど、出来ないことを無理にする必要はないと思う。  
でも、できない事とやらない事は全然違う。

今までわたしは無理だって諦めて、やろうともしなかった。

もうすでに遅いかも知れない。そうでなくても上手くいくとは限らない。

だからって諦めてやらなくていい理由にはならないと思う。

顔を上げ、前を向き、手を伸ばす。それでたとえ、届かなかつたとしても。  
とはいふものの、今更なができるだろう……

先輩は決まった人ができたなら、きつと一途だろうし。

生半可なことじゃ、こちらに振り向いてくれないと思う。

どうしようかなあと悩み、どうするべきか考える。そうして思いつく。

そうだ、あの日をもう一度やり直そう。

心を決めたわたしは自分を包んでくれる小町ちゃんの手を丁寧に解く。

そしてゆっくりと身体を起こし、んつと伸びをする。

すーすーと寝息をたてる小町ちゃんを見て起こすか迷ったけど

もう少し寝かしとこうと思いい立ち上がる。

部屋を出ようと扉のノブを掴んだとき、思いついたことがあります

部屋に戻ると鞆からメモ帳とペンを取り出す。

一枚破つてさらさらとペンを走らせ丁寧に折りたたんだそれを、つい先ほどまで

わたしを優しく包んでいてくれたその手に握らせる。

そうしてわたしは、部屋を出る。

×  
×  
×

朝の光は眩しい。その眩しさに顔を顰め瞼を開く。

寝ぼけた目で時計を見ると、もう十一時を指していた。

小町にしては珍しく、随分と寝入ってしまった。

慌てて身体を起こすと、自分の掌になにか握っていることに気づく。

丁寧に折りたたまれたその紙片を開き、中を読んでみる。

書かれた言葉に頬が緩むのを感じながら、身支度を整え部屋から出る。

するとリビングの方から、お兄ちゃんというは先輩の楽しげな声が聞こえた。



## 次は俺を褒める番だぞ

夏休み三日目、金曜日の昼過ぎ。

起きてきた小町と一色と三人で朝飯兼昼飯に、俺が作ったぎる蕎麦と天ぷらを食べる。

食卓を囲み三人で蕎麦をずるずる啜っていると、一色が椎茸の天ぷらを箸でつまみ一口齧る。

「せんぱいつ。この天麩羅凄く美味しいです」

「だろ？」

ニヤツとして答えると、小町がうんざりした表情で俺を窘めてきた。

「お兄ちゃん……。そこはもう少し謙虚になって、小町は思うよ？」

「いいか、小町。俺は褒められることが殆どないからな。」

褒められたときはここぞとばかり、俺すげえアピールするんだ。

じゃないと次にいつ言えるかわからないしな」

いうと、一色はどこか諦めたようにふっと短く息をはく。

「まあ先輩って、そういう人ですよね」

おいちよつとお、いろはすさん。そういう人つてどういう意味かなー？  
じとつとした視線を一色に向けるが、そんな俺を一色は見ようともせず  
さつまいもの天ぷらをモグモグと食べている。

「揚げ具合がちょうどいいですね。なにかコツとかあるんですか？」

「まあ下ごしらえとか油を多めに使うとか色々あるがな。」

浮いてすぐ油からあげないで、ほんの数秒、そのままにしておくんだ。

そうすつと衣がカリツとサクサクに仕上がる。ちょうどいい浮き加減っていうのか  
な」

「なるほどー。普段、周囲から浮いている先輩がいうと、説得力が違いますね！」

このガキ……。

つーか小町ちゃん、兄が馬鹿にされてるのに大爆笑はどうかと思うんですけど？

とはいえ、ここで反論しても相手は一色。なにを言っても暖簾に腕押し糠に釘だろ  
う。

なのであえて一色を褒めることに。ほら女子つてよく、お互いを褒め合ってるじゃな  
い？

「そのなんだ、前から思ってたんだがな。お前のご飯の食べ方、すごく綺麗だよな」

「へっ？ な、なんですか急に」

俺の言葉に、一色は気恥ずかしげにモジモジしだす。うむ、掴みは上々。

「うちの親父が言つてたんだ。人を知るには一緒に食事を取るのが一番だつてな。

例えば、『契約する前に必ず一緒に責任者と昼飯を食いに行け。

その時の店員への態度が、その人物の全てだからよく見るように』って」

「それでそれが良く当たるといい。商談の席で低姿勢でも、店員にため口命令口調の奴は

仕事始めると絶対後でもめる。で、食い方とかも見た方が良いつてな」

「肘をついてないか、ご飯食べるのにちゃんと茶碗持つてるか、箸の持ち方。

個々の勝手だと言う人もいるけど、当たり前前の作法を知っているのにやらないのは

偏屈で自己中の表れなんだつてな。

知らずにやってるのは、それこそビジネスパートナーとしては論外。

もちろん、友人としてもだ。

それで俺もまあ滅多にないが人とご飯をたべるとき、その手のことを良く見るようにしてる」

「育ちが分かるよね。その人の根っここの部分がモロに出るし」

これは小町の言葉。

「そうですね。私も男の子と遊ぶのに、食べ方が汚い人とは二度と行きませんし」

さすがビチはすさん。俺なんかよりその手のことに詳しいご様子。

「でも、褒めて貰えて嬉しいです。ありがとうございます、せんぱい」

「お、おう……」

こんなに素直にありがとうと言われると、次は俺を褒める番だぞとは言いつらい。

しかも花咲くような笑顔だし。

タベ元気がなかったので心配していたが、もう平気のようだ。

なので俺はそれ以上なにもいわず、ご飯の残りを平らげることにした。

× × ×

夏の昼下がりに。

食事を済ませた俺たちは出かけるまでの空いた時間、勉強会をすることに。

三人でテキストをこなしていると、一色が思いついたように口を開く。

「そういえば先輩って、小町ちゃんに小説でも漫画でも、薦めたりはしないんですか？」  
「お兄ちゃん、たまにしてくれるよね？」

「そうだな。まあ以前とは、薦めるモノが違うけど」

いうと、一色はきよんとした表情で首を傾げる。

その隣で小町も、同じようにしていた。

「薦めるモノが違う？」

「ああ。前は自分が楽しかったり面白かったものを薦めてたんだけだな。」

小町の言葉を聞いてから、小町が好きそうなものを薦めるようにしてる」

「小町なんかいったっけ？」

「中学生の頃な小町は俺に、『小町は頭が悪いから小説を読んでも面白くないんだよ』

って言ってくれたんだ。それは俺をすごく考えさせてくれたんだよな」

いったものの、二人にはあまりご理解してもらえなかった様子。

ふたり揃って不思議そうな表情で、俺を見ていた。

「なにかを楽しむには「能力」と「労力」が必要だという話だな」

頭が悪いから云々。この手のことをいうのは本を読まない小町に限ったことではな

い。

小説などの活字の本は頭を使わないと読めなくて、頭が悪い人には楽しめないみたい

なことは、

活字の本を読む「頭の良い人」からもよく出てくる。

若者の活字離れが深刻だとか、最近の若者は漫画しか読まないから心配だとか、読書こそが想像力を養う云々かんぬん。

文章から、「その空間」「そこにいる人物」「そこで起こっている出来事」を

正確に想像するのは確かに大変。能力が必要だと言うのも分かるのだが。

「まあなんつーか当時の俺は、自分が面白いものはきつとみんなが面白いと思つてたところがあつたんだ」

「だから自分の大好きな漫画を『○○面白いよ！』つて教えたり、好きなゲームを『やってみなよ！』つて貸したりしていたんだよな。相手の気も知らずに」

「それでその一つとして、自分が好きな小説を小町に薦めたんだと思う」

「ここで小町の言つた返答がもし『小町、あんま小説を好きじゃないんだよ』とか『面倒くさいからいいや』だつたら、恐らく俺はコイツは分からないヤツなんだくらいにししか思わなかつただろうな。

そういう意味で、俺の考えが変わるきっかけをくれたのは小町だつたのかも知れん」

「それで小町の言葉を聞いた俺はまあ勝手にだが、こう解釈したんだ。

自分には小説を楽しむ能力がないんだと、本来ならそれは面白いはずなのに

自分の頭が悪いせいでそれが分からないんだって。

でも小町もそれと一色も、本を読むのに慣れてないだけだと思うんだ」

「頭が良いから小説を楽しめる。頭が悪いから小説を楽しめない。

ここに俺は異論がある。頭というのは単純に良い悪いで語られるものではないからだ。

向いているもの、興味があるものがそれぞれ違うだけだと思う」

「文章から風景を思い浮かべる力だったり、単純に言葉をどれだけ知っているかだったり、登場人物にどれだけ感情移入できるかだったりな」

「たかが文字の羅列からストーリーを読み取るにはそれなりの能力が必要で

当然、俺にだって、難しくって面白さが理解できない小説はたくさんある。

だから小町が言ったことは他人事ではないんだよな」

「例えば「漫画」を楽しむ能力。

読める人間にはそれが当然なことだが、たかが絵を並べているだけの紙からストーリーを

読み解くには「どういう順番で読めば良いのか」を知ってなきやならない。

子どもの頃から漫画をほとんど読んだことがないまま大人になると、

「どのコマから読めば良いの？」って人が実は結構いるらしい」

「例えば「ラジオ」を楽しむ能力。

ラジオで「〇〇に行ってきたんですよー」というフリートークを聴いて、たかが言葉から

「どこに」「誰が」「何人で」「何をしに行っているのか」を正確に把握するのは慣れていない人には難しかったりする」

「つまりなんでもそうだが、なにかを楽しむにはそれぞれに合った

能力と労力が必要だったことだ」

「それでだな。小町も一色も、その手の事には長けてるようみに見えるんだ。

だから色々なものを読んでみるのもいいんじゃないかねーか」

そこまで言うのと、二人はほあーっと口を開けていたが、しだいに納得がいったようであるうんと大きく頷いた。

「じゃあお兄ちゃん。小町もき頑張るから、これからも色んなの教えてね!」  
「せんぱいっ。わたしにも色々教えて欲しいです!」

聞きようによつてはちよつとアレな二人の言葉に苦笑で答えると

傾いた日差しがリビングに入り込んできていた。



世界が……変わった!

日も傾き大分涼しくなった頃、俺と一色は二人、電車に乗って千葉へと向かう。そして千葉に着くと、駅に近い書店へと足を運ぶ。

「良かったですね、せんぱいっ。探してた本、すぐに見つかって!」

「お、おう……」

会計を済ませビニール袋に包まれた本を抱えてながら、一色の声に応じる。確かに俺も一色の言う通りだとは思うのだ。

書店に入り五分も探すと、お目当ての本をすぐに見つけることができた。

だが、ここまで来る道のりを思い返してみると、えらく長かった気がする。

× × ×

「せんぱい。少し見たいものがあるのでちよこっただけ、ここに寄ってもいいですか?」

書店に入る前、その隣に建つデパートを見上げながら、一色が遠慮がちにいった。今日は俺の買い物に一色を付き合わせてる手前、断るといふ選択肢は勿論ない。

まあちよつとならと思ひ、「おう」と答へデパートに入ったのだが、ここからが大変。俺はそれから二時間ばかり、一色のウインドウショッピングに付き合わされることとなる。

服屋や雑貨屋を楽しげに鼻歌混じりで見回る一色。

その後をてつてこ歩きながら俺は周囲をぐるりと見渡す。

どうやらここは、高級ブランド品を扱うエリアのようだ。

それで普段見ることもないグツ○とかプ○ダとかを見てみたのだが

なんだいこりやあ、ぼったくりもいいところ。

ナイロン素材で十五万とか一体どういうナイロンつかつてるんだ？

NASAが開発した耐宇宙空間ナイロンとかならわからんでもないが

そんなことは一言も書いてない。おかしーだろこれ。誰が買うんだよ。

などと付けられた値段の上に、あーだこーだ文句を付けていると

一色の背中について行くだけの簡単なお仕事だったそれは

突如、ナイトメアモードへと突入した。

一時間以上、店内をアテもなくふらついていることにさすがに焦れた様子の俺を見て

一色が「せんばい、次で最後ですから」といつて向かった先が、ランジェリーショップだったからだ。

もちろん俺は「外で待ってるわ」と逃げ出そうとしたが、一色に手首をガツチリ掴まれ

店内へと引きずり込まれてしまう。

客は俺と一色の二人きり。いや俺たちが店に入るまでは十人ばかりお客がいたのだ。だが、俺が店に入った瞬間、蜘蛛の子を散らすように逃げてしまった。

そんな居心地の悪い空間で店員さんの胡乱げな視線に怯える俺を尻目に一色が明るい声をだす。

「せんばいせんばい。これ可愛くないですか?」

「あ、うん。そうだな」

一色から顔を背け目のやり場に困りながら答える。

「せんばいせんばい。これなんかすごくキワどいですよ」

「お、おう。すごいな」

「せんばい。ちゃんとこつちを見て答えてくださいよ」

「おいおい無茶いうなよ!」と思つたが、一色は普段から俺に無茶しか言わない事に気づく。

とはいうものの、一色の要求に応えてそれを見るのは無理すぎる。

いやだつてき、ピンク色のなんかとか紐っぽいなんかを男の俺が見て  
どんな顔をすればいいのかわからないじゃない？

あと感想聞かれても、「おつ、いい感じだな、それ！」なんていえねーし。

「こつちのほうが良くないか？」なんて言つたら、通報モノ。

そして、そんな困っている俺の耳に、一色はとんでもない爆弾を投げてきた。

「せんぱいせんぱい。これ、今わたしが付けてるのと同じものですよ？」

えっ！ どれ？ 思わず振り返りそうになり、はつと慌てて顔を戻す。

う、うーん。一色が履いてるのと同じの？ なんてだろう。なんかすごく気になる。

一応、誤解の無いよう言っておくが、俺は別にパンツなどの下着が好きなのは、  
いうてただの布だし。

ただそれは女性とセット、合体でもいいが、すると、恐ろしいまでの相乗効果を生み  
出す。

材木座風（要は厨二）に言い直せば「世界が……変わった！」といったところだろう  
か。

ゆえに、スカートをそつと持ち上げパンツを見せるエロゲお馴染みのスタイルより、  
脱いだパンツを手を持って目の前におおずとおおずと差し出される方が興奮するのでは？

と

常日頃から考えている俺がいる。

なので、女性の皆さん。特に女子高生のお嬢さん方。

エスカレーターなどで俺が後ろに立ったからといって、睨まないでくださいね。

俺が見てるのは、そして見たいのは、あなたのパンツではありません。

パンツが見えそうで見えない、そのギリギリのラインなのですから。

そんな哲学的なことを考えながら、どうしても気になった俺は

こそつと一色の手に視線を向けてしまう。

がしかし、その小ぶりな手には何も持つておらず、はつと自分が彼女に囚われたと気

づき

驚いて顔をあげる。

すると視線の先で一色が、にたあつと邪悪な笑みを浮かべていた。

×  
×  
×

そんなこんなで一色にまた新たな弱みを握られはしたものの、目的のモノを手にする  
ことが

出来た俺は達成感に満たされる。これにてミツシヨン終了。くうく疲れました。

後は一色の頭にタライなどが落ちてきて、俺の都合良く記憶を失ってくれば助かる  
のだが。

まあそこまで求めるのは欲張りすぎるといものだろう。

「んじゃ、帰るか」

いうと、一色は難しそうな顔をする。

「待ってください、先輩。ちよつと大事なお話が」

一色のいう「大事なお話」が良いお話だったことがあつただろうか？ いや無い。

なのでそのお話は先送りすることにした。

「わかつた一色。今度な、今度聞くから。今日はほら、もう暗いし。はやく帰らないと」

などと、説得という名の逃亡を試みたのだが、一色は許してくれなかった。

「もう、なんでそんなすぐ、帰りがるんですかっ！」

ぶんすかといった感じで頬を膨らませ俺をじとつと睨んでくる。

いやちよつと待て。本はすぐに買えたけど、ここまで来るのはすぐじゃなかったらう?

しかもその原因はお前じゃねーか。

と言いたいところだが、一色のおかげでお目当ての本を買うことができたのはまぎれもない事実。

ならばここは一つ、恩には恩で報いなければなるまい。

「まあその、なんだ。なんかあるならいつてみ」

いうと、一色はほのかに頬を染め視線を外した。

そして、おそろおそろこちらを見ると、照れくさそうにはにかむ。

「……えつとですね。先輩に私に合った本、教えて欲しいです」  
いうと、一色は困ったように目を伏せた。

## 相互不可侵条約

うん、違う。

私がここにいるのは比企谷くんと一色さんがここに来るだろうから待ち伏せしてたとか

そんなことでは全然ない。

私は本が好き。だから本屋さんに来るのも居るのも当たり前。

まあ確かに私は二人が来る四時間前からここにいてそれ欲しい本を探していたら

いつの間にやら時間が経っていただけの話。

まして偶然たまたま比企谷くんと一色さんの姿を見かけたけどとても仲良さそうでした

声を掛けづらいで、二人が二人きりのときどんな風なのか気になって本棚の陰から

二人の姿を覗き見しているわけでは決してない。

Q. E. D——証明終了。



×  
×  
×

「先輩に私に合った本、教えて欲しいです」

一色の言葉に、俺は腕を組んでうむむっと唸ってしまふ。

一色とはそれなりの付き合いはあるのだがそれなりの付き合いだからこそ彼女についての俺の知識もそれなりでしかないからだ。

その上俺には小町以外の誰かになにかを薦めるといふ経験が殆どない。

取り敢えずばばっと思ひ浮かぶ一色の好きそうな本は、『お金の稼ぎ方。副業FX』や『給料を十倍に増やす方法』の他に『史上最楽、朝バナナダイエツト』などだ。

そしてその手の本で一色の本棚は埋まっているに違いないという確信を俺は抱いている。

なので多分、それらとは違うジャンルの紹介を一色は俺に求めているのだろう。

ならばまずそのジャンルを絞るべきだと考え、聞いてみることにした。

「なんだその、恋愛ものとかがいいのか？」

どうせ女子つて色恋物ならなんでもいいでしょ？ ほら一時期流行った携帯小説。

あれなんか九割近くそれだったって聞くし。あとあれか、海老とアボガド。

そんな独断と偏見に満ちた俺の問いかけに、一色は真面目な面持ちで口を開く。

「そうですね、はい。恋愛もの、いいと思います」

よし、ジャンル確定。

あとは適当に書名をあげていき、それを聞いた一色の反応を見て決めればいいだろう。

表紙買いと同じくらいタイトル買でもある。そう俺の経験が教えてくれたからだ。

とそこへ、一色からの追加注文が届く。

「あつ、でもですね、せんばい。あんまり現実感がないのは困ります」

一色の言葉に、異世界転生や転移ものを禁止されたな〇う作家のような衝撃が俺を襲う。

えっ、マジで？ 現実感ないとダメ？

つーか俺が読んでもの大体その手の現実離れたものばかりなんだけど……

「例えばですけど恋愛に女友達が協力してくれるとか、あとは恋のライバルが

「なんやかんやで友達になるとかはダメですね。ありえなすぎて」

「あーそういう……」

「でもよ、一色。女子ってよく恋愛相談つか、恋バナ？ してるだろ。」

「それでじゃあ協力するよ！ みたいな話になることはねーのか？」

「尋ねると、一色は呆れたように鼻でふつと笑う。」

「いいですか、先輩。女の子っていうのは表面上空気読んで仲良くしているだけで、

裏では足を引っ張りあってるんですよ？」

「それはお前だけだろう……」と思ったが、話はまだ続くようなので黙って耳を傾ける。

「なので女の子が恋バナで好きな男の子の名前をいうのは、私は○○くんが好き、だから

手をださないでね？ って意味と、そっちも言えば手を出さないで置いてあげるよっ

ていう

「相互不可侵条約みたいなものなんです」

「……………」

「闇が深すぎるな、女子社会。」

「まあ女の敵を絵に書いたような一色の言葉だから話半分に関心といたほうがいいか

も

「知れないが、そんな彼女の言葉だからこそ信憑性は高いと思う。」

「その上で、私が共感できそうな女の子がでてくるお話が読みたいです」

一色はいうと、にこつと微笑む。

う、うくん、難しいなあ。情報は増えたが、問題も増えた。

共感というからには自分とどこか似た感じの女の子が主人公かヒロインでなければならぬ。

一色はそう言いたいのだろう。

そうすると見た目も美少女であるべきだと、彼女は暗に告げていることになる。

少し考え、まあその点は平気かと思に至る。

殆どのラノベ、一般誌も含めて、主人公やそのヒロインの造形は整っていることが多い。

そうじゃないのは俺が知る限り、賭博黙示録カ○ジのヒロインくらいだ。

とそこで、一色が俺の服の裾をくいくいと引いていることに気づく。

「せんぱい。これなんかわたしに合っているとはいませんか？」

問われた俺は、一色がその手に持っている本の表紙に視線を走らせる。

「一色。帝王じゃないやつが帝王学を読んでもあんまり意味がないと思うぞ。

それ、ハゲがヘアスタイルの本を熟読しているのと同じだし」

俺の言葉に一色は「なんですかそれ」といつてけたけた笑っていたが

急に顔を引きつらせる。

そして目線で俺に、後ろを向くよう訴えてきた。

なんだ？　と思い首だけ後ろに向けてみると、俺の背後にいたのは

毛根の根性が足りなかった中年のおじさん。凄い顔で俺を睨んでくる。

慌てて二人でそそくさとその場を離れ安全を確保すると、俺は思案をまとめようと

顎に手をやり考える姿勢を取る。

そしてこれまでの一色との会話で知り得た、彼女のことをひとつひとつ思い浮かべる。

「あんまり長い文章は読めません。そういう身体なんですっ！」

体をきゅつと抱きしめ訴えるように叫んだ姿。

そして「大好きですよ！　すごーく好きです！　愛してるといっても過言ではありません。せん。

なんですすかくれるんですか、いつでもどこでもいくらでもウエルカムですよ！」と瞳を輝かせながら俺ににじり寄ってきたそんな姿が思い出される。

その二点を含めこれまでの情報を整理すると、俺の読んだラノベの中に一冊だけ

一色の要望に合うタイトルがあつたことに気づく。

× × ×

「クズと金貨のクオリディア」

書いた本よりブログの方が面白いという稀有な才能を持つ作家と、

そんな彼を監視することに情熱を燃やす作家が共同執筆した作品だ。

簡単にあらすじを紹介すれば、こんな感じになるだろうか。

「世の中、金じゃない」がモットーの清貧かつ無欲な美少女と、「女は顔じゃない」を

座右の銘とする心優しい爽やかな少年の、読む人の心を温かくする純愛物語。

俺も読んだときには、そんな二人が織り成す愛と常識に満ちた会話やその初々しいやり取りに

頬が緩むのを抑えきれなかったくらいだ。

単行本一冊の短編だし読書に慣れていない一色が読むのにちょうど良い長さともい

える。

「一色。お前の要望に合ったオススメの本が一冊あるんだが、もし読むなら貸すぞ？」  
いうと、一色は考えるよう頬に手を添える。

そして申し訳なきように上目遣いで俺を見る。

「お気持ちはあるがたいんですけど、今日の思い出に買っていきたくないなって思います」  
今日の思い出か。なんか大げさな気もするが本人がそういうならと考え、

その本を扱うレーベルの本棚へと一色を連れて行く。

運良く一冊だけ棚差しで見つかりそれを引き抜くと、ふと思いついたことがあり  
そのままレジへと向かう。

会計を済ませビニール袋に包まれたそれを一色に手渡すと、一色はきよとんとした顔  
で

俺を見ていた。

「やつ、なんだその。いつも世話になってるからな、お礼だ」

しどもどしながらいくと、照れくさくなり頭をガシガシ掻いてしまう。

そんな俺の姿をぼかーんと口を開け眺めていた一色が、  
にこやかに微笑みながらを言いかけたとき――

「会長――！ 一色会長――！」

と一色を呼ぶ声が店内に響く。

声<sup>が</sup>する方へ視線を向けると、総武高校生徒会の副会長である本牧と  
その背中に慌てて隠れようとするめぐり先輩の姿が見えた。



## 彼女と後輩

「あれ〜。城廻先輩と副会長じゃないですか〜」

一色さんは微笑んでいうと手をばたばたしながらこちらへやってくる。

彼女の後について比企谷くんもこちらへ来るのだが、その顔には困ったような表情を浮かべていた。それで少し、大分かなりムツとしてしまう。

私に会って、なんでそんな顔するの……。

ただでさえ、君が一色さんに本をプレゼントするのを見て気持ちがざわついているのに。

まあ私が勝手に覗いてただけど……。なんて思っていたら、二人はもう目の前に。うう、どうしよう。なんでここにいるのか聞かれたら……。

そんな後ろめたい気持ちでじりつと後ずさりながらも逃げ出すわけにもいかず固まっていると、

一色さんが私の顔を覗き込んできた。

「お二人で遊んでたんですか？」

声は明るいのにどこか責めるような口調で一色さんはいうと、じっと私を見つめてく

る。

「へ？ やつ、ち、違うよ」

予想外の問いかけにへどもどしながら応えたものの、その視線に耐え切れず  
思わず目を逸らしてしまう。

そんな私に代わって、本牧くんが苦笑しながら答えてくれた。

「違うよ、会長。城廻先輩とは今たまたま会ったんだよ。僕は藤沢さんと待ち合わせ中」  
「もう、副会長。書記ちゃんと遊んでばかりいないで、仕事、ちゃんとしてくださいね？」  
「いや、ちよつと待って。それ、会長がいう？」

本牧くんはいうと、一色さんの隣に立つ比企谷くんに目をやる。

「わたしと先輩は別に遊んでた訳じゃないですよ。ね、せんぱい」

「ああ。本を買うのを、一色に付き合ってもらっただけだ」

「そーいや勉強会？ してるって会長いつてたね」

「そうですそうです。学生の自分は勉強。その為の本探し。」

なんで副会長と書記ちゃんみたいに、不純な交遊をしていたんじゃないんです」

「い、いや。僕と藤沢さんは、そういう関係じゃ……」

「どーだか」「違うのか？ 本牧」

「え、えーつと……」

焦る本牧くんと、その彼を問い詰める比企谷くんと一色さん。

そんな三人のやり取りを見やりながら、はっと気づく。

そうだ、私と本牧くんが二人で遊んでいたと、比企谷くんに勘違いされる可能性もあつたんだ。

今更ながらそこに思い至り、慌ててこそつと比企谷くんを窺つてみる。

視線の先で比企谷くんは、安心したような表情を浮かべていた。

よかつたあ……。勘違いされなかつたみたい。本牧くんが上手く答えてくれたおかげだ。

とほつとしたのも束の間、一色さんが私の方へずいっと一歩踏み込んできた。

「でわ城廻先輩は、何用でこちらに？」

うつ、まずい……。

これが一色さんと本牧くんだけなら「本を買いに来ただよ」と応えれば誤魔化せると思う。

けど比企谷くんには私が今日のことを知つてることと凄く焼きもち焼きなのバレてるし。

それで彼が浮気しないか気になって探偵みたいなことしてたのをバレないようにするのは

いったいなんて答えればいいんだろう……。

そう考えて上手い返しが見つからず困っている私の手首を、大きな手が優しく包み込む。

驚いてその手の持ち主へ目をやると、持ち主くんは顔を真っ赤つかに染めているのが見えた。

そんな持ち主くんと私を、一色さんと本牧くんは目を丸くして見つめていた。

「えつとな、一色。俺が城廻先輩にここで待ち合わせしましょうって言っておいただ。先輩と少し、話があつてな。目当ての本も買えたし、今日はホントに助かったよ。ありがとな。」

それで勝手に悪いんだが、ここでお開きでいいか？」

「……そうですか。まあいいですよ、もう用事も済みましたし」

比企谷くんの言葉に、一色さんは口を尖らせ拗ねたようにいうと、ぷいっと顔を逸らす。

その横顔に比企谷くんは「わりいな」と申し訳なさそうに謝ると、本牧くんのほうへと向き直る。

「本牧、そういう訳なんで一色を駅まで送ってくれ」

「はっ？ いや僕は藤沢さんと待ち合わせ中で……」

言い募る本牧くん「頼む」と比企谷くんはいうと、俯いている一色さんにもう一度「わりのいな」と告げる。

そうして私は比企谷くんの手を引かれながら、足早にその場を離れたのだった。

×  
×  
×

自分が嫌になる。  
めぐり先輩と本牧が一緒にいるのを見て、自分も一色と二人きりでいたことを柵に上げ

先輩を疑ったことを。そして、それが杞憂だと知って心底ほっとした自分を。

自嘲しつつ俺ってこんなに嫉妬深かったっけ？　と思い記憶を探る。すると似たような感情に苛まされていた時があったことを思い出す。

中学の頃、好きだった折本かおりが他の男子と仲良さげに話しているのを見た時だ。

そして今、あの時とは比べものにならないくらいどす黒い感情で心が塗り潰されているのを

感じながら、俺はめぐり先輩の手を引いて建物の出口へと足を運んだ。

×  
×  
×

駅近くの公園、そのベンチに腰を下ろした私は夜空を見上げる。

背の高いビルに囲まれたここでは、夜空は小さく切り取られてしまう。

そんな夜空と同じように、私も小さく身を縮めていた。

「それで、めぐり先輩。なにか良い本は見つかりましたか？」

「比企谷くん。それ、意地悪でいつてるでしょ？」

ワザと拗ねた感じでいうと、比企谷くんは困ったように頭をがしがしする。

そして考えるよう間をあけてから遠慮がちな声で尋ねてきた。

「えっと、もしかしてですけど、俺と一色を待ち伏せしてました？」

もしかじゃなくもちろんのだけど、その通りと応えるのもなんか癪な気がする。

なので更に拗ねた声で応えることにした。

「ち、違うもん！ その……、探偵ごっこだもん！」

「探偵ごっこですか？」

「う、うん」

答えると、比企谷くんは顎に手をやり、考える姿勢を取る。

そして何かを思い出したように、うんと頷く。

「探偵の仕事って確か九割が、浮気調査なんですよね」

そうなんだ。てことは私のしてた事と大体合ってるね。

思わず納得してしまい返す言葉に困ってあわあわしている、

比企谷くんが可笑しそうに小さく笑う。

むむー、なにが楽しいの？ こっちは今日のことを聞いた日から気が気じゃなかったのに……

「すいません、めぐり先輩。そりや嫌ですよね。

付き合ったばかりなのに、他の女の子と二人で会ってたら」

比企谷くんは申し訳なさそうにいうと、ぺこりと頭を下げてきた。

付き合ったばかりじゃなくても嫌ですけどー？ と心の中でぼやきながらも

その彼の姿に毒気を抜かれた私は戸惑ってしまふ。

そしてしばらく彼のつむじを眺めていたが、はつと我に返ると慌てて声をだす。

「うん、その、ごめんね。どうしても気になちゃって……」

素直に謝り正直な気持ちを打ち明けたのだが、頭を上げた比企谷くんは

そつと目を逸らされてしまふ。

怒ってるのかな？ と思ひその横顔をおそるおそる見つめていると

比企谷くんは言いづらそうに小さく呟く。

「いや、俺もその……」。

めぐり先輩が本牧と一緒にのこを見て、なんか凄くこう、嫌な気分になったんで……」

お、お、おう。ひ、比企谷くん、それは卑怯だよー！ 可愛すぎる。

我慢できずに比企谷くんの顔を覗き込むと、彼が暗がりでもわかるくらい



その頬を赤くしているのが見えた。

聞かせてくれた言葉の嬉しさも含め、私はにんまりとしてしまう。

好きな男の子に焼きもち焼いてもらえるのが、こんなに嬉しいなんて知らなかったなあ……。

そんな気持ちでにまにましていると、にまつている私を見た比企谷くんが恨めしげな声をだす。

「なんでそんなに、嬉しそうなんですか……」

問われた私はそれには答えず、彼の胸元へと自分の身体をそつと寄せる。

すると比企谷くんは困ったように手を虚空に彷徨わせていたが、私とその身体に抱きついて

「同じくして」と囁くと言ったとおりにしてくれた。

緩くその手で抱きしめられ彼の心臓の鼓動に耳を澄ましていると、ここは私の場所  
そんな風を感じる事が出来た。

×  
×  
×

心配そうな顔をした副会長に「平気ですよ」といつて、わたしは家路に着く。

俯いてとぼとぼと夜道を歩いていると、ポタポタと涙が零れ落ちる。

あの人とつて城廻先輩は彼女でわたしはただの後輩。

そんな事は充分理解していたのに、わかつているようで全然わかつていなかったな。

憂鬱な気持ちのまま止まってしまう足をなんとか前に出し、ようやくたどり着いた我が家。

玄関を開けると、早速ママの小言が飛んできた。

うわの空でそれに答えながら、自分の部屋へと逃げ込む。

ベットに倒れ込み枕に頬を寄せていると、瞼が重くなってくる。

先輩がプレゼントしてくれた本を手元に引き寄せ、胸に抱きしめながら目を瞑る。

長い一日だった。

今日は、ほんとうに疲れた。

## これまでの時系列

7月22日（水）からスタート。職員室で勉強会の話聞き参加することが決まる。

23日（木）図書館でめぐりと再会。雨の中一色と帰る。夜、八幡パパ初登場

24日（金）八幡のベストプレイスにて、八幡と一色は二人でお昼ご飯。

土曜日に学習室で勉強会（練習）をすることが決まる

めぐり、大学が終業式。夏休みに入る。

25日（土）学習室で勉強会（練習）

取り敢えずの学力を見るために八幡が一色お手製のテストをする。

一色が小学生のテスト問題をだし、八幡凹む。

小町にお弁当を作ってもらっているのを知り、夏休み中は一色が作ることが決まる。

その代わり送り迎え（駅まで）してもらおう。戸部と会い、一緒に勉強しようと誘われる。

駅で一色と別れ、同じ電車から降りてきためぐり（秒速2巻買いに行った帰り）と会う。

八幡がめぐりを家まで送る。

## 第二章

26日(日)三人で「秒速」アニメを見る。一色〱めぐりの順で送る。

めぐりとの帰り道、鶴見留美と再会。一色の弟(ひいろ)留美の妹(友美)と面識をもつ。

理由の話。めぐりから本を借りてまた会う約束を交わす。

その夜、めぐり日記が書けずじまい。母親に父親との馴れ初めを聞く。

27日(月)

めぐり、父親に当時の文化祭のことを聞く。それで八幡にも何か事情があったのかな  
と思ひ

連絡を取ろうとする。でも一色のこともあり、迷ってしまう。そこに八幡から連絡が  
来る。

一色との勉強会(本番)帰り道、夜ふかしの理由を一色が話す。

それが切っ掛けとなり、八幡がめぐりと連絡を取ろうとする。

連絡を受けたためぐり、喜んで八幡をお月見デートに誘う

御宮(神社、お寺のようなもの)で二人が会う。

二人の会おう切っ掛けであり、互の印象を決定づけた文化祭の頃について話す。

同じ頃、一色は小町へ葉山に電話をする。

く話終わった頃、日付も変わる。

蛍の古歌で八幡気持ちを伝える。めぐりは月の話（漱石）で返事を返す。

御宮からの帰り道（石段の途中、休憩する）そこでお互いの認識のズレに気付く。めぐり悲しむ。八幡付き合つて欲しいと告げて、二人は付き合う。

28日（火）八幡帰宅。小町にめぐりと付き合つた事を告げる。

小町、一色の恋が始まる前から終わっていた事実 zu 困惑。

八幡に一色をどう見てるのか尋ねる。

八幡、一色、終業式。夏休みにはいる。

八幡、めぐりと付き合う切っ掛けをくれた一色にお礼を言う。

一色、お礼の本当の意味を分ならず、それでも八幡の役に立てたことに嬉しそうに笑う。

### 第三章

八幡、お礼がてらに一色を食事に誘う。

八幡、合宿について一色に話を聞き拒否するも、戸塚を餌にされると光の速さで手のひらくるつとして参加を了承してしまう。

29日（水）夏休み初日。午後から勉強会。

その帰り道、一色、甘い麦茶の話をしながら自分の心境を八幡に吐露する。

八幡、甘い麦茶の作者に興味を持ち、一色に次の勉強会の帰りに本屋さんに付き合つて欲しいと頼む。一色、もちろん了承する。

その夜、めぐりからデートのお誘い。

その流れで一色と二人本屋さんに行くことを聞いたためぐり、焼きもち焼いて拗ねる。なので急遽、次の日に動物園に行くことが決まる。

30日(木)夏休み二日目。

めぐり、お爺ちゃんから車(ポンコツ)を借りて、八幡の家へと迎えに行く。前夜のやり取りから厨二病が発症しかけていたためぐり、八幡に窘められる。

動物園にて、

小学校の遠足で動物園に来たときもぼっちだった八幡。

そんな自分と一緒にいて楽しそうにしてくれるめぐりに嬉しい気持ちになる。

なのでめぐりにも喜んでもらえそうなデート先を考えるが思い浮かばず、仕方なくめぐりに尋ねる。

八幡と学校や塾、バイト先などの必然的に会う機会がもてないめぐり。

八幡との距離を縮めることに焦っていたので泊りがけの旅行を提案。(奥大井湖上

駅)

八幡、了承する過程でめぐりをちゃんと異性として見てることを告げる（告げすぎ）  
同じ頃、一色、小町へ電話する。そして事実を知りショックを受けるも  
小町とは良い関係を築けて嬉しく思う。そして比企谷家にお泊り決まる。

帰り道

めぐりのハニートラップ炸裂（初級）八幡瞬殺される（チヨロイ）

一色と小町夕飯の支度をすする。

八幡帰宅から夕食を三人で済ますと、そのまま勉強会に。

日付が変わる前、小町勉強会から気を利かせて脱落。

日付が変わり勉強会終了。一色、八幡に甘いものをねだり、そのまま夜のお散歩へ。

31日（金）夏休み三日目

それぞれの目覚め。一色、前に踏み出す心構えをもつ。

夕方まで勉強会。能力と労力の話（山ちゃんの話）

食事について（島部長から聞いた話）

夕方から千葉の本屋に向かう。

同じ頃、めぐり、探偵という名のストーカーになる。

八幡、一色にクズ金プレゼント。

それを覗き見していためぐり、ぐぬぬ状態。そこへ副会長現る。

三人十一人、以前とは違う立場で再び顔を見合わせる。

めぐり、安心しつつも焦りも生じる⇒四章の色仕掛けルート突入

一色、踏み出した瞬間、痛恨の一撃を食らう。



## 第四章 愛情深まる。それが傷の深さになると知らずに 十年後は大人

夏休みも六日目を迎えた月曜日の昼過ぎ。

八月に入ると日中の気温もどんどん上がり、そのうだるような暑さにひいひい言いながら

俺は一色を迎えに駅へと向かう。

駅に着くとクーラーの効いた近くのコンビニに逃げ込み、立ち読みしながら一色を待つこと暫し。

こんなこと窓を叩く音に気づき顔を上げると、一色が笑顔で手をひらひら振っているのが見えた。

普段とは違うその姿に少し驚きながら外へ出ると、一色は小走りで俺の傍へとやってくる。

「せんぱい、こんにちはです」

「おう、こんちは」

挨拶を返しつついつもの彼女と違うところへ目をやっていると、一色が体を隠すよう

に

ぎゅつと自分の肩を抱いた。

「えつと、せんぱい。」

なんでそんなにわたしのこと、じろじろ見るんですか？ お金取りますよ？」

「い、いや。こうなに？ 髪がいつもと違うから、珍しくてな」

着衣姿で金を取るのか、すげえなこいつ。でも水着姿ならワンコインは出す。

などと思いつながら答えると、一色はあくつと喋って自分の髪に手をやる。

「今日は暑いですからね。」

そのままだと熱がこもって暑いんで、一本に縛ってきました。変ですかね？」

「んや、似合ってると思うぞ」

顔の輪郭を隠すような髪型でなくとも、美しいのが本当の美人だ。という持論をもつ

俺の目から見ても、一色の容姿は非の打ち所がないと言わざる得ない。

その上、美人なだけでいろんな所が美化されるもの。

普段見ることのないその白いうなじも形の良い耳も、俺の目を釘付けにしてしまう。

もしこいつの性格を知らなかったら、今この瞬間、俺はきつと恋に落ちていただろう。

そんな不幸な展開にならなかったことを心底ほつとしていて、一色がすーはーと

深呼吸しているのが見えた。

「普段のより、こっちの方が良いですかね？」

「いや、どっちも合ってると思うが。」

でもまあこんな暑い日は、そっちのほうが涼やかに見えるかもしれないな。

「そういう小町もな、今日は髪を後ろで纏めてたんだが、それがまたすげえ良かったぞ」  
「そこで小町ちゃんを引き合いに出すのって、どうかと思うんですけど……。」

「せんぱい、シスコンが悪化してますね？」

「おう、もう手遅れだ」

「なんで自慢げなんですか……」

一色はというと、呆れたように俺を見る。

それに苦笑を返しながら、彼女に会ったと言わなければと思っていた事を口にする。

「そーいやその……。金曜は悪かったな。」

俺の買い物に付き合ってもらったのに、途中で置いてちまって」

いうと、一色は顔を下に向け俯いてしまう。

そして言いづらそうに身を振ると、下から見上げるように俺を見て

無理したような笑みを浮かべる。

「いえ。あの場合、仕方ないですよ。彼女優先するのは当たり前ですし。」

それにあの後メールでも、先輩、謝ってくれたじゃないですか。それで充分です」

「まあ、うん。侘びをいれるのにメールでつても、なんだか軽い気がしてな」  
「先輩ってそういうところ、律儀ですよね」

そう言われると、どんな顔をしていいのか困ってしまう。

一色やめぐり先輩を困らせた俺が困るとか、冗談でも笑えない。

そんな気まずい気持ちを誤魔化すよう頭をがしがし掻いていると

一色がなにか思い出したように、ぽんつと手を叩く。

「そういえば、せんぱい。クズ金、全部読みましたよー」

「お、おう。もう読んだのか？」

ちよつと、というかすごく意外な気がする。

本を読まない一色のこと。そんな彼女にプレゼントしたクズ金は

カップラーメンを作るときの重しかなんかに使われるのが精々。

そう思っていたからだ。

てかクズ金って……。やっぱりみんな、そう訳すのね。

「なんていうかですね、とても読みやすかったんでさくさく読めました。

それに学ぶところがすごく多かったです」

え？　ちよつと待て。学ぶとことかあつたか、あれ。

むしろ学んじやいけないことばかりのような……。

まあ確かに作中にあつた人間関係に必要な三つのオ―。

おだてる脅かす追いかけるは、なるほど思つたりもしたけれど。

「でもせんばい、あれですよね。

わたしのような女子高生が闇金を上手くやる方法は書いてありましたけど、始め方なんかも、出来れば書いて欲しかったな―って思いました」

「……………」

書いてあつたら始める気かよ。

そうすつと餌食にされそうなのはうちの小町だな。

毎月、月の中頃になるとこずかいを使い切り俺に借りにくるし。

なので俺のこずかいの二割は、小町のために毎月使わずに取っておくようにしている。

でも不思議なことに、これまで一度も返してもらえないんだよな……

まあ仕方あるまい。娘三人持てば身代潰すというように、女の子はお金が掛かるものだ。

思いつつ、読んだ感想を楽しげに話す一色へ目をやる。

どうやら読書に多少なりとも興味を持つてくれたご様子。

そんな彼女に薦めるのは今のところ同じようなラノベが良いだろう。

そう考え、尋ねてみる。

「同じ人が書いたのが他にもあるが、よかつたら読んでみるか？」

いうと、一色は興味津津々前のめりの上目遣いで問うてくる。

「どんなお話なんですか？」

善きかな善きかなと気分良く、愚かな弟子に説教する仙人のような気持ちで声を出す。

「学園モノなんだけどな。俺のようなぼつちが他人のお願いを手助けする部活に入るんだ。

それで、口は悪いけどすごく綺麗な女の子やちよつとアホだけど可愛い女の子と三人、

持ち込まれた難題を解決していく。そういう話だな」

答えると、一色は眉間にきゅつと皺を寄せ、首を傾げる。

「ん、それはちよつと有り得ないですよ。現実味がないっていうか」

「そ、そうか？ 結構あるんじゃないかな。って思うんだが……」

「ちなみにせんぱい。その女の子同士は、仲良いんですか？」

「ああ、うん。そうだな、仲良しだ」

最初の頃はすれ違いもあったが、巻を重ねるごとに仲良くなっていくヒロイン二人を

思い出しながら応える。のだが、一色にはいまいち納得していただけなかったようだ。

一色は呆れ顔で俺を見ると、やれやれといわんばかりに首をふりふりしてきた。

「それこそ有り得ないですよ。いいですか？ せんぱい。」

女の子はですね、自分より可愛い子とは仲良くならないんです。

なってるように見えるのは、そう見せてるだけなんですよ？」

「……………」

こいつと話していると女子に対して夢とか憧れとかを持てなくなるな。

そんな感想を持ちつつも、思うところがあつたので反論してみることにした。

「でもよ、一色。女子って大体、似たような容姿の子同士でつるんでない？」

「それは互いに、自分の方がこいつより上、って思ってますね、はい」

確信に満ちた一色の言葉。そのあまりの説得力に思わず納得してしまう。

弟子に論破されるとは…………と、ぐぬぬな気持ちでいると、一色がぴつと指をたてる。

「まあそれはともかく、他にはなんかないですかね？」

「んー、ほかにか。そうだな、ちよつと古い本なんだが、原田宗典って人が書いた

平成トムソーヤとかスメル男なんか面白かったな」

「どういいうお話なんですか？」

「えつとな。平成トムソーヤは、大学受験を控えた高校生の話なんだが——」  
そんなやくたくもないことを話しながら、てこてこ歩いて学校へと向かう。  
川の傍にくると風がほんの少し涼しいものになり気持ちがいい。  
遠くには入道雲が見え、それら全てが夏らしさを感じさせた。

×  
×  
×

一色と二人、勉強をするようになり一週間も過ぎると、それなりにとはいえ  
彼女の苦手なところが分かってくるもの。

それを踏まえて今日は、夕べ作った俺のお手製テストを一色にしてもらうことにし  
た。



真剣な表情で問題を解いていく一色を横目で窺いながら、俺もここ最近ようやく辿り着けた

高一の数学問題に取り掛かる。

一色の教え方が上手かったこともあり、以前はちんぷんかんぷんだったそれらの問題も

大分理解できるようになった気がする。

そうやって互いに黙々とそれぞれの課題に取り掛かっていると、テスト終了を知らせる

アラーム音が鳴り響く。

ペンを置いた一色に向かって、んつと手を伸ばしテスト用紙を渡すよう促すと、

一色はいやいやするよう首を振る。

「一色。採点するから、早く用紙を渡しなさい」

いうと、一色は難しそうな顔をする。

「先輩、わたし思うんです。答えは人それぞれ。みんな違ってみんないいって」

「うん、ののワさんは置いといて、とりあえずかしてみ」

「そんな……。ののワさんが可哀想じゃないですか」

一色がののワさんを知っているとは……。

お前まさかアイマスファン、もしくはニコ中なのか？　と思いつつ、さらに手を伸ばすと

一色は本当に辛そうな顔でテスト用紙をしぶしぶ差し出してきた。

用紙の端を掴むと手元に引き寄せようと引っ張るが、一色は綱引きの要領で同じように

引っ張り返してくる。よほど渡したくないのだろう。その手はぶるぶると震えていた。

「はよ渡せよ……」

「これが欲しければ、わたしを倒してからにしてください」

「なんでお前、キラーマシンガみたいなこというんだよ」

「あれ？　せんばいもドラクエ6やってたんですか？」

「ああ……。ヘルクラウドに楽勝した俺が負けるわけがないって、自信満々で挑んだんだがな。」

「あつという間に全滅したぜ。つーか一色も、ゲームとかするんだな」

「ひいろがやってるんで一緒にやるんですよ。」

「けど最近、セーブデータを分けてくれて言われるんですよね。」

「なんかいつの間にか、見たこともない鎧を装備してて困るって」

あー、うん。ひいろの気持ちはよくわかる。

うちも親父や小町が凝り性で、一度ハマると寝るのも忘れゲームに没頭するところがある。

それでドラクエ8は俺が始める前にエンディングを見せられるハメになつたくらいだ。

なぜ買った俺より先に、お前らが楽しむんだ……と酷く恨んだのを思い出す。

それで苦々しい気持ちでいると顔に出ていたのか、一色が仕方なさそうにテスト用紙を

そつと差し出してきた。

変な勘違いをさせたことに若干申し訳なさを感じつつ、用紙を受け取り採点すること暫し。

妙な圧力を感じ首だけめぐるらせて見ると、一色が後ろに立っている。

そして俺の肩口からひよいっつと顔を出し、採点中のテスト用紙を覗き込んできた。

気にしないようしつと黙々と答え合わせをしていると、○が付くたび「よしっ!」と景気のいい声やバツが付くたび小さな舌打ちが背後から聞こえてくる。

椅子に座って静かに待っててくれよと心の中で嘆きながら、一色が特に苦手とする現代文の採点に入る。

ワザと難しい問題を出していた事もあり、それまで騒がしかった一色も解答用紙のバツが増えるたびに、次第に大人しくなっていく。

「もう少し簡単な問題を解かして、自信を付けさせた方が良かったかも知れないな。」

採点を終えた解答用紙を見て、一色が深くため息をつくのを目にしながら思う。

でもこれで、一色への国語の教え方が決まった面もあるしなと考え顔を上げると、一色はしよんぼりした様子で椅子に腰を下ろしていた。

その落ち込んだ様子を見て、元気づけるようなるべく優しい声を出す。

「その、意地悪するつもりは無かったんだが、あえて今の一色には難しい問題を出したんだ」

俺の言葉に、一色は顔を上げると恨みがましい声でいう。

「そうですよね。なんかすごく難しいなって思いましたもん。」

わたしはちゃんと気を使って、とつても簡単な問題をさせてあげたのに」

まあ確かに一色は気を使ってくれたのだろう。それは俺にもわかる。

わかるけども、さすがに小学生の問題を高三の俺にやらせるのは如何なものかと思うのだが……

「それにですよ？　なんかこうしてやってて思うんです。」

今やつてること、社会に出て役に立つのかなって」

「ふむ。まあ確かにな」

拗ねたようにいう一色の言葉に、とりあえず同意してみる。

するとそれで力を得たのか、一色はさらに言い募る。

「せんぱいもそう思いますよね？ もっと他にやることがあるんじゃないのかなって。

よく言うじゃないですか、『社会に出たら学校の勉強なんて何の役にも立たない』って」

一色が口にした言葉は俺もたまに耳にする。

中学までの俺なら彼女の意見に一も二もなく同意していただろう。

なぜなら彼女が口にした言葉は中学生の頃、俺が口にした言葉でもあるからだ。

そしてそれを耳にした当時の担任が俺に教えてくれた言葉を、そのまま一色へ伝えることにした。

「一色。社会って単語を反対にすると、何になる？」

いうと、一色は首を捻る。

「えつと……。『会社』ですよね？」

その答えにうむつと頷くと、言葉を選んで口にする。

「大人がいう社会っていうのはその殆どが、自分が勤めている会社のことなんだ。

それでな、その手のことを口にする人は、学校で習ったことが役に立たない仕事に就いているからそういうんだよな」

「それとな、俺も含めた子どもがいう、『社会に出て学校の勉強が役に立つのか』っていうのは、社会に出ていないからこそ出る言葉なんだと思うぞ」

もしくは、自分が今勉強していることを役立たせる仕事に就けないという

無自覚の現れかも知れない。

「せんぱいの言うことはわかるんですけど……」

理解はしてくれたようだが納得はしかねている一色の姿を見て、  
思うところを伝えようと、俺は姿勢を正した。

×  
×  
×

以前どこかで目にした話なのだが、物理学者のファラデーが研究成果の発表の席にて記者の一人に「あなたの研究はどう役立つのですか？」と聞かれたことがあったらしい。

それに対してファラデーは、その記者に向かってにこやかに微笑みながら

「あなたは生まれたばかりの赤ん坊が何かの役に立つと思うのですか？」と返したそう  
だ。

この話は一色が先ほど口にした、「今やっている事の意義がいまいちわからない」というのと

どこか通じるものがある。

物事の基礎は成果が目に見えにくく、それをどう活用するかを説明するのは難しい。それでうんうん捻って悩んでいると、一色がはいつと手を上げた。

「せんばい。例えばですけど、理系に進めば国語とかやらなくて済むんですかね？」

「いや、お前。葉山追っかけるのに、文系いくんでそ？」

「だから例えばですって」

ふむつと頷き考える。

俺は文系一筋なので理系にあまり詳しくないが、それでも人並み程度の知識はある。なのでその知識をフル活用しながら、一色の問いかけに答えていくことにした。

「理系っていうとあれだな。研究とかするよな」

「です。白衣とか着て、試験管をふりふりしたりしますね。」

昔から憧れてたんですよ。白衣ってなんか知的じゃないですかー？」

「これまた知的じゃない発言だな……」

「いいじゃないですか。前もいいましたけど、イメージは大事ですよ」

まあ確かにね。それに一色なら白衣も似合うと思う。

それで出来れば白衣を着た上で、眼鏡なんかも掛けて欲しい。

そしたら多分、童貞だらけの理系男子（偏見）なぞイチコロだろう。

おっと、いかん。気を抜くと、つい一色のペースになっちゃうな。

「まあそれでだ。研究したことを纏めるのに、論文を書かなきゃならん」

いうと、一色ははてなつと首を傾げる。

「口で説明するんじゃダメなんですか？」

おう……、そうきたか。

一色のいうことはどちらかというと屁理屈のたぐいだ、一応理屈ではある。

ただ屁理屈ならば俺も負けてはいられない。ここはひとつ、木っ端微塵に論破せねばなるまい。

ダンガンロンパを一話切りした俺の実力を見せてくれようぞ！



「いちいち口で言っただけで回るのも大変だろ？」

その点、紙に書いて出せば、と言いかけたとき、俺の言葉を遮るよう一色が口を開く。「録音すればいいじゃないですか？」

もうやだ、この子。ほんとあーいえばこーいうで嫌。

つーか、他の人からみたら、俺もこうなのかな……。これからは気を付けよう。

そんな反省をしつつ挫けそうな心をなんとか奮い起こす。

そして一色が納得してくれそうな方向へと軌道修正を図る。

「いいか、一色。話すにしてもだ。」

相手に上手く伝えるにも相手の言ってることを理解するのにも国語は必要だぞ？

戸部をみる。俺の話を半分くらいしか理解してくれねーんだから」

「戸部先輩は単に、人の話を聞いてないだけだと思えますけど……。」

でも、いわれてみればそうですね」

納得した感じの一色の姿に、ほっと安堵した俺はさらに話を続ける。

「それでな、読解力もないやつがまともな文章は書けないだろ？」

だからまず本を読んで読解力を身に付ける。そうすればそれなりに文章が書けるようになる。

それとな、文章力はどこにいつても必要になるぞ？

自分だけわかってても他人にわかりやすく伝えるために必要」

「他にも受験科目の現代文は人の考えを論理的に理解する練習になるわな。

結局何をするにも、国語は必要な訳だ」

言い終えると、こそつと一色を窺ってみる。

すると一色は人差し指を顎にあて、くりつと小首を傾げた。

「せんぱいはそういう事の為に、本を一杯読んでるんですか？」

「いや、単に面白いからってというのが大きいな。」

そんで楽しみながら、語彙や読解力を身につけたって感じだ」

「せんぱい。語彙っていえばなんですけど。」

クズ金で意味がわからない単語があつたんで、辞書で調べながら読みましたよ」

「おー、偉いぞ。そうやって言葉の意味を理解していけば、さつきやったテストなんかも

すぐ解けるようになるしな」

「そうなんですかね？」

頑張つて褒めてあげたのに、一色はその俺を疑いの眼差しでじとつと見てくる。

ほんとこいつは……。

まあ普段の俺の言動を見れば、ちゃんとした事をいっても疑われてしまうのもやむを

えない。

なので汚名返上も含めて、話を続けることにした。

「えつとな、英語でも古文でも現代文でも、語彙力がなければ文章を読むことは出来ないんだ。

その点、現代文は普段使っている日本語で書かれているから、英語や古文のように語彙を

勉強する必要はないけどな」

「でもな、評論や小説文では普段あまりお目にかからない言葉も多く出てくるだろう？」

止揚や抽象といった言葉の意味がわかってないと、文章を読んでもいまいち理解できねーからな」

「だから一色はまず、漢字の書き取りじゃなく読みと意味を覚えることを中心にしたほうが

良いと思うぞ。それで理解し読むようになれば、もつと楽しめると思うしな」

そこまで言うのと、一色を見やる。一色は神妙な顔でふむーつと唸っていた。

返事はないものの、一応話は聞くつもりはあるらしい。なので俺は勝手に話を進めることにした。

×  
×  
×

なぜ勉強するのか？ それは多分、誰もが一度くらい考える事だと思う。でも誰も、それについてきちんと応えてはくれない。

世の中にある当たり前の事は当たり前だからこそ、説明しづらいから。

なので思ってたよりもずっと、先輩がわたしの言葉を真剣に受け止めてくれた事に驚いてしまう。

今までそうだったように呆れられ鼻で笑われるのが精々、そう思っていたから。

そして、わたしがいなくてもあつという間に一人で数学をこなしていく先輩を見て、置いてかれたような気になって、拗ねた自分が恥ずかしくなる。

そんな気まずい気持ちでその声に耳を傾けていると、先輩が不思議なことを尋ねてきた。

「一色は十年後に、どんな生活をしていると思う？」

なんでそんなことを聞くのか意味がわからずぼかーんとしていると

先輩は困ったときの癖なのだろう、頭をがしがしする。

「どこの国の、どの地域の、どんな家に住んで、どんな家族を持ち、どんな仕事について、平日は朝何時に起きて、昼は何をして、夜は何時に帰り、休日はどんな一日を過ごしているか。

そういうのでいいんだ」

そうやって具体的に聞かれば、なんとかイメージしやすい。と思っただけど、

上手くイメージすることができなかつた。

普通にOLかなあ……

「うーん。上手く思い浮かばないですねえ……」

「まあ、俺もだ」

先輩はというと、困ったように笑う。

「それでな、どうなっているかわからないから、なにが必要かもわからないわけだ。

まあ、金が必要ってのはわかるけどな」

「確かにそうですね。お金があれば大抵のことは解決しますし」

「まったくだ」

二人してくすくすと笑う。それでなんだか、嬉しくなる。

「でな、今やつてる勉強なんかは将来なにか起こったときの保険なんだと、俺は考えてる。

例えば金を稼ぐにしても知識のあるなしで結果は変わるだろうし、運良く稼げたとして

それをきちんと守れるようにするのも、やっぱり知識は必要だしな」

「だから今やつてることは、将来使うため、難しいことでも覚えたという経験を得るため  
それと問題を解決できるようにするためだと思うぞ」

こんなふういきちんと、わたしの質問に伝えてくれた人、今までいなかっただなと思う。  
それで胸の奥が温かくなるのを感じつつ、思ったことを口にする。

「じゃあ、今していることは、将来の自分へのプレゼントなんですね」

わたしの言葉に、先輩は嬉しそうに微笑んで頷いてくれた。

雲を語りて、空を眺めり。彼を思いて、夜は更けりる

先輩と二人、学校から駅への道をしてこてこと歩く。

季節は夏。晴れて高く見える空には、色んな形をした雲が浮かんでいた。

口をぽかんと開きそれらを眺めていると、昔ママが読んでくれた童話を思い出す。

それは、人を怖がる少女のお話。

でも少女は最初から人を怖がっていたわけではなく、むしろみんなの中心にいるような

そんな明るい子だった。

しかしある時、自分が居ないところでみんなが自分のことを悪く言っているのを知ってしまう。

そのことで少女はみんなが怖くなり家を飛び出すと、人気のない場所へと逃げ出してしまふ。

山の中、打ち捨てられた廃屋に辿り着き、身を潜めた少女はほつとする。

ここならば、誰にも悪く言われないうらやまと思つたから。

そうして少女は、空腹を抱え夜の闇に怯え寒さに震えながら眠る。

朝、少女は目覚めると、自分の身体に擦り切れた毛布が掛けられていることに驚く。そして美味しそうな食べ物の香りに気づく。

匂いに誘われ廃屋から外へ出ると、焚き火をする青年の姿が見えた。

青年は少女に気づくと、おはようという。そして、ご飯をお食べといってくる。

少女は青年を怖がるも空腹に耐えかね、恐る恐る青年の隣に座る。

青年は火に架けられた鍋からスープを掬うと、少女に手渡してくる。

少女はそれを受け取ると美味しそうに食べだす。

そして空腹を満たした少女は満足げな吐息を漏らす。

それを見やって、青年はにっこりと微笑む。

そうして、青年は何も聞かず少女も何も言わない時間が過ぎる。

ただ黙って、二人で空を見上げるだけの時間。

しばらくして少女は青年に話かける。お兄さんはこんなところでなにしてるの？と。

青年はいう、お別れしにきたんだと。お別れ？と少女は首を傾げる。

人を怖がついていた自分とお別れに、と青年は答える。

それを聞いて少女は自分がここへ逃げてきた経緯を話す。

話し終えた少女は青年に尋ねる。もう怖くないの？と。



少女の声に応え、青年は語りだす。

今でも僕は、人が怖いよ。人はね、本当に色んな人がいるからね。

笑顔で目の前に現れても、心は何を考えてるかわからない。

優しい声をかけてきても、本心の人もいれば嘘の人もいる。

その表情が偽物の人もいれば、本物の人もいる。

僕はね、その嘘を見抜けなかつたんだ。

それで人に騙され、酷い目にあつた。そんな僕を見て、みんなは笑つた。

それが嫌で、僕もここへ逃げてきたことがあつたんだ。

それは悲しいね。と少女が言うのと、青年は笑つて首を振る。

でもね、僕は魔法の言葉を見つけることができたんだ。

たつた一言で相手の気持ちが変わる、魔法の言葉。

×  
×  
×

「おい、一色。聞いてんのかよ?」

「へっ? あ、すいません、せんぱい。ちょっと、ぼーつとしてて」

先輩の声で我に返る。思いの外、物思いに耽つてたみたい。

「なにお前、そんなに腹減つてたのか?」

なら千葉までいかねーで、近所のラーメン屋にするか?」

「ラーメンは確定なんですね」

「いや……。ラーメン食べたいっていったの、お前だよね?」

「そうでしたっけ?」

先輩の声に応えながら、童話の続きを思い出す。

「あ、あのう、せんぱい」

「あん?」

たった一言、何でもない質問だけど。きっと自分との時間を大切にしてくれる人なら。

「今日も、綺麗な空ですね」

こんなくんだりない一言も、聞き流さずちゃんと返事をくれる。

「おいおい、一色。お前、なに言い出してんだ？」

先輩は呆れたようにいう。

うぐ……。やつぱり、こんなもんだよね。

「そんなお前らしくないこと言つてよ」

わたしはただの後輩だし、仕方ないよね。

落ちた気持ちのまま、わたしは下を向いてしまう。

「あれ見てみるよ。すげえ変な形の雲が飛んでるんだぜ」

いわれて、顔を上げる。

先輩の指差すほうを見ると、ひょうたんのような雲が見えた。

その雲は妙な感じにひしやげてて、それがなんだか可愛らしい。

口元が嬉しきで緩むのを感じながら、別の雲を指差す。

「せんぱい。あつちの雲、猫が二本足で立ってるぼくはないですか？」

一緒に雲の話をしながら。

「うーん。猫つてか、ネズミじゃね？ 千葉だけに」

空を眺めながら、二人で笑えた夏の日。

×  
×  
×

「じゃあ、めぐり先輩。明日、お昼頃に」

「うん、わかった。まってるね、比企谷くん」

「はい。では、めぐり先輩。おやすみなさい」

「おやすみ」

電話が切れる。静かになった携帯を握りしめ、ベッドの上にごろんと転がる。比企谷くんと二人でいく、初めての旅行。

行き先は私が行ってみたいとずっと思っていた、奥大井湖上駅。

その近くにある温泉宿の予約が取れた事を伝えると、

彼はすぐく楽しみますと言ってくれた。

ベッドから起き上がりカレンダーの前まで行くと、その日に○を付ける。

それを見てによよによりながら、違う場所にもう一つ、○を付ける。

八月八日、比企谷くんの誕生日。

その夜の夏祭りに、二人で出かける約束もすることが出来たから。

それが嬉しい半面、受験生の比企谷くんを遊びに誘うことに躊躇いがある。

でも、彼と必然的に会える場所を持たない私はどうしても気が急いでしまう。

それで比企谷くんに「夏祭りまで会えないの？」と拗ねたように甘えると、

彼は優しい声で応えてくれた。

明日、我が家の家庭菜園の草むしりに来てくれるとのこと。

どうやらこの前のデートの時、わたしが何の気なしに口にした「夏は草むしりが大変なの」という

言葉を覚えていてくれたらしい。

それが嬉しくて何度も嬉しいと口にする私に、比企谷くんは照れくさそうに

「俺も会いたいですし」と、さらに嬉しくなる言葉を受話器越しに届けてくれた。

わたしのかわいい恋人。

その彼に会うのにとんな服を着ればいいか迷いながら、わたしの夜は更けていく。

## コン〇ームを買いに行っためぐりが、コ〇ドームを買いに来た八幡を見つけるお話

タイトル：彼女の家に行くのですが。

質問者：思春期童貞Hさん。十七歳。2015/08/03(月)22:15  
明日の昼頃、お付き合っているひとつ年上の女の子の家に遊びに行くのですが、家族が留守なようで夜まで二人きりになります。

それでなんですが、もしもに備えてコンドームを買っていくべきでしょうか？  
ちなみにその子とは付き合って十日くらいで、まだキスもしていません。

回答者：達吉さん。2015/08/03(月)22:35

はえーよ、猿。死ねばいいのに。

回答者：ひなたさん。2015/08/03(月)22:40

そんな事より、のぼり棒の話をしませんか？ それか胸の話でもいいですけど。

まあ自分は最近、貧乳に目覚めたので全く見なくなりましたけどね。

あつ。でも、会った時に1回だけ見るかもです。胸に挨拶してから、顔に挨拶する感じます。

回答者：ぶーちゃん☆さん。2015/08/03(月) 22:48

避妊大事ですよ。年齢から察するに、どちらも学生さんの様ですし。

ただ、それ以上に大事な事があります。思春期童貞Hさん、勝負パンツ持ってますか？

自分が初めての時は、日の丸パンツを履いていきました。懐かしいです☆

回答者：あきさん。2015/08/03(月) 23:20

上の方も書いておられますが、避妊は大事だと思います。なので買っておいた方が宜しいかと。

個人的にオススメなのは、蛍光コンドーム「ぴっかりこんちゃん!」です。

闇の中、光り輝く俺の如意棒。

そんなスターウォーズのライトセーバーっぽいところが気に入っております。

回答者：達吉さん。2015/08/03(月) 23:45

さつきは感情のまま書きちゃったぜ。悪かったな。

でもよ、思うんだが。本当にそれ、捨てちゃっていいの？ もう取り返せないんだぞ？



三十まで我慢すれば、魔法使いになれるんだぞ？

そののどこよく考えてから、そうした方がいいように思うけどな。

回答者：ぶーちゃん☆さん。2015/08/04(火)00:15

また勝負。パンツの話になりますが、彼女さんはそういう事を気にするタイプですか？  
そうじゃない場合、Hさんだけ気合を入れすぎて、引かれてしまうかも知れませんが、  
そこで提案なのですが、彼女さんの分もHさんが用意していくのはどうでしょう？

私はその手のことに詳しいので、質問があれば受け付けますよ(◇ω・)☆

回答者：clipさん。2015/08/04(火)01:15

コンドームは愛の距離といいますしね。お互いの今後の事を考えると、やはり必要かと。

彼女さんを大切に思っているのですしたら、きちんと用意していくべきです。

ちなみに覚えたては、人を猿にします。(経験者談)

なので枚数が多いのを買っておくと良いかと思えます。

回答者：メガネコさん。2015/08/04(火)09:20

年上のお姉さんですか？ いいですね！ 色々捗ります。

ところでそのお姉さん、胸は大きいですか？ 私、気になります!!

ブラウザを閉じる。

その手の事を相談できる友達がないのでネットの質問板でしてみたが、頭が病気の人ばかり。

なんだよ、のぼり棒って……。日本大丈夫か？

まあちゃんとした人もいたし、その解答はためになる。

やはり買っておくべきだろう。今回使うことがなくとも、今後もあるわけだし。

でもどこで買えばいいんだ？

駅前に大きなドラックストアがあるが、確か中学の同級生がバイトしてたしなあ。

近所のコンビニも同じように、顔見知りかバイトしてるし……。

時計を見ると、朝の九時半。待ち合わせまで後二時間半しかない。

千葉まで出るのも面倒だし、近所だと同じ学区の奴がいたりする。

うむむつと唸って暫く考える。そしてぴんときた。

そうだ。なら学区外のコンビニにでも行けばいいのか。

それに気づいた俺は自転車で飛び乗ると、普段行くことのない遠くのコンビニへと向かった。

×  
×  
×

バスを降りて暫く歩くと、目的地のコンビニが見えてくる。

まさか私とその手のものを買いに来る日が来るなんて。

そう思うと、普段入り慣れてるコンビニにも入りづらくなってしまふ。

かといってこのまま帰ったら、ここまで足を運んだ意味ないし。

比企谷くん持ってきてくれるかな？ と考えたけど、もしなかったら困るしなあ。

でもそうだった時に私がいって手渡したら、その手の事を期待していたように

すぐく恥づかしいような……

そんな事を考えてコンビニの駐車場でうんうん唸っている私を、道行く人が不思議そ

うな顔で

見てくる。それで慌てて、店に入る。

蒸し暑い外から店内に入ると、クーラーの冷たい風が心地よい。

そのお陰で、熱くなつた頭も冷える。

レジを確認すると、年配の定員さんが二人。どちらも女性のようでほつとする。

住宅地の真ん中にあるコンビニなので駅前のコンビニに比べると、お客さんもまばらな様子。

それでさらにはほつとして、棚を見て回る。

普段見ることもないそれを探すのに時間が掛かったけど、なんとか発見。身を屈めて、それらを見てみることに。

ていうか、こんなに種類あるの？ どれがいいんだろう……

ひと箱ひと箱見ていくが、違いがいまいちわからず困ってしまう。

そかー、サイズもあるんだ。比企谷くんってどのくらいなんだろ？

聞くわけにもいかないし……。

それに色や形も色々あるんだなあ。極薄タイプ？ 薄くて平気なのかな？

こっちは絞りが六段階つてあるけど、絞りつてなんだろう？

へー、これつて光るんだ。でも、光る必要つてあるのかな??

あつ、そか。そうだよな。部屋を暗くしてもらわないと恥ずかしいし。

暗い中で付けるなら、光ったほうがいいもんね。

まあ、はるさんみたいにスタイル良ければ、見られても恥ずかしくないんだろうけど。なんか比企谷くんに、がっかりされたら嫌だなあ……。

そんな感じで、見れば見るほど悩んでしまう。こんな事、誰にも相談出来ないしなあ……

そう思つたため息をこぼし窓の外を見ると、男の子が一人、自転車を止め

店内に入つてくるのが見えた。

えっ、あれって……。まさか、比企谷くん!?

驚き慌てて入口から一番遠い棚まで走り、身を潜める。

店内に入つてきた比企谷くんは暑そうに額の汗を拭うと、何か探しているのかな？  
周囲をきよろきよろしだす。

知り合いが来なそうだと思つてここを選んだのに、まさか一番見られたくない比企谷くんが来るなんて……

なんて考えていると、比企谷くんがゆっくり歩きだす。

それを遠くから伺っていると、先ほど私が見ていた棚の前で比企谷くんは足を止めた。  
屈んだようで、姿が見えなくなってしまう。

恐る恐る近づいて覗き込んでみると、彼が真剣な表情でアレの箱を凝視しているのが見えた。

比企谷くん。そういう事、する気なんだ……。ど、どうしよう……。

もちろん彼と私は付き合ってる訳で、いつかはそういう関係になるのを理解してるけど

流石にちよつと早いような、それでもないような……。

まあ比企谷くんに求められたら、応えようとは思うけど。でも少し怖いなあ。

そんな逡巡をしていると、比企谷くんが箱を手にとってレジへ向かうのが見えた。

おお、買うの早い！ と驚いて、したことあるのかな？ と考える。

それでなんだか嫌な気持ちになる。

好きな子が自分じゃない誰かとそうしていたと思うと、無性に苦しくなってしまう。

私ってこんなに、独占欲強かったんだなあ……

などと思っていると、買い物を終えた比企谷くんは店の外へ出て行ってしまった。

急いで比企谷くんと同じ物を手に取ると、レジへと向かう。

会計を済ませ店の外に出ると、駐車場を抜けて通りを見渡す。

すると少し行つた先で、比企谷くんが電柱の傍で佇んでいるのが見えた。

×  
×  
×

コンビニから出ると、少し歩いた先にあつた電柱の影に身を寄せる。

傍に大きな木が生えており、日陰になって涼しい。

そこで涼をとりながら、買ったばかりのコンドームの箱を開けてみる。

取り扱い説明書をじっくり読みながら、ここはひとつ装着の練習をせねばと考える。

俺は初心者なのだ。練習しておいて間違いはないだろう。むしろしないと間違えそう。

とはいえ、まさか路上でする訳にもいかずそれ用の場所は無いかと

スマホで地図アプリを起動することにした。

公園のトイレとかがいいかな？ つーか、つけっぱなしでいた方がいいかも知れん

な。

帽子を被ったり靴下を履いていく感じで。備えあれば憂いなし！ などと思案して

いると、

そこへ電話が掛かってきた。

誰だよ、おい。俺は忙しいんだぞ！ と見てみると、なんと先輩からの電話。

なんであの人、こんなピンポイントに連絡してくるんだよ！ と思いながらも

仕方なく電話に出る。

『こんにちは。比企谷くん』

「こ、こんにちはです。めぐり先輩」

『どうしたの？ 声がなんか上ずってるけど』

「そ、そんなことないでしゅよ」

やべ、囁んだ。

『今、お家？』

「いえ、外ですよ。今日は天気がいいですからね。散歩しながらそつちへ行こうと思っ

まして」

『景色を眺めながら？』

「ですす」



×  
×  
×

君が眺めてたのは景色じゃなく、コンドームの箱でしように……と思いながら彼の声を聞くと嬉しい気持ちになってしまう。

そしてその背中に声を掛けると、振り向いた比企谷くんは目を丸くして驚き、それを見て私は大きな声で笑ってしまった。

## 今も、その後も、ずっと

突然目の前に現れたためぐり先輩にあたふたしながらもなんとか誤魔化すことができたので

二人で先輩の家へと向かうことにした。

到着したためぐり先輩の家にお邪魔すると、先輩に手を引かれ二階へとあがる。

そしてそのままつかつかと先輩の部屋に連れて行かれることに。

「冷たいモノ持つてくるから、座っててね」

先輩はいうと部屋から出てつたので、周囲をきよろきよろ見回す。

畳敷きの六畳ほどの広さのそこは年頃の女の子の部屋というより

なんだか田舎の婆ちゃんの部屋のような感じだ。

多分、年代ものの背の低い和箆筒や壁に掛かっている着物等が俺にそう思わせるのだろう。

由比ヶ浜の部屋とは随分と違うなあ……

そんな事を思いながら手持ち無沙汰を感じ、丸テーブルの横に積まれたモノに手を伸ばす。

ペラペラ捲ってみると、それはどうやら先輩の小さい頃の写真が収められたアルバムのようなのだ。

うおー、小さい頃のめぐり先輩、滅茶苦茶可愛いなあ。

黄色い帽子を被り満面の笑みでピースしたり、茶目つ気たつぷりなポーズを決めてる写真の数々。

どれもこれも愛らしく、それを見て笑みがこぼれる。

大体年を取ると顔が面長になり残念になるケースが多いのだが、先輩にはそれがなくふつくらしたままいい感じに成長した様子。

あの頬つぺたのつつきたくなる感じは昔からなのかあ〜と納得していると、そこへ先輩が戻ってきた。

「ちよ、比企谷くん！ 見ちゃだめだよお」

にやけた顔でアルバムを見ていた俺を見て先輩は慌てたようにいうと、俺からアルバムを取り上げてしまう。

そしてそれを胸に抱えて、じろつとこちらを睨んできた。

「す、すいません。こうなんか、つい。」

でも、めぐり先輩。小さい頃からすごく可愛かったですね」

いうと、先輩は「そ、そかな？」と喋って照れくさそうに頬を掻く。

口元は嬉しそうに緩んでおり、まんざらでも無い様子。

機嫌を直してくれた事にほっとしつつ、出された麦茶を口にする。

よく冷えたそれは、夏の暑い道を来た俺の体を心地よく冷やしてくれる。

チリリンつと風鈴の音が耳に届く。

涼やかなその音色に耳を澄ましながら、一口二口、麦茶を啜っていると

先輩が俺の顔を覗き込んできた。

「比企谷くん。お腹空いてる?」

「いえ、朝飯食べてからまだそんなになんで、空いてないですよ」

いうと、先輩はうんつと頷く。

「えつとね、お昼、お外で食べようと思ってお弁当にしたんだけど、よいかな?」

「いいですね。そう聞いちゃうと、はやく食べたくなります」

笑みを含んで応えると、先輩は嬉しそうに「えへへ」と微笑んでくれた。

そうして俺が麦茶を飲み終えるのを見た先輩は景気よく手をぱんつと叩くと

俺の上着の裾をきゅつと掴んできた。

「比企谷くん! バンザイして!」

「え? あ、はい」

言われるままバンザイすると、めぐり先輩がなぜか俺の服を脱がしに掛かってくる。

「ちよ、めぐり先輩。な、なんで脱がすんですか？」

「比企谷くん、暴れないで。脱がせにくいでしょ？」

いや、そういうけどさ。そもそもなんで脱がされてんの？ 俺。

「お姉さんが教えてあげる」的な展開を期待してなかった訳ではないが、心の準備があ—  
—と

あれよあれよという間に裸にされてしまった俺が胸を隠すよう乙女なポーズで身を振っている

先輩がどこからともなく小瓶を取り出し、その中身を俺にペタペタ塗り始める。

おいおい、いきなりローションプレイかよ！ と慄いていると、身体がすーすーする事に気づく。

なんだかトニックシャンプーを使ったような、そんなさわやかな爽快感。

「これね、ハツカ油なんだ。すーすーするでしょ？」

「はい。なんかこれ、すごく涼しくなりますね」

「うんうん。虫除けにもなるしね。」

草むしりで暑いとこいかないとだし、それでちよつとでも涼しいようにって

そういう事か。つーかこれ、なんか涼しいってか、寒いんだけど。

「もしなんだつたら、今から草むしり行きませんか？」

さくつとやる事やちやつた方が、のんびりできますし  
「いっの？」

「もちろんです。任せてください」

とんと自分の胸を叩いていうと、めぐり先輩はぽあつと花咲くような笑顔になる。

そして礼儀正しく「お願いします」というと、ぺこりと頭を下げてくる。

それに微笑みを返し立ち上がると、二人で草むしりへと向かった。

× × ×

向かった先の家庭菜園は以前訪れた御宮の下にあり、不思議に思つて尋ねたところ  
高台だと思つていたここは低めの山とのこと。

そしてその山はなんと城廻家の所有地らしく、先日お会いした先輩のお爺さんが神主さんをしてるといふのだ。

おいおい山持ちつて漫画やアニメでよく見るけど、リアルで会うのは初めてだぞ。

まあ自前の山は、山と呼ぶにはちよつと物足りないですね！

などと失礼な事を考えながら先輩に告白した時、すぐに先輩が松葉の事に気づいたのは

それもあつての事なのかと思ひ至る。

元々熨斗というのは、神事にまつわるものだからだ。

それでかーと納得しつつ、気になることがあつたので尋ねてみる。

「あおう、めぐり先輩」

「なーに？」

「巫女服とか、先輩着たりするんですかね？ その、神事の時とか」

「うんうん。お正月とかに着てるよ！」

マジかよ。えっ、マジで？ 超見てえー！

なのでお願いする事にした。

「えっと、めぐり先輩。今度その、良かったらなんですけど、着てみてくれませんかね？」  
いうと、めぐり先輩は前のめりでにやにやしてくる。

「なになに比企谷くん。私の巫女姿、見たいの？」

「見たいです。絶対、可愛いと思いますし」

変に誤魔化さず素直な気持ちの口にする。まあ単に、自分の欲望に素直なだけかも知れないが。

それでも効果はあったようで、先輩は気恥ずかしげにもじもじしだす。

「んっ、いいよ。比企谷くんのお願いなら、その、聞く」

先輩はというと、照れくさそうにおさげ髪をいじりだす。

ぐふうぐ、たまらん。やべー、超楽しみ！

そんなウキウキワクワクした気持ちで、俺は菜園の草むしりを始めた。

×  
×  
×



やる気が湧きまくったおかげか、思っていたより早く草むしりは終了。

腰をとんとんと叩き、んーっと伸びをしていると、めぐり先輩の明るい声が耳に届く。「おーい、比企谷くん。お昼にしようー!」

先輩はというと、編まれたお下げをぴよこぴよこ揺らし、こちらにぶんぶん手を振ってくる。

前髪をピンで留めているおかげで丸出しのおでこが、陽光を浴びてきらりと光る。

「はーい。今行きます〜」

大きな声で返事を返し、先輩が座るベンチへと向かう。そして大変な事に気づく。

ああ、めぐり先輩があんな硬そうなイスに!

よし! ここは俺が、俺の背中で彼女のおしりを癒やす!

誰も損しない、むしろみんなが得をする素晴らしい案を思いついた俺は四つん這い、通称お馬さんスタイルをしようとすると、めぐり先輩はくすくす笑う。

「比企谷くん。んんんんん」

いって、ベンチをぺんぺん叩く。

いや、俺は先輩のために……と喉元まで出かかったが、その笑顔に釣られ俺もベンチに座る。

「じゃ、食べよっか!」

二人の間に広げられたお弁当から先輩がお握りをひとつ手渡ししてくれる。

そして先輩も同じようにお握りを両手で掴むと、いただきますとやってそれを口へと運ぶ。

小さいお口で一口、お握りを齧ると、頬を膨らませモグモグし、ごくんと飲み込む。なんとしか見てるだけで浄化されそうなの、そんな愛らしい姿。

食べる前に、お腹がもう一杯になってしまう。

やはり、食べている時のめぐりんのかわいさは異常。

先ほど見せてもらった幼少期のアルバム、遠き青の時代のロリりんは最高に可愛かった。

膝の上に乗せておにぎりとか食べさせたい。

いや待てよ。今からでも遅くはない。そうだ――

「めぐり先輩。ちよつとお願いがあるんですけど」

いうと、卵焼きを頬張っていた先輩は「なーに？」といった感じで首を傾げる。「その……。先輩のこと抱っこしていいですか？」

そんな、今までの俺なら絶対に言えない事を口にする。

なぜそんな事を出来たかといえ、やはりコンドームを買うという経験で

俺のレベルが7上がったからだろう。

ちなみにレベルが300を超えると、千葉から東京まで走っていける。  
今のレベルは12。遠いな。

めぐり先輩はじめ驚いたように目を丸くしていたが、あはつと笑うと

「しようがないなあ」といつて俺の膝の上にちよこんと座ってくれた。

「比企谷くんつてたまに、変なこというよね？」

膝に乗り向かい合った状態でめぐり先輩はにこにこ顔でいうと、おかしそうにくすくす笑う。

おい、めぐりん。俺がへんなことばっかり言ってるみたいだな印象操作はやめるんだ！

「重くない？」

「柔らかいです」

「やっぱり変だよ」

流れるようにツッコまれた。

「いや、違います。誤解です。俺のせいじゃないです。」

みんながえろいから、俺はそれに嫌々合わせているだけなんですよ！

困った俺が必死に訴えると、めぐり先輩は唇に人差し指を当て悪戯っぽく尋ねてくる。

「これつてえちいかな？」

待ってくれ。脳の処理が追いつかない。

さらに困った俺は手を伸ばし、めぐり先輩を抱き寄せる。

抱き寄せられた先輩は困ったようにあわあわしていたが、暫くすると力を抜いてそつとその身を預けてくれる。

胸が詰まるような愛おしさを感じ、その柔い身体を抱きしめっていると、頭を冷やせとばかりに空から雨がぽつぽつと降ってきた。

×  
×  
×

滅茶苦茶いいところで邪魔をされた俺は、恨みを込めて空を睨む。

空は晴れているのに降ってきたこれは、天気雨。雲が消えて雨だけが降る状態から、雨を涙に喩え涙雨や天泣と呼ばれることもあるらしい。俺も泣きたい。

「めぐり先輩、寒くないですか？」

「う、うん。寒くはないんだけど、その……」

めぐり先輩はかあつと頬を朱に染め、身体を隠すようにぎゅつと自分の肩を抱いた。

そう先輩は某ラノベ八巻の表紙の子のように、雨ですけすけ状態なのだ！

文字通り降って沸いた幸運に俺は感謝しつつ、ちらちら横目で先輩を窺う。

「ひ、比企谷くん。そ、そんな、見ちゃだよ……」

めぐり先輩は首元まで赤くなった顔を逸らし、途切れ途切れに声を出す。

「いや、違うんですよ。目が勝手にオートで」などと言い訳していると、

めぐり先輩は拗ねたように言う。

「それに見たつてつままないよ。私の、ちっちゃいし」

大丈夫、雪ノ下には勝っている！ と言いかけたが、それだと他には惨敗だという意

味に

取られかねない。それで上手い言い回しを考えると、先輩はさらに拗ねたように

いう。

「由比ヶ浜さん、すごく大きいじゃない。比企谷くんも、あーいう子が好みなんですよ？」

確かに由比ヶ浜のおっぱいはでかい。そうだ、でかいんだ。

忘れないで、そこには夢が詰まっている事を。アンパンマンもそう言った（言っていない）

そんな詩的な事を考えながらめぐり先輩を見やると、悲しそうな横顔が目映る。

落ち込んでるめぐりんは、かわいい。

もつと落ち込ませたくなるほど、かわいい。

もういつそ泣かせたいくらい、かわいい。

などと不埒なことが思い浮かび、頭を振ってそれを追い払うと、

先ほどのようにめぐり先輩を抱き寄せる。

そしてその可愛らしい頭おっむを優しく撫でながら、耳元で低く囁く。

「めぐり先輩はどんなでも、俺はちゃんと好きですよ」

そう、俺は先輩が好きだ。

こうして傍に居てくれる今も、俺を忘れてしまったその後も、ずっと。

## 雨上がりの午後

草むしりも終わり雨も大分小雨になったのでめぐり先輩の家へと帰る事にした。

そして今、菜園から直接家の裏側へ出れる道をとてこと降りているのだが、

先輩は変わらさずすけすけのままなので目のやり場に困ってしまう。

それは見られる先輩もなのか腕で胸元を隠すのだが、お手てが細すぎてあまり隠れない様子。

大変結構、俺今満足などと不謹慎な事を考えていると、めぐり先輩が俺の腕にしがみついていた。

「その……、離れてると見えちゃうから」

そこに気づくとは天才か！ まったくもってその通り、なんとという隙のない理論。

そしてその素晴らしい理論に基づいた行動よって、先輩は透けた胸元が隠せ俺はその柔らかさを

堪能できるという、みんながハッピーになる状況が創り出される事となる。世界に広めたい。

そんな組んず解れずな状態で先輩の家に帰宅すると、二人でかわりばんこにお風呂に

入る事に。

しかし、後でいいと遠慮する俺に先輩は先に入るよう言ってくる。

「やつ、めぐり先輩。先に入ってくださいよ」

「いいからいいから。比企谷くん、先に入って」

「でも……」

渋る俺を見て、先輩は嬉しそうに笑う。

「比企谷くん、ありがとね。」

でもです！ 君はお客さんなんだから、ちゃんと家主の言うことは聞くように！」

先輩はというと、早く早くと急かしてくる。それで俺も仕方なくお風呂場へと向かう。

くうく残念。めぐり汁に浸かりたかったのに……。

しょうがないと諦めて服を脱ぐと言われた通り、それを洗濯機に入れる。

そして浴室に入り、ぐるりと見回す。

ほうう……。ここで毎晩、めぐり先輩は身体を洗っているのか……。

そう思うだけで、卑猥な妄想がどんどん膨らんでしまう。

いかんいかん、クールになれ八幡。と念じつつ、水をざばーつとかぶる。

そうしてなんとか気を静めると借りたタオルで身体を洗う。

疲れた身体を癒すのに湯船に浸かろうかと思っただが、濡れた先輩の事を考慮し



軽くシャワーを浴びるだけで済みます。

そして風呂を出ると、草むしりで汗をかくからと着替えて持ってきた甚平に袖を通す。

以前、材木座と夏服を見に行つたときお揃いで買おうといわれ、渋々購入したものだ。に、似合うぞ、八幡」と口にして、頬を赤らめていた材木座の顔が思い出される。

最近あいつの俺を見る目が怖い。

それで俺もあんな目で戸塚を見てるのかと気づき、慎まなければと思つたりもする。

「お先にお風呂、いただきました」

リビングに入ると、お勝手に洗い物をしていためぐり先輩に声をかける。

先輩は既に着替えたようで、すけすけめぐりんでは無くなつていた。残念。

「はーい。どーお、さっぱりできた？」

先輩はというと冷えた麦茶を出してくれる。それを有り難く受け取りながら返事を返す。

「おかげさまで。めぐり先輩も早く入ってください。風邪ひいちゃいますよ」  
「わかつたー。じゃあ、いつてくる〜」

手拭きで手を拭いながら先輩は言う、じつと俺を見つめてくる。

なんだろう？ と訝しんでいると、先輩ははにかむように笑う。

「その……。比企谷くん、和服似合うね！」

めぐり先輩は頬を朱に染めいうと、リビングから出て行ってしまった。

同じセリフでも材木座に言われるのとはえらい違いで、照れくさくなってしまふ。

そうして暫く、クーラの風で身体を冷やししながらテレビのワイドショーを見ていると薄く扉が開き、そこから先輩がびよこつと顔を覗かせる。

「めぐり先輩、どうしました？ 部屋、冷えてますよ」

湯上りの上気した顔に不安そうな表情を浮かべる先輩にいうと、先輩は口を小さくすぼめる。

「その……。笑わないでね？」

「え？ ええ……」

戸惑いながら返事を返すと、先輩はびよんと飛ぶようにしてリビングに入ってきた。なんと、巫女姿で。

白衣の上着に緋袴を履き、その上に確か千早と呼ばれる薄羽織を身に付けた先輩は普段のお下げ髪を解き後ろで一本、水引きで髪を結いている。

頬をりんごの様に赤く染め恥ずかしげにもじもじするその姿は、大和撫子ここに在り！と

高らかに叫びたくなるくらい素敵なものだった。

「ど、どうかな?」

「うおおおおお! どこのお姫様かと思ったら、めぐり先輩じゃないですか!」

これでいける! これでいこう! めぐりん——!」

「めぐりん?」

し、しまったあー! 頭の中で叫んだつもりだったのに、全部声に出しちゃった。

しかも勢いよく、ソファーから立ち上がって。

なんとか誤魔化そうとあたふたしていると、めぐり先輩はそんな俺を見てにまにまど微笑む。

そしてすすつと傍に来ると俺の顔を見上げるように覗き込み、甘えるような声でいう。

「そういう変な呼び方じゃなく、めぐりって呼んで欲しいな」

おいおい、めぐりん。その言い方じゃ“このすば”のめぐみんに喧嘩売る事になるぜ?  
?

と思いつつ、怒っためぐみんに爆裂魔法で吹き飛ばされるめぐりんを想像しながら遠慮がちな声を出す。

「その、呼び捨てはあれなんで、めぐりさんでどうですかね?」

いうと、めぐり先輩は少し考えるように間を置いてから、にこぱつと笑う。

「私も八幡くんって、呼んでいいかな？」

その声に「嬉しいです」と応えると、先輩は俺の胸元で喜色に満ちた表情を見せてくれた。

× × ×

「ねーねー、八幡くん。これ、おやつで食べてもいいかな？」

空になったコップに新しく麦茶を注ぐのに冷蔵庫を開けためぐり先輩が声を出す。

その声でそちらに目を向けると、めぐり先輩は手に一個の西瓜を抱えていた。

俺が土産として持ってきた茨城産の種無し西瓜のようだ。

「いいですね。それスーパーの店員さんに勧められたものなんです。」

なんか甘やかで有名なやつらしいですよ」

「そうなの？ 楽しみだね！ それじゃあ、切るねー！」

「はい、お願いします」

応えると、めぐり先輩はうんつと頷き、西瓜を包丁で四等分にしてくれる。

そしてお皿に載せようとするので、それを見ていてなかなか良いアイデアが浮かんだ俺は

言ってみる事にした。

「めぐりさん、良かったらなんですけど。その西瓜、御宮で食べませんか？」

いうとめぐり先輩は、それだ！ とばかりにパンつと手を叩き喜んでくれる。

「高台で涼しいし、いいかも！ 景色もね、夜景も綺麗だけど昼間も眺めがいいんだよ！」

よし！ 作戦成功。

巫女姿のめぐり先輩を神社の敷地でじっくりみたいという本音は上手く隠すことができた。

先輩はコミケなどで、これみよがしにパンツを晒す痴女どもとは違うのだ。

やはりその衣装に合った場所に居てほしいと思う。

もちろん涼むのがメインであってやましい気持ちはない。全然、本当に。

「そうなんですか？ 是非、見てみたいです」

「うんうん」

めぐり先輩は楽しげに頷きながら鼻歌混じりで西瓜をふた切れラップで包むと

棚から水筒を取り出しそこへ麦茶を注ぎ込む。

そしてそれらを手提げ袋にしまったので、「持ちますよ」と声かけ袋を受け取ると俺たちは家を出て御宮へと足を運ぶのだった。

×  
×  
×

下から上へ石段をてこてこ登っていくと、上から下へ降りてくるお爺さんやお婆さんに出会う。

先輩は顔なじみらしくにこやかに挨拶をすると、向こうも愛想よく返事を返してくれる。

そして先輩の後ろにいる俺を興味深げに見つめると、皆が皆、同じような事を口にする。

「めぐりちゃん。彼氏できたんかい？」

その声に先輩は恥ずかしそうに頬を染め、「はい、その、できました」と言ってくれる。するとそれを聞いた皆が皆、同じような事を俺に言ってくる。

「お兄ちゃん。めぐりちゃんの事、大事にしてな」

それに、はいですもちろんですと答えながら、なんだかとても不思議な気持ちになっ  
てしまう。

こうやって誰かに紹介されると改めて、自分に彼女が出来たことを実感するからだ。  
ずっと一人だった俺は、多分心のどこかで求めていたのだと思う。

俺の話を聞いてくれ、俺に自分のことを話してくれる人を。

それで色んな女の子に告白してきたのだが、その結果は散々なものだった。

生理的に無理。顔の作りが苦手。一緒にいてもつまらない。トークに緩急がない。

などと言われ、

そして何より酷かったのは足跡がムカつくと言われた事だろう。なんだよ足跡って……。

そう考えると折本が口にした「友達じゃダメかな？」は社交辞令かも知れないが気遣いがあり

あいつはやっぱり良い奴だったんだなど、今更ながら思ってしまう。

そんな思いに耽っていたからか、先輩の声を聞き逃してしまった。

「八幡くん。聞いてる？」

おっと、いかんな。感情の迷宮に迷いこんだわ。

「すいません。暑くてぼーっとしてました」

「そつかく。なんか風が止んじやって暑いしねえ」

雨上がりというのもあるが風が止んでいるため、涼みに来たのに全然涼しくない事態に

俺たちは直面していた。

俺の欲望に先輩を巻き込んでしまつてすまぬうと悔やんでいると、先輩があはつと笑う。

「八幡くんてさ、暑いときに暑がつて寒いときに寒がつてる素直なイメージがあるよね」



「そ、そうですね?」

「うんうん」

楽しげに頷く先輩を見ながら、これはもしや我慢が足りない身勝手な奴と言われているのではと思ひ横目でその表情を窺う。

すると、にこやかな笑顔で俺を見ていた先輩と目が合ってしまった、誤魔化すよう適当な事を口にする。

「まあ夏は、アイスの蓋まで愛せる季節ですからね! 暑くても仕方ないです」

「なにそれ〜!」

けたけた笑うその姿を見やりながら、以前、俺が見ている色や形は他の人と同じなのか? 。

「ただの約束事で本当は違うのではないか? そんな事を考え、調べたことを思い出す。」

そして思ってた以上に違うものだという事を知った。

人間の目はいい加減なもので、興味の度合いや好悪の感情によつて見え方が変わってくる。

その人が興味のある部分は強調されて見え、興味のない部分は入ってこないというアバタもエクボ、恋は盲目、などのように。

だから平面なり立体なりに置き換えて表現した時に大きな差が出る。

こう造ってやろうとしてる訳じゃなく「こう見えてる感じてる」がそのまま出るからだ。

なので絵画の技術というのは「誰が見ても不自然に見えない感じない」に近づける為

のものだという。

0・001で見える人と10で見る人では全く世界が違うということ。

背格好や容姿、運動能力ほどの違いと言えば分かり易い。

だからだろう。俺が見ていたためぐり先輩は、いつだつて輝いていた。

## 涕落抄

石段をてつてこ登っていると唐突に思い出した事があつたので、

二段前を歩くめぐり先輩の背中に声をかける。

「めぐりさん。ちよつと聞いてもいいですか？」

「なーに？」

めぐり先輩は歩調を緩め隣に並んできたので、先輩が歩きやすいよう横にずれながら口を開く。

「この前ここで、二人でお月見したじゃないですか」

いうと、先輩は嬉しそうな笑顔で「うんうん」といつて頷いてくれる。

嬉しそうにしてもらえて俺も嬉しいのだが、これからいう事を口にしづらくなつてしまふ。

でも大事な事なので無理して声を出す。

「その後ここに、夜中に来たりしましたか？」

尋ねると、先輩は記憶を探るよう頬に手を添える。

「んとね、来てないよ。朝とか夕方に社のお掃除に来てるけど。でも、どうして？」

その答えにほっとしつつ、先輩の問いに応える。

「その……。夜はもう、来ちゃダメですよ」

いうと、めぐり先輩は人差し指を顎に当てながら「なんで？」といった感じで首を傾げた。

うーん動作がいちいち可愛らしい。

「昼間はともかく夜だと、女の子なんだし危ないじゃないですか？」

気持ちを込めていったのだが、それを聞いたためぐり先輩はぶくつと頬を膨らませる。そして口をすぼめると、拗ねたような声を出す。

「平気だもん」

先輩はいうと、ぷいっとそっぽを向いてしまう。

そんな仕事も可愛いので困ってしまうが、こればかりはさすがに見過ごせない。

なので心苦しいが、敢えて厳しいことを口にする。

「今までは平気だったかもですけど、これから先はわからないじゃないですか？

世の中には頭が変な人もいますし、ほんと危ないですよ？」

いうと、めぐり先輩は足をぴたつと止め俺を見る。俺も先輩に合わせて足を止める。頭変なのはお前だし危ないのもお前だろ？ って言われたらどうしようとドキドキ

していると、

先輩が俺の目をじっと見つめてくる。なんとなく気圧され、俺はたじっと一歩引いた。

「心配？」

「当たり前じゃないですか。その、すごく心配です」

答えると、めぐり先輩はあはつと笑う。

なぜ笑う……と俺は軽く抗議を込めて、先輩をちらつと見る。

すると、先輩は微笑みで返してきた。

「八幡くん。心配してくれて、ありがとね」

「いえ、そんな」

「それでその……。夜は来ないようにするね。心配かけて、ごめんなさい」

めぐり先輩はいうと、ぺこつと頭を下げる。

う、うーん。こうも素直に謝られると、これはこれで困るなあ……。

お月見するの楽しんでみたいだし、それを奪ってしまうみたいで悪い気がしてくる。

そこで、この話になったとき言ってみようと考えていた事を口にしてみることにした。

「めぐりさん。その、良かったらなんですけど、お月見したい時には連絡くれませんか？」

こうガードマンというか、危なくないよう付き添いますんで」

「いいの？」

「はい。それなら安心ですし、そうして欲しいです」

「でも、八幡くん受験生でしょ？ 勉強とか……」

ああ、心配してくれてるんだ。そう思うと嬉しくなる。それで声が弾んでしまう。

「大丈夫ですよ、ちゃんと勉強してますし。だからいつでも気兼ねなく、呼んでください」

答えると、めぐり先輩は俺に向かって一歩踏み出し、距離を詰める。

「八幡くん」

近い距離で名前を呼ばれ、思わず俺の足が一歩引く。

それを追いかけるようさらに一歩踏み出した先輩が、俺の顔を見上げるよう覗き込む。

「そんな事言われたら、毎晩呼んじやうかもよ？」

めぐり先輩は悪戯っぽくいうと、ほわっとした笑顔を浮かべる。

今更だが、先輩の可愛さがヤバイ。何かに目覚めそう。

いや待てよ。これは今ここで目覚めよ、という天の声なのかも知れん。神社だけに。

抗ってはいけない。逆らってもいけない。なので素直に自分の気持ちを声にする。

「好きただけ呼んでください。俺は毎日会いたいです」

俺の言葉に、めぐり先輩は嬉しそうに目を細め「ありがとう」と言ってくれた。

そうして、楽しい鼻歌混じりの先輩とまたとことこと石段を登っていると

額から頬へと汗が流れたのでそれを手で拭う。

雨の後風がないと、なんだかサウナのように蒸し暑くなる。

めぐり先輩、暑くないのかなあと目を向けると、その顔は少し赤い。

そりやこの暑さだしなと思いつながら、その姿をしげしげと見つめる。

先輩、肩細いなあ……。白い首に汗が伝って……。あ——、触りてえ……

うん、やっぱり、俺が一番危ないかもしれないねえな。

×  
×  
×

露出が少ないのにえろく見えるって、夏ってほんとありがたい。

汗だくってそれだけでなんかこう……。これに日焼けが重なるんだろう？ まいっ  
たな、夏。

などと夏に感謝しながら到着した御宮は石段を登ってきたせいもあり

ぬるま湯に浸かったようなそんな蒸し暑さに包まれていた。

涼みに来たのにごらんの有様だよ！ と俺が心中嘆いていると、

めぐり先輩はこんな状況でも元気な声を出す。

「八幡くん、これはアレだね。アレしかないよ。そう思わない？」

「へっ？ えーと……」

よくわからんアレを勧められ戸惑っていると、先輩は俺の袖を掴みずんどこと歩き出  
す。

なにがなんだかわからんまま連れて行かれたのは、本堂の左側にある蔵のような建  
物。

その扉の前で先輩は白衣の袖に入れると、ごそごそし一本の鍵を取り出す。



そして古い真鍮製のそれを扉の鍵穴に差し込むと、くるつと捻り鍵を外した。

「八幡くん。ここ待っててね！」

先輩はいうと薄暗い室内に足を踏み入れ、奥の方へ行ってしまう。

手持ち無沙汰を感じ中を窺うと、どうやらここは細々としたものをしまっておく倉庫のようだ。

天井もかなり高いようで採光用の窓から入る陽の光も、室内を照らすには心許無い。

そんな暗い中、奥の方からゴロゴロとなにかが転がる音がしてくる。

目を凝らすと、先輩がなにやら運んでくるのが薄がりのなか見えた。

「おまたせー」

扉の前まで戻ってきたためぐり先輩はいうと、ひと仕事終えた感じで額の汗を拭う。

先輩が転がしてきたそれは、かなり大きな木製のタライだった。

アレってもしや、これを一色の頭に落とすとか？ と考えていると

先輩が景気よくタライをばんつと叩く。

「八幡くん。これにお水張って、ちやぶちやぶしよう！」

あー、なるほど。即席プールか。

そーかそーか納得つと先輩を見やると、先輩はタライを強く叩きすぎたのか涙目で自分の手をさすっていた。アホだこの人。

苦笑を抑えながら周囲をぐるっと見回す。

すると水場が見えたので、それに目をやったまま口を開く。

「めぐりさん。俺が水を汲んで運びますから、めぐりさんはおやつを用意をお願いします」

いつて、西瓜と水筒が入った手提げ袋をめぐり先輩に手渡す。

名誉の負傷（笑）をした先輩に重いものは持たせられない。

袋を受け取った先輩は気合を入れてぐつと拳を握ると「任せて！」の声を残しとててつと縁側へ走っていく。

おやつを食うのにあんな一生懸命な人、初めて見た。

そんな感想を抱きつつ、その背中に声をかける。

「めぐりさん。あんま走ると、転びますよー」

「大丈夫ー！」

こちらに振り返り、ぶんぶんと手を振るめぐり先輩。

それに手を振り返しこぼれでた笑みを抑え、俺は水場へと足を運んだ。

×  
×  
×

水場でばしやつと顔を洗う。うひよー、冷たくつて気持ちいいな！

つと、いかんいかん。めぐり先輩も暑いだろうし、早く水を運ばねば。

濡れた顔を手で拭うと、蛇口をひねりタライに水を注ぐ。

半分ほど水がたまったので蛇口を閉めタライを掴んで持ち上げると

えつちらおつちらしいながら先輩の待つ縁側へと向かう。

向かった先の縁側では腰を下ろした先輩が足をプラプラさせており、

俺に気づくと「八幡くん早くー！」と急かしてくる。

いや、めぐりん。あなたそういうけどね？ これ、すげえ重いんだよ？

心中ぶつくさいいながら先輩の前に着くと、タライをよつと下ろし一息つく。

「八幡くん。お疲れ様」

につこり笑顔で先輩はいうと、紙コップに入れた麦茶を差し出してくれる。

ああ、癒されるなあ……。この笑顔、そして優しい言葉。

なるほどなあ。前生徒会の連中があんなに頑張っていた気持ち、今ならわかる気がする。

もうね、ほんとあれだよ。

この人というと銀の匙を読んだ後のように、なんか頑張らなきゃって気になるもの。まあ読んで一時間くらいすると、そんな気持ちも失せちゃうんだけど。

揺るぎない自分の信念に乾杯！ などとアホな事をぼんやり考えていると先輩は草履を脱ぎ緋袴の裾をめぐりあげ、ちやぼんとタライに足を浸す。

「ひゃー、冷た〜い！」

先輩はいうと、あははと笑う。

ああ……。めぐり先輩がちやぶちやぶしておられる。

かわいい……。かわいい……。おっぱい……。違った。あのタライの水を飲み干したい  
……

いや違う。俺は変態じゃない。それはきつと医学的根拠に基づいて行う行為なんだ。

あの水には凄い栄養があるんだ。俺にはわかる。

それにしても、お姉さん属性のめぐりんはモモチラがよく似合う。

考えてみれば手で裾を持ち上げているから何かエロイのかも 아닐ない。

ちよこんとした爪先からくるぶし、形のいいふくらはぎから続く柔らかそうな太もも。

きめ細かな肌は透き通るほど白く、まるで上質な絹織物のように見える。

「八幡くん。どうしたの？」

じろじろと見つめる無遠慮な俺の視線に気づいた先輩が、きよとんと首を傾げながらこちらを見ていた。

「あつ、えつと……。そろそろ西瓜、食べませんか？」

煩惱に満ち溢れた邪な内心を、一年近く葉山を見ていて身につけたうさんくさ笑顔で誤魔化すと

それに応えて先輩は足の水気を払ってから縁側へと上がってくる。

そして二人並んで縁側に腰をおろし西瓜をしゃくしゃく頬張っている。最近の奉仕部の様子を聞かれたので思い出しながら口にする。

「そかあ、由比ヶ浜さん、勉強頑張ってるんだね！ 大変だあ」

「まあ大変なのは、由比ヶ浜に勉強教えてる雪ノ下なような気もしますがね」

「そうなの？」

「素直に話は聞くんですけどね。ただ物覚えがあまりよくないみたいで」

そう、サービスピंकは一芸に秀でているが、難しいことは苦手なのだ。まああいつの良さはそこじゃないってだけの話。

頭が良いとか運動が出来るとかそんなものよりずっと素敵なモノを、由比ヶ浜は持っている。

だから俺は……と自らの思いに耽っていると、水の跳ねる音が耳に届く。

「ありゃ。お水温くなちゃったね」

目を向けると、めぐり先輩が足でタライの水を弾きながら残念そうな表情を見せる。

それは大変、俺がどうにかせねば！

「たらいの水が温くなってきたですと!? 安心してください! 俺が責任をもって替えてきますんで!」

急いでサンダルに足を通し立ち上がると、驚いた様子で目を丸くしている先輩に微笑んでから

タライを抱え水場へと走る。

水場に着くと周囲を見回す。そして誰も見てないことを確認すると、タライに手を入れ水を掬う。

そうして一口、口に含んでみる。な、なんだこのフルーティで弾けるような味は……

!?

巷を騒がすアルカリイオン水など比べ物にならないほどの薬効が期待できそうなそんなめぐりん水の蕩けるような味わいに俺はうっとりしてしまふ。

出来れば家へ持ち帰りたいところだが容器がないため渋々ながら諦める。

そして水を入れ替えると、またえつちらおつちら言いながら縁側へと運ぶ。

運んだそれを先輩の前によつと下ろすと、先輩が「ありがとー!」といつて喜んでくれた。

その朗らかな笑顔を見てみると、隙あらば「たらいの水替えてきましたー おおつと!!」とか

言いながら、先輩に水かけようと企んでいた自分が恥ずかしくなってしまう。

それを誤魔化すよう頭をがしがし掻いていると、先輩がこちらを見てはにかみ笑いを見せてくれ、

それでその右頬にえくぼがあることに気づく。

「めぐりさん。えくぼ、あるんですね」

「うん。右側だけなんだけどね」

先輩はいうと、なにか思い出したように「あつ」と小さく声をあげた。

「ねーねー、八幡くん。えくぼの言い伝えって、聞いたことある?」

記憶を探るが覚えがなかったので、知らないと答える。

「じゃあさ、良かつたら聞いてもらえるかな？」

その言葉に頷くと、めぐり先輩はゆつくりとした口調で、えくぼにまつわる話を語りだす。

× × ×

人は皆、死んだあと冥界の世界へ行くという。今までの自分とはここでお別れ。

もう二度と戻ることのできない場所へと向かう

吸い込まれるように道を歩いていくと門があらわれ、その門を抜けると

辺り一面彼岸花が咲き誇る黄泉路に着く。

そこを更に進むと『忘川河』という河にでるのだが、その河を渡るには

『奈河橋』という橋を渡らなければならない。



橋には番人がいて、ここを通る者にスープを差し出す。

スープは別名『忘情水』と呼ばれ、これを飲んだ者の前世と今世の全ての記憶を消し去ってしまうという。

愛する人の声も仕草も、大切な友達も、大好きな家族も、楽しかった思い出も、忘れたくない

出来事も、今まで歩んできた人生の全てを、心から記憶からなにもかもなかった事にしてしまう。

もし、安らかに転生したのであればこのスープを飲めば良い。

恨み、情、仇、一世の浮沈、得失も同じように消えるのだから。

だが、愛する人との思い出を忘れずまた来世で逢いたいと願う者は、そのスープを飲まない

代わりに、忘川河へ身投げしなければならぬ。

そして氷のように冷たい水の中で1000年もの月日を過ごす試練を課され

その試練を耐えた者だけが前世の記憶を持ったまま輪廻する事が出来る。

そうして、試練に耐えた印であるえくぼを付けて転生すると、今生にて前世の恋人を探すという。

× × ×

めぐり先輩の声に黙って耳を澄ましていると、語り終えた先輩がふつと短く吐息をつく。

それを見て、感じたことを口にする。

「なんかすごく、ロマンチックな話ですね」

うんつと先輩は頷くと、照れくさそうに髪をいじりだす。

「それでね、八幡くん」

名前を呼ばれたので、姿勢を正して先輩をみる。

「私のその人が君ならいいなって……。その……。思ってるんだ」

先輩はいうと顔を上げる。頬を僅かに染めた、いつもの明るい笑顔。

その笑顔が段々滲みだす。それで自分が、泣いているのだと気づく。

目頭が熱く、視界は霞んでなにも見えなくなっていく。

慌てて顔を隠し涙を抑えようとするが、涙は途切れなくポタポタとこぼれ落ちていく。

本当に勘弁してほしい。この人はいつも不意打ちすぎる。

そんな……そんなふうにいわれたら、なんて返せばいいのかわからなくなる。

心の柔い部分をわしづかみされ、胸が詰まるような気持ちでいると

唇にとても柔らかな感触を感じた。

そつと瞼を開くと、すぐ傍にめぐり先輩の顔が見える。

鼓動が跳ね、それとは逆に心が落ち着く。そうしてまた瞼を閉じた。

## 理解と諦観

男の人が泣くの初めて見た。正確に言えば何度か見たことがあるけど、それは本当に幼かった頃。

幼稚園？ 小学校の低学年？ まあそのくらい昔の話。

だから初め、八幡くんが涙をぼろぼろこぼしたのを見て驚いてしまった。

彼も自分が泣いているのに気づかなかったみたいで、それに気づくと慌てたように顔を隠す。

「……すいません。その、嬉しくて」

八幡くんがかすれた声で口にしたその言葉に、私も嬉しくなる。

そして目元をござござこする八幡くんを見つめながら、彼に関わるこれまでの事をあれこれ思う。

「城廻。比企谷も悪気はないんだ。ただなあ……、ああいうやり方しか出来ないというのは

困りものだし、そしてなにより痛ましいことだよ……」

文化祭のスローガン決めの後、平塚先生が口にした言葉。

人が足りない。そんな大変な時に一緒に頑張ってくれた八幡くん。

それで私は彼に、仲間意識のようなものを感じていたと思う。

その彼が投げた言葉に些かへこんでいた私に、平塚先生はそう言つて困つたように微笑んだ。

「あの子はもう結論を決めちゃつてるからねえ……」。

そういう子は周りが何をどうしたつて変わらないよ。

頭が良い人間つてのはね、冷静に論理立てて狂うから修正が難しいの。

ましてやあの子は自分のしたことを全部分かつた上でやつてるしね」

文化祭の打ち上げの席で、はるさんが八幡くんを評した言葉。

当時はわからなかつたけれど、八幡くんと話すようになった今ならわかる気がする。

「いつも、ひとりなんで。それでなにか解決しなくちゃいけない事があつて、それができるのが

俺しかいない。まあ出来ない事の方が多いんですが……。それでもやるしかないじゃないですか？

「こうなつていうか、普通に考えて」

二人でお月見をした夜、八幡くんが口にした言葉。

責任感が強いというにはあまりにも自分を追い詰めるような、そんな危うい考え方だ

と感じた。

「ただその…、ぼっちの悪い癖で、誰にも相談せずに独りよがり動いてしまつてそのせいで先輩に嫌な思いをさせたのは、悪かったと思つてます」

八幡くんはというと、頭を下げた。悪いのは何もできずに見ただけだった私の方なのに。

申し訳なさを感じつつも正直今でも、八幡くんのやり方が正しいとは思えない。

でも、正しいとか間違つてるとかではなく、誰も解決方法を見出せない動き出せない中で、

曲がりなりににも解決に導いてくれたのはこの子だ。

他にも方法があつたんじゃないのかな…とは思つたり指摘する事は出来ても、実際には八幡くんだけが行動してくれた。色々ともどかしくはあるけれど。

でもそのせいで、八幡くんは皆に陰口を言われるようになってしまふ。

そんな中でも八幡くんは、それまで以上に黙々と仕事をしてくれた。

そのおかげで少なくともサボらずにいた子達は、彼への態度を柔らかいものに変えたように思う。

だから文化祭最終日、彼が相模さんを罵倒したと聞いた時、やるせない気持ちになる。せつかく良い感じになつていたのに、なんでそこまでしてしまふのかと。

結局、文実での彼の評価は酷いままで終わってしまった。

そして後片付けの際、皆がお疲れと労いの言葉を掛け合い笑い合う中で、八幡くんだけは離れたところで一人ぼつんと作業をしていた。

声をかける事に躊躇いを覚えなかったといえ、嘘になる。

でも、ずっと頑張ってくれていた八幡くんは何も言わないのは失礼だと思い、

感謝の気持ち传达了。

後日、二人で月を見上げながらその時の事を尋ねると、彼はそうなる事を充分理解した上で

そうしたのでから仕方がないと答えた。

とはいえ、悪く言われて喜ぶ人は居ない。そこに個人的な理由であれば尚更だと思う。

それでも八幡くんからは相模さんや他の文実の子達への悪意を感じない。

ただ人間なんてそんなものだと言っているだけのように見えた。

それを痛ましく思いながら八幡くんと言葉は重ねていると、ふと気付く。

多分この子は自分に間違っている部分がある事は理解していて、でもそんな自分が好きで、

だから他人の間違いに対しても寛容で、ある意味優しいのかもしれない。

それに気づいた時、自分が八幡くんの何に惹かれていたのかようやくわかったように思う。

そうやってつらつらと思い出していると、悲しい気持ちになる。

周りと上手くやることだけを考えその評価を気にするばかりの私では、彼の芯にあるものを

理解することは出来ても共感する事は、この先もきつとずっと出来ないだろうと感じたから。

だから私は埋まらないであろう心の距離の代わりに、その唇に自分のを寄せた。

×  
×  
×



家に帰ってから、ベッドに倒れ込む。

あれから俺たちは無言で先輩の家へ戻り、なんとも言えない気まずい雰囲気のまま別れの挨拶を交わした。

困ったような笑顔で手を振る先輩に俺はもっと困った顔で手を振り返すと

その場から逃げるように家路に着いたのだ。

それまでの弾んだ会話が嘘のように、二言三言しか言葉を交わさなかったような気がする。

うつぶせでベッドに沈み込んでいると、今日のことが思い返される。

うわああああ！ また、まただよおおお。また黒歴史を作っちゃった！

もうダメだ。限界だ。俺の思い出は真っ黒くろすけだ。

ああ、俺も千尋のように神隠しに逢いたい。そして湯場で働くんだ。

湯婆に名前を一文取られ八とか呼ばれて、朝から晩まで風呂掃除するんだ。

あれはあれで楽しそうだしなあ、などとどうでもいいことを考えながらため息をつく。

それでなんとか、諦めがついた。

いやまああれだ。本当に嬉しかったのだ。

俺をあんな風に想ってくれる人がいるなんて思ってもいなかったから。だからつてなあ……、泣くのはダメだろ、俺。

いや待てよ。そのおかげで、先輩とキス出来たんだからいいのか？

次はもつと泣いてみるのもありか？

でもなあ、なんか情けないよなあ……。

俺は滅多な事では泣かない男のはずなのに！

そうだよ。最近マジで泣いたのなんて、一昨日ダンスの角の小指ぶつけて悶絶した時と

先週ガリガリ君を袋から取り出そうとしたら、手が滑って床に落とした時くらいだ。

結構泣いてんな、俺……。

そんな事ぶつぶつ呟きながら、天井を見上げる。そして自分の唇を指先で触れてみる。

柔らかかったなあ……先輩の唇。こうなんていうか、ぷるんとしたた。

いやー、俺。マジでキスしたんだよなあ……。つーか、されたのか。

うん、あれだ。誰かに自慢したい。こういう時、友達がいればなあ。

などと、友達の定義が危ぶまれるような事を考えながらスマホに手を伸ばす。

そして数少ない連絡先をひとつひとつ見ていく。

ここはやはり、材木座か？

あいつならまず間違いなく俺を満足させてくれる卑屈な恨み言を言ってくれそうだし。

思いつつ更に連絡先を見ていくと、由比ヶ浜のアドレスが目映る。

今の俺を彼女が知ったら、なんて思うだろう。

裏切られたと、そんな風に思うだろうか。

スマホを枕元に置くと、目を閉じる。

そして、あの冬の日のことを思い出す。

## 冬の日に

「ヒツキーつてき。ゆきのんのこと、好きだよね」

水族館からの帰り道。俺の少し後ろを歩く由比ヶ浜が唐突に口にした。

場所は夏に二人で花火を見に行った帰り、由比ヶ浜が何かを言いかけたあの場所。雪ノ下と駅で別れた後、俺は由比ヶ浜に請われて彼女をここまで送ったのだ。

「は？」

いきなりなにをいうのかと、振り向いて聞き返す。

振り向いた先にある由比ヶ浜の顔はあの日と同じように、街灯の明かりによつて薄く照らしだされていた。

その表情も声も普段の彼女のととは違い真摯な重みがあり、それで俺は言葉が詰まる。

そんな俺を見て由比ヶ浜は困つたように微笑むと、まっすぐに俺を見据えた。

「なんかね、わかちやうんだ。好きな人の好きな人つて」

投げられた言葉の意味を咀嚼し理解すると、驚いた俺は由比ヶ浜の顔をまじまじと見てしまう。

けれど見た瞬間後悔する。由比ヶ浜の泣き出しそうな顔を目にしてしまったから。

痛ましきから見ていられなくなり、それで俺は彼女から顔を背けてしまう。

「ヒツキーはさ、気付いてた？ 私の気持ち」

逸らした俺の横顔に由比ヶ浜が問いかける。

うつすらとぼんやりと、そうかもしれないそうだったらいなと思っていた事を  
当人から告げられているというのに、俺の顔は強張ったままだった。

「……ああ」

曖昧に答えるべきではないと感じ、ほとんど声にならない声で返事をした。

そして、こんな形で想いを告げる由比ヶ浜の心境をおもうと胸が苦しくなる。

だから俺は俺が大切に思う彼女の為に、俺の嫌いな欺瞞を口にする。

「あのなあ、由比ヶ浜。お前また勘違いしてるぞ。俺は雪ノ下に、そういう気持ちねーか  
ら。」

普段の俺たち見てたらありえないだろ」

俺が出来るだけ軽く答えると、由比ヶ浜は静かに首を振った。

「ヒツキー。普段の二人を見てるから、わかるんだよ。」

それでね。ゆきのんも多分、ヒツキーの事を好きだと思う。

だから私は、私の大好きな二人が二人とも幸せになつてくれるなら、その、いいかなつ  
て……」

その一体何がいいんだと問い返そうとする俺を止めるように、由比ヶ浜は更に言葉を紡ぐ。

「ほら、私の名前つて結衣でしょ？ 昔ね、お母さんに聞いたんだ。どういう意味なのつて。

そしたらね。人と人が手と手を取り合うその仲立ちが出来る子でありますようにつて、

そういう意味だよつて教えてくれたの」

ああ、確かに由比ヶ浜にびったりだ。

人と人を繋いで結ぶ。そんな素敵な事を出来る人は、世の中、そう多くない。

そして彼女がいたからこそ、奉仕部は奉仕部足りえたのだと思う。

「だからね。私はいいの……」

由比ヶ浜が言い終えるとその口元からはあつと白い息が立ち上がり、闇に溶けていく。

それを目で追いながら口を開く。

「そういう自己犠牲みたいなのは、感心しねーな」

「ヒッキーがそれを言うの？」

咎めるような由比ヶ浜の声。それに合わせて俺の声も刺々しいものへと変わる。

「俺のは自己犠牲とか、そんな綺麗なもんじゃない」

吐き捨てるようにいうと、熱い吐息が漏れる。

自分は誰にも理解されることはないとその事は充分に分かっていたのに、

それでも心のどこかで由比ヶ浜ならと期待していた。

身勝手すぎる苛立ちと怒り、そしてほんのわずかな悲哀が混じった絢い交ぜな気持ちでいると

由比ヶ浜はひどく悲しそうな目で俺を見た。

「知ってるよ。ヒツキーのそれは、自分の為だよね」

核心を突かれて思わず息を呑む。

俺が返す言葉を言いあぐねていると、由比ヶ浜が訥々と言葉を続けた。

「ずっとね、不思議だったんだ。なんであそこまで出来るのかって。

それでね。今までのことを思い出してみて、気付いたの。

ヒツキーは人を信じられなくて、人になにかを任せられない。

だから何もかも自分でしようとしちゃう。それでヒツキー自身が傷つくことになっても」

歯噛みしたまま答えられずにいる俺を由比ヶ浜は優しく見る。

そしてそつと、俺の手を取った。

「ヒツキーは、できなかつたが怖いんでしょ？」

ああ、そうだ。その通りだ。俺は今まで後悔ばかりしてきた。

やつてしまった事、やらなかつた事。どつちを選んだとしても結局は、何かしら後悔してしまふ。

年相応のモノしかもたない俺には、なにが出来る訳でもないというのに。

だからといって、誰かに頼ることは出来ない。

そうし合える人間関係を俺は築く事が出来なかつたから。

もしかしたら渋々ながらも引き受けてくれる人がいるかも知れない。

それで上手くいけばいい。問題はいかなかつた時だ。

俺の頼みを聞いてくれるそんな優しい人を、お前のせいだと恨むのはあまりに辛くてやるせない。

だから俺は俺一人でも、できるようになりたかつた。

その為に、数少ない手札を切り効率化を極め最善を尽くしてきた。

例えそれが、最良ではなかつたとしても。

自らの思いに耽り黙ってしまった俺を氣遣うように、由比ヶ浜の手が優しく俺の手を包む。

その温もりは冷えた指先にひどく暖かく感じられた。



由比ヶ浜は小さな吐息を漏らしてから、またゆっくりと言葉を紡いでいく。

「私にはね、できることもやれることも、何もないの」

それは違う。と言いかけて、言葉を止める。だけど、と由比ヶ浜が続けたから。  
「できる人だって、本当にこれでいいのかなって迷うことはあるでしょ？」

他にも、なにができるかわからないまま立ち止まってる人もいると思うの。

そういう人に私は、大丈夫だよって言ってあげられる、そんな人になりたいなって  
もうなってると思うけどな。そう思いながら、軽く冗談混じりで尋ねてみる。

「もしダメだったら、どーすんだ？」

「もしたら大丈夫になるまで言い続ける」

「それでもダメだったら？」

「それでもダメだったら……。う、うーん。今回ダメでも、次は大丈夫っていう」

間違ってもやり直せる。それはきつと、素晴らしいことだと思う。

「そうか」

「うん、そうだ」

俺のなんの意味もない相槌に、由比ヶ浜は明るく笑って返す。

そして呆れたような表情で、じつと俺を見た。

「ヒツキーはそう言うと思ってたけどさ。まさか本当に言うなんて」

こいつホント賢いな。その賢さを他人のために使つてあげるといふのが優しい。

俺がそう言うのをわかつていて、それでも前に進むためには必要な問いかけだったの  
だろう。

「俺らしいだろ?」

「まったく」

由比ヶ浜はいうと、くすくす笑う。

俺はそれを見ながら由比ヶ浜がそうしたように、自分の気持ちを胸の奥にしまい込む。

そして、明日雪ノ下に会ったら伝えようと思ふ言葉を、先に彼女に口にする。

「なあ、由比ヶ浜」

「なに?」

「俺と、友達になつてくれ」

彼女の気持ちを知つてなおこんな事をいう俺は、随分と酷い奴だろう。

ただ、互いに損ないながらも共に歩んでいければと、そう思えたから。

長い沈黙が続いた。由比ヶ浜は俯いたまま動かないでいる。

やはり無理かと諦め始めた頃、由比ヶ浜は小さく頭を振り顔を上げた。

そして俺をまっすぐに見つめると、

「もう、そうでしょ?」

と、柔らかく微笑んでくれた。

そうして俺はこの日、由比ヶ浜と。そして翌日、雪ノ下と。友達になれた。

## 未来志向

これは夢だと、夢の中で気付くことがある。

しかし、そうと気付いたところで流れゆくそれを思うままにすることはできず、只々映し出される光景を眺めていることしかできない。

場所は見慣れた部屋。

窓から枝葉を落とした木々と灰色の空が見え、それで季節は冬だと分かる。

外の寒々しい景色とは違う、暖かな空気に満ちた穏やかな空間。

そこにいつもと同じように同じ場所に座る俺たちの姿が見えた。

普段通り俺と雪ノ下は読書をし、由比ヶ浜は携帯を弄っている。

しばらく見ていると、夢の中の俺が本を閉じテーブルに置く。

そして、傍から見てもわかるほど酷く緊張した面持ちで雪ノ下に声をかけた。

「なあ、雪ノ下」

雪ノ下は顔を上げ、こちらを見る。隣に座る由比ヶ浜も同じように、こちらに顔を向ける。

「その、なんだ……。俺と、友達になつてくれないか？」

二人の視線を受け、上擦った声で俺が言う。

由比ヶ浜は驚いたような表情をみせ、雪ノ下は目を細め黙って俺を見つめる。

雪ノ下がなんと言うのか気にかかった。その反応を待つてみるが、雪ノ下は何も答え  
ない。

沈黙が続き胸が焼けるような重苦しさを感じていると、雪ノ下がそつと目を伏せた。

「そうね……。そのほうが、私とあなたにはいいのかもしれないわね……」

雪ノ下はどこか諦めたように眩くと、ごくごく小さな吐息を漏らす。

それを見やった由比ヶ浜が、躊躇いがちに俺に問う。

「ヒツキー。ヒツキーはその…、本当にそれでいいの？」

「ああ、これでいい」

由比ヶ浜の消え入りそうな声に、俺はぎこちなく笑ってそう返す。

そして、二人に何か言いかけ——、そこで目が覚めた。

視界の端に白いものが映る。顔をそちらに向けると、カーテンが風に揺れていた。

ひらりと翻った隙間から薄くかすれた飛行機雲が見える。

それを見やりながら、小さく眩く。

「またか……」

あの日から何度も何度も繰り返して見る夢。

見るたびに、何か大切なものを置き去りにしたような、そんな心地悪さを感じる。

こぼれそうになるため息を飲み込むと、天井を見上げる。そして考えてしまう。

本当にあれで良かったのかと。

多分俺たちの関係は卒業し進学することで終わる。俺のこれまでがそうであったように。

俺たちは皆、別の、新しい場所へと移るのだ。

そこで出会う人たちと俺はともかく他の二人は、新しい関係を築くだろう。

そしてこれまでの関係は少しずつ希薄になっていき、徐々に距離ができ、いつしか途絶える。

俺も、そしておそらく雪ノ下も、その事を寂しく感じつつも、そういうものだと言いつつ諦めてしまえる。

由比ヶ浜はそれを察しどうかしようと考えに考えた末に、自分の気持ちを押し込めて、

俺と雪ノ下を結びつけようとした。

そうすることで、彼女自身が辛くなると知りつつも。

それは間違っていて、でも優しいことで、そう出来る彼女に好意を告げられた事を誇らしく感じながらも、俺は今でもそうやって小細工しなければ維持できない関係は本物

ではないと思つてゐる。

そして、友情や信頼が時として、成長が遅くこまめに水をやらなければすぐ枯れてしまふ木に

例えられる事を知つてゐる。

くだらない小細工や上辺だけの言葉や態度もそれが木を育てる水になるといふのなら、

互いのことを何一つ理解してない関係もまた本物ということになつてしまふ。

そんなものは嵐や日照りが来れば、すぐに朽ち果ててしまふ脆い木だとしてもだ。

だがそれでも、枯れそうな木を前にしてなんとしてでも維持したいと願う気持ちはきつと本物なのだろう。

だからこそ、例え手段は欺瞞でもその結果がただの一時凌ぎに過ぎなくとも、

由比ヶ浜がそう希うのであれば、俺はそれに応えたいと思うのだ。

彼女が望み、彼女だけが傷つく、そんな悲しいモノではない、違う形で。

飲み込んだはずのため息が溢れる。

落ちた気持ちを振り払うよう頭を振ると、俺は勉強会へ向かうため、ベッドから滑り降りた。

× × ×

夏休みも十日目、金曜日の昼過ぎ。今日も朝から蝉の声が煩い。

私はそれを遠くに聞きながら、先輩と二人勉強に励む。

先輩から出された本日の課題は、ボトルネックという小説を読むこと。

「合わない人にはほんと合わないから、無理しないでいいからな」

先輩に言われ手渡されたそれに目を通してみる。

先輩の薦めでこれまで読んだ作品とは違い、暗くて重いお話。

読みやすい文章なのですらすら読めるのだが、読むほどに胸が苦しくなってくる。

それでも続きが気になってページを一枚一枚めくっていると、隣から低い唸り声が聞こえた。

なんだろうと横目で窺うと、先輩が眉間に皺を寄せひどく難しい顔をしていた。



「なあ、一色」

「はい?」

「今日のテストき、なんかすげえ難しくね?」

そう感じるのも当たり前。

この前の仕返しに、今の先輩には解くのが難しい問題を出したのだ。ふふふ、苦しむがよい。

そんな内心はおくびにも出さず、しれっとした顔で答える。

「そうですか? 数学を解く楽しさを知ってもらいたい。」

そう思つて、割と簡単な問題にしたつもりなんですけど」

「えっ、マジで?」

「先輩、まさかとは思いますが、私が今まで教えた事、忘れたりなんかしてないですよ?」

「お、おう、バッチシだ」

「なら大丈夫です。解けるはずですよ」

私は言うのと、につこりいい笑顔先輩を送る。

笑顔の直撃を受けた先輩は困った顔をした。

「そうか……」

「はい」

返事を返すと、先輩はそのままの顔で首を傾げた。

「うーん、そうかなあ……？　そうなの？」

「そうですとも」

「……………」

神の声、天啓にも等しい私の言葉に、先輩はなぜだか納得しかねてる様子。

そればかりか嘆かわしい事に、疑わしい目付きで私の方をちらちら見てくる。

神をも恐れぬ所業。天罰のひとつやふたつ落ちてもおかしくないとこころ。

でも私は慈悲深く、リアルエンジェルと呼ばれても過言ではない存在。

なのでやれやれといった感じを出しつつも、愚かな先輩を導いてあげるのだ。

「仕方ないですね。どの問題が解けないんですか？」

「この問い、図形のとこなんだけどな」

私は席を寄せると、先輩の手元にある用紙を覗き込む。

先輩の体温をすぐ傍に感じ胸をドキメかせながら、その指が示す問題へ目を向ける。

「えーと、どれどれ。ああ、これはですね、補助線を引くといいんですよ」

「補助線……。えっと、どのあたりに引くといいんだ？」

「そうですね。どこだと思えます？」

「いや、聞いてんの俺なんだけど……」

「いいですか、先輩。私はぐるぐる先生じゃないんですよ？ 林先生でもありません。

なのでなんでもかんでも教えてもらえる、そう思ったら大間違いです。

まあどうしてもというなら、いくら出せるか？ ってところから、話を詰めていきましよう」

「金取んのかよ……」

「ほんのジョークです。まあ少しだけ、ご自分で考えてみてください。」

それでダメだったら、教えますから」

「いや、ちよつと待て。一色、お前さ、この前俺が同じ事を言ったら、

そういうのいいからさっさと教えてくださいよろって言わなかったか？」

「言いましたね」

「だよな」

「はい」

沈黙。少し間を置いてから、私は口をひらく。

「先輩。この前はこの前、今は今です。過去は振り返らず、前を向いて歩きましょう。

未来志向です。Futurismです」

「……………」

「取り敢えず、ちょっとやってみてください。間違っても全然OKですから。ね、ほら」  
早く早くと急かすと、先輩はなんだかんだいって素直に私のいう事を聞いてくれる。  
真剣な顔でテスト用紙とにらめっこし、あーでもないこーでもないとブツブツ呟く。  
「む、むむう……。こ、ここか？」

先輩の指した場所を見て、私はnonとばかりに顔を背ける。

「じゃ、じゃあ、こっちか？」

先輩が迷いながら指した箇所を見て、私はPardon? とばかりに首を傾げる。  
そんな私を見て先輩は悔しげにぐぬぬつと唸りだす。やばい、超楽しい。

こぼれる笑みを抑えなんとか表情を取り繕う。そして先輩の問いに応え、ここですよと指差す。

「あー、そこかー! いや俺もそこだろうなって、わかってたんだけどな!」

などと言う先輩に呆れながらも、ずっとこうしていられたらと私は思ってしまう。

× × ×

夏の一日、その昼下がり。俺は今日も今日とて勉強室に籠もり、一色からの課題をこなす。

そう、俺はこなそうとしたのだ。したのだが……

まあ確かに最近、俺は少しばかり調子に乗っていたかも知れない。

数学も実はやらず嫌いだっただけでやってみたら案外いけんじゃね？ つーか、いけるよな？

やっぱ俺スゲー！ なーんて考えてなかったといえは嘘になる。オーケー、それは認めよう。

でもだからって、いじめレベルの難しい問題をわざわざ出さなくつてもいいんじゃないかなーって

思うんですよ。だってこれ明らかに俺の適正レベル（小中全般）から大幅に逸脱してるし。

なので俺は「これちよつと、おかしくね？」と訴えたのだが、一色はしれつとした顔

で俺の苦情をそよ風のように受け流す。

そればかりか「私知ってます。先輩はやれば出来る人だって！」などと

褒めてるようで貶すことをいつてくる始末。

さすがに温和な俺も怒りのあまりスーパー麦野さん改めスーパー八幡さんに変身しかけたが、

一応アドバイスをもらえたのでそれを参考にどうにか解こうと頑張ることにした。

時計の針がカチコチと時を刻む中、頑張ることしばし。

結果、俺は問題を解くことが出来ずにいた。

背もたれに寄りかかり天井を見上げる。徒労感からため息を吐いてしまう。

まあ仕方がない。頑張ってどうにかなるのは少年ジャンプの世界だけ。現実には厳しいのだ。

ついで言うところサンデー編集部もなにやら厳しいらしい。

さて、頑張ってもどうにもならないとき、人には二つの選択肢がある。

それでも頑張るか、無理ですわっと諦めるかの二択。

これまた少年ジャンプの世界なら主人公やその仲間たちは諦めずに頑張るに違いない。

なぜなら彼らの双肩には世界平和や人類の存続や悲願の県大会出場なんかがかかっているからだ。

俺には特にそういったものは無いが、それらを読んで成長しここまで立派に育った俺

も

彼らのように頑張らねばなるまい。

とはいえ現状のまま解くことが出来ないのは見ての通りの自明の理。

ここはひとつ、一色に更なるアドバイスを求めるべきだろう。

がしかし、ここで下手に下手に出るとただでさえ悪い俺の扱いがもつと悪くなる恐れがある。

なので一色が自ら俺に教えたくて仕方がないという状況を作り出さねばならない。

そのための方策は色々あるが一番単純でしかも効果が高いものを選ぶことにした。

そう、それは褒める事。

褒めて褒めて褒めまくり、その合間合間にアドバイスを欲していると匂わせる。

それで「もう、仕方ないですね！」と一色当人に言わせ教えさせるといふもの。

平たく言うトリップサービスというやつだ。

てな訳で、早速実行に移す。

「なあ、一色」

「はい？」

「数学って素晴らしいよな」

「はあ」

「なんつーか、そこには必ず解があつて極めれば効率的な解法が構築できる」  
「まあ…、はい、そうですね」

「ほんとなんでこの素晴らしさに俺は今まで気付かなかつたんだらうつて、後悔するレベルだ。」

それを知る事が出来たのは、お前のおかげなんだよな」

「や、その…：そんな大した事じゃ。それに私、教えるの下手ですし…：」

一色は謙遜しつつ、チラチラ俺を見る。

すぐく遠回しに色々要求してる感じがすごい。

オーケー、オーケー、わかつてる！ わかつてるぞー！！

一色。お前が求めてるのはこれだろ？ と、俺は更に褒めまくる。

「いやいや、そんなことねーぞ？ 一色の教え方、すげーわかりやすい」

「そ、そうですね？」

「ああ！ もつと自信もつていいと思うぞー！」

それでな、もう少しアドバイスが欲しんだが、と俺が口にするより先に一色が声を出す。

「そ、それほどでも…：。でもまあそうですね。先輩よりはマシかもです」

自虐しつつ俺を貶める高度なプレイが炸裂した。どうなつてんだ、こいつ…：



「それにですよ？　先輩、今はダメダメですけど、これから頑張ればいいじゃないですか？

なんでもそうですけど遅すぎるって事はないと思いますし」

さらに上から目線で俺を慰める。嬉しくないことこの上ない。

しかもこの流れだとアドバイスも求めずらく、適当な返しを口にするしか無くなつてしまう。

「そ、そうか」

「そうですよ！」

一色はにっこり笑って答えたその時、勉強室の扉をノックする音が聞こえた。

## 天使の降臨

俺と一色は顔を見合わせ、二人揃って扉を見る。

また小さくノックされ気のせいでないかと分かり、それで少し驚いてしまう。

秘密基地みたいなこの場所に誰かが訪ねて来るとは思つてなかつたからだ。

二人してなんととはなしに口をつぐみ息を潜める。俺の108の特技の一つ、居留守の見せ所。

俺は普段からこの手で、回覧板を届けに来る隣の池田さんや電波ヤクザの手下どもを追い払っているのだ。

しばらくそうしていると扉の向こうから「あ、あの〜」とためらいがちな声が聞こえた。

この鈴の音のような澄んだ声、聞き覚えがある。この声はもしや！

急いで鍵を外し扉を開ける。

するとそこには、にゃんこ（猫ではない）もかくやの可愛らしい小動物の姿が！

「と、戸塚!?!」

急に開いた扉に戸塚は驚いた顔をしたが、俺と目が合うとぱあつと顔を輝かせる。

その愛らしい笑顔によって、悪魔（一色）との不毛なやり取りでズタボロだった俺のハートも

瞬時に癒される。戸塚がギター！ 天使降臨。その黒い奴、浄化してくれ！

「ごめん、八幡。もしかしてお邪魔だったかな？」

不安げな戸塚を安心させるよう微笑むと、一色を指差し俺が言う。

「邪魔なのはむしろこいつの方だから気にしなくていいぞ」

あはつと笑う戸塚。一色はその手をぴしりと叩く。痛い。

「なんか用か？ てか、なんでここがわかったんだ？」

もしや知らぬ間に俺と戸塚は赤い糸で結ばれておりそれを辿ってきたのかと期待しつつ尋ねると、戸塚ははにかんだ笑顔で応えてくれる。可愛い。

「本牧くんから聞いて来たんだよ」

どうやら違ったようだ。残念。

「本牧？」

「うん。今日はね、部長会があったんだ」

「部長会？」

聞き慣れぬ単語に首を傾げた俺を見て、戸塚より先に一色が答える。お前には聞いてない。

「グラウンド使用の話し合いですよね？」

「そうそう。ほら、うちの学校、グラウンド狭いでしょ？」

それで運動部の部長が集まって、どの部活が何時グラウンドを使うか話し合うんだよ」

「そんなのあったのか？」

「うん。今年から」

「今年から？」

「えっと前はね、サッカー部と野球部とバスケ部が先に決めて、残った時間を他の部が使ってた

感じだったんだけど……」

あれか。俺様ルールで仕切りたがるリア充どもの横暴ってやつか！

なんというわがまま気ままな三馬鹿部活。

なろう作品で酷い目に合わされる部活トップスリーのことだけはある。

最近読んだクラス転生ものでもバスケ部員全滅してたしなあ……。

いやマジでどんだけリア充体育会系に恨みがあるんだ、なろう作家。

「でもそれは良くないって生徒会から言ってくれて、それで一応、話し合う形になったんだよね」

一色を見やって戸塚が言うと、一色がうんうんと頷く。

「元々要望があつたんですよね。一部の人たちだけで勝手に決めないで欲しいって」

一色は言うど、顔をきゅつと顰める。それを見て、思つた事を口にする。

「そういうのつて普通、顧問同士で決めるんじゃないのか？」

「えつとですね。その三つの部つて大会で準優勝したりして結構いい成績だしてるんですよ。」

それでそれを理由に顧問の先生が自分の部の都合のいいようにしてたというか。

その……去年私の担任だつた、バスケ部顧問の西崎先生なんか」

「あー、話聞かない系の……」

「です。でもですね、それつておかしいじゃないですか？」

一色は握りこぶしをつくり、それをふりふりしながら熱弁をふるう。

身振り手振りを混じえつつ力強く訴えるその姿は妙に凛々しく感じる。

なんか「逆転裁判シリーズ 戦ういろはちゃん 覚醒編」ばい絵面だ。

「例えば私がマネジャーしてるサッカー部ですけど、真面目に練習してるし成績も残してます。」

けどだから優遇されて当然つていうのは、ちよつと違うと思うんですよ」

確かに、と思う。真剣にやつてるから成績を残してるから偉い。というのはわかる。

部員を間近で見てる顧問がえこ鼻肩したくなる気持ちもわかる。

わかるが、そうじゃないなら我慢しろというのは随分身勝手な話だろう。

そもそも学校の部活はスポーツの楽しみ方を教えるのが主題であつたはず。

勝ち負けも確かに大事だが自分らで立てた建前くらい自分らも守れよって話だわな。

にしても意外といえれば意外だな。一色がその手の事に首を突つ込むというのも。

なんつーかキャラじゃないというか、なあなあで終わらすタイプと見てたんだが。

そんな気持ちがつい顔に出てたのかもしれない。

一色は俺の表情を見て、気恥ずかしそうに頬を掻く。

「私も去年、似たような事されましたし……。それでこう、自分とだぶりまして」

一色の言葉にピンとくる。ああ、生徒会選挙のことか。

他人の勝手な都合を、まあ一色の場合悪意だったが、押し付けられた経験のある一人として

見過ごせなかつたという訳か。そうした動機はどうあれこれは一色が正しいだろう。結果として、他の部の助けになつたことだし。

案外ちゃんとやつてんだなーと感心しつつ、気になつた事を聞いてみる。

「つーか、生徒会主導なら、お前いなくて良かったのか？」

一色ははてつとばかりに首を傾げる。

「だって、勉強会ありましたし」

「いや、そつちのほうが大それた事だろ？」

「そんな事ないですよ。どつちも大事です。それにほら、先輩に数学教えないとですし」

ええ……。俺を茶化してばっかで、教えてねーだろ、お前……

「そうですあれです。他の役員の子達にも活躍の場を与える感じですよ！

トップはこう、どつしり構えてないよ！」

どうです？ 偉いでしょ？ 褒めてもいいですよ？ とばかりのドヤ顔で胸をはる一色。

感心したのも束の間、その姿についていつい呆れた声が出てしまう。

「お前のそれ、丸投げとか下請けいじめと同じだと思っただが……」

「そんな事ないですよ！ ね？ 戸塚先輩」

急に話をふられた戸塚が困った顔で身を振る。

「う、うん……。そうだね」

戸塚は言うのと、たははと力なく笑う。

そんな事ありそうな戸塚の反応。それを見て俺は更に問うてみる。

「どうなんだ？ 戸塚。ホントのところは」

戸塚は一色をちらちら窺いながら、こそつと耳打ちしてくれる。

大丈夫だ、戸塚。お前は俺が守る！

「う、うーん……。本牧くん、各部の間に立ってスゴク大変そうだったけど……」  
ほらやつぱり。本牧は犠牲になったのだ……。一色の流儀……。その犠牲にな……

胸に手を当て星になった本牧を悼んでいる俺と気まずそうに顔を逸らした一色を見て

戸塚が慌ててフオローに入る。

「や、でもね、ほんと助かったんだ。僕んとこみたいな弱い部が何を言っても

聞いてもらえなかったからさ。ありがとね、一色さん」

戸塚は言うと、ペこりと頭を下げる。さすが俺の戸塚。礼儀正しい。

一色も慌ててペこぺこ頭を下げて、「顔上げてくださいよ」と困ったような声を出す。

そして二人揃って顔を上げると、見つめ合いにつこりと微笑み合う。

青春映画のワンシーンのような、心温まる光景。

でもなんだろう、この疎外感。胸がモヤモヤする。

置いてきぼりとは違う感じだが……。はっ、そうか！これがネトラレって奴か！

このままじゃマズイ！と危機感を覚えた俺は二人の間に割って入ることにした。

「そーいや戸塚。なんか用事があつたんじゃねーのか？ まあ無くて全然いいんだ  
が」

いやホント、用事が無くても毎日会いたい。むしろ俺が会いに行く！



俺の問いかけに、戸塚はぱちんと両手を合わせる。

「そーそー、あのね、映画見にいかない？」

「映画？」

「うん。学校に来る途中、ビルに貼られた広告みてき。えっと、『君の名は』って映画」  
あー、そーいやそーそろそろ公開時期だったか。最近あれこれあつてすっかり忘れてたわ。

「前にさ、八幡言つてたじゃない？ 新海監督の作品好きって」

覚えててくれたのか……。日常のほんの些細なやり取りで口にした俺の言葉を。

なんだろう、すごく嬉しい。

「八幡がさ、何か好きっていうの殆どないから、珍しいなつて思つてたんだ」

あー、なるほど。確かに俺が口にするのは愚痴やら不満ばっかだしな。でもちよつとシヨック。

「いいぞ。俺も観たいと思つてた映画だし」

「ホント！ よかつたあ。きつと楽しいよー！」

戸塚に嬉しそうな顔をされると、俺の顔もついほころんでしまう。

「ああ、だなー！」

まあ戸塚と一緒になら例えマンホールの蓋を眺めても楽しめるに違いない。

丸いね!とか硬そうだな!とか語り合う、そんな感じで。

すっかり戸塚と映画か。去年の夏以来だな。あの時も楽しかった。

とはいえ映画の内容は全く覚えていない訳だが、などと思いついてみると、戸塚が不吉な事を口にする。

「もちろん、一色さんも一緒に!」

「いいですね! 私も観たかったんですよ!」

なに!? それは困る。俺は戸塚と二人で、二人きりで映画を観たいのだ。

正確に言うと、映画を観る戸塚を見ていたい。

なので一色には、フィールドアウトしてもらおうことにした。

「いや、一色は帰るぞ」

「帰りませんよ! なに言ってるんですか!」

俺の言葉にぶんすかと怒り出す一色。一色はどうやらカルシウム不足のようだ。

仕方がない。ここはひとつ……

「ちよつとすまん」と戸塚に一声かけ、一色を部屋の隅に連れて行く。

そして、説得にかかる。

「いいか? 一色。よく聞け。戸塚と一緒に映画とか、AKB48全メンバー引き連れて

渋谷の街を闊歩するのと同じくらいのビックイベントだ。

お前にはまだ早い。わかるか？ わかるだろ？ わかれよ！」

誠心誠意心をこめて言ってみる。

「が、一色には上手く伝わらなかつたようだ。不貞腐れた表情でじとつと俺を睨んでく  
る。」

「なんですかそれ、知りませんよそんなの」

一色は言うのと、ぷいっとそっぽを向いてしまう。

なにー？ 一色、お前まさか、AKB48知らないの？ マジかよ。結構有名だと思  
うんだけど？

えっとね、小太りでバンドナ巻いてリックサック背負ってる人達と握手するお仕事を  
してる

女の子のグループだよ。

たまりに歌ったり踊ったりするけど、メインは握手。後、選挙。などと事細かに説明  
したのだが、

一色は納得してくれなかつた。

困つたな、どうしようと悩みつつ、違う方向からアプローチしようと試みる。

「つーか三人だと、毎回俺、仲間外れになるんだよ」

遠い目をして口にした俺の言葉に、一色ははっとした表情を浮かべる。

察しが良くて結構。でもなにを察した。

「ほんといつの間にか、二人組十一人になるんだよなあ」

ほんとなんでだろ。最初は並んで歩いていたはずなのに、俺だけ段々後ろを歩く事になるし。

それで会話にも入りづらくなり、話す言葉も「なるほど」「確かに」「だな」の三つのワードで

事足りるようになってしまう。

しかもそうやって口にした言葉も、実は誰も聞いてなかったりする。

どうしよう、言つてて悲しくなってきた。

一色は一色で、なんか俺を可哀想な目で見てくるし。いやマジやめろよ、その目。

俺の話聞いた一色はこれまで見たこともないくらいすごい優しい表情を顔に浮かべる。

そして、その表情と同じような優しい声で言う。

「大丈夫ですよ、先輩。私は先輩ともちゃんと話してあげますから。だから大丈夫ですよ。全然大丈夫じゃねーよ。むしろ大ダメージだよ。

その後も俺は一生懸命ごねてみたのだが、結局、戸塚を味方につけた一色に押し切ら

れてしまう。

—そうして俺たちは映画を観に、千葉へと向かった。

## 湧きあがれ！ 俺のコスモ!!

千葉に着いた俺たちは駅のホームに降り立つと、その足で映画館へと向かう。

その矢先、何故だか駅の改札で待機していた葉山と合流。

「どういふことなの……？」と一色に問うと、「呼びました」と軽く返される。

呼びましたって、出前かよ。なに？ 最近葉山って出張サービスしてんの？

あつ、そういやこいつ俺と戸塚が上映館調べてるとき、どっかに電話してたな。

あのとときのアレは葉山を誘っていたのか。恐ろしい、なんとという抜け目のなさ。

俺と戸塚の突発デートイベントを我が物のように利用して葉山との距離をつめようとするとは！

こいつ時代が時代なら軍師とかになってそう。目的のためなら手段を選ばない系の。

つーか、ちよつと待てよ。なんで人数増やすのん？ 俺は減らしたいんだよ！

お前ら女子だつてよく、体重減らしたい減らしたいって言ってるだろ？ それと一緒に減らしてよ！

と言いかけたが、葉山の困った顔を見てやめる事にした。

急に呼び出された挙句、嫌な顔をされたらさすがに可哀想な気がするし。

そういう俺も昔、小学生の頃、クラスメイトの高久くんに遊びに来ない?と誘われたことがある。

誰かにお呼ばれするなど滅多にといか全くなかった俺は嬉しくなり、喜び勇んで向かったのだが、先に来ていた加藤と山田に「なんであいつ呼ぶんだよ」「俺あいつ嫌いなんだよな」と

内緒話(でもぼつちり聞こえる)され、ひどく居た堪れない気持ちになったことがあった。

誰かにされて嫌なことは親父にして、すつきりさっぱりするのが俺の流儀。

とはいえ、するべきでない事も世の中にはあると思う。

俺も丸くなったもんだ、としみじみしてしまふ。

とんがりコーンのように尖りまくっていた過去の自分に懐かしさすら感じる。

ちなみにアニメなら無人島漂流を体験することで人柄は丸くなる。ナディアでおぼえた。

にしてもこの俺が葉山に優しくする日が来ようとは。

これはあれだな、先日めぐり先輩を抱っこしたおかげかもしれない。

できればまた抱っこしたい。いや抱っこするべきだ。

『為せば成る、為さねば成らぬ何事も、成らぬは人の為さぬなりけり』

つて上杉鷹山も言ってたしな！ まあ多分、鷹山はそういう意味で言った訳ではないと思うが。

とはいえ一体どうすれば……

一色との会話を途中で放棄し、俺は知恵を絞る。

湧きあがれ！ 俺のコスモ!! と龍峰ばりに気合を込めると三秒で名案が浮かんだ。

そうだ！「なんか俺めぐりさん抱っこすると優しくなれるんです」とかなんとか言え  
ば

抱っこさせてもらえるかもしれない。いや、させてくれるに違いない！

鷹山、俺頑張るよ！ と会ったことも見たこともない鷹山に誓いを立てていると

不安げにこちらを見ていた一色と目が合う。

まあ卒業まであと半年足らず。

その間に葉山との関係を少しでも深めておきたいと急いでしまう気持ち分からも  
もない。

しやーない。ここはいつちよ協力してやるか。

「わかった、わかったよ。ただちよつと提案があるんだが、聞いてくれるか？」

「はあ…、まあ聞いてあげてもいいですよ」

どうでも良さげな一色の反応。そして、上からすぎるその態度。



人がわざわざ協力してやろうというのに、なんという恩知らず&礼儀知らず。まあいい。こいつはこう見えてなかなか察しがいい。

俺の提案を聞けばその意図に気付き、不遜な態度も少しは改めるだろう。

こほんどひとつ咳払いし、勿体ぶった様子で俺が言う。

「えつとな、男女四人で映画とかなんかダブルデートみたいで恥ずかしいだろ？」

そこでだ。ここで二手に別れる、てのはどうだろう？」

そうすれば自然、俺と戸塚コンビ、葉山と一色コンビになるのは必定といつても過言でない。

後は葉山と一色に遠い場所にある映画館、できれば県外、可能なら国外に行くよう勧めれば良い。

そのまま二人して二度と帰ってこなければなお良し。

考えをまとめた俺は、お前だって葉山と二人きりがいいだろ?と目線で一色に訴える。

目と目で通じ合う、そういう仲にこいつとはなりたくないが上手く通じたようだ。

一色はにっこりと微笑んだ。

「えつと、先輩。女子ってわたしだけなんですけど?」

かー! なんという察しの悪さ。こいつ全然分かってねえよ。戸塚は女神枠だろう

が！

「つーか俺のメッセージ、ちゃんと受信しろよ！ お前のアンテナ、ソフ○バンクかよ

！

と、一色の持つアンテナの受信能力のあまりの低さに呆れるやら軽蔑やらしていると、

そんな俺を見て戸塚が優しく窘めてきた。

「八幡。そんなこと言っちゃダメ！ みんなでいこう？」

い、いや、俺は一色のためにね……とごによごによ言い訳していると、

戸塚の言葉に力を得たのか一色がここぞとばかりに俺を責めてきた。

「そうですよ、先輩。仲間はそれとかそういうの良くないと思います！」

一色、お前そう言うけどさ、俺が今体験してるこの状況もある意味仲間外れなんだぞ。

それにどちらかと言うとね、お前のパーティーから俺と戸塚を外して欲しいんだけど……。

思いながらも口には出せず返事に困っていると、葉山も会話に入ってきた。

「比企谷。まあ、滅多にないことだしみんなでいこう。」

と、そうだ、戸部もいいかな？ もともと遊ぶ約束しててさ、もうすぐ来ると思うんだけど」

葉山の言葉に、すかさず一色が応える。

「いえ、戸部先輩は結構です。急いでこの場から離れましょう。さあ、早く!」  
言うが早いのか、一色はすたこらさっさと歩き出す。

さすが一色。仲間はずれは良くないと口にした二言目には矛盾を見せる鮮やかな手並み。

これには葉山も戸塚も苦笑い。

結局、葉山と戸塚に宥められ一色も渋々了承。

そして、遅れてやって来た戸部も混じえ、俺たちは映画館へと足を運ぶのだった。

## お互い様

映画館に着き周囲を見渡した俺は唾然としてしまう。

どの方向を見ても、人、人、人の、人だらけ。

おかしい。俺は新海監督の映画を観に来たはず。なのになんだ、この混みようは……

一色と戸塚も同じように周囲をきよろきよろすると、感心した声を出す。

「せんばい。なんかだかすごーく、混んでますね」

「僕、新海監督の映画って初めて観るけど、いつもこんなに混んでるの?」

「いや……、俺の知ってる新海映画の混みようじゃねーな……」

もしかして上映館間違えたのかな?と、上映案内を確認してみる。

がやはり、ここで間違いないようだ。

本当におかしい。こんなに混むなんて。

こう言うと、アンチかよ、こいつ、などと思われるかもだが、そうではない。

そもそも自分に合わないものを観るのに時間と金を割ける程、俺は暇じゃないし金もない。

実際、新海作品のその殆どは、割と正統派の純愛もののように思う。

ただなんというか、とてもシラフで考えたとは思えないブツ飛んだ世界観と設定と演出。

他に絶対恋愛禁止マンとしてあらゆる手段を講じ、主人公とヒロインが結ばれないようにするため

観る人を選びそうだと感じていた。

だからなのか同じように新作が出るたび映画館で観るジブリや細田監督の作品に比べると、

観客は少なかったように思う。

例えば秒速五センチメートルを観た時など、人が少なそうな時間に足を運んだのもあるが

俺も含めて観客が三人しかおらず、映画に出てくるキャストの方が多かったくらいだ。

「ゆーても新作映画だし？ そりやみんな、観に来るっしょ！」

戸部は言うど、俺の肩をぽんと叩く。そして親指を立て、ニツと笑う。

おい、やめろ！ そういうのは仲良しがやるもんだ。

戸部の相も変わらぬうっとおしさにうんざりしていると、まとめてチケットを買いに行った

葉山が戻ってきた。

「これ、比企谷の」

差し出されたチケットを「サンキューな」といつて受け取る。

これは私見なのだが「ありがとう」に比べ「サンキュー」はなんとなく軽い感じがする。

なので葉山にはそれで充分。

「サンキューついでに、出世払いでいいか？」

俺の言葉に、葉山はニツコリと微笑む。

「比企谷は出世以前に就職できなさそうだから、今くれ」

「お、おう……」

葉山め……。俺の小粋なジョークにマジ返しとか、なんとという大人気なさ。

とはいえ、俺は就職できないんじゃない、しないんだ！ と口に出すのも恥ずかしい。なので、渋々ながら代金を払う。

少し軽くなった財布を片手に売店でポップコーンとコーラを買うと半券をもぎつてもらい、

スクリーンへと移動する。

席に着くと周囲に目をやる。夏休みということもあり観客の大半は中高生モンキー

のようだ。

モンキーたちは猿ゆえに猿らしく、うききー！ きゃきゃきゃー！と騒々しくはしゃいでおり、

それを見て俺はうんざりしてしまう。

俺は映画館の大スクリーンで映画を鑑賞するのが好きだ。

好きなのだが、この手の輩を目にするのが嫌でそれで仕方なく観たい映画もすぐには観に行かず、

しばらく間を置いてから観に来るようになっている。

まあ今回は戸塚の誘いだし仕方あるまい。

てかそういや不本意ながら、一緒に来た奴の中に騒がしいのがいたな……。

戸部が他所様に迷惑を掛けていないかと不安になる。

その姿を探して視線を彷徨わせるが、隣に座る一色以外の姿が見えない。

戸部と葉山は居なくても、むしろ居ない方がいいのだが、戸塚がいなのは非常に困る。

「つてあれ？ 戸塚は？」

俺がいうと、一色はどこか呆れたようにふっと短く息をはく。

「そこでみんなは？ つて言わないところが、先輩らしいですね。」

て、話聞いてなかったんですか？ 混んでて五人まとめて座れないから、ばらけて座るって言ってたじゃないですか」

言つてたか？ そういや言つてたな。葉山の言葉だから右に左に聞き流してたわ。

「んじゃちよと葉山探して席替わるから、待つてろ」

「へ？ なんでですか？」

「いやだつてそのために、葉山を呼んだんだろ？」

「違いますよ！ 先輩のために呼んだんですよ！」

「え？ そうなの？」

「ですよー。三人だと一人ぼっちになちやうつて言うから、それですよ？」

まあ戸部先輩まで来ちやつたのは、誤算でしたけど」

一色は言うのと、悔しげに爪を噛む。

いや、そんな嫌がらんでも。戸部つて割といいやつだよ？ うざいけど。

「そうか……。なんか悪かつたな、誤解してたわ」

素直に謝ると、一色は戸惑つた表情を顔に浮かべた。

「やつ、まあいいですけどね。その……」

一色は慌てたように言うのと、なにやら聞きたそうにこちらを見てくる。

なんかあるのだろうかと言葉の続きを待っていると、一色はどこか硬い表情で口を開



く。

「前から聞きたかったんですけど、先輩の私の第一印象ってどんな感じでした？」

「聞きたいのか？ 悪口になるぞ？ つーかそれよりなにより先に、

お前の俺の第一印象はどうだったんだよ？」

「言っていいんですか？ 悪口になりますよ？」

一色は言うのと、くすくす笑う。その笑顔に釣られ俺も笑ってしまう。

怒るに怒れん。お互い様過ぎて。

「まあでもこうやって話してみないと、人ってわからないですよね」

一色の言葉に「まったくくだ」と答え、こみ上げる笑みを抑えていると、館内の照明が

落ちる。

そしてスクリーンに明かりがともり、「君の名は。」が始まった。

## 教育の敗北を感じる

暗がりの中、薄明かりに照らされた男の子の顔は、どうしてこうも魅力的にみえるんだらう？

映画の上映中、スクリーンと先輩の横顔を交互に見ながら、私はそんな事を考えていた。

自分もそういう風に見えるといいなーと思い、こつちを見ないかなーと先輩を窺ってみる。

でも先輩は真剣な表情でスクリーンを見つめるばかり。

それを少し残念に思いながらもこうやって二人並んで映画を観れる事を、私は嬉しく思う。

×  
×  
×

が、映画も終わり喉も渴いたからと近くのカフェに向かう途中で、そんな気持ちも冷めてしまう。

なぜなら先輩が映画館を出てからこつち、ずっとヒロインの三葉ちゃんを褒めまくるからだ。

やれ、あの可愛さは国宝級だとか、お前も少しは三葉を見習えだのと言ってくる。

うんざりしつつ「はあ」とか「まあ」とか適当に返事を返していると、カフェに到着。注文を済ませ席に着くが、先輩はここでもまた三葉ちゃんを褒めまくる。

「いやー、でもほんと可愛かったなあ……。絵に描いたような美少女っていうのか、あー  
いうの」

「絵ですよ」

私が言うのと、先輩は嫌な顔をした。

「いやまあ、絵だけどさあ……。お前そんな、悲しいこと言うなよ……」

悲しいのはこつちですよ。私のトキメキ、返して欲しい。

むっとした顔の私を見て、先輩はさらにあれこれ言ってくる。

「おお、怖い。なんだよ、怖い顔して……。なんか怒ってんのか？」

「別に怒ってませんよ」

「ええ、その顔で？　嘘だろ……。そんな怒った猫みたいな顔してるのに？」

「そうさせてるのはあなたでしように。なんだろう。すごーく、憎たらしい」

「してませんよ、そんな顔！」

「そうかなあ？　してると思うけど……」。

あつ、もしかしてあれか？　俺が三葉ばつか褒めてるからか？

でもな、一色。お前にもいいところはあろぞ？　どこ？　つて聞かれると困るが、一応ある」

「こ、この人は……。アンタに怒ってんのよ!!　と、がるるつと唸って威嚇していると、

私たちのやり取りを微笑んで眺めていた葉山先輩が興味深げに尋ねてきた。

「すごいや比企谷というはって勉強会やってるよな？　どんな感じなんだ」

葉山先輩の問いに、私より先に先輩が応える。

「一色は教えるのが上手いぞ。すごくわかり易くて助かってる」

「あら、割と高評価？」　と思つたら、余計な一言を足してくる。

「まあかなり意地の悪い問題とか、出してくるけどな。困ったもんだ」

先輩は言うことやれやれとばかりに、これみよがしなため息をつく。

ほほーん。言ってくれますね、この人。

些かカチンときた私はお返しとばかりに、先輩と似たような事を口にする。

「先輩すごく丁寧に教えてくれてますよ。でもですね、これって受験の役に立つのかなーって  
思ったりもします」

言つて、ちろつと先輩を見る。先輩は軽い調子で返してきた。

「まあ俺が教えてるのは、受験とあんま関係ねーしな」

へ？ そうなの？ じゃ、じゃあ、今までやってたのつて一体……。

驚いた顔の私を見て、先輩は話を続ける。

「あのなあ、一色。そもそも一ヶ月そこいらで、学力なんて上がらねーんだよ。

それに受験で使えるテクニックなんて、大してないんだよな」

「基礎の文法覚えたら後はひたすら読む。わからない単語があつたら調べる。

洋画を字幕で見まくつて発音に慣れる。それをえんえん繰り返す。

これはまあ英語だが、国語も似たようなもんだしな」

「じゃあ八幡は、一色さんにどんな事を教えているの？」

それまで黙つて聞いていた戸塚先輩が、不思議そうに尋ねる。

「俺が一色に教えてるのは、読み書き算盤だな。まあ正確には、読みと書きだけだが」

「読み書き算盤……」

呟いた戸塚先輩に頷きを返し、先輩はさらに話を続ける。

「実際、読み書きそろばんとは良く言ったもんだと思う。」

漢字をきちんと読める。字が綺麗に書ける。ある程度の四則計算がスラスラ解ける。

この3つがクリア出来ていれば何やつてもそれなりの所まではいける。

逆にこれが出来なければ、何も出来ないし何処へもいけないという事になる」

「んで一色の場合、字は綺麗だし計算なんかは俺よりもずっと得意な訳だ。」

ただ本を読まないのもあって、言葉を知らなかつたり誤用が多いように思う。

でなつて、そういや一色。お前俺が教えたこと、全部書いてたよな？」

「えっと、はい。ちよつと待つてくさいね。全部ノートにとつてあります」

答えつつ、鞆からノートを取り出す。先輩から教わつた事は全部、ノートに書き込んで

いるのだ。

えーつと、と言いながらページをめくる。目当てのものを見つけると、それを読み上

げる。

「小学生向けでも中学生向けでもいいから、辞書を買つてきて読めばいい。」

覚えるんじゃないぞ。読むの。

世の中にはどういう言葉があつて、どういう意味でつていうのを、読むだけでいい。

覚えるのはそのうち必要になつたら覚えるからあんまり意識しなくていい。

一度でも頭の中に言葉が入ったかどうかたぶん重要で、必要になったら割と出てくるから、心配しなくていい」

読み終わると先輩を見る。先輩はうむつと頷く。

こうやってメモを取ることは、私が先輩に褒められた数少ないことのひとつ。

先輩がお父さんから聞いた話では、最近の新入社員はメモをスマホで書いたり写メで済ますらしい。

手軽でいいですよね？と私が言うと、手軽だから気軽に忘れる、とのこと。

「人間の脳はそれほど優秀じゃないからな。俺もパソコン使って書いてばかりいるからか、

漢字書けなくなってきた。だからまあ手書きが一番かもしれない」

とも言っていた。

「なるほど」

葉山先輩は呟くと、他にはどんな事を教えてるんだ？と尋ねる。

それに応えて先輩は、さらに話を続ける。

「二色は字は綺麗なんだがそれを使って文章を作るのが苦手っぽい。なんで、それをだな」

「つつても、何を書いていいかわからねーだろ？」

だからとにかく日々考えてること感じてることを文字に起こしてみろって言ってる」「そうやって書く事に慣れてきたら、今度は綺麗な文章を書けるようにする」

「具体的に言うとな、誰にも見せないけど誰かに伝える事を想定して慎重に言葉を選んで文を完成させるようにすること。そうすると咄嗟の時にそれが出てくるようになるしな」

「それってなんか意味あるん？」

「これは戸部先輩の言葉。」

「そりゃ社会に出れば今みたいにな、同じ年、似たような感性の人間とばかり付き合うことができなくなるからだろ？ 言葉づかいはすごく重要になる。」

会社に入れば目上の人間と書面でやり取りすることもあるし。

そういう中でやっていくのに必要な事を、比企谷はいろはに教えてるんだと思う」

「まあそんなとこだ」

フォローに入る葉山先輩。先輩も苦笑しながらそれに応える。

「実際もの知らない奴は知ってる人間から、侮られるし、馬鹿にもされる。」

軽く見られ、上手く使われ、どうでもいい扱いを受けると思う」

「マジかー！」

先輩の言葉に、戸部先輩はわかってるんだかわかってないんだか



よくわからないことを口にする。

この人を見てみると、教育の敗北を感じる。

「なんていうか、ちゃんと教えてるんだな」

感心したように葉山先輩が言うと、先輩は照れくさそうに頭をガシガシする。

「一色はきちんと真面目に俺の話を聞いてくれるしな。頑張ってるし努力もしてる。

なら俺もそうしてやるのが、筋つてもんだろ」

そんな風に言われると困ってしまう。恥ずかしくて顔も見れなくなってしまった。

どこを見ればいいのか迷い窓の外に目をやれば、外はもう大分、暗くなってきていた。

## 戸部論

困り顔で窓の外に目をやる一色を見て、言葉が足りなかったように思う。

ので、その横顔に話しかける。

「えつとな、一色。さっきは受験の役に立たんと言ったが、あまりであつて全くではないぞ」

ほんの少し表情を明るくし、一色がこちらを見る。ほつとしつつ、言葉が続ける。

「例えば小論文試験なんかは、きちんとした文章が書けるといふのが重要な事だしな」

言つた瞬間、一色は表情を暗くし肩をガクツと落とす。

なぜか戸塚も戸部も同じように肩を落としている。

そして三人が三人とも「論文苦手」「そもそも文章が苦手」「感想文も苦手だった」などど

口々に愚痴り出す。

「まあ一色も本を読むようになってきたし、感想文書いて文章に慣れていきやいいだろ」

言つてはみたものの、一色の表情は暗いままだった。

「まあそうなんですけど……。でもなにを書いたらいいかわからないですよね」

一色は言うのと、ちろつと上目遣いで俺を見てくる。

ふむ。これはアドバイスを求められているな。

仕方がない。俺はお前にもらえなかったが、俺は与えてやろうじゃないか。

「いいか、一色。喜怒哀楽は誰にでもある。感想もそこにある。

ただ一色の場合、自分の思ったことを文章にすることに慣れてないだけだと思う。

だから取り敢えず、思ったまま感じたまま書けばいいんじゃないか」

さらに言ってみたものもその表情は晴れず、むしろ困り顔になる。

「でもお、変なこと書いたら笑われないかなって……」

一色は言うのと、また俺をちろつと見てくる。

これ以上のアドバイスは料金が発生してもおかしくない。

が、俺は優しいので無料で教えてあげる。

「感想は意見じゃなく主観だから、別に変な物であつてもいいんだよ。

そもそも物事への感じ方は個人個人で違う訳だし。変だっていう方が変な話だ。

まあそうは言っても、何か凄い映像を見て「ヤバイ、ヤバイ、ちよーヤバイ」って言

う奴と

同レベルの感想は、ちと困るな」

俺の言葉に、皆が一齐に戸部を見る。

皆の視線を受けた戸部はなぜか頬を染め「ヤバくね！」と口にする。ヤバイね。

戸部はどうでもいいので何事もなかったように話を続けることにした。

「それでな、思ったこと感じたことを文章化するのにはセンスがいるんだよ。

センスのある奴は何もしなくても書けるけど、無い奴はそれを補うメソッドを覚える必要がある。

一色がさつき口にした読書感想文の問題は、センスが無い奴への十分な仕込みをしな  
いまま

家で書いてこいよーって宿題にして丸投げしてること」

「これで書けない。文章を書くの苦手。苦手だから書くのを避けてますます感情を文章化する

メソッドが身につかない。そんな負のスパイラルがスタートしちまう」

「先輩はその、どうでした？」

「俺か？俺もまあ子供の頃から本はよく読んでいるが、感想文というのは苦手だったぞ。

なんつーか食事と同じで、読んでる最中は何も考えず夢中で味わってるだけなんだよな。

だから感想なんて求められてもせいぜい「面白かった」としか答えようがないんだよ。何か料理を食わされてその感想を求められても、「おいしい」としか答えられないのと同じで」

「なんで最初のうちは、アマゾンでもなんでもいいから他人のレビューを読んでみる。文章が上手い人もいれば下手な人もいるから、そのどちらとも参考にして、自分でも書いてみる。」

「そうやって書いていけば、徐々に読める文章から読ませる文章が書けるようになると思う」

「そこまで言うと、烏龍茶に口をつける。」

喉を潤していると、戸部が目を丸くしてこつちを見ていることに気付く。

「なんだよ?と視線で問うと、戸部はニツと笑って応えた。」

「つーか、ヒキタ二君。普通に喋れるじゃん!」

「いや、喋れるぞ? こいつ俺をなんだと思ってたんだ。」

「まあ結局は慣れだよな」

葉山が上手くくめると、俺に向かってにっこり微笑む。

「順序立ててやってるんだな」

「急に論文だと難易度高いからな。少しずつちよつとずつ、やってる」

「そうか」

葉山はいうと、なんか優しい目で俺を見てくる。

なんだよ……とジト目で対抗していると、戸部が不貞腐れた顔で口を開く。

「そもそもさー、小論文なんかいらなくね？」

戸部は言うと、「なっ」「なっ」と皆に同意を求めだす。

俺らが全くだ！と同意しても無くならんと思うがと呆れていると、戸部の心の友、葉山が

優しく諭すように言う。

「えつとな、戸部。小論文試験には大学で学ぶために必要な能力があるのかどうか

見極める目的があるらしいよ」

葉山の言葉に、戸部は理解出来てないのがまるわかりのきよとんとした表情を浮かべる。

女の子がきよとんとすると可愛いのに男がすると殴りたくなるのはなぜだろう？と

そんな事を考えていると、葉山が頑張つて説明を始める。大変だな！

「言い換えると、応募する大学の学部・学科で学ぶために必要な知識、理解力、分析力、構想力、表現力があるのかどうかの判定資料ということ。

だから俺たちは「自分こそがこの大学・学部・学科に入るべき受験生である」とアピールする必要があるんだと思う」

葉山の説明を聞いた戸部は、「それな!」と「どれだよ」と突っ込みたくなることを言う。

必要性は認めたようだが、それでやる気が湧くかは別物。

その証拠に「でもめんどくせ〜」とブツブツ呟く。

まあ自分の選択した人生で文句を言う先は自分だし、好きにすればいいと思う。努力しないというのも、一つの選択肢ではある訳で。

何かの幸運でそんな奴を拾っていい目を見せてくれる可能性もゼロではない。

それを待つより努力して自分から望むものに手を伸ばした方が簡単で早いと思うが、無理かもしれないし無駄かもしれないのでそうしろとはいえない。

思いつつも困り顔の葉山を目にすると、少しは助けてやるかという気持ちになる。これがめぐりん効果かなどと考えながら、戸部に話しかける。

「まあ戸部もどんな手を使ったか知らんが、ウチの高校には入れた訳だ。

そんな、奇跡も魔法もあることを体現したお前なら、やればできんじゃねーか?」

「ヒキタニくん、そう思うん?」

なぜか嬉しそうなキラキラした顔で戸部が聞いてくる。

割と酷いことを言つたつもりだったが、戸部は気づかなかつたようだ。「まあうん。わかんねーけど」

適当に返事を返すと、これまたなぜか戸部のやる気に火を点けたようだ。

「ありがとな、ヒキタ二くん」とお札を言われ、二カつといい笑顔を見せてくる。こう見ると、やっぱ素直な奴なんだなとは思う。

思うのだが、取り敢えずお前は俺の名前をちゃんと覚えてくれ。

じゃないと札を言われても素直に喜べん。

まあ、個性は欠点からしか生まれない。という言葉もある。

戸部のこのうつとおしさも煩さも、戸部を形作る大切な要素のひとつひとつと考えれば

許せなくもない。

実際、無口で静かな戸部とか、戸部であつて戸部ではないだろう。

そんなどうでもいい戸部論を考えつつ席を立つと、「そろそろ帰るわ」と皆に告げた。



## 失敗が多いのは

モノレールに揺られ家路に着く。隣には先輩が居てくれている。

電車の窓に映る自分たちの姿をぼーっと眺めながら、本当に今日、葉山先輩に来てもらって

良かったなと思う。

そのおかげで映画館では、先輩と二人きりにしてもらえたり、今もこうして先輩に、家まで送ってもらえている。

もともと私は駅で、先輩方ときよならするつもりでいた。

そしたら葉山先輩が「もう暗いし、いろはのこと送ってやれ」と先輩に言ってくれた。ナイスです！葉山先輩、と心の中で喝采を送っていると、先輩の方は全然ナイスじゃ

無い事を口にする。

「いや俺は家に帰って、政宗くんのリベンジ、観ないといけなくってな」

ええ……。私よりアニメ優先？　なんかさつきから、二次元に負けているような気がする。

てか誰よ、政宗くんって。

呆れてしらつとした目で先輩を見る葉山先輩と私。

その視線を受けた先輩は少々狼狽えた様子をみせていたが、ひとつ咳払いして気を取り直すと

葉山先輩をずびしつと指さす。

「つーか、葉山。お前が送つてやれよ」

先輩は言うど、なあ？とばかりにこちらに顔を向けてきた。

好きな人は葉山先輩、という事にしてある手前、なんと応えれば良いのかと困つていと、

葉山先輩が苦笑しつつ先輩の胸をぼんつと叩く。

そして「いろはに世話になってるんだろ？」と言うと、他の先輩達とともに、その場から

立ち去ってしまった。

残された私たちは顔を見合わせ、どうしたものかと困つていたが、しばらくすると先輩が

「帰るか」といつてくれたので、私は「はい」と答える。そうして、今に至る。

これは私も葉山先輩とはるさん先輩が上手くいくように、なんか手伝わないとだなあ  
……。

などと考えていると、私の名前を呼ぶ先輩の声が聞こえた。

「一色、お前さあ……。せつかく葉山と二人になれるよう俺が悪役引き受けたのに、ダメだろ、あれじゃ」

ほんとかなあ……。単にアニメを観たかっただけにしか、見えなかったんだけど。疑念を抱きつつも、こうやって家まで送ってくれているのも、また事実な訳で。

なら素直にお礼を言うべきかな?と考え、しおらしいことを口にしてみる。

「やつ、その……。気を使ってもらったのに、すいません」

「えっ、あー、うん。それはまあ、いいんだが……」

普段とは違う殊勝な態度の私に、先輩は戸惑った様子。効いてる効いてる。

ふむ。いつもはどうしても売り言葉に買い言葉になって、いい雰囲気になれずじま  
い。

ここはひとつ路線を変更して、いじらしさを前面に押し出す方がいいのかも知れな  
い。

と企てた私はさっそく実行に移す。

「最近その、物騒な事件も多いですし、こうやって送ってもらえて嬉しいです」  
言うのと、にっこりと微笑む。

微笑みを受けた先輩は頬を赤らめ、困ったように顔を逸らす。

効いた。てか効きすぎ。いけるね、これ！

確かな手応えを感じ先輩に見えないようガッツポーズを取っていると、先輩がそれまでと違い

心配げな声を出す。

「つーか、お前、大丈夫なのか？ サッカー部の方」

サッカー部？ なんのことだろ？

はて？と首を捻っていると、先輩は呆れたように私を見てくる。

「いや、顧問の方針に逆らうようなこととしてさ」

ああ、なるほど。まあそう思うよね。

「えっとですね、大丈夫ですよ？ 上手くやりましたから」

言つて、事の経緯を先輩に説明する。

今回の件は、顧問の善意から始まったこと。

だからこそ、優遇されてる部員もそれは不味いと口に出せなかつたこと。

その事を他の部にも伝え、事を荒立てないようお願いしたこと。

そもその原因は、グラウンドが狭いのが問題だったこと。

なので生徒会の方で市役所に赴き、市営グラウンドの使用の許可を貰えるよう頑張つ

たこと。

そのおかげでより多く練習したい部は、そららに足を運ぶようお膳立てができたこと。

ただ各部の部長は三年生が多く、二年の私が出しやばるとあまりいい顔をされないと  
いうことで

副会長が各部の調整にあたったこと。

それらの事を順序よく先輩に伝えると、話を聞いた先輩は感心した声で褒めてくれた。  
た。

「なんかお前、すごいな。やることやってるっーか」

「やつ、生徒会のみんなで話し合って、そうしてるだけなんですけど」

「そうは言っても、なかなかできないと思うぞ？ 市役所までいくとか」

「そういう事出来たのは、先輩のおかげなんですよ？」

「へ？ 俺？」

驚いた様子で、目を丸くする先輩。

あー、自覚ないんだなあと思いつつ、話を続ける。

「去年、クリスマスイベントあったじゃないですか？」

「あ、ああ……」

「それですね、イベントに来てくれた人たちからのお褒めの電話が、学校に何件も掛

かつてきたらしいんです。楽しかったとか、またやって欲しいとか、そういうのが。そういう実績？みたいなものがあつたんで、学校の方も協力してくれまして。

市役所に行く時も、平塚先生がついて来てくれたりとか」

「なるほど……」

「なので本当に、先輩には感謝してるんです」

いじらしさをさらにチャージ！倍率ドン！とばかりに、ぐいぐい試してみる。

まあ本当に先輩には感謝している訳で、嘘はいつてない。

いつか伝えないとだなって考えていたので、丁度良かったように思う。

私の言葉に、先輩は照れくさそうに頭をガシガシしながら、

「別に俺だけじゃねーだろ」と口にする。

こういう所がほんと、この人らしいなあと、頬が緩んでしまう。

「それはまあ、そうですけどね。でも先輩のおかげな部分も、ちゃんとありますよ」

「そうか……。まあ、うん、なら良かった」

「はい」

しばし沈黙のあと、先輩が思い出したように口を開く。

「そーいや最近、奉仕部に頼ってこねーし、上手くやってんだな」

「こーこで「はい」と言えればいいのだけれど、そうでもないんだよなあ」とため息が出て

しまう。

それを聞きとがめた先輩が、心配げに聞いてくる。

「なんかあんのか？」

「ウチの学校、生徒数多いじゃないですか？　なんでそれなりに色々……」

いやホント、あれをすれば「そんなことよりこつちをどうにかしろ」と言われ、こつちをやれば

「それやってる暇があつたらあつちをやれ」と何をやっても茶々を入れられる始末。

やればやったで、「もつと早くそうしろ」だの「要領が悪い」だのと言われることも多い。

「私、仕事できませんし、仕方ないんですけどね」

などといった、愚痴をこぼしてしまう。

すると、黙って私の話を聞いてくれていた先輩が、ゆっくりと優しい声を出す。

「失敗が多いのは行動してる証拠だろ？」

お前に文句を言う奴らがどれだけ大層な事してるか知らんが、だからつてそういう事を

言つていい理由にはならないと思う」

「実際、何かをこなしてる人間は、他人に対してケチを付ける様な事をしないとと思う。

そんな暇ないし、何かをこなす大変さを知っているからな。

ただ、こうした方がいいんじゃない？ってアドバイスを、言ってくれたりするから、そういう優しい人の言葉には、耳を傾けたほうがいいと思うぞ」

「でだ、只々文句をいうだけの口だけの奴らは、何も出来ない自分への鬱憤を、お前にぶつけてるだけだと思う。」

そんな奴らの言うことを真に受けて、気に病んだりする必要なんか、全くない」

「ただまあ、その手の奴らはどこにでもいるからなあ……。」

「そうだ、一色。もしなんか困った事があつたら、遠慮せずに言えよ」

ホント困る。普段は邪険に扱うくせに、なんでこうピンポイントに優しくするのは、この人。

涙で滲みそうな目をこすり、嬉しさに震える声で「有難うございます」と応えるのが、私の精一杯だった。



## 廻り巡って

先輩の声はいつも通り、ぼそぼそとした低い声だったけれど、その中にほんの少し怒りが混じっているのがわかる。

それでは、ああ、この人、自分のために怒ってくれてるんだなと気付き、嬉しくなる。

家族以外でそんな人、今まで一人だっていなかったから。

私に好意を寄せてきた男の子たちも口では耳触りの良いことを言うけれど、結局は口だけだったような気がする。

「何かあったら言ってみな」 「困ってたら助けるよ」と言って、確かに手助けしてくれた事もあつたけど、それはそうしても周囲から敵視されず損にならない状況でだけだったと思ふ。

例えば重い荷物を運ぶとき、手を貸してくれるなど。

そして本当に私が困っている時には、顔も目も背けるのだ。

クラスの女子が結託し、私を生徒会長に無理やり立候補させたとき、それを知ったク

ラスの男子は

口々にこう言った。

「酷いことするよね。許せないよ。でも安心して、俺は（だけは）一色さんの味方だからね」と。

でも結局、誰も助けられなかった。

担任の「一色の応援演説、やる奴いねーのかー！」の声に、口を閉ざし、目を背け、顔を逸らし、

気まづげにしているか、自分には関係ないとばかりに、くすくすと笑っているだけだった。

そんな彼らを苦々しく思いながらも、責めることは出来ない。

私自身彼らの立場なら、きつと同じことしかないからだ。

まあ期待させるような事は言わず、笑ったりなんかはしないけれど。

そしてなによりシヨックだったのは、その程度の人間にしか好意を寄せられない自分であつたり、

そんな薄っぺらな好意に喜び、それを与えられる事で得意になっていた自分にだつた。

こぼれでそうなため息を抑え、そういえば……、と先輩に目を向ける。

あの時からずっと私を助けてくれたのって、この人なんだよなあと、しげしげと先輩を見つめる。

× × ×

モノレールを降り駅から出ると、一色の家へと向かう。

二人並んでてこてこ歩いていると、なにやら視線を感じる。

ふむ……またか……。そう、それは別に今に始まった事ではない。

今日に限らず一色を駅まで送り迎えする道中で、日々感じてる事だ。

「なんでこんな奴が、こんな可愛い子連れてんだ？」てな感じの胡乱げな視線の数々。

まあ気持ちは分かる。こんな目の腐った男が一色のような美少女と連れだって歩いている。

そんなの見たら俺だつて「いくら払ったんだろう？」と思うからだ。

実際、こんな青春登下校を繰り返してたら、トラックやカローラに突っ込まれてもお

かしくない。

ちなみにそんな青春登下校が出来なかった親父が、その手のサービスをするサイトを覗いていたら母親にバレてスゴク怒られていたのは、俺のメモリアルの素敵な一ページだったりする。

ついでいうとこの前も親父は、その手のサイトを覗いていた。全く懲りてなくて笑うしかない。

とそこで、それまでとは違いすぐ間近、至近距離で視線を感じた。

「すわっ、敵襲か！ 具足をもて！ 皆の者、いくさでござる！」と真田丸ばりの険しい表情で、

そちらに目を向ける。

すると、まじまじと俺を見つめる一色と目が合った。

俺の顔を見た一色は、ビクツとする。つられて俺も、ビクツとする。

一色のその怯えた表情を見るに、どうやら俺には堺雅○ばりの演技の才能があるらしい。

などとどーでもいいことを考えていると、気を取り直した一色が、先程よりもじーつと、

俺を見てくる。

「…………え、なに?」

あんまり見られるので聞いてみると、一色はひどく緊張した面持ちで口を開く。「えっと、その……。あのですね。ずっと私、先輩に伝えたい事があったんです」

一色は言うのと、潤んだ瞳で俺を見上げる。

きゅっと制服の胸元で握りしめた手は微かに震えており、その吐息は熱っぽい。

これがもし少女漫画だったら、「ドキッ……」だの「トクン……」などと、太文字が出てきても

おかしくないレベル。

も、もも、もしや告白か!?などと考え、ドギマギしていると、一色がぺこりと頭を下げる。

そして頭をさげたままゆっくりと、言葉を紡ぐ。

「私が困っている時、いつも助けてくれて、ありがとうございます」

あ、違った。まあそれでも、困るんだけど。

「あー、いや、礼を言われるような事、なんもしてねーよ。つーかお前、顔を上げろよ」俺の言葉に、顔上げた一色のその表情を見て言葉足らずを感じ、少しだけ言葉を継ぎ足す。

「助けたって言える程のこと、実際、してやれてねーしな。」

もつところ、上手いやり方があつたんじゃねーのかなって、なんだその、思つたり」俺が言うのと、一色はくすつと笑う。

「失敗が多いのは行動してゐる証拠つて、先輩が言つたんじゃないですか？」  
「お、おう。確かに……」

「それにですよ？　口先だけじゃなくきちんとしてくれたのは、先輩だけです。」

それで私は先輩に、ほんとうに感謝しています」

一色は言うのと、また丁寧な頭を下げる。

一色のその言葉は嬉しい。それゆえに、胸が痛む。

俺は一色に感謝されるような、そんな大層な人間ではないのだ。

事実、奉仕部に入る前の俺は、ずっと何もしてこなかった。

誰にも期待されず自分でさえも自分に期待できず、そんな自分が何かをするなんてと、

それを言い訳にして何もしてこなかった。

皆でやることだけが素晴らしいことじゃない、一人でやつたつていいはずだと言いな  
がら、

一人だつた時はいつも何もしてこなかった。

自分と同じくもがき苦しむものを、目にしなかつた訳でも無いというのに。

そんな俺が一色の言うように、誰かの為にと動くことが出来るようになったとするならば、

それはまず間違いなく、平塚先生のおかげだろう。

先生はそんな屁理屈ばかりこね無気力な俺を見かね、奉仕部へといざなってくれた。自らの職を失う危険を顧みず体罰を行使してでも、俺のタメになると考え、人と接する機会を俺に与えてくれた。

自分だけが悩みトラウマを抱えていると、それを理由に迷ってばかりの俺を、時には優しく、時には厳しく、たまに拳で、励ましてくれた。

そうやって文字通り、先に生きる大人として、俺の事を慮ってくれた。

まあ世の中には先生のやり方に、異論を唱える者もいるかもしれない。暴力的だとか強制的だとか大きなお世話だのと。

俺もそう思う。むしろ激しく同意する。同意はする、が。

実際よく言われるように幸福なんて主観だし、それがその人にとって良い事かどうかなんて

わからないというのは、本当に正論だと思う。

でも、皆がそれを貫徹すると救済なんて殆ど行われなくなる。

とするならば、本人が望んでなくとも大きなお世話でも、そうしてやる事って

それはそれで大切だと、これまでの自分を省みて実感する。

良いかどうかわからないから放つとくのがいいというのは、自己責任という名の放逐。

無限後退と死にしか繋がらない。

まあそう感じるのも、俺の主観とエゴでしかないのだけれども。

そんな事をつらつら考えながら、一色に言うべきことを整理し、言葉を紡ぐ。

×  
×  
×

顔を上げてくれと先輩に言われ、顔を上げる。

先輩は甚く生真面目な顔で私の目をじっと見つめる。

そしてゆっくりと、優しい声でいう。

「俺がしたこと、一色が感謝してくれてるのなら、俺は嬉しい」

その言葉に、胸が温かくなる。そして、だからこそ辛い。

「でもその、なんのお返しも出来ないんですけどね……」



言つて、俯いてしまう。

「實際私が出来ることでは先輩に喜んでもらえることつて、殆どない訳で。

数学ならと思つたけど、あれも結局、傍にいたいっていう、私のタメのものだし。

そんな気持ちでしよげていると、先輩の声が耳に届く。

「ならな、一色。もしお前がこれから先、困っている人や苦しんでいる人を見かけたら、

その人のことをな、出来る範囲でいいから、助けてやれ。

そうしてくれると、俺もお前に手を貸した甲斐があるつてもんだしな」

先輩は言うど、とても柔い笑顔を見せてくれた。

その笑顔につられ私も微笑むと、「はい」と返事を返し、また歩き出す。

しばらく歩くと、我が家に到着。

送つてくれたお礼を伝えると、先輩はうむつと頷く。

そして「またな」と言つて、来た道を引き返してゆく。

遠ざかる先輩の後ろ姿を目で追いながら、私は希う。

先輩の優しさが、廻り巡って先輩に、帰つてきますようにと。

## 小町の知らない世界

「じゃあ、めぐりさん。明日、学校からそのままめぐりさんの家に、向かえばいいんですよね？」

『うんうん』

「でも、夏祭り行くんですよね？　じゃあ、着替えもつていきますね」

『あつ、いいよー、制服で。うーんと、その……。うん、大丈夫！そのまま平気だよ』

えつ、いいの？　お祭りでせつかくなのと前に褒めてくれたのもあつたから、

この前とは柄違いの甚平、もつていこうと思つてたんだが……

まあ、俺の格好なんか誰も気にしないだろうし、いいのか。でもちよつと悲しい。

「分かりました。じゃあ——」

× × ×

一色を送った帰り道、その途中、めぐり先輩から電話が掛かってきた。

スマホ片手に話をしながら、家路に着く。会話の大半は、明日二人で行く夏祭りのこと。

「金魚掬いが好き！」というめぐり先輩。たが先輩は、これまで一度も掬えたことはないらしい。

『ポイがさ、もろすぎるんだよね！ もつとこう頑丈なのにしなないとだよ』

「いや……。それじゃ全部掬われちゃって、商売にならないからじゃ」

『そうだけどさー』

めぐり先輩が不満げな声を出す。

その声を聞くと、ぷくつと頬を膨らませていた先輩の顔が思い出され、頬が緩む。

顔見たいなあ……なんて、思ってしまう。

「でも掬えなかった場合でも、一匹金魚、もらえるじゃないですか？参加賞みたいな感じで」

『うんうん。でもそれって、かわいそうでしょ？ 今までたくさんのお友達といたのに、

一人ぼっちになっちゃうし』

一人ぼっちはかわいそうか……。

これまでの自分を振り返り、そういう目で見られてたのかと、そんな卑屈なことを考

えてしまう。

『だからね、寂しくないように、二匹は掬ってあげたいの』

その言葉に、嬉しくなる。笑みがこぼれる。

俺は、一人が好きだし一人でも平気だ。それでもやはり、一人のままは寂しいと思う。だから、一人の俺に手を伸ばし掬いあげてくれた先輩に感謝してる。

なので少しでもそのお返しをと考え、声を出す。

「そんなときは俺も掬いますよ。そうすれば二匹になつて、番になりますし」

いうと、めぐり先輩は嬉しそうに笑ってくれた。

ちゃんとお返しできたこと。それでまた嬉しくなる。

会話も弾み、話題も尽きない。ああ、楽しいなあ……。

そうやって夏祭りの話をしていると、懐かしい思い出が蘇る。

そう、夏祭りといえば中学時代、近所のお祭りに行ったら同級生の女子とすれ違った。特に挨拶も会話もなく単純にすれ違っただけなのだが、なぜか夏休み明けに

「あいつ私のストーカーしてる！」と言い触らされひどい目にあつたことがある。

うん。これは懐かしい思い出つか忌まわしい記憶だな。

まつ、そんな嫌な記憶なんぞ、明日のめぐりんとのでデートで消し去ってやるぜ！

などと思っていると、我が家に到着。

玄関で話しながら靴を脱いでいると、小町が二階から降りてきた。

「お兄ちゃん、おかえり〜」

「おう、ただいま」

「電話中？」

「あー、うん。なんか用か？」

振りかえり小町に尋ねる。と、受話器の向こうからめぐり先輩の声が聞こえた。

『八幡くん。家に着いたなら、電話切ろうか？』

「えっその、まだ俺、全然話し足りないんですけど……」

『~~~~~つつつ!!』

「お兄ちゃんがやり手になってる……」

いやいや、何言ってるの小町ちゃん。お兄ちゃんはまだまだピチピチのチェリーよ？

『八幡くん待ってるから、小町ちゃんのお話、聞いてあげて』

「あつ、はい。すいません」

『はーい、ごゆっくり〜』

めぐり先輩の許しを得たので、小町に視線で話を促す。

小町はなにやら恥ずかしげな様子で、もじもじしながら声を出す。

「んとね、お兄ちゃん。明日の夏祭り、一緒にいかない？」

おいおいどうするよ？ 妹からのデートのお誘いだぜー！

高校に入学してからこっち、そろそろお兄ちゃんには妹離れしてもらわないと、とか言っ  
て、

俺に冷たかったのに。

ははん、小町はきつと、八幡不足に陥ってしまったんだな。

気持ち分かる。俺もここ最近、小町不足を感じていたし。

云うならば、お薬頂戴状態な訳だ。

とまあそれならここで兄の大切さを再認識させ——と、ちよつと待て？

さすがに妹同伴でデートとか、不味くないか？ いくらここが千葉とはいえ。

っーか、どう考えても不味いよな。

仕方ない。ここは涙を飲んで小町とのデートは断るか。くうく辛い、辛いよお。

「わりの、小町。明日はめぐりさんと行くんだわ」

「そかあ……」

俺の言葉に、小町は肩を落とし、がっかりした声をだす。

これはいかん！ 比企谷家の太陽に翳りが！

ちよつとめぐり先輩に聞いてみようかしら。

まるでラノベから飛び出したような、そんな優しいめぐり先輩なら、案外OKかもし

れんし。

というわけで、めぐり先輩に聞いてみることにした。

「めぐりさん、ちよつといいですか？」

『なーに？』

「明日の夏祭り、妹も一緒にいいですかね？」

『……………』

返事がない。やっぱ不味いのか。

どうしよう……………と困っていると、めぐり先輩の声が聞こえた。

『ご、ごめんね。あの……………。嫌とかじゃないんだけど』

「や、なんかこう、すいません」

『違うの！そうじゃなくってね。その……………明日はね、二人がいいの、二人きりがいいと  
いうか、

二人じゃないとダメなの』

なんかスゴく、嬉しいこと言われてる。

「そ、そうですか」

『うん…。その、小町さんと代わってくれますか？』

言われたので、小町に代わる。

「小町です。城廻先輩、こんばんはー。え？ あー、はい、それがですね、えーと……」

小町は喋りながら、どんどん俺から離れていく。

仕方なく、話し終えたらスマホを部屋まで持つてくるよう小町に伝えると、二階へと上がった。

× × ×

いろは先輩からの依頼、夏祭りに兄を連れ出すというその依頼を達成するために、小町は頑張ろうとしたのだ。したのだが。

この前ウチに来たとき初めて見た城廻さんの印象は、ぽわつとした優しそうな人。その印象に違わず、小町にもフレンドリーに接してくれた。

そして今もそうしてくれているのだが……。

『だってね、酷いんだよ。八幡くん、なんにもしてくれないの。私、まってるのに』  
いやちよつと、フレンドリー過ぎません？

女の子同士とはいえ、あけすけというか、開けっ広げというか。



「そ、そうなんですか？」

『うん。まあ付き合ってるね、そんなに経ってないけどさ。』

それでもね、結構会ってるんだし、なにかあってもいいと思うでしょ？」

「ええ、まあ……」

『こつちからはさ、なんかこう、して欲しいって言いにくいし』

「ですよええ。はい、気持ちはわかります」

『だからね、明日は頑張ってみようと思うの。誘惑？っていうのかな？そういうのをし

てみようかなって』

「ゆ、誘惑ですか……」

『うんうん。それでね、今勉強中なの』

べつ、勉強?? どんなの??

聞きたいし聞いたら答えてくれそうだけど、聞くの怖いなあ。

それにしても城廻先輩って、真面目にやる気満々というか、真面目だからやる気があ

るというか。

なんて言えばいいんだろう、こういうの。

ていうか、お兄ちゃんもお兄ちゃんだよ！女の子を待たすなんて！

まあヘタレだし、仕方ないかなあ……って、ほんとうに全くなかったのかな？

中学の頃はお兄ちゃんって告白魔って影で呼ばれるくらい、いろんな子に告白してたのに。

それにまあ年頃なんだし、全然ってこともないような。

そう考えると気になってしまう。なので聞いてみることにした。

「兄からはそのく、なにかしていいですか？っていうのも、なかったんでしょうか？」

『ん？ あったよ』

あつたんだ!? えっ、あつたの？ で、どんなの？

気になったのでさらに聞いてみる。

「えっと、差し支えなければなんですけど……。兄はどんな感じのことを、その……、し

ようとしたんですかね？」

『んとね、付き合ってますぐに、キスされそうになって』

早い！ 早いなー、お兄ちゃん。早すぎだよ。

『でね、そんなときはまだダメ！ってして、今度ねっていったのね』

あー、それでブレーキ、かかっちゃったのかな？

「そうですよね、はやいですよね」

『うん、ちよつとね。別に嫌だった訳じゃないんだけど、こう、ね』

「はい」

『でもね、そしたら今度は、その今度がないの』

「なるほど」

なんか分かる。

準備万全じゃないから今は断ったのに、準備万全にしたら今度はこない。  
そういう感じかな。

『あとね。他にもあつてね』

おお、まだあるんだ。お兄ちゃん結構攻めて行くタイプなんだなあ……。

『抱っこするから膝に乗っておにぎり食べて欲しいって、お願いされたの。』

こう向かい合つてね、食べてって』

え？ おにぎり？ 抱っこで？ 向かい合つて？ んんん???

頭を疑問符で満たしながら、結局それからしばらく、小町はお兄ちゃんと城廻先輩の  
ノロケ話？を聞くことになる。

城廻先輩の声に耳を傾けながら、いろは先輩になんて言えばいいのだろうと、天井を  
見上げた。

## ある日

『という訳なんですよ。すいません、いろは先輩』

「やつ、そんな、全然だよー。ごめんね、小町ちゃん。面倒なこと、頼んじやつて」

『いえいえー、そんなそんな』

「でもほんと、ありがとう。……って、もう日が変わるね。ごめんね、こんな遅くまでじゃあ、そろそろ」

『はいです』

「うん、おやすみ」

『あ、えつと…』

「うん？」

『あの、無理な話しなんですけど……。元気出してくださいね』

「うん、大丈夫、ありがとう。それじゃあ、おやすみなさい」

『おやすみです』

電話が切れる。

ため息を吐き、窓の外に目をやる。

まあ予想はしてたけど、先輩、城廻先輩とお祭り行くんだ……。いいなあと思う。羨ましく感じる。城廻先輩ばかりずるいと、僻みっぽく考えてしまう。

まあ、城廻先輩、彼女だし、私はただの後輩だけれども。

それでもやっぱり、なんで自分じゃないんだろうと思ってしまう。

これでもし、城廻先輩を憎んだり嫌ったり出来るのならもう少し楽なのに……。

諦観と僻みと嫉妬と羨ましさの縋い交ぜな気分のまま、布団に横になる。

目を瞑る。すると瞼の裏に、城廻先輩の柔らかな笑顔が浮かんでくる。

そして、水道の蛇口から湧き出る水のように、昔の記憶が蘇ってきた。

× × ×

私が城廻先輩と初めて出会ったのは、秋も終わりかけ冬に入りそうな、風の冷たいそんなある日。

その時、私が抱いた城廻先輩の印象は、地味な女の子、というものだった。

ほわっとして優しげな人だなっと感じながらも、制服を校則通り着こなした化粧のないその姿に

なんか垢抜けない人だというのが私の抱いた感想だったと思う。

今回の件が片付けば二度と関わることもないだろうと、それ以上の関心を持たなかった気がする。

私は昔から同性と上手くいったためしがなく、特に年上の女性が苦手。

トイレに呼び出され、私の男にちよつかい出すなど威嚇された経験があるからかもしれない。

でも色々あつて、その後はより深く関わるようになる。

バイト代も出ないのに一生懸命頑張る他の生徒会メンバーを不思議な気持ちで眺めながら、

城廻先輩に仕事を教わる日々を過ごす。

慣れない書類仕事に手間取る私を、城廻先輩は嫌な顔ひとつせず励ましてくれ、上手くできれば嬉しそうに褒めてくれた。

なんだか懐かしい気分、小さい頃を思い出す。

テストで良い点が取れたとき母に褒めてもらおうと見せにいく、あの時と同じ気持ちといえば

良いのかな？ 実際、大人になっていくうちに、褒められることって少しずつ減っている訳で。

だから私は、私を褒めてくれ認めてくれる城廻先輩に好意を抱いていたと思う。

そして、そんな城廻先輩と一緒に帰ろうと誘われたときは、とても嬉しかった。

女の子同士で帰るなんて思い出す限り、小学校以来だし。

そうして、私は城廻先輩と一緒に帰るようになり、その道すがら色んな話を話すようになる。

将来の夢、過去の失敗話、今日昨日に起きたこと、好きなこと、苦手なこと、

そして年頃の女の子らしく、恋のことを。

あれこれ話を聞いてみると、城廻先輩は二十三歳までに結婚したいらしい。

ひいおばあちゃんもおばあちゃんも、そしてお母さんも、その年で結婚したらしく、

だから自分もその年までに結婚したいと、照れくさそうに口にした。

頬を赤らめ、恥ずかしげにはにかむ城廻先輩を見て、なんかいいなーと思っていた。

私には城廻先輩のように結婚に対して憧れる気持ちはないけれど、そんなふうに結婚したいと

思える感情のような部分には、すごく憧れを感じる。

だから尋ねてみた。そういうお相手がいるんですかと。

そしたらなんと城廻先輩は、まだ一度もデートをした事もお付き合いをした事も無いというのだ。

いやあなた、まず相手を見つけないと……と呆れつつも、ちよつと意外に思った。モテまくるタイプには見えないけど、彼氏の一人くらい居ても良さそうなのに。

まあぱつと見、地味だしなんか垢抜けないし、とろくさくいとところもあるけれど、顔立ち自体は

決して悪くないと思う。むしろかなり整ってる方だろう。

スタイルにしてもふたつ年下の私より、背も低いし胸なんかも小さそうだけど、その手の女の子を好む男子もいる訳で。

なのでさらに尋ねてみた。今まで告白した事も告白された事も一度もないのかと。すると、自分からしたことはないらしいが、されたことはあるらしい。

しかもその相手は、三年生で一番カッコイイと噂の山岸先輩とのこと。

元サッカー部の部長で私も面識がある人で、葉山先輩の次くらいにいいなーと思ってた人だ。

なんて勿体ない事を……と思いつつ、もしや理想が高いのかな？と考え、遠回しに聞いてみると、

いい人だなと思ってても、そういう関係になりたいとは思えなかつたとのこと。



クリスマスも近いですし、試しに遊びくらい行ってみたら良いと思いますけど?と重ねて問うと、

城廻先輩は困ったように微笑んだ。

「私はね、自分が本当に好きな人とだけ、そういう事したいなって思ってるんだよね」  
ふむ…。こういうのを清纯設定っていうのかな?もしくは縛りプレイ?

もつとこう、軽い感じでいいと思うんだけど……。

そんな気持ちで、もつと踏み込んで聞いてみる。

「でもですね。こう、遊びいつたりとかしてる内に、好きになるとかもあるじゃないですか?」

私の言葉に、城廻先輩はどう説明したもののやらといった様子の難しい顔をする。

そして、少し間を置いてから、言葉をゆっくりと口にする。

「う、うーん、どうなんだろうねえ。ただ、なんとなく分かるでしょ? 自分がその人を好きにはなれても、愛せるまでいかないだろうなっていうの」

「だからね、私はちゃんとそう想える人と出会えるまでは、そういう事はしないようにしようって決めてるの。まあ友達には、めぐりは頭硬すぎって笑われたりするんだけどね」

「でもね、私はそれでいいの。きちんと私が愛せて、私を愛してくれる人と出会える日

を、

ゆっくりと楽しみにして待つてようって思つてるんだ」

城廻先輩は言うと、照れくさくなつたのか誤魔化すように笑う。

その笑顔を見てみると、私の胸は締め付けられるように苦しくなつてしまう。

そんな事、言わないで欲しい。そんな事を言われたら、私は悲しくなつてしまいます。だつて私は、愛してなんかいなくとも、愛してもらえれば嬉しいです。楽しいです。生きてるつて気がします。

私はそのために、化粧をし、着飾り、彼らが好みそうな女の子を演じてるといふのに……。

私とは全く違う、城廻先輩の恋愛観。

その違いは一体どこからくるのだろうか、あれこれ考えてしまう。

話題は別のものとなり、城廻先輩の口にする言葉に相槌を打ちながら考えていると、思い当たる自分の癖というか習性が、ある事に気付く。

私は小さい頃から、自分が好きな人じゃなく、自分を好きになつてくれそうな人を選んではかりいたように思う。

求められれば嬉しく、必要とされれば心が弾む。

逆に、求められなければ悲しく、必要とされなければ心が沈んでしまう。

だから、そうならないよう気をつけてばかりいたような気がする。まあ、私と彼女は違う人間な訳で、違っても当たり前なのだけど、それから私はなんとなく城廻先輩が気になるようになる。

× × ×

そろそろ秋も終わりに近づき、冬に入ろうとしている。

日が沈むのが早くなり、そして風は徐々に冷たいものとなっていく。

ある日、城廻先輩は自転車に乗れないという事を知り、二人で練習する事になり。

ある日、どうしても自転車に乗れない城廻先輩を元気づけるよう、紅茶をおごり。

ある日、そのお礼にと、ご飯をご馳走してもらう。

ある日、二人で千葉まで遊びに行き、そんなある日を重ねながら、毎日が過ぎて行く。そして、あの日。私を酷く驚かせる事があった。

いつものように生徒会室の扉を開けると、綺麗なお化粧をした城廻先輩が座つており、

驚く程綺麗になったその姿に、私は目を丸くしていたと思う。

今日はどうしたんですか？と尋ねると、卒業した先輩が遊びに来てたらしく、暇潰し

の玩具にされたと城廻先輩は笑う。

普段もその方がいいですよ！と薦めてみたけど、次の日にはいつも通りの城廻先輩に戻ってしまった。もつたないですよーと言う私に、城廻先輩は微笑んで言う。

「私は一番良い自分、特別は、私にとつて特別な人の為に取っておくのだ」

その言葉に、私は心底驚いてしまう。見せないの？嘘、誰にも？

そして気付く。自分だ。あれは、自分のためのモノだと。

男の子達に愛されることでしか、自分の価値を信じられない私とは大違いです。価値のあるものを内側に持っていると思つたから、気になつたのです。

× × ×

嫌いになるにも憎むにも、余りに優しい思い出が多すぎます。

だから距離を取り、これ以上関わるまいと決めていたのに……。

その笑顔をかき消すよう、瞼に力をこめる。

それでも消えてくれないその笑顔に、私はため息をこぼす。

## 誕生会

今日は八月八日、俺の誕生日。

場所は奉仕部の部室にて、雪ノ下に由比ヶ浜、小町と一色が口々に、祝いの言葉を掛けてくれる。

「おめでとう、比企谷くん」

「ヒツキー、おめでとー!」

「お兄ちゃん、おめでとさんー!」

「先輩、おめです」

祝福の言葉と優しい笑顔の数々。それによつて部室は、暖かな空気に満たされていく。

が、祝福されてる当の俺の気分はというと、正直、かなり沈んでいた。

誕生日を迎えたということは、着実に確実にまた一步、社畜の世界へ足を踏み入れたということにほかならない。

そんな直視することすら憚られる現実を前にして、俺の胸は悲しみで満たされてしま

嫌だ：働きたくねえ。俺はずっといつまでも、トイザラスキッズで居てえんだよお  
……  
うんざり気分をなんとか抑えた俺は、彼女たちの声にぎこちない笑顔でもって応える。

彼女たちはこうして祝ってくれているのだ。心の内でどう思っていたとしても、それを顔に出すなどもつてのほか。

後なんか一人だけ、びみよーに投げやりな感じがしたが、これもまた気にしてはならない。

なぜなら夏真つ盛りのこのクソ暑い中、彼女たちはわざわざ部室にまで足を運び、俺のために誕生会を開いてくれているのだから。

それでもやはり、神も仏もないとはまさにこのことだよなあなどと考えてしまう。

そういや、神と仏、そして誕生日といえはその昔、俺がまだ中学生の頃、我が家に宗教勧誘の人が訪れたことがある。

なんでか知らんがあの手の人とは思議とぽつと見ただけで、あつ、宗教の人だ！と気付くもので、俺は直ぐ様「今ちよと忙しいんで」などと言ってお帰り願おうとした。

が、えらく綺麗な女の人だったのでぼーつと見蕩れていると、彼女は微笑んでこう口にした。

「今日は一年で一番大切な日の、お話に来ました」

これをもしおっさんもしくはおばはんが言ったのなら、「あーそうですか、ではまた」  
で

扉を閉めるのだが、余りに綺麗な女の人だったので俺は浮かれていたのだろう。

いつもはそんな事しようとも思わないのに、つい気まぐれで面白いことを言つてウケようとし、

余計な事を口にしてしまう。

「知つてます！俺の誕生日ですよね？」

言つた瞬間、俺は激しく後悔した。何故なら俺の言葉を聞いた彼女はそれまでの笑顔を一転、

顔を引きつらせゴミを見るような目で俺を見つめていたからだ。

そして彼女は無言で頭を下げると、そのまま帰ってしまった。

宗教の人に帰ってもらおうという目的は達成したはずなのに、なぜか腑に落ちない気分となつた俺は、今度また同じ場面に出くわしたら、「知つてます！お姉さんの誕生日ですよね？」と、次は言つてみようかと考えている。

それから数年経つた去年のこと。その日は総武高の創立記念日で、我が家で俺だけが休みだった。

特にすることもなく部屋でゴロゴロしていると、来客を知らせるチャイムの音が聞こえ、普段なら

居留守を決め込むところを、なんとなく気まぐれで玄関に向かい扉を開く。

すると、えらくガタイの良い白人男性と、それよりさらにガタイの良いアジア系の女性が生立っており、俺の姿を認めた二人はにつこりと微笑みを浮かべる。

俺は直ぐ様これは宗教の人だと決めつけ、「いいです。いいです」と言つて、扉を閉めた。

やれやれやつば気まぐれなんて起こすもんじゃねーなと考えつつ、俺はお前らと違つて忙しいんだと罵りながらゲームに興じていると、小町が学校から帰つてきた。そして開口一番、こう言つた。

「お兄ちゃん。なんかお隣に、外人さん引越してきたみたいだよ」

「外人……?」

「そそ。でつかい白人さんとその奥さんで、ナイストゥミートウっていわれた」

むむ、まさか?と思いつつ、詳しく特徴を聞いてみる。

するとどうやら間違いない、先ほど我が家に訪れたあの二人の様子。

おう、もしや俺は、わざわざ引越しの挨拶に来てくれた人を追い返してしまったのか……。



ま、まあ、仕方あるまい。

千葉県の男は基本的にロマンチストで趣味や自分の世界を大切にするタイプ。

他に独立心が強く、勤勉な完璧主義者で強い忍耐力と奉仕の精神を持ち、どのような環境下でも

組織や尊敬出来る人のために尽くす頑張り屋さんだったりする。

さら言うと、面倒見も良く自然と周囲からの信頼を得ることが多い反面、恋愛面ではシヤイで

繊細なため、素直な愛情表現が出来ない甘え下手。

でつい、あべこべな態度を取ってしまう、相手からの誤解を受けがちな部分があり、またこうした側面がときに同性愛者を勘違いさせるなんてこともある。

てこれ、海老名さんが言ってた乙女座の男の特徴か。

そういや三年に上がったすぐの席替えて、俺の隣の席は海老名さんになった。

で暇なのか良く話しかけてくるのだが、「比企谷くん知ってる？ 男の子にも穴はあるんだよ！」などと言い出すので、返事に困る事が多く困ってしまう。

まあ海老名さんは言うならば森の妖精さんな訳で、一般ピープルな俺にはちよつと扱いかねる。

なので可及的速やかに、森へ帰っていただきたく願う今日この頃。

などと余計過ぎることを考えていたせいで、つい謝りにいく事を失念してしまった俺は、

次の日の朝、お隣りさんと遭遇することとなる。

嫌な顔されるかなと思いきやえらく気の良い人で、俺の謝罪を快く受け入れてくれ、  
ナイストゥミートゥーと連呼された。

その後、たまに朝会うと、彼が乗るバス停までアニメの話しをしながら歩くことがある。

そんな懐かしい思い出に耽りつつ、窓の外を見やる。

すると、清々しい程の夏晴れの、雲一つない青々とした空が広がっているのが見えた。

なんか風景写真みたいな空だな…と感慨深く見ていると、雪ノ下が紅茶のおかわりを淹れてくれたので、礼を言っ受けて取り、一口啜る。

雪ノ下の腕が良いのか茶葉が良いのか、相変わらずこいつの淹れる紅茶はうまい。

雪ノ下たちを見ると、彼女たちは会話に花を咲かせているようだ。

俺は場を盛り上げたりするのがどうも苦手。なのでそうやって、自分たちで勝手に盛り上がってくれる彼女たちに、深く感謝する気持ちはある。

あるのだが、先程から主賓の俺そっこのけで盛り上がっている彼女たちを見ていると、

これは新手のイジメなのではと、つい勘ぐってしまった。

まあ、男子は俺一人な訳で、今の状況を例えて云うなら、女性専用車両に間違つて乗ってしまったうっかり者のサラリーマン、うっかりリーマンのようなもの。

もしくは、女子会に一人だけいるという男子、女子会男子と云つても良い。

ちなみに俺の闇の情報網（インターネット）によると、72.8%の女性は女子会男子を

心良く思っていないらしい。

理由はソレっぽい事があれこれ書いてあつたが、要約すると「奢つてくれない」というもの。

なんという世知辛さ。やはり男は、顔と金が全てという悲しい現実。

そしてその真実を俺が忘れてたりしないようにと、定期的に知らせてくれるインターネットという

存在に、ここ最近、恐怖すら感じる。

とまあそれはともかく、本来ならここに後二人、戸塚と材木座が居たはずなのだ。

のだが、テニス部の顧問がギックリ腰となり、それで今日行われるテニス部の練習試合の引率を

戸塚がする事となった為、戸塚は残念ながら不参加となつてしまった。

で、戸塚が来ないと知った材木座は、「戸塚氏が来ないでござるか……。なら居てもしよーがないでござるし、ゲーセンに行つてくるでござる」と言つて、風のように去つてしまった。

一応、俺がずっと欲しがっていたアルティメットまどかのフィギュアをプレゼントしてくれたのと、材木座は別に居なくともいいので、それは良い。

とまあそんな感じで、なんかこれ、俺居なくても良くない？などと考えながら、仲良くお喋りに興じる女性陣をほーつと眺めているだけの時間が過ぎていく。

こんな事なら読みかけの少女戦記、持って来れば良かったなあ……。

まさか自分の誕生日でぼっちになるとは、さすがの俺も予想出来なかつたぜ……。こういうと、話しに入ればいいじゃん？などという輩もいるかも知れない。

まあ俺も奉仕部に入り、一年以上ここでの時間を過ごしたおかげか、

一応きよどらずに女子と話すくらいは出来るようになったと思う。

だがこれといって話すことがないので、余計に孤独を感じている。

にしてもこいつら、俺を除け者にしようとかそういう悪意が全く無い分、邪悪だよな……。

まあ見る人によつては、お前が一人で勝手にダメージ受けてるだけだろ？つて言いそうだが、

さにあらず。だってこいつらさつきから、最近流行りの女性服の話題で盛り上がってるんだぜ？

お前、話しに入れるか？俺は入れねーよ！

ああ。こんな時に俺の心の友であるもこつちが居てくれれば良いのにと、つい考えてしまう。

もし彼女がいてくれるならば、ふたり仲良く、こいつらの陰口を叩きまくることだろう。

念のため、知らない人のために説明するならば、もこつちこと黒木智子とは、「私がモテないのはどう考えてもお前らが悪い！」、通称「ワタモテ」という漫画の主人公である。

どんなキャラかといえば、ひねくれた性格で思い込みが激しく、自己中心的で妄想癖があり、

その上見栄っ張りで周囲の人間を常に見下し、さらに極度の人見知りと自意識過剰をこじらせ、

よく心の中で過激な発言を繰り返している女の子、といえば良いだろうか。

個人的特徴を並べるだけで悪口みたいに聞こえることか俺と相通じるところがあり、

そんな彼女に俺は一方的に好意を寄せている。

もこっちの素晴らしさ、それを語りだすとラノベ一冊読む程度の時間が掛かるので軽くまとめると

まず第一にそのぶん殴りたくなる感じといったところだろうか。

他に、弟と話してる時だけ妙に生き生きしてて好きだし、基本格下と見なした相手には

えらく饒舌なことかには憧れすら感じる。

が、ここ最近、変な奴を面白がる漫画から変な奴の成長を見守る漫画へと変貌しつつあり、

それもそれで面白く、更新が楽しみで仕方がない。

そういや俺が初めてサイン会というものに顔を出したのは、「ワタモテ」の作者、谷川ニコさんのそれだった。

ちなみにニコさんは、原作さん（谷川ニコ）と作画さん（谷川イツコ）の男女二人組である。

参加は抽選制で一ヶ月前に応募があり、応募したところ見事当選。

それで参加することとなった俺が、当日会場に赴くと、参加人数は五十人程度。

余りはしゃいだ様子は無く、皆静かにニコさんが来るのを待っていた。

しばらくして、原作さん作画さんが共に、スゴくリアルな猫の被りものをして登場。

呆気にとられる参加者たち。やっちまった感満載で困った様子のニコさんら二人。遠くから聞こえてくる車の排気音以外何も聞こえない、そんな沈黙が場を制した。

まあ、ニコさんが猫をチョイスした気持ち、わからんでもない。

猫という存在は大変可愛らしいもの。その仕草やらなんやらをみていると、「世界を笑顔にする」

そんな事が出来るのはもしや猫しか居ないのでは？などと、俺も考える事があるからだ。

が、それはあのサイズ、あのフォルムだからであって、頭だけ猫だと可愛いとかそれ以前に、

なんかぎよつとしてしまう。

他の参加者も俺と同じ気持ちなのか、誰一人として物音ひとつ立てない異様に静かなサイン会が

始まった。

俺は初めてのサイン会ということと順番が最後のほうだったので、他の参加者たちはニコさんと

どう接しているのかと気になり、身を乗り出して様子を窺うことにした。

すると、ニコさんと対面した参加者は皆一様に、身体をこわばらせてるのが遠目でも

分かり、

ちよつとハラハラしてしまう。

サインをもらい会場から出て行く他の参加者たち。

その表情を見るに、なんか良くないモノを目にした人っぽい感じがピシバシ伝わってくる。

そうしてついに、俺の番がきた。

イツコさんがサインを書いてくれる間、ニコさんが俺の対応をしてくれることとなり、

気さくな人柄だったので、思っていたよりもずっと会話は弾んだと思う。

が、ニコさんが最後に「ちよつとこれ、ダメでしたね」と猫ヘッドを軽く叩いて言うので、

俺はつい口ごもってしまった。

俺にずば抜けたコミュ力があれば気の利いた返しのひとつも出来たのだが、間近で見ると猫ヘッドは

異様に恐ろしく、上手く言葉が見つからなかったのだ。

「なんかその、すいません」と謝られたので、「こちらこそ、ごめんなさい」と謝り返し、俺はその場を後にした。



後日、単行本の後書きで知ったのだが、ある漫画家が雑誌の企画で素顔を晒したところ、容姿に

ついて色々言われた上、漫画の人気も落ちたというのをネットで見たらしく、それで二人して

猫ヘッドだったようだ。

でサイン会後は、マスク被って二人で出て行ったら面白いとか言い出したクソ野郎はどっちだったかでケンカになったらしく、あの時俺がなにか気の利いた事を言えていればと悔やんでしまう。

おっと、いかんな。やる事ないからつい思い出に耽ってしまう。

せっかくの誕生日なんだしもつとこう前向きな事考えねばと思案しつつ、雪ノ下らに目をやると、今度は千葉に新しくできたカフェについて話している様子。

ふむ。ここはひとつ、呪いでも掛けておくか！ と決めた俺は由比ヶ浜から順に、

こいつらに軽い不幸がおとずれますようにと、心を込めて祈っていく。

そして、メはお前だ！ とばかりに一色に目をやると、こちらを見ていた一色と目が合った。

「先輩、さつきから静かですけど、もしかして暇してます？」

「んや、暇じゃなかったぞ。むしろ忙しかったくらいだ」

呪い掛けてたし、呪いの内容考えるのにな。

「そんなこと言つてほんとは、会話に入れなくて寂しかったりして。」

もしなんだつたら、可愛い後輩の私が、お話してあげても良いですよ?」

こいつ、なかなか嫌なところを突いてきやがる……。

つーか遠回しに、自分は可愛いって言つてねーか?

まあ誠に遺憾ながら、一色の見た目は良いのは認める。

実際、廊下などを歩くその後ろ姿を目にしたら、前に回り込んで覗き見るレベル。

だからかうちのクラスでも、一色の事を可愛いといつてる奴が何人もいる。

お前ら騙されるなよ、こいつは見た目がいいだけで中身はゴミクズだぞ!と教えてあげたい。

とまれ、俺も長年のボツチ生活で鋼のメンタルは手に入れた男の中の男。

余裕のある感じを演出しつつ、一色の問いに応える。

「お前はなにをいつているんだ。いやほんと、そういうんじゃないやねーし、そういうのいらないから。いやマジ、ホントだぞ?」

俺の言葉に、一色はふむつと考える様子だったが、途中なにか察したのか、

物憂げな表情を顔に浮かべる。

「まあ、男の子一人ですしね。そうだ、先輩、もしあれなら、また葉山先輩に来てもらい

ますか？」

こいつはまた、余計な事を……。お前は俺のこと、一度でも分かったことあるのかよ！  
「いや、いいよ。つーか、やめてくれ。昨日ので、葉山と喋る今年のノルマは達成したし、もう充分だ。あとアレだ、葉山を呼ぶと戸部もおまけで付いてきちやうだろ？」

奴との会話ノルマは五年先まで先取りしてるから、これ以上は労基が動く」

言うのと、一色ははてつと首を傾げる。

「先輩つて、葉山先輩と戸部先輩のこと、嫌いなんですか？」

「いや別に嫌いとかじゃねーぞ。ただなんつーの、そう、アレだ、目障り？」

葉山はなんかうつつとおしいし、戸部はすげーうざく感じるつていうか」

あの二人を見ていて俺が抱く感想、それを例えていうなら、季節ハズレのクリスマスイルミネーションといえれば分かってもらえるだろうか。

たまにあるでしょ？自宅をイルミーしちゃってまんま放置で年越す家とか。

もう一月も終わるぞ……つて近所の山根さんの家を見るに思う。

「目障りつて、嫌いよりひどいと思いますけど……。ダメですよ、そういうの、仲良くしないです」

「いやちよつと待て、お前がそれいうか？ お前の戸部の扱い、傍で見るとちよつとアレな気がするんだが……」

「私だつて別に、戸部先輩のこと嫌いじゃないですよ？ ただうるさいなつて思うくらいです」

うるさいつて酷いね。まあうるさいけど。

とそこで、思い出したことがあったので口にしてみる。

「そういや以前バイト先で、両親が不和な家庭の子は重い空気を嫌つて、それで道化を演じて

周囲を笑わせるタイプになるつて話し聞いたことあるな」

俺の言葉に、一色ははつとした様子で表情を硬くする。

「じゃあもしかして、戸部先輩の家つて……」

「いや、わからんけどな。でも少しは優しくしてやれよ。戸部もあれで、割と良い奴だし」

俺が言うと、一色は神妙な表情でこくこくと頷く。

「分かりました。三学期から優しくします」

「だな。……え？ いやお前、そこは二学期から優しくしてやれよ。つーか、今日からしてあげなさいよ」

俺の言葉に、一色は困つたような顔を見せる。

「そんな難しいこと言われましても……」

うわあ、清々しいほどのクズだなあ…。いろはす屑過ぎて逆に好感持てる。

「難しいって酷いね、君」

言うのと、一色はわざとらしく怒った様子で頬を膨らませる。

「先輩、そう言いますけど、そういう先輩は、戸部先輩に優しく出来ますか？」

「いや、無理だろ。不可能だ」

「先輩の方が酷いじゃないですか！」

そうか？ そうだな、と、そんな役たくもない話しをしていると、扉がガラツと開かれた。

## その結果が、今

扉がノックもなく開かれたので平塚先生と思いきや、入って来たのは雪ノ下の姉の陽乃さん。

「ひゃっはろ〜」と軽い感じで俺たちに挨拶をすると、いつものように雪ノ下に絡み出す。

ある意味様式美のそれを見やりながら来訪の理由を問うてみる。  
するとどうやら、俺の誕生日と知って祝いに来てくれたらしい。

「比企谷くんも冷たいよね、私も呼んでくれれば良いのに」

陽乃さんはブーたれて言うのと、雪ノ下の椅子に無理くり一緒に座ろうとする。

「ちよ、姉さんやめて。今椅子を出すから、無理に座ろうとしないで」

迷惑顔で睨む雪ノ下。に反して陽乃さんは楽しそうな笑顔を見せる。

睨まれて喜ぶとか、陽乃さんって変態さんですな…。

「いいじゃん、別に〜。仲良し姉妹なんだし！　ねっ？　比企谷くん」

「いや、俺に聞かれても」

苦笑混じりに答えながら、椅子を用意する。

「どうぞ」

雪ノ下の隣に椅子を置いて言うのと、陽乃さんはニコつと笑う。

「比企谷くん、ありがと。そういえば誕生日プレゼント買う暇なくってさ、手ぶらでゴメンネ」

「やつ、いいですよ、別に。お気遣いなく」

ホント、全然。この人に借りなんか作つたら、後が怖いし。

「そっか！じゃあこれをプレゼント替わりに受け取って」

陽乃さんは言うのと、俺の前に手のひらを差し出す。

なんだろうと視線が誘われ下を向くと、下がった頭を抱えるよう陽乃さんが俺に抱きついてきた。

英語でいうところのハグ。おいおい、あんたアメリカ人かよ。

て、ちよと待て、これは堪らん。柔らかいし良い匂いするし、こうなに？クラクラしちゃう。

つーか陽乃さんわがままボデイすぎて、健康診断で説教くらいそんな体型してんな。理性を吹き飛ばす、そんな彼女はダイナマイト！などと文字通り悩殺されていると、そこへ驚いたような声が飛んできた。

「ちよつと、はるさんー」

抱きつかれたまま声がした扉の方へ視線を向けると、えらく綺麗な浴衣姿の女性が所在無げに佇んでいるのが見えた。て、今の声……。

「あつ、めぐり〜、あんたも早く入りなよ〜」

めぐりつてあの人やつぱり、めぐり先輩なの？ えつ、マジで!?

「早くこないと比企谷くんにも、もつとスゴイことしちゃうぞ〜」

陽乃さんはころろと笑いながら言うと、俺にさらに身体を押し付けてくる。

スゴイこと？ それってなんですか？ 詳しく!!と、思春期男子らしく煩惱の狭間で漂う俺を見て

めぐり先輩は怒ったように頬をぶくつと膨らませる。

そして、火の玉ストレートの如くこちらに突進してきた。

「はるさん、八幡くんにくつついちゃダメです!」

めぐり先輩は叫ぶと俺の腕をぐいっと引き陽乃さんから引き離すが、陽乃さんは止めるどころか

楽しそうにニヤニヤしながら、また俺に抱きつこうとしてくる。

それでめぐり先輩は俺たちの間に強引に割って入ると、俺をガードするよう身体を寄せてくるので、その華奢な肢体の柔らかさを胸元に感じどうにもこうにも堪らない気持ちになってしまう。



助けてくれる上にご褒美もくれる、聖人かな？と、間近にあるその顔に目を落とす。普段化粧つけのないめぐり先輩には珍しく、今日はバツチシと化粧を決めている。

といつても化粧がきつい訳では決してなく、良いところがさらに良くなっている感じ。

おでこはいつもよりつるりと輝き、普段は眠たげな目元も今日は涼やかさが増している。

な、なんだこの、今にも物語が始まりそうな美少女具合は。

これが噂に聞く女子力開放ってやつか……。

そんなBLEACHで云うところの卍解をしためぐり先輩の姿に、俺はぼーつと見蕩れてしまう。

とそんな俺を、めぐり先輩がむっとした顔で睨んできた。

「八幡くん、君今、はるさんに抱きつかれて、デレデレしてたでしょ？」

「えっ、やつ、そんなことは……」

あります。とは言えず言葉を濁す俺を、めぐり先輩は顔を顰めうーつと唸りながら威嚇してくる。

綺麗なお姉さんに睨まれるというシチュエーションに、俺の背中には歓びの電流が迸る。

やべえ、すげーゾクゾクする。おいこれ半分サービスだろ。

「まーまー、めぐり。比企谷くんもお年頃なんだし許してあげなつて」

笑いながら陽乃さんが言うと、めぐり先輩は不承不承といった感じで頷く。

なんか諭すような事を陽乃さんは言ってるが、そもその原因はあなたでしように  
。。。

ほんと、陽乃さんつて力の入れ所がおかしい点に於いて終始全くぶれないよな。

悪い意味で想定を超えてくるから困る。

疲れた吐息を吐きうんざりしていると、いつもの笑顔に戻ったためぐり先輩が俺の袖を引いてきた。

「八幡くん。用意もあるからそろそろウチいける?」

「あつ、はい。もうお開きにしようつて言ってたんで」

返事を返しつつ雪ノ下らに目をやると、雪ノ下も由比ヶ浜も目を丸くしてこちらを見ていた。

まあ、驚いて当然だろう。ひと月前の俺が今の状況みたら、俺も驚くし。

今この場であれこれ説明するのは得策でないと感じ、口早に誕生会を開いてくれた事に感謝を告げ

後片付けを頼むと、俺はめぐり先輩に手を引かれ部室を出た。

×  
×  
×

辛そうな悲しそうな一色さんの顔を見て、私は、私が、喜んでいた。

これだけ見せつけければ諦めてくれるかな？　なんて考えていた。

私はきつと最初から一色さんに譲る気なんて無くて、只々八幡くんを私だけのものにしたかった。

だから八幡くんと接する一色さんの表情を見た時、私は一色さんが本気なんだと知って焦った。

一色さんは私が欲しいものを私より先に手に入れる子だったから、一色さんより先に八幡くんに

気持ち伝えなければ絶対に取られてしまうと、彼を御宮に呼び出した。

そうやって八幡くんを彼女から奪ったのだから、ホントなら「ごめんね」と思ふべき

ところを、

今私「勝った」って思ってる。

八幡くんには絶対に見せられない見せたくない身勝手な自分の心の内を、

綺麗に整えてもらった外側の奥に押しやる。

見えない心ほっとしながら、嘘ついた声と取り繕った笑顔を八幡くんに向け、

その手を取って部屋を出た。

× × ×

二人が出て行った後、何とも言えない気まずい空気が部屋を満たす。

そんな重苦しい空気の中、はるさん先輩の歌うような声が静かに響く。

「他人とぶつかることを恐れ、自分たちの世界にひきこもる」

「そんなぬるま湯の中ですら衝突を厭い、適当に甘やかしかいながら好みの理想を垂れ流す。

理想を押し付け、理解してと囁き、理解されないと嘆く。まるで餌を求めて喚く、雛

鳥のように。

そして自分からは、一歩たりとも踏みだそうとしなかった」

「その結果が、今だよね」

はるさん先輩は雪ノ下先輩の肩に手を置いて言うのと、雪ノ下先輩は悔しげに唇を噛む。

「そ、そんなことないです。ゆきのんは、わたしは、わたしたちは……」

それを見た結衣先輩がたどたどしく反論すると、はるさん先輩はじつと結衣先輩を見つめ

「わたしたちは、なに？」と尋ねる。

「わたしたちはちゃんと、その……」

「ちゃんとつて、告白でもしたのかな？」

はるさん先輩の言葉に、結衣先輩ははつとした表情を浮かべる。えっ、マジでしたの？告白。

「え、えっと、わたしはその、告白というか、みんながこの先も一緒にいられるように……」

皆に視線を向けられ、結衣先輩は途切れ途切れな言葉を口にする。

首を傾げながらそれを聞いていたはるさん先輩は、ふいに乾いた笑い声をあげた。

「ガ浜ちゃん、あなたまさか、雪乃ちゃんに譲ろうとしたの？」

驚いたように目を丸くする結衣先輩。

それを見て、はるさん先輩は酷く冷え切った目で結衣先輩を睨めつけた。

「気になって近づくと癖に、傷つくのも傷つけるのも怖いから安全な場所に逃げ込む。

そんなガ浜ちゃんがちゃんとなんていうんだ？」

「……………」

黙ってしまった結衣先輩をはるさん先輩は小馬鹿にするよう鼻で笑うと、

「じゃあ帰るね」と言って、部室から出て行った。

沈黙が落ちる。誰も何も言わぬ中、時計だけがその針を進めた。

## もう死ぬしかない

化粧つて怖い。取り敢えず俺が今考える第一はそれ。

もう何度目かもわからないが、またちらつと隣を歩くめぐり先輩に目をやる。

うーん、やっぱすげえなあ……。ちよつと弄つただけで、こんなに変わるもんなのか。

これって、詐欺罪で訴えたら勝てそうだな。ヤバイ、どう見ても可愛いだろうこれ。さつきから通りすぎる野郎どもが見てくるし。ほら、見てるだろ。つか見んなクソが

！

と、周囲を威嚇していると、めぐり先輩が何か思い出したようにぼんつと手を打ち、「そういえば」と口にする。

「えっ、雪ノ下さん、婚約したんですか？」

「うんうん。○？□って会社の社長さんで、結構年上の人みたい」

ああ、聞いたことある社名だな。確かかなり大きなトコだったような。

「先月だったかな？ お見合いするんだーって言ってたんだよね。」

それで今日、お化粧してもらってる時に、この間の話どうなつたんですか？ って聞いたら、

なんかトントン拍子に話が進んだみたいで、それで」

「婚約ですか」

「うん」

「雪ノ下さんって、二十歳くらいですよね？」

まだ大学生ですし、ちよつと早すぎるような気がしますけど」

俺の言葉に、めぐり先輩は少し考える素振りする。

あれ？ 俺なんか変なこと言つたかな？

「じゃあ、八幡くんは、いくつくらいで結婚したい？」

「え？ 俺ですか？」

「うんうん」

めぐり先輩は何度も頷きつつ、興味津々前のめりで俺を見てくる。

「う、うーん、まあ三十手前までに、出来ればいいかなーって感じですかね？」

「三十……」

一転、なにやら難しい顔をするめぐり先輩。

「まあ俺の場合、してくれる相手が居るかもわからないんで、なんとも言えないんですけど」

場の空気を解そうと、自虐を混じえて言ってみる。



いやほんと、俺結婚出来んのかな……。無理だろうなあ。俺だって俺やだもん。はあ……。

自分の言葉に自分でダメージを受けていると、めぐり先輩は困ったような笑顔を浮かべ、

おずおずと自分を指差す。

「……………」

「……………」

あー、うん。こういう時、一体どんな顔すりやいいんだろう。

うまく言葉が見つからず口をパクパクさせている俺を見て、めぐり先輩はくすりと笑う。

「んと、八幡くんはさ、はるさんのお父さんって、どんな人か知ってる？」

気を利かせて話題を変えてくれたようだ。助かる。

「はい。確か、県議会議員で建設会社の社長さんですよね？」

人生に大勝利してる系の人。

いやまてよ。あの奥さんと、家でもなんか寛げないような気がする。

俺の勝手な印象だが、切って捨てる！ってのがお似合いの感じの人だったし、

些細なミスでもネチネチ言われそう。

そうすつとやっぱ、お嫁にするならめぐり先輩のようにほわつとした人がいいね！  
自分の出した答えに心の内でこくこく頷く俺と同じように、ほんわかおさげもこくこく頷く。

「そうそう、そのお父さんの会社と長い付き合いがある人みたい。

それで前から、是非娘さんをもって言われてたらしくつてね」

めぐり先輩の言葉に、気になった事があつたので聞いてみる。

「年上つて、いくつくらいの人なんですか？」

「えっと、確か、今年三十つていつてたかな？」

その若さで社長か、凄いな。俺がその年の時、どうなつてんだらう……、不安だ。

「雪ノ下さんとは、丁度一回り違いですか。」

まあそのくらいじゃないと、あの人とは釣り合わない気もしますけど」

俺が言うと、めぐり先輩はうんつと頷く。

「それとほら、はるさんつて綺麗だし、結構なお家の人でしょ？　それでお父さんの方もね、

信頼出来る人になるべく早く娘を任せたいつて気持ちがあつたらしくつて」

「なるほど……」

確かに、自分の娘がどこの馬の骨ともわからん奴にひつかかたら一大事だ。

世間体を気にする、良家、名家ならなおさらだろう。

千葉県馬の骨代表の俺が言うのもあれだが、きちんとしておきたいという気持ちわかる気がする。

まあ、陽乃さんにちよつかいだせるような勇気のある奴がいるのか？　はともかく。思いつつも、でも…と考えてしまう。

陽乃さん自身はどう思っているんだろう？

「その……、雪ノ下さんはそれについて、なんか言っていたりしましたか？」

「はるさんは、仕方がないって言ってたよ。そういう家の子供だから、仕方がないって仕方がない、か。」

年明け、親戚への挨拶回りの途中の陽乃さんに出会ったが、あの時の諦観に満ちた声を思い出す。

「なんていうかあるんですね、そういうのって」

「そういうの？」

めぐり先輩が首を傾げて聞いてくる。

その顔を見て、「政略結婚」と口に出していいのか迷う。

ただ俺の困った様子を見て、めぐり先輩も察してくれたようだ。

「あー、うん。まあ、あるんだろうねえ……。八幡くんはさ、どう思う？　そういうの」

問われて、考えてしまう。

子供に限らず大人でも、古くから続く仕来りを軽んずる人間というのは一定数存在する。

軽んずるだけでなく悪しきものとして、否定し糾弾し無くそうとするものさえいる。

例えば、重い病氣、ボケ老人を姥捨て、障害持ちを幽閉や産まれた直後で。

見合いや許嫁による半強制結婚なんて風習は、今なら忌避されるものだろう。

でも実は理に叶っていて、社会が効率よく回る為に必要だったのかも思ったりする。

ニユースでよく目にする現代が抱える諸問題、医療費の増大や未婚晩婚少子化も、こういった風習がなくなってしまうが故かもしれない。

無論、個人の意志を蔑ろにして良いとは思わないが、個を優先しすぎたが為に社会が行き詰っては意味がなく、要はバランスの問題。

それに大きな会社の社長さんなら、お金に余裕もあるだろう。人にもよるがお金に余裕があれば、精神的にも余裕が生まれる。

余裕があれば余計なことに、思い悩まずとも済むというもの。

金があれば万事OK問題なしという訳でもないが、金がなければやっていけない。

恋愛はある種の娯楽と捉えるなら、結婚とは生活なのだから。

事実、社会に属さない男は女を可愛くしておくこともできない。

「女にアホのまままでいて欲しかったら、男が現実的に社会と渡りあっていかなきゃならない。」

二人してアホじゃ生きていけねーし。

「前に何かで読んだんですけど、お見合い結婚の方が離婚率は低いそうですよ。」

「一時的な感情じゃなく打算と損得で結ばれた関係の方が、長続きするって書いてありました」

「うーん、そうだけどさー。でもなんかなー」

俺の答えに、めぐり先輩は不満そうな顔をする。

まあ、めぐり先輩はおさげ、おさげⅡ乙女、乙女といえば恋に恋するお年頃、納得いかなくとも仕方あるまい。

「きっかけはどうでも仲良くやっていけるのであれば、それでいいと思いますけど」

「でも私はね、好きになって、好きになってもらって、好き同士になった相手とがいいなめぐり先輩はというと、チラっと俺を見る。それで目が合う。」

すると、二人揃って照れくさくなり、互いにこそっと顔を逸らしてしまう。

「……そうですね。俺もその方がいいです」

顔を逸らしたまま口にした俺の言葉に、めぐり先輩は小さく、うんつと応えてくれる。

「八幡くん。手、繋ぐ」

言われて手を差し出すと、その手を柔い温もりが包んでくれる。

なんとも言えない気恥ずかしさで胸を一杯にしつつ、また二人並んでてこと歩き出す。

夕日が落ちる。目を焼くような赤が、俺の視界を染め上げる。

眩しさに目を細めながら顔を上げると、紺色の空にうつすらと月の白が溶けているのが見えた。

まあ、なんだ。正直嬉しい。有ることが難しいで有難いというが、まさにそんな感じだ。

ただ……と、つい考えてしまう。

いまさら言うまでもない事だが、めぐり先輩は美人だ。しかも可愛い。

ちよつと地味だが今日みたく化粧のひとつもすれば、一粒で二度おいしいよろしく、天使爆誕。

体つきも細っそりと華奢なので無性に庇護欲をそえられるし、それと同じくらいなんだか苛めたくなるようないじらしさがある。そんな目で見てるのが知られたら軽く死ぬるが。

その上、大学に推薦入学する程に頭も素行も良く、こんな見た目も中身も完璧なおさ

げがいるとかもう死ぬしかない。

そして、そんな凄まじい高性能おさげと付き合えているという奇蹟。

それは俺をどうしようもなく、動揺させ戸惑わせる。

なんかこの先、雷やら隕石が俺目掛けて落ちてきそうだと、そんな不安な気持ちにさせられる。

大丈夫だよな？ 今日晴れてるし。やっまでよ、隕石だと天気関係ねーか、と空を仰いでいると、

先輩の家に到着した。

## 人としてまっとうに扱われる

先輩の家に到着した俺たちは、二人して家の門をくぐる。

すると庭先にて、こちらに背を向け洗濯物を取り込んでいる女性の姿が見えた。

楽しみに鼻歌交じりで家事をこなすその人こそ、めぐり先輩のお母さんなのだろう。

手土産を忘れたことを後悔しつつ、とりあえず身だしなみをと思い、どうやつてもはねてしまう

クセつ毛を無理くり折りたたんでいると、めぐり先輩が帰宅の挨拶をする。

「お母さん、ただいまー」

振り向いたお母さん。ああ、目元がそっくりだ。先輩も将来、こんな感じになるんだろうか。

そんな感想を抱きつつ、出来るだけきちんと頭を下げる。

戸惑った様子のお母さん。それでも俺に合わせ丁寧に頭を下げしてくれる。

「めぐり、そちらの方は…?」

顔を上げたお母さんが問う。めぐり先輩は照れくさそうに頬を掻きながら応えた。

「あつ、うん、紹介するね。この子は比企谷八幡くん。私のその…、彼氏」



「初めまして、比企谷八幡です」

と、俺が口にする前に、お母さんはすたすたと小走りで縁側に駆け寄る。そして、家の中に向かって大声で叫んだ。

「お父さん、大変！ めぐりが男の子連れてきた！」

室内からどすんつと、何か重いものが転がり落ちる音が聞こえ、

「お父さん、大丈夫!？」

お母さんは言うがいなや、慌てた様子でサンダルを脱ぎ捨て家の中へ飛び込んでいく。

えええ……と呆然としてる俺の隣で、めぐり先輩が恥ずかしげに頬を赤くして言った。

「ご、ごめんね、八幡くん」

そうして俺は今、先輩のお宅にお邪魔し、リビングのソファに座っている。

『私はつねづねソファ選びには、その人間の品位がにじみ出るものだ——』

またこれはたぶん偏見だと思うが、確信している。

ソファというものは犯すことのできない確固としたひとつの世界なのだ』と宣ったのは、確か村上春樹だったか。

なるほど確かに、座り心地が良いソファに座っていると、自分は今、清潔で暖かな場所に

その身を預けているのだと、そういう気分にならなくもない気がしなくもない。

俺も将来一人暮らしをする時が来たら、こういうソファを部屋に置きたいと考えながら

まったりと寛いで——とはいかず、俺はかなりそわそわとしていた。

何故なら俺の目の前には、先輩のお父さんが眉間に皺を寄せ腕を組んで座っているからで、

こう上手く言えないがなんともいえない居心地悪さを感じてしまう。

大柄でがっちりとした体格、任侠映画で主役を張れそうな程の強面、そして——彼女の父親。

麻雀で例えるなら大三元、役満というほかない。

つ——と汗が頬を伝う。うむ、今日は暑いしな、汗のひとつやふたつかいても仕方あるまい。

でもクーラで心地よく冷やされたこの部屋でかくこれは——、多分、アブラ汗。

拭っても拭っても汗が噴き出してくるし、後なんかここ酸素濃度もちよつと薄い気がするし、

早くお外に出たいよーと嘆きながら、ちらつとお父さんに目を向ける。

なんかお父さん、さつきより難しい顔してる。

まあ……うん、お父さんの気持ち分かんでもない。

可愛い愛娘の連れてきた男、それがどんな奴であれ歓迎する気になれないのは致し方あるまい。

ましてやそれが俺のような奴だったりしたら、これはもうバールのようなものでぶっ叩かれても

文句はいえない。でも怖い、怖すぎる。

などと思っていたのだが、その実、居心地悪い気持ちでいるのはお父さんもなのかもしれない。

何故かといえれば時折目が合うと、妙に強ばった笑みを見せてくるからだ。

なので俺もそれに合わせ、ぎこちない愛想笑いを作る。

笑顔の応酬、気まずさMAX、助けてめぐりん！つと、先輩の居るキッチンへと目を向ける。

めぐり先輩はお母さんと二人、お茶の用意をしてくれている。

お茶はいいから取り敢えず、早く戻って来て欲しい。

まいったな、困ったな、胃が穴だらけになりそうだ、と視線をきよどきよど彷徨わせ

ていると、

またまたお父さんと目が合った。

ふむ、何か話しかけてみるべきか。将来、義理のお父さんになる人かもだし、

良い印象を与えておくべきだろう。

そう考えてみても、何を話せばよいのやらと困ってしまう。

実際、今俺がぱっと思いつくウエットに富んだ話題といえは、次のふたつくらいだ。

「ご存知ですか？先日、金星人が住民票を持っているのが発見されたこと。コレ、本当です」

「NASOのHPで見たんですけど、この世界はスカラー波によって危機に瀕してららしいんです。

それでその解決にはですね、宇宙人の助力が必要不可欠って書いてありました。大変ですよね」

どっちがよいだろう？ いや、どっちもダメだろ。頭がおかしい奴だと思われる。

元ネタの人もちよつとアレな人だったし。

まああれだ、ここは変にひねらず当たり障りのない天気の話でいくか。

「その…、今日も暑いですね」

なんとか声を絞り出し、言ってみる。

お父さんはびっくりした顔で俺を見た後、縁側の向こう側、庭へと目をやる。

「そ、そうだね」

目が合う。どうしていいか分からず、仕方なく同意を込めて頷くと、お父さんも頷く。

「……」

「……」

まずい、会話が終わっても一た。頑張れ八幡、ここが男の見せ所、勝負どころだ！

「明日も暑いんですかね」

「ど、どうかなあ……。どうだろう……。ね？」

「ど、どうなんでしょう……？」

はははつと、互いに乾いた笑い。そして——沈黙。

おい、おい、あなた大人でしょ？ もう少しさ、話を広げる努力しようよ、してくだ

さいよお……

と嘆いていると、めぐり先輩がお母さんと一緒に戻ってきた。

戻ってきためぐりん。その姿を見て、俺は心の底からほつとする。

ほんの五メートル移動しただけで、こんなにも嬉しい人が他に居るだろうか。

感動に打ち震えていると、めぐり先輩がグラスをはいつと差し出してきた。

グラスの中身は夏らしくカルピス。しかも葡萄味。よくわかっていらっしやる。

カルピスもファンタも葡萄味こそが正義。なんかお酒みたいで大人っぽい感じがするよね。

お礼をいって受け取り、いただきますと口にする。

味がしねえ……。

割と濃い目に作られてるのに、まったくもって味はしない。

どうやら極度の緊張のあまり俺の味覚は旅にでたらしい。

まあめぐり先輩も戻ってきてくれた。そのうち味覚も戻ってくるさ、と思ったのも束の間、

めぐり先輩は「あつ、そうだ！」と言うと、リビングから足早に出て行ってしまふ。

何処へ行くめぐりん、帰ってきてめぐりん、と心の内で嘆きと哀願を繰り返している  
と、

お母さんがにこやかに笑んで話しかけてきた。

「比企谷くん」

「は、は、は」

「比企谷くんは、めぐりと同じ大学の人なのかしら？」

「いえ、自分まだ高校生です。先輩が卒業された総武高の、今三年です」

「あら、もしかして、生徒会の方？」

「ああ、いえ、生徒会ではないですね。先輩とは、去年の文化祭で知り合いました」「めぐりとは、いつからお付き合いましたの?」

「先月の末からです」

お母さんから繰り出される質問の数々。俺はそれに落ち着いた感じを演出しつつ応えていく。

が、正直なところ、内心は冷や汗だらだら状態。

なんか目がチカチカ、こめかみがズキズキ、心臓はバクバクいつているうー。

早く、早く戻ってきてくれめぐりん。俺もう限界に近い。

このままでは俺の脳が、心臓が、ショートしてスパークしそう。

とそこへ追い打ちを掛けるように、それまでは静かだったお父さんがぐいつと前のめりです。

俺に問うてきた。

「どちらから、付き合おうつと言ったのかな?」

問われて、考えてしまう。

もちろん付き合って欲しいとそう告げたのは俺の方。

が、後になってあの日の事をつらつらと思えば返してみると、めぐり先輩の思惑、誘導尋問に

まんまと引つかかったようなそんな気がするのだ。

まあそれで先輩と付き合えたのだから何か問題がある訳では無い。

のだが、こうなんというか上手く嵌められた感が無くもない。

とはいえまさか、あんたの娘にうまいこと嵌められたぜ！などと言える訳がない。

「自分の方から、その…告白を」

「比企谷くんはめぐりのどこが良くて、付き合いたいと思ったんだい？」

去年の文化祭の話なんです、と前置きしてから、言葉紡ぐ。

「自分が少し空気を読まない行動をしてしまいました…」。

そのせいで周囲から疎まれた時に、めぐり先輩だけが色々とよくしてくれました。

それでその、心根の良い人なんだなって思って、えつと…」

照れくささのあまりしどろもどろで答えると、お父さんは嬉しそうな柔和な笑みを見

せる。

そしてさらに、あれこれ尋ねてくる。それに応えながら、内心ちよつと呆れてしまう。

あんたさつきと全然違うじゃねーか！二人の時のぎこちなさはどこへいった。

まあいるよね、話しの取っ掛りを掴むと妙に饒舌になる人って。俺もそうだ。

同じ感じで、女の子とちよつと仲良くなるとすぐに好きになる人もいるよね。俺で

す。



その後も質問は続き、なるべくそつなくそれに答えてゆく。

俺はまだされたことは無いしされる予定も無いが、警察の取り調べってこんな感じなのかと、

つい考えてしまう。とはいえ、ご両親の気持ちも理解できる。

可愛い一人娘、愛娘が連れてきた男について、少しでも知りたいと思うのは当然のこと。

あまり考えたくはないのだが、小町もいつか男の一人や二人、連れてくるやもしれない。

そしたら俺も同じように根掘り葉掘りとあれこれ質問するだろう。

まああれだね、まず最初に聞くこと、それはもう年収。最低でも一千万。

そして次に聞くのは、俺「も」養えるかどうか。この二つは絶対条件とわかっていい。

小町には是非、石油王とかネオ二トとかその手の資産家を捕まえて来て欲しいところ。

頼むぞ、小町！と他力本願すぎる絵を念入りに描いていると、リビングの扉が開き、めぐり先輩が戻ってきた。

帰ってきためぐりん。俺は嬉しさの余り目に涙すら浮かべていたやも知れない。

めぐり先輩は扉を閉めると、とととと小鳥のように、こちらに駆け寄ってきた。

そしてその手に持った桐の箱を、はいっと手渡してくる。

なんだろうと思いつつ、先輩の顔と手に持った箱を交互に見ていると、

「誕生日プレゼント！」

めぐり先輩はハニカミながら言う。

恐縮しつつ受け取り、お礼を伝えていると、お母さんが驚いたような声を出す。

「比企谷くん、今日、お誕生日なの？」

「えっと、はい、そうです。十八になりました」

「母さん、ならお寿司でも」

これはお父さんの声。

驚いて、両手を振って遠慮する。

「いえいえそんな、申し訳ないです」

いやほんと、今何を食べても味がしなくないと思うし。

そうじゃなくても出会ったばかりの人に、祝ってもらおうというのも気が引ける。

とはいえこうも人としてまっとうに扱われることに、嬉しさを感じずにはいられない。

深々と頭を下げ、ありがとうございますと、お気持ちだけでお腹一杯になりましたと伝える。

自分の好きな人のその両親が、こんなにも優しい人というのは、殊のほか俺を嬉しくさせた。

## 前回の付け足し分です。

「お父さん、お母さん、そういうのは私がもう用意してあるから」

「そういえば、めぐり。あなた朝から、なにかバタバタしてたわよね」

「もう、良いから。そういうこと言わないで」

めぐり先輩はわたたと手を振ってというと、俺の方に横足でそそつと寄ってくる。

そして、箱を開けるよう促してきたので、言われるがままに箱を開けてみる。

すると箱の中には、和紙で丁寧に包まれた浴衣と帯、それと草履が入っていた。

素人の俺でもぱつと見でわかるくらい高級そうなそれに着替えるよう言われ、

リビングから先輩の部屋へと場所を移す。

めぐり先輩の部屋にて姿見の前に立ち、上から下まで自分の姿を眺めてみる。

帯つてこれでいいのかなと、着慣れない浴衣にあーでもないこーでもないで四苦八苦しているところ、

コンコンと小さく扉がノックされる。

振り向くと薄く開いた扉の隙間から、めぐり先輩がぴよこんと顔を覗かせていた。

「どーお？着れた？」

「やつ、その、帯がこれでいいのかと…」

めぐり先輩はうんつと頷くと、部屋に入ってくる、そして、着付けを手伝ってくれる。

「よし、できた!」

「ありがとうございます」

お礼をいうと、めぐり先輩はむふーつとちよつと得意げに胸を張る。

「いい感じ!」

その満面の笑みに戸惑いつつ、尋ねてみる。

「そうですかね?」

「うんうん、やつぱり八幡くん、和服似合うよ」

その言葉を受けて、自分の着ているものに目を落とす。

「浴衣って着慣れてないんで、なんか服に着られてる感じがするんですよ」

「そんなことないよー、似合う!」

ここのも手放しに褒められると褒められることに慣れてないのもあって、凄まじく照れくさい。

てかこれ、やつぱ高いやつだよな。着心地が滅茶苦茶良いし。

「あのこれ、結構たかかったんじゃないんですかね…?」

恐る恐る尋ねると、めぐり先輩は首をふるふると横に振る。

「前におばあちゃんに貰った反物で作ったものだから、お金は掛かってないよ。草履くらいかな、お金出して買ったの」

「え？ これ、めぐりさんが自分で？」

「うんうん。サイズ平気？きついところないかな？」

「え、ええ、ぴつたりです」

「良かった！」

感心しつつ、不思議に思ったことを聞いてみる。

「凄いですね……。てか、よく俺のサイズ、わかりましたね」

「ほら、この前、動物園の帰りに抱き合ってたでしょ？」

「えっと、はい」

「あのとときにね、計ったの」

ああ、なるほど。だから身体中、ぺたぺたと触ってたのか。

痴女りんとか思ってたわ、ごめんね？

「やつ、でもこれは……」

さすがに、高価すぎる気がする。

馬子にも衣装という言葉はあるが、猫に小判という言葉もある訳で。

この気持ちを例えて云うなら、童貞がお年玉あげてもいいのか？みたいな感覚という

べきか。

いやまあ、頂いてる立場なんだけどさ。

でもなあ、これはなあ……と、そんな困った様子の俺を見て、めぐり先輩は不安そうに身を振る。

「もしかして、気に入らなかつたかな？」

いやいや、と慌てて首を振る。

「逆です、逆。すごく良いものいただいちやて、もつたいたいというか申し訳ないというか」

俺の言葉に、めぐり先輩はほつとした様子で息を吐く。

そして、ニツコリと微笑む。

「気にしないで。その、私の夢というか憧れだったの、好きな人と浴衣デートするの」

「浴衣デートですか？」

「うんうん。んとね、お爺ちゃんとお婆ちゃんがよく、浴衣姿でお散歩してたのね。」

それを見て、自分も好きな人とそうしたいなーってずっと思つてて、それでなんでめぐり先輩はいうと、照れくさそうに頬を掻く。

「他にもね、いろんな柄の反物一杯あるから、欲しいものあつたらゆつてね。なんでも作るよー！」

めぐり先輩は自信ありげにいうと、なんかない？と視線で問うてくる。

「その……ちよつとすぐには思いつかないんで、考えておきますね」

と答えながら、なるほどつと合点がいく。これはあれか、着せ替え人形八幡くんつてやつか。

まあ、めぐり先輩の気持ちは分かる。

俺もめぐり先輩に、メイド服とかスク水とかセーラー服とか白ワンピースに麦わら帽子とか、

猫耳に猫尻尾、眼鏡やらなんやら身につけて欲しいと願つてるし。

変態だと？ 違うな、夢があるといえ！

「ありがとうございます。大事にしますね」

感謝の言葉を伝えると、めぐり先輩は嬉しそうに微笑んでくれた。

その笑顔を見ながら、お礼がてらに俺にも何か出来る事はないかと思案する。

とはいえ、相手は完璧おさげ。俺がしてあげられることなどたかがしれている。

ふむーと悩んでいると、そこで以前、親父に聞いた話を思い出す。

親父が言うには今は昔、平安時代の頃、当時の貴族には屁をこいたときに、

代わりに屁をこいたことにする専用の付き人がいたとか。

ならば俺もめぐり先輩が粗相をした時、自分がしたことにするべきではなからうかと



考える。

なかなかの名案。とまあ、これほどまでに可憐なめぐり先輩がおならをするのか？という

疑問はあるものの、めぐり先輩も人の子、おならのひとつふたつするだろう。実際、我が家でも、母親や小町が極まれに粗相をしたりする。

しかもあのふたりは厚かまし事に、自分がしでかした粗相を「もう、お父さんは！」とか

「もー、お兄ちゃんー！」などといつて、俺や親父に擦り付けてくるのだ。

最初の頃は驚いて「俺じゃねーよ」などといっていたが、その内慣れてきて

「あー、わりい（棒）」で返したりしてる。

なのでこれから先は営業範囲の拡大とかそういった感じで、めぐり先輩の分も引き受ければ良い。

それとあれだ。なんか「かぼう」って、いかにも騎士っぽいよね。

俺、めぐりんの騎士になります！

誓いを立てた俺は、この気持ち、まさしく愛だ!!と自分に酔いつつ、

めぐり先輩の細く繊細な指先をぎゅっと握り締める。

「めぐりさん、俺、頑張りますね」

俺の言葉に、めぐり先輩は不思議そうな顔で「えっ、えっ？」と狼狽えながらもこくこくと頷いてくれた。